

表紙写真

# 「ラムザイ」作戦

リハルト・ゾルゲ 1895年－1944年

B. ガルビロフ

E. ゴルビノフ

2004年

「記録」シリーズ

リハルト/ゾルゲの大勝利と悲劇

モスクワ

ОЛМА・ПРЕСС

(オルマ印刷)

ОАО ПФ 「赤い労働者」

(株式会社) (?)

## 目次

序文	4頁
第1章 コミンテルンから東京へのスパイの道	8頁
世界革命参謀部での勤務	
コミンテルンから軍事スパイへ	
目標－上海	
第2章 作戦の意図	22頁
第3章 組織化の期間。1934年～1935年	47頁
第4章 「東京のスパイ情報源から得た証拠について」。	
1936年から1937年	71頁
第5章 ドイツのイギリスとフランスの接近は予想させる、	
日本の残されているソ連邦への侵攻を	101頁
第6章 ドイツのハンマーと日本の金床の間で。1939年	
(板挟み)	133頁
第7章 西での惨事とスターリンの秘密外交。1940年	172頁
第8章 東部での惨事。1941年1月～6月	212頁
第9章 極東に於ける大勝利	277頁
結語に替えて リハルト・ゾルゲの大勝利と悲劇	331頁

追伸	ラムザイの大きな愛情	336頁
添付写真		346頁
翻訳者からの添付資料		357頁
	(1) 名称などで解読できたものに説明文を付加した	
	(2) 略語一覧 ロシア語では結構良く略語を用いる。一覧としてそれら略語を解説した	

#### 翻訳者からの注意点

- (1) どうしても翻訳できなかった箇所は\*\*\*\*\*で示した
- (2) 理解出来ない人物などは、(? \*)を挿入した。
- (3) 翻訳者が挿入した箇所は( \*)で示した。
- (4) 原本には各章末に沢山の参考文献名など掲載されている。訳者の語学力不足でそれらを訳することは諦めた。希望するならば、少なくとも原文を紹介する。

#### 原本裏表紙中に書かれていた著者達による本書宣伝のための解説文

「スパイを利用することは、戦争では最も大事なことである；  
スパイは支えとなる、その情報を当てにして軍が行動するので。」  
孫子（春秋戦国時代の中国の兵法家）の軍事論より

この本はリヒャルト/ゾルゲの決まり切った伝記ではない、「半分ドイツ人で、半分ロシア人の、その後秘密のロシアのエージェントになった者の、ドイツ大使のために公的報告書を書いていた、同時に日本の内閣の極秘事項に侵入した。」

これは歴史的な調査の結果である、そこでは作戦の歴史とゾルゲの生涯の新事実が一体化されている、以前に公刊されていなかった。著者達はより十分な情報を与えている、諜報局について、人々について、ラムザイ作戦を立案し指導した。書類の証拠を基礎にして、諜報局における状況を示している、軍事諜報の指導部の相互関係、ИНО（政治諜報局）の「バリヤーク（＝助っ人）」の到来と関係した、1937年－1938年の弾圧時における諜報の指導部の墮落。

軍事史研究家のガブリロフとゴルブノフのこの本で、ようやく読者は問題の解答を得ることができる：リヒャルト・ゾルゲとは何者なのか？ — コミンテルンのエージェント或いはソビエトの軍事諜報員？ ；彼は同時にドイツのスパイとして働いていたのか？ ；ゾルゲの諜報機関のどれだけの活動が影響を与えたのか、ソ連邦の指導者と指導的国のリーダー達の政治的決定に；ラムザイ諜報機関は何で崩壊したのか；ゾルゲの逮捕後に、監獄から何故彼を救出しなかったのか。

# 序文

ソビエトの軍事諜報の歴史は、公開文献で、その誕生日の正確な日付を持っている。1964年9月4日である。この日に、中央の新聞に、ソビエトの軍事諜報員リハルト・ゾルゲについての記事が出たのである。世界中の新聞や雑誌が情報総局（ソ連軍参謀本部の）（ГРВ）の仕事について書いた。その時に、沈黙の、不明瞭な、理解できない、何の説明もない壁が崩壊した。その情報活動—ラムザイ作戦—が初めて知られることとなった。それを当時の世代は自慢にしていた。

これについては言うておく必要がある、リハルト・ゾルゲと彼の諜報網は、日本で1933年から1941年に輝かしい働きをした。西側で戦後直ぐに話題となった。最初、マッカーサー参謀部の諜報指揮官ウイロビー将軍によって準備され、アメリカの極東司令部の覚え書きが公刊された。その後、アメリカの議会で聴聞会が開催された。これに引き続いて、ゾルゲと彼の諜報機関に関する様々な書籍がどっと出版された。そして、至る所で、このユニークな人物によるむき出しの歓喜が見えた、時折、もぐもぐ行っているが、議会での聴聞会で、真珠湾の日本の襲撃準備に関する情報を彼（ゾルゲ）が持っていたのか？、と議員がウイロビー将軍に質問をした時、彼は認めた：日本の立場と日本の潜在能力を我々は分析し、評価し、調べた。我々は中国大陸における軍の若干の移動を知った。しかし我々は、情報を決断する覚悟が出来なかった、ゾルゲがモスクワの自分の指導部に送ったものに質の点で近かったにもかかわらず。

チャールズ・ホイットンの本「世界一級のスパイ達」より

ドイツとロシアのハーフの人物であるリハルト・ゾルゲは第2次世界戦争時の偉大なるスパイである。ソ連邦、それとともに国際共産主義の全ての機構にとって、秘密のロシアのエージェントとしての彼はドイツ大使館のために報告書を書き、同時に日本政府の極秘までたどり着いた。1941年夏に手に入れた情報で、ドイツの占領からモスクワを救った。その後、18ヶ月後のスターリングラードにおけるロシアの勝利に決定的な役割を果たすことにもなった。

60年代には、ゾルゲについてはソ連邦ではよく知られていた。小学生から年金生活者に至るまで。彼についての本はどれでもベストセラーとなった。10万冊の発行部数の本は一日で売り台から無くなった。作家やジャーナリストは、ゾルゲについて、彼の同僚について書くことを許された。新聞や雑誌の印刷所、編集局のドアが広く開かれたのである。取り残された研究者達は残念がり、ねたむこととなった。70年代半ばには、本の出版は幾分沈静化した。ゾルゲについて書けることは全て書かれた。書かれたことを繰り返すのは意味がない。この人物の銅像を鑄造し、大理石に彫刻もした。が、ゾルゲのテーマは勢いを失い始めた。

これら全ての出版物はお互いに非常に似ていた。驚くには当たらない。新聞の記事と本の著者達は、ただ一つの情報源であるГРВ（ソ連軍参謀本部情報総局）から情報を得ていたのであるから。全ての出版物の検閲はこの機関で行われた。これ故、出版物などは殆どの点で似ることとなった。映画「君は何者か、ドクター・ゾルゲ？」でも。英雄の人格を

褒め称え、彼の仕事の重要性に何の疑いも持たなかった。が、この仕事は概略的に表面的なものとなってしまった。ソビエトの出版物のどれにも、30年代の諜報機関の仕事に関する資料がない。ゾルゲと接触があり、「ラムザイ」グループの仕事の評価した軍事スパイの指導部の要員であった人物について何の話もししていない。

1991年8月までに、「ラムザイ」作戦についてではなく、ゾルゲについて、ユーリイ・コロリコフ（「人物、彼にとって秘密ではなかった」と「К и о к у м и ц у（＝極秘？ ＊）」）、セルゲイ・ゴリャコフとウラジミール・ポニゾフスキイ（「ラムザイの声」）、ミハイルとマリヤ・コレスニコフ夫妻（3巻本の「リヒャルト・ゾルゲ」）、とフェドル・ボルコフ（「リヒャルト・ゾルゲ」）が書いた。これらの全ての本では、一般的で、普遍的で、完全にイデオロギー化された人物の例として。銅像と記念碑のスパイとして。当時の尺度では、スパイに授与されたソ連邦英雄の最初の金星としては十分な候補者。厳しい検閲の後には、これらの本の内容は限界まで骨抜きにされた。彼の投獄中のメモと尋問調書のような書類の利用、それらは当時既に全世界に知られていた、非常に選択的に許可された、資料としてだけ、彼の履歴に関係していた。ゾルゲのコミンテルンとの関係と、1929年までこの組織の党のスパイとしての仕事（国際関係局）は禁じられたテーマであった。それについては、ほのめかしさえ言及されなかった。彼の投獄中（彼は日本の警察に逮捕された、1941年10月に ＊）のメモがコミンテルンのスパイとしての詳細な記述から始まっていたにもかかわらず。

60年代～70年代に、ソビエトの著者がゾルゲについて書いたものをよく読み直すと、事実に対する彼らの意識的な対応を見つけることができる。ここに、極東の軍事政治状況の、しばしば不確かな情勢の評価がある。1929年の東支鉄道（К В Ж Д）事件の時にゾルゲを中国に派遣した。明らかに大きな名誉のためであろう、電報のテキストを書き加えた明らかな偽造文書があった。それらをゾルゲは決して送らなかった。

この本は、リヒャルト・ゾルゲのおきまりの伝記ではない。ゾルゲの愛人の石井花子の収集品中に、日本人が「20世紀における100人の人物の一人」と見なしている優秀なスパイに関する100冊以上の本が集められていた。彼の個人的な仕事の全ての書類に触れることもなくして彼の人生についてありきたりの本を書く価値があるのか？ これらの本の著者達はユニークな諜報作戦に関して語っている。その目的、課題について、この作戦に関与していた読者には知られていない人々（カリン、ボロビッチ、ポクラドック、グジ）について。

「ラムザイ」作戦の歴史は、ゾルゲの伝記と不可分である。そして、ゾルゲの伝記は、作戦の経歴と不可分である。これ故、著者達は決めた、この本が最も価値があり興味があるものとなることを、新しい資料を引用しながら。この本で、作戦の歴史を一つにまとめ、以前に出版された書籍では触れられていなかった新しい事実とゾルゲの伝記の様相を明らかにした。著者達は情報局と人物達について、より完全な情報を与えるように試みた。そこで働いていた彼らは「ラムザイ」作戦を構想し、それを指導した。書類の証拠を元に、情報局の状況が明らかにされ、特に、1935年～1936年における、ИНО（？ ＊）からの外来人の到来に関係した軍事スパイの指導者達の相互関係、1937年から1938年の弾圧期間におけるスパイ指導部の退廃。これら全ての出来事は作戦の進行に影響した。これ故、この本でこれらに注意を振り向け、分析を為した。

「ラムザイ」作戦について歴史的調査をし、不正確さ、資料の偏見のある解釈への非難を避けるために、著者達は書類を最大限利用して書いている。日付、事実、事件を十分に根拠づけることを試みながら。この際、時折提案を述べたり、或いは歴史的事実の自分なりの解釈を与える権利を利用しながら。それを読者に押しつけないで、一定の文学的手法を利用しながら。

「ラムザイ」作戦の実行に、極東地区での軍事政治状況が大きな影響を与えた。この地区は、常に、政治家、外交官、軍人、もちろんスパイの注目を浴びていた。バイカルとウラジオストクから東京までの巨大な領域での出来事は、常に世界政治に反映された。政治でも外交でも話題になっただけではなく、強国の参謀部や諜報本部でも取り上げられた。これらの領域で起こったこと全てが、モスクワ、東京、ロンドン、パリ、ワシントンで分析された。1931年の日本による満州の占領。この領域での大陸進出基地の創設は、当時は第2次世界戦争の発火点として見なされた。

十分な量の書類の資料を手にするにより、どんな諜報作戦の記述と分析を与えることができる。「ラムザイ」作戦においては、これが可能となったのは後になってからである。1938年～1941年におけるゾルゲの電報文が冊子として公刊されたことで。前述した期間の若干の資料も、同じく事件の参加者達の追想記も。これ以外に、1994年から1995年に、リヒャルト・ゾルゲの獄中記が十分な量出版された。

しかし、序文において、「ゾルゲの活動についての書類の資料の大部分は、元KGBとコミンテルンの軍事スパイの耐火金庫中に保管されており、研究者やジャーナリストには基本的に秘匿されている。」とメモについて語られていた。状況は今も変わっていない。これらの古文書は秘密とされ、研究者は誰もゾルゲ、或いはラムザイ作戦に関する書類にたどり着くことはできていない。

それにもかかわらず、ゾルゲの情報を評価し分析する可能性はあった、それを軍事的政治的スパイの情報と比較することが。政治的スパイの若干の書類は、残念ながら、1941年にだけ、我々の歴史雑誌に公表された。公刊とその様な情報の資料の研究は、ラムザイグループの活動を新規に見直す可能性を与えている。それはゾルゲと彼の同僚達の諜報活動の仕事をより具体的に評価を与える。

読者が注意を向けてほしいもう一つの時期がある。どのような諜報環境下で、ラムザイ作戦を立案することになったのか？立案の最初に、日本について何が知られていたのか？どのようなレベルで、得られた情報が利用されたのか？誰に報告されたのか？島国の帝国の指導部の意向について上層部は何を知っていたのか？作戦の立案時、極東領域の軍事政治状況はどのようであったのか？これらの質問に対する答えのために、スターリンに報告された、政治諜報の書類上の情報を著者達は利用した。

さらにもう一つの状況を気にしてほしい。1939年まで、極東で、平行して、合法的な諜報機関ИНО(東京とソウルの)が稼働していた。それらは価値のある政治的軍事的情報を憲兵隊や諜報機関内の自分らの情報源から得ていた。それらは交換の手順で諜報局に届き、軍事スパイの指導部に高く評価された。これ故、双方のスパイの情報の比較分析をすることが、著者達は必要と判定した。同じように当時の状況に触れることが。1939年には両方の機関が崩壊してしまった、東京でもソウルでもなく、モスクワで。ベリア、フィチン、他のНКВДの同僚のせいで。そして、日本に関する情報の全ての負荷はラ

ムザイグループにかかった。

ラムザイ作戦に関する資料の分析において、本質的な問題が生じている：何故、ベルジンは、1933年初めに、この作戦の作成に取りかかったのか？ 日本が満州への侵略を始めた1931年末ではなく。それとも、情報局では当時見なしていたのか？ 満州の拠点、ソ連邦ではなく、中国への更なる侵略のためと。多分、ヒトラーが権力に達し、ドイツと日本の始まった共同後、情報局では2方面での戦争の可能性を理解していたのか？

これらの疑問はまだ解決を得ていない。ここで著者達は自説と推定を述べることにする。

最後に、読者が注意を向けてくれることを願っている。「ラムザイ」は上海時からのゾルゲの偽名であったことに。これ故、著者達はこの単語で諜報作戦を示すこととした。情報局によって日本に組織され、ゾルゲが指導したスパイグループを。

著者達は援助と好意に対して謝意を示す。エリザ・アレクサンドロブナ・ゴルブノバ、ガリナ・リボブナ・イワノバに。彼女らなくしてはこの本ができなかったであろう。

# 第1章 コミンテルンから東京へのスパイの道

「もし必要ならば、私が北極点に行くことが。多分そこで  
う一つの党を設立することが必要である必要ならば、」

リヒャルト・ゾルゲ コミンテルン同士との初刊の中から

## 「世界革命本部」での勤務

ゾルゲについて、ソビエト連邦で書かれ出版された全てに目を通すならば、気づく。ソビエトのスパイの生活と活動に関する事実が完全に無視されていることに。それらは西側で既に公刊され、日本で出版された4巻本「ゾルゲの仕事」中の書類で断定された。第一に、これは1925年から1929年のコミンテルンにおけるゾルゲの仕事に関係している、1932年に彼を中国から呼び出したことに、失敗のあり得る恐れに関係して。

スパイとしては生まれてこない。どんな歴史家にも知られている理由は、ゾルゲには完全に当てはまる。軍事スパイとしての彼の経路はどのようなものであったのか？ ベルジンが中国へ最初のスパイの出張に派遣した人物はどのようなものであったのか？ 特別な地方へ、ゾルゲが一度も行ったこともない所へ？ この国へ誰が同行したのか？ 誰が彼らのスパイ活動を指導したのか？ 多くの点において、この疑問に対する回答に、日本における彼のその後の成功したスパイ活動、素晴らしい活動をしたラムザイ作戦が依存していた。

デキンとストリは自分の本で、十分に確信のある推断をしていた。ゾルゲは1919年からドイツ共産党の秘密の軍組織に関係していたと。本質的に、この組織の彼らはドイツに派遣され、ソビエトの軍事スパイの同僚と接触を持たざるを得なかった。1923年の革命的な蜂起の直前に、この組織を確固とするために。本質的に、この組織で働いている全ての活動家達は登録され、情報局に十分に詳細な情報が残されていた。1924年のドイツ共産党大会に、ドミトリー・マニュイリスキイをトップとするソビエトの党代表がやって来た。代表団の団員達はできることを全て為した、ソビエト連邦のために将来の利用の目的を持った、ソビエトのスパイのために最も期待される同僚を選び出すために。ゾルゲ自身が書いていた：「大会の終了後、彼ら（ソビエトの代表団）がモスクワのコミンテルンの参謀部で働くように私を勧誘した。私は直ぐには出て行くことはできなかった。フランクフルト大会後に幾つかの組織的諜報的方策に参加していたので。しかし、コミンテルンの情報局での仕事に私を採用したいというコミンテルン代表団の提案は、ベルリンの党指導部に了解された。そして、1924年末に私はベルリンからモスクワに向かった、1925年には仕事に参加するために。」

ドイツ共産党の左翼運動の代表者の一人であったルト・フィッセル女史がロシア人とゾルゲの関係を記していた：「マニュイリスキイは他の非常な重要な課題で成功を収めていた。それは彼のドイツ人としての任務の一つであった。ГПУの専門家達との共同の中で、ドイツ人コミュニストの中で人々を観察するのが常であった、ロシアの諜報機関に適



した。ゾルゲをそのような人物としてマニュリスキイが目をつけた。彼はドイツ共産党のために軽い諜報課題を委ねられていた。中央委員会の私たちは知っていた、ドイツのコミュニスト達はロシアの当局に登録されていることを。しかし、そのような状況に影響を与えることはできなかった。このことが、我々とマニュリスキイとの間の軋轢の不断の原因となった。」

ルト・フィッセル女史が追想記を裏付けしている、ヨーロッパに逃亡したソビエトのスパイであるワリテル・クリビツキイは、1939年にそこで自分の追想記を公刊した：「私たちがコミンテルンの力の崩壊を認識した時、我々は話し合った：「ドイツ革命からの渡りに船であった。」我々は、我々の党の諜報と破壊活動を助けてくれる、いい人々を選び出した。彼らをソビエトの赤軍第4部に軍事スパイとして送り出した。」これ故、証明されたと見なすことができる、ゾルゲは1925年に、モスクワに移った時に、既に諜報活動を行っており、労農赤軍（PKKA）の参謀部の諜報局では知られていたことが。

共産主義インターナショナル執行委員会（IKKI）書記局会議  
の議事録第13番からの抜粋

1924年10月7日付

聞いた：

<.....>

13. 提案：同士ゾルゲを経済と政治の職員として情報局の仕事に採用する。

決定した：

<.....>

13. 承認された。

1924年12月に、モスクワに到着すると、コミンテルン執行委員会（IKKI）に出向いた。オットー・クシネン（IKKIの指導者の一人）が仕事のための推薦状を書いた。ゾルゲは執行委員会の情報局の経済報告者に任命された。情報局での仕事の年、そして、1926年1月には彼をIKKIの組織局の指導員に移動した。数ヶ月後、IKKIの書記局に異動した。そこで彼は1926年10月まで働いた。軍事危機に関する小委員会でのゾルゲの仕事に注目すると、彼はそこで帝国主義諸国間の矛盾とソビエト連邦への軍事的危機の問題を研究した。この小委員会でのゾルゲの仕事の総括として報告があった：「武装衝突の軍事的下準備」。明らかに、これは軍事的政治的課題に関する彼の最初の研究であった。その後、中国での仕事の時、その後の日本での時、極東地域におけるソビエト連邦への危機の問題に関係した、軍事的政治的問題の分析を彼は続けた、

組織局におけるゾルゲの仕事はめざましかった。1927年12月には、極秘扱いの部局「世界革命参謀部」（コミンテルンの国際関係局（OMC））に彼を招聘した。ゾルゲをドミトリー・マニュリキイ（1924年からドイツでの仕事で彼を知っていた）が推薦したのである。BKP（6）の中央委員会のグリゴリイ・スモリャンスキイも、1925年からゾルゲを知っていた。ドイツのコミュニストであるエベルトも、1921年からドイツでの仕事でゾルゲを知っていた。推薦は確かなものであった。OMCの指導者オ

シピ・ピヤートニツキイは局にドイツ人コミュニストを採用した。ゾルゲはスカンジナビア諸国（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）の共産党との仕事を委ねられた。

T. オスバリドへ

<.....>

1927年4月22日

1. ゾルゲについて。彼はじっとしていられなく、我々の所では働いていない。彼は直ぐに出て行きたがっている。が、彼を自立した仕事に派遣することは我々には困る。なんとすれば、彼には実践的経験が全くないので。最も良いことであろう、もし彼らが組織局で実践的に働くことを彼に教える可能性を与えるならば。もし、彼らがこれを欲せず、或いは、彼に対する俸給の問題が起るならば、次のように説明をすること：彼ら（\*）は反対するであろうか、君の指示で出だし、君の指揮下で働くならば。出来るだけ早く返答すること。

（ミハイル）

そして、直ぐに国外での出張が始まった。1927年12月～1928年7月中旬までの最初の出張は、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーであった。偽名フレリスとして。その後、モスクワに帰還し、コミンテルンの第6回大会に参加した。大会の審議権を持った代表者名簿中で、彼は番号が14であった。大会終了後に、1928年10月5日～1929年4月4日まで、2回目の出張。今回はレオナルドという新しい偽名で、ノルウェーとデンマークへ。1929年6月18日～9月19日までは、3回目となる最後の出張として、イギリスとアイルランドへ。

緊張し、もちろん危険を伴う2年間の外国旅行をした。将来の軍事スパイに、彼らは多くの課題を与えた：様々なヨーロッパの国々における非合法の仕事の経験、ヨーロッパにおける政治的軍事的状況の知識、国境横断の慣れと税関とパスポート管理部条件の知識、外部の目から逃れる方法。これ故、ゾルゲが情報局に来た時には、彼は新人ではなく、象牙の塔にこもった学者でもなかった、若干のソビエトの著者達が描き出そうとこことみたところの。地下活動とスパイ活動で大きな経歴を有した専門家がスパイとして育った。

他の面からは、コミンテルンでの仕事が示したように、当時既にゾルゲは判断の自立性で際立っていた。権威に媚びること無く、彼のはっきりした「操縦不能性」と自立して活動する指向性に表れていた。そこでは彼は見なしていた、中央は事情の本質的な状況を最後まで理解していないとして。将来の軍事スパイとして、自分の特徴を彼は十分に表していた。情報局指導部で悪意ある人から手に入れるより。しかし、これらの特性は彼を偉大なスパイに仕上げることとなった。

## コミンテルンから軍事スパイへ

疑問がある、ベルジンは何時ゾルゲを知り、ゾルゲを軍事スパイの仕事に引き入れることにしたのかという。この疑問は、60年代半ばにゾルゲについて書いた殆どのソビエトの作家によって不断において提起されていた。軍事スパイの指導者（つまりベルジンのこと\*）の洞察力を示すことは非常に魅力であった、ドイツの社会評論家（つまりゾルゲのこと\*）に将来の有能なスパイを見つけたという。実際、彼はそれを見つけ、教育し、

中国へ自立したスパイ活動へ送り出した。その後、日本へ。が、当時のコミンテルンでの彼の仕事について、OMCでの仕事について書くことは禁止された。ブハーリン（1888年－1938年、ロシアの革命家、スターリンにより右派として銃殺される\*）との関係について話すことは厳禁であったからである。俗説がある、ベルジンは定期的にドイツ人クラブを訪れていた。そこで、スターリンを激しく批判するゾルゲの熱烈な発言を耳にした。ゾルゲが国境を奔走していた1928年－1929年には、公開演説の機会はなかった。時間がなかった、更にはOMC職員は注目を受けることはなかった。コミンテルンの大会で、彼らは知り合った。それ以上に2人とも審議権を持つ代議員であった。ゾルゲの上司でベルジンの友人であるピャトニツキイはこの知古に手を貸すことができた。

コミンテルンにおけるブハーリンの敗北と、コミンテルンでの彼の役職の剥奪後、この組織における彼の同僚達の排除が始まった。このグループに、ゾルゲは入っていた。1929年8月16日、のИККИ西ヨーロッパ局の職員名簿からゾルゲを排除し、ВКП(6)(全ソ連邦共産党)の中央委員会の指揮下に転出させる。この時期、ゾルゲはイギリスに出張中であつた。その決定後、あやふやな立場にいることに気がついた。本質的に、彼は自分の将来について、自分のこれからの仕事について考えざるを得なかつた。イギリスへの出張時、自分の元妻のクリスチナと出会っていた。彼女は彼をドイツの諜報機関のコンスタンチン・バソフに紹介した。

何回かの出会いと会合の後、諜報機関はゾルゲの秀でた能力を評価した。明らかに、ここでは、ベルジンの影響は何もなかつた、すなわち、将来性のある同僚についてベルジンにバソフが報告したような、彼を諜報活動に引き寄せることができる。仕事を変更するという地下活動家としての専門家の希望はあつた、軍事スパイとなる。事件の中心に残りながら。多分、モスクワから少し離れている。彼はこの期間のことをよく調べていた。

コンスタンチン・ミハイロビッチ・バソフについては余り知られていなかった。他の多くの諜報機関についてと同じように。彼の本名は、アボルチニ・ヤン・ヤノビッチ。1896年に、リフランドツク県に生まれ、国籍はラトビア共和国。第1次世界戦争参加者で下士官。1919年から労農赤軍（PKKA）に。1920年から1922年に、ウラジオストクの諜報機関で、シベリア総司令官助手。1922年、軍事情報局の中央機関に移動し、1927年まで情報局の第2諜報部で働く。1927年－1930年、ドイツの諜報機関で。非合法の諜報活動は成功裏に進んだ。1931年1月、ソ連邦の革命軍事会議はソ連邦中央執行委員会幹部会に、情報局の6人の職員に赤旗勲章を授与するように請願した。「秀でた創意に富み無限の寄与、プロレアートの興味に対する極めて困難で危険な条件の下、ただ個人的な才能の御陰で、必須で高価値の情報を与える事ができる。」としての。30年代の軍事スパイの活動の評価はそのようなものであつた。このような諜報員の中の6人に、バリテル・クリビツキイ、イワン・ビナロフ、そしてコンスタンチン・バソフがいた。

1929年9月に、モスクワとベルリンの諜報機関の間で緊密な書簡の交換が始まった。そこでゾルゲの将来の運命が審査された。9月9日、バソフはモスクワに手紙を送った。それに書いていた：「ゾルゲの提案に関して電報した。彼は本当に真剣に我々の仕事に移りたがっている。現在の彼の上司とは、彼は余り良好の状態にはない。このところほぼ一

月間、自分の将来に関して何の指示も得ていない。無一文で何もしていない。彼は十分に知られた労働者であり、彼の特性を言及する必要はない。ドイツ語、英語、フランス語、ロシア語に堪能である。学歴は経済学博士。もし彼の状況が我々に有利に決まるならば、すなわち、現在の上司が彼を手放すならば、彼は中国に行くのが良かろう。そこへ彼は行くことができる。幾つかのこの出版社から得られる科学的仕事に関する委任を得られるならば。」

この手紙には、軍事スパイとしてのゾルゲの将来の仕事の全容が。スパイ機関と将来のスパイが彼らの会合時に審議していた。疑いもない、ゾルゲ側からの発想であったことは。ゾルゲは自分のジャーナリストとしての経験を、隠れ蓑とするために。当時、ジャーナリストを偽装する方法は、ソビエトの軍事スパイとしては新規であった。後になって、それは両方のスパイでありふれたものになった。が、その導入の先見性はゾルゲのものであったのは疑いがない。

ベルジンはピャトニツキイと話し合いをし、説明をした、ゾルゲはモスクワに戻るつもりであると。ベルリンの諜報機関に返事を送った：「・・・2。ゾルゲは彼の上司の知らせの通り、近々ここへ到着する。もし到着したならば、我々の所に立ち寄ること、我々は彼と話しをする。・・・」

ゾルゲの提案は採択された。彼には将来の仕事に対する展望があった。ドイツにおいてコミンテルン代表と接触を持っている諜報機関は、軍事スパイの将来の職員について多くの情報を集めようと努めていた。2日後、バソフはベルジンにもう一通の手紙を出し、彼がゾルゲについて知っている全てを当局の上司に伝えた。

中央へのバソフの手紙から

1929年9月16日付

ゾルゲは電報を受け取った。それでは、交渉のためにモスクワへ出向くことを彼に許可をしている。その際、逆に、彼は報告のために戻ってこなければならない。彼を解雇したいのは明かだ。彼はそちらへ行き、我々の所での仕事に移ることにして質問をする。私は問い合わせた、彼に関してコミンテルンでのそのような行動を何が引き起こしたのかと。若干の兆候を得た、彼は右派の反対に巻き込まれたこと。が、とにかく、彼を知っている殆どの同志達は彼については非常に良好に批評している。もしそちらが彼を採用するならば、最も最適なのは中国に派遣することであろう・・・

ゾルゲと右派の反対派とのあり得る関係のことは、ベルジンを乱さなかった。モスクワに帰還した時、彼らは出会った。現在我々が知っているように、軍事スパイとしてのゾルゲの仕事について話し合った。

前述したゾルゲの仕事に関する書類は、2000年になって公刊された。1965年に、我々著者達が彼について最初の本を書き上げた時、彼が国際関係局（OMC）で働いていたことに言及することを禁止された。それ以上に、熱烈な коммуニストで国際人は右派反対派に加わっていたことに、ブハーリンの支持側にいたことに！ 当時、ソビエトの作家の誰も夢にも思うことができなかつた。これらの書類を基礎にして若干の結論が出せる：ゾルゲ自身が軍事スパイを提案した。その活動地区として中国を。ゾルゲは正しく判断した、ヨーロッパでは結構知られており、ヨーロッパの警察や防諜機関の嫌疑に罹りやす

いことを。このような場合には、経験あるスパイは通常は活動場所を変更する。ゾルゲは既に経験ある党のスパイであると見なすことはできる。ベルジンの役割はこの場合にはそれほど大きくはなかった、ソビエトの作家達が書いているように。ゾルゲを諜報局へ移動させる決断をしたにもかかわらず。もちろん、これには彼の疑問の余地のない功績があった。特記しておこう、ベルジンの秘書であったズボナレバヤの追想記によれば、「彼らの間には良好で情熱的な関係が形成されていた、彼らはお互いに良く理解していた。」

注目しておこう：西側でずっと前に既に書かれていた多くのことが、我々の所では2000年によく知られるようになった。デキンとストリの本「リヒャルト・ゾルゲの仕事」は1966年に、ロンドンで出版された。その本のロシア語版は、ようやく30年を経た1996年に現れた。著者達が書いている、ゾルゲは1925年にモスクワにやって来るまでソビエトの軍事スパイと接触を持っていた。1927年にベルリンに中央事務所が陣取っていた、ドイツにおけるソビエトの全ての非合法活動を管理する。それは指導的なソビエトの専従ミロフ・アブラモフによって指揮された。この専従はソビエト大使館で報道担当官となっていた、ピャトニツキイに従属していた。国際関係局（OMC）—コミンテルンの秘密作戦の中核—の代表として。・・・」既に、1962年に、日本で出版された全3巻本「ゾルゲの仕事」—ゾルゲの尋問調書を利用することができた—の内容を著者達は極めてよく知っていた。

尋問の一つでゾルゲが語っていた、彼がOMCに提案したと。その本質は次のことであった、OMCと政治的と経済的問題に関係したスパイ組織を分離すること：「さらに私は提案した、そのようなスパイ機関を配置することを、コミンテルンの組織を持っている外国に。モスクワは、昔以上に断固としなければならないと。」三つ揃い（軍事、政治、党）の諜報網の絡み合いにおいて、我々の所では、比較的最近になって歴史書で話すようになってきた。西側では40年以上も前に広く審議されていたにもかかわらず。最後の尋問で、ゾルゲが伝えていた、彼はピャトニツキイにそのような変更を提案したと。「スパイ、それを私は気に入っているし、確信している。そのために、私は思う、私は十分に適していると。活動の窮屈な機構ではできそうは無い。・・・私の性格、好み、頑固なひいき。これら全ては政治的経済的、軍事的スパイに向いていよう。党の論争から逃れることもできよう。」このようにして、1929年には、ゾルゲは軍事スパイの仕事に移動する決断をした。

本の著者達は当時正しく捕らえた、コミンテルンにおける政治状況の傾向の変化を。この組織からのブハーリン追放後における、ゾルゲのその後の運命におけるピャトニツキイの役割についての全く正しい推断を述べた：「1929年の危機の後、保安部のソビエト政府機関への絶対的なスターリンの管理の樹立はコミンテルン機関への浸透を強化した。1925年4月に始まった。完全に論理的であった、ピャトニツキイの組織がその最初の標的になったとするならば。動機とは無関係に、赤軍のスパイへのゾルゲの移動はピャトニツキイによって発案された。或いは彼の関係の御陰と彼の助力で進んだ。

このように、ゾルゲは西側の歴史家に現れている。この描像は、全く正しい。最近公開された書類から明らかなように、60年代に新聞の記事や本などでソビエトの読者に献げられたイデオロギー的紋切り型から離れた。デキンとストリはこれを良く感じていた：「確かな歴史的條件を分析するあらゆる試み、組織的な関係における革命的变化の本質を、と

将来におけるゾルゲの忠義、ソビエトの出版物に現れたいろいろな記事中に最近語られるようになってよく見えなくなっている。入念に同期したこれらの説に同意する。モスクワで1925年3月に、ゾルゲはソビエト共産党へ加入した。その後数年間、元気に楽しく従事した。”科学的活動に”、すなわち、ドイツの問題に関して論文や本を書いた。ドイツクラブの代表ともなった。モスクワのドイツ人集団の中から疑いのあるトロッキーの信奉者達を忠義に追い出しながら。」

著者達が60年代のソビエトの出版物として評価している、この本からのもう一つの引用文：「他の言葉で言えば、ゾルゲとコミンテルンの中の何らかの関係の存在を臭わす物は何もない。或いは、その前の4年間における彼の活動の性質に関する何らかの鍵。彼はそれを日本の判事に対して短く故意にあやふやに書いた。コミンテルンの間奏曲は彼の証言から消えていた。リヒャルト・ゾルゲは宿命的な1929年にモスクワの薄明かりから出た。ヤン・カルロビッチ・ベルジン將軍の事務所に直ぐ出頭するために、彼は赤軍の第4諜報部の、何でもお見通しで、何でも知っている長である。」

もちろん、歴史家達にはそれぞれの説や推論をする権利がある。それらの内の一つは十分に研究してみる価値がある：「1925年に、彼がモスクワに到着した時、彼はもちろん通常のアンケートを書き込み、ソビエトの共産党組織に入るまでの履歴を書いた。これらの書類は第4局に渡った。このように、十分にあり得る、ゾルゲの仕事は1929年にベルジンの事務所で調べたことが。或いはピャトニツキイの介入の御陰で、或いは政治的危機とソビエト機構の混乱のこの時に知られている手順の一部として。当時軍事スパイの権力は自分の手を伸ばしていた、価値があり熟練した外国人のコミュニストを助けるために。彼らはスターリンの政治警察—Г П У—によって追放されていた、コミンテルンや他の機関から。」 そのような断定の本質はイギリスの情報源の独創性にはない。コミンテルンの活動、特にOMCについて西側では、多くのことが知られている。1939年に出版されたワリテル・クリビツキイ（ソビエトからヨーロッパへの亡命者 \*）の回想記は極めて注意深く読まれた。

ベルジンと長い間の知り合いであると知られている意見にもかかわらず、1929年末に、ゾルゲは話をしていた：「ベルジン將軍との最初の出会いの時に、我々の会合は基本的に次の点に向けられた。軍事機関としての第4局は政治スパイとの関係を有している故に、ベルジンはピャトニツキイから聞いた、私がそのような仕事の種類に興味を持っていることを。ベルジンと何回かの出会いの後、私は結局、中国への赴任を得た。」

## 目標—上海

ゾルゲは結局、1929年10月31日にИ К К И（共産主義国際インターナショナル執行委員会）を解職され、11月に、軍事スパイの仕事に就いた。この月に、彼はモスクワからベルリンへ出立した。そこで彼はおそらく、ソビエトの軍事スパイとして初めてジャーナリストとしての隠れ蓑を被った、彼を自由なジャーナリストとしてカモフラージュさせてくれる。社会学雑誌の編集局と農業新聞の編集局とゾルゲは契約を結んだ。彼は中国の農業を研究し、この新聞の記事のために、この巨大な国の農業についての本を書く

このために情報を得て利用することを提案した。彼はまた推薦の手紙を得た、ドイツの外務省から上海のドイツ大使当への。この手紙はドイツで得られ、日付は1929年11月29日であった。上海へはパリ、マルセルを経由した。ゾルゲは情報局の職員「アレクス」を同伴した。

「アレクス」とは誰か？ 当然のことながら、ベルジンは中国へ新人のゾルゲを一人を出すことができなかつた、コミンテルンのエージェントとして。ヨーロッパの国々での地下活動の彼の経験にもかかわらず。これ故、ゾルゲのために監督者を指名し、スパイ活動の現場であり得る失敗から彼を予防するために。そのような人物として、「アレクス」がいた。中国におけるヨーロッパの国々の防諜機関に、同じく南京政府の防諜機関に。初めて、この偽名で彼はゾルゲに関する最初の本に出ていた、ソ連邦で出版された、若干神話的体裁の元で。それは当時、「ラムザイ」の回りに形成されていた。著者達は訪問することができた国家政治保安部（ГПУ）の将軍の執務室を記述している。「中国を、ゾルゲはドイツの雑誌「ダス・ゾチイリグシェ・マガジン」の特派員として、若干のアメリカの新聞の代表として訪れた。そこで勇敢で経験のある人物が数年間ゾルゲの活動を直接に指導した。ソビエトのスパイに関する外国の文献中では、彼を通常アレクスと呼んでいる。彼の本性を明かすことができていると断りながら。しかし、今や我々は彼の名前を隠してはいられない。彼は熱烈な коммуニストでレーニン主義者、国内戦のコミッサールであったレフ・アレクサンドロビッチ・ボロビッチである」。このようにして、軍事スパイとしてのボロビッチの名前がソビエトの出版物の頁に初めて広く知られた。

名前は広く知られるようになったが、限定的であった。その後ゾルゲについて本を書いた著者達の誰もこの軍事スパイについて一言も語らなかつた。90年代半ばまで、彼の経歴は秘密のベールに覆われていた。彼について何か新しいことを知ろうとする、彼の妻リージャ・エフィモブナと娘スベトラナ・リボブナの全ての試みはГПУの職員の頑強な抵抗にぶつかった。ボロビッチは1937年に銃殺され、1956年に名誉回復していたにもかかわらず。スパイの将軍の関係においてГПУの指導部の厳格な不承認の理由、ボロビッチは師団政治委員、すなわち少将の肩書きを持っていた。我々の見解によれば、中国におけるゾルゲの指命に、彼は何の関係も持たなかつたという結論である。中国に彼はいなかったし、1930年から1932年に、ゾルゲの仕事をそこで指導していなかつた。これについては、ГПУ内ではよく知られていた。

中国へゾルゲと一緒に情報局の他のスパイが到着した。そして「アレクス」も。当時、一つのスパイ機関で、2人の職員が同じ偽名を持つことは極めて珍しい。しかし、「アレクス」は、ゾルゲのために造られたイデオログ的な凶中に明らかに溶け込まなかつた。「熱烈な коммуニストでレーニン主義者」で「国内戦のコミッサール」の役割には、彼（？）アレクス）は適していない。それで、ГПУ内で「アレクス」を他の者に変えることを決めた。もちろん、著者達はゾルゲについての最初の本を、ГПУの将軍について書いた（推定で、これはこの年のГПУの次長マムスロフ大将であった、彼の仕事の全ての書類を入手して、よく知っていた。ゾルゲが誰と一緒に1930年1月に中国へ出発したかを。とにかく、ボロビッチの説を出版した。中国へゾルゲが伴った本物の「アレクス」、「熱烈な коммуニストでレーニン主義者」は党员ではなかつた。彼は「国内戦のコミッサール」ではなかつた、戦争には参加していたが。これ故、優秀なスパイの監督者としての

役割に、彼は明らかに適してはいなかった。

彼の本名はハシケレビッチ・イズライリ。1891年生まれのオデッサのユダヤ人。1909年から1920年までアナーキーであった。1910年に初めて逮捕され、流刑となった。1913年に流刑から国外へ逃走した。1913年から1915年の2年間、アメリカ、フランス、ドイツに移住。ロシアに戻ると再び逮捕されたが、2月革命後、解放される。名前を変えて、ウラノフスク・アレクサンドル・ペトロビッチとなった。故郷であるクリミアとオデッサで、10月革命と国内戦に参加した。戦後、1921年-1922年、ドイツで非合法のスパイとなる。しかし、その後、政治スパイからプロフィンテルン（赤色労働組合インターナショナル）へ移動した。そこで1928年まで勤務。この期間に、ドイツと中国へ出張、アレクスの偽名を持って。

1928年末に、ウラノフスクをプロフィンテルンの情報局が選抜した。1930年初めに、ゾルゲと一緒に彼は中国に出向いた、諜報活動指導者として。数ヶ月後、失敗の危険に関係して、諜報機関をゾルゲに引き渡し、モスクワに戻った。

20年代末から30年代初めにおける、中国での軍事スパイの活動として、一つの特徴があった。この国における諜報局の非合法諜報機関は幾つかあり、中国共産党内で活動していた。その武装隊は中国赤軍中で。1927年の中国革命の失敗後、蒋介石は全てのことをやった、国における自分の権力を確固とするために。最終的には、共産党を粉砕し、赤軍の一部を粉砕し、国の中央と南部のソビエト地区を占領した。諜報機関の全ての活動、特に、ゾルゲの諜報機関は、中国の独裁者の意向に反抗するものとされた。ハルピンの諜報機関だけが例外とされた。そこには、満州占領の開始後に、自分の特別の課題があった。

もちろん、1930年1月、ゾルゲが中国に到着した時、ソ連邦にとっては何の中国の脅威は存在しなかった。1929年の東支鉄道における惨禍（張学良の乱 \*）の後、好戦的な満州の軍閥達は静かになった。蒋介石は国の中央部と南部に注意を集中した。それ以上に、上海と南京から北への進軍において、ソビエトと満州の国境線まで、進軍に進軍した。北と満州の軍閥達の軍事的抵抗に打ち勝ちながら。中国からモスクワへ届いた全て殆どの情報は基本的に中国共産党とИККИの役に立った。これはゾルゲグループの情報に関係していた。当時、中国で仕事をしていたフロリフ・フェリドマン（? \*）グループの情報にも、ゾルゲが自分の牢獄でのメモでそのように呼称していた。

ゾルゲのグループと平行して仕事をしていたこのグループについて、中国の赤軍と中国のソビエト地区での情報獲得に関する課題の遂行について、少し話しをする価値がある。それどころか、「ラムザイ」はフロリフと関係があった。彼らはお互いによく知っていた。ゾルゲの投獄中のメモの内容にもかかわらず、当然、これらの者達は何らかの関係の存在を否定していた：「1931年に上海で、フロリフ・フェリドマングループが同じように仕事をしていた。このグループはPKKA（労農赤軍）第4局によって派遣されていた。中国の赤軍との連絡を作り上げ、それについての情報を集めるという課題を持って。彼らはモスクワとの独自の連絡手段を持っていた。これ故我々の通信所を利用しなかった。フロリフがグループを指導していた。2つめの名前はテオであった-赤軍の歩兵隊の少将・・・・ 私には仕事での彼らとの付き合いはなかった。ただ、偶然の出会いがあった。結局の所、上海は小さい町であった。人との偶然の出会いを避けることは難しかった。私はモスクワから指示を受けていなかった、彼らと接触を取るようにとの。彼らには彼らの指示



があった。我々の間には公的な関係はなかった。」

注目しておこう、テオ將軍の正しい偽名は、「フロリヒ」ではなく「フレイリヒ」である。彼はガイリス（バリン）・アブグスト・ユリエビッチ（誰？ \*）に属していた。彼は1895年にラトビアで生まれた、ラトビア人である。1917年に入党し、1918年にはPKKAに。1920年－1922年には、ウクライナで第4軍の主任スパイの補佐を。1922年、モスクワに移動し、情報局の情報統計部の主任に指名された。1923年に、PKKA軍アカデミーを修了し、ドイツに派遣された。ドイツの「十月」の準備のために。1923年－1925年、ドイツ共産党の軍事顧問。モスクワに帰還した後、極東方面に向きを変えた。1926年－1927年、全ソ連邦共産党（BKП(6)）中央委員会幹部会の中国に関する委員会の秘書の職務に就いた。1926年－1930年、情報局第4部の上司の補佐および代理人。1930年8月から1931年11月まで、中国共産党中央委員会軍事顧問。

その後、再びモスクワへ。1932年12月まで、情報局第2スパイ部の上司補佐。その後、満州軍に対するスパイ強化のために極東へ向かった、OKДВА参謀部のスパイ部の上司として。任命は成功であった。この地位で彼は1937年まで働いた、バリンの名前で。1936年に、「旅団長」の勲章を受けた。1937年4月、第2東方局の上司、軍団のコミッサールであるフェドル・カリンの逮捕後、彼が情報局のこの局を受けついだ。モスクワで、1937年7月26日まで働いた。この日に逮捕された。1937年8月10日、情報局の党組織秘密会議は、情報局の党事務局の決定により、「人民の敵」としての排除することを承認した。HKВДによって逮捕された師団長アレクサンドル・ニコノフ、軍コミッサールのエメリアン・ステリマフ、旅団長アブグスト・ガイリスを。すなわち、この3人の同僚の逮捕はベルジンを局長から罷免する理由となった。3ヶ月後、ガイリスは銃殺された。彼の名誉回復は1957年6月であった。

ゾルゲは偽名「ラムザイ」を得た。明らかに、中国に行く前に、有名な作戦の遂行の時ではなく、これについて若干のソビエトの作家達が書いているような。自身の手紙「老人へ」（ベルジンへ）で、ガイリスが何度か「ラムザイ」について言及していた。手紙の一つは1930年11月30日に上海から送られた。これでズバトウとアモイのソビエト地区への可能な旅行について語っていた。この危険な旅行の組織におけるゾルゲの援助についても：「もう一つの可能性がある。これはラムザイの援助の元で。彼は語っている、彼の所には調査隊の組織において若干の可能性がある。彼は自分の領事から何らかの書類を得ることができる、浙江省知事から保護の手紙を得るつもりでもある。私は思う、この仕事を組織する指令を彼に与える価値があると。彼自身が希望している。そこで我々は彼を政治的部門で利用した。我々以外には誰もいないので、我々は重要な課題として軍事問題に従事することになる。もし中国人が旅行を組織することに成功したならば、ラムザイは比較的大きな援助を示すことができた。指令してくれるようお願いする。」

1930年12月3日付の他の手紙で、彼が知っているラムザイの情報について書いていた、蒋介石の自分の軍の再編成についての。この再編成は、ドイツの軍事指導員の助力で行われる。彼らの多くとゾルゲは良く知り合いであった。

1930年の中国共産党（KKK）の失敗について、ゾルゲから報告が寄せられた。ドイツの軍事顧問達との関係は恒常的となった。すなわち、彼らから「ラムザイ」は極め

て価値のある情報を獲得した。1930年半ばに、彼はモスクワに作戦の内容を伝えた、中国のソビエト地区への蒋介石の第4回進軍について。これでこの進軍の失敗を促進した。

後になり、ゾルゲは投獄中でのメモに書いていた：「グループの者達から提供される情報に、私は満足できなかった。これ故、個人的に、できるだけ、様々な資料や証拠を集めた。上海には大使館はなかったが、私は直ぐにこの地域のドイツ人コロニーに入った。私に多くの情報が入るようになった。このコロニーの中心はドイツの総領事であった。そこでは私はよく知られており、良く招待された。ドイツ人の貿易商、軍事指導員、学生達と緊密に付きあった。私にとって特に大事であったのは、南京政府に派遣されていたドイツ人の軍事顧問のグループであった。このグループから、南京における軍事だけではなく政治の問題について通報してくれる者と選んで会った。年配の顧問がそのうちの一人であった。その後、総領事となった、フォン・クリベリ陸軍大佐。軍事顧問達はしばしば私を南京に招待した。上海の私の所を訪れた。それ以外に、私は彼らと一緒に天津と杭州を訪れた。彼らから、南京政府の内政、軍閥、経済と政治の手法に関する様々な情報を得た。それ以外に、1932年の上海事変の時に、彼らは私に十分な情報を与えた、日本軍の軍事作戦と実際の動員兵力に関する。ユーラシア航空会社のドイツ人飛行士に接近し、私は中国の奥地に関する状況を知ることができた。それ以外に、私自身そこへ何度も飛んで行き中国における状況を全面的に調べた。このようにして、不断において、自分の知識を増やし、中国に関する文献を読んだ。私は結果として、中国の専門家となった。大事な様々な問題に関して情報を準備し、てきぱきと結論を出せるようになった。」

残念ながら、1930年－1932年において、中国のラムザイグループからモスクワへ届いた戦略的な作戦情報をモニターすることが実質的に不可能となった。この期間に、上海からモスクワへの10通だけの無線電報が、秘密解除され本として公開された。「ビスバデン」(? \*)と上海の集中した無線通信があった。この偽名の元に、太平洋艦隊の第44番スパイの無線基地が隠されていた。中国におけるゾルゲグループの無線士マックス・クラウゼンは「ビスバデン」で働いていた。上海とウラジオストク間の無線通信は途切れることなく稼働していた。

中国における仕事の期間(1930年－1932年)に、クラウゼンは諜報機関から中央へ597通の緊急スパイ報告をした。そのうちの235通は赤軍司令部とソビエト政府に報告された。これらの報告で、以下のような課題を明らかにした。中国に外国政府がどの程度浸透しているか、1931年の満州占領期における日本軍部の計画と作戦、1932年1月と2月における上海戦闘、南京軍における外国の軍事顧問の活動、中国における様々なグループ間の政治的軍事的戦い、中国軍の軍事活動、軍事企業の状況、中国の経済。これらの情報をゾルゲは国民党軍にいたドイツ人、軍事顧問、指導者達から得ていた。上海のアメリカとドイツの大使館の職員から、スパイの情報源から。

クラウゼンの無線通信は、特に重要な役割を果たした。1929年末の東支鉄道での衝突時に。この年の3月から、クラウゼンは中国で働いていた。当時の人民委員会への報告書で語っていた：「東支鉄道における軍事衝突時、中国における戦略的スパイ活動の経験は明瞭に証明した、無線通信の最新設備を持ったスパイ活動は、司令部に敵の戦略的作戦的演習について、同時に事情に通じることをさせてくれる。衝突時には、通信は滞りなく作動した。」

1931年に中国におけるラムザイグループの活動について、何の書類も秘密解除されていない。もちろん、疑わない、1931年9月の日本による満州の占領開始後、グループの注目は直接にこの地区からの情報の獲得にあった。情報の内容とその上層部への通報の道は従来通り知られていない。研究者達は将来何らかの書類が出現することを待っており、期待もしている。

上海におけるラムザイの活動は成功裏に進んだ。1932年には既に、ゾルゲの元には十分な組織があった。約10人の軍事的政治的情報源が。情報源の一人はアメリカの大使代理リレストルであった。彼の家に、クラウゼンは通信機を置いた。さらに、極めて重要で有望な情報源は尾崎秀実であった。彼をアメリカ人の作家アグネス・スメドレーがゾルゲに紹介した、南京街の中国レストランで。ゾルゲはアメリカ人のジャーナリストのアレクス・ジョンソンとして自己紹介をした。尾崎に提供してくれるように頼んだ、詳細な中国の内部状況について、いろいろな政治グループに関係した日本の政治について。後になってゾルゲが書いていた、「彼の情報は極めて正確で皆に興味があるものであった。私は良い日本人の情報源を得た。我々は直ぐに懇意となった。」

しかし、1932年に同僚のノウレンスを解放するという失敗した試み（？ \*）へのゾルゲの参加は、明らかに、彼が中国の警察の嫌疑を受けること招いた。ノウレンスの仕事はデキンとストリの本で十分によく知られている、同じくモデルの。ここで繰り返す必要はない。ただ特記しておきたい、中国で素晴らしいことを遂行した彼は、日本への移動のために特別にモスクワに召還された、というゾルゲのソビエトの経歴の主張は活動には関係していないことを。ノウレンスの仕事への参加後、崩壊の恐れは中国からの即刻の退去を要求した、避けられない逮捕を待っていられなかった。これが、彼の中国でのスパイ活動を停止するというモスクワの決定の主たる理由であった。この恐れがなければ、多分彼は中国に残っていたであろう。日本での仕事のためには、他の候補が選ばれたであろう。

1932年9月4日、ベルジンは上海から暗号文を貰った：「弁護士との関係と病人との全ての仕事が、我々の安全にとって極めて危険なものとなった。この地の友人達はしっかりとした、全ての仕事を任せることができる。ミハイルとの話し合いをお願いする、他の対応する指令を与えてくれることも。」

電報には2つの決定があった：「ミハイルに渡すこと」、ピャトニツキイに、「我々はこのサービスから解放されるべきである。」 軍事スパイの指導部では理解した、スパイ活動と政治囚の解放との組み合わせは、うまくはいかないと、ゾルゲと彼のスパイグループに打撃を与えるだけであると。

暗号解読した電報

B x . 3 2 5 8 番

モスクワ、ベルジン同士へ

上海、1932年10月10日

中国の情報源からわかった、南京は軍事スパイの痕跡を見つけたらしいことが。一人のドイツ人とユダヤ人を疑っているらしい。我々の古い過ちと噂を基礎に、地区のドイツ人の中で考えている、嫌疑の輪がラムザイの回りで急速に狭まっていると。至急の連絡を願う、ラムザイは交代の到着をじっと待機しなければならないのか、それとも、次

の者の到着を待たずに退去してよいのかの。

決裁：パポフ。交代を待たずに直ちに退去するようにラムザイに伝えよ。32年10月11日。署名」

「去るように、交代を待たずに、でないと、終わってしまう。32年10月11日。ベルジン」

2000年に初めて公刊されたこの書類は、中国からゾルゲの退去の理由としての、ゾルゲについての本の作者達の判断と予想についてのよりどころとなった。もちろん、本の作者は無駄なねつ造を余り非難するつもりはない。ソビエト時代に、中国におけるコミンテルンの仕事に関して、ゾルゲの寄与について書くことは誰にも許されなかった。そして崩壊の危機と突然の退去についてではなく、彼のスパイの指命の成功した寄与について書いた。

1932年11月12日、ゾルゲは上海で船に乗り、11月21日にウラジオストクに着いた。グループの指導は「パウリ」(カール・リム)に移った。

ほぼ3年に渡ったスパイとしての最初の海外出張は修了した。もし、軍事スパイとして新人が中国に去ったならば、そのコミンテルンでの経験にもかかわらず、モスクワへ専門家が戻ってきた。極東の特別な条件下でジャーナリストとしての隠れ蓑を利用するのは、得られた経験の中で最大の価値のものとなったであろう。特に戦争後に、このジャーナリストとしての隠れ蓑は中国における常套手段となった。その後日本で、さらにもう一つの価値ある経験があった。中国におけるドイツ人軍事顧問との付き合いと接触が。これが彼を助けてくれた、東京におけるドイツ大使館で陸軍と海軍武官との有益な接触をとることで。島の帝国(日本のこと\*)を訪問してきた、同じくドイツの軍の高官との。ジャーナリストとしての隠れ蓑は日本ではほぼ8年間に及ぶスパイ活動を隠してくれた。

ノウレンス(?\*)の仕事にゾルゲを引き込むことは間違いであったのか? この問題に答えることは難しい。当時把握していなかった、いろいろな課題を一人のスパイによって遂行することを。彼らを党のスパイと呼ぶことができ、広くはやった現象となった。そしてしばしば深刻な崩壊となった。これらの課題の解決の社会的基礎と方法は様々であった。党の政治の仕事は広い大衆的な基礎と多数の運動参加者を要求した。当時そのようなスパイ活動は、防諜機関と政治操作に対して特別に選ばれ良く秘匿された狭いグループで期待された。そのような組み合わせは、過去における個人的で大衆的な活動の、一度ならず、秘密組織の早すぎる崩壊へ導いた。何時の時代でも偶然ではない、一人で、かつかさばる支援の大きなネットワーク無しで働く者を、優秀なスパイと見なしているのは。

記録に基づいて断定される、軍事スパイの指導部はノウレンス救出の仕事への参加を喜ばなかったと。ゾルゲもこの「義務」を重荷には感じた。それについては1932年5月のミハイル(?\*)への彼の通信が証言している。それに彼が書いていた:「我々はこの哀れな若輩である。我々には政治的評価をする技量はない。従って、我々は自己責任をとる立場にはない。特に条件下では、十分に熟練した人を持っている・・・これら全ての超負荷から我々を解放するようにしつこくお願いする。我々は怠けているからではない・・・我々の状況がこれ以上これらに関係することをさせてくれないからである。私は既に極めて気まずい立場にいる。」

当時、ゾルゲはコミンテルンの人物であり、党スパイの職員であり、ドイツで党の政治的工作にたづさわっていた。コミンテルンには4年間。彼が1929年に情報局にやって

来た時、彼には軍事スパイの能力も経験もなかった。ベルジンはしばしばゾルゲに警告した、党の宣伝活動を中断しないよう、スパイ活動に大衆の引き込みに傾かないようにと。道徳的な政治的動機からだけ発する、それ以上に、完全に異なる課題の決定を一人だけに委ねないこと、困難を持ってゾルゲが成功し、非常な危険をはらんでいた。此は中国で特徴的であった、軍事スパイの職員達が密接なコンタクトを持って働いていた、コミンテルンの国際連帯局の代表者と、そのような共同は禁止されていたにもかかわらず。

ゾルゲは左翼的確信で有名であったアグネス・スメドレーとあけっぴろに付き合っていた。一度中央を非難することさえした、彼女をジャーナリストとして効果不十分に利用しているとして。同時に、ソビエトでの彼女の本の出版に対する彼女に支払うべき金を引き渡す可能性について斡旋もした。ゾルゲのこの「罪」（＝非合法活動の規則の無視＝）を、余りにも勝手気ままな個人的行動と並んで、中央は決して忘れていない。それは彼の情報機関の一つの書類から他に書き写されよう、「政治的不信」の印を押されて、それ相応の結論を付けて。ゾルゲグループの活動の実際の結果を考慮すること無しに。

1932年、日本の特高はベイピン（？ ＊）で尾崎秀実の情報源を逮捕した、中国共産党のためのスパイの嫌疑で。尾崎とのゾルゲの接触は、その秘匿のためになかった、嫌疑の陰がスパイ機関に罹りかねなかった。結局、モスクワへのゾルゲの出立前に、共産党の秘密局長カン・シェンが彼を訪れ、組織にスパイが紛れ込んだと警告した。秘密局長には情報局の非合法代表者とその住所は知られていた。スパイ機関の非合法活動システムの不幸について話した。

中国からのラムザイの退去の書類における確認は次の事実によって補足される。1955年、KGBの調査局が、軍事と政治スパイの職員の1937年－1938年の犠牲者の名誉回復に取りかかった。彼らの「証言」を調べ、審査に出された。このために、他の機関に問い合わせを行った。1955年12月19日、KGBの調査局局長マリアロフの質問への答えで「P.Y.」は伝えた、「・・・ラムザイの非合法諜報機関は1930年－1932年の期間、上海で情報局の非合法ネットを指揮していた。組織上のラムザイによって為された馬鹿な間違いからのその崩壊の危機に関して、上海から彼は中央に呼び出された。」この書類は論争を引き起こす。何故、ゾルゲが中国でのスパイ活動を禁止されたかの、後になってラムザイの「感光」（？ ＊）に関する嫌疑が確認されなかったにもかかわらず。上海における、ゾルゲの本質的な特徴と見落としと間違いのあり得る結果は中央指導部によってしっかりと調べられ、考察された。その後、結論が出された。防諜機関によって暴かれたものと見なす根拠はないと。新しい出張が彼を待っていた、今度は日本で。

## 第2章 作戦の意図

我々の仕事において、勇気、大胆さ、危険、最大級の「凶々しさ」は最大級の慎重さと両立しなければならない。弁証法！

ベルジン

スパイ作戦の歴史を研究する際、常に疑問があり、その疑問に答えを得ようとする中で、ラムザイ作戦は例外ではない。軍事－政治的背景でどのようなスパイの作戦の立案を行っているのか？ ラムザイ作戦に関して、疑問は次のことである。作戦の立案の開始時、日本の軍事－戦略的状況について何が知られていたかが。どのような水準で、スパイ情報が得られ、誰に報告されたのか？ 軍事－政治的背景がどのようなものであったのか。或いは、言葉を換えて、極東地区で軍事－政治的状況はどのようなものであったのか？ 当時、極東では軍事バランスはどのようなものであったのか？

### ラムザイ作戦前における、スターリンの机の上の日本に関する情報

1931年－1933年の間の双方の諜報機関の秘密解除された全てのスパイ情報を分析するならば、ラムザイ作戦の基本的な方向が立案された時、その意図について、若干の結論を出すことができる、もちろん、中間的ではあるが。30年代のスパイ情報の完全な公開まで、現代の研究者達は一人も待っていない。この時代、政治的諜報活動は明らかに、軍事を越えていた。日本の情報源から沢山の書類の情報を得ながら。そして、これは軍事－政治状況の評価ではなく、極東地区の状況分析でなかった。OГПУで分析の仕事を行わなかった、ある人物がこれをした得られた日本の外交文書は最上層部、スターリンの執務室に提出された。書記長自ら分析し、事実を洗い出し、スパイによって得られた情報から結論を出した。ボロシロフは海軍軍人人民委員会と革命軍ソビエト代表としてOГПУから十分な軍事情報を得ていた。軍事スパイ（情報局）は自慢することができた。秘密解除された書類から判断するならば、作戦で得られた戦術上の情報は、OKДВА参謀部のスパイ局からモスクワへ渡った。そのような物であった情報の並べ方は、作戦が実行中では。

疑いはない、人民委員と政治局委員としてボロシロフは、スターリンの執務室で、日本に関する諜報で得られた書類を吟味していたことは。書記長はそのような情報を自分だけに隠さなかった、幾つかの書類にボロシロフの署名がある。あり得る、スターリンがボロシロフを咎めたことが、軍事スパイが価値のある書類の資料を得ることができないことで。もし、そのような咎めがあったとすれば、彼らは多分ベルジンの所まで行き、極東の隣人に対するスパイ作戦を遂行する彼の決定を援助した。

今日、歴史家にとっては、満州占領後に、スターリンが手にしたスパイの情報の全容を明らかにするのはまだ困難である。ロシア共和国大統領公文書館のスターリン財団で、

ОГПУのИНОの情報のある1932年から1935年の間の4つの件だけが秘密解除された。スパイ活動の歴史家達の結構自慢している若干の公刊物を信じるならば、スターリンは机の上に、得られたスパイ関係書類を山と積んでいた。今公開された、当時、書記長によって得られたスパイ情報の氷山の一角。公開されたスパイ情報のファイル中には情報局の情報の物は一つもない。信用するのは難しい、かような強大なスパイ機関が彼に総括的で政治的報告と管轄している書類を提出しなかったと言うことを。もし、ベルジンが少しでも自慢したかったならば、彼は、もちろん、可能性を見逃さなかった、主人の机の上に価値のあるものを置いた、彼の所にあった。スターリンの所には情報局の情報はあった。が、それはまだ秘密解除されていないので、歴史家や研究者に届いてはいない。

政治スパイの情報は2つの情報源から届いた。最初の情報源は、ИНОのスパイからの情報、書類の情報を包含して。2番目の情報源は、特別局の情報。この局はモスクワの外国の大使館に自分のスパイを持っていた。外交袋入っている物の開封と写真撮影を自分の仕事としていた。特に、モスクワ-ウラジオストクの急行便で発送されている日本の外交郵便にかかわっていた。

グレフ・ボキエに指導され、特別局の職員はよく働いた、彼は外国の外交電報や電信の横取りと解読に従事していた。

これら様々な情報源は、ОГПУに、基本的な敵対者の考えや行動について、国の高い政治、軍事、外交の指導部に詳細な情報を報告することをさせていた：ドイツと日本の、同じく、イギリス、フランス、イタリアとアメリカの政府の。これらの組織における情報源は極めて多かった。軍事スパイの点については、30年代初めには、昔からの競争において、ОГПУの2つの情報部は情報局に明らかに勝っていた。ОГПУの秘密解除されたスパイ情報を分析すると、1931年-1933年にはスターリンに属していたが。十分に印象深い様相が得られる。

1931年7月、モスクワの日本大使館で、有名な会合が行われた。日本のスパイと日露関係において歴史に残る出来事と思われた。大使の執務室で、広田大使、武官の笠原中佐と原田少将が会合した。少将はヨーロッパへ出張してきていた。満州への進出の準備に関連した特殊任務を持って日本の参謀本部から、陸路をやって来た、ウラジオストク-モスクワ急行で。会合は開けっぴろげであった、出席者全員は何の諍いもなく話し合った、あけすけに言いながら。会合の後、笠原は2つの文書を作成した。彼は忘備録を書いていた、広田大使の意見についての。そして、それを日本の参謀本部の上司に送った。2つめの書類は報告の概要であった、原田少将に提出する。それには武官が自分の意見を語っていた、ソビエト連邦における状況について、その軍事力について、最も重要な、日本とソ連邦の間のあり得る戦争の展望について。

ОГПУに引き入れられた日本の武官の職員は書類を撮影した。写真のコピーは特別局に届いた。そこで、翻訳した。12月31日まで局に放置されていた。年末に、満州への日本の侵攻が北を向きながら広範なものになるということが、明らかになった時、スターリンは明らかに、日本の将来の計画について、日本のアジア大陸における作戦について自分のスパイからの情報を要求した。ОГПУの指導部は1931年12月19日、特別局の持っている情報を彼（スターリン）に提示した。帯同された手紙は次の文章で始まっていた：「ソ連邦との戦争に触れている、極めて重要な本物の日本の資料に目を通すこ

とを個人的に願う。」書類には「極秘、日本語からの翻訳文」の印が押されていた、

明かであった、職長（スターリン？ ＊）にとっては、ソ連邦に対する帝国の戦争について、これは日本の計画に関する最初の詳細で深刻な書類であった。彼はそれを非常に注意深く調べた。多数の書き込みから判断すると。その後、書類は特に重要な物として、彼の個人的な書庫に収められた。そこに、1998年まで置かれていた、秘密解除される時まで、研究者達が手にすることができた時まで。

最初の書類は、1931年7月1日付の広田大使と原田の会合のレジメであった。この短い書類は全部を引用する価値がある。

広田大使は、日本の政府の政治に関する自分の意見を日本の参謀本部の長に伝えるよう頼む：

「ソ連邦と戦争を開始する必要があるのかないのかという質問に関して、私は必要であると見なす。ソビエト連邦との関係において、断固とした政治の道を日本がとるためには、何時でも戦争を開始する準備をしておくこと。この戦争の枢要な目的は、共産主義に対しての日本の予防だけではなく、ソビエトの極東と東シベリアの領有にもある。」

参謀本部の長へ語った大使の意見で、彼を信任し、正常な外交関係を維持している政府との戦争の必要性については注目に値する。スターリンはそこに下線を引き、数値1を書き入れていた。

将軍に提出した笠原の報告の要約は、スターリンの多数の書き込みから判断するならば、同じように、注意深く読み込まれ分析された。

報告書の最初の章で、ソ連邦における状況の一般的評価が為され、特記されている：「ソ連邦では現在、社会主義建設の五カ年計画を精力的に為されている。この計画はソ連邦の来たるべき発展の基礎となっている。この計画における中心は重工業にあり、特に、産業部門で、国の防衛能力の強化と関連した・・・」

第2章では、ソ連邦の軍事力の状況を分析している。武官は国の軍事政策の評価をしている。

原則的にソ連邦は侵略的ではない。軍事力は自己防衛の原則から組織されている。ソ連邦は干渉に危機感を感じている。外部からの恐れの際時の布告は内政の一つの手段になっていることの判断。住民の注意をそらす目的を持っている。完全にもっともである。が、干渉の恐怖が基本的な刺激となっている、ソ連邦の軍事力の拡大において。

外交官パスポートを持った日本のスパイは、極東地方における情勢について自ら評価をしている：「現在、極めて好都合となっている、我が帝国が極東問題の解決に取りかかるためには。ソ連邦と国境を接しているヨーロッパの国々（ポーランド、ルーマニア）は、今は、我々と妥協できる可能性を有しているが、この可能性は年を追う毎に次第に弱まって行くであろう。」すなわち、この行はスターリンが下線を引いていた、彼が注意深く報告を読んだ時に。笠原は適当な時を利用し、平和な道で自分の目的を得る事を試みる提案をしていた。明かだ、彼は手ごろな価格で沿海州を第一に購入することを考慮していた：「もし我々が今、戦争の準備を貫いて、極東問題の解決に取りかかるならば、我々は戦争を開始しないで目的を得ることができる。予想に反して、もし戦争が起こるならば、戦争は我々にとっては苦難ではない。」



将来、他人の土地を購入する、という似たような提案が日本の新聞の頁に現れた、その時には、ソ連邦からサハリンの北部を購入することを提案していた、適度な値段で。もちろん、報告の文章はスターリンのためを予定していなかった、その作者は怖い夢を見ることはなかった、ソビエトの書記長は彼と懇意であった。これ故、提示することができた、指導者が何を感じたか、当時、巨大な国の独裁者が、この文章を読んで。余白に、それに対する彼の書き込みがあった：「つまり、我々はそれまで干渉で脅かされる、全ての愚弄を飲み込んで？」 銃剣と軍艦の大砲によって補強された「購入」という笠原の提案はスターリンを酷く気に触らせた。著者の一人が数百頁の書類を古文書館で見た、スターリンの机の上に載せられていた。そのような情緒的な反応にであわなかった。

歴史的視点から、そのような報告をどのように評価するのか？ 単なる武官、スパイで参謀部の職員である彼の提案は、都合のよい状況を利用し、戦争を始める場合において、ある程度、参謀本部の指導部の視点を表現した。日本の将校団は常に好戦的であった、北の隣人との関係において。ロシアにおける国内戦時期での失敗した干渉後、何も得ることもなく、恥を持って島に帰還し、損失を計算し、この攻撃性は新しい力を持って燃え上がった。ソビエトの極東への干渉は、日本軍の最初の敗北であった、その創設以来の。軍の将校、特に関東軍の参謀部の将校は、雪辱を果たすことに燃えていた、適当な時期を選んで。

その時期がやって来たと、武官は感じた。報告書で彼は自分の意見を明けっ広げに書いていた。訪問している国の状況について意見を披露することは、彼の直接の任務であった。多くの国の武官達は同じような評価を与えていた。参謀本部或いは人民委員会の長へ、ソビエトの武官の報告まで研究者達がたどり着いたならば、同じように、極めて明けっ広げに語られている多くの物を見いだせるであろう。

笠原は一人ではなかった、話したい希望に対して彼を余り厳しく判断してはならない。その上、1931年、これは希望だけであった、その実際における実現まで、日本軍の拡大と強化に関する大変な仕事をこなさなければならなかった。当代の言葉で表現し、報告は何か意向についての議事録のようであった—それ以上ではない。しかし、今日の評価、当時似たような表現は違ったやり方で評価されていた。

1932年の重要な報告は、1月29日に外国局長アルツゾフによって、スターリンに出された。報告書の最初の頁に、「フランスの参謀本部の第2局の活動と計画」の表題を持った。アルツゾフの手で書かれていた、「スターリン同志へ。参謀本部のある部局と関係した、再び注意を引くエージェントの報告。」 明かである、フランスの参謀本部の一人の将校を仲間にする事ができていた。彼は自身の最初の報告で参謀本部の活動について情報を与えた、ヨーロッパにおける出来事に関係した。

3月19日、この情報源から、2番目の報告が為された。それで報告されていた：「貴方に知られている情報源との最近の出会いの結果、以下のような補足情報を得た・・・」

明らかに、参謀本部の結構な高官である情報源は、この時、ワルシャワを訪れることができ、そこで、ポーランド軍の参謀部の指揮官ゴンシオロフスキイ将軍と会合した。会合で、ポーランドの将軍は彼に伝えた、1931年の秋に、日本の高位の将校グループがワルシャワを訪問し、ポーランドと日本の参謀部の間で書類上での合意が結ばれたと。ゴンシオロフスキイが指摘した、「この合意に同意して、ポーランドはポリシェビキの力を自

分の方へ引き寄せる準備があることを約束した、日本がソ連邦の領域に侵攻し始めた時」。O Г П Уの次席代表バリツキイとИ Н О長官アルツゾフが書類に署名をした。

もし、沢山の書き込みと下線から判断すると、スターリンは得られた書類を非常に注意深く読み込んだ。既に言われているように、これが二人のスパイが彼に送った情報に関しての、書記長の特徴的な態度であった。得られた書類の例外無い念入りの審査、最も重要な場所の下線、余白への書き込み。全ての得られた情報を自分の個人的な書庫に保持、政治スパイから得られた各々の書類に、左上隅に彼の個人的な決済：「私の書庫へ。ヨシフ・スターリン」。3月19日付の情報には、ポーランドと日本の参謀本部の間の合意の妥結について文を書き加えていた。明かである、彼にとって、これは西と東からの共同の戦争の恐れの可能性についての初めての情報であったことは。もちろん、この情報と、ヨーロッパとアジアの2つの国の間の同盟の締結の可能性を研究し、ソビエトの外交は、1932年夏のソビエト-ポーランドの不可侵条約の締結を冗長に進めた。スパイの情報とソビエト外交の積極性の間の相互関係性は明かであり、疑念はない。

2月28日、スターリンのデブールには、O Г П Уの定期情報が置かれた。同伴した手紙にはO Г П Уの次席バリツキイが署名していた。書類の最後には付記があった：「特別局へ」。今回は、モスクワの日本大使館でスパイが活動した。バリツキイはスターリンに、1931年3月29日付のモスクワにいた日本の武官笠原幸夫が書いた本物の書類に目を通すように願い出た。東京の参謀本部宛の書類の標題は、「帝国の軍事手段に関する意見、ソ連邦に対抗する」。バリツキイが書いていた：「笠原は参謀部の若手将校団に属している。その頭目は荒木将軍と橋本将軍である。参謀部のロシア局長、最近の日本軍内の政治指導者の内の一人である。この公的書類で、笠原幸夫は満州占領開始の1年前に参謀本部に提案していた、ソ連邦に対する戦争を直ぐに開始できると。

スターリンは非常に注意深くこの報告を読んだ。個々の文章や句を強調する、沢山の下線、強調場所の番号付け。彼は書庫から広田大使の要約のある前の書類を引き出した。笠原の報告から2つの部分を付け加え、1932年に大騒ぎとなった「イズベスチャ」の記事のための資料を得た。戦後、東京裁判で、この書類はソ連邦に対する戦争への日本の準備の証拠として、ソビエトが告発した。

報告の第1章「日ソ戦争の局面におけるソ連邦関係の政治について」から、彼は文章を抜き出した。それを数字2で印を付けて：「・・・日本とソビエトとの戦争、ソ連邦の軍事力の状況と外国政府の状況に注意して、できるだけ速やかに対応しなければならない。我々は自覚しなければならない。時が進むにつれて、状況は彼らにとって都合が良くなっていくことを。私は必須であると見なしている、帝国の政府はソ連邦に対する戦争をできるだけ早急に始める意図を持って政治を行うことは。」

第2章では、日本の武官は検討していた「ソ連邦との戦争に関係した第一の課題」を。ここに、スターリンは数字3を書き入れ、スターリンが強調したい文があった。

全くあり得る、粉碎と急速の終局の我々の戦略にもかかわらず、様々な条件下で、我々は戦争をしてはならない、立案された作戦計画に完全に従って。我々の軍事作戦の最終段階で非常に重要な問題が起きている。もちろん、我々はバイカル湖まで軍を進める必要はある。西への更なる進撃については、これは全体の状況によって決定しなければならない。その時点で形成される、特に、政府の状況に、西から攻撃をする。もし、我々がザバイカル鉄道線に留ま

るならば、日本はザバイカル地方と極東を占領しなければならない、帝国の完全な占領地として。この領域には、我が軍は屯田兵制度で配置しなければならない、十分に長期間にわたって。我々は次を準備しなければならない、この占領を実現し、事件の更なる進展を生き延びる可能性を有するために。

・・・日本がソビエトの極東部での戦争によって、ソビエト連邦に致命的打撃を与えることが難しいことを考慮すれば、我々の戦争の重要な時期の一つとなるのは、戦略的な宣伝である。その方法によって我々は、ソ連邦との戦争に西側の国々とその他の国々を引き入れなければならない、ソ連邦の内部からの崩壊を引き起こさなければならない、ソ連邦内外の白軍グループ、外国人、全ての反ソ分子を利用する手段を用いて。ソ連邦の最近の状況は、これらの連結を為すことに非常に都合が良い。

彼によって注記された全ては、「イズベスチャ」の記事の基礎となった。帯同された手紙へのスターリンの決済：「手から手へ。政治局員に（各々別々に）政治局に戻す義務を持って。スターリン。」。「読了した」の単語の下に並んで、ボロシロフ、モロトフ、クイビシェフとヤゴダの署名。疑念はない、「イズベスチャ」の記事は政治局の決済の元で出されたことは。

日本の書類の抜粋からの「イズベスチャ」の3月4日付の社説の公刊は、東京とモスクワの日本大使館に強烈な衝撃を起こした。笠原は直ぐに理解した、彼が公刊の「英雄」になったことを。軍事スパイのような熟練したスパイにとって、これは重大な見込み違いであった。出来事を軽減するために、彼は4月7日に、参謀本部のスパイ局長に第21として電報を送った、それで伝えた：「貴方から郵便で送られてきた秘密書類が途中で開封された疑いがある。特別な秘密書類は他の方法で送るように貴方をお願いする」。武官は正しかったのか？ 特別局は彼の書類の写真を得たのか？ 東京裁判でソビエトの弾劾によって提示された。モスクワの日本大使館内の自分のスパイからか、或いはモスクワウラジオストック急行での外交袋の開封からか、は良くわかっていない。近い将来には、真実が明らかにされるのであろうか？ ФСБ(?)\*)中央古文書館は自分の秘密が保たれることを期待している。

熟練しているスパイの笠原は理解した、スパイ活動は全ての方面から主たる敵に対抗しなければならないと：極東だけではなく、南方も、アフガニスタンとペルシアを利用し、ヨーロッパも。これ故、彼は帝国の軍事諜報局に提案した、ヨーロッパの国々からソ連邦に関する情報の収集に従事するだけではなく、第一にプリバルチク、ポーランド、ルーマニア、ソ連邦に対抗する政治的結びつきを行うことによって。彼の意見に従えば、外交官と一緒にスパイは全ての可能なことをしなければならない。日本とソ連邦との戦争時には、衝突時に我らのヨーロッパの隣人を引き込むために。このために、彼は提案した、ルーマニアにおける武官の職務を、職員の対応する定員を持って。自分の意見を報告書に書いて、笠原は見なした、政治連合の活動においてルーマニアは大きな価値を持っていると。とにかく、「ソビエト連邦との戦争の場合において、ルーマニアはポーランドと同じように、我々に対抗する赤軍の活動を釘付けにする。ソ連邦に対抗する我々の作戦計画から、我々は十分に知る必要がある、この国の状況を、ルーマニア軍についての正しい理解を持つ必要がある」。

報告書に目を通して、スターリンは注意を向けた、帝国の武力の更なる発展についての編に。武官は2種の案を考察していた。最初は、何時でもソビエト連邦との戦争の準備を

しておくために、その目論見を持っての軍事力の組織化。2つめは、10年間で軍の武装計画を完遂するために、帝国の国防分野において段階的に欠陥の除去。そして、再び書記長の鉛筆が報告書の最も大事な文章に下線を引いていた：「問題は、どのような指令が採用されなければならないかというところにある。もしソ連との戦争が早くに開始される場合には、最初の提案が採用される必要がある。2番目の提案を採用することができる、もし、ソ連邦との戦争の正確な時期が定まらない場合には、我々は考慮に入れなければならない、現在或いは少し先に、日本との戦争において、大規模な軍事作戦を展開する可能性をソ連邦は失うであろう、」。

1932年6月に、スターリンは休暇に入った。モスクワの「主人のところに」、ラザリ・カガノビッチが残留した。彼は定期の政治局会議を主催した。バリツキイの新しい手紙は彼宛となった。それで伝えていた、本物の日本の文書を伴った翻訳文を補足として送ることが。横取りし解読したメモが国の政治指導部に提供された。それはモスクワの新しい日本の武官川辺とベルリンとワルシャワの日本の武官の間のメモ。同じように、イスタンブール、モスクワ、ワルシャワ、リガの日本人武官の会議の決定も。外交官パスポートを持っている日本のスパイ達はソ連邦に対抗するスパイ活動の活発化に関する課題を審議し、彼らの見解を暗号電報で、日本の参謀部の第2局長（スパイの）に送った。この電報は同じように横取りされ、解読されて、政治局に送られた。これら書類の束の中に、モスクワの日本の武官と関東軍参謀部の間の解読されたメモがあった。ロンドンとモスクワの日本の武官の東京への電報、参謀本部の司令官補当ての。

カガノビッチは得られた全ての資料を読んだ。帯同させた手紙に決済を下した：回して、政治局委員カガノビッチへ」。政治局の会議の一つで、出席者全員が資料を目にした、添付文書にモロトフ、ボロシロフ、オルジェニキゼ、アンドレーフ、カリーニン、ミコヤンの署名が為された。その後、資料はスターリンの個人書庫に送られた。

政治局員にとって、最も価値があり意義を有していたのは4月19日付の616番の電報であった、関東軍参謀部長から川辺宛ての。この電報は横取りされ、解読された。それには、満州の状況とソビエト国境について分析が為されていた。伝えていた、その時期、ソ連邦は北満州で日本との軍事衝突を企むことはない。電報には書かれていた：「関東軍は政治的にできるだけソ連邦との友好関係を確立することに努めるであろう。ソ連邦をじりじりさせる方法を自制するであろう・・・」 情報は極めて重要であった。軍の参謀部長のような価値ある情報源から出てきていたので、若干のソビエトの政治と軍事の予想、1932年には戦争はないであろうとの情報は証明した。

モスクワでは安堵のため息をつくことができた。得られた情報から明かである、国境を越え、ソビエト領内に侵攻することは、日本側にはないことが。このための軍事力は関東軍にはその時にはまだなかった。ソビエト国境を侵した場合に対する徹底的な反撃をする、期待される軍事力はOKДВАには無かった。この当時には、極東軍の強化が始まったばかりであった。その完了まではまだまだ時間がかかっていた。

スターリンの個人書庫の開示の仕事から判断して、政治スパイの書類は1933年に現れた。もちろん、これはИНОの全情報ではなかった、書記長の机の上に置かれた。スターリンは自分の書庫に最も価値があり興味のある情報だけを納めた。それを常に手元に持っていたに違いない。他のスパイ情報は注意深く目を通した後、それを提出した局へ逆

に返送した。

1933年5月19日、スパイの仕事を管理している、OГПУの次席ヤコフ・アグラノフがスターリンに提示した。東京のイギリス大使の3つの報告書を、フォリン・オブイスへの、スパイ活動で得られた、明らかに、ロンドンへ。1933年1月5日、東京のイギリス大使デインドレイが報告書で自分の意見を述べていた、日本の戦争準備について。

イギリス大使の手紙に、東京のイギリス武官の軍事材料の生産に関するメモが添付されていた。彼はそれで、「完全に信頼できる情報源から得られた」情報を利用して、確認した：「・・・、私は意見に達している、今日の活動と再編制に関する決定は、日本軍の、主たる目的としてロシアに対抗していると・・・」これらの文章はスターリンによって下線が引かれていた。政治スパイによって得られた、これらの書類の最後には、ИНО長官アルツゾフの署名があった。

ジョン・サイモン（？ ＊）宛の大使の2番目の報告は1932年12月9日に書かれた。陸軍武官と海軍武官との会合の後、大使はソ連と日本の間の戦争の可能性について自分の意見を述べた。この際、彼は注意を向けた、帝国の陸軍指導部と海軍指導部の間の見解の違いに。もちろん、この不一致において何の新しい物はなかった、それらは良く十分に知られていた。しかし、今回は、それらをイギリス大使が話した、さらに秘密文書で、スパイを経由して得られた。それ以上に書類にはスパイの長官アルツゾフの署名があった、この専門家の意見に、ボスは耳を傾けた。これ故、彼の鉛筆は大使の報告書の大事な部分に下線を引いた。

もし軍について話しをするならば、東京で情報に通じた武官の中では、一つの意見が存在している：日本の軍部は確信している、遅かれ早かれロシアとの戦争は不可避であると。

<・・・> 海軍司令部は他の見方を堅持している。現在、ロシアは海軍は極めて弱い、日本海軍の潜在的敵と見なすには。

1933年11月26日、アグラノフはスターリンに東京のアメリカ大使ジョゼフ・グループの報告書を提供した、9月14日にワシントンに送った。そして、再びスターリンの鉛筆が報告書のあの場所に下線を引いた、日本とソビエト連邦の間の戦争の可能性について語っているところに。大使の報告書中からの抜き出しである、そこに彼が注意を向けた：「しかし、今や、彼らはロシアに対する進撃を準備している・・・」；「東京はソビエト連邦を戦争へ挑発することを試みている、アメリカを刺激することなく・・・」；「私は既に何度も貴方に伝えている、世論はロシアと日本の衝突は不可避であると見なしていることを・・・」

スターリンの机の上に置かれた、彼の決済された政治スパイの書類を知ると、下線、書き込みから、彼が注目していたことを知ることができる。興味以上に、彼にとって極東で何が重要であったかを。彼にとって日本との相互関係に主眼があったと言える。もちろん、スパイの解読した書類は明らかに不十分であった、一つの結論を出すには。それどころか、極東地域の問題に触れた情報局の分析概観が知られていない。どのような概観、もちろん、スターリンに彼らは報告した。情報局は分析の仕事で有名であり、ベルジンの補佐であるニコノフが指揮していた。全ての知られていることから、調査員達は主要な結論を

出すことができていた。スターリンにとって、この年における日本との戦争の恐れが基本であった。

多分、このために、スターリンは、彼に報告のあった全ての書類中で探した、もちろん、日本との不可避の戦争についての彼の確信を裏付ける物を見つけた。彼の側からのどんな和平案など―彼は東方に政治を定めただけ―全く問題にならなかった。ロシア帝国の昔の名誉と力を復興させ、西側で失った大地を欲望を持って眺めながら、独裁者は東側を忘れることはなかった。しかし、そのために、1905年の戦争後に失ったものを、逆に得るために、日本との新しい勝利の戦争が必要であった。30年代前半に、そのような戦争の準備はソビエト連邦はしていなかった。日本、特に、広大な長さに渡ってのソビエトの極東国境にぴったりとやって来た、軍の高級将校団は新しい軍事挑発を引き起こすことができた。

1932年に、情報―上級軍事指導部とまず第一に人民委員ボロシロフによって、ОГПУ（合同国家保安部のちのКГБ）が手にした―は大きな価値を持っていた。そこから送られた全ての書類は彼の秘書のところで、特別なファイルに入れて保管された。6月23日、ボロシロフは東京からの暗号電報を得た、それはモスクワの日本の武官宛のものであった。それは関東軍の部隊配置について伝えていた。この日に、人民委員会に課題が伝えられた、日本の参謀本部のスパイ局から日本の武官川辺中佐によって得られた。中佐に問題を調べるように命令していた、ソ連邦空軍の拡大に関連した―組織系統、飛行機とエンジンの技術データ、空軍の軍事戦術を。6月10日、人民委員会に、ソ連邦に関する日本の参謀本部の広報が送られた、1932年4月と5月付の。同じく、ソ連邦に関する日本の海軍参謀部の報告書も、極東におけるソ連海軍の強化に関する東京で得られた情報のある。

極東における赤軍に関する若干の情報は、1932年4月25日付の「ソ連邦における軍事広報第32号」にまとめられた。この書類の翻訳文は「極秘」と「記録に基づいて」の印を押され、ボロシロフに特別局から送られた、6月10日に。防諜機関員達はてきぱきと仕事をした。価値ある情報が人民委員会の机の上に並べられた。この報告には、完全に示されていた、イルクーツクからウラジオストクまでの全領域におけるソビエト軍の人員と配置が。

モスクワの外国の外交代表団は、極東地域の軍事政治状況の変化を注意深く目で追っていた、自分たちの予想を出し、自分たちの判断を語り。もちろん、お互いの話し合いで意見を交換し合った。

日本の参謀本部の「ソ連邦に関する報告 第4号」から

1932年2月22日付

モスクワにいるチェコスロバキア代表の言葉によれば、最近、ソ連邦の高位軍人グループでだけではなく、党グループでも、ソ連邦の権威を維持し、より強い政治行動をとという要求の聲がしばしば上がっている。この運動の先頭にいるのは：モロトフ（人民会議（CHK）議長）、ボロシロフ（HKBM）、エヌキゼ（著名な党活動家）。が、スターリン（実質的な独裁者）はかたくなな政策に反対している。国の全般的状況を見なし、5カ年計画遂行の理由から。

ОГПУから得られた戦略的特徴を持つそのような情報を1932年―1933年に

国の政治と軍事の指導部は握っていた。作戦「ラムザイ」が活動していた時である。現在では、正確に話すことは不可能である、似たような情報を我々の2つのスパイの指導部が交換し合っていたのかどうかを。しかし、そのような交換がなかったとしても、一つは疑いは無い：スターリンとボロシロフに報告した以上をベルジンは沢山知っていた。彼はそのようなわけで理解していた、日本の島でのスパイ作戦の実行において、そのような大収穫を期待してはならないことを。似たような成果（？ \*）、遠い将来に。

### **独立赤旗極東軍(OKДВА)参謀部スパイ局の活動**

極東における、1929年と次の年の東支鉄道での衝突時、大きなスパイ組織が作られた。OKДВАは任務において軍隊であった。実際において、30年代初めに、極東の国境線の強化が始まった時、ここは領域において、軍の量において非常に巨大な国境軍管区であった。ハバロフスクには、軍の司令部と参謀部があった、参謀部にはスパイ局があり、番号4でカモフラージュされた。PKKA（労農赤軍）参謀部の第4局に似せて。

ロシア帝国時代から、国境軍管区は隣国にスパイ・ネットワークを持っていた。このネットワークは250kmの深さの戦術帯の領域を調べ、国境守備隊と哨所における全ての変化を追跡していた。同じく、帝国の国境に向かっている鉄道建設の進行状況を注視していた。国境付近における軍の移動もスパイの監視の対象であった。国境地区の参謀部のそのような活動の結果、国境線で何が起きているか、良くわかっていた。国内戦の終了後、西と東における国境の画定後、情報局はこの確かな方法を武力として採用した、国境付近にいる敵対者の観察の。これは日常的なスパイ活動の普通の方法であった、平穩時の。このシステムは大量の情報をもたらした。それらはモスクワで検討された、戦略的軍事スパイの情報で補足しながら。時折、そのような情報が無いときにはそれに変わった。

OKДВА参謀部のスパイ局は例外を作らなかった。満州への日本の侵攻開始後、この地区に既に持っていたスパイ組織に、さらに新しいスパイネットワークを付け足した。日本の関東軍と朝鮮軍の強化と移動の監視だけではなく、アジア大陸における日本軍の機構への浸透を試みている。情報部局は非常に注意深く追跡した、全ての外国の出版物を。それらは満州、朝鮮、日本にある多数のソビエトの領事館から、ハバロフスクに到達した。全ての集められた情報は系統的に分析された、スパイ局の軍事政治広報部で。これはOKДВАの司令部を、第一にブルフェル（？ \*）を、極東地域での政治的軍事的出来事の事情に明るくさせた。

3月28日付の広報第3号に、スパイによって明らかにされた満州における日本軍の部隊配置が記されていた。東支鉄道の西線のハイラルに、第1騎兵師団が配置されていた。チチハル地区には、第14歩兵師団の一部と参謀部が。ハルビンには、第10師団の一部が配置されていた、師団の残りは東支鉄道の東線に、ムリンからソビエトと満州の国境線付近のパグラニッチナヤ駅まで。これらから混成部隊の中国のジェヘ地方（？ \*）への移動が特記されていた。そこで、当時、中国軍の一部との戦いがあった。

5月5日付の広報第4号で、満州における全般的な状況の評価が追加されていた。特記されていた、満州では現在、対日戦に決定的な価値を有するような深刻な組織力は無いと。

中国軍の全ての武装部隊は破壊され、或いはソビエト領域に追い出された。強調された、この状態は重要な時期を作り出していると、現在の軍事的政治的状況と、満州における日本帝国主義の外政の正しい評価のために。

日本の国際的状況と戦争準備の、更なる詳細な評価は報告書の次の号（1933年6月5日付けの第5号）で紹介された。そこで強調されていた、「最新の信頼できるスパイ資料に従えば、日本の軍指導部の一部は5月初めに考えた、東支鉄道の問題に関して、我々の要求が満たされない場合には軍事力に頼る可能性がある」と。スパイ局の意見によれば、そのような日本の反ソ活動は極めて増大する期待となった、ソビエト連邦の国際状態の悪化を。特に、日本の軍部はイギリスの支持があると見なした、ヒットラーの政変のあとドイツで強化された反ソビエトの雰囲気の利用において。

報告書で示されていた、ソ連邦の外交の孤立問題と反ソビエトブロックの組織化はまだ決定的であるとは見なせない。同じように見なされていた、日本軍部に確信が成長していると。ソ連邦の軍事力は増大しており、これ故、一対一でソ連邦との戦争の問題は日本にとって手に負えない物であると。これを理解し始まっていた、日本の軍上層部においてさえ。報告書には、情報が開示されていた、スパイの経路で得られた：関東軍司令部の將軍武藤は日本政府に妥当な視点を持って語った、ソ連邦は若干の国内の経済上の困難を生き抜いているにもかかわらず、その軍事力は疑いを挟む余地はないと。これ故、將軍は語った、ソ連邦に乱暴な圧力を加えることを避けなければならないと。外交手段で、それなりの段階で争いの問題を解決すること、満州における軍事力強化を続けること、軍事技術の手段の拡大によって。

この報告書で、特記されていた、4個師団の日本軍の増強が。満州のハイダル地方における創設、2個旅団からなる強力な騎兵隊の、騎兵砲兵隊、装甲車、機構歩兵隊。7月20日付けの報告書第6号には、満州における日本軍の再構築と配置についての話しが為されていた。4個の歩兵師団、1個の歩兵旅団と2個の騎兵旅団。日本軍はかようであった、OKДВА謀本部のスパイが明らかにしたのは、2個師団からなる朝鮮軍は部分的に強化され、増加されることなく以前の場所に留まっている。

スパイが特に注目したのは、満州の騎兵隊の編成であった。報告書からの引用文：「ザバikal方面に2個旅団の存在とモンゴル騎兵の創設は、この地方に騎兵軍隊を創設しようとする日本の意向を示している。現在、2つの騎兵旅団は、騎兵团参謀部を持ち、宇佐見將軍の統一指揮下で連合している。スパイ資料によれば、この年の秋に、満州で、日本から2個旅団が移動してくるであろう」。

諜報機関は全満州領域を監視下においた。認められた、第6歩兵師団の一部の日本への移動が、占領したジェヘ地方に日本軍の第8歩兵師団と混合旅団の存在が。1933年11月、ソビエトの軍事スパイの情報によると、満州に関東軍の一部として、2個歩兵師団（第10と第14）、1個の混成旅団、騎兵隊だけが残っていることが、それについてはスパイが報告した。あのような広大な地域に対しては、少なすぎる。日本の書類によれば軍の人員数は9万4千人、占領した国において政治的な役割だけを遂行するには。概して、極東地方において、軍事スパイは自分の課題を遂行し、定期的にOKДВАの司令部に通報した。しかし、もちろん、戦略情報の取得はスパイの手には負えなかった。そのため、特別なスパイ作戦を作成が必要となった、参謀部の軍事スパイの部屋で（ポリショイ



・ズナメンスキイ横町、19番)。

軍事戦略情報－日本の状況についての、その将来に蹴る侵略計画についての、アジア大陸における一第一に必要なるものであった。人民委員会の指導部で、労農赤軍の参謀部で、様々な手段を計画するにおいて、極東における武力の強化において。そのような強化は既に始まっていた、1931年から1932年の冬には。1932年にはどんどんと進んだ。正しい計画のために、似たような情報が必要とされた、空気のように。それ以上に、全ての時期が見逃された、満州占領の初期から、一年半が過ぎていた。実際において、似たようなスパイ作戦の計画は、既に1931年春には始まっていた、当時、モスクワで持っていた資料全てから、明かされた。アジア大陸への日本の侵攻は、すなわち満州への、中国のこの地方の占領は不可避であり、プリモリーエ、プリアムール、ザバイカルでのソビエトの極東部の国境線に日本軍は進出をしている。防衛されていない数千kmのソビエトの国境線は日本軍の標的となっていた。そのような見通しについて、ソビエトの軍事情報機関の指導部は考え込まざるを得なかった。

#### 労農赤軍(PKKA)参謀部第4局

どんな諜報機関のどんなスパイ作戦も、無駄な場所では始まらない。外交的な、政治的な、軍事的な分野における深刻な事件が必要である。それらは与える、作戦のアイデアの発生のための動機を、その考え方が定める。「ラムザイ」作戦は例外ではない。1931年9月19日に満州で始まった事件(柳条湖事件\*)は、この地方に全世界の目を引きつけた。ヨーロッパにおける戦争の開始までの8年前に、第2次世界戦争の最初の戦火がアジア大陸で燃え上がった。世界の強国の情報機関の耳は急に動き出し、爪を研いだ：イギリス、フランス、アメリカの。日本の情報機関は全力展開した。土肥原と板垣のような、その機関の代表者はアジア大陸に向かった。多人数のスパイを伴って。

「チョコレート色の家」－ソビエトの軍事情報局参謀部－で、事変を注意深く見守った。より正確な情報を得るために。中国諜報機関はリヒャルト・ゾルゲを利用した。が、明らかにはなっていなかった、事件がどのように拡大するのかが。南満州を占領した後、日本軍は西へ、中国のチャハル地方(?\*)へ展開することができた、中国の中央部への出口を得るために。この場合には、スパイ網を強化し、この国に新しい諜報機関を創設することが必要であった。もちろん、モスクワではそのような案を除外していなかった。大陸における日本の侵攻が北の方向に、ソ連邦の国境へ拡大するという。しかし、1931年の最終の月には、明瞭ではなかった。

1933年春に、満州に拠点を得て、ソビエトの極東国境への直接の出口を得た日本の情報機関は、積極的なスパイ活動と、国の極東地域への破壊活動を始めた。満州の大都市中の自分の支部を利用して。支部は軍事的指命の看板を隠し、満州の白軍移住者組織を指導した。その組織の人を自分のスパイとして利用しながら。PKKA参謀部情報局は、これら全てを知っていた。軍事情報局の指導者ベルジンと彼の側近達はわかっていた、日本の情報機関の活動が盛んになっていることを。作戦「ラムザイ」の実行が開始されたのは、まさにそのような状況下であった。

1933年では、軍事諜報機関の中央参謀部はどうであったのか？ この組織には、沢山の呼称があった。国内戦時には、軍事諜報機関を何食わぬ名称でカモフラージュしていた、登録局、或いは、当時受け入れられていた略称レジストウプロで。国内戦終了後の、赤軍の急激な縮小の期間には、局を抹消した。軍事諜報機関参謀部を縮小した、そして、PKKA（労農赤軍）参謀部に地味な情報局が出現した。1924年に、軍の改革が始まった時に、やり過ぎであることを理解した。そして、局を情報局内に開設した、略して、ラズベドウプル。1926年に、明らかに、秘匿をはかるために、PKKA（労農赤軍）参謀部の全ての局は番号に名称を変更した。ラズベドウプルは通し番号の4となった。この年から、参謀部に漠然とした第4局が出現した。そのようなカモフラージュは誰、外国の諜報機関ではなおさら、も誤解させることがなかったにもかかわらず、このあやふやな名称は1934年まで保たれた。しかし、看板の変更にもかかわらず、人民委員会の指導部で、上級の指揮官達の話しには、ラズベドウプルの名称は簡単に定着した。現代の研究者達によって、この名称はそのように受け入れられている。

局には5つの部があった。軍事情報、エージェント、情報統計、外国武官関係と解読の。同僚の一般的な人数は、技術的とサービスの人員も含んで、120人。しかし、これは正規定員である、それにさらに350人の秘密の職員、或いは「臨時」の職員が加わった。彼らは公式の書類に記録された。ベルジンの側近として諜報部部長ボリス・メリニコフと情報統計部部長アレクサンドル・ニコノフ。「特別委託」のための、さらにもう一人としてワシリイ・ダビドフ。彼らと一緒にあって、ベルジンは作戦「ラムザイ」の立案を始めた。

もし、ダビドフについて、誰かがゾルゲについての記事や本の中で書いていたならば、2人の部長については読者に何も教えていない。1つの記事や本でも彼らについて言及さえしていない。これ故、彼らの内の一人について少し話しておく価値がある。

ボリス・メリニコフは熟練の諜報員。情報局で20年代初めに既に働いており、極東、日本、中国、モンゴルに精通していた。この人物には素晴らしい経歴があった、酷い当時の基準に従ってさえ。1895年にザバイカルで生まれた。農民の家族として。小学校、実家学校で学んだ。1915年、ペトログラード工科大学の1年に入学した、造船学科に。しかし、1年後、彼は軍務に徴兵され、ミハイロフスク砲科学校に派遣された。彼はそこを1917年に修了した。この青年には夢があった、船を造るといふ。それについて彼は明けっ広げにアンケートに書き込んでいた。22年のロシア共産党ボリシェビキ派（PKП（6））の。しかし、更なる学習と自分の夢の実現の代わりに、彼はスパイの専門を習得することにした。2月革命の始まりから、ペテログラードにいて活発に活動した。1916年に入党した。学校を修了後、イルクーツクでの軍務に派遣された。そこで彼はイルクーツク軍労ソビエトの代議員に選出された。10月革命時には、ソビエトによって、イルクーツク守備隊の指揮官に指名された。彼の指揮の下、守備隊の軍隊は1917年12月に町の権力を握った。イルクーツクのための8日間の戦いの指揮に対して、1933年2月に赤旗勲章を授与された。勲章の推挙には、ポスチシェフ、ブリュフェル、ベルジンが署名した。

チェコ軍の蜂起の後、赤軍に入り、前線に向かった。国内戦が始まった。日本軍に捕虜

として捕まり、ハバロフスクの収容所に入った。1918年12月に解放された後、中国へ移住した。1年ほど中国と日本に住んだ。1920年初めに帰還した後、アムールで指揮をした。アムール前線参謀部のコミッサール、東部戦線革命軍事会議委員、第2アムール軍コミッサール、プリアムール軍管区の軍指揮官として。コミッサールの職務は諜報活動の指揮を偽装するものであった。白軍に対する、極東の日本占領軍に対して。

1922年の初めに、メリニコフはシベリア革命軍事会議の配下に転任した、そこで、情報次長に任命された。非常に高度な水準で軍事諜報の仕事が続けた。22年夏には、モスクワに、共和国情報局に転出する。軍事情報の中央組織は、熟練した人物が必要であった。戦争経験があり、教育があり、語学が達者な（メリニコフは英語が達者であった）、外国の情勢に、諜報活動の経験を有している。

当時、初めて、情報局の司令官次席ベルジンに出会った。彼は情報局の東方部門の指揮官に任命された新しい同僚であった。モスクワでのベルジンの指導下の一年は彼の経験を充足してくれた。あっという間に身につけた。1923年5月に、彼は自伝に書いている通り、「中国における秘密の仕事に出張」へ。

1924年春に、外務人民委員部（Народный комиссариат иностранных дел（НКВД или Наркоминдел））がメリニコフに興味を持った。極東部の主任は外交官としての役目もあった：教養、外国語に堪能、更にはこの地方の状況を熟知していること。外務人民委員部チチェルンがベルジンに話しかけた、諜報局の新任の長は自分の同僚に素晴らしい評価書を与えた：「・・・諜報機関で特に極東で1920年から働いている。個人的に、日本、中国、モンゴルを訪れている。研究し全ての関係を知っている。中国と同じように日本も。複雑な状況を良く理解している働き者であり、熱中もせず、虜にもならない。政治的にはしっかりしている。優れた労働能力と指導力」。しかし、これに際して、彼は付記していた、「貴方の機関への彼の転任の障害は以下の点にある、極東に関して彼に換わる者が我々にはいないことに。

能力があり熟練した者を、当時、外交官としても、諜報員としてもできていなかった。それに口を出した、ロシア共産党（ボリシェビキ）中央委員会の登録割当局が。ベルジンは中央委員に説明することになった、「情報局は人員に乏しい、他の機関のために人をさくことができない、共和国の興味がこれを要求しないならば」。しかし、とにかく、彼はこれを承諾した、メリニコフが極東局の長として一時的に働くことに、身につけた外交上の経験は彼の更なる諜報活動に役に立つと提案しながら。

メリニコフの外交的仕事は数ヶ月間続いた。1924年9月に、ベルジンは自分の同僚を戻すことを要求した。しかし、外交部は彼を自分たちのものと見なし、新しい有能な職員と別れようとはしなかった。9月8日、チチェリンは手紙を出した、中央委員会書記カガノビッチに。それに書いている：「諜報局は、我々のところから奪おうとしている、極東部の長メリニコフ同志を。私はこれに最大限の抗議をするだけでなく、貴方の協力を当てにしている。この仕事で貴方の助力を切に願う」。

ベルジンは「重砲」作戦を開始した、自分の管理人ウンシリフトを納得させ、中央委員会の組織割当局に向かわせることを。9月18日付の手紙で、人民委員会からのメリニコフの呼び出しに刺激を受けて、示した、「諜報局は、具体的な条件下で、西における職員の早急な交代が必要である、そのために、軍事的知識、語学、スパイとしての確実な経験

を持った人物を要求している。そのような人材は諜報局にはいない。軍は割り当てることはできない」。メリニコフをヨーロッパにおける大事な諜報活動に養成した、彼のために、ベルジンは最後まで喧嘩をした、中央委員会の要員に影響を与える手段を用いて。

今回、メリニコフの出来事は妥協で終わった。2年間に渡り、彼は外交官の仕事と諜報活動を兼務した、人民委員会外交部と諜報局で働きながら。1926年から、彼は外交官としての仕事だけに従事した、1928年～1931年まで、彼はハルピンで主領事、1931年には、日本でソ連邦の全権代表部の代理大使。しかし、ベルジンはメリニコフには諜報局に戻ることを期待していた。1932年初めに、そうだった。多分、彼は革命軍事会議の新しい次席であるヤン・ガマルニクの力と影響を利用した。多分、ボロシロフが助けた。メリニコフは「チョコレートの家」に戻ってきた、そこで彼は自分の仕事を始めた、10年も前の諜報に関する。十分に熟練し、外交官としての経験に富み、極東の問題に価値ある知識を持って、彼は戻ってきた。諜報活動を全くうまい具合に指導し、軍事諜報の極東部門を管理した。

作戦「ラムザイ」の計画時に、諜報局を指導し、この作戦の開発に直接参加していたのは、このような人物であった。

作戦の開発へのメリニコフの参加の書類上の証拠となるのは、1938年2月7日の調査時に出されたベルジンの自筆の証拠である：「・・・日本における諜報活動を組織する困難さに関して、私は彼（ゾルゲ著者注）を利用するという考えが生まれた。とにかく、極東状況に関して彼は詳しい。そこでは彼はジャーナリストとしての立場を作り上げていた。1932年末か、1933年前半に、ラムザイはモスクワに呼ばれた。日本における彼の仕事の可能性の報告と説明のために。彼は日本における仕事を完全に可能であると見なした（ドイツ人ジャーナリストとしての資格の元で）。成功は安全に保証されると。日本における非合法の諜報機関「ラムザイ」の組織化の計画の開発とゾルゲへの指令を、私が思うには、スパイに関する私の次長メリニコフが行った。日本の大都市（ここが地方より彼にとって生き抜くのに都合が良かった）の一つに、非合法の諜報機関を創設することがゾルゲの課題となった。そして、我々と無線通信を確立し、日本に関する軍事スパイを行うこと。

2000年9月25日に、ゾルゲを追悼する第2回国際シンポジウムがあった。ロシア側からの基調報告「リヒャルト・ゾルゲの真実の困難な道」を、ソビエトの元対外スパイであるコンドラチェフ大尉が行った。彼は60年代の初めに、ゾルゲに関係したГРУとКГБの書類研究に参加していた。ソビエト指導部への、1964年11月3日付の「ゾルゲに関する案内書」の準備で、シェレピン、セミチャスチイ、イバシュチンの署名のある。それを元に、ゾルゲの名前が復活し、死後にゾルゲにソビエト連邦英雄の称号が贈られた。

自分の報告で、コンドラチェフ（？ ＊）は諜報局とНКВД（内務人民委員部）の全書類を公表した。それらは以前には決して公表されていなかった。それらの中で中心的な部分をベルジンの証言が占めている。それは彼の調査の仕事と結びついている。それらは極めて正確にゾルゲとの関係を証言していた。政治と軍指導部側との、国を巻き込んだ全面的な精神病、疑惑、スパイ活動の時期の。自分の証言で、ベルジンは伝えていた：「ラ

ムザイ」の連絡（文書で）は、上海では特別な合い言葉を通じて行われなければならない、それにより、上海の諜報機関が情報を直すために。この諜報機関の組織化の期間は結構長かった。1935年に仕事の引き渡しの際に、私はウリツキイにこれを指示し、助言した。報告のためにラムザイを呼び出すようにと」。上海での合い言葉に関して、ベルジンは、ヤコフ・ブローニンによって指導されている諜報局の上海の諜報機関をほのめかしていた。

何故、ゾルゲの本ではメリニコフの名前が言及されていないのか？ 答えは主諜報局の職員が与えることができた。まさに彼らは1964年から1965年に最初のソビエトの諜報機関の「方式」を作り上げた。それについてソビエトの出版物が書くことを許可された。疑いはない、全ての新聞や雑誌の記事、同じく、当時書かれた本はこの組織の部屋で注意深く検閲されたことは。課題の「方式」に対応していない全てがそれらから飛び出した。ジャーナリストや作家に作戦「ラムザイ」の書類のファイルが渡されたと考えるのは幼稚である、自分の仕事で利用することが彼らに許された。これただ90年代に許されるようになった。そして、特に諜報機関「ラムザイ」の組織化に触れた書類の束は現在まで埃をかぶったままになっている。

メリニコフの名前は、当時は、所定のイデオロギー図に書かれていなかった。彼をオスカル・スチッガで置き換えていた一東方問題に全く疎い人物として、作戦「ラムザイ」の開発にも。1931年から、スチッガは諜報局の科学技術諜報部を指揮し、ヨーロッパの大国で働いた。そこに自分の確固たる地点と自分の諜報網を作り上げて。十分にあり得る、彼がドイツにいるゾルゲに何らかの支援をしたことは、この国における自分の可能性を利用して、それ以上ではない。しかし、私は見なしている、当時、援助者とソビエト軍諜報局の指導部の仲間を示す必要があった。ベルジン一人ではできなかった、相談することもできない、意見を交わすこともできない、誰とも相談することもできない、この複雑な作戦を開発するにおいて。そのような独創性において、「年配者」を当時さえ信用しなかった。気のあった仲間集団を作り上げるためには、スチッガとダビドフの名前は逆に導いた。

その年に、メリニコフの名前を挙げたならば、ジャーナリストや読者に彼に更なる運命についての疑問が起こったであろうことは、確かである。言っておかなければならない、当時、諜報局での仕事の後、彼はコミンテルンの国際関係部に異動した、党諜報局にある。この秘密の部局、部局の輪転機の存在は、国家機密として当時保たれていた。このようなわけで、ゾルゲが1925年から1929年まで働いていたことを、臭わせるようには書かなかった。経験ある非合法活動家としてOMCの指導者ピヤトニツキイの推薦でベルジンのところに移動したことも。部屋に閉じこもった学者としてではなく。ベルジンは将来の才能ある諜報員として彼を見抜いていた。

1933年には、満州は日本軍によって完全に占領された。2つの力の武装対立が始まった。日本はアジア大陸に橋頭堡を造った、アジアでの支配のための将来の衝突を準備しながら。「独立」政府の領域に、飛行場を造った、本国から千機の飛行機を受け入れる能力のある。新しい軍事都市は帝国の軍師団を受け入れることができた、日本の島から移動させた。新しい鉄道線と道路幹線はザバイカル、アムール、プリモリアに延びた。

アムールの対岸では同じことをしていた。タイガに飛行場を建設した、そこへ、ソ連邦

のヨーロッパ地区から戦闘機と爆撃機の部隊を移動させた。建設した軍事都市に、国の他の地区から移動してきた歩兵部隊と騎兵部隊が配置された。シベリア鉄道で、新しい軍事技術のある大部隊が東へ移動した。国境における戦争の場合における諜報活動の便利さのために、鉄道支線や砂利道が施設された。

2国間で秘密の競争が進んだ、大競争が：飛行場、兵舎、道を次々に造っていった。軍事技術と軍隊を次々と集中させていった。この地域の武力のバランスが誰の利益になるかに、これは依っていた。この競争においては島の帝国が勝っていた。ソビエト連邦は1932年にはまだイニシアチブを持っていた、軍の強化を努めて、特に、満州軍との競争において軍事技術で。このイニシアチブを1945年8月まで自分の手から出すことはなかった、ソビエト-日本戦争の一斉射撃がなり始めた時の。極東における強力な軍事打撃の創出においてソ連邦の優位性の理由の一つは、次の点にあった。日本は他人の国境線のところに橋頭堡を造り占領地に軍力を増強したが、ソ連邦は自分の地に、自分の国境に軍力を増強していたことに。

これらの条件下で、モスクワは日本について全てを知る必要があった。これ故に、「ラムザイ」作戦開発において、ゾルゲグループに課される基本的な課題が定められた。この課題の目録は、彼の刑務所でのメモに沿ってのみ知られている。その際、課題の統合と一緒に、1933年初めに作戦の開発時に設定され、1935年夏に決まった。諜報グループの仕事の開始から1年半後に。その時には、東京での状況は全く違っていた。正確にはわからない、最初のどのような課題が定式化されたのかは。その後、中央がグループの仕事进行分析した時、どのようにしたかメモはない。ここではただ予想を語るしかない。

1964年に、「P Y」の指導部の指示により、「ラムザイ」作戦に関係していた元の同僚達が、ゾルゲと作戦についての追想記を書いた。当時これら全ては書庫に隠された。2000年になって、大幅に削除された追想記の一部分は、選集「リヒャルト・ゾルゲの仕事」として出版された。最も充実していたのは、大量の在庫資料を利用して書き上げられたシロトキンの回想記であった。軍事諜報に従事していた地味なこの人物については、幾つかの言葉を述べる価値はある。

ミハイル・イワノビッチ・シロトキンはカルガで生まれた。ロシア人で農民出身。1920年からPKKAに入った。1931年まで、軍隊で司令部、經濟部、参謀部での職務に就いていた。その後、軍アカデミーの東洋学部に入學。そこを1934年5月に修了。直ぐに諜報局が彼を引っぱった。1936年10月まで、彼は局長の助手と第2局（東方）の秘密代理人の仕事をした。その後、ほぼ2年間、日本軍で交換留学生として日本語を勉強した。1938年7月にモスクワに戻り、諜報局第2部の日本語科長に任命された。ゾルゲグループを監督し、諜報機関の指導に参加した。しかし、数ヶ月後に逮捕された。その時の罪はありふれたものであった、日本軍で修学していたので、日本のスパイであるとの。銃殺はされなかった、が、服役した。1954年に解放され、翌年に名誉回復した。

彼の手を持っている書類を調べて、シロトキンは次の結論に達した、「東京に諜報機関組織化の計画（1933年）、創設の決定的な目的と諜報機関の全般的な課題、その組織化の事前の略図を述べる、目を付けた対策のリスト、何の特別な書類によっても記録されなかった。局の書庫にある書類（メモ、組織の手紙、指令、その他）の比較だけが、再現

する可能性を与える、事前の計画の全体の様相を。その後の発展の様相を。諜報機関の組織化の、予定した手段の実際の実現化を追跡する。」

上海を訪れて3年後、ゾルゲは、他の者達より早く、特に、モスクワの戦争指導者達より、見聞して理解した。強くて狡猾な敵を、当時は日本であった、研究しなければならぬと、敵の穴に入り込んで。このようにして、東京に強力な諜報組織を創設するアイデアが生まれた。最初、ゾルゲのアイデアはベルジン宛の手紙に書かれていた。が、1932年の彼のモスクワへの帰還後に、詳細にわたり検討された。

ベルジンとメリニコフは、「ラムザイ」作戦を、実験的なものとして立案した。日本には、ヨーロッパの強国と違って、諜報局の非合法諜報機関はなかった。それを創設する初めての者にゾルゲはなった。ジャーナリストとしての隠れ蓑で。作戦の可能性を探らなければならなかった、日本の島とウラジオストクの間の無線通信を準備しなければならなかった。現地の住民からなる諜報網を創設する可能性を確かめる必要もあった。もちろん、これには多くの時間が要求された。モスクワでは早急な成功は期待していなかった。というのは、これらの方法は、日本の特別な条件において初めて実現することになるので。

ゾルゲは個性を持っていた。日本での差し迫った仕事の要求と条件を満たすための：活発性、決断力、狡猾さ、広い交際を獲得する能力、特に、ジャーナリストと軍関係者との、素晴らしい専門的な下準備、ジャーナリストとしての、幾つかのヨーロッパ言語の自由な使用力。これに、コミンテルンでの5年間の外国での仕事経験と3年間にわたる中国における非合法諜報活動が付け足されるならば、日本における非合法諜報活動の仕事にとって、全くの適任者となろう。

もちろん、ゾルゲはドイツの新聞の特派員として日本で働く。ナチスの立場で発言することができた、帝国に献身を示しながら。しかし、こうなった以上は、シロトキンが判断していた通り、「ベルリンの危機」があった。ゲシュタポは親ナチズムの傾向のあるジャーナリストに興味を持ち、20年代の政治古文書を調べ尽くした。そのようなあらしの結果は、ゾルゲにとっては極めて不都合であった。が幸運にも、そうはならなかった。しかし、そのような可能性は、「ラムザイ」作戦の開発では考慮されていた。例外とはしなかった、ゾルゲが上海での失敗の結果で日本の或いは他の対諜報機関に感づかれたということ、日本への直ぐの渡航は監視下に置かれるかもしれないことを。作戦の開発にはこれら全ての危険を考慮した。それらを中和するために、決められた。新聞に掲載される記事のそれなりのスタイルと政治色は、できるだけドイツ警察の注意を引きつけない用にならなければならないと。ナチ党员としてのドイツ人ジャーナリストの立場は、ドイツの「傘」の下で動いている、たまたま日本の防諜組織に状況をもつれさせるであろう、上海でのゾルゲを記録していたとしても。

ドイツ警察と日本防諜機関側からの危険は、モスクワではあり得ると見なしていた。最もあり得、殆ど不可避の恐れは、ゾルゲの上海における活動の情報が持ち込まれる可能性であった。上海と東京の間におけるドイツ人の連絡は非常に密であったので。ベルジンとメリニコフは、諜報組織の創設の計画において、この危険を考慮したのであろうか？ シロトキンは全ての書類を十分な注意を向けて研究した。彼は次の結論に達した：「ラムザイが「上海の危機」に関して、何らかの指示や指令を受けた、ということを確認させる何

の書類もなかった。上海におけるラムザイの以前の活動の説明のための伝説が作り上げられた。東京のドイツ人達がそこから何か情報を得た場合に備えて。この問題がゾルゲと中央指導部の視点外に残ることを許容するのは困難である。もし、何らかの怠慢の結果で、これが審議されなかったとするならば、信用することは難しい。ラムザイ自身が考えなかったと、より以前に自身のために作り話と行動の戦術を、もし上海から東京へ”泥の飛沫が飛んでいくなれば”。これは深刻なリスクであった。それは深刻な結果を招きかねなかった。ゾルゲは何度か中央に、「上海で彼を脅している大いなる危険について」注意を促した。そして、その後、ドイツ大使館との確実な連絡を獲得し、彼は明らかに最終的に自分の行動計画を具体化した。そして伝説に。

ナチス党への入党の際、ゾルゲは自分の経歴を書くことになった。上海における自分のジャーナリストとしての仕事を書いた。急進的左派活動家との関係、特に有名な人物、アグネス・スメドレイのような、共産主義的新聞「チャイナ・フォルム」との協力関係。これら全てが知られていた。上海からやって来た、生きた証人、充分であった、ドイツの武官の同僚オットー、ベネッケル、ショールとの会議で、上海におけるゾルゲの活動はもちろん審議された。これらの条件下では、彼の側からのどんな隠し事もただ不信と猜疑を呼び起こすだけであった。これらの条件下で、彼にとって明らかに残っているのは一つだけであった。以前の活動を否定しないこと。それを作り話としてごまかすこと、現在のナチス的視点と大使館における協調を一致させること、ナチスドイツの、彼の上海の期間における活動をもった。

ヒトラードイツから東京にやって来て、ゾルゲは、大使館の職員との会合で、新体制に完全に合致する視点を述べた。これは、彼をファシスト支持のジャーナリストのイメージを作り上げることをさせてくれた。課題とした目的—確実な公認の獲得—への第一歩を歩ませてくれた。1934年の初めに、武官エイゲン・オットーと親しくなり始めた。オットーにゾルゲは非公式的なサービスを示した、情報部門で。ドイツ大使ヘルベルト・ディルクセンと海軍武官パウリ・ベネッカーはオットーを見本として見習った。ゾルゲはこの3人を「耕作する」ことに成功した。これが彼に実りをもたらした。ゾルゲがナチス党に入党することを要求された時、彼ら3人はゾルゲに大使館の側からの肯定的な評価を与えた。彼の有効で熟練した情報活動についての評価を。

「ファシスト組織外にいては、自分の安全が図れないと、私は認識した時、大使館経由で、ナチスの現地組織に入ることに、私は成功した」。これは1935年7月の、中央への報告からの抜粋である。「大使館経由で入党した」という表現は、ナチス党への受け入れのゾルゲの声明がディルクセンとオットーの推薦によって裏付けられたことを明らかにしている。よく語られているように、上海における自分の急進左派的活動の問題について、ゾルゲは無視しなかった。それはジャーナリストとしてのものであったと語って。必要な人物と懇意になるために利用したと、彼に興味がある情報を得るために。自分の共産主義的視点をナチズム的に変更することを直接に述べるのが彼にはできた。1934年に、ドイツにおけるファシストの民衆扇動の成長の波の中で、数百人の коммуニスト達がナチス党に入った時、それは全くの本質的なことのように見えた。全般的な「上海の危機」において、諜報活動において決定的価値は見えなかった。

「ラムザイ」作戦の最初で基本的な課題となったのは：「満州事変（1931年9月1



8日 ＊)の後、ソ連邦に関する日本の政治をしっかりと監視すること、日本はソ連邦への侵攻を計画しているのか、という課題を注意深く調べること」。ゾルゲは見なした、これらの課題の遂行が、彼の日本への出張の目的であると。これは確信となった。1935年に2度目のモスクワ訪問時に、諜報局の新局長ウリツキイが同じように重要性を強調した、この課題の真っ先の遂行を。モスクワでは、大きな不信を持って、ソ連邦の関係における日本の政治に態度を取っていた。1931年9月19日以降、日本の軍部、第一番に関東軍司令部の役割は帝国の外政において極めて大きくなった。彼らの承諾無しで、一つの外交的解決の合意を得ることはできなかった。

ソ連邦との関係において、日本の計画の攻撃性を、モスクワでは疑うことはなかった。この計画の実現のために、強力で現代技術で武装された軍が必要であった。が、30年代初めには、帝国にはそのような軍はなかった。満州の占領開始後、直ちに日本では、空軍力、軍の機械化と自動車化の発展のプログラムが開発され実行が開始した。このために、1933年に「ラムザイ」に提示された、第二の基本課題は、1935年に再確認され、：「ソビエト連邦に向けられるであろう日本の陸軍と空軍の再編成と増強について注意深い観察の実行」。これらの課題の遂行のために、秘密の軍事情報を得る必要があった。その可能性は、1934年にはゾルゲにはまだ無かった。これ故、そのような課題を指示することができたのは、多分、1935年夏に。モスクワの2度目のゾルゲの訪問時に。グループの成員が拡張された時、秘密情報を得るための可能性はゾルゲには、より大きくなっていった。

ゾルゲの情報は、帝国の全般的軍事の基本的問題に関係していた。満州の拠点と関東軍に関する資料は断片的であり不完全であった。しかしこの情報は大量の諜報による資料を上回っていた。それら資料は、独立赤旗極東軍（OKДВА）参謀部の第4局の戦術諜報員の情報源からハバロフスクにもたらされていた。戦術諜報網は満州と朝鮮全てを覆っており、人員、武装、これらの地方における日本軍の配置をハバロフスクに知らせていた。これを確信するためには、1934年—1935年にOKДВА参謀部の一連の報告書を見ることで十分である、情報局局長ガイリスによって書かれた。

ゾルゲの大事な課題の3番目は、日本とドイツの関係の研究と分析であった。ヒットラーが政権にたどり着いた後、より密接になるに違いない。1933年初めに、作戦計画を立案している時、余りにも早かった、ソ連邦に対抗された、これら2国の密接関係を予想するには。この問題に関して、ドイツ大使館で具体的な情報を得られる可能性は同じように見えなかった。1933年には、ゾルゲはまだ大使館に近づく手段を持っていなかった。明らかに、課題は1935年の夏に設定された。将来において2つの侵略国の密接な接近を誰にも疑われなくなった時に。しかし、当時、この課題には諜報関係だけではなく、ベルリンと東京における我々の外交官も取り扱っていた。その際、外交官は自分の上層部にだけ報告をしていた。諜報関係は国防人民委員会の指導部にしていた。そのような2重の情報は、より正確で価値のある諜報情報を与えることができた、ゾルゲから送られてきた。

4番目の課題：「中国に関する日本の政治についての証拠を常に集めること」。他の言い方をすると、ゾルゲが中国で行っていた、諜報と分析活動の継続。が、既に新しいポストで、日本の位置から。モスクワでは見なしていた、日本とソ連邦との相互関係は多くのところで、この巨大な国に関して、帝国の政治がどのように進展するか依存している。

この政治の複雑さと2国間のあり得る衝突は、決して除外されなかった、北と西からの大陸への日本の侵攻の急転換を意味した、極東の国境線での恐れ軽減。日本・中国問題はゾルゲは良くわかっていた、彼の調査の継続によって、彼は直ぐにでも日本への出立に取りかかれた。全くあり得る、この課題が確定され、1933年には既にゾルゲに伝えられたことは。

5番目の課題は、イギリスとアメリカのとの関係に関する日本の政治の分析であった。30年代半ばに、日中紛争の開始まで、モスクワでは、日本とソ連邦との戦争の可能性を信じていた。イギリスとアメリカの支持の元で。特に、1935年—1936年における国境紛争（どんな？）\*の後、そのような危機があった。1937年8月後、日本の侵略の矛先は中国側に向かっていた。モスクワではわかっていた、イギリスとアメリカの支持の元で、極東への侵攻の恐れはさらに先の延びたということ。しかし、1935年には、これは問題となった、極東地域の状況が非常に危うくなった時に。

6番目の問題となった：「不断において監視すること、日本の外征方針の決定への軍の役割を、軍におけるその兆候をしっかりと注視しながら、内政に影響を与えている・・・」この問題の設定のタイミングはわかりやすく出現した。1936年2月26日、東京での軍事ファシストの決起後に。よく知られている、日本軍は重要な役割を果たしたことが。日本の政治全領域で、特に、外交において。これは非常にモスクワを恐れさせていた。そのような不安の原因は、露日戦争から始まっていた。日本軍の指導部はロシアを見なしていた、その後には、ソ連邦をアジア大陸における自分の真の敵対者であると。1933年に、この問題が出てきた時、諜報局では予想していなかった。1941年に帝国の政治の舞台に他の強力な軍事力である海軍が出てくることを。

ようやく、最後の7番目の問題は重工業の発展の観察であった、第一番目に、軍事工業。陸軍は新しい軍事技術の装備は不十分であった。そのような技術の発展している国であるイギリスやアメリカ、フランスやドイツからは日本は大きく立ち後れていた。自動車工業、トラクター工業、同じように飛行機、戦車、大砲の生産力、の発展は極めて弱かった。これ故、軍事工業の発展をまず第一の重要性とした。モスクワは知ることが非常に大事となっていた、将来の戦争において、満州の現地で、どのような軍事力を持って極東師団と衝突するのかを。

「ラムザイ」作戦のために起案された問題はそのようなものであった。もちろん、7つの課題全部の遂行をグループに委ねることは最初のうちはできなかった。仕事の量は余りにも大きかった。が、グループは少人数。最初に決められた2年間の期間（西側の著者の主張に依れば）は不十分であった。諜報プログラムの7点の内、ゾルゲが書いていた、1933年には3点以上はなかったと。残りの点は、仕事を開始して半年後により追加された。その時には、グループの成員は他の者となり、ゾルゲの仕事の条件はよい方向に変わっていた。

ゾルゲが作戦の開発時に出会った人たちの幾つかの言葉を、自分のメモ帳に彼は書いていた：「党の中央委員会のラデクはベルジンの同意を得て、私の訓練に加わった。この際、中央委員会において、私の旧友であるアレクスに会った。ラデク、アレクスと私は長い時間をかけて、日本と東アジアの全般的政治および経済問題を検討した・・・」その時、カール・ラデクはB K П（6）中央委員会の国際情報局の局長であった。この機関に、

全ての国際情報が集中されていた。モスクワに届いた、TACCチャンネル（「印刷のためではない外国情報の広報」）を通すなどして。同じように、人民委員会から。レフ・ボロビッチはラデクのところで働いていた。責任ある書記として。彼ら二人は非常に情報に通じた人物であり、国際問題に非常に詳しく、驚くに値はしない、彼らと話をして、ゾルゲは非常に詳細な情報を得ることができたことは、極東や日本に関する問題の。

### **始まり：登場人物と彼らの仕事の方法について若干の説明**

1933年11月6日、横浜湾の埠頭に大洋定期船「エムプリス・オフ・ラシャ号」が係留された。タラップを、軽く足を引きながら、立派な紳士が降りてきた。海洋警察の係官に第三帝国のパスポートを示した、リヒャルト・ゾルゲの名の。諜報グループ「ラムザイ」の指導者が日本の地を踏んだ。

日本に、高いクラスのジャーナリストで国際関係人がやって来た。もつれた国際関係の詳細に詳しく、最新の歴史と世界の強国の外政にも。この人物は、素晴らしい理解力を持った学者であった。しかし、この人物はスパイの専門家でもあった。1933年当時に既によく理解していた、自分が新しい国で何をしなければならないのかを。

リヒャルト・ゾルゲの「獄中記」から

私の確信は、次の点にあった。日本における我々の諜報目的の成功した遂行について考えるならば、全ての問題を深く理解する必要がある、我々の使命にどの程度関係しているかにかかわらず。私は常に思っていた、そのような状況下にいる人間は、情報の単純な収集に満足してはいけなく、全力を傾けなければならない。彼の個人の活動に関係を有している問題の完全な理解を得るためには、疑いはない、自身に関する情報の収集は非常に大事な仕事である。しかし、私は見なしていた、最も大事なことは、資料を分析し、広い政治的視点を持って価値を与える能力・・・結果として、常に一貫して日本の問題を分析する必要性が生じた。

しかし、そのような分析の仕事のためには、広い知識が必要であった。中国における3年間にわたる仕事の後、極東問題の知識を持ってゾルゲは日本にやって来た。極めてしかりとした、が不十分であった。これ故、逮捕される日まで、彼は志向し続けた、彼が今生きている国についてより多くを知ろうとして。この結果はどのようなものか、彼の「メモ帳」に表現された結論は：「日本での仕事の遂行中に、私によって得られた知識は、ドイツの大学で私によって得られたものに、何一つゆづらなかつた。1933年秋には、私は日本の問題の詳しい調査に移行した・・・」

これらの問題の研究はどのように進んだのか？ 日本に関する全ての科学的文献を集めた。個人書庫には、ゾルゲが逮捕された時には、約千冊の本があった。様々な問題に関係した、日本に関しての。大使館の図書館や大使の個人蔵書を利用し、同じように、東京の東アジア・ドイツ協会の図書館も。そこには非常に多くの科学的文献があった。しっかりした日本の雑誌からの翻訳が依頼された。全てを注意深く分析することに集中した。日本についての彼の知識に何かを追加してくれるようなものを。もちろん、日本の問題の一貫した研究を。このことについて彼は書いていた：「私は日本の古代史について研究した。

政治史を、経済史を社会史を。得られた知識は、現代における政治と経済の問題を分析することを助けてくれた。これ故、私は農業問題を詳細に研究した。その後、軽工業と重工業の問題に移行した。そして、最後には重工業に・・・」 諜報活動の間、全く新しい手法、それについては30年代にはどの防諜機関も気がつかなかった。ゾルゲは良くわかっていた、諜報活動においてしっかりした結果を得るためにはそのような方法でのみできることを。これ故、驚くことはない、彼の「メモ帳」で次の文章があることは：「忘れてはならない、中国においての、後になって日本での私の諜報活動は、完全に新しいものであった。独自で、創造的特徴を帯びていた」。

全ての問題に十分深い知識を基礎とした諜報活動におけるこの方法を、西側で認識し始めた。ゾルゲに関する本が現れた時に。センセーションを湧き起こした本「世界の偉大なるスパイ達」の著者イギリス人作家チャールズ・ウایتンを非難してはいけない、ゾルゲへの愛だけではなく同調で。チャールズはソビエトのスパイの優越さを認めざるを得なかった、ゾルゲの仕事の方法において。彼によってゾルゲに与えた評価表は：「どのような尺度も彼に適用できない。彼は秀でた人物であることを認めないわけにはいかない：非凡な知性を付与された哲学博士、ドイツ語、英語、フランス語、ロシア語、日本語と中国語を完全に熟知していた。各国に詳しい熟練した専門家、そこで彼は諜報活動に従事することができた。疑いはない、ゾルゲはあらゆる分野で大きな成功を為したことは。彼が選んだ分野で。すなわち、これ故に、彼は比類なき諜報員となった」。告白は極めて雄弁である！

西側で50年代に明らかになったこと。30年代初めには、ゾルゲは良く理解していた。諜報活動への独創的な手段、全ての問題の注意深い研究を基礎とした、諜報に関した、基本問題の科学的分析に、当時は新しかった。当時、世界の偉大な諜報員、マントと短剣の原理を布教している（？ ＊）、アラブのローレンスの伝説、極東のローレンスとして土肥原賢治（アジア大陸における日本の諜報の指導者）の伝説が生きていた。北中国でのその冒険に世界中の出版界が大騒ぎをした。頭がよく、多くの知識を持ち、多言語を身につけた土肥原はまさに自分の才能とエネルギーをひっそりと政治的陰謀、誘拐、破壊工作、殺人に注ぎ込んだ。彼はゾルゲの正反対の人であった。驚くには値しない、隠れた一騎打ちで、日本におけるソビエトの軍事諜報機関との、「大陸性勤務」の指導者は壊滅的な敗北を被った。ゾルゲの注意深い調査の仕事は直接に関係を有していなかった、諜報の情報を得ることにおいて、同時にこれを助けた。

#### リヒャルト・ゾルゲの「監獄記」から

私は確信していた、私がいる政府の全ての問題に完全に通じている資質は絶対に必要であると。今は日本に。そのような調査の仕事を実現しながら、あれやこれやの問題の重要性を私は評価することができた。あれやこれやの出来事を、ソビエト連邦の外交の視点を持って、政治と歴史の視点を持って、言葉の広い意味において・・・。 ようやく、自分の調査の仕事の御陰で、私は必要な情報を集めることができただけでなく、それを正確に伝達することができた。自分の独自の評価を政治的、経済的、軍事的視点を持って状況に答えられる状態に私はいた。

「ビスバデン」（？ ＊）に送られた電報に含まれた作戦の情報以外に、急使によってモスクワへ届いた。政治的、経済的、軍事的内容を持った様々な問題に関する詳細な報告

書が。すなわち、そのような報告書の作成のためには、ゾルゲが日本で行った調査の仕事は、評価しきれぬ価値を持っていた。

#### リヒャルト・ゾルゲの「監獄記」から

軍事問題に関する報告書と同じように、私は外政、国際問題に関する報告書も作成した。それらに、短い文章や分析を納めた。重要な出来事の進展の、相応する報告書が送られた後に。全般的な情報と私の調査の仕事の結果に支えられて。私は正しく、客観的に全体の様相を描き出すことに努めた。変化する基本的な出来事の状況と発展の。大変な苦勞を要求するそのような報告書はあり得なかった。もし、深い調査の仕事がなく、深い知識がなければ。

ゾルゲは自信を持って述べることができた、彼は日本にやって来た初日から逮捕されるまで取り組んできた国の研究と調査の仕事が、高度な要求を完全に満たす助けになったことを。モスクワから提示された重要な出来事の分析と評価の質において。自分の仕事に関するそのような関係は、日本と極東問題に関する優れたジャーナリストとしてだけではなく、諜報の専門家としてより完全のものとしてくれた。

ゾルゲに引けを取らないのは、彼の同僚である「ラムザイ」グループの尾崎秀実とブランコ・ブーケリッチである。秀でた知識、広い交際をゾルゲは持っていた。同じく、調査の仕事への情熱も、言語の知識も。諜報活動の成功のさらにもう一つの根拠が。各自は適材適所にいた。そこで結果の最大を与えることができた。利用の最大値をもたらすことができた。グループにおけるそのような力の配置、各担当者の可能性と特性全てを考慮した。もちろん、ゾルゲが行った。大いに、うまく諜報の仕事を手助けしてくれた、長年にわたって。

素晴らしい結果を与えた、1つの諜報活動の特徴について話しておく価値がある。価値のある情報を得ると、彼らは決して用いなかった、西側のスパイのやり方を。偽の書類、恐喝、脅しのような。取り調べや裁判で一度ならず彼らによって強調された。全ての諜報員達は自分の固有の姓名で働いた。彼らの書類は本物であり、自宅の住所は多くの知人が知っていた。自分のジャーナリストとしての仕事を、彼らは完璧にこなした。ゾルゲは極東における優秀な外国人の特派員として見なされ、尾崎秀実は中国と日本に関する素晴らしい日本のジャーナリストと見なすことができた。

ブランコ・ブーケリッチはジャーナリストで写真報道家。1933年2月に東京にやって来た。ユーゴスラビアの新聞「ポリチカ」と、フランスの雑誌「ビ」の特派員として、フランスのガバス通信社の協力者として。フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語の知識、素晴らしい博学と広い知識は、短期間に彼に多くの知人を獲得させてくれた。それらの知人の中に、イギリスの武官フレンシス・ピゴット、ロイターの素晴らしい特派員マイクル・コクスと「ニューヨーク・ゲラルド・トリビュン」のジョゼフ・ニューメンがいた。彼はイギリス、アメリカ、フランス大使館の個人客となった。そこで価値のある政治情報を得ることができた。ブーケリッチにとっての最大の情報源は、同盟通信社であった。この通信社での彼の仕事をゾルゲは評価した：「・・・ブーケリッチは通信社にニュースを届けることができていた。それは通常の手続きでは検閲のため公開されなかった。このようにして、日本における政治状況の進展に通じ、政府の立場を知ることの可能性を有した。ブーケリッチは不断においてフランス人といろいろなテーマで話し合いをした。カバス通信社の支局で働いている人達からあれやこれやの情報を得ていた・・・。支所はフランス

大使館と関係があった。ブーケリッチは大使館との接触も維持した。我々は大いに興味を持っていた、全般的な情報と同じく、基礎的な情報にも。それらを、ブーケリッチはこの大使館で得ることができた。

尾崎秀実はジャーナリストで、中国における朝日新聞の特派員。その後、この新聞の編集局員となった。財閥である南満州鉄道の調査局で働いた。近衛が政権に就いた後、中国問題に関する非公式の首相の助言者となった。中国問題に関する秀でた専門家。このテーマに関しては本の著者であり、雑誌や新聞への記事の著者。彼の反軍国主義的視点は、ゾルゲには秘密ではなかった、中国では。尾崎の世界観は変わることはなく、彼の視点は以前通りであった。彼との会合の後、ゾルゲは電報をモスクワに送った：

「尾崎と連絡を取った。基礎的なチェックの後、再び彼を仕事に引き入れることに決めた。彼は非常に頭が切れ、信頼できる人物である。大新聞で大事な地位に就いており、非常に沢山の知人を持っている」。日本人のジャーナリストが、「ラムザイ」グループの一員となった。ソビエトの諜報員の初めての援助者。

中国に関する突出した専門家。彼の意見を近衛首相は取り入れた。彼は極東の軍事・政治問題全般についての基本的知識を得た。実際において、近衛はしばしば尾崎に助言を求めた。尾崎は自分の意見を述べた、それを詳細に基礎づけながら。この際、政治活動で、高い地位で従事している彼には、何の疑念も生まれなかった、中国の専門家が何らかの政府の秘密を探り出したがっているとの。逆に、信用されていた、尾崎はより詳しく知っている。彼らが審議しようとしている問題に。知っている全てを出して並べた。これは熟練したジャーナリストの情報を得る手段であった。そして、尾崎はそれに長けていた。そのような会合で価値ある軍事・政治情報を得るといふ。リヒャルト・ゾルゲはそのような方法を利用した。日本の全般的問題に関する大使館の職員の質問に詳細に返答し、自分の意見を十分に裏付けし、ゾルゲは彼らから重要な情報を得た。汚いやり方に頼ることなく。会合の時には、大使館の各職員は「日本に関する優秀な特派員」を前にして博学を披露したがった。知っている全てを漏らした。

# 第3章

## 組織化の期間

### 1934年-1935年

そこで、軍の形（態勢）をとる極致は無形になることである。無形であれば、深く入り込んだスパイでもかぎつけることができず、知謀すぐれた者でも慮ることができない。その形に乗じて勝利が得られるのであるが、一般の人々にはその形を知ることはできない。人々はみな身方の勝利のありさまを知っているが、身方がどのようにして勝利を決定したかというそのありさまを知らないのである。だから、その戦って打ち勝つありさまには二度とはくりかえしが無く、相手の態勢しだいで対応して窮まりがないのである。

孫子。軍事論

（「新訂 孫子」、金谷 治 訳注、岩波文庫、虚実編（第6）の六より 訳者付記）

#### 「ラムザイ」が新しい呼び出しにでる

1934年が過ぎ去った、日本における緊張した仕事の年が。グループは最も期待される人物を補充した、日本人のジャーナリストである尾崎秀実を。彼は「ジョンソン」（ゾルゲの呼称の一つ \*）との共同を復興することに同意した、中国で1932年に絶たれていた。ゾルゲはドイツ大使館における立場を強化した。第一に、オットー武官との友好を深めた。同じく、新しい海軍武官パウル・ベネッカーとの友好関係も。1934年には、ゾルゲは積極的なジャーナリストと見なされていた。極東の件に関する専門家としても。すなわち、専門家として、ゾルゲは極東問題に非常に詳しくあった。デルクセン大使は彼に相談した、2人の武官について、東京のドイツ人界や大使館での彼の人気を助長させてくれた。デルクセンとの接触は、ゾルゲに価値ある情報を彼から得ることをさせてくれた。このようにして、1934年に、大使から彼は知ることとなった、「国際連盟からのドイツの脱退は、日独接近の第一歩となる」ことを。これは最初の情報であった、将来の日独軍事同盟の準備についての、ゾルゲグループが手に入れた。

「リヒャルト・ゾルゲの仕事・・・」の選集の中に、秘密解除された書類がある。それには、極東における状況の政治的価値が与えられている。デルクセン大使のこの政治的書類、第894号は1934年3月5日に、ドイツの外務省に送られていた。残念ながら、この書類について多くは知られていない：この書類がモスクワに届いた時、国防人民委員会の指導者の誰かに、その内容が報告され、そしてスターリンの執務室に送られたのか、或いは人民委員会に留まっていたのか？ これらについて、推測し、仮定を述べることでだけができる。論争の余地のない唯一のものは、書類の内容である。

書類の基本的な内容は東アジアにおける平和の維持の予想。大使は主張していた、この地域における平和の維持のために、日本の不十分な軍事準備と満州の状況が語っていると。この「独立国」では、ソビエト国境への鉄道線路の建設が終了していなかった。パルチザン運動は最終的に撲滅されていなかった。が、経済の発展だけは始めていた。大使は主張していた、日本とアメリカの衝突は近い将来には非現実的であると。日本とアメリカの

直接的な衝突のためには、彼の意見に依れば、客観的で主観的な前提が不在である。2国のどちらも戦争を欲してはいない。戦争を成功裏に進めることはできない。デルクセンは見なした、中国と日本の相互関係において何らかの一様性が達成させられた。それは近いうちに、日本の小規模の出撃で破られる。が、世界戦争とはならないであろうと。1934年における将来の出来事の予想は十分に正確であった。

大使の書類の基本的部分はソ連と日本の関係の分析に向けられていた。

ドイツ外務省への東京のドイツ大使フォン・デルクセンの政治報告から

東京、1934年3月5日

1934年—1935年に戦争の発生に至らなかった、最も基本的な理由、これは日本の軍備完了が未だであったこと。

「・・・」

もし、日本における完全な軍事準備のレベルが2、3年内に達成されるならば、これは殆ど満州に関してである。ここで得られた証拠に依れば、日本政府は満州に、一連の全般的な手段を講じた。ソビエト連邦との関係に関して国の戦略的状态を良好にしなければならない：北満州への戦略的鉄道の施設、同じ目的を持った軍用道路の建設、要塞基地の建設。これらの施設の落成は最低でも2、3年を要求するであろう・・・

このように、満州の拠点はまだ戦争の準備はできていなかった。未だ準備さえできていなかった。戦争は始まらない。ドイツの外交官の予想は、東京にいる最も事情に通じた大使によった。モスクワを喜ばせるものであった。

日本にいるドイツ武官オットーは、ソビエトのスパイの最も価値のある「収獲物」であったと全くを持って見なすことができる。ゾルゲの諜報活動において重要な役割を演じたこのドイツ人将校について、詳細に話す価値がある。

シロトキンはその調査において、彼について話をし、今では有名になったクルト・リスの本「総スパイ活動」を引用している。1941年にニューヨークで出版され、後になってロシア語に翻訳され、1945年春にモスクワで出版された。第一次世界戦争時に、ドイツの諜報機関の指導者バリテル・ニコライの運命において、それは悲劇的役割を演じた。この作品の著者の創作の根拠で、彼は逮捕され、モスクワに連行され、自分の人生をブチルスク監獄の一部屋で終えた。モスクワの墓地の一つの無名墓に葬られた。もちろん、60年代半ばには、シロトキンはこれについて何も知っていなかった。アメリカ人ジャーナリストの最終審での「告白」を真実と見なした。

クルト・リスの本では、日本におけるオットーの活躍に6ページを割いていた。シロトキンはそれを引用している、ドイツ人の武官について話をしながら。この本からの一文の抜粋が次である：「しかし、日本のオットーの訪問の真の鼓舞者となったのは彼の古い師である陸軍大佐ニコライであった。1932年から、ナカモ・サジョウと接触を維持し始め、彼は考えを話していた、ドイツと日本の諜報員は世界的な規模で互いに協力しなければならない」と。これはお決まりのアメリカのジャーナリストの嘘であった。

シロトキンは確信していた、オットーはドイツ諜報機関の古い職員の長、第一次世界戦争時には彼は、かなり知られた「当時ドイツのスパイの全システムを管轄していた陸軍大佐ニコライ」の密接な援助者であった。彼は書き残している：「どうやら、ヒットラーが



権力へ就くことに直接先んじた年に、オットーはニコライとの関係を維持したらしい、ドイツ国防軍の諜報部の再建と展開に関する秘密の活動を未だ彼の指導下におきながら。」シロトキンの表明は非常に興味を引く、1934年1月7日付の中央への手紙で、1年間日本軍に出張していたオットーとの知古を知らせながら、「ラムザイ」は彼を「右腕」と呼んでいたことは。ついでながら、我々の防諜機関が行った、モスクワでの尋問でニコライは断固として主張した、1918年に退役した後、逮捕されるまで、彼は何の諜報活動にも従事していないと。彼の履歴の最後の調査は、退役将校の証言の正しさを示していた。このように、多分、オットーはニコライと何の接触もなかった。彼は彼の指導下で何の秘密の活動にも従事していなかった、ドイツ国防軍の諜報機関の再編と展開に関する。

ユリウス・マデルはドクター・ゾルゲに関する自身の著作の中で、クルト・リスの本を挙げている、同じように沢山の情報源の中で。彼は書いている、参謀本部の中佐は公的に砲兵隊将校であり、名古屋に配置されていた日本軍第3砲兵隊のドイツ国防軍からの観閲者であった。実際において、マデルに関して、オットーは、ドイツと日本の参謀本部の接触を確立する際の仲介者なのかもしれない。もしそうならば、そのような仲介者の元でソビエトの諜報員の存在は大成功であった。参謀本部間の接触は、あり得る敵対者の、どんな諜報員にとっても特別な興味がある。諜報局も例外ではなかった。これ故、将来の詳細な接触の追跡は、ゾルゲの重要な課題の一つとなった。

さらに、マデルが書いている。オットーは1923年から将校の階級で、軍の「内政」グループで勤務した。アブベル（ドイツの諜報機関の一つ）に全く関係がない。彼は同じように断言していた、オットー—シレイフル将軍の右腕であった—はヒトラーの忠実な下僕であった。彼の信用のおける人物であった。この件について、マデルはさらにもう一つの本を引用していた、海軍少将ザハリアスの本「秘密の指命」を。1946年にニューヨークで出版された。この作品中の作り事は、クルト・リスのより少なくはなかった。デキンとストリは自分の本中で断言している、ゾルゲはオットーへの推薦の手紙を持っていたと、「テグリシュ・ルンドシャフ」のドクトル・ゼレルからの。もしこれが現実に一致するならば、彼らの間の緊密で信頼の関係は疑いを生じない。2人は戦争の参加者であった。ドイツの将校と特に良好な関係を作ることにゾルゲは努力した、中国においても日本においても。

ゾルゲとオットーの相互関係について、自分の回想記で、ヤコフ・ブロニン（1933年～1935年における上海での諜報機関の定置諜者）が書いていた。ブロニンは、シロトキンと同じように、主張している、オットー自身がドイツの優れた諜報員であったと。自分の回想記で、彼は協調していた、クルト・リスの本を引用しながら：「20年代に、（バリテル・）ニコライは特別な諜報の仕事から離れた、が、ヒトラーが権力にたどり着いた時から、元の専門職に戻った。新しいドイツの歴史研究所を隠れ蓑として働いた、その長として。ニコライはオットーの派遣の発起人であった、1933年秋に日本への。基本課題を持たせて、ドイツと日本の諜報機関の共同を整えるという」。

1934年春に、ブロニンが主張しているように、オットーはベルリンへ出発した。日本の諜報機関との関係確立と日本における政治状況についての報告を持って。数ヶ月後、彼は東京に戻ってきた、武官として。1934年1月7日付の手紙で、ゾルゲは初めてオットーについてモスクワに知らせる。彼との会合時に得られた情報を伝えている。明らか

に、1933年末には、彼らが知り合った時には、ゾルゲはオットーに助力を示していた。軍事視察官として日本での出張の総まとめで。更には、彼はオットーのなくてはならない政治助言者となった。武官の職務への彼の任命は、多くの点で、より好都合な印象をもたらした、ベルリンへの彼の報告がもたらした。ゾルゲのサーブから作られた帝国の軍事的政治的状況の評価は結構高評価を受けた。

武官となり、オットーはよく理解していた、彼に定期的に軍事だけではなく政治的報告と評価を要求することを。これ故、この職務を確保する可能性は多くの点で彼（ゾルゲ\*）に依存していた。ベルリンでは、極東における複雑な政治情勢について詳しい彼の意見を評価することになる。そして、ここでは、ゾルゲの助力と支援がなくては、オットーは何もできなかった。1935年には、ゾルゲは極東の政治状況をよく知っていただけではなく、自然にナチスのイデオロギーと言い方を身につけていた。オットーは疑わなかった、ヒトラー政権の志向と方針に完全に対応し、彼が政治的出来事の解釈を与えることを、

1934年には既に、ゾルゲは若干の書類の撮影の機会を有していた、ドイツ武官の目を通すために彼に渡された。フィルムは、伝書士の連結によって、上海の諜報機関を経てモスクワに送られた。明らかに、これは日本で得られた初めての書類であった。軍事諜報指導部が自慢できる、国防人民委員会とクレムリンの上層部に対して。それらの文書の内の一つが、スターリンの机にやって来た、1934年11月9日に。1枚目の紙の上に記されていた：「東京のドイツ武官オットーの文書の写真からの翻訳」。文書は7月30日付であり、ベルリンの海軍局長官ブリンクマン宛であった、ドイツ国防軍本省の。左側に、アルツゾフの手で鉛筆書きがされていた：「スターリン同志へ。同じくボロシロフ同志へも送付。34年11月9日、アルツゾフ」。上に鉛筆で書き込み：「スターリンの保管書類」。

報告は、内政と外政についての日本海軍グループの影響に費やされていた。報告書のテーマは緊急なものであった。もちろんゾルゲは、この秘密の報告の写真撮影の可能性を見逃さなかった。報告書で語られていた、6月末に、海軍司令官末次将軍が海軍参謀部長と海軍省に請願書を手渡した。それには海軍の60名の高級将校が署名をしていた。将校達は武装における権利の復帰を要求していた。他の海軍強国との対等さを基本とした。そして、ワシントン海軍条約の拒否を。

基本的な要求は次の通り、「内閣の編成による内政の安定化の復興、それは内部の動揺を除去しよう、買収できないものとなろう。期待され、綺麗で、十分に活動的な、危機を処理するために、全人民からの信頼を得た」。オットーが断言していた、「将軍のこの請願は、下部からの圧力の結果であった、海軍の若手将校達からの要求であった」と。彼の意見に依れば、「この請願の目的は、若手将校をおとなしくさせ、彼らの軽率な行動を抑えるためを志向してのことであった。他の言葉で言えば、息抜きをさせ、1932年5月15日の血の事件の繰り返しをさせないことであった」。

オットーの報告では特記していた、海軍の地位は大きな影響を持っていると、古い内閣の打倒と新しい内閣の形成において。海軍グループは元老院の寵臣宇垣将軍の指名を阻止し、前の首相の地位に斎藤を保持することに成功した。海軍省は新しい首相岡田将軍に自分らの作戦プログラムを委ねた。

注意深く報告を読み、スターリンは彼の付けた印から明らかなように、海軍の要求の一つにアンダーラインを引いていた：「・・・ソビエトロシアとの関係の改善、満州における鉄道問題の解決方法によって。と、サハリンにおける石油の利権の更新、その期限は1935年に満了する」。

全体として、これはしっかりとした概説であった（10頁にわたって）、帝国の状況を良く理解した上での。その作成において、武官は日本の印刷物を利用するだけではなく、秘密情報も利用した、海軍省から得られた。彼は明らかにそれと密接関係を有していた。驚くに当たらない、スターリン、もし彼による多数のアンダーラインから判断すると、は報告書を注意深く読み、それを自分の書庫に残した。書庫には確実な文書情報が収められた。

スターリンに報告された、軍事諜報員の2番目の書類（秘密解除されたものの）は12月8日の日付が付けられていた。これは海軍の報告書への付属文書であった。海軍の問題に関して武官の助手が作成した。書類はモスクワのドイツ大使館でスパイして得られたものであった。ドイツの軍事外交官が自分の日本の同僚（日本の武官である海軍大尉ナカシ？

＊）と会合し、極東における政治状況の自分の評価を彼に伝えた。日本の外交官の意見に依れば、「ソ連邦と日本との間の軍事衝突は、冬も次の春も待つに及ばない。もちろん、もし予想外の出来事が起こらないならば。両方とも平和を期待している・・・」。彼は見なしていた、両方ともお互いに仮想敵と見なしており、問題は未解決のままである、この恐怖心が実際の状況と相手の戦力の無知によって引き起こされているのか、或いは何らか他の原因で。ナカシは会合で断言していた、この地域での平和は1935年の春までは保証することができる。事件の展開の更なる課程はわからなく不確かである。状況の評価は十分に楽観的である、特に、海軍将校がそう語ったということ、もし考慮するならば。日本海軍の興味はウラジオストクからは遠く離れ、南洋にあった。2つの書類は、スターリンに十分に明かな理解を与えた、日本海軍の役割について、国の内外政における。これ故、2つの文書は彼の個人書庫に残された。

今は、2つの文書だけが知られている、1934年に「ラムザイ」グループから得られた。疑わないことができよう、そのような文書は沢山あったことが、が、著者の推定だけに過ぎないとも見なせる。あり得よう、研究者達によって1934年から1935年におけるグループの新しい書類が明らかになるまでには、何年もかかる。

デキンとストリが書いている：「自分の役割の予備的で調査的な特徴を知りながら、ゾルゲはどんな価値のある情報を集めることができたのか、1934年と1935年前半に、第4局への伝達のために？ 答えは次の通りであろう：あり得る、情報は余り多くはなかった。が、情報は十分に信用できるものであった、第4局の興味を引きつけるのには。もちろん、ゾルゲの信用を抱かせるために十分であった。日本での諜報活動は十分に可能な仕事として」。

当時について、特記しておく必要がある。この期間、ゾルゲには大きな問題があった、中央との連絡において。彼の無線士「ベルンガルド」は大酒を飲み、しばしば自分の職務を放棄した。これ故、ゾルゲが主張しているように、彼は通信の半分も送信しなかった、モスクワへの送信のために彼に渡していたものの。デキンとストリが書いている、「1934年と1935年の6ヶ月間にゾルゲが得た諜報内容は、実質的に、文書士を使ってモ

スクワに送られた。ベルンガルドが担当していた無線通信は実質的に稼働していなかった  
ので。」

それにもかかわらず、先述したように、ベルジンは一定の不満を表明した、諜報機関「ラムザイ」設立の延びている組織化期間に。1935年にウリツキイに仕事を渡した時、ゾルゲを呼び寄せるか、彼を報告のためにモスクワに召還するように助言した

1934年初めに、参謀本部長（日本の？ ＊）は、ソ連邦に隣接している国々に任命している武官に送付した。ソ連邦に対抗する政治的戦略手段の遂行についての問題に関する考えの提供についての指令を。この指令に応じて、モスクワにいる日本の武官川辺は参謀本部長に報告書を送った、政治的戦略手段の計画について。書類は4月に東京に送られた、スタンプを押されて：「極秘、一部。番号3（4つのうち）」。

日本の武官は国際関係だけではなく国際問題も取り扱っていた、内政状況をじっと観察していた。書類には特別の章があった：「スターリンの政治敵」。この章には、書記長によってアンダーラインを引かれた節があった。

モスクワにいる日本の武官川辺の報告書より、日本の参謀本部長宛への

1934年4月

諜報のデータに従えば、トロッキストの残党とスターリンとの関係に反対の者は、地下活動を継続し、志向している、全ての障害を克服し、自分らと意を同じくする外国の同志達と接触するために。彼らの内の何人かは、第4インターナショナルのスローガンの元で、現政権を転覆し、トロッキーを評価する課題に取り組んでいる。スターリンの影響力は今や限界まで達しているにもかかわらず、それでもやはり、もし、将来において、何らかの部分で彼の政治が破綻を露わにするならば、彼の政治の遂行において故障が起こるならば。可能性は除外されない、遅滞することなく反ソビエトの機運が生ずることが。スターリンは巨大な政治に相応した長所を持っているが、同時に、彼は政治上の敵も持っている。政治的戦略手段の視点から、我々は全ての方法をとらなければならない。彼の政治的に最も影響のあるグループに白羽の矢を立て、そのグループと接触するために。これは全く不可能ではないと信じている。

疑いはない、これは唯一の書類ではなかったことは。それには語られていた、日本のこの場合において、潜在的に敵対者である諜報員はスターリンの政治的敵対者との接触を確立することとを試みた。これは「感謝の証拠」ではなかった、ルビャンカの地下牢で得られた、熟練した専門の諜報員の証拠は。もちろん、気づかなかった、彼の極秘の報告がクレムリンで読まれたことを。外国の諜報員の書類の証拠は政治的敵対者に対するスターリンの信頼を得ることはなかった、国の権力のために彼が戦っている者達の。

## ポーランド-ドイツ-日本同盟の展望

1934年9月5日、政治諜報員から情報が届いた。それで伝えていた、ИНО（外国局）がスパイ情報を得たと、「しっかりしたポーランドの情報源から」。情報源の名前は、もちろん、スターリン宛の報告書にさえ記されていない。最初の章で、ポーランド-ドイツ-日本の関係について語られていた。モスクワで入手できた情報から判断して、

3国の軍事同盟が志向されていた、ソビエト連邦に対抗する。これは大いにスターリンを不安にした。彼は注意深く報告書を読み、大事な箇所にアンダーラインを引いた。西と東でのあり得る軍事衝突の予想は彼を喜ばせなかった。ドイツとポーランドの接触の増大は危機を引き起こした。

情報源が、参謀本部長ゴンシオロフスキイ将軍（ポーランドの？ ＊）のところで得ることができた情報に依れば、「ピルストスキイが日本人（外務省を通してベクとゴンシオロフスキイに）に圧力をかけている、彼らがソ連邦を挑発するために、できるだけ早期に、活発に。しかし、次のためではない、日本とソ連邦との間の戦争を引き起こすためではなく、早急に、この年に。次のためである、フランスにおける親ロシアムードを弱め、フランスを極東における戦争の可能性で脅す、フランスに、ソ連はフランスにとって同盟国ではないことを示す」。

ゴンシオロフスキイは、明らかに、情報源との会合で断言した、ピルストスキイは7月に荒木将軍から手紙をもらったと。日本軍の将軍はポーランドの将軍に書いていた、日本人は戦争の開始を遅らせている、日本の空軍の状態故に、その強化のためには、日本は戦争を1935年3月まで待たなければならないと。将軍は伝えている、しかし、もしポーランドとドイツが、日本に約束を与えるならば、日本とソ連邦との間の戦争行動の開始後、次の日にソ連邦に対して彼らは侵攻するという、日本が十分に準備した戦争を、遅延なく開始するために。報告書には語られていた、10月に、ベルリンへ、日本の軍事使節がやって来る。1931年のポーランドー日本の軍事協定の検討のために、新しい協定の締結のために。ベルリンへ、この交渉の遂行のために、ゴンシオロフスキイが来るはずである、軍事使節を伴って。ドイツの首都が選ばれた、ワルシャワでは「輝かない」し、モスクワを警戒させないことで。

もし、報告書の量（タイプ印刷で16頁、末尾にИНОの長官アルツゾフの署名入り）から判断すると、情報源は極めてしっかりしており、ワルシャワで大きな連絡網を有していた。ポーランドとドイツの関係についての書類中の章に、スターリンはアンダーラインを引いていた、次のことが書かれている箇所に。7月27日、ピルストスキイとヒトラーの間で、新しい「紳士協定」が調印された箇所に。この協定の一つに合意があった：「フランスとソビエトの軍事同盟の締結の場合に、或いはフランスとソビエトの軍事協力の場合に、ポーランドとドイツは日本と軍事防衛同盟を締結する」。書類中の、この箇所にもスターリンによるチェックが為されていた。1934年秋、ソ連邦に対抗する3国同盟の危機が切迫してきた。政治諜報員がその同盟の可能性についての情報を、ちょうど良く手に入れることができた。

逮捕後の取り調べで、ゾルゲが語っていた（1942年3月4日付けの第37番調書）。1934年1月初めの日本への渡航の主たる目的は、ドイツ大使としてのデルケセンの、反ソビエトで日本とドイツの接近をはかることであった。しかし、デルケセンのこの努力は日本の外務省で特別な成功を得ることはなかった。同じ時、オットーは影響を示すことに努めていた、陸軍の参謀本部と軍事内閣の指導部に。若干の成功はあった。参謀本部における海軍武官ベネッケルの努力は好意的に迎えられた。日本とドイツの間の反ソビエトの軍事協力のアイデアは、日本海軍の指導部の受けは悪かった。デルクセン、オットー、ベネッケルから得た情報を基本に、ゾルゲは詳細な報告書を書いた。この報告書は上海を

經由した急使網によってモスクワに送られた。この年に、ゾルゲは尾崎と宮城から、反ソビエト政治についての情報を得た。日本の軍部の、軍内の「頑固派」グループの役割の高まりについて。この情報は、同じように急使を通じてモスクワに伝えられたが、1935年に裏付けられた。ソ連と満州の国境における挑発、事件、モンゴルと満州国境における軍事衝突、時折、大きな戦闘は示していた、軍の指導部が自分の北の隣人と対決を覚悟していることを。

### 「ラムザイ」がモスクワに行く

日本での仕事は1年半を経た。日本での2年間の出張が終了しかけていたので、総括をし、将来の展望を決めなければならない。1935年の春、ゾルゲは自分の使命についての報告書を準備し、モスクワに送った。グループメンバーの資質、ドイツ大使館での情報の所得の展望についても。ゾルゲは後になって書いていた、「私はモスクワに伝えた、私を協議のために召還すること、無線士ベルンガルドを良い人物に変更することを希望していたことを。1935年5月に、私はモスクワから指令を受け取った。戻るようにとの、延期しないで」。6月末に、ゾルゲはアメリカに出発した。アメリカを經由しフランス、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランドへ。7月にモスクワに戻った。

ゾルゲはモスクワへ妻と一緒にベルンガルドを送り出した。これで、彼らの作戦の参加は終了した。ソビエトの著者達はこの人物について何も書いていなかった。彼について、ゾルゲの西側での経歴について何も語るができなかった、第一にデキンとストリは。ユリウス・マデルは、ソビエトの情報源を基礎として、ゾルゲについての自分の研究を書いた、同じように、ベルンガルドのその後の運命については何も語っていない。東京における彼の不首尾の仕事は、ゾルゲの牢獄メモを元になっている。この人物のその後の運命はどうであったのかという質問に対する答えは、若干の古い書類を利用することで与えられよう。

1936年8月初め、モスクワで、スペイン共和国軍のために軍事助言者を準備した。候補者と無線士を選んだ。モスクワとの中断しない接触を保証した。諜報局の職員がこれに従事した。最終的にはスターリンが候補者を決めた。8月9日、防衛人民委員ボロシロフが候補者確定の提案を持ってスターリンの所に出向いた。自分の手紙に彼は書いていた：「友人への軍事助言者として、旅団長ゴレフービソコゴレッツ・ウラジーミル・エフィモビッチ同志ーЛВО機械化軍団指揮官ーを指名することを提案します、ビント・ブルノ同志、諜報局の無線指導員を。友人と我々の間の連絡を保証するために派遣することは目的にかなっていると見なします、友人とともに」。手紙にはゴレフとビントの、ウリツキイの署名がある調書が添付されていた。この無線士についての諜報局長の意見が次だ：「1895年に生まれた。革命まで、ドイツ海軍の船員であった。1918年から、ドイツ共産党員。ドイツ商船隊の船で無線士として働いた。1929年から、労農赤軍で無線諜報の仕事に。2年に渡り、モスクワと東京の間の断続しない非合法通信を実現した。現在、労農赤軍の諜報局の無線指導員」。

この書類から正確にわかる、ベルンガルドとブルノ・ビントは同じ人物であることが。

諜報局は、その当時、日本にもう一つの非合法の、ウラジオストクと直接に確かな通信連絡ができる諜報機関を持っていたのか？ ゴルゲの意見に従うと、多分、無線士との関係はうまくいかなかった。ゴルゲは、自分のメモの中で、この人物に否定的な評価を下していた。

ゴルゲは為した仕事を報告し、前の課題をより正確にし、新しい課題を計画しなければならなかった。グループのメンバーの変化する状況を考慮しながら、自分のことも。軍事諜報部の新しい指導部は、「ラムザイ」グループの指導者と会いたかった。しかし、もう一つの理由があった、1935年5月末にモスクワへの短期間の召還の。この原因となったのは、中国における軍事諜報機関の崩壊。これは中国と西側の出版物でセンセーショナルとなった。

### 上海の諜報機関の崩壊

1964年11月に、コムソモルスカヤ・プラウダが、「私はゴルゲを知っていた」という派手な題名の記事を連載し始めた。当時、既に語ったように、ゴルゲと彼の諜報グループについての記事は、殆ど全ての中央の新聞で印刷されていた。そのような記事では著者を驚かせるのは難しかった。が、この記事は注目を引いた。偽名ヤ・ゴレフを使用している著者は、この著名な諜報員を良く知っていた、1933年の夏にベルリンで彼に会い、諜報の仕事で様々な問題を打ち合わせていた。ジャーナリスト的判断の若干の公表と異なって、そこでは真実が著者の思惑と入れ替わっている。これらの記事の中で大量の書類の資料が追加されていた。それらはソビエトの作家達の注意を引きつけた。ゴルゲについての本を書いていた、外国の研究者達と同じように。記事の著者について、その後個々の冊子を出版した、その時には何の言葉もなかった。驚くには当たらない、ゴルゲについての本の外国の著者達は新しい軍事諜報員についての様々な推断を語り始めたことには、偽名で隠れながら。

ゴレフが書いていた、1933年に、彼はベルリンを捨てる準備をしていた、極東における諜報の使命に向かうために。諜報局の非合法のベルリン諜報機関の長オスカル（オスカル・スチッガーベルジンの補佐の一人）が彼に話した、「ラムザイ」と彼らは隣人となり、会合し、「作戦の特徴の若干の問題」を検討しなければならないと。秘密の理由で自分について著者は何も語らなかった（1964年まで）が、自分の回想記で、1964年10月に書いた。2000年によく出版された。詳細にゴルゲについて語った、彼との接触について、日本で働いていた時の。これについては、十分にあげすけに語っていた。

「我々は東京と上海の間で非合法の連絡方法で一致していた。1933年末から、1935年の上海での私の逮捕まで、我々は十分な定期的な接触を持っていた。この期間に、私は5回か6回、郵便ために身内の者を「ラムザイ」の所に遣わした。自分の2カ所の無線局から東京の諜報機関の電報を送り出した。その時、ビスバデン（ウラジオストク）とのコンタクトはうまくいかなかった。我々は「ラムザイ」と非合法の文通をした（中央は我々にこのために特別の数値を提示した）、彼は急ぐ通信の場合用に上海の非合法の住所を持っていた。一般において、この1年半、私は東京の諜報機関の仕事の展開を監視する

ことができた、「近距離で」。後になって、私は知ることとなった、1934年の中央への手紙で、ラムザイが強調していたことを。”例外的に親しい援助の準備を、それを上海で我々の者達が発揮する”」。

数十年が経過し、90年代末に、この軍事諜報員についての最初の情報が印刷物として現れた。これはヤコフ・グリゴリエビッチ・ブロニン（本名はリフテンシュテイン、偽名はドクトル・ボシ、ヤ・ゴレフ）。世紀の（？＊）と同年齢者、リガ生まれ。1916年、クレメンチュクの中学校の検定試験をパスした、1920年から党员。国内戦には参加しなかったが、1922年に労農赤軍に入った。軍事ジャーナリストとして、政治将校として、軍事雑誌の編集者として献げた。軍での次の職務は労農赤軍の政治指導本部の印刷局長。1928年10月、赤色教授団研究所の聴講生となる。そこで2年間勉強をした。1930年10月、ベルジンが彼を諜報局に引っばった。非合法のベルリンの諜報機関に送った。ドイツで、彼は1933年夏まで働いた。働きぶりが良かったのか、悪かったのかはわかっていない。ドイツから中国へ向かった。1933年8月から、彼は上海の諜報機関パウリ（カール・リム）の所でゾルゲを受け入れた、彼を隣人とした。ゴレフの短い履歴はかようなものであった。彼についてのその後の10年間はほんの僅かしか知られていない。

極東における軍事的・政治的状況は非常に緊張していた。中国で、満州で、日本内部で。諜報機関ラムザイは立ち上がったばかりであった。大きな効率の良い仕事を期待することはできなかった。これ故に、本質的に、中央は他の機関からの情報を要求した。そのような要求は組織の巨大化を招いた。上海の諜報機関は厄介で、管理が困難な組織となった。

蒋介石に対抗する中国赤軍の戦い、中国での出来事に関する諜報情報にモスクワは興味があった。しかし、段々と、日本が諜報機関の仕事の基本的な方向となった。中央は見なした、この地域における緊張した状況を考慮に入れて、基本的な注意は日本列島に集中しなければならないと。なんとなれば、主要な敵がそこにいたからであった。諜報局は日本に関する具体的課題を得た。その遂行のために、ゾルゲのネットワークとは独立した広い組織網を持った諜報ネットワークをそこに創設することが決まった。軍事諜報の指導部、特にベルジンは、「一つの駕籠に全ての卵は入れない」ことに決めた。

自由に、大事なものは、正規に日本を訪れるために、日本の防諜機関に疑いを起こさないようにするために、諜報機関の職員には、期待がおける合法的な「隠れ蓑」が必要であった。このために最も適した方法として、日本と中国の間の貿易を行う何らかの会社を設立することであった。会社の職員として諜報員は、日本を自由に訪れることができた。そして、そこで諜報活動や雇用労働に従事することができた。あり得る、ベルジンはイワン・ビナロフのヨーロッパでの経験を利用することにしたことが。彼は1930年—1933年において中央ヨーロッパの国々で仕事をすることに成功していた、様々な貿易機関を隠れ蓑にして。多分、そのような「隠れ蓑」のアイデアは中央でささやかれていた。

1934年初め、諜報局の上海代表として、ベルジンは中央に、諜報機関所属の無線士の交代を提案した。あり得る、諜報機関の無線士は警察や防諜機関の嫌疑下に陥っており、多分、いわゆる、「ブルジョア化」したことが。当時のそのような方法は、後になって、全く正しかった。上海のいかがわしい場所—キャバレー、バー、レストラン—は誰でも誘惑する、特に彼が外国人ならば。それにもかかわらず、諜報局では、諜報機関の論拠を説



得力があるものと見なし、1934年3月に、モスクワから上海へ、ベルジンとイタリアを通して、新しい無線士が派遣された。

今回、非常に若い綺麗なフランス人女性レナ・マルコを中国に派遣した。1930年に、17歳の娘さんはモスクワにやって来た。革命家としての職務を学ぶために。共産主義青年インターナショナルの急使として数年間勤めた。ヨーロッパの各国を行き来した。1933年秋、彼女を派遣した、諜報局の諜報員学校へ。そして、1934年3月、学校を修了し、幾つかの専門を身につけた。無線士、暗号係、写真家、ポケットにオランダのパスポートを持って、彼女はベルリンへ出発した。

ベルリンで、パスポートを取り替え、ドイツ国民ウルフバヤ・デニソイとなった。更なる道が横たわっていた、スイス、ミラノを経由し、ベネチア、トリエストへ。そして、さらに長い道が。蒸気船に乗り、スエズ運河を通り、インドを巡り上海へ。そこで彼女は初めて自分の将来の夫となるヤコフ・ブロニンと出会った。厳しい諜報の日々が始まった。1991年に公刊された自分の短い追想記でブロニナ（結婚したので）がこの仕事について書いていた。「仕事は沢山。私は無線連絡を保証しなければならなかった。我々に届いた中断することのない沢山の書類を撮り直さなければならなかった。私たちは中国の赤軍を助けた。赤軍は当時厳しい状況に置かれていた：赤軍は国民党軍により南地区から圧迫され、北部への大長征の準備をしていた。中国の同志達は情報の提供者の労務者選択で我々を手伝ってくれた。我々の思想の支持者である、共産主義に同調する人々、或いは、金で秘密を売ってくれるような者達、そのような者は中国の官僚の中に沢山いた」。

彼女は日本のゾルゲの所へ出向いた。彼女の追想記に依れば、彼らは既にモスクワで知り合いとなっていた。無線士の彼女はウラジオストクとの無線連絡ができるように整備をしなければならなかった。同じく東京へ資金と新しい暗号を運ばなければならなかった。ゾルゲと彼女は2回出会った：彼女は現金を渡した、暗号は忘れた。これについて追想をしていた、上海に戻ってから。そのようなとちりがこの諜報員にあった。彼女はゾルゲと一緒に無線室を訪れた。無線局は作動状態にあった。彼女の意見に依れば、無線士は送信していなかった、方位測定器を恐れて。信用の薄い説がある、1935年初めには、日本にはしっかりとした方位測定部はまだなかったという。入手できた情報全てからすると、「ラムザイ」グループの無線の傍受は1937年に始まった。最初のドイツ製の方位測定器が日本に出現したのは1938年であった。

残念ながら、上海の諜報機関とその諜報員ヤコフ・ブロニンの努力、日本におけるラムザイの諜報機関を創設するのはうまくいかなかった。上海と日本の間の貿易のための会社を組織する試みは失敗した。日本で合法となるようにし、日本の支社を差配しなければならない、諜報員は中国の防諜機関の疑惑を受けることとなった。彼は上海から身を隠すことになり、日本で予定された仕事を放棄することとなった。日本で中国植民地を利用するという試みは同じように、全く結果が得られなかった。あり得る、十分に基礎的で面倒な仕事により、その後、島に諜報網を創設することができたと。しかし、当面は第一歩を為すだけであった：個々のグループを作り上げた。日本に一人のエージェントを送った。中国と島との連絡が整備された。「ラムザイ」グループの経験に従えば、数年間は必要であった、新しい諜報網が有効に働き始めるためには。しかし、仕事に邪魔が入った、そのためには常に他の諜報員を準備していなければならない。上海の諜報機関の長が逮捕さ

れた。

これについて、彼の妻（ブロニナ ＊）が回想記に書いている：「夕方、私たちは、モスクワへ出発する友人の所に招かれていた。あちこちを散策した。私は一人で帰宅した。後になって、同志達が電話をしてきた。夫が帰宅しているかどうかを聞いてきた。私は返答した、いないと。「全てを捨てるか、或いは我々の所へ」。彼らは会った時話した「ヤコフは逮捕された。彼を中国人が売った、我々の所で働いていた」。ヤコフは書類を持っていなかった、それについては説明することができた、どこにどんな名前で彼が上海に住んでいるか、裏切り者はこれを知らなかった。その後、ヤコフの所で幾つかの偽パスポートが見つかった。それらを不注意にも持参していたのであった。彼の正体と住所は結局明らかにされ、警察は耐火金庫をこじ開けた。そして・・・ 戦争下であり、彼を絞首刑が脅かした・・・」

直ちに、崩壊の局所化が始まった。ブロニナ（ヤコフの妻エラ ＊）は他の場所に移動した。

知らせ、呼び戻し、隠した、危険が迫っている者達全てを。上海の諜報機関の活動は全て休止した。ブロニナは熟練した後任者ではなかった。彼の逮捕は諜報機関の活動の停止を意味していた。明らかに、日本に諜報ネットワークの設立の全ての手段が注視された。エラ・ブロニナの回想記に依れば、起訴の乏しさ、彼女の夫の人物像が明らかになっていないにもかかわらず、彼を15年の刑に処し、漢江の監獄へ送った。その監獄は幽閉者には極めて過酷な条件下にあることが知られていた。

エラ・ブロニナのその後の運命は上手く行った。暗く、雨降りのある夜に、彼女を港に連れて行った。暗闇の中、手で案内され、揺れる橋を登り、2人の将校が彼女を船に乗せた。この後直ぐに、ウラジオストクに向かって出航した。極東での時期は、フランス女性には幸運に終了した。モスクワで、彼女は赤軍に配属され、諜報局の配下に組み入れられた。1936年5月、中国における諜報活動に対して、彼女は赤星勲章を授与され、彼女は中尉の軍の位を授与された。諜報員としての彼女の能力、語学の知識、暗号係としての仕事は、スペインの国内戦時にもう一度利用された。彼女は仕事を上手くこなし、スペインへの功績に対して、レーニン勲章を授与された。軍事諜報活動の最盛期に、彼女は赤軍の予備役に回された。当時、軍から、特に軍事諜報部から、全ての外国人を追放した。彼女は例外ではなかった。

同じ出来事の、他の面からの視点が次の通りである。1991年に、ブロニナの回想記が出版された年、女性諜報員アイノ・クーシネンの回想記「神が自分の天使を投げ落とす」が出た。コミンテルン指導部の一人オットー・クーシネンの元妻である彼女はコミンテルンの国際連帯局の職員であった。コミンテルン関係で、アメリカでの2年間の仕事の後、軍事諜報局に移った。諜報局は常に熟練した諜報員を必要としていた、語学に達者な。ピヤトニツキイとの話し合いで、ベルジンは、アイノに新しい活動の場所として日本を提案した。そこへの経路は上海を経由して。この町で彼女はブロニナと彼の妻と出会った。

#### アイノ・クーシネンの回想記から

私の局（上海のパラス局－著者注）への到着後、数日して、ドイツ語を話す若い女性が現れた。彼女は私を「主任」に連れて行く必要があった。私たちはタクシーに乗って町のフランス租界に向かった。ホス通りで止まった。主任は

ドクトル・ボシであった。女性は無線士であり、エリと名乗った。

彼（？ボシ ＊）は定置諜者であった。上海におけるソ連邦の特務機関のトップ。極東における全てのソビエトのエージェントは彼に服従していた・・・後になって、彼が話した、「ビスバレン」と無線で連絡を取るの難しい、これ故、私はじっと待たなければならない、「ミュンヘン」との連絡がないように。私には奇妙に思われた、彼が気をつけることもなく特別な必要性がないのに私にコード名を明らかにしたことが。ボシは2回目の不注意を犯した：彼が部屋を少し空けた時、机の上に、書類の中に、私は彼のパスポートを見た。私は素早くそれをのぞき込んだ。ラトビア人のアブラモフで交付されていた・・・。

ブロニンの逮捕後、中国と外国の新聞は、アブラモフ名の秘密のスパイの捕縛について書き立てた。アイノ・クーシネンはこれを知った。彼女の回想記からの更なる抜き書き：「1935年11月、私は「ジャパン・タイムス」を読んだ、上海でアブラモフという名前の秘密のスパイが逮捕されたことを（明らかに、エリは逮捕を免れた）。私を呼び戻す理由がなんであれ、多数ありえる、私は直ぐに考えた、直ぐにボシの逮捕が迫っていると。実際において、私は1934年10月から彼らと会っていなかった、が、私の評判を落とすような何かが知られるようになる。ボシはソビエトの極東の諜報の中心にいた、全くあり得る、彼の逮捕はモスクワに不安を引き起こすことが・・・」

### 1935年：軍事諜報における大変革時

1935年7月に、ゾルゲはモスクワにやって来た。組織は全く違った組織となっていた。ベルジン局長の代わりに、新しい局長ウリツキイが。エージェント部長メリニコフの代わりに、新しい代表アルツーフが。新しい組織形態と、新しい長カリンの新しい極東部。この1年半で、中央組織は完全に変更された。1933年から1934年の間の深刻な出来事がこの変革を推し進めた。それらは1年進んで軍事諜報活動を決めた、ヨーロッパ、極東における。実際において、「ラムザイ」作戦の更なる計画はゾルゲの知らない全く他の人物によって為された。

崩壊の結果これが起こった、軍事諜報における状況へのスターリンの極端な不満が引き起こした。1934年3月23日付けの「プラウダ」の第一面に公表された。「フランス人の極右者の反ソビエト運動」の題名のもとで伝えていた。数ヶ月の沈黙の後、外国の印刷物は「捏造された報道」を掲載した。フランスで1933年秋に暴露された「スパイ組織はソ連邦の利益のために活動していた」ことについて。この短い報道は、ありふれたソビエトの読者の注目を引いたのであろうか、心配であった。世界のどのスパイ組織も崩壊を免れないし、そのどれも自覚していない。西の刊行物の熱気をどうにか冷やす必要がある。

「プラウダ」での公刊の数日後、政治局の定例会議のために資料が準備された。3月29日、会議でスターリン自身が報告をした。「ソビエトのスパイについての外国での活動について」（当時は、出来事は極めてまれで、注目に値していた）。審議の後、人民委員会外務部次長クレスチンスキイに、その日に、タスに反論の文を出すことを委ねた。人民委員会軍事部のボロシロフには問題を詳細に調べ、政治局に報告するように委ねた。3月

30日、中央の新聞にはタスの反論が公表された：「フランスの新聞に出現した主張に関して、ソ連邦の利益のために働いた、様々な国籍の人物達のグループが、スパイの嫌疑でバリで逮捕された、タスは声明する全権を委ねられた、断固として、これらの主張は誹謗中傷以外の何物でもない」と。

政治局でのスターリンの報告後、OГПУ（合同国家政治保安部）特別局－軍事と海軍の仕事について人民委員部を監視していた－は詳細な報告書を準備した。第4局の仕事について。OГПУの実質的な指導者ゲンリフ・ヤゴダがそれに署名をした。それはスターリン宛であった。諜報の3つの班（軍事諜報、政治諜報－ИНО OГПУと党諜報－コミンテルンの国際連帯局）の活動を総括している。10頁にわたって、無味乾燥な一覧表があった、崩壊した第4局の全ての、行動、日付、名前のある。結論は改行してまとめられていた：「大きな諜報機関の全滅に導いた崩壊の原因の注意深い調査は示した、これらは全て裏切り者による汚しの結果である。秘密保持の規則の無視、PKKA参謀本部第4局自身の側からの外国での仕事の指導力不足、。疑いなく、我々を迷わせる大量の資料の侵入を助けた。

1933年10月10日、ヘルシンキで、第4局の非合法定置諜者マリア・プリータルチニと彼女の助手が逮捕された。同じく、ソビエトの諜報網の大部分が。諜報機関の仕事の再構築を急がなければならなかった。が、局には何の手段も残されていなかった。1932年に諜報機関を受け継いだ武官アレクサンドル・ヤコブレフは第一に通信線を手に残した、深刻な嫌疑を引き起こしている人物との。それ以上に、非合法活動の基礎的な要求を無視して、ヤコブレフトと、彼の助手ニコライ・セルゲーフとヤコフ・トルスキイはプリータルチニと彼女の部屋で会った。1933年10月に。第二段階の情報源の逮捕が始まった時、ヤコブレフと局の指導部には、最も価値のある諜報員を確保し、彼女をソビエト連邦に連れ去る可能性があった。しかし、これはできなかった。そして全ての諜報機関は壊滅した。

その後、フランスでの大崩壊が続いた。1933年12月19日、パリで、第4局の諜報員ベニアミン・ベルコビッチと彼の妻、彼の助手シバルツ、連絡員リジア・シタリ（チェカロバ）、教授ルイ・マルテン、フランス海軍省の暗号局の労働者、エージェントのマグダレナ・メルメ、伴侶のサリマンが逮捕された。逮捕は1年以上続いた。イギリス、ドイツ、アメリカに影響を及ぼした。第二弾で、フランスによって逮捕された人物の中に、大佐オクタフ・デュムレン、化学者バルトスラフ・レイフ、医者リバ・ダビドビッチ、軍事省の技術者オブリがいた。諜報機関の同僚の僅かだけが隠れとうせた。逮捕者の所で書類と無線機（短波送信機と受信機）が没収された。フランスでの崩壊－フィンランドと関係していたのは明か－は予防することができた。1932年、当時のパリの諜報員キリチツキイは自分の監視に気がつき、これについて指導部に報告をしていた。が、警戒の対応する手段は執られなかった。

とにかく、ヤゴダの報告を注意深く調べ、スターリンはその最初の頁に決済を書いた：「私の書庫へ。ヨシフ・スターリン。」、軍事諜報の仕事を政治局で検討することが決まった。

必要な決議の文書と案が準備された。5月26日、政治局の定例会議で、「PKKA参

謀部の第4局の問題」が審議された。それに関して再編成の決定が裁可された。議事録第7号は「特別ファイル」に秘匿された。それは、そこに60年に渡って眠っていた。

政治局の決定に関する全ての資料—大統領書庫に保管されている—は閲覧禁止の状況にある。その計画の著者を明らかにすることはまだできない。しかし、明かである、この書類を専門的な諜報員が準備したことは。決定に特記された、幾つかの国に大規模な諜報機関を創設する危険性が、何カ所かの諜報機関の通信を1カ所に集中する危険性が、崩壊の確立を極めて増大させる。「ある国から他の国への仕事のための労働者の派遣」は「重大な違反」で、「一連の国での同時崩壊の前提」を作り出すと見なされた。

軍事諜報の全ての問題を審議した後、政治局は決定した。局をPKKA参謀部から除外し、それを直接、人民委員会に従属させることを。局長に義務を負わせた、諜報機関の仕事全般に関して短期間内に再構築するようにと。中央との連絡において大きくはなく完全に独立した諜報機関とするようにと。諜報活動を集中する国のグループを定めた：ポーランド、ドイツ、フィンランド、ルーマニア、イギリス、日本、満州、中国。残りの国々の軍事力の調査は合法手段で行うことが決まった、公的な軍事代表を通じて。

軍事および政治諜報の仕事の調整のために、常設委員会が設置された。諜報局の長、ИНОの長、ОГПУ特別局の長からなる。委員会は審議し、調整することになった、国に関する諜報活動の全体計画を、両方の諜報機関の間の相互通報と経験の交換を保証することも。全ての崩壊を研究するように委員会に指令が出された。局の経路で、ИНОの経路で、あり得る繰り返しに対抗する手段を講ずること。委員会に期待がかけられた。国外に派遣されている同僚達の調査は委員会に委ねられた。

軍事諜報機関指導部の強化の必要性は明瞭であった。経験ある専門からして。明らかに、スターリンは理解した、軍事関係省にはそのような人物がいないことを。当時、管理局は「一人の俳優の劇場」であった：オスカル・スチッガー—科学技術諜報を指導していた—と「局長からの特別依頼」を遂行していたワシリイ・ダビドフは全ての経験と知識全てにおいて、ベルジンとは競争できなかった。ベルジンは次席を持っておらず、ただ助手を持っていた（例えば、エージェント局の長ボリス・メリニコフがそれと見なされた）。政治局はそのような職務を管理局の職員に移すことを決めた。その長の第一次長にアルツル・アルツゾフを任命して、彼は政治諜報局（ИНО ОГПУ）を指導していた。

政治局の決定の遂行に関する監督は、ボロシロフに委ねられた、抜粋は諜報の2人の指導者—ベルジンとアルツゾフ—に送られた。

軍事諜報機関に関する政治局の決定を採択する前に、1934年5月25日、アルツゾフはクレムリンに呼び出された。13時20分に、彼はスターリンの執務室に入った。そこには既に、ボロシロフとヤゴダがいた。会議は6時間続いた。他の官庁に異動することは、同種の仕事にもかかわらず、職務の低下を伴っており、昇進の特別な展望もないことで、アルツゾフは明らかに不満であった。しかし、スターリンの言葉の後：「レーニン時代、我が党に制度が生まれた、その力の元でコミュニストは彼に提示されたその地位で働くことを拒否してはならない」、反論することは無意味であった。軍事官庁における状況と相互関係を良く思い浮かべて、アルツゾフがスターリンに語った、彼は一人で新しい職場に入ることは大変であると、何人かの同僚を引き連れさせてほしいと、彼がИНО

での仕事で知古のある。スターリンは同意した。そして、アルツゾフと一緒に、軍事諜報局にИНОの13人の職員が入った。新しい人物の配置は、明らかにスターリンの同意を得たものであった。書記長の指令なくして、ボロシロフは軍事諜報機関の重要なポストに「よそ者」を就けなかった。

この13人の職員の中で最も重要な人物は、フェドル・カリンとオットー・シテインブルクであった。直ぐに、重要な部局を指導しただけではなかった。1935年11月には、赤軍内で、特別な軍位をもらった。兵団長（中将に相当）の称号を新しい局長セメン・ウリツキイが得た、部隊勤務の経験を有しているとして。兵団政治委員の称号は位では兵団長に相当している。この時には、既に局長ベルジンとアルツゾフが。政治部スタッフのこれらの称号は、カリンとシテインブルクに授与された。まさにそれにより、局の長は軍事諜報機関の指導者と同一となった。

フラフラしている時間は、アルツゾフにはなかった。局の仕事を分析し、自分の勧告を提示することが彼に差し迫っていた、1月内に軍事諜報の中央機関の再構築に関する。1934年6月23日、詳細な報告が準備された。その基本的な情勢が予備的な方法で人民委員会のボロシロフに報告された。彼の側からの反論はなかった。局の諜報活動の状況とその改良手段についての報告は「中央委員会書記長スターリン宛」に出された。報告書の2冊目はボロシロフに予定されていた。この時に、モスクワに局長ベルジンがいたかはわかっていない。もしそうならば、人民委員会のトップの間を通し、スターリンに直接の回送する事実は前例がなかった。アルツゾフが1936年に語っていた、スターリンが語った、「諜報局に私を派遣し、私がそこで目と耳にならなければならない」と。これで、アルツゾフの服従関係を、きちんと普通に注意深く守る行動を説明することができる。新しい職務における自分の最初の報告を最上部に送った。

諜報関係の新しい次長に、もちろん、「ラムザイ」作戦についても直ちに報告した。グループの成員、課題について報告をした、1933年に作戦の開発において設定された。アルツゾフはゾルゲの個人的仕事を知ることとなった。この国における非合法の軍事諜報の諜報員の人物について知った。「ラムザイ」には1934年6月には、実の結果は未だなかった。報告においてこのグループについて話すことは何もできなかった。日本における諜報活動についての自分の結論は、彼はただ東京にあるИНОの合法的諜報機関の仕事についての情報を基礎にしていた。結論は芳しくなかった：「我々の公式の代表機関内からの日本における諜報活動の行動は危険をはらんでいる。これを諦めなければならない」。

アルツゾフは提案した、戦略的諜報機関を2局設立することを：西の国々（第1局）と東に（第2局）。それらの諜報員はヨーロッパで、同じくトルコ、ペルシア、アフガニスタン、中国、満州、日本、アメリカで活動した。技術諜報部は軍事工場に外国人のエージェントを募らなければならなかった。秘密の設計局に、研究所に、新しい軍事技術のデータを獲得するために。活動的な行動の部局には、戦争の場合には敵の背後で破壊工作のための班の準備の責任を負わせた。区域の諜報の指導に関する部局には国境区域の諜報部の指導。それを通して、地方のエージェントを根付かせた。隣国と隣接している領域に、直接の観察のために。軍の強化、軍の集中、移動、演習、国境の。

書記長は注意深くアルツゾフの報告を調べた。彼の方からの批評は為されなかった。1

月弱後、作戦を立てられ稼働した。「諜報組織の作戦職員によるPKKAの勤務についての条例」が。この書類には、全ての提案が考慮されていた、アルツゾフの報告の中で述べられた。1935年11月、防衛人民委員会はPKKA諜報局の新しい定員を承認した。そこに、12の部局が設立された。第1局（西側での諜報機関）、オットー・シテインブルクを長とした、5部門からなっていた、全体の定員は36人。第2局（東の諜報機関）、フェドル・カリンを長とする、同じく5部門からなり、定員は43人。

第2局の日本部は「ラムザイ」作戦の開発を続けた。ゾルゲの諜報グループの指導を行った。カリンと部長ミハイル・ポクラドクは作戦を2年以上にわたって指導した、1937年半ばまで。ゾルゲに関する本では、彼らについては言及が無い。この2人の諜報員は、自分らについて何も語られないように、勤め上げている。

カリンは1896年にベッサラフスク地方のスレン村で生まれた。彼の人生については1919年までは何の情報もない。1918年のルーマニアによるベッサラビア占領後の、1919年1月に、彼はキエフに去った。ソビエトの工場の一つで働いた。その時に、ボリシェビキに入党した。春に、モスクワからキエフへボリシェビキ中央委員会のベッサラビア首脳部の書記ハラボイ（グリーンベルグ）がやって来た。明らかに、カリンはモスクワの代表に気に入られた。彼に自分の秘書の職務を提案した。後になって、ハラボイはオデッサに移った。そこで、ベッサラビア非常委員会を組織した。その推薦に従って、カリンを防諜部の部長代理に指名した。その後、ベッサラビア隊の騎兵中隊長となった。負傷し、キエフの病院に送られた。そこで、全ウクライナ刑事探査部の部局の一つのコミッサールに指名された。キエフへの白軍の進行時には、第12軍の特別局に派遣された。1919年8月から、非常委員会とОГПУ（合同国家政治保安部）で働いた。そのような経歴は1年だけ。

英語とドイツ語に堪能な有能なベッサラビア人に気がついた。1920年に、彼はアルツゾフと一緒にイグナチア・ソスノフスク（？ \*）に対抗する作戦とポーランド軍組織のエージェントの諜報活動に参加する。1922年から、彼の非合法諜報活動が始まる。彼はルーマニア語が達者であった。彼をこの国での仕事に利用することにした。しかし、エージェントの経験は未だなかった。明らかに、彼はルーマニアの防諜機関の疑いを招くこととなった。1922年6月に、彼はオーストリアに移った。そこからブルガリアへ（コレツキイの名で）。世界中の国における11年間にわたる彼のエージェントの仕事が始まった。1924年3月、ИНОは定置諜者として彼をハルピンに派遣した、総領事館の職員を隠れ蓑として。1926年11月から1928年7月まで、アメリカで非合法活動。1928年—1931年、フランスでИНОの非合法定置諜者。1931年から1933年まで、ドイツでの非合法定置諜者。この期間に、地球の半分を訪れ、多くの国で仕事をした。経験と技量を身につけた、幾分非合法の。1933年秋、モスクワに帰還し、政治諜報部の中央機関（ИНО ОГПУ）で働き始めた。再び、アルツゾフと一緒に。

驚くに値しない、ИНОの長が自分の助手の内の一人を非常に高く評価したことは。1933年のカリンの勤務評定に彼は書いた：「・・・地下活動の元で、最も熟練し、技量のある諜報活動の指導者の内の一人である。素晴らしい非合法活動家、勇気があり、イニシアチブのある組織家・・・素晴らしい諜報活動に対してОГПУの2つの高位の勲章を持っている（名誉チェキストとしての2つの称号）、赤旗勲章も授与されていた。

カリンの最後の職務－ИНОの中央局長、第12種の授与を持って。カリンをИНО諜報部の優秀な組織者の10人の内の第一位であると見なしている」。

1935年1月、防衛人民委員会の命令で、諜報局の第2東方部の長に、彼（カリン\*）は任命された。もちろん、そのような大事な任命は、スターリンの許可を得ていた。ボロシロフが署名した命令はアルツゾフとスターリンの間の合意を記録していた、諜報局の重要なポストへのチェキストの配置について。局は東方とアメリカでの諜報活動に従事していた。カリンをこの職務に推薦し、アルツゾフはハルピンとアメリカにおける彼の仕事の経験を考慮に入れていた。ИНОにおける仕事の経験とカリンの能力は非常に高く評価された、もし、彼が軍の称号に関して、軍事諜報指導になぞなえるならば。明らかに、スターリンはカリンを高く評価した。彼（スターリン\*）の許可無しで、そのような格の軍の称号はPKKAにおいて当時授けられなかった。

局の同僚と一緒にカリンは働いた。非常に熱心に彼に、指導部と同じように答えてくれた。彼の仕事の内容、仕事の能力、相互理解ができる能力を、部下との仕事の共同作業を調整する能力を評価した。

カリンの助手として、1936年－1937年に働いていた、  
退役大佐ボリス・グジの回想記から

・・・。諜報局の第2局における仕事に私が取りかかるやいなや、我々は共通の理解に達した。密接な接触を持って仕事をした。13ヶ月間が諜報局での私の仕事。

この時期、私は確信した、カリンはスケールが大きく、諜報活動に大きな経験を持った労働者である。彼は「ラムザイ」作戦の本当の指導者の内の一人であった。この路線を始めたのは彼ではなく、ベルジンであったにもかかわらず。この作戦において、彼は失敗からゾルゲを助けることに気をかけた、彼の伝説の基礎には多くの生煮えの時があった。この関係において出来ること全てを行った、状況を直すために。上海にゾルゲの指導の下で一時的な諜報機関の設立の発起人の内の一人であった。この仕事の定置諜者として彼の次席が選抜された、経験ある諜報員で師団政治委員レフ・ボロビッチが。

彼は熱心に軍事諜報員に経験を伝えた。特に、アクモフ、フェドロフ、パクラドク、ハバゾフ、その他に。パリとカリフォルニアに非合法諜報機関の設立において辛抱強さを示した。日本の移民の中からの募集において。彼は日本にいたことはなかった。私に詳細に問い合わせた、日本における生活と風習の様々なことについて。

彼と仕事をするのは楽で面白かった。彼は仕事に打ち込み、他の人を諜報活動に誘い込むことができた。カリンは特に、満州で働いていたフェドロフの仕事を評価した。カリンは多くの力を使った、パクラドクとの仕事で、諜報活動を過小評価した。

## ベルジンの退去

局への新しい代表の任命のための理由となった出来事が繰り返された、諜報局へのアルツゾフの着任の9ヶ月後に。今回のスキャンダルはオランダで起こった。そこでは警察が何人かのオランダ人と外国人を逮捕した。ソ連邦を利するスパイ活動の嫌疑で。ヨーロッパの新聞は沸き立った。この後直ぐに、局で状況を分析し、アルツゾフは防衛人民委員会



に詳細な報告を書くことになった。警察は9人を逮捕した：ツェントルの4人の労働者と5人の外国人、連絡の仕事のために引き入れた。逮捕された中での重要人物は諜報機関の熟練労働者ウラノフスキーであった、オランダでの連絡の定置諜者。彼の主要任務は非合法手段で入手することであった、ドイツの諜報機関から資料を。それをソ連邦へ送り出すこと。郵便の発送のために、彼は3人のオランダ人とアメリカ人を募っていた。

ベルジンにとっては、コペンハーゲンでの崩壊は、軍事諜報における活動の日没を意味していた。もし、彼が諜報局長として持ちこたえ残ることができたならば、アルツゾフを長としたチェキストの指揮下にもかかわらず、今や彼にはチャンスはなかった。ベルジンは良くわかっていた、防衛人民委員会の指導部での力の配置を、影響と指導的ポストのための争いを見ていた、何の幻想も抱かなかった。アルツゾフの報告後、組織的結論を待たず、彼は職務からの解放の上申書を出した。ベルジンの解任について、ボロシロフはスターリンの承認を得ることができた。明らかに、書記長はベルジンを受け付けなかった。彼の説明を聞こうともしなかった。

1月後の4月15日、防衛人民委員会で指令53号が署名された：「PKKAの諜報局長ベルジン・ヤン・カルロビッチを彼の要請に同意し、従事している職務から解放する。私の配下に加える・・・」 諜報局長の職務は空席とする。組織内に、その候補者は見つからない。PKKAの上級幹部士官の人物に白羽の矢が当たった。軍事諜報には少しだけの関係を持っているにもかかわらず。セメン・ウリツキイである。

1935年5月5日、防衛人民委員会次長で本部政治局長のヤン・ガマルニク（諜報局の日常の仕事管理していた）は新しい候補者を書記長に提示した。会議は2時間半続いた。それには局長の臨時代理アルツゾフが在席していた。明らかに書記長に疑いは生まれなかった。5月7日、再びスターリンの執務室で、ウリツキイはカリン、ニコノフ（当時、諜報局の第2次席）、シテンブルクと知り合いになった。次の日に、スターリンの所で、最後の3時間の会合があった、軍事諜報指導部との。それには、ボロシロフ、オルジョニキゼ、ガマリニク、アルツゾフが在席した、局の長から、カリン、スチッグ、ボゴボイ。この後、新しい諜報局の指導者は自分の職務の遂行に取りかかった。

ウリツキイは時の人物であった。厳しく、根気強く、成功を志向していた。軍団の兵士から司令官までの道、彼の友人、高位の位の知人の司令官の多くのように、20年かかった。1895年、キエフ地方のチェルカスに生まれた。有名なチェキストであるモイセイ・ウリツキイの甥。革命家バツラフ・ボロフスク家で養育された。オデッサ国有学校を4年で終了し、15歳から働き始めた。エプシテイン薬局倉庫で5年間働いた：最初は見習いとして、その後、梱包係、売り子として。1912年6月、17歳の時、ロシア社会民主労働党（РСДРП）のオデッサグループによって、党に採用された。1915年8月、第12ドラグンスク連隊に、一兵卒として招集された。騎兵として全国内戦を駆け回った。1917年夏、ルーマニア戦線で中隊委員会代表。12月、オデッサの赤衛隊司令官。そして、直ぐに、1918年冬に、オデッサ軍管区の参謀部で騎兵隊のコミッサール補佐。この年の夏、ウクライナ戦線で彼は第3ウクライナ軍の騎兵隊コミッサールとなる。1918年6月から7月、ツァリチンスク戦線でポボリノ軍を指揮した。10月から、モスクワで、軍管理局（チャーカー（ВЧК）の特別局）の長に任命された。この職務を持って、参謀本部アカデミーの1学年に聴講生として派遣された。1919年夏、1学年

終了後、南部戦線の軍参謀部の司令官補佐。1920年夏、彼は独立騎兵隊の司令官となる。12月から、アカデミーの2学年の聴講生。1921年3月、クロンシュタット蜂起の鎮圧に参加。赤旗勲章を授与された。1921年夏、オデッサ要塞地帯の司令官。1922年冬、アカデミーの最終学年の聴講生。アカデミー修了後、1922年5月、ドイツへ非合法の仕事で特別出張、諜報局経路で。この国での2年の仕事の後、1924年5月、モスクワに帰還した。今回で、彼の軍事諜報機関との共同は終了した。諜報局は向いていなかったのか？新しい活動の場で働くことを希望しなかったのか？

1924年から、統帥部での勤務。3年間、ウリツキイはオデッサとモスクワの日系学校の指揮官。その後、1927年から1929年まで、レニングラード軍管区の狙撃師団の指揮官。出世における新しい段階として1年半、北カフカス軍管区の参謀部指揮官代理の職務。さらに出世して、1930年5月から1931年12月まで、ウクライナ軍管区で狙撃師団の指揮官。その後、レニングラード軍管区の参謀部司令官の職務。再び、狙撃師団を指揮する、プリボルガ軍管区で。

10年間、勤務における昇進は順調に進んだ。一度も踏み外すこと無く、一度も後ろへ転がること無く。もちろん、高い軍事教育と、当時には長い党歴が役割を果たした。革命までの党歴を持ち、PKKAで2回の赤旗勲章を持った高位の司令官は多くはなかった。1934年夏、防衛人民委員会で、もちろん、党の中央委員会で、決定した。彼は軍で十分に勤めてきた、モスクワでの時期だ。そして、1934年夏からウリツキイは機構局司令官代理。ここから、彼を諜報局へ異動させた。彼には未知の新しい軍事諜報という仕事が始まった。この人物と、1935年7月にゾルゲは出会った。

諜報局の日本部長ミハイル・ポクラドクはウリツキイと同年齢であった。が、彼の履歴は全く違っていた。職務での急速な出世は何もなかった。結果としては、1935年に地味な軍での階級「陸軍大佐」と地味な職務。彼は1895年に、ビレンスク地方ビャジンスク郷ツェピンツ村で生まれた。1915年、軍に招集された。中等教育を受けていたので、アレクセーフ軍学校に派遣された。1年後、学校を終了し、少尉の位で、南西前線に派遣された。1918年、赤軍に自由意志で入った。最初は、群軍事委員会の部局で、その後、軍団の。そこで、大隊の指揮官まで勤め上げた。1920年に入党した。その後、7年間軍で通信に従事した。1924年に高級軍通信学校を終了し、1927年、軍アカデミーの東方学部に入學した。学部の日本語学科を終了後、ベルジンが彼を諜報局に選抜した。1929年～1930年、東支鉄道での衝突時、OKDBA参謀部の諜報局の局長代理として勤めた。1930年、諜報局に戻ってきた。3年間日本軍での研修に派遣された、日本語の完全習得と日本の軍事力を知ることを目的として。1933年、モスクワへ帰還後、局の情報部長に任命された。1934年～1935年、局の配下において、海外への出張をしていた。1935年から、諜報局第2部の日本部局長。作戦「ラムザイ」の不断の指導は、この部局によって行われていた。ゾルゲは、モスクワに来た時、もちろん、ポクラドクと出会っていた。

### **「ラムザイ」は新しい指令を受け取る**

ウリツキイ、アルツゾフ、カリンとポクラドク。軍事諜報指導部では新しい人物ではな

い彼らと一緒に、ゾルゲは自分の将来の仕事の計画を練った。短く最後のモスクワ訪問時に。全ての課題は最終的により明確にしっかりと作り上げられ、それらは諜報グループに提示された。この際、最大限に、グループの人物の可能性が増大するものと見なされた、ドイツ大使館におけるゾルゲの可能性も、大使ディルクセン、武官オットー、海軍武官ベネッカーとの接触において。無線士の交代の問題も解決された。ボロシロフの電報でモスクワに呼び出された、クラウゼンは遠い道への準備を始めた。ゾルゲの休暇について忘れはなかった。エカテリナ・マクシモバとの黒海沿岸のどこかでの。

しかし、休暇についての話し合いはダメとなった。ゾルゲを局に呼び出し、東京に急いで戻る準備をするように話した。そのような急ぎとなった原因は、極東における状況の変化であった。軍の権力の上層部に行きたがっている「桜会」協会の若手将校達が暴れ出し、慎重さを欠いていた。ソビエトと満州、特にモンゴルと満州国境における挑発行為は引き続いていた。この地域での対決は高まっていた。大規模な軍事衝突になりそうであった。そのような事件の急転はソビエト連邦の政治および軍指導部には具合が悪かった。モスクワでは、未だ準備していなかった。島の帝国との戦争に勝つための。満州での関東軍の粉砕はまだ先のことと見なされていた。

極東における緊張の、他の原因は東支鉄道であった。戦略的に重要な鉄道であり、全満州を北西から南東へと貫いている。この地域の実質的に経済の根幹であった。ロシアと中国の共同所有にあった。その後、この鉄道は「独立した」満州政府の体に突き刺さったソ連邦と中国のトゲであった。東京の政治および軍事グループの大きな影響を受けていた、関東軍は他の政府の存在に妥協しなかった。将来の敵に、それを支配下にしている領域において。モスクワではわかっていた、鉄道を手放し、最終的に満州から退去しなければならないことを。既に鉄道は正常に稼働していなかったが、共有者が小規模の軍事紛争で教え諭すことができるという期待はなかった。1929年の例（張学良がソ連に対して軍事行動を起こすが失敗 \*）にならって、東支鉄道での2回目の衝突が起こることは不可能となった。関東軍に対抗するどんな軍事作戦も、遅滞することもない日本との長期の流血の戦争へと導いた。

鉄道のソビエトの部分を実に日本に売却するという決定が為された。ソビエト連邦は満州の「独立」を決して認めていなかったの、この「政府」とはどんな交渉もできなかった。メンツを保つために、第三国へ鉄道を売却後、中国から去る。東京で、事態を冷静に判断する政治家達が売却に関する提案を採用した。鉄道の価格と支払い条件について交渉が始まった。東支鉄道に関する同意は1935年3月27日に署名された。

しかし、それに再び軍部が介入してきた。彼らは良く理解していた、東支鉄道の問題の解決は、2国間の関係の正常化の助けになるということ。しかし、これは関東軍参謀部に燃え上がる声を生じなかった。彼らには緊張した状況が必要であった、衝突や可能な戦争が、北の隣人との。新しい軍事挑発と国境紛争が始まった。極東で火薬の匂いがしてきた。このような条件下では、ゾルゲの休暇など話にならなかった。ウリツキイ、アルツゾフ、カリンは、進行している状況を分析し、全く妥当な決定をした。諜報部グループの指導者の場所は東京でなければならないと、黒海沿岸ではなく。

ウリツキイの所へゾルゲとクラウゼンの最後の訪問。諜報局長は念を押している、彼らの諜報活動の諸目的はソビエト連邦との関係における日本の意向の正確な分析をするこ

と、日本は侵略を計画しているのか？ もしそうならば、いつか？ 数年後、自分の獄中記で、尋問での証言で、ゾルゲが主張していた：「・・・見なされていた、・・・勝利の場合には、ソビエト連邦は日本との戦争を回避できる。これはモスクワの全ての機関の最大の興味の対象であった。この際、我々はソビエト連邦における不信の感情を思い出さなければならない、日本との関係において。すなわち：ソビエト連邦は、満州事件後における日本の軍部の増大している役割と彼らの外交方針を目にして、日本はソ連邦に侵攻を計画しているという深刻な危険を味わい始めている。」

ウリツキイは同じくゾルゲに警告した、日独関係の発展をしっかりと監視する必要性を。1935年夏、東京とベルリンの間の相互関係が度を過ぎると見なすことは未だ早かった、が、モスクワでは信じていた、2つの国の間の友好関係の修復が始まり、それ以上に、それはソビエト連邦に対抗するものであると。彼らの友好関係修復について、ベルリンから外交官や諜報員が報告してきていた。モスクワでは知られていた、ナチス党の外交部長で将来の第三帝国の外務大臣リップントロップが事業家で、極東に特に日本に密接な関係を有しているフリードリッヒ・ハク博士に話しかけたことが。ベルリンにいる日本の武官大島と会い、二国間の秘密会談を開始する旨の要請を伝えたことが。ロシアに対抗する防衛同盟の創設のための。

これ以外に、「ラムザイ」には、自分の将来の合法化を保証する課題があった。「ドイツ大使館の職員の完全な信頼を得ること」、「大使館で仕事での協力の確立を最も効果的であると見なすこと」。これは示していた、ゾルゲは大使館に「効果的なサービス」の提供により公的な許可を得ていることを。第一に、武官オットーに。シロトキンが指摘しているように、「このサービスはオットーに対する様々な種類の供給にあった。日本の経済、内政状況、軍政手段に関する公的および私的な情報の。これは基本的で重要な因子となった、それは「ラムザイ」を助けた、ドイツ大使館で”身内の人間”となることを。

## ベルリンでの出会い

1935年8月16日、ゾルゲはソビエト連邦を出国した。彼の経路は再びベルリンを経由し日本の首都へ。しかし、第三帝国の首都に到達する前に、彼はワルシャワで軍事諜報員ゲルハルト・ケゲルに出会った。彼はワルシャワでドイツ大使館で働いていた。ドイツのことに非常に良く通じていた。ゾルゲはいくつもの特別な問題に興味を持った：全般的軍務の1935年3月の実施と軍の定数の増大と1935年6月のドイツとイギリスの間の海軍条約の署名の詳細、ダンチヒへのナチスの侵攻。これら全ての問題に関して、ゾルゲはケゲルから余すことのない情報を得た。出会いはウリツキイの許可を得て、ポーランドの諜報局の定置諜者ルドリフ・ゲルンシュタットによってもうけられた。彼は1929年から軍事諜報活動を始めた。1933年から1939年のポーランドの壊滅までワルシャワで、成功裏に仕事を続けていた。ドイツの新聞の特派員を隠れ蓑として。

ベルリンを去る前に、ゾルゲはアリバイ的に人物のところを訪問している、東京で彼(ゾルゲ\*)の評判が関わっている、自分の強い世界に関係している。この際、若い職務から始め、段々と昇進することになっていた。もちろん、もし、希望し採用することをしてくださるならば。しかし、明けっ広げに語って、付き合いと訪問において、ゾルゲは運が

良い。次々にドアを開けながら、彼は早めに知った、言うことを、誰に何をこびるか、おどけることまで：「天皇陛下こんにちは」。これはベルリンでは笑みを持って受け入れられる、調子が良いものとして。別れを告げながら、リヒャルトは決してほめかさない、この訪問は最後となり、或いは全ての仕事は決定されたことを。時折、彼は招待する・・・日本を訪問し、富士山に登る、東方の遊女、芸者と呼ばれる、の古い文化を利用する。

新聞の企業家や注文者と、情報においてゾルゲは特別な関係を持っていた。ここで、彼は水の中の魚のような感じを持っていた。巡回するセールスマンのように：一人には仕事と金の関係を思わせ、もう一人にははやりのテーマでの記事を提供し、他の者には簡単な陰謀を巡らす。イヤ、考えてはならない、彼はコメディアンや手品師であったと。ゾルゲは言葉の達人、ジャーナリスト分野で優秀な才能人、特に極東の問題において批評することができる。彼は事件の俳優であった。

ジャーナリストや新聞の仲間達は、東京における彼の活動や、その特派員通信に全くの満足を彼に示した、それを彼は定期的に日本から送っていた。それ以上に、ドイツやオランダの新しい新聞社達は彼に委ねることの希望を表していた、ドイツから遠方にある国でそれを提示することを、そのエキゾチックさを持って、中国、アメリカ、ロシアのような大国の関係における厚かましい政治をもって。リベラルな大新聞「フランクフルト・ツァイツング」とナチス地政学者機関新聞「ツァイトシリフト・フェル・ゲオポリテク」は他より早くに好みと方向を理解していた。満州占領後における日本の指向の。これ故、日本における他の出版の代弁者について考えなかった。このことから、支持、委任、これに、ゾルゲ。地政学の「父」であるガウスゴフェルは彼を受け入れ、彼と会談も持った！

## 東京への帰還

1935年9月、ゾルゲは再び遠回りをして東京に戻った。

この時期、ソビエト連邦との関係において、政府内で、現実的な政策が勝っていた。ソビエトとモンゴル国境における厳しい反撃と鉄道の売却についての交渉における断固とした立場は酔いを覚ますように作用した。東京で当分北の隣人と揉めないことが決められた。東支鉄道の売却についての交渉が再開された。両方とも譲歩し、鉄道は1億4000万円で売却された。モスクワへ出発する前に、ゾルゲが得た尾崎の情報が断言していた：「東支鉄道の北部線の売却に関する交渉にかかわる出来事と関係して、意見が強まっている。鉄道の売却に関する問題に紛糾があるにもかかわらず、日本側は交渉の妥協した完遂へ最終的に傾いている・・・」この情報は、オットーから得られた情報によって確認された。それをゾルゲはモスクワへ伝えた：「日本は北中国の植民地化を暖めている。ソビエトに対する軍事作戦の準備をしていない」。オットーはこの情報を日本の参謀部から得ていたが、モスクワでは、それに対して大いなる不信を持っていた。

日本における最初の2年間を、ゾルゲは最初の期間と見なした。国における状況の研究と、実際の仕事の下準備をするための。自分の獄中記に書いていた：「1933年秋から1935年春までの期間、課題の実際の遂行について語ることは殆どない。この期間、我々は日本における非常に困難な状況下で、下準備をした。諜報グループを組織しなければ

ならなかった。諜報活動のための基礎を作り上げる必要があった。外国人であり、我々はまず第一に問題を良く理解しなければならなかった、我々の任務の対象となっている。様々な問題の正確な理解を得ること、それらに我々は従事しなければならない、直ぐには殆ど不可能であった。外国に長く住んでいた宮城にとってさえ、そのためには一定の期間が必要であった。日本の問題の過程に入っていくためには。我々、外国人には、このためには、極めて長い期間が必要であった。実際の諜報活動の開始は以下の時期であった。1935年夏から秋にかけてのモスクワへの短い旅行から戻ってから」。

1936年初めから、組織を強化し、その職務を遂行することができた。グループは形式を獲得していた。それについて偉大な孫子（ゾルゲのこと？ \*）が書いていた、一回りには見えなく捉えがたい、特に日本の防諜機関には、それ以上に、極めて活動的で仕事能力のある形式を、後になり、グループは素晴らしい成果を上げることができた。

## 第4章

# 「東京におけるスパイ情報源から 得られた情報に関して・・・」 1936年－1937年

つ  
こ  
頁

諜報員は現代世界で最も重要な仕事の一つに参加しているという認識から満足感を味わっている。更なる満足感を諜報員は味わっている、自分の仕事に高度な専門の技術を表すことができる時、なんとになれば、彼は理解している、そのような人物は僅かであり、彼の貢献は極めて必須であるから。

ワシントン・ブレット。戦略諜報員。

基本原理

### 東京での軍事クーデター：1936年2月

1936年には、グループの活動における組織化の時期が終了した。グループの各員は自分の持ち場にいた。各自は自分の課題を持っていた。十分にしっかりと輪郭を持った問題の集まりを、各自はそれの調査に従事した。ゾルゲにはこれはドイツ大使館であった。第一にデルクセンと、特にオットーの助言。助言の言葉は個々では括弧無しで用いられる。というのは、中央の指令に従っているソビエトの諜報員が、大使と武官に供給した情報は極めて信頼でき正しかった。それには何の虚報もなく、そういうことはあり得なかった。ゾルゲはわかっていた、十分に熟練した外交の古い学校の「野牛」(? \*)がドイツの外務省内にいて、良く理解していた。ベルリンへの彼の情報中の\*\*\*\*\*は暴かれるであろうことを。この結果を予測することは難しくはなかった：不信、疑念、\*\*\*\*\*、ドイツ大使館の利用における脂ぎった十字架とそれに続く暴露(? \*)。

デルクセンとオットーにとって、ゾルゲは第一級の政治分析者であった。ベルリンへ生の、信頼できる、時には秘密の情報を供給した。日本における出来事について、国内の複雑な状況の分析を行った。このために、彼は第一に価値ある情報を利用した。穂積と尾崎からそれを手に入れた。このようにして、これら情報源からの情報はモスクワだけではなく、ベルリンに向かった。第三帝国の首都へのゾルゲの報告（それを彼が自分の「友人」であるオットーのために書いた）は非常に高く評価された。それらの真の作者は高位の官僚達には秘密ではなかった。ゾルゲの情報の水準と実行性、彼が情報に付け加えた内容は、彼をベルリンにとって価値ある情報源とした。ドイツの外交官或いは諜報員（もちろん日本にいた）の中の誰も、彼のように広く私的な関係を持っていなかった、この国の支配グループの中に。ゾルゲの分析家としての能力（得られた情報を正確に分析するという）は既に1936年には見られていた。2月のクーデターの評価、反コミンテルン条約の交渉、日本政府の8月の会議、新しい外交計画を採用などにおいて。

起こった事件の評価、将来の予想（ゾルゲはそれらを為した）、は全く確かであった。

現在、あれから長い波乱の時を68年経過して、事件の彼の天才的予見は酷く驚かせる。例として、1936年2月26日の事件を提示することができる。東京で軍事ファシスト蜂起が勃発した時を。東京守備隊の兵士と将校の一部の陰謀参加者達は、幾つかの政府の建物を占領した。内閣の幾人かの大員が殺された。しかし、蜂起は他のグループに支持されなかった。蜂起は失敗した、その指導者達は逮捕され、裁判にかけられ、処刑となった。

ジャーナリストとしてのゾルゲは、ドイツの新聞で、東京の事件を詳細に報道した。蜂起から数日後、「ベルリネル・ビョルゼン・ツァイツング」が、自分の東京特派員としてのシリーズの記事を掲載した。「R. S.」の署名付きで。この記事は「イズベスチャ」に複写掲載された。「イズベスチャ」の同僚達は、もちろん、日本でドイツの特派員の隠れ蓑に誰が隠れているのか、解き明かすことはできなかった。しかし、事件の評価と分析は非常に的確であったので、注目を引いた。ドイツの特派員の意見は、ソビエトの半官紙の頁に現れた。「外国新聞の概観」の章に、2回にわたって、1936年4月15日と26日に。

4月18日、この複写内容にカール・ラデク自身が反応した。当時、彼はコミンテルン指導部に入っており、30年代に「イズベスチャ」の政治評論家として栄達を達成していた。自分の外交概説で彼は書いた：「イズベスチャが毎日、極東における状況についての「ベルリネル・ビョルゼン・ツァイツング」の記事からの抜粋をしていた。この記事では広田内閣は軍部の屏風のように特徴付けられている。この特派員通信の価値は以下の点にある。「ベルリネル・ビョルゼン・ツァイツング」—軍部と重工業の一体化した器官のような—は東京で素晴らしい関係を有していることに。そのように、この新聞によって与えている評価は、明らかに、日本の軍部に存在している状況の評価と一致している」。

当然ながら、ラデクは気がつかなかった、彼らが注目した記事は同僚の手になるものであったことに。コミンテルンで一緒に働いたリヒャルト・ゾルゲの、今では東京でソビエトの諜報機関の諜報員となっている。ついでに、ゾルゲは自分の記事の「イズベスチャ」への転載とラデクによるこの記事の評価を知った。彼はモスクワに連絡した。署名「R. S.」入りの東京からのドイツの新聞への記事を転載しないようにとの依頼を。全体を判断すると、ゾルゲの要請は満たされた。ドイツの印刷物への彼の記事のそれ以上はモスクワの新聞に載ることがなかったことから。

もちろん、国の指導部は日本における事変についての情報を得ていた、「イズベスチャ」の頁からではなく。蜂起が起こった次の日に、諜報局は日本の状況についての情報を出していた。「極秘」の印を付けて諜報局は30部を印刷し、特別な名簿に従って配布した。報告書には、諜報局長次席アルツゾフと第2軍旅団長次席パノフが署名した。

書類に記されていた、東京での武装軍事ファシストの示威行動は2月27日未だ沈静化されていないことが。モスクワで持っているデータに依れば、第一師団の蜂起部隊は、彼らによって占領された政府機関を保持し続けている：軍事省、内務省、参謀本部、主要政治機関。同じく記されていた、臨時首相後藤の政府と宮廷グループは蜂起者達と交渉を行っている、ファシストの蜂起を沈静化するための決定的方法を採用していないと。モスクワの手にした情報に依れば、「警察は動いていない、岸に上陸する水兵からなる上陸部隊は中立を維持しよう、海軍の施設を守るためにだけ」。

もちろん、報告書では何も語られていなかった、情報がどんな情報源から得られたのか



については。報告書を配布した特別な名簿を、同じく古文書の中に見つけることはできなかった。しかし、疑いはない、防衛人民委員会の指導部には、東京の事変についてテキパキと報告が為されたことに。日本におけるファシストの蜂起という事実はモスクワにとって予想外のことでなかった。この日本独特の現象の原因について、「ラムザイ」グループはモスクワに詳細な分析をタイミング良く報告していた。

東京事変に関する最初の報告を、3月6日に、ゾルゲはモスクワに送っていた。その後、連絡員から、蜂起の状況報告がモスクワにもたらされた。日本における将来の出来事への影響について、国の戦争準備についても。2月26日の事件の評価に関するこの報告書からの抜粋である、「1936年2月26日の事件の結果、日本の戦争準備は数ヶ月ズレた、1年の可能性もある。もし、予想外に大きな内部矛盾による極端な結論を引き起こさなく、計画通り準備されるならば、この年には戦争はないであろう。先に示した条件下で、その可能性は、ドイツの同時の進行がないもとでは、極めて小さいものとなる。日本は単独では戦争を行う状況に段々となくなっている。1937年に、ドイツは軍備の重要な部分を為し終えたという事実は、1937年初め或いは半ばにおける危険の異常な先鋭化を示している」。1年前での事件の素晴らしい分析。ここに、1937年夏の、中国との戦争の開始の予想、ドイツとの交渉は、1938年に始まり、3国同盟として調印がされた。

### **「ラムザイ」が警告する：日本はモンゴル占領を準備している**

もちろん、ゾルゲと彼のグループの仕事は、1936年始めにおける東京事変だけに限られていなかった。諜報員とオットーとの関係はこの時期には密接であった。話し合いは明けっ広げで信頼に満ちたものであった。武官は自分の友人に何の疑いも持たなかった。日本軍の状況について詳細な情報を彼と分かち合った。情報は様々であった。時折、深刻なもの、大事な、戦略的価値のある。時折、全く大事ではないもの、ありふれた戦略低価値だけのもの。言葉を換えると、情報は、師団指揮官のレベルの、或いは万一の場合には軍団の。ここで特記しておく必要がある、軍事諜報としての「ラムザイ」の欠点の一つは、最後の年に、その情報活動に深刻な影響を与えたということである。

ゾルゲは第一次世界戦争の参加者であった。が、彼は十分な軍事教育を受けていなかった、優秀な軍事学校のレベルさえも。彼は分析者であり、素晴らしい歴史家、政治学者、経済学者であった。素晴らしくわかっていて、日本における歴史的、政治的、経済的問題を。質問がこれらの問題に触れた時、ゾルゲは常に見事に成し遂げた。彼の評価は正確であり、予想は、まさに的中した。ここでは、彼は申し分がなかった。が、話が純粋に軍事問題となった時、彼は正しい評価ができるとは限らなかった。彼に届いた軍事情報の重要性を、それを彼がモスクワに送り出した。これ故、時折、二次的な諜報情報を、彼によって、価値あるもの、重要なものとされた。カール・リムのような熟練した軍事専門家が足りなかった。これは「ラムザイ」グループの大きな欠点の内の一つであった。

それにもかかわらず、1936年初めから、ゾルゲのグループは全力で仕事を始めた。1936年2月22日、PKKA政治局長ヤン・ガマルニクがスターリンに報告した、モンゴル人民共和国への侵攻に関する日本の準備についてウリツキイとタイロフの間の直通電話での交渉のメモに関する。メモには、関東軍の増強、その構成と人員の特徴に関する

るデータがあった。極めて興味深い、この報告されたメモの下書き原稿が書庫に保管されていることは、「東京のエージェントの情報源」、すなわちゾルゲから得られた情報に言及しながら。

反応は直ぐにあった。3月1日、スターリンはアメリカ人のジャーナリストであるロイ・ゴバルト、アメリカ新聞連合「スクリプス・ゴバルド ニュースペーパー」代表と会談を持った。

アメリカ新聞連合「スクリプス・ゴバルド ニュースペーパー」代表

ロイ・ゴバルトとスターリンの会談から

1936年3月1日

ゴバルト：極東の状況に対して、日本における最近の出来事の結果をどう考えているのか？

スターリン：今のところ、言うのは難しい。このための資料が余りにも少ない。様相は全く不明瞭だ。

ゴバルト：もし日本がモンゴル人民共和国に全面的侵攻を決定した場合には、ソビエト連邦の立場はどうなるか？

スターリン：もし日本がモンゴル人民共和国へ侵攻し、その独立を奪おうとする場合には、モンゴル人民共和国を我々は援助しなければならない。リトビノグ次長はこれについて、最近、モスクワの日本大使に声明している。変わらぬ友好関係を示しながら。それをソ連邦は1921年からモンゴル人民共和国と保持し合っている。我々はモンゴル人民共和国を助ける、我々が1921年にかの国を助けたように。

ゴバルト：ソ連邦の肯定的な行動に対して、ウランバートルを占領するという日本の試みがあるだろうか？

スターリン：ある。

ゴバルト：日本はこの数日間に、モンゴル国境地域で何らかの行動を拡大したのか、ソ連邦が侵略と見なすような？

スターリン：多分、日本はモンゴル国境に軍の集結を続ける。が、国境紛争に対する何の新しい試みは未だ見受けられていない・・・。

書記長は明白に理解を与え、モンゴルに「満州のシナリオ」を実現しようとする、関東軍側からのどんな試みも、ソ連邦側からの決定的な軍事反撃にあうことを。

この会議の10日後、ソ連邦とモンゴル人民共和国の間に相互援助議定書が調印された。

この議定書に従って、ソビエト連邦はモンゴル領内に自分の軍隊を配置した。この議定書の締結は、日本の指導部にとっては、全くの予想外のことであった。

この関係については、次の書類が示している。ボロシロフへのウリツキイの報告メモ、1936年5月3日、モスクワでの日本の武官の補佐であるカオタニ（川谷？）大尉との会議に関しての。この会議で、川谷は必要性の考えを披露した、全てのモンゴル人の団結の。モンゴルの「吸収」に関する日本の計画は合法的であるとのことをちらつかせながら。同時に彼は主張した。現在、日本はこれを手に負えていない。というのは、イギリス、アメリカ、イタリア、ソ連邦との軋轢が余りにも大きいので。武官補佐はモンゴルに於けるソビエト空軍の「敵対的」動きに不平を述べた。その後、ウリツキイを公開交渉に引き出す試みをした。認めながら、モンゴルにおけるソ連邦の政策を「ずるい」、「日本のように馬鹿ではなく、乱暴でもない」。「貴方はよく知っている、我々が何をするのか、我々は何も知ることができていない、モンゴルで何をするのか」、会議の最後に、川谷が語っ

た。

## 反コミンテルン条約

反コミンテルン条約の締結に関する交渉の秘密の暴露での貢献はまさにゾルゲに帰する。同時に、語っておく必要がある。もちろんであるが、彼の情報はこの計画で唯一のものではなかった。60年代－70年代、情報の他の源、政治諜報員と無線士に言及することは許されなかった。裏切り者バリテル・クリビツキイと30年代におけるヨーロッパでの彼の諜報活動について言及し、話をすることができなかった。彼の回想記が1939年に出版されたにもかかわらず。歴史に興味がある全ての者がヨーロッパでそれを読んだ。これに関して、この時期のソビエトの作家は、ゾルゲについて書いた。自分の本中でソビエトの諜報員と「ラムザイ」グループのメンバーの貢献だけについて特記していた。

これ故、無線諜報に関する最初のしっかりした作品の著者（アニン、ペトロビッチ、「無線のスパイ」）に賛成することができる、彼らはゾルゲについて書いた：

「彼宛での賛辞が述べられていたのは、優秀な諜報員に敬意を表するだけでなく、ソビエトの無線諜報員の成功を隠すためでもあった。それについては意図的にソビエト連邦ではまれにしか思い出さなかった」。1991年の後になってようやく、仕事についての若干の情報が印雑物として現れた。ソビエトの無線諜報員と解読局、ОГПУと軍事省の。

PKKA参謀部に暗号解読部が1928年3月に人民委員会の命令で創設された。1930年に、それはОГПУの特別局に出向された。外国政府の暗号解読を一緒に行うために。1931年に部局は諜報局第5部に再編成される。が、第一に、ОГПУの特別局に従属にされて残された。部局長にはパベル・ハルケビッチが指名された。彼は1896年にポロネジ県に生まれた。オリョールの実科学校を終了し、1915年アレクセーフ軍学校に入学した。1年で学校を終了し、親衛歩兵部隊の諜報部隊長として前線に派遣された。1918年に、中尉まで勤め上げた。この年に、PKKAに入った。1923年に、軍アカデミーの東洋部を終了し、人民委員外国部に配属された。少しして、彼を特別局に異動させた。1930年に、ベルジンは軍事諜報にハルケビッチを移動させることに成功した。ベルジンは暗号解読部長に任命され、1931年から諜報局第5部長に。1935年から1939年まで大佐の地位で軍事諜報の暗号解読部を指揮している。1939年11月、彼を解雇する、「ボキエフスク反ソビエト組織化」に関係したとして。軍事諜報は熟練した専門家を失った、暗号解読部門で10年間の仕事歴を持っていた人物を。

1935年に、ИНО ОГПУの政治諜報が作動した。オランダでの非合法諜報員、今や有名なドミトリー・ビストロレトフは大金をはたいて、高位の外交官の使用人を募集した。その際、募集をしやすくするために、ドイツの諜報部の代表であると明かして。外交官の部屋に金庫があった。金庫の中には日本大使の外交暗号があった。そこまで諜報員がたどり着いた。部屋の主人の生活パターンを調べ、ビストロレトフは使用人と一緒に、外交官が不在の時に、部屋に侵入した、金庫の錠を試みた。が、とにかく、鍵以外に、数値の組み合わせを知る必要があった。一度目には金庫を開くことができなかった。数週間かけて、数千の組み合わせを試みた。ビストロレトフはとにかく鍵をやりこなした。その後、モスクワから呼び出した専門家が日本の外交暗号を写真に撮った。

30年代半ばに、ベルリンー東京、モスクワー東京のような超長距離に使える無線通信はなかった。これらの町では、日本の外交官達は自分らの暗号化した至急便を渡した、滞在している国の政府の通信網を経由して。モスクワでは、日本の外交官の至急便のコピーは、合同暗号解読部に入った。ドイツではゲシュタポに。バリテル・クリビツキイが自分の回想記に書いている、1936年7月末に、彼は知ることができた、ベルリンのIHOのエージェントがこの秘密の書き写しを手に入れることができたことを、撮り直した形で。大島と日本政府の書き写しについての情報を得るためのチャンネルが作動し始めた。ベルリンからもたらされた情報は、完全であった。モスクワでの日本大使館の電報の暗号解読は確かなものであり、それを補足した。

交渉についての情報がベルリンから、東京から、モスクワに届いた。最上層部に送られた文書を、ベルリンー東京の通信線で横取りし、その電報を解読した後に、特別局が入手した。この解読した電報は防衛人民委員会で報告された。しかし、交渉についての情報への重要な追加は「ラムザイ」グループがもたらした。ウラジオストクにある中間無線センターを経由しての東京からの無線電報は定期的にモスクワに届いた。この情報は郵便でもって補足された。急使によるモスクワへの配送とともに。諜報局長ウリツキイの署名のされた交渉に関する資料集は定期的に防衛人民委員会に報告された。彼の指示に従って、クレムリンに送られた。スターリンはベルリンと東京の間の交渉の事情に通じることになった。ドイツと日本の外交関係部署の長より詳しく知った。

6月19日、ウリツキイは、ドイツと日本の交渉に関する資料集をボロシロフに提出した。この資料で語っていた、日本とドイツの間の交渉の遅滞について、主として軍事同盟の締結を早めることのドイツの不本意故に。「ラムザイ」グループが手に入れた資料がこの報告書の基本となっていた。

諜報局長はグループの仕事を非常に高く評価した。7月20日の人民委員会への定期報告中に彼は書いた：「資料の報告集、それについて話をする。東京にいる我々諜報機関からの主に電信によるものである。情報源は貴方にはわかっている。いつも大事な情報を送ってくれている、一度ならず、本物の極秘の書類資料を。例えば、今我々はこの我々の諜報機関から、東京にいるドイツ武官の書類を手に入れた（貴方に別に送られている）。我々はこの報告書の真実を信用することができる。ドイツ参謀本部からの書類を直接に分析することで。これは他の資料と並んで、東京における我々の情報源の真剣さを実証している。今、我々はこの情報源から正確な情報を得た。日独交渉の裏面に光を当てた」。

日独協力についての自分の報告書の中で、それについてウリツキイが書いていた、オットーはドイツ側の興味を指摘した、赤軍に関する手持ちの資料の交換について。戦争に対する日本の準備の程度の特徴に関していえば、ここで、ドイツの武官の評価は非常に控えめなものであった。オットーは自分の報告書に記していた、日本には長引く戦争に対する資源の在庫はなく、財政状況は非常に悪く、産業の発展は戦争の要求に依っていないと。特に、報告書では強調されていた、日本の大都市は空爆には脆い（ウラジオストク付近の飛行場からソビエトの爆撃機による空爆のことを言っている）、ヨーロッパの国の前線の軍隊と比較して日本軍の技術的な装備は貧弱である。

報告書は意識的にそこへ送られた、日本の間違った期待を排除するために。特に、これ

らの国の関係における軽薄な約束を、独日条約の締結の際には、ドイツを引き受けなければならぬ。

交渉についてのオットーの暗号電報を手に入れた後、明らかになった。帝国の大臣はドイツ国防軍に「ぞっとした」、オットーの結論はそれだけ強烈な印象を与えた。ドイツは状況を極めて十分に見通せるようになり、交渉の進行はゆっくりとなった。この後に、オットーの新しい報告が引き続いた、十分な準備無しでソ連邦への日本の時期早々の侵攻を引き留めることを呼びかける。

人民委員会の命令に従って、資料集は6月19日にスターリンに送られた。スターリンがオットーの報告書に目を通したかは知られていない。が、資料集を彼は見た。明らかに、彼には疑念が生じた、日本とドイツの間の交渉の引き延ばしについての諜報員の結論に、主に、軍事同盟を締結を促進することをドイツは希望していないということからの。これ故、報告集に彼の決済が為された：「私の考えでは、ドイツ人グループから発せられた迷い事である。ヨシフ・スターリン」。報告集はゾルゲの無線電報に従って主に作成されていた。自分の決済で、スターリンは「ゾルゲ」グループへの不信を語っていた。これまで東京から送られてきていた情報の信頼性に疑念を持っていた。

「主人」（スターリン ＊）の意見は当時は法律であった。諜報局で慎重な調べが始まった、全ての情報の再調査も、これまでゾルゲから届いた。しかし、調査後に明らかとなった、「ゾルゲ」グループの全ての情報は十分に信用でき、それらの中に何の迷わせる物はないことが。兵団長ウリツキイにはゾルゲを守ろうとする勇気があった。ウリツキイは自分の報告書に記した、ゾルゲから東京にいるドイツ武官オットーの報告書を手に入れたことを。諜報局はこの報告書の真実性を調べることができた、ドイツ参謀本部から直接に類似の報告書を得て。ゾルゲから情報が記された郵便物が届いた、日独交渉の舞台裏に光を当てた。ウリツキイが自分のメモに記した、「・・・ベルリンと東京の間の横取りし解読した電報の写しの内容との、我々の東京の諜報機関報告の一致は日独交渉の状況についての我々の情報の信頼性を高めている」。

諜報局の配下にある資料を分析し、ウリツキイは次のような結論を出した：

- 「1. 日独交渉は5月－6月の間は、極めてゆっくり進んだ。
2. 交渉における主導と特別な活発を日本が示している。
3. ドイツは目下の所、日本との条約の締結を引き延ばしている、具体的な軍事義務でもってドイツを縛る・・・」

彼の意見に依れば、交渉におけるドイツの自制は説明される、日本は未だ大戦争の準備ができていないと、第一番目にソ連邦との。軍事同盟締結の場合には、日本は持ちこたえられない、余り早くに進撃できない。ドイツが日本に西側で決定的な援助を示すことができる前に、破られるであろう。それ以外に、1936年に、ドイツはアメリカとの相互関係を悪化したくはなかった。極東におけるイギリスの基本的な敵国との余りにも密な軍事同盟を示したくはなかった。

もちろん、報告のメモでは、スターリンの意見を無視できなかった。諜報局長はそれを考慮しなければならなかった。これ故、この独特な報告書の最後に次のことが書かれていた、「・・・可能性を除外してはならない、先に進んでいる方向違いの、責任ある高官の

デマに至るまで、軍事同盟についての極秘密の平行している交渉を確りと隠すために」。ウリツキイが記している、この段階での軍事諜報の課題は次の点にある。日独の軍事ブロック準備に関する最も秘密の手段を完全に暴こうと志向すること。更なる出来事が示した通り、この課題を諜報員はものの見事に遂行することができた。

最後に、この書類の分析について語っておきたかった。ウリツキイはスターリンの評価に同意していなかった。彼は交渉に関するゾルゲの情報を全て手に入れていた。彼を信用していた、もちろん、彼（ゾルゲ \*）の情報を高い水準で再審査しながら、ドイツ参謀部まで至るまで。彼は横取りし、解読した日本の電報内容全てを知っていた、ベルリンー東京とモスクワー東京ラインの。彼は情報を分析し、比較することができた。他の情報源でもう一つの情報源を再審査することができていた。彼が自分のメモに書いていた結論が語っていた、何の迷わすものはないと、ドイツと日本の間の交渉の遅延はこの時点では事実であると。

ソ連邦を第一目標とした軍事同盟の締結を、日本は余りにもしつこく急いでいた。日本軍の指導部は、アジア大陸での軍事衝突を余りにもしつこく開始したがっていた。これ故、メモの最後にウリツキイはもう一度、スターリンの意見に矛盾する意見を書き込んでいた：「前述の判断とともに、私には思われるが、日独の交渉の実際の状況をより正確に反映している」。この書類と他の諜報資料を人民委員会に提示し、彼は指示を要請した、スターリンに。残念ながら、知られていない、このメモがスターリンに届けられたのかは。書記長の意見がどのようなものであったのか、軍事諜報の指導者の結論に関して。

この情報に対するスターリンの不信を評価する傾向が研究者達にはある。ゾルゲに対するスターリンの否定的な評価の証拠であるかのように、スターリンはゾルゲを「ブハーリン派」と見なしていた。それにもかかわらず、客観的秩序の判断をすることが出来た：あり得る、スターリン、彼の所に集められた大量の情報（軍事的、政治的、外交的）に支えられて。それ以上に、マルクスレーニンの科学的分析についての自身の理解で、スターリンはは見なした、2つの最も活動的な体制は必然的に同盟を締結するであろうと。その際に反ソビエトを基本として。これ故、交渉の遅延についての噂は無駄なことである、偽情報の宣伝であることがあり得る。実際において、この年の末に、反コミンテルン条約が締結された。若干の遅れがあったにもかかわらず。

交渉についての情報は、ドイツ大使館から、尾崎秀実（ほつみ \*）から、ブランコ・ブーケリッチから届いた、彼はこの時しっかりとした関係を持っていた、イギリス、フランス、アメリカの大使館と。東京に任命された同じく外国人ジャーナリストの中に。西側の大使館は同じく秘密交渉の情報を得ていた。この情報はブーケリッチの知るところとなった。これら全ては中心にいるゾルゲに伝えられ、交渉の詳細を知ることになった。中央への情報は定期的に伝えられていた。東京ーウラジオストクーモスクワ間の無線通信は正常に作動した。条約に述べられている秘密協定の基本的内容が明らかとなった。モスクワに書類のテキストが送られた。それは条約におけるドイツと日本の立場を完全に暴露していた。

1936年の夏と秋の出来事を評価し、数年後にゾルゲが書いていた：「本当の最初から、私が知ることとなった、条約の何らかの変更が検討されているということ。私は理

解した、ドイツの上層部と影響のある日本の軍部の指導者達は、2国間の単なる政治的接近ではなく最も密な政治的軍事的同盟を欲していた・・・これ故、私は本当の最初に、ベルリンにおける秘密交渉を知ることになった。大島、リッペントロップ、カナリスの間での。2国間の関係の観察は私の活動の最も大事な課題の一つとなった。条約の交渉時に、ドイツと日本に現れている反ソビエト感情の力はモスクワにとって不安材料であった」。

10月に、独日秘密交渉は完遂に近づいていた。そして、これと同時に、人民委員会外交部は、この交渉についての沢山の完全な情報を入手し続けていた。人民委員会次長リトビノフは10月22日、日本にいる大使ユレネフに独日交渉について詳細に報告をした。自分の手紙で彼は書いていた「我々の手にしている完全に信用できる情報に従えば、ベルリンでの交渉は強く前に進んでいる。多分、コミンテルンに対抗する闘争についての日独合意の締結に行き着いている・・・この合意と平行して、秘密の同盟条約の締結についての交渉が進んでいる。我々に対抗することを目的とした」。

11月半ばには、ソビエト政府はもう疑いを持たなかった、独日合意は近日中に調印されることを。11月14日、リトビノフはユレネフに伝えた。彼は外務大臣有田と会い、彼に伝えた、ソビエト政府は情報を得たと。直接に或いは間接にソ連邦に対抗した独日合意の差しせまった手続きについて。

委託は遅れることなく行われた、11月16日、東京からモスクワへ、ユレネフと有田との会談の要約が暗号文で届いた。ソビエト大使の言明を聞いて、島の帝国の外務大臣は語った「日本とドイツの間に同盟が成立したという噂を私は知っている。この噂が最近頻繁となっている。が、これは全く誤解だ」。声明は現実には一致していなかったが、これは有田を少し不安にした。明らかに、彼は古い規則に従っていた。自分の考えを隠すために、外交官式の話をした。

次の日、ストモニャコフ（？ ＊）が電報で、順番を無視して送信し、ユレネフに伝えた。彼が再び有田を訪れ、有田に声明を発表するようにと：ソビエト政府はわかっている、 Kommunismus との戦いの協定は、他の日独協定のための単なるカモフラージュであると、ソ連邦に直接に向けられた。日本の外務大臣に明白に理解させた、ソビエト政府は彼の先行する説明を満足なものを見なしていないことを。次の日、「イズベスチャ」に T A C C の公式の報道が公刊された、日独秘密交渉について、秘密協定の差し迫った署名について、ソ連邦に向けられた。

11月28日、第8回緊急ソビエト大会では、新憲法計画の審議をしていた。外務省人民委員リトビノフが発言をした。大会の全ての代議員達が興味を持った、ソ連邦とドイツと日本との関係に、日独交渉に、反コミンテルン条約の署名の新聞報道に。

大会の演壇からリトビノフが語った：

「情報に詳しい人たちは、信用することを拒否している、日独協定の公開された2つの章の作成のために、15ヶ月が必要とされたことを。この交渉を行うことは、日本側から軍の将官に依頼することが、ドイツ側から特別の外交官に。この交渉は極秘の元で行う必要があった。ドイツと日本の公的な外交官達からも秘密にして・・・

公開された日独協定に触れると、そこに意図を見つけ出せないと私は紹介する。なんとなれば、この協定は実質的に何の意味も持っていなかった。協定は他の協定のカモフラ

ジュに過ぎない。同時に審議され、仮調印され、多分、調印された。それは公開されることはなかった。公表すべきではないので。私は確信している、私の言葉の全責任を自覚して。すなわち、単語「 Kommunismus 」さえ言及されていないこの秘密書類の作成は15ヶ月間の交渉を費やした、日本の武官とドイツの特別外交官の」。

大会でのリトビノフの演説は全世界に大きな印象を与えた。もし外務人民委員会が大会の演壇から秘密協定の作成と調印を表明するならば、反コミンテルン条約について何の関係も持たない、すなわち、ソビエト政府には論争の余地のない証拠があった、交渉に関して、秘密協定に関して。これは多く者に絶対的に明らかであったが、皆が疑った。ロンドンでは、信ずることはできなかった。「ロシア人」が、ベルリンと東京との隠していた秘密を探し当てることができたとは。外交の舞台裏で良くないことを行っていると知ることができることを。

12月1日、イギリスの大使がリトビノフとの会談で、明らかに、ロンドンからの影響無しではなく、質問をした、ドイツと日本の間の秘密協定の締結について。ソビエト政府は情報を持っているのかと。人民委員の答えは短かった：「私は彼に答えた、そのような協定の存在について大会で公にもし声明したならば、我々にはこのためには反論できない証拠が必要である・・・」

しかし、このような説明がイギリスの大使を満足させたならば、素晴らしい適用の価値のある根気を持った日本の外務大臣有田は何もかもを納得させ続けた。何の日独秘密協定は存在しないと、これは全て噂であると、それ以上のものではないと。日本の大臣に身の程をわきまさせることとなった。

新しい日本の大使重光は、12月7日に、自分の信任状を渡した。次の日、彼とリトビノフの会談が行われた。全ての課題が審議された、日本とソ連邦の間の相互関係に関係した。もちろん、日独交渉と、この2国間の然るべき協約の締結についての課題も審議された。リトビノフは、明らかに、自分の時間と大使の時間を尊重し、あけっぴろであった：「我々はこの協定の文面を知っている、その付属文書全部についても。我々は完全に無駄であると思見している、保証する全ての試みは。締結される協定はコミンテルンに対するものであり、ソ連邦に対するものではないとする。時間の節約から、この課題は議論しない方が良さそうである・・・」

この会談で、日本の大使には何をすることが残されていたのか？ 彼は非常に悔やんでいると、声明することになった。リトビノフ氏が公的な説明を受け入れることができると見なしていないことを。日本の外務大臣が与えた、秘密協定は存在していないという。これ故、日本の大使は、留まった、俗物的な言葉で表現して、「個人的な興味で」。全ての点で「アイ」(? \*)として残し、このデリケートな問題に関して議論を終わることが必要であると。リトビノフの返答は丁重で、沈着で、何の曲解も残さなかった：「私は有田氏に、秘密協定の不存在に固執しないように助言した、なんとなれば、我々は結局、文書の公開で決めることができる、それは有田氏の約束を我々と他の政府へ奇妙な光の下に出す(? \*)」。暗示は新しい日本大使だけではなく、有田にもわかったのは明かだった。リトビノフのこの声明の後、日本の外務大臣の、独日交渉に関する全ての発言は直ちに止んだ。

締結では、公式の外交文書ではなく、「ラムザイ」の意見を引き合いに出すことができ



る。巢鴨刑務所内で書かれた彼の回想記中で、彼は書いていた：「ベルリンとワシントンと違って、モスクワは全てをよく知っていた。中国と日本の状況がどうなのかを。それ故、モスクワは誤解を招くことはなかった。極東問題に関係してソビエト連邦が持っている知識は非常に多かった。アメリカとドイツの政府が持っているものより」。

大会におけるリトビノフの演説と日本大使との会談は、ゾルゲグループの1936年の諜報活動の最終段階となった。東京から送られた情報は、上層部だけではなくボロシロフとスターリンに報告された。彼らは職務として、世界を舞台にした全ての基本的な出来事を知っておかなければならなかった。この情報は外交の上層部に、人民委員リトビノフに、彼の筆頭次席ストモニャコフにも伝えられた。その情報は最適時に最大に利用された。これは諜報のもっとも利用価値のあるものであった。国の上層部への情報の通達だけではなく、得られた情報の高度な外交レベルでの利用、自分の国の国際的な威光を高めるための。

もちろん、ゾルゲは知ることができなかった、新しい日本大使とリトビノフとの会談内容を。新聞に、会合についての短い報道が為されただけであった。他の全ては書庫に隠された。が、大会でのリトビノフの演説を彼は知った。これについては、ドイツと日本の全ての新聞が書いていた。「ラムザイ」のような察しの良い諜報員は、良く理解した、人民委員が何を利用したのかを。送った枠の中で、特に、秘密の日独交渉についての彼の情報を。今語るの難しい、彼がどのような感慨を持ったのかについて、日本とドイツの新聞を読んで。が、彼は為した素晴らしい仕事に対する満足感があった。この演説によって、もちろん本能的に、諜報員は理解することができた、彼の大変な仕事が無駄にならず、情報を書庫に送らず、完全に利用したことを。

### **ロシアの熟練諜報員が語っている・・・**

1936年に、「ラムザイ」グループから得られた情報を、外交手段にだけ利用してはいなかった。クレムリンで、フルンゼ通りの防衛人民委員会の建物では理解した、条約の締結と秘密協定の署名後、極東における紛争の危険がより高まったと。ゾルゲの情報はこの結論を断定していた。これ故、関係、或いは現代語で表すならば、西と東の国境における力のバランスは1936年には達成でき、維持されていた。シベリア鉄道での軍と軍事技術の大移動は西へも東へもなかった。

イルクーツクからウラジオストクまでの広大な領域の国境を守るために、PKKAの人員と武力の25%を投入していた。135師団の内の25師団、114.5万人の内の29万人をこの地域に配置した。3700台の大砲と3206台の戦車が極東の国境を防衛した。重爆撃機TB-3を300機を有する6個旅団、新型爆撃機CBを345機で武装した4個の高速爆撃旅団が極東における空軍の打撃グループを形成した。極東の境界に集中できる飛行機の機数は、太平洋艦隊の飛行機も含めて、2189機となった。

1937年1月1日には、赤軍の極東における兵員数は拡大され、関東軍の1.5倍となった。大砲、飛行機、戦車に関しては、赤軍の優位性は圧倒的となった。全体的な優位性は、1934年-1936年に関東軍に対して部分的に為され、維持され続けた。

極東地域における軍の兵員数の拡大をしながら、ソビエトの軍指導部は、関東軍の止ま

ることのない兵員と武力の拡大を、満州を拠点とした戦争の準備と見なした。ソビエトの国境に向けた新しい鉄道と幹線道路の建設を、1千機の飛行機を受容できる空港の開設を、日本から満州へ移動させた新しい師団を収容することができる兵舎の建設を。ソビエトの政治および軍事指導部は見なした、満州で日本の部隊の急速な集中が可能となっていると。極東に十分に強力な部隊を維持し、戦争が始まった場合には、最初の一戦で関東軍を粉砕するために、満州地域に軍事作戦を移すために。

この時期、モスクワでは、ゾルゲグループの諜報活動をどのように評価していたのか？

ゾルゲは仕事について文書を残している。その中で、1936年のグループの仕事を詳細に分析している。この文書からの抜き書きである：「日独関係の発展の基本的問題及びドイツと日本の戦争準備手段に関するラムザイの情報は、時節にかない非常に価値があった。特に、軍事共同についての日独関係と交渉問題に関して。交渉の内容と過程の完全な様相を与えた、ドイツ大使の本物の秘密書類との接触を基礎にして。ベルリンの日本武官大島の活動を明らかにした。ドイツの参謀本部の立場とドイツ大使ディルクセンの視点、武官オットーの、日独協力の問題の」。評価は明かである。全く詳細である。確信を持って語る事ができる、ゾルゲグループの正確に注意深く再検査した情報の御陰で、モスクワでは、日独秘密交渉について、実際において全てを知ることとなった。この情報は完全に利用され、ドイツと日本に関する関係に関する外交政治の基本的立場の立案において、国の西と東の国境の強化に関する手段の立案において。

1936年12月、ゾルゲはモスクワから連絡を受けた。紙の上で暗号を解読した後、文章が完成した。諜報員の心を酷くどきどきさせた。諜報局が日本の自分のグループに課した仕事の最終的評価は非常に高かった：「・・・合意に至った日独交渉の全場面における、完全な貴君の情報を特記しないわけにはいかない。貴君は我々に正しく情報を提供してくれた。この問題において、我々を完全に助けてくれた」。最後に、局長代理アルツェフの署名を示す印を付けた。

労農赤軍の諜報局

1936年12月

第20906 極秘

ソ連邦防衛人民委員会へ

ソビエト連邦将軍 ボロシロフ将軍へ

報告します：

2年余りの間に、東京のドイツ武官の私的秘書として、非常な困難な条件の下で、我々の仲間が仕事をしている。全ソ連邦共産党（ボリシェビキ）の党员ゾンテル・イカ・リハルドビッチが。

この同志は常に、日独関係についての資料と書類を我々に供給している。<・・・>

彼と一緒に、無線士として、クラウゼン・マクス同志が働いている。不眠不休で、大変なエージェントと技術の条件下で、我々と無線通信を維持している。

特記する、これら2人の同志達は東京での36年2月26日の事件の大変な時に、我々と絶えることのない通信を交わし、我々に事件の全容を通じさせてくれた。

現在、この2人の同志の仕事は特別な価値を持っている。困難な条件下での長期にわたる仕事のもと、ソビエト連

邦からの長期にわたる別離のもとで、彼らは大きな精神的な疲労を感じている。この時期、彼らを交代させることができない。仕事のためには、彼らの仕事を継続させる必要がある。彼らを彼らが今いるその位置にしっかりとさせて。

この同志達に「赤旗勲章」を授与させるという決済をお願いする。これは彼らの励みになる。

PKKA 諜報局長 兵団長（ウリツキイ）

作戦の指導はモスクワの中央から実現した。1936年に、諜報局は何を想像していたのか？ どのような人物がそこで働き、誰が東京の諜報員を指導していたのか？ 彼らの専門的な下準備はどうだったのか？ 作戦における彼らの視点は？ 仕事の方法は？ 東京から得られた情報と文書資料の分析と評価は？ 一般的に、モスクワの諜報機関の毎日の台所—内部から覗くこと（？ ＊） これら全ての質問に、1936年4月にこの機関に入り、1937年5月までそこで働いた人物が答えている。この後、「人民の敵との関係」で諜報局から彼を解雇した。彼は永久に諜報から消えた。そこで彼は長い間仕事をしてきていた。モスクワでバスの運転手となった。明らかに、НКВДの監視の目に置かれた。これが彼の命を助けた。この人物について読者に紹介する。

ボリス・イグナチエビッチ・グジー退役連隊コミッサール。現在、2004年には彼は100歳。彼はロシアの熟練した諜報員であった。優秀な諜報員としての素晴らしい記憶、明瞭な知力、20年代から30年代における状況と事件の素晴らしい知識。彼の個人的な人生に触れた時、非常に退屈な発言。

ボリス・グジの回想記から

1930年—1931年の間、私はKPO（？ ＊）の第6局の局長補佐であった。ОГПУの仕事、特に、「ベスナ」の仕事に関するオリスクとスチルンの危機的関係の直接の目撃者であった。私と親友のアガヤンツは仕事からのオリスクの解雇を体験した。彼の代わりにレブレフスクの出現、仕事「ベスナ」の鼓舞者で組織家。そのような条件下での仕事はもう不可能であった。私はアガヤンツと一緒に、我々を東シベリアに再び作られたОГПУ全権代表部での仕事へ派遣するようお願いした。私とアガヤンツには日本の諜報員と剣を交える熱い情熱があった。1931年末のその状況において明らかに我々を脅かしていた。インチキの仕事に就きたくはなかった、確りと働きたかった。これ故、東シベリアに派遣することを決めた。

イルクーツクで、作戦「メチタテリ（空想家）」の作成とその遂行に全力を傾けた。作戦は中央の特別局と外国局の全体の監視下で進んだ。モスクワで肯定的評価を得た。明らかに、当時、極東局で東京に派遣するアイデアが生まれた。新しい諜報機関として、グジを、熟練した防諜機関員として、その上、諜報の仕事に熟練を有していた。アルツゾフに呼びかけ、良くグジを知っているИНОの新しい長は「了解」を与えた。1933年末に、彼をモスクワに呼び出した。極東における2年間の仕事が終了した。

グジが東京へ出発する前に、アルツゾフが彼の門出を祝った、大事なことを指摘しながら。解明すること、諜報の仕事の遂行のために何らかの条件があるのかの、外国からの日本のエージェントが成功する行動をするための。他の大事な課題、情報源「クロトフ」の募集の過去を身につけること、更なる利用のその期待と展望を打ち立てること。将来の定置諜者に忠告をした。複雑で極めて危うい国際状況の下で、失敗は重大な結果をはらんでいると。定置諜者だけではなく、彼の身近な援助者に対しても、ОГПУだけではなく、

政府にも。忠告は深刻に響いた。新しい定置諜者はいつもこれを理解していた、東京での2年間にわたる仕事では。

指令と相応する諜報下準備の後、仕上げと人民委員会部局での書類の受領。シベリア鉄道が、日本における大使の新しい3番目の秘書B・A・ギンツェ（この名前でグジの書類が登記された）をウラジオストクに運んだ。そこから、数日間かけて、船で東京へ。

到着し、新しい諜報機関のための状況調査の後、大変な手間のかかる仕事が始まった。長い間、「クロトフ」(? \*)がИНОの東京の諜報機関の唯一の情報源であった。モスクワでは理解していた、東京の全ての諜報の仕事を一人数の情報源を利用してはできないと。これ故、募集の仕事を活性化する指令を出した。グジは全権代表部の通訳の募集を実現した（匿名「プロスタク」）。これは警察の線であった。その部署は日本人の監視であった、大使館で働いている。これは期待できる情報源であると見なされた。警察本署の外国部署からの警官の募集が始まった。この情報源（「スク」）は次第に外国部署の仕事から資料を与えるようになった、特に、外部監視の報告書を。情報源は、疑いなく、期待が持てた。

定置諜者としての2年間の仕事の後、グジを東京からモスクワに召還した。新しい定置諜者に仕事を渡し、総括をする必要があった。アルツゾフによって出された基本的な課題、諜報機関「クロトフ」の主要情報源の期待について結論を出すこと、はなされた。彼から得られた全ての資料は注意深く調べられ、分析された。全体的な結論、期待される情報源であり、彼によって渡された書類は本物であり、疑う余地はないと。同じく、日本での仕事の条件も調べられた。

1936年1月に、モスクワへグジが到着した時、明らかとなった、彼を東京に派遣したアルツゾフが諜報局に異動されたことが。保安機関における状況が、特に、ИНОで、極めて緊迫したものとなっていた。外国から帰還した職員の受け取り方に影を落としていた。滞在した国における状況と諜報活動の分析を伴った長く詳細な会議の代わりに、空虚な話し合いの公的な会合、保養所への利用券—別命あるまでの休暇。そのような扱いは疎外を作り出した、到着した諜報の職員を傷つけた、無関心、無頓着で。すなわち、ИНОの長の補佐ゴロジャニンはグジにそのような態度をとった。これ故、驚くに当たらない、保養所から戻り、彼がアルツゾフに連絡したことは。帰還を祝福し、諜報局の彼の所での早急の出会いを提案した。

会談は活気があり、内容の濃いものであった。アルツゾフは第2局局長のカリンを呼んでいた。2時間以上にわたり、この2人の諜報のエースは、諜報員としての経験が浅い者に耳を傾けた。隠されない興味と注目を持って、多くの質問を浴びせて。特に、彼らの興味を引いたのは、国の憲兵的政治体制、日常生活、外国人に対する関係。全体として、ИНОにおける会合と似ているところはなかった。

会談の後、諜報局の仕事に移動することをグジに提案した、日本方面に関する第2部局に。もちろん、ИНОの元定置諜者は同意した。アルツゾフは20年代初めから彼の教師であった、彼はカリンを熟練した諜報員として知っていた。彼から、多くこのことを学ぶことができた。アルツゾフはИНО局長スプツキイと打ち合わせができていた。全ての書類が書かれ、署名され、機関に送られた。第2局の新しい同僚は仕事に取りかかった、最終司令を待たずに。

7月21日、防衛人民委員ボロシロフが極秘の命令第00575号に署名をした：「HKBДから来たグジをPKKAの要員とする、PKKAの諜報局の指揮下に加える」。

ボリス・グジの回想記から

諜報局における仕事始めについて

仕事の最初の日から、カリンは私の注意を「ラムザイ」作戦の書類に向けた。そこで、私は初めてゾルゲを知った。1936年4月の頃であった。この作戦に従事したのは、局長ウリツキイ、彼の第1次長アルツゾフ、部長カリン、日本部部長ポクラドク、そして私であった。実際において、第2局が作戦全てを監督した。最初から最後まで。私は入手した資料を調べ、それらを分析した。指令の手紙と「ラムザイ」の課題の計画を準備した。ウリツキイとアルツゾフは手紙と電報に署名をした。

実際は、次のようなことになった、私はカリンの補佐となった。まず第一に、日本に関する部局の仕事に、私がなじめることが委された。しかし、私が「ラムザイ」作戦の資料に慣れた時、ゾルゲの伝説の不安定さと非使用済みが私を酷く驚かせた、予想もできない危険性を伴っている。自分の印象をカリンの意見と突き合わせ、その後、アルツゾフの、私は確信した、この問題は、彼らの意見に従って、第一の問題であると。我々の目前の課題、全面から考えること、ゾルゲの立場を補強するように、彼の仕事の安全を図るように、崩壊の恐れの状態から。危険は最大であった。

諜報局にやって来たИНОの元防諜機関員と諜報員には、非合法のための伝説の作成にそれなりの視点があった。彼らは慣れていて、十分な入念さとデリケートさを持って、自分の同僚の伝説の作成に関して。彼らによって、特にアルツゾフとカリン、ゾルゲの伝説が作られた。1933年に諜報局の同僚によって作られた。信じられないほど脆く、非論理的であった。もちろん、反論することはできる、ゾルゲはそのような伝説を持って5年間をしのぎ、成功裏に仕事を成し遂げたと。ドイツと日本の防諜機関によって彼は暴かれなかった。防諜機関は彼のコミュニストとしての過去を疑わなかった。しかし、ゾルゲの党専従としての文書はドイツ警察の書庫に保管されていた。それが見つかった場合には、どんなことになったか。ゾルゲは何の説明もすることができなかった。何故彼がコミュニストからファシストのジャーナリストになったのかを。そのような説明は簡単には彼の伝説では予見されなかった。

作戦「ラムザイ」の伝説の作成は研究者には知られていない。この作戦に関係した書類は、明らかに、決して秘密解除されないであろう。我々は決して知り得ない、その作成者達が指導した以上のことは。まじめに採用してはならない、ベルジン、オスカル、ワシリイとの間の論争と議論の「信用」できそうな記述を。コレステロフ、コロリコフ、ゴリヤコフ、ポニゾフスクの本の中で与えている。研究者達は仮定を作り上げ、説を提起することができる。しかし、事実は残っている、伝説に関して、コミュニストからファシストのジャーナリストへの変身を裏付ける何の書類も予見されなかったという。1933年夏に、ベルジンの所へ自分の名で行って、嫌な問題について身の証を立てたらしい、コミュニストがファシストになったことの。しかし、日本に8年間住み、ベルリンから誰かが出現することを毎日待ちながら：「その通り、君はコミュニストだ、ゾルゲ博士！君についての書類がサツ（＝警察の卑称）の幹部達の黒板に」、非常に大変であった。ゾルゲは知っていた、書類が存在することを、書類が何時でも表に出るかもしれないことを。8年間彼

はこのことを忘れることはなかった。暴露の危険のある元での8年間の生活、彼にはこれはどんなことであつたらう？ 作戦のそのような計画は大変な見込み違いであつた、第一にベルジンの、「ラムザイ」作戦の主たる作成者であり教唆者であつた。

グジの回想記－伝説の深刻な欠陥説の裏付けの一つ：

「我々の計画は、問題で持ちきりとなつた。ゾルゲの実際にあり得る崩壊の警告の、明らかに不十分の伝説故の。もっと正確に言えば、殆どその不存在の。常時、彼の過去の露見を心配していた、ドイツ共産党の専従職員としての。予想された、遅かれ早かれ、ファシストはゾルゲのこの過去まで掘り出すであろうことが。そして、このことを考慮しながら、我々は伝説を十分に信用できるものとして作り上げる必要があつた、この点に関して。

もしかしたら、我々が当時考えていたように、彼の共産主義の”誤解”からのゾルゲの離脱の”歴史”についての説の作成は、インターナショナルの思想の崩壊の、ドイツの民族的自尊心の明白な過小評価の影響下であつたのかもしれない。文書資料の準備、記事、日記、後になってゾルゲが書いた。それらに彼は頼り、引き合いに出すことができた。彼の離脱の証拠として、”共産主義の戯言”と国家社会主義の立場への転向の」。

しかし、もし、アルツゾフ、カリン、グジらがゾルゲの危機感と運命に対する心配を味わっていたならば、もちろん、「ラムザイ」作戦、日本部局長の所で、直接作戦を指導していた、若干他の意見があつた、作戦について、ゾルゲ自身について。グジの回想記から更なる抜き書きを：

「ポクラドク大佐と初めて出会つた。彼の部局が作戦「ラムザイ」を監督していた。最初から、私を驚かせた、ポクラドクの奇妙な関係が。その後、説明があつた、彼が軍事諜報を過小評価しているとの。彼は軍事分析家。日本軍に研修生として滞在し、日本軍についての本を書いた。日本語をよく勉強していた。何故か、彼は一般労働者を気に入ってゐなかつた。純粋に諜報活動をする狭い専門家も。彼はゾルゲをそのように見なしていた。彼を素人と見なした、彼からは何の成果も期待してゐなかつた。しかし、付き合つて行くにつれて、我々は理解し合えるようになっていった。

私は強調した、軍事問題の政治的的局面を、深い研究の必要性を、日本軍の戦略的計画の、帝国主義的政治とこの問題の関係を。私は証拠として実践の例を挙げた、ИНОだけではなく諜報員の、クリビツキイのような。ヨーロッパの諜報機関、諜報局に交渉の暗号電報を伝えた・・・大島とリップントロップの間の」。

作戦「ラムザイ」のより成功ある指導のために、中国に臨時の諜報機関を設置することが決まつた、経験ある職員を長とした、ゾルゲの活動を調整することができる。この人物はゾルゲをよく知っている者でなければならなかつた。彼の完全な信頼を利用し、極東の軍事政治問題分野に大きな知識を有しており、軍事諜報の指導に十分に大きな影響力を持っている、彼の意見を尊重するために。そして、遂行において彼の要請を採用した。何人かの候補者を調査した後、アルツゾフとカリンは結論に達した。中国における最適な指導者はカリンの補佐である軍コミッサールのレフ・ボロビッチであつた。もちろん、その人物は「臨時の」定置諜報者としてだけでなく、中国における他の大事なことも遂行しなければならなかつた。予想することができた、書類のような証拠は未だない故に、ボロビッチに復興と指導を委ねたという。1935年5月にブロンニ「＜アブラム＞」の崩壊後に潰れた上海の諜報機関の。この決定がされた時、局と部局の状況を、ボリス・グジが自分

の回想記で伝えている：

「ラムザイ作戦における基本的問題の一つは、中央とのより密接な生きた連結の確立であった。日本に近い場所での臨時の代表という形であったにもかかわらず。これは説明された、ゾルゲ、全ての彼の肯定的資料によれば、彼の諜報員としての肯定的な枠内で完全に書かれた（国際ジャーナリストの経験、博学、言語の知識、非合法仕事の経験、非合法活動の知識、個人的な勇気、機転、社会性、組織力、得た情報の確かな扱い）、は専門的な諜報員としての必要な経験を持っていなかった、敵の防諜組織の仕事に不慣れであった。彼は諜報局の中央機関の熟練した代表との出会いを必要としていた。

これ故、長期にわたって上海に「アレクス」を向かわせることを決めた。考慮したのは、ゾルゲはしばしば連邦にやって来ることができなかつたことを。が、彼は常に指導を必要としていた。それはいつも無線通信で実現することはできていなかった。中国で、特に、上海と北京へは、ゾルゲは旅行をすることができていた・・・ドイツの新聞の政治特派員として、自然にそして何の障害もなく。彼は中国での出来事に興味を持っていた。

ついでながら、当時、上部から、指示のためにモスクワへゾルゲを召還する提案があった。この提案は明らかにゾルゲに対する不信と検査の願望に基づいたものであった：もし彼が指令のためにモスクワへ来ることの提案を拒否したならば、すなわち、これは彼の変節の証拠となろう。もしやって来たならば、その時には・・・。無線電信のやり取り後、彼と一緒に決めた。モスクワへの旅行は簡単ではない。大きな時間の損失をはらんでいる。彼の崩壊の原因になり得る」。

ボロビッチは1935年1月に諜報局に帰還した。時は不安であった、ベルジンとアルツゾフを長とする軍事諜報部の指導部は、全ての熟練した諜報員と諜報機関を戻すことに努めた、「チョコレートの家」(? \*)に。数年の間に、諜報局は大いに変わった。新しい組織構造、新しい部局、それらは20年代にはなかった。新しい人物。彼が20年代に勤めていた諜報局は2つの部局に分割された：西と東の部局。東の部局の次長にボロビッチが任命された。

明らかに、指導部は見なした、彼は十分に長く（8年以上）ヨーロッパで働いた。見抜かれ、国の防諜機関の監視下に入っているかも。これ故、彼の諜報活動の舞台を変更することに決定した。彼のためにアジア諸国を選択した。そこでは彼は誰にも知られてはいなかった。1935年11月、特別な軍位を与えた、ボロビッチには師団コミッサルの軍位を与えた。これは当時は少将の位に相当していた。軍事諜報の将軍は自分の専門職に戻った。

中国へのボロビッチの任命時、彼は個人的にゾルゲを知っており、1933年初めには、国際情報ビューローで働きながら、彼と出会い、いろいろな外交的な問題を議論した、東京への旅行の準備をしていた時に。多分、彼らは出会っていた、1935年にソビエト連邦にゾルゲが帰還した時に。中国への旅行のために、ボロビッチは自分の古い偽名「アレクス」を用いた。しかし、上海と北京で仕事を成功させるためには、しっかりと「隠れ蓑」が必要であった。諜報局では、ジャーナリストをカモフラージュに利用することが決まった。中国で、その後日本で、ゾルゲのジャーナリストとしての経験が完全に利用された。明らかに、ビューローにおけるボロビッチの2年間の仕事の経験を考慮した。ビューローは彼に十分自由に国際的な仕事に向かうことをさせてくれた。中国におけるジャー

ナリストの仲間の中で素人として見なされなかった。TACCに呼びかけ、この組織の指導部は軍事諜報員に応えた。中国における自分の諜報活動のために、ボロビッチはリドフの名前を得た。1936年3月14日、決定が署名された。それにより、リドフ・レフ・アレクサンドロビッチは上海のTACCの次長に任命された、1936年3月から。

1936年4月30日、リドフは上海を訪れた。非常に辛抱のいる軍事諜報の仕事が始めた。新しい国に、新しい町に慣れ、状況を調べる必要があった。ジャーナリストとしての隠れ蓑の下で為される仕事は、多くの時間を消費させた。ゾルゲとの作戦上の連絡は中国におけるボロビッチの基本課題であった。しかし、もちろん、この連絡意外に、彼には他の諜報課題があった。

上海は、20年代、30年代には、中国におけるソビエト連邦の軍事諜報の最大の中心であった。この町に諜報局の多くの諜報員が滞在していた。上海の諜報機関を師団コミッサールが指揮していたのか？書類上の裏付けは未だ取れていない。ここでは、予想だけを語ることができる。上海で、北京で、中国の他の町で、彼は多くの人物に出会った。出会いには下準備が必要であった：経路を注意深く考え、人との接触到に適切な場所を見つける。最も大事なものは、気づかれないこと。この中国の町にあふれかえっている、10万人の外国人の中で目立たないこと。非合法の仕事に多くの経験を有しているボロビッチはプロであった。

諜報局の職員の一であり、この時期中国で働き、前の仕事で良くボロビッチを知っていた、ライサ・ママエバは自分の回想記に書いていた：「後で、私はスパイ団のアレクスを知った。もっと正確に言えば、警備の仕事に関する労働者の指導的職員。私が働いている町に、彼はやって来た。私は彼を民間人のように見た。彼は若かった、ごく普通の外国人のよう。適度に目立ち、適度にかなり良い服装をし、適度に好奇心があり、適度に教養があった。全てが適度であった。しっかりした諜報員でなければならなかった、肩には大きな経験を、法外な直感を持っていた、それ無しには諜報員となり得ない、理解するために、すなわち、必要なグループの中で目立たなくなることができること、アレクスがこれをする事が出来たように」。

1936年8月、「ラムザイ」グループの無線士マクス・クラウゼンは中央から無線電報を受け取った：「アレクスとの早急な個人的接触の可能性を探し出せ。成功を祈る」。何の補足の情報を、中央は伝えなかった。2人の諜報員達はお互いによく知っているものと見なして。

出会いが行われた、北京のネバ寺院の所の公園で、中央と無線電信の交換で話し合った通り。数年後、ゾルゲは獄中記に書いた：「この会合で、我々は様々な問題について話し合った、我々の仕事に関係した。特に、組織的なことと政治的なことを」。会合の時、ゾルゲはボロシロフに文書のマイクロフィルムを渡した。ドイツと日本の交渉についての、反コミンテルン条約の締結に関する。それは直ちにモスクワに運ばれた。この価値のある情報は、交渉に関する資料を確定的に補足した、ヨーロッパでバリテル・クリビツキイによって得られた。あり得る、ゾルゲと「ラムザイ」グループの人物との他での出会いがあったことが。

中央へのゾルゲの手紙



1937年1月1日

親愛なる局長へ！

航空連絡における大変な危機が未だ継続している。私は再びアレクスへ人物を派遣しなければならない。新しい連絡についての提案を持って。余り大きくはない郵便の伝達のために、私はこの使者を利用している。貴方の特別な注意を促す、更に、そこではピクスが日独交渉について伝えている。これ以外に、私は考慮に入れるようお願いをする、連絡の危機は貴方の助力によってのみ乗り越えられる。これ故、この問題に十分な配慮をお願いする。

大丈夫、局長同志、この状況は我々にとって耐えがたい、我々はお互いに依存し合っている、それを克服するために。大丈夫でしょう、我々に関係した全て、特に、我々の友人フリッツは、我々はやっている。これは軽視ではなく、怠慢ではなく、官僚主義ではなく、我々の側からの；我々はこの状況に一番に苦しんでいる。貴方からの援助を期待している。

敬具 ラムザイ

1937年春、HKBДの予審判事が作り話の組織ПОВ（ポーランド軍組織）の仕事のよりを戻し始めた、ソビエト連邦領域内に存在しているかのような。PKKAに勤務していたポーランド人を逮捕し、この組織とポーランド諜報機関での仕事に属していた証拠をやっと手に入れた。共謀者達の名を挙げることを要求した。逮捕され、拷問に耐えられず、名を挙げた。一緒に仕事をしていた者達の、国内戦で一緒に戦った者達の。ボロビッチの名前が組織員として上がった、逮捕した諜報員の同僚の証言から。師団コミッサールの運命が決まった。5月5日、防衛人民委員会の命令第00106号により、彼は予備役に回された。6月、上海のTACCの特派員リドフは緊急呼び出しを受けた。6月20日、彼は上海を出発し、7月7日、モスクワへ到着した。7月11日、報告のために呼び出した。彼は帰宅することができなかった、諜報局の部屋で直接逮捕された。

その後は、地ならしした轍に沿って、全ては進んだ。然るべき処理の後、ポーランドの諜報活動における＜自白＞。しかし、師団コミッサールにとって、一人だけの諜報員への所属はみっともなく見えた。彼に対してドイツの諜報員との関係の＜証拠＞を必要とした。ベルリンでの彼の仕事、1923年のコミンテルン執行委員会の代表団の秘書としての、1922年のカール・ラデクと一緒に参加、ドイツ国防軍参謀部の指揮官との交渉に。予審判事にはこれで十分であった、彼をドイツの諜報機関との仕事で断罪するには。十分な説得力のために、これらの「証拠」に署名をすることをボロビッチに強いた。彼がドイツの諜報員であるニデルマイエル大佐に提出したという、彼（大佐）が彼（ボロビッチ）を募ったということに。個人の署名のある自筆の「証拠」が、当時の証拠の花形であった。裁判のためにそれで十分であった。

8月25日、秘密裁判が行われた、最高裁判の。予審で得られた2件の書類と、20分間の、判決の言い出し、は一目瞭然に反映している、1937年の裁判のコンペアシテムを。ボロビッチに最高刑の死刑を下した、銃殺を。その日のうちに、刑は執行された。銃殺に関する証明書を予審の仕事にねじ込んだ、仕事は記録として残された。人が消え、彼について忘れた。全く忘れ去られた、参謀本部の主諜報局で、有名な諜報局の後継者で、ボロビッチについて思い出すことはなかった。そして、1996年、諜報員の100年祭時に。戦前まで将官の位の諜報員の一人の運命はそのようなものであった。

グジは諜報局の東方部局の状況をよく知っていたので、90年代半ばの彼らとの会合で、

局長の個人についての問題が起こった。これらの人々についての彼の印象、書庫中の書類に親しんだ後に形成された、は一致したのであろうか？

ボリス・グジの回想記から

諜報局長ウリツキイとの関係はというと、私は何のしっかりとしたことは語れない。半年間の軍事の同僚達は彼を少ししか知らない。が、彼らの中には、彼の接待を受けていた者がいた。が、何の嬉しさも語ってはいなかった。彼らの多くは、部下との関係においては無愛想で形式主義であった。権限を手にしていなかった。指導的なチェキスト、諜報員の一部は敵意のある、粗暴で、無礼な関係を味わっていた、諜報局長側との関係で。私に対しては彼は全く冷静であった、何の無礼も許さなかった。私が彼の所に出向いて、彼に署名をお願いした手紙の検討において偏見を見せることはなかった。全ては正確な手順で審議され、批判することなく全てが署名された。書類中の内容に関する問題は論証された答えを得た。明らかに、彼を満足させた。

忘れることができない。かつて私は「ラムザイ」から届いた定期郵便の報告で彼の所にいた。彼の前には、薄い紙に印刷された書類が。大島とリップントロップ交渉の報告書、そして日独交渉に関して日本の参謀本部への大島の電報の書類も横たわっていた。突然、ウリツキイはページをめくりながら話した：「この書類を持って彼の所へ行く。彼は何も信用していない！」言葉中の「彼」はもちろんスターリンのことである。兵団長の酷い当惑の調子は私を驚かせた。私の知識において”窮地”は、その様な状況下で諜報局長のところにはあってはならなかった。彼は期待でき、信用できる資料を持っていた。情報源を信用し、この資料はそこから得られた（クリビツキイ）。

軍事諜報員の情報に対するスターリンの不信についての諜報員の回想録中の注記は興味を引き、極めて特徴的である。数年後の1998年に出版された、この回想はソ日関係史に関する書類選集で確かであることがわかった。スターリン宛の、ウリツキイの報告書を分析すると、内容が一致している、グジの回想の時期とも。

## 軍事諜報の崩壊

ИНОの職員グループからのアルツゾフの到来と中央の軍事諜報機関の根本的な再編の後、古いグループと「新参者」との間の対立は不可避のものとなった。というのは、軍官庁で、チェキストを余り重んじなくなった、だけではない。管理局の指導部で相互関係に影響を及ぼした。戦略諜報（第1部と第2部）は「バリャク」の監督下に置かれた、カリンとシテインブルクの。諜報局のエース、ニコノフ、スチッガ、ダビドフー軍事諜報に仕事の全てを献げていたーは後回しにされた。ベルジンの最近の助手、ボリス・メリニコフは軍事諜報から遠ざかり、コミンテルン執行委員会の書記局での連絡の仕事に従事した。

「よそ者」ーアルツゾフ、カリン、シテインブルク、ザハロフ・メイエル（局長の補佐）ーの個人的な軍位の授与の11月の過程（1935年）では、軍団コミッサールの軍位を得た。が、ニコノフとスチッガは師団長の。

新しい長である師団長ウリツキイは、能力においても性格においても、前任者とは極めて異なっていた。第一次世界戦争と国内戦の参加者、騎兵としてその年を過ごした、P K K Aの高位の幹部士官に対して独特で、乱暴で軽蔑するスタイルを受け入れた、部下

に対する対応で。もし、1935年5月に、彼が官庁にやって来た後、彼が我慢したならば、彼のための新しい雰囲気の中、敬意、調子、同僚に対する注意を払った関係に入って、半年後には、彼の性格と振る舞いの欠点は皆知ることとなった。

ウリツキイは作戦の問題を審議することを中止した、2つの指導的部局の長との。些細な落ち度に対して容赦がなく、無礼な決済を下した。彼の執務室への呼び出し、職務からの解職の脅しを持って。もちろん、そのようなスタイルは、諜報の指導部には全く役に立たなかった。

第一秘書としてアルツゾフが戦略諜報を指導した、庁の基本部局を監督しながら。しかし、これの部局への指示と指令は彼の頭を經由して伝えられた、明確な仕事のない次長に変えた。アルツゾフは身内の者達を保護下に入れることに努めた。しかし、ボロシロフまでは彼は手が回らなかった。人民委員会は彼を決して呼び出さなかった、庁の仕事についての全ての情報をウリツキイから得ることを優先しながら。

中央の手紙—ゾルゲへ

1936年8月31日

拝啓ラムザイ。

政治情報の形で、それについて貴方が私に頼んだ、この手紙を貴方に送る。

トロッキイ—ジノビエフのテロル活動が終演した今日、ゲシュタポの代理人まで、最後の段階まで転げ落ちた。過程は示した、2つの世界—資本主義と社会主義—の戦いには、「黄金分割」はないし、あり得ないことを。2つのお互いに敵対する極が存在している：一方では、全てが公正であり、全てが高潔であり、労働者の解放の大事な仕事\*\*\*\*。他方は—最も卑劣で、恥ずべきろくでなし、古い世界の、社会主義の悪意あふれた敵。

現行犯で捕まった悪党の一味は抹殺された；判決は国の1億7千万人に迎えられた、当然の報いとして、全国民の意思の現れとして。我々の国はギャング団の銃撃に反応するだけではなく、が、各名誉ある労働者は全世界でソビエト労働者の怒りと憤慨を分け、社会主義の祖国の前で自分の悲惨な犯罪を犯人の個人的特徴を。党の敵にとって論理的に不可避であることは、結局、転げ落ちる、白兵軍まで、その全ての素晴らしさからスターリンが予言的に語った、何年間にその恥ずべき死までに；その例は、我が党の基本線からずれた者に対する警告を判断しなければならない、党との不一致を免れぬ者に、党に反対する戦いの論理は労働者の悪意ある敵の・・・での不可避に導き、最も羽目を外したファシズムへ。過程は必然性の表れである、用心と警戒の向上の。用心すること、すなわち人を知ること。その上、仕事を、生活を調べること。温和、よろめき、たるみ。

1937年1月11日、ボロシロフの提案に関して、もちろん、スターリンの支持の元、諜報局における仕事から、アルツゾフとシテインブルクの解放を決定する。НКВДの指揮下に、その意向を持って。その決定によって、局長の新しい補佐に国家保安局の上級少佐（位は軍の師団長に相当）ミハイル・アレクサンドロフスキイを任命した。シテインブルグを追い出し、局の重要な部局を指導者無しとした。しかし、ウリツキイは、ここから専門の諜報の仕事に就くことに成功した：НКВДからは第一局に誰も派遣しなかった。長の臨時代理は局の同僚である大佐ステファン・ウズダンスキイがなった。最大の部局の長としての大佐、兵団政治委員の代わりに—1937年のPKKAにはありふれた

現象、中級の軍位の司令官は飛び立った、流星のように、時に、将軍の職務に、数ヶ月後にはルビャンカの奥で消えてしまった。ウズダンスキイはこのポストを維持した、明らかに、1937年5月までは。その後、アルツゾフ、シテインブルク、アレクサンドロフスキイと運命を共にした。

カリンは第2局の長の職務に残った。これについてのボロシロフの功績は、もちろんなかった。もし人民委員会がアルツゾフとシテインブルクを「渡し」たならば、彼は政治局でカリンを擁護したのであろうか？ より正確に言うと、全ての原因は、カリンの替わりが未だいなかったことであつた。明らかに、これをスターリンは認めた。数ヶ月間、カリンは部局を指導し続けた、が、彼の運命はあらかじめ決まっていた。

2月から3月にかけての中央委員会総会後、一時的な風が到来した：H K B Dが準備した、軍にコンプロマト（？ \*）を集めながら、諜報局では待っていた、直ぐにアルツゾフとシテインブルクの後に続くということを理解しながら。ウリツキイは居心地が悪く感じた、自分の正しさを証明することに努めながら。諜報局の5月19日の黨員集会で、彼は次のように語った：「理由、何故私が局にやって来たかの、全てが知っている。原因は遅延だ。ここに残っていた人々、・・・少ししか助けなかった。我々諜報員は君たちと一緒に余り良くない・・・」

しかし、1937年春には、そのような自己批判は助けにならなかった。ボロシロフの所で得ようと努力をし、彼を通して、スターリンの所で局からのアルツゾフの追放、我が身を窮地に追い込んだ。熟練した次長の退去の後、軍事諜報の指導の弱い熟知が明瞭となった。新しい次長アレクサンドロフスキイは同じように自分の上司の何の助けにもならなかった。軍位と政治諜報に彼は関係を持っていなかった。総じて、ウリツキイは局の指導から離れており、ベルジンに仕事を委ねた、スペインから戻ってきた。それに対してレーニン勲章とその他の勲章を得た、軍司令官の軍位に相当する。

6月3日、ベルジンは自分の執務室にやって来た。短期間諜報局長として努めて、1935年4月に後にした。5月21日に、諜報局の会議にスターリンが出席した。言明した、「諜報局はドイツ人の手に落ちた」と、そして、諜報網の解散を要求した。軍事諜報活動のそのような評価は、H K B Dの指導部にとっては、局の指導的部局の抹殺の信号となった。

H K B Dは7月に諜報局にやっと手が出せるようになった。公開基金局の一つに、局の黨員集会の議事録が保管されている。その中に、軍事諜報の逮捕され殺された職員の十人の名前が、彼らの短い経歴のデータと共にある。もちろん、これは完全な名簿ではない。しかし、それらは、1937年に、諜報局がどのような損失を被ったかについて幾らかの理解を与えている。指導部の成員の内の20人がルビャンカに拘束された。すなわち、局の新局長にこれについて、7月19日の政治局会議で報告をさせることになった。ベルジンはどう感じたのか、同僚をスパイやテロリストと呼ぶことに。彼らと長年仕事をしてきていた。彼らを良く熟知していた。彼らを完全に信用していた？ 気づいたのか、「人民の敵」との長年にわたった仕事は彼に汚点を付けることに。

諜報局で、7月20日、秘密の黨員会議が行われた。幹部会には、ベルジン、自分の再側近の助手ニコノフとスチガヤと一緒に、第一局長のポストに逮捕されたウズダンスクを替えて。ホールには200人の黨員。報告を待っている。局の党委員会書記で旅団政治委

員ガイ・ツマニャンが報告をする。議事日程：「諜報局の元職員のBKΠ(6)の隊列からの除外について、人民の敵としてHKBDの組織によって逮捕された」。彼らを全員一致で断罪した。会議の議事録は防衛人民委員会に送られた。

逮捕された者達の中に、兵団長(=中将)ゲッケル、兵団政治委員シテインブルク、カリン、ザハロフ・メイエル、師団政治委員ボロビッチ、旅団長ベガボイ、大佐ウズダンスキイ、アレクセイ・マザロフ、アレクサンドル・イオドロフスキイ；諜報局の配下において、外国で非合法活動をしていた連帯政治委員マクス・マクシモフ、レオナルド・ユレビッチ、同じく、ソフィア・ザレスウカヤ；諜報局長の補佐の職務でコミンテルンから1936年にやって来たミロフ(アブラモフ)とアルツツフの替わりのアレクサンドロフスキイ。

このような大量の同僚の逮捕は、混乱、移動、新しい任命の連鎖反応を引き起こした。ポクラドク大佐はハバロフスクのOKDBA参謀部に派遣された、軍参謀部の諜報局長の職務に。職務は、多分しっかりした、約100人の職員がいる部局。しかし、これは臨時の任命であった。数ヶ月後、彼をこの部局の多数の同僚と共に逮捕した。

8月1日、諜報局の状況を、「人民の敵」の暴露と関係して、政治局で審議が為された。決済が為された：「PKKAの諜報局長の職務からベルジンを解職し、彼を防衛人民委員会の配下に置く」。ベルジンが長年一緒に働いてきていた同僚の逮捕後、彼を人民委員会の配下に残すということは次の逮捕を示していた。ベルジン、彼の部下達はこのことを良くわかっていた。

軍事諜報機関は大半がHKBDの影響下に入った。政治局の決定で、「諜報局の仕事の全般的な査察をすること、仕事の状況を調べること、緊急の手段を防衛人民委員会と調整すること、諜報局の欠点を解明すること、2週間後に、諜報局の仕事の改善と新しい職員への指示についての提案をすること」をエジェフに委ねた。今や、エジェフは軍事諜報の全権を有する主人となった。

諜報局長の第一次席に国家保安局の少佐セメン・ゲンゲンが任命された。軍事諜報にも、政治諜報にも彼は何の関係もなかった。しかし、これには政治局では誰も関心はなかった。諜報活動に関する次席には旅団長アレクサンドル・オルロフ・ドイツにおける武官一が任命された。

旅団長アブグスト・ガイリス(バリン)の逮捕について、カリンを第2局の局長の職務に変更し、8月10日に党员集会で説明がされた。8月19日、党活動家の定例会議で、ツマニャンが報告した、「15日に、ベルジン同志が解雇された、人民の敵であるニコノフ、バリン、ステリマフの逮捕に関連して・・・」。

諜報局における「人民の敵」の捜査は続いた。10月15日の党员集会で、明らかになった、ビクトル・フェドロフ大佐一第二局の満州部の長一の逮捕が。12月3日の党员集会で、最も大きい逮捕者の名簿が審議された。今回は、長年諜報で活動していた、自由にされていたエース達を含んでいた。名簿には22人、その第一列には、2等級軍司令官で、スペインの英雄ベルジン。第2列には、師団長スチッグ、ヨーロッパ大陸で諜報活動を指導していた。この逮捕者名簿には、第二局の中国部局長カール・リム。彼と一緒に、彼の妻リュボフ・リムが逮捕された。彼女は夫とリヒャルト・ゾルゲと一緒に中国で働いていた。

諜報局の第2東方局は完全に打ち砕かれた。全員、1936年に「ラムザイ」作戦に関

与して、逮捕された。諜報部の最後の「マギガネ」(? \*)は空き部屋を残し、外国にいる諜報機関との連絡は引き裂かれた。軍事諜報機関の中央部は完全に麻痺してしまった。

## 「ラムザイ」は仕事を継続する

もちろん、リヒャルト・ゾルゲは知ることはできなかった、軍事諜報指導部の崩壊の詳細を。わかることもできなかった、「チョコレートの小屋(諜報局の建物の外色? \*)」から全員が消え失せたことを。1935年にモスクワへの最後となった訪問時に、そこで彼が出会った人達が。北京で出会った時、ボロビッチが彼に何を伝えることができたのか。赤軍の大弾圧が未だ始まっていない時、1936年4月に彼はモスクワを去った。もちろん、世界の出版物から、中央からの電報や指示の調子から、彼はモスクワにおける大変な状況を感じた。しかし、それ以上ではない。この変化しつつある条件にもかかわらず、「ラムザイ」グループは熱心に仕事を続けた、1936年にも。日本における状況は変わった。グループの成員を注意深く見ておく必要が生じた、真っ先にゾルゲと尾崎を。

東京にいる支配層は良く理解していた。当時複雑な国際状況において、満州の橋頭堡と「独立している」政府の領域における産業基盤は、アジア大陸への更なる進撃とソビエト連邦との戦争のためには未だ不十分であると。これ故、自分の国に、必要な産業と農業の資源を保証するために、輸入が免れない。大きな戦争の場合に後方を安全にするために、中国北部への進撃を始めることを決めた。これについて、1936年には既に東京の内閣は考えていた。1936年8月7日、帝国の5閣僚会議は、新しい外政プログラムを採択した。

日本の5閣僚会議が採択した、「国政の基本原則」計画より

東京、1936年8月7日

<.....>

国政のこの計画の基本原則は次の通りである：

1. 東アジアにおける相互平穏無事の達成は、大国によって行われている支配の政治の根絶による、真の共存と共繁栄の原理の確立の、帝国の道の精神の表れである、我々の外交政策の普通の指導原理でなければならない。
2. 手段の実現、国防の強化に関する、帝国の安全の保証のために必要な、その繁栄と帝国の確立、名目上で実際の、東アジアにおける安定させる力の。
3. 北からの脅威の根絶は、ソビエト連邦側からの、満州国の健全な発展と日本の満州の防衛の強化の方法によって；イギリスとアメリカに完全に準備して迎える保証は、我々の将来における経済発展の方法によって、緊密な日本-満州-中国の協力に帰する。これは大陸における我々の施策の基本。この政治の実現において、注意しなければならない、大国との友好関係を維持することに。
4. 我々の南への国家的と経済的前進の拡張、特に、南洋海の国々への。これらの地域への我々の力の前進は順々に実現しなければならない、平和的手段で、あらゆる手段を尽くして。やり方を避け、他国を刺激するような。そのような方法によって、満州国の政府の設立の完了と並んで、我々は保証することができる、更なる強化を、我々の国力の。
5. 全ての外政と内政の手段は実現しなければならない、前述した国策の基本原則に従って・・・。

日本政府の声明「国策の基本原則」から

東京、1936年8月7日

次のような全ての政治の更新を為すべきである、現代の状況に応じて。

I. 国防の強化に関する手段の整備：

a) 軍の軍備準備は、満州国と朝鮮における兵員の定員拡大に帰する。それらが軍事力により対抗することができなくなるために、ソビエト連邦が極東で利用できる。特に、極東に配置されているソビエト連邦の軍事力にたいして軍事作戦で、第一撃を与えることができるような；

b) 海軍における軍事準備はその能力の増大にある。太平洋の西側におけるアメリカ海軍に対して支配的な状況を保証するような程度までに・・・。

会議とそれで採択された決定についての情報は、尾崎とゾルゲが知ることとなり、直ぐにモスクワに無線で知らされた。この情報は中央に大きな衝撃を引き起こした。ソビエト連邦に対抗するための日独交渉の最盛期に、帝国の政府は北方だけではなく、南方への拡張を目論んでいた！ これを信じることは難しかった。諜報員に対して間を待たずに証拠を要求した。

ゾルゲと彼のグループに、新しい心配事が出現した。モスクワのベルジンとウリツキイの執務室で、「ラムザイ」グループの諜報の課題が定まった。当然ながら、中国への日本の侵略を予知することはできなかった。これ故、1937年初めには、大陸から、火薬の焦げた匂いはノロノロと漂っていた。ゾルゲと彼の同志は、日中関係の発展を追跡することを主要課題とした。この衝突は島の帝国の陸軍と海軍の増強とイギリスとアメリカとのその相互関係に影響を与えるものとして。数年後、ゾルゲはこの時期のことを自分のメモに書いていた：「日中戦争は我々には経済的視点から非常に重要に思われた。重工業の創設と戦時経済への移行が戦争の開始時に実現された。我々には思われた、注意深く追跡すべき素晴らしい機会と。どのような手段を日本が執るのか、戦争の開始と関連させて。海軍の増強はどのように進行するのか、軍の再編はどのように進むのか。軍事的出来事は日本軍の再編、その装備の充実度の強化のためにどのような演習場となったのか。我々はこの方面において様々な観察をすることができた」。なんとも状況の素晴らしい評価であることか！

さらに、ゾルゲの注意を引きつけた幾つかの問題があった。話は、日本とイギリスとアメリカとの関係についてである。中国における戦争の開始まで、可能性は除外されなかった、日本がソ連邦に進撃を開始することが。イギリスとアメリカの積極的支持のもとで。そのような危険性に対して、十分な根拠があった。過去にイギリスは日本の同盟国であったし、アメリカはこの同盟に好意的態度を示していた。しかし、日本の中国への侵攻は、国の中央と南の地域に拡大されるにつれて、これらの国の経済的興味が勝っていた所へ、そして、彼らの良い関係が最後を向かえた。他人の菜園に入り込み、他人を犠牲にして儲けようとする時、友情も同盟も関係がない。

当然であった、ゾルゲが直ぐにこれに注目したのは。これ故、中国で戦争が始まると「ラムザイ」グループには新しい心配事が出現した。3国間の相互関係を追求すること、これらの関係における些細な変化を分析すること、が必要となった。可能な出来事を予測する

ことも、それらに正しい評価をすることも。

1937年7月7日の夜明けに、盧溝橋で日本軍の銃が鳴り響いた。月明かりで綺麗に輝いていた、マルコポーロ橋を日本の騎兵隊が渡った。爆撃機が中国軍基地に100個の爆弾を落とした。中国の大地でお決まりの事件が始まった。東京では既に形成されていたしきたりに従い、日本は中国に戦争宣言をしなかった。ゾルゲグループの前に、新しい問題が立ちふさがった。モスクワに情報を送らなければならなかった、北京で何が起こったのかを。グループの要員から得られた、全ての情報を分析した後、モスクワに報告をした：「7月の事件は単なる政治行動ではない、日本と中国との大きな戦争の開始である」。

1937年の最初の月で、最初の週には、ゾルゲと彼の同志達には最大限の努力が要求された。グループは毎年、全力を傾けて働いていた。注意深い整理と解析を要する、情報の流れは増大していた。モスクワに、日独関係の発展についての情報が届いた。条約締結後の日本軍の状況と増強についての、陸軍と海軍の指導部の不一致についての、日本の進撃の方向を北にするか南にするかについての。以前と同じように、情報の基本的な源の一つはドイツ大使館であった。武官オットーと大使デルクセンは、まず第一に、「フランクフルト・ツアイツング」の特派員（ゾルゲのこと \*）とはざっくばらんであった。

ある事情に注目する必要がある、ゾルゲのその後の活動の痕跡を残している。1937年に、ゾルゲはベルジンとの協力についてモスクワの公的許可を得た。これについては、ソビエト時代の我々の著者は書いていなかった。余りにも不快極まるものと見なしていた、ゾルゲという人物を、そのような評価の後には。中央では理解していた：大使館との関係を持ち、大使と武官に影響を与えるためには、「それなりの分かち合いがなければならないはず」。そして、ゾルゲは分かち合っていた、価値ある情報の交換のために。ジャーナリスト、国際人として情報の世界で働きながら、彼は情報を得ただけではなく、気前よく情報を与えた。ドイツ人だけではなく、アメリカ人にも、イギリス人にも。ゾルゲはジャーナリストだけではなく、極東に関する政治分析家でもあった。そのような人物は日本にはいなかった。このことは東京のドイツ大使館で、ベルリンで、認めていた。我々が既に知っているように、彼はベルリンへ公式の秘密の返信を作成していた、武官とオットー大使の署名がある。この文書はドイツの首都で高く評価された。それらの真の著者は秘密ではなかった、ベルリンの高位の役人達には。ドイツの政治諜報の指導者であるバリテル・シェレンベルグは自分の回想記でこれを断言している。ドイツの諜報員一軍事及び政治の一はもちろん、日本に自分の代表を持っていた。しかし、彼らの誰も、ドイツの外交について未だ話していないが、かように幅が広く、日本の政府層と私的な関係を持っているものはいなかった。

ゾルゲは情報を正確に評価し、事態を予測し、状況を分析することができていた。モスクワに、ベルリンに持ち込まれる彼の予想はまさにその通りの中していた、子細まで。これ故、諜報員は提案を委されるまでになっていた。彼についてはベルリンでは噂になっていた。モスクワでは、全くなし。弾圧が始まり、ゾルゲが「ベルジン一味」に名を連ねることになった時、警戒されるようになった。

本質的な問題が生ずる：ゾルゲは誰のために働いていたのか？ もちろん、ゾルゲは20世紀の偉大な諜報員であった。ソビエトの軍事諜報機関である諜報局のために働いた。全ての価値のある情報、分析、予想、提案はモスクワに送られた。モスクワの許可を得て、



情報の一部はベルリンへ送られた。モスクワではこれについて知っていた。これ故、「二重スパイ」として彼を見なすことはできない。モスクワは知っていた、彼がベルリンのためにも働いていることを。しかし、ベルリンでは、彼がモスクワのために働いていることに気がつかなかった。

もちろん、オットーとデルクセンの全ての報告をゾルゲが書いたという事はできない。しかし、ドイツの外交官達が作成した、両国間の価値のある相互関係を持っている報告書の内容は屢々ゾルゲの知ることとなった。そして、適宜にモスクワに送られた。1月31日送られた通信の一つで、将来の軍事同盟国としてのドイツの日本の評価が為されていた。デルクセンとオットーは見なした、日本では、危機の存在故に、積極的な外交活動を発展させることができる前に、日本は数年間の一休みが必要であると。これ故、大使と武官は、ある程度ゾルゲ側からの影響を受けることなく、日本に対して去年の夏よりより懐疑的な気分を持っていた。覚醒がやって来た、反コミンテルン条約の調印により引き起こされた軍事的熱狂の後。

1月の無線通信の一つで、オットーとの会談について、殆どその内容を知らせた。武官はあけすけに語り、国防軍と軍事産業における仕事の状況を伝えてくれた。彼の意見によれば、国防軍の武装は時間がかかる、以前に予想した以上に。熟練した部隊、準備中の指揮官、軍事技術が不足しており、第一次世界戦争の時から残っている中古の武器が優勢となっている。戦略物資の状況は大変深刻である、第一に、ゴム、亜鉛、銅、錫が。オットーは見なしていた、ドイツは大戦争を始めることができるのは、1941年より早くはない時であると。本質的に、そのような詳細な情報は、1937年初めには、モスクワでは高く評価された。東京における当面の課題と一緒に、以下の連絡があった、ゾルゲとクラウゼンへの諜報管理に関する命令書中で、素晴らしい仕事に対する感謝を伝える旨の。

しかし、特に重要となったのは1937年における帝国の外政手段の分析であった、ゾルゲと尾崎が与えた。ソビエトと満州の国境における状況の先鋭化にもかかわらず、モンゴル人民共和国の国境での挑発、それにもかかわらず、1937年に満州に国の武力の3分の1が配置され、関東軍は数倍に増強されていた。諜報員が度肝を抜く結果であった。その後、尾崎は帝国の外政手段を決める書類を手にし、その写真撮影に成功した。クラウゼンは中央に短い無線電報を発信した：「日本人は他の大国に印象を作り上げることに努めている、彼らがソビエト連邦との戦争に直ぐにでも取りかかるつもりであるかの。私には他の意見ができあがっている：日本は近いうちに戦争を仕掛けるつもりはない。日本の最大の注目は中国大陸に向いている。証拠は通常連絡で送り出す」。

極東における政治状況の予想を、ゾルゲが短い電報で送り出した。今回は、全く正確なものであった。何が、ソビエトの諜報員に、事件の間違いのない予想をさせてくれたのであろうか？ この質問に対して、彼は自分のメモで答えていた。「私が集めた全ての情報をモスクワに送ったと思うのは間違いであろう。いや、私はそれを篩にかけて、確信のあるものだけを送った。情報は申し分なく信頼できるものであった。これは大変な努力を必要とした。政治的そして軍事的状況の分析において、私はそのように振る舞った。その上、私は常に危険を自覚した、自信過剰による。私は決して見なさなかった、日本に関するどんな問題にも答えることができる」と。ここにまさにゾルゲがいた：得られた情報の分析における多大な仕事、その真実性のための極めて大きな責任。自分の可能性を見定め

る際の大きな謙虚さ。

中国における戦争と日本軍の人員増は諜報グループの最も注目を引いた。これをモスクワは催促した、自分らの課題として。P K K A 参謀本部は日本の軍事力の再編の全ての段階に興味を持った。第一に、これは関東軍に触れていた、その再編は中国における戦闘員の経験を考慮に入れていた。課題は極めて複雑であった。中国での戦争の開始後、軍の対諜報の将校数が極めて増大した。この国で日本の作戦についての情報を得ることは極めて危うくなった。

日本軍の増大と再編についての多くの資料は、宮城が得た。彼は参謀部の将校と軍隊との接触を維持していた。一般的な軍の情報はブーケリッチから持ち込まれた。彼はイギリスの武官フレンシス・ピゴトと付き合いがあった。大きなヨーロッパの新聞の特派員として、イギリスとフランスの大使館の職員として。軍事情報を得るために、ゾルゲは新しい可能性を探していた。極東におけるドイツの特派員としての彼の素晴らしい名声が、これに大いに役に立った。

ドイツの軍事雑誌「ベルマフト」は彼に委ねた、極東の同盟国の軍隊の当時の状況についての記事を書くことを。依頼は編集局の用紙に書かれていた。相応する署名と印が添えられていた。この手紙を持って、ゾルゲは直接に軍事省の長官である武藤將軍に直接面会した。既に参謀本部でよく知られていた特派員を受け入れた、大臣の同僚と軍の防諜組織の憲兵隊に、彼に必要な情報を提供するように委ねた。ゾルゲは関東軍の演習に招かれた、通常では外国の特派員には許可されていない。日本の將軍や将校達と会談をした、彼らは「戦友」特派員に極めて好意的であった。日本軍の状況と設備について真新しいデータを得た。派手な題名の記事：「今日の日本軍：侍から戦車の軍隊へ」、1937年夏に、「ベルマフト」に掲載された。東京では非常に好意的反応を引き起こした。もちろん、記事の仕事で得られた全ての情報はより詳細なものとして、モスクワに送られた。

### モスクワが疑念を漏らし始める

しかし、1937年末、諜報局で指導部全部が交代させられた時、ゾルゲに関する関係は変わった。もし1936年夏に、彼の情報がモスクワで何の反論も疑いも引き起こさなかったならば、1年半後に、東京から届いた情報は疑惑の元に置かれた。残っている同僚にとって、彼について僅かしか知らない、ゾルゲの名前はつかの間の抽象的なものであった。

1937年10月8日、東京からモスクワに、定期の無線通信が届いた。ゾルゲが伝えた、リップントロップの特別代表であるガウスゴフェルが日本の首都に2ヶ月間滞在したことを、帝国の指導的活動家との会談のために自分の関係を利用して。ベルリンに発つ前に、彼はゾルゲと会談し、自分の意見を語った、日本とドイツの関係の将来の発展について。ドイツの特使が伝えた、11月後半に、日独関係の発展に関する大事な決定が待ち構えていると。「彼はリップントロップに密接な協力を強化するように助言するであろうと、が早急の共同作戦を避ける、日本の弱みが全て克服される間、或いは、少なくともドイツの援助によって減少されるまで。ドイツは日本に物質的援助を示している軍用具の調達において」。彼は期待していた、彼の推薦がベルリンで採用されることを。この情報は決

済付きの特別情報となった：「特別情報、情報源を検査する必要があるという指示を待つ」。

その日に、モスクワに東京から、一通の無線電報が届いた。今回は、ゾルゲの情報提供者はオットーであった。彼は諜報員に自分の手紙を見せた、参謀本部に送られる。オットーは確信していた、日本はソ連邦と戦争する強い意志を持っていると。しかし、中国との困難な戦争が可能性を秘匿していると、主要な目的からそれを逸らし……。彼は同じく強調した、中国におけるドイツの活動（蒋介石への軍事物資の大量の供給と国民党の軍隊におけるドイツの指導員の活動）は日独関係において幾つかの危機を救ったと。彼の意見によれば、これら全てはもたらすことができる、「将来に日本において、あり得る、ソ連邦との何らかの軋轢を避ける若干の時間を欲する」。デルクセン大使は武官の情報を確認した。ベルリンへの彼の手紙で、彼がゾルゲに示した、その視点が述べられていた。この無線電報は、最初と同じように、特別情報に入れられた。が、検査の必要性を指示することなく一明らかに、中央では、東京のドイツ大使館からゾルゲが入手した情報を信用していた。

1937年後半には、中央におけるゾルゲの立場は非常に悪化していた。モスクワへの彼の召還と諜報機関の閉鎖についての決定がなされた。少しして、諜報局で急に気づき、決定を取り消した。局長の職務を執行していたゲンデン自身を取り消しを取り付けた。東京から、価値があり信頼できる情報が届いた。これを無視することができなかった。1937年の基本的総括の書類をゾルゲはモスクワに送った。12月に、急使の便で。これはこの年の基本的な出来事の評価を持った、しっかりした分析のされたものであった。諜報局の新局長、国家保安局の先任少佐セメン・ゲンデンは書類をスターリンに渡すことに決めた。

シロトキン少佐の自分の研究論文「諜報機関ラムザイの組織と活動の経験」は、1964年に書かれ、部分的に2000年に秘密解除された。それでは東京の諜報機関に対する不信の原因を次のように特徴付けている。

「諜報機関に対する中央の態度には二面性が極めて顕著である。ラムザイから送られてきた情報資料は、多くの場合には高い評価を得ている。しかし、指導部の課題として”諜報機関の個人と活動の書類”が作成される時、実行者、この書類の作者は拒否することを許されていない、諜報機関に押される印を”政治的に不信”の。健全な論理であるにもかかわらず、諜報機関の活動の現実の結果を考慮しないで、この印の元で自分の結論を出す。この際、そのような結論に対して何の確実な基礎付けもなく、何度にも渡り、上海の崩壊についての結論を引用しているだけ。ポクラドクの証言（1937年から）、”デマ報道の確実さ”についての、と前述の書類からの簡単な憶測と予測」。

これ故、ゲンデンは、1937年12月14日に幹部会へゾルゲの情報を送りながら、書いていた：「報告します、我々の情報源について、東京でドイツ人グループに接近している。情報源は我々の完全な信用を得ていない、しかし、彼の幾つかの資料は注目に値する」。ゲンデンは諜報局の新人であった。彼は1937年9月に局長に任命された。軍事諜報の指導部がНКВДの職員達によって強力に抹殺された時に。このような条件下では、どの諜報機関の活動の正当で客観的な評価を下すことは非常に困難であった。その上、防諜側の人物は、諜報の仕事をしたことはない。これ故、スターリンへのメモ中の最初の文句は非常に曖昧なものであった。一面では、完全に信用はないもの、他面では幾つかの

資料は注目に値するもの。スターリンは理解した、そしてゾルゲの報告を自分の書庫に入れた。それは数は少ないが非常に価値のある書類からできていた。

ゲンデンは1902年に、ドビンスクで生まれた。1918年の16歳の時、PKKAと党に入った。国内戦の参加者、小隊の隊長と中隊の隊長。BCHK（チェーカー）で1921年から、予審判事と局長の補佐、1921年－1925年に、OGPU（合同国家政治保安部）のKPOで。「シンデカトー2」作戦に参加、サビンコフの仕事の審査に。1925年－1926年、白ロシアに移動－KPO OGPU BССРと西方地区に関するPP OGPU。1929年から、OGPUの中央機関に、KPOの局長。1931年から、OGPUの特別局に、局長。その後、西方地区のУНКВДの長とБВОの特別局の局長代理。この職務から諜報局へ出向く。軍事諜報には何の関係もなかった人物。

日本における軍事・政治状況を分析し、ゾルゲは結論に達した。ソ連邦への日本の侵攻は近い将来に起こりえると。その際には、多くの困難がさらに増大するにもかかわらず。諜報の結果は深刻なものであった。この基礎となったのは、ドイツの武官への日本の参謀本部の通知であった。中国との戦争を早急に終了する必要性と日本が受け入れられる条件での和平の締結についての。その後、アジア大陸に集中している日本の軍事力はソ連邦に対して投入することができる。他の言葉で言うならば、日本の軍事指導部は事実を確認していた、同時に2つの戦争－中国とソ連邦との－を行う、そんな状態にはないことを。帝国にはそのような力はなかった。中国での出来事の始めから6ヶ月後、政府、海軍、陸軍は大きな損害、困難、日本の進撃の遅延、全ての企業の展望が心配になった。

上海の前線を訪れ、オットーは確信した、日本の勝利の達成のためには、膨大な新しい補強を投入しなければならないと。しかし、これは日本軍の力量に否定的に響いた。彼は同じく見なした、上海での勝利は中国を跪かせないと、日本の条件では和平はやっては来ないと。これ故、オットーは提案した、ドイツの仲介を、日本と中国の間の和平締結のための。オットーにとっては予想外であった、日本の参謀本部と、海軍、外務省がドイツの提案を受け入れたことが。ゾルゲは自分の報告書で強調していた、近衛首相と海軍の指導部は理解していると、ソ連邦への侵攻は年を追う毎により危険になっていることを。が、この時、彼らは信じ始めている、軍部の軽薄な約束を。ウラジオストクと沿海州への奇襲の実現の比較的容易さと、日ソ戦争をこれらの地域とサハリンに限定する可能性を。

1938年初めに、次のような評価をゾルゲはしていた。基本的な結論；日本は中国との戦争にはまり込む、中国との紛争が中止しない間は、ソ連邦との戦争の可能性について話をするのは適当ではないと。ゾルゲにとって、この結論は明瞭であった。日本の拡大の方向を研究し、彼は1939年に書いていた（論文「日本の拡大」）：「しかし、中国の問題が解決しない間、日本は他の方面へ向かうことを欲しており、できる、ただ二次的な力で。日本の軍事力の展開の主要方面として近い将来に限ってまず第一には中国である・・・」。もちろん、当時、ゾルゲは正確に知ることはできなかった、関東軍と中国の日本の占領軍の間の力関係については。しかし、我々の軍事諜報の資料に従うと、中国における日本軍はすべての証拠によれば、関東軍の2倍を越えていた。満州における集結は残部を得た、帝国がアジア大陸における戦争のために割り当てることができる。

## 第5章

# 「イギリスとフランスのドイツとの接近が 予想される、ソ連邦への侵略問題を日本の ために残しておくことで・・・」

## 1938年

説の起源を確定すること一容易ならざる仕事。その本質を形成している原理と規則は一つのものに決して帰着しない、極めてまれである。これ故、これらの原理と規則の叙述は、最も多様な情報源で探さなければならない、この際、十分な綿密さを持ち、必要な時には、行間を読みながら。

ロドジェル・ヒルスメン。戦略諜報と政治決定

### 中国での侵略の拡大

1938年初めには、極東における状況は緊張していた。1937年11月12日、日本軍は上海を占領し、南京への進撃を開始した。いつものごとく、この時（1937年11月3日から24日まで）、ブリュッセル会議が行われた。会議は国際連盟の主導で行われた。10カ国のワシントン条約参加国による審議のために、極東に和平の復興についての問題に興味を持つその他の国々の。会議には18カ国が参加した、特にソ連邦も。日本は会議へ代表を送ることを拒否した。中国代表は会議に提案した、国際連盟の規則に従って日本に対して経済制裁を適用する決定を採択するようにと。ソビエト連邦は積極的に中国の提案を支持した。会議に影響力のあるイギリスとアメリカは、しかし、日本に対して何の強制的な手段を適用するつもりはなかった。基本的に、中国における自身の経済的立場を維持することを目論んでいた。

結果として、ブリュッセル会議は不十分な決議を採択するだけに留まった。9カ国のワシントン条約の日本の違反の事実を確認し、期待を表明した。将来において極東に平和の復興のための方法を見いだせる可能性に言及して。その後、ブリュッセル会議は自分の仕事を中断した、「十分な好条件」までとして。しかし、その後、招集されることはなかった。

同じ頃、アメリカとイギリスは、外面的に中国に同情を示しながら、日本に戦略物資の供給をしていた。1937年、アメリカは日本に、3500万バーレル（1バーレル＝158.4リットル）の石油と1億5千万円以上の金属屑を売却した。1938年には、アメリカは日本に、総額1億6800万ドル（日本経済の輸入需要の90%）の戦略物資を供給した。日本へのイギリスの輸出の20%が戦略物資であった。

侵略者の放任は南京惨事を引き起こした。1937年12月12日、南京市内に押し入った日本の兵と将校達は5昼夜の長きにわたって虐殺を行った。その結果、20万人以上の中国人が犠牲となった。

中国の社会層、特に、指導的な国民党グループは、最終的に認識した。中国は実質的にヨーロッパの支持を失ったと、軍事力では比較もできない日本との戦いにおいて。そして、中国の期待できる同盟国はソ連邦だけであると。9月14日には、既に、ソ連邦によって提案された長期クレジットの軍事物資の中国への供給に関する合意が達成された。中国代表団による要請に従って、最初の飛行機群の納期期間は最小限に切り詰められた：最初の225機の飛行機は1937年1月に納入された。その時には、ソビエトの義勇飛行士が中国に到着し始めていた。この援助は中国軍の抵抗力を極めて確実なものとした。

## 「ラムザイ」と中国におけるドイツの仲介

ソビエトの軍事援助は、日本とその同盟国のドイツの注目を引かないわけにはいかなかった。後者は積極的に参加をした、日中の妥協の達成に関する仲介使節として。中国のドイツ大使トラウトマンがそれに関わった。日本軍は南京を占領し、揚子江の北岸に橋頭堡を獲得し、一時進撃を中止した。蒋介石の降伏とトラウトマンの仲介に目算があった。1937年12月2日、トラウトマンは蒋介石と交渉をした。日本と合意のできる紛争解決の自分の計画に関して。

モスクワ、局長へ

オストロバ、1938年1月27日

オットー大佐はラムザイに示した、本間との会談における自分のメモの内容を、日中戦争におけるドイツの仲介期間中における。このメモから、ラムザイはわかった、広田によって公開された日本の4つの和平条件は、11の要求の総合化であることが。公開された条件の内の第一が、中国による満州国の承認の要求であった。が、同じく、デルクセンとオットーによって要求された譲歩が含まれていた。反コミンテルン政策における共同はソ連邦との以前の合意を破棄することを意味していないこと。他の点は条件を含んでいた：中国北部の事実上の自治権、中国の主権を侵すことがなく、内モンゴルのために自治権の設定、現在では、外モンゴルが持っている。

(次に続く)

第26号。フリッツ

シロトキンが翻訳

ゾルゲはオットーから1937年末に、日本陸軍参謀部のマコト・ハギ（萩誠？ ＊）大佐が出席した交渉について知った。彼は要請をした、ドイツとヒトラー個人が日本と中国の仲介の労を執ってくれるようにと。オットーはこれについてデルクセンに報告した。同じく、ベルリンへ電報を送った。直に、ドイツから返信が届いた。それが語っていた、日本と中国の間の仲介をヒトラー自身は積極的には行えないと。しかし、トラウトマン（ドイツの駐中大使 ＊）ならば何らかの「伝達の一環」の役割を為すことができると。

その後で、トラウトマンを通じて、ゾルゲは蒋介石に日本側の準備について話をした、和平交渉を始めるという。直ぐに、トラウトマンから、東京のドイツ大使館に知らせが届いた、蒋介石が日本政府の呼びかけを受け入れるという。

蒋介石は自分の力を十分に発揮した。トラウトマンによって伝えられた日本の提案はこれ見よがしに拒否された。1937年12月3日、蒋介石は自分の飛行機をハンコウへ派

遣した、ソビエトの武官ドラトビン師団長のために。執務室に立ち寄った時、蒋介石は急いで彼に伝えた：「昨日、ドイツ大使トラウトマンが私の所に来た。彼は計画案を持ってきた。その基本にあった、日本政府が衝突の終了を受け入れるという。我々は勝つまで戦争を行うことを決定した。私は完全に彼を思いとどませた。これをソビエト政府までしらせることを貴方にお願ひする」。意図は簡単であった、中国にさらに活発な援助をするようにスターリンを駆り立てること。これ以外に、いつもの通り、この時、ブリュッセルで会議が始まった。蒋介石は西の強国の援助を期待した、戦争の解決において。しかし、この期待が無駄であることが明らかになった時、12月6日、ブリュッセル会議の仕事が終了して直ぐに、蒋介石はトラウトマンに伝えた、彼は日本との交渉を継続することに同意したと。

オットーは蒋介石の返事を日本陸軍参謀部に伝えた。参謀部の返事は次の通りであった：日本はこれ以上の条件を持ち出さない。中国北部と上海における政治の立て直しだけを要求することに限定する。この返事が蒋介石に伝えられた時、彼は宣言した、彼は外見的には完全に受け入れる、しかし、よりしっかりした保証を公的に得ることを欲していると。今度は、外務大臣広田が請け合った、日本の要求は異常に大きなものにはならないと。しかし、南京の占領後、日本の要求は拡大した。デルクセン大使はゾルゲにその過剰な拡大について不満を述べた。

1938年1月に、ゾルゲはモスクワに伝えた、蒋介石政府に提示した日本の和平条件についての情報全てを。

ゾルゲが、彼の言葉からすると、オットーから耳にした時、日本陸軍参謀部の意見について、彼は直ぐに話した、蒋介石は日本の要求を簡単には受け入れないであろうと。将来において、この問題は非常に深刻な特徴を持つようになるだろうと。しかし、オットーは反対の視点を堅持した。事件は拡大した、ゾルゲが予見した通りに。12月27日に、中国はトラウトマンに伝えた、日本の要求に不同意であることを。この際、蒋介石が声明した、ベルリンは日本の要求の軽減化に協力することができる、そうでない場合には、中国でのソビエトと共産主義の影響の拡大の恐れに対して立ち上がると。

この後、ドイツ大使館の同僚達の目には、ゾルゲの権威は大いに成長した。ここでは、疑いのない役割を、彼が日本の計画に関して得た情報が果たした。尾崎（＜オットー＞）ゾルゲグループ内での匿名（\*）がゾルゲに日本政府の計画を教えた。宮城（＜ジョー＞）は日本軍の視点を彼に伝えた、中国におけるトラウトマンの役割について。これ故、ラムザイは、蒋介石の戦術は東京でいらだちを呼び起こしたという事情に明るかった。1938年1月16日、近衛首相が声明した、日本政府はこれ以上蒋介石を相手にしないと。

ラムザイはドイツの仲介の問題についての報告を読むことができた。1938年1月から2月に、ベルリンの大使館に送ったものを。この報告書の内容を、ラムザイはモスクワに送った。その後、この書類を写真撮影し、中央にフィルムを送った。

自分の報告において、ゾルゲは非常に重要な結論を出していた。いろいろな情報源を基礎として：

1. 日本にとって、蒋介石との和平条約の締結の目的は、ソ連邦に対する示威行動に自分の力を集中することである。
2. 日本から出されている要求に関して、中国からと同じように、両方の力から判断する

ことができる：中国は未だ余りにも弱い、早急の軍事援助を期待している。

3. 交渉の決裂の結果、中国における衝突は長期間にわたる。

### **ソ連邦は中国の戦争が長引く道路をとる**

疑いない、ゾルゲの報告がソ連邦の政策の作成に一定の役割を果たしたことは、国民党政府との関係において。それは中国軍の戦争能力についての理解を与えた、中国における戦争継続の展望の、ソ連邦側から相応した必要な軍事援助の。

あり得る、他のものと並んでラムザイグループの情報が決定の基礎となったことは、ソビエト政府が採用した、特に、中国への軍事援助に関して。それにもかかわらず、ゲンデンは相変わらず特別な通報に入れる指示の決済印を押し続けていた、上層部に配布する。結果として、ソビエト連邦は1938年に、2つの条約を中国と締結した（3月1日と7月1日）。それに従って、中国に総額1億アメリカドルのクレジットを提供し、ソ連邦から軍事物資その他を購入するために。

注目に値する、条約の調印時には、クレジットは既に使い果たされていたことが。それ自体は、国際的な業務において前例がないことであった。モスクワが中国軍の強化にどれだけ興味を抱いていたかの証左であった。1937年10月から、ソビエトの武器が中国に急いで届き始めた。中国の元軍事顧問であったカリヤギンの意見によれば、「時期適切で効果的なソ連邦の援助は蒋介石の降伏を防いだ、日本の武力の圧迫下と西の外交の作戦下での。1937年12月1日、最初の飛行機部隊が南京に到着した。ソビエトのパイロット達が戦闘に参加した。この事は、我々の予想通り、蒋介石の退路を断ち、彼の降伏する試みを食い止めた」。

先回りをして、語っておこう。ソビエトの援助は決定的な役割を果たした、1937年から1942年における日本の侵攻に対して抵抗することにおいて。1938年10月末までに、日本軍によって重要な産業中心と重要な鉄道幹線のある中国領土の大部分を占領された（1938年19月には武漢—大きな産業中心で輸送の中心、国民党政府は重慶に移動せざるを得なかった—が陥落）にもかかわらず、中国奥地への日本軍の進撃は停止した。

ソビエト軍事顧問の助けを得て、中国軍は1939年～1940年に、一連の活発な作戦を実行した。この時、中国側からは100師団～110師団が行動した、日本の20師団に対して。この時、ソビエト軍事顧問のデータからすると、日本軍は約20万人の戦死者と戦傷者の損失を受けた。結果、電撃戦の日本の計画は破綻した。戦争は長期戦となった。中国軍は破壊されなかっただけでなく、逆に、極めてより強固となり、武装と人員を補強し、訓練と組織化と参謀部の指導を改善した。これは中国政府に占領された地域から多くの企業を奥地に移動させることを可能とした。そこに新しい生産拠点を設立した。

当然のことながら、ソビエト指導部は、ソビエト連邦の極東の国境の安全に興味があった。そして理解していた、中国での戦争が継続している間、日本は北方方面に大規模な侵攻を計画するのは難しいということ。

ソ連邦の援助は唯一の反日本前線の強化を助け、同時に中国共産党の立場を強化することも具体的に助けた。国民党と中国共産党の間の合意を基礎に、国家的政府の部分的な再



組織下の計画が進められた。政府での諮問機関として、国家政治ソビエトが創設された。それに中国共産党の代表が参加した。

これは国民党の右派に不満を引き起こした。彼らは危惧していた、ソビエトの援助は中国共産党の立場を強化しているとして。この結果、ソ連邦と蒋介石政府の間の相互関係は、複雑で矛盾の特徴を帯びていた。中国政府はソ連邦を、自分たちの思想的敵対者と見なしていた。ソ連邦と西側の強国の間で自身のひいきで常に揺れ動いていた他国からの利益を得る試みをしながら。

### 「オットー（尾崎の匿名 \*）が得た情報からすると・・・」

日中衝突の継続についてのゾルゲの予想は、多くの点で、尾崎（＜オットー＞）の情報によっていた。彼は中国の専門家として状況を十分に知り得ていた。近衛首相の側近達と密接に交流していた。近衛は1937年6月に日本の首相になった。

尾崎は事情に明るかった、近衛内閣では見解の不一致があるということに。ある者達は中国での戦争を停止し、ソ連邦との戦争準備に努力の集中に賛成していた。他の者達は見なしていた、決定的な最大の作戦で中国軍に対抗することが必要であると、蒋介石を降伏させるためには。尾崎は直ぐにゾルゲに話した、日本で呼称している「支那事変」は必ず大戦争に発展し、中国と日本の領域に限定されないと。

実際において、中国北部での戦いは拡大し、戦争に変化した。ゾルゲと尾崎はしばしば出会うように努力した。始めは、出会いはレストランであった。しかし、ゾルゲの言葉によれば、「次第に、出会いのために場所を見つけることが困難となっていった。私はまれに外国人用レストランに立ち寄った。が、そうするのは尾崎との時だけであった」。

伝説が存在している。ゾルゲと尾崎は殆ど毎日出会い、ホテル「インペリア」のロビーで話し合っていたとの。実際において、この場所はゾルゲはとにかく避けた。「インペリア」のバーやロビーには警察やスパイの犬たちが何時も蠢いていたから。

近衛閣下の取り巻きとの尾崎の交際は一特に西園寺公一（きんかず）との一は非常に興味を引くものであった。近衛は良く西園寺を知っており、しばしば相談をしていた。当時閣下であった故に、何の公的職務に従事していなかったにもかかわらず。が、全てを非常に良く理解していた、政治の世界で起こっていることを。西園寺は、彼の言葉によれば、試みていた、近衛を助けることを。彼との協力に関していろいろな人々を励ましながら。

尾崎にとっての他の情報源は、彼の同級生の牛場であった。牛場は近衛の個人秘書の一人であった。しかし、この時期に重要であったのは、近衛内閣の筆頭書記官であった風見章と尾崎との交流であった。尾崎は彼らと「昭和研究会」として知られている組織を通じて知り合った。この組織は寄付で保っており、不動産を有し、自らの管理人も持っていた。この協会は1936年11月に設立した、近衛の友人や信奉者達が。近衛が貴族院議長であった時に。協会の主たる目的は日本の内政と外政問題に関して諮問をすることであった。非公式的であれ、専門家達の熟練した意見に近衛は支えられた。近衛は彼らに相談をした。首相として職務に努めている時に、全てが信用していた、必ず何かが起こるに違いないと。

1936年2月の蜂起後、近衛は首相を拒否した。しかし、首相の椅子にいる彼を見たいという一般の希望をただ強めたただけであった。彼は最も好ましい人物であった、いろいろ

ろな理由で。軍は彼を利用しようとした、自分の目的のために。近衛は軍の側にいるということを利用して。自由主義者達は近衛をファシストに対抗するそれなりの砦と見なした。他の者達は近衛に旧家である藤原家の尊敬すべき子孫の代表と見なした、野心と関係することなく、無関心の立場で行動する者として。それより前の10年間で首相の地位に就いた軍人、政党人、官僚とは際立った対照をなしていた。これら以外に、近衛は未だ若かった、1937年には彼は46歳であった。

「昭和研究会」には、日本の良好な知性人達が入っていた。彼らの内には熱烈な国家主義者があり、穏健な現実主義者、反マルキスト、そしてマルキスト達があった。会員の大半は自由主義的な世界観の支持者達と関係を持っていた。日本における条件では、これはほめかしていた、多くの点でイギリスの保守派の政治と似た政治の遂行を。

彼らは君主制を尊敬し、陸軍と海軍に注意を割くことに努めていた。この際多くのものに若干の軽蔑を抱きながら、全部とはないにしても政党政治に。しかし、彼らを脅かし憤慨させた、軍部からの政治への圧力が、特に陸軍の。そして彼らは理解した、陸軍とその要求に抵抗することは無駄であり、危険であることを。

日本における軍部の政治的役割が増大していった。1937年秋の「支那事変」の開始後、大本営が設立された。その結果、軍事問題に関して、そこに日本軍の指揮は政府からの判断無しに委ねられることになった。これ故、思慮は昭和研究会の会員に押しつけた、見せかけの妥協的なことを、国の内部の全体主義と外国への軍の進出に関するドリフト関係において。ただ、日本軍の指導部を戻らせることができた—長くはなく、時折—穏健と健康な考えの道へ。どのような幻想であったのか、恐らく、近衛自身によって分かち合った。

近衛と彼の知人達には、統制派に属している穏便な軍人の視点がより近かった。いわゆる古いコンツェルン（三井、三菱、住友、安田）と関係している。統制派に入っている軍人の大半は軍の高位に位置していた。巨大な財産団体を目当てにし、宮廷官僚と密接な関係を維持していた。このグループを将軍東条と武藤が指揮していた。将軍荒木と真崎を首領とし、新興のコンツェルン（中島、川崎、等）と密接な関係を有する皇道派と争っていた。軍では、このグループは若手将校達の支持を得ていた、その多くはプチブルやインテリ出身者達であった、国に不満な、1928年から1933年の危機の結果できあがった。彼らは自分たちの目的にしていた、革命の手段で「国家社会主義」の構築とアジアの隣国の征服を。旧コンツェルンは若手将校達の反独占の雄弁術に不満を持っており、それ以上に、自分たちの代表者に対する彼らのテロ行動に、例えば、1932年2月の三井コンツェルンの理事会代表の団伊久磨の殺害に。統制派を支持しながら、「軍の中央部の参謀部将校達の管理下」における改良遂行の自分らに受け入れられる方法に取りかかった。

統制派はそのように呼ばれた。というのは指導者達は青年将校組織の陰謀活動の終焉を目論み、彼らに厳しい統制を課すことを目論んでいた。旧コンツェルンの支持は最終的に、統制派の勝利をもたらした。皇道派の立場の弱化は、彼らを軍事クーデターの試みに突き動かした、1936年2月26日の。蜂起は鎮圧され、主要参加者（19名）は処刑された。蜂起の崩壊後、皇道派に対して軍の肅正が為された。皇道派は軍事省と軍の上層部から排除された。

風見章は昭和研究会で中国研究グループの筆頭の人物であった。1937年春に、そこ

へ尾崎は加入した。風見は尾崎の先輩であった。しかし、年齢差にかかわらず、彼らは相互に親交を重ねた。

尾崎の言葉によれば、風見は素晴らしい政治的直感を持っていた。彼は自分の視点を直接ではなく、婉曲に表現した。このため、彼の思考のスタイルを理解する必要があった、彼を感じること、知るために、彼は何を実際に思っているかを。「そして、私は判断する能力を発展させた。彼の考えの全般的な傾向について。簡単な発言について、或いは、彼が言いかけたことについて、言い残したことについて。すなわち、毎日の風見との接触の御陰で、彼が何を考えているのか、私は思い浮かべることができた」。

ゾルゲはしばしば尾崎に問い合わせた。基本問題に関しての尾崎の意見はどうかと。そして通常は、返答をした。

「支那事変」の政治的展望について、尾崎は確かな情報源を見つけることができたのであろうか。尾崎は近衛の友人グループに入っていたので、彼に直接関係することができていた。

風見は近衛の秘書課長となり、1938年夏に、首相の内閣の臨時相談役になるように尾崎を招聘した。定期の賃金は得られないが。しかし、尾崎自身が書いているように、彼の本物の仕事となったのは風見を助けることであった、それ以上ではなかった。

尾崎の職務は、具体的問題に対して具体的助言をすることであった。同時に正確で価値ある情報を得ながら、それをゾルゲに伝えた。そのようなわけで彼は、事務室で風見と他の秘書の書類を自由に利用することができた。

## イギリスはゲームを始める

中国へのソビエトの軍事援助は、ソ日関係を先鋭化させた。1938年1月、ゾルゲが伝えた、日本の参謀本部は大いなる狼狽を示していると、戦争の継続の展望に。戦争は「簡単な散歩」ではなかった。戦争は日本を弱体化し始めていた。ドイツ武官の機関の結論からすると、日本はもう国力を持っていなかった、1938年にソ連邦に侵攻するための。

日本の参謀本部の代表がオットーに伝えた、日本軍はソ連邦に対する戦争を強力に準備していると、時間の遅延がその役に立つと見なして。同時に、客観的な原因が存在していた、この準備を遅らせている。それらの中で、日本軍の意見によれば、当てはまっていたのは：長期間にわたり中国で大規模な占領軍を保持する必要性；中国での戦争後に日本軍を十分に補充する必要性；財政的困難さの存在；ドイツの侵攻に関する不準備。日本の参謀部の意見によれば、2年が最大であった。が、1年はそのための最短期間、日本がソ連邦に対して戦争を開始するための。オットーはこの説明を書き残した、その後、それを「ラムザイ」に見せた。

当時、中国に対するソ連邦の影響は、他の強国の影響より極めて大きかった。蒋介石は、1938年6月12日に中国軍の政治指導本部の労働者を前にして、演説をした：「日本は中国とソ連邦の敵である。もし誰かがソ連邦と中国との友好を妨げようとすれば、これは日本の陰謀を利するだけである。今日、ソ連邦以外に、中国を助けてくれる国は一つもない。アメリカさえ銀貨だけで我々に助けをしている。今日、中国とソ連邦は同じ生き方の道にある。この危機的時において、我々は生き死を共にしなければならない」。

同時に、国民党指導部は、1937年—1938年の間、日本との秘密交渉を禁止しなかった、ソビエト連邦と日本との関係の先鋭化と日露の紛争に期待をかけて。この交渉の主たる目的は単独講和の締結であった。

近衛を首班とする日本政府は同じように、政治を指導した。反コミンテルンの立場をとっている国民党右派と接近する方向を持って。

交渉に、ドイツ以外に、積極的な支持をイギリスとアメリカは示した。彼らは極めて興味を持っていた、中国における戦争の早急の停止に。これらの国の影響あるグループが思っているように、戦争は日本を弱めた。その国力を中国での軍事作戦に拘束した。ソ連邦に対する戦争の準備を困難とした。彼らはソビエト連邦つまり、中国の共産党員の立場の増加に恐れを感じていた。この国への軍事援助の御陰で。

この後、ゾルゲの報告からすると、特に、イギリスは1938年初めから厳しい反ソビエトの手段をとった。自分の報告の一つでラムザイは伝えた、ベルギー大使の発言について、それへのデルクセンの送別訪問時に（イギリスへ公使として去った）。デルクセンに（明らかに、イギリス公使の言葉で）述べられた、「肅正」の後（すなわち1937年の過程）に、ソ連邦を「第一の敵」と見なすことを。

イギリス大使はソ連邦に対抗して発言した、中国へのその影響の強化を非難して、戦争の継続を呼びかける試みに対して。これ故、イギリス政府は中国における戦争の早急の停止の方法をとった。日本を自由にし、ソ連邦との戦争の準備に完全に集中させるために。

大使は、明らかに、影響あるイギリスの階層の意見を発しながら、見なしていた、「日中衝突におけるドイツの将来の仲介の良い方法、これはイギリスとの共同作戦。イギリスが中国における自分の影響を利用する。同時に、ドイツは日本への影響を利用しなければならないように。それで彼らが合意に達するために」。ゾルゲの報告によれば、戦略目的として、「イギリスとフランスのドイツとの接近、ソ連邦への侵攻の課題を日本のために残すこと・・・」が残された。

極めて特徴的である、イギリス大使の声明が1938年2月22日の退去の前に為されたのは、外務大臣イーデンの地位からの。彼は中国では「身内の人」と見なされていた。彼に対して、中国は期待していた、イギリスの借金の提供と飛行機（戦闘機）の提供を。香港のイギリス権力は中国への輸送への障害を直していなかった、特にソ連邦との国境のために購入された武器の。イーデンの退去から、状況が変わった。36機の飛行機の内、10機だけが送り届けられた。中国右派はグループの特別な不満を引き起こした。中国の海運関税からの収入の日本への引き渡しの日英協定が、イギリスは今までの8年間にわたって集めていた。

新聞「ウハン・ジバオ」が1938年5月5日、これに関して非常に厳しい記事を掲載した。中国の外務省がイギリス政府にメモを送付した。それには記されていた、中国は全く協定に納得しない、作戦の自由を自分のものとしておくと。といっても、「作戦の自由」は極めて曖昧なものであった。とにかく中国は仕事で多くをイギリスに頼っていたので、関税体制に何の影響も与えることはできなかった。

## 主攻撃の方向—ブラガベシエンスク

1938年2月に、ゾルゲはオットーから知った、日本はブラガベシェンスク前線の水没を真剣に研究していると。ソ連側からの侵攻の場合に、日本が防衛のために十分な戦力を有していない時に。関東軍の指揮官である上田将軍はこのテーマでベルギーの将校と相談をした（明らかに、運河とダム建設においてベルギー人の経験に関して）

ゾルゲは伝えた、日本の参謀本部はソ連への侵攻計画を作成していると。彼は提案した、国境の西部（ブラガベシェンスク、マンチューリ）で、日本軍は防衛体制をとり、東部（ウラジオストク、ブラガベシェンスク）で、活発な作戦をとると。しかし、主攻撃はブラガベシェンスク方面であると予想された、シベリア鉄道の寸断を目的として。その後、日本軍の一部はソビエト軍のザバイカルスク軍団の攻撃の防御のために割かれる。日本軍の主力はハバロフスクの方向、東へ迂回して攻撃をする。沿海州全体を切り離すために。

5月に、ラムザイは伝えた、関東軍の強化と配置の計画について、満州における日本軍の。1938年7月に、ラムザイから情報が届いた、尾崎が近衛の近傍の情報源から知り得た、日本はソ連との戦争時に27個師団を準備するつもりであるという。

尾崎は1937年12月から1938年3月の間に、中国の中央部と南部を旅行した、東京朝日新聞の特派員の資格で。上海と香港を訪れた。旅行の結果をゾルゲに伝えた、アメリカ、イギリス、ドイツの上海の企業グループは事変の拡大に不満を漏らし、日本と蒋介石の合意の達成に賛成をしていると、事変を終局させるために。中国の企業家達は同じく日本を信用していない、中国人の中に、強烈な反日本の雰囲気があり、団結しようという雰囲気が強まっている。尾崎の知らせは極めて重要なものであった、香港は中国援助の主要な積み替えの基地になっているという。これ故、日本の指導部は広東占領を計画する、香港を中国大陸から分離するために。

その間に、アメリカ政府は日本に対して圧力をかけ続けた。日本が軍事作戦を中国北部に限定し、黄河より南部への侵攻をしないようにするために。その際、ゾルゲが伝えてきた、これはイギリスの司令部に、香港への日本軍の侵攻への反撃を同時に計画することを妨げないと。

1938年3月初めに、最初の兆候が現れた、日本がイギリスの要求に同意するとの。日本政府は結論に達した、中国への侵攻の継続は極めて無駄であるとの。以前の「石原計画」に戻ることになった。この案は軍事作戦を北中国に限定するものであった。そこは将来において満州と一緒に、ソ連邦に対する戦争の基地となるものであった・・・、ラムザイが伝えたように。しかし、ソ連邦に対するこの新しい集中は、一彼は追加した一疑いなく、時間を要求する、1、2年以上の。同時に、日本政府は中国中央部を確保したがった、イギリス人と中国人との商売の対象として。中国での調整を加速するために、イタリア政府を通じて蒋介石と交渉することを試みていた。

1938年4月、尾崎はゾルゲに伝えた、日本軍の計画について、中央中国にベイ・シニヤ（日本語記述は汪兆銘 \*）傀儡政権設立の。日本の北部中国の軍指導部はそれに抗議した、しかし、中央軍は熱烈に計画を支持した。東京へ飛行機で特別使者を派遣した。宮城の情報によれば、参謀本部と北部中国の松井将軍の参謀部との間に対立が生じた。この結果、松井の退役となった。その後、軍事大臣杉山元が北部中国を秘密に訪問した。彼の目的は、中国と満州にいる日本軍の一体化に関する問題の研究であった。中国における基本的な軍事作戦の終了後に、関東軍の全体的指揮下の元で。

## ガウスゴフェル教授(？ ＊)のための論文

1938年4月に、ゾルゲは論文「日中紛争時における香港と南西中国（一度の旅行からの印象）」を書いていた。これはその後、雑誌に2回に渡って掲載された、「ツアイトシリフト・フル地政学」、1938年の第7号と第8号。この論文の分析は模擬的なものであった、政治事件における影響を示すために印刷物を利用するというラムザイの可能性の研究計画の元で。

第一に、ゾルゲは客観的な観察者として振る舞っている、どちらの側にも属さない。日本人は酷い目に遭っている、日本人は疑わしい臨時政府或いは他の政府の権力を設立し、極東地区に指導的役割を要求し、中国における拡張政治を行っていることで。この際、軍事占領の手段を利用している、「内部政府改革」の特別作戦として。日本の立場は自分の興味を守ることを強制している、中国だけではなく、同じくイギリスや他の西側強国にも。読者には疑念は起こらない、日本は中国において侵略戦争を行っていることに。著者が指摘している通り、日本の飛行機が列車を爆撃していない、それが客車であることを識別することができた時には。

イギリス人はゾルゲから小言を受けていた、香港からの彼らの援助の件で。当時中国にアヘンを押しつけ、その後、西の強国の軍事的政治的意思を。

しかし、日本の進撃の開始後、イギリスは中国の敵から同盟者変わった。論文の著者は極めて一面的に香港のイギリス人とイギリス帝国の政治関係を強調している、激しく起こった日中紛争に関して。「イギリスの明確な政治的決定無しに、中国の中央政府のために、或いは、この衝突における中国側のために、その地理学上の好都合な状況にもかかわらず、香港は自分の最新の意義を決して獲得しなかった」。

論文全体は、香港への日本の攻撃の可能性に関して、イギリス人の恐れで貫かれていた。論文の著者は特記している、「日中衝突の予想外の拡大、中国の積極的な香港の支持、日本における反イギリスの雰囲気増大、特に、日本海軍の移動は大きな危険を醸し出した、日本は香港を攻撃するとの」。しかし、イギリスの軍部の意見によれば、日本政府は公式報告を出している、イギリス帝国との戦争を示していることを。抗議の徹底した宣伝の結果、特にイギリスの電信代理店や新聞の側から、日本は無防備の広東の爆撃を停止せざるを得なかった。「空襲のためにそれほど大きくはない危険のない目標で満足した」。同時に、ラムザイが伝えた、日本空軍が空襲のために選択した目的は、明らかに無意味であり、欲しい効果—香港を経由しての広東の武装化の停止—を与えないことを。

論文では、イギリス政府の強まった決意が強調されている、香港を防衛するという。特に、イギリスとアメリカの間の「アングロサクソンの連帯」の雰囲気復活と関連して。同時に、ゾルゲは皮肉を持って香港の明らかに弱い防衛を記述している。

広東占領の目的を持っての日本軍の上陸は不可避的である。もし日本政府が香港を経由しての蒋介石政府への軍事供給を禁止したいならば。この際、著者は強調している、他の国からの軍事援助、特にソ連邦は、香港を経由しての荷物と比較すると極めて少ない。「疑いはない、飛行機、戦車、自動車、幹線道路と鉄道の建設用資材はインドシナを経由して中国への経路中にある。確実に、ソビエトはシベリヤから中央中国へ鉄道で重要な武器を

送っている。この搬送量を見積もるのは難しい：とにかく、今日、それらは未だ重要な役目を果たしてはいない、香港からのもののように。最良の積み替え基地を経由しての最短の経路に制限されている」。

著者は指摘している。中国の沿岸には、他の港湾案市はないと、この課題を遂行できるような。インドシナとビルマを経由する建設中の道路は、多分、中国の補給における広東の役割を引き受けてくれるようにはならないと、中国北部と上海が日本の手に落ちたように。

ゾルゲは結論を出している：「イギリス王国の植民地は今日、重要な海外の拠点となっている。中国中央政府の日本との戦いにおいて。この断定は全く正しい、フランス領インドシナとソビエトロシアとの中央政府の北部の連絡の増大する意義を総括すると」。

論文は一面で日本の興味の根源的な矛盾を断定している、他面でイギリスとフランスの。「今日、フランス、特にイギリスは、何よりも日本の支配権に入っていない、中央と南部の中国の維持に興味を持っている。そしてここで北部中国の十分な代用を探している。北部中国は失われたものと見なされている。上海地域は、その国際的意義は小さくなった。ドイツの貿易の興味にとって、上海では損害を被った。ここ南では、活動の広い場が開かれている」。

さらに、正確で極めてえこひいきのない評定が為されている、極東におけるイギリス政府の政治の本質的な目標について。中国におけるイギリスの経済的、政治的軍事的興味、同じように太平洋南部において、黄河より北の地域に日本による拡張を限定することを要求している。「とにかく、イギリスは（今も将来も）、名を挙げた領域の日本の拡張を制限するそれなりの手段の援助を持った状態にはない。このためには中国だけの力では不十分であり、イギリスは自分の植民地である香港を経由して中国に示している、全く合法的な輸送、技術、経済、政治的な援助を。中央中国の政府の抵抗力の増加のために」。

イギリスは、中国の抵抗を支持し、日本の弱体化の方法を探っている。日本が紛争終結後に、自分の拡張の境界を認めさせることを強いるので。イギリスが欲している、その際、幾つかの他の国によっても。この際、イギリスは非常に明快に理解を示している、イギリスは一定の状況の下で喜んで中立を保つことを、黄河北部の日本の拡張に関して、イギリスは前述の視点に矛盾したものと見なしていない、上海地域における日本の一定の譲歩を。

中央政府へのイギリスの援助は、日本との軍事衝突の危険がある。イギリス人は戦力を傾けてこの危険を避けようとする、香港を経由しての貿易と軍事物資の輸送を禁止する準備があると声明しながら。この際、彼らは全く認識していた、そのような決定は香港の経済への影響が重くのしかかることを。

同時に、イギリスは極東における自分の軍事準備を増強している、香港とシンガポールの更なる強化に関しての仕事を加速していた。「目に見えるほど活発に」。

最後に、著者は極めて重要な結論をしている。彼が思っている通り、香港に対する決定的な作戦の要求、イギリスに対しても、日本において様々なグループから提起された、は最終的に取り下げられた。「日本は見なしている、ソビエト連邦とイギリスとの敵対関係の同時の維持はできない、北と中央中国での軍事作戦を継続しながらの」。中国南部における日本による大規模な軍事作戦の可能性はというと、それは避けられない。もし日本政府が蒋介石の犯行を決定的に打ち下すことを期待しているならば。「もし、中国の北と中

央での戦いが最終的な成功とならなければ、最後の手段の適用の必要性が生ずる（軍事的視点で、明らかに）、南への作戦。この際、日本政府内の過激的国粋主義グループの影響の増大は更なる軍事的手段へと導くであろう。「南への侵攻の必要性はより早く熟したと認められた、以前の指導部の時より」。

ゾルゲのこの論文の分析は次のような結論を基本としていた。

1. 一面において、著者は印象を創っている、彼は鼻負無しで中立の立場を維持しているという。論文において、日本とイギリスは否定的に描写されている。他面において、ドイツとその極東における興味については、完全黙秘の特徴を持っている。同じように、ソ連邦をちらりと言及はしている。

2. 論文では、香港の特別な役割が強調されている、中央の中国政府への軍事調達の安全の仕事における点、日本の侵略に抵抗するその能力を増大させる点。同時に、十分に正確に、当然に考えを導き出している、ソ連側からの軍事援助は大きくはなり得ないと。

3. イギリスの政策は二面性を示している：北部中国への日本の拡大を制限しようとする興味と、中央と南部の中国へのイギリスとフランスの興味。これらの関係において、著者の結論は全く論理的である。日本の弱体化の目的を持って、中国での戦争の継続にイギリスは興味を持っている点と、イギリス政府に益のある戦後の処理の条件を日本に押しつける。

4. 同時に、論文は印象を残している、中国における2国の興味の衝突から日英軍事衝突の恐れ。これに関して、著者の意見によれば、香港は単なる口実となる、「関係の説明」の開始のための。これに関して、著者によって示されている、一面において、香港の防衛の脆弱性と極東におけるイギリスの戦争の可能性を。他面において強調している、日本は自覚をしなければならないと、アメリカに支持されたイギリスとの軍事的対立の困難さを。

5. 著者の最終的結論は断固たるものである：日本はソビエト連邦とイギリスとの軍事衝突にはまり込むことはできない、中国との戦争が継続している間は。同時に、日本は中国における戦争の決定的継続を待たなければならない、中国の南部における軍事作戦を行いながら。

ゾルゲが自分の論文で並べた関係の全般的モデルは論理的であり、優雅であった。彼はイギリスとソ連邦を一緒にして、一目瞭然に示している、実際において日本の興味に、イギリスとフランスだけが触れていることを。これ故、日本の更なる拡張は南方に向かっており、北方ではないと。従って、香港はお決まりで十分容易な獲得物となる、この経路における日本軍にとって。同時に、ソビエト連邦とイギリスと戦争をする状態には日本はないという著者の結論は、中国で戦争をしている間について。しかし、イギリスとだけの戦争を開始する日本にとっての可能性は取り消していない。これ故、文脈からわかるように、日中戦争の道において事変の本質的な発展となった。

我々に思われているように、雑誌「ツァイトシフト・フル・ゲオポリテク」で公開された論文による分析は、ジャーナリストと研究者としてのゾルゲの才能を示しただけではなく、ゾルゲのジャーナリストと諜報員としての密接な関係も示している。「ラムザイ」は単なる情報機関としてだけでなく、極めて活発な「影響の代理人」でもあった。

大いにあり得る、ゾルゲの論文がドイツの政府や社会層に深刻に受け止められたと推定することができる。ベルリンでオーイと叫ぶと、それらはエコーとして東京に戻っ



てきた。

香港についてのゾルゲの論文は例外ではなかったらしい。疑いなく、それはドイツと日本の体制において形成に寄与をしたことが、枢軸国の国際的興味の独自の理解の、ソ連邦だけではなくイギリスと対立する。

ゾルゲ博士の分析スタイルは多くの者に感銘を与えた。が、この道には、諜報員を待ち受けていた、時折極めて不快な予想外のことが。

### コレスニコバヤとコレスニコフの本「リヒャルト・ゾルゲの生涯と不滅の名声」から

デルクセンは本棚から新聞の束をつかみ出し、空中でそれらを振り回した：

—東京では、私は貴方の最も熱心な読者である。各記事を念入りに研究している。一見して、我々は一つの仕事をしている：ドイツと日本の関係を良くしようと努めている。第一に、我々にこれが要求されている。しかし、テレンツキイが言っているように、二人が同じことをなす時には、違う結果が得られる。ほら、ここに赤鉛筆で強調された部分が、私を極めて独特の考えを抱かせた箇所が。聞いてくれ、ナチスのジャーナリストであるゾルゲ博士がドイツの新聞「フランクフルト・ツァイツング」に書いていることを、全世界でそれを読んでいる：

「近年と比較して、赤軍の人員は増大した。疑いはない、今日、大陸における日本の2番目の隣人（ロシア？ ＊）が深刻な力の要因になっている。東アジアに於ける日本の過去のこの上なく好都合な立場、対等の敵対者の不在で表される、それ以上のものは存在しない！」 最近、近衛閣下が私（＝ドイツ大使デルクセン 訳者）に質問をした：

「君の所の特派員であるゾルゲはロシアの力で我々を脅したいのか？ 彼は書いている、我々は中国にはまり込み、中国より軍事力のある敵国との戦争を今はする余地はない。正にロシアと。一定のドイツグループの視点としての彼の発言を受け入れなければならないのか？」。なぜ彼は我々を異国の侵略者と呼ぶのか？ 君は火を弄んでいる、ゾルゲ博士！

—私は客観的に見ようとしている。

デルクセンはじつと彼をのぞき込んだ：

—もちろん。しかし、私が貴方の立場なら、とにかくそのような表現を避けた：「唯一の前線」、「和平の強化」、「軍拡競争」、「反ボリシェビキ条約」。西のジャーナリストの誰も、君以外、同様な進展を要求していない、新聞イズベスチャから引用して、反ボリシェビキによって「反コミンテルン条約」と呼ばれていない。差がどこにあるか君は聞くのか？ 答えよう：ジャーナリストの思考自体に。「反コミンテルン」について話すと、考慮に入れている、条約は世界のコミュニストに向けられており、ロシアの政権党—ボリシェビキ—に向けられてはいない。条約を「反ボリシェビキ主義」によるものと名指しして、君はボリシェビキに手を貸している、条約の真の本質を明らかにして、指摘しているように、それは一般的にコミュニストに対抗しないように向けられ、具体的にソビエト連邦に向けられていると。君はうっかり口を滑らしている、ゾルゲ博士。この件を誰かに故意に示すことができる・・・

リヒャルトは強い驚きを持って彼に耳を傾けた。デルクセンは繊細な心理学者であった：言葉から諜報員を捕まえた。君はのんびりしていた、リヒャルト、しくじりを重ねている。ベネッカーさえ、君のマルキスト方への執着を暴いていた・・・

—君は正しい—、彼は大使に小声で語った、—私は注意してソビエトの出版物に目を通し、モスクワの新聞記者からその政治的信念を借用するように努めよう。

デルクセンは笑い出した：

—君は余りにも明けっ広げだ、ゾルゲ博士。もし直接に話すならば、多くの西側の政治家は君の冷静さを奪われている。ボリシェビキの可能性を誤って評価している。君のパトロンであるガウスゴヘル将軍はより冷静である：彼はソ

ビエト連邦を少し恐れている。考える、君は彼の信頼できる信奉者であると、・・・そして、全てソビエトに：日本人を「異国の侵略者」と呼ばないで。

何故、デルクセンにこの曖昧な話し合いが必要であったのか？ 話したこと以上は知らなかったのか？ 彼らはモスクワのドイツ人クラブで会合しなかったのか？ リヒャルトの心は非常に乱れていた。デルクセンは自分の洞察力で彼をビックリさせた」。

## 日本における政治力の新しい配置

この頃、東京のドイツ大使館で、大規模な人事変更が行われた。デルクセン大使はロンドンでの大使の職務に去った。東京での新しい大使の任命の問題が起こった。ドイツ指導部には、この職務にオッターを任命しようという考えが生まれた。彼はこの時には陸軍少将であった。カイテルの斡旋に従って、ヒトラーは外交官の職務にオッターを利用する決定を行い、1938年4月、彼を日本におけるドイツ帝国の臨時で全権大使に任命した。ゾルゲはモスクワに、この事を次のように伝えた、ロンドン大使としてのデルクセンの任命とのこの組み合わせは、外交官グループに好意的に受け入れられている。彼らの意見によれば、ソ連邦に対する戦争の準備強化を示している故に。「ラムザイ」は同様に伝えた、近衛首相は、イギリスとの親交になびいていると、ソ連邦に対する敵対的態度の共通の土壌において。日本政府には課題が持ち上がった－赤軍の定数を超えるという、<例えば、軍事経験を有している戦闘員に関して>。

非常に重要な価値を有していた、ゾルゲの情報は。日本政府における政治力の配置についての、その作戦を予想させてくれる。そのような政治分析の古い例がある、ラムザイグループが1938年4月から5月にかけて行った：

「日本における政治グループの基本的視点は中国における戦争に関してである：

－経済界は完全に満足している、北部中国の占領と発展に、何らかの作戦の拡大に反対して；

－関東軍は、ソ連邦に対抗する戦争の準備に注意の完全な集中、中国における軍事作戦の厳格な制限のために、北部中国と満州だけ；

－中道派（梅津、杉山）は最小の軍事力による中国での戦争の終結のために、ソ連邦に対する戦争の準備の加速、中国軍とその抵抗勢力の過小評価；

－近衛、海軍、若干の他のグループは袋小路を見て、要求していた、中国に対する短期で決定的な作戦を。それは第一番の抵抗勢力と見なさなければならない、が、シベリア前線は2次として。

中道派は同意することを強いられた、中国に対してより決定的な作戦の要求を持って、マンチュウゴウからルンハイスク前線へ軍を移動する、中国人の抵抗力を粉砕することを期待して。

問題は次の通りであった、蘇州（上海の西側 \*）陥落後に、マンチュウゴウとシベリアから中国への基本前線の移動に対抗する関東軍の強い反対が着手する」。

ゾルゲの情報によれば、近衛グループと杉山－梅津の支持者の間で基本的な戦いが展開された。近衛グループはより決定的な作戦を要求した、戦争を早急に終了するために。内政的な戦いにおいては勝利の大きなチャンスをもっていた。ラムザイは予想していた、「こ

れは日本における外交政治に変化をもたらす」と。

実際において、1938年5月に、外務大臣広田が辞職し、この地位に宇垣が任命された。この辞職の理由について、尾崎はゾルゲに伝えた。広田は支那事変に余りにも消極的であった。他の面において、宇垣の起用はアメリカとイギリスとの協定を得ることの意向があった、日中の調整の仕事において。

東京のイギリス大使クレイクと宇垣との会談に関する尾崎の情報は非常に重要であった。会議の内容は秘密であったが。しかし、オットーの意見によれば、交渉は失敗であるという予想であった。これは説明された、内閣の一部は宇垣の意向に反対であることで。国内の全体的な意見は、イギリスとの協定に同じく反対するものであった。

モスクワ、労農赤軍諜報局局長へ

オストロバ、1938年5月6日

先週の日本の参謀本部と広田とのオットーの交渉は、ドイツの軍事物資の中国への供給と中国におけるドイツの助言者の活動の主要な課題に触れるものであった。日本は断固として固執している、ドイツの助言者の公的な召還と中国への軍事物資の供給の中止を。物資は香港を経由して中国へ現在まで常時届いている。

オットーは同意した、日本のために、明確な決定をするようにドイツに要求することに。日独の共同の可能な環境の拡大についての問題には触れられなかった。というのは、この問題はベルリンでリップントロップと大島の間で特別に審議されているので、最初の反コミンテルン協定の時と同じように。

オットーはドイツ大使トラウトマンと香港で会う指示を得た、中国での衝突に関して意見を交換するために。オットーは見なしている、政治と軍事の同盟の締結に関して、大島のしつこい催促に関し、彼はベルリンに召還されると。しかし、オットーは知らない、ベルリンはこの方向には全く向かっていないことを、中国における日本の増大する困難を考えて。この困難は日本を弱体化させ得る。

87号、88号 ラムザイ

解説 マリンニコフ

決裁 HY：「HO-2 特別通報 翻訳 シロトキン少佐 ゲンデン。10/V」

近衛内閣が中国でエネルギーな戦争継続の方針をとったことに関して、日本政府はドイツの助言者の公式の召還と中国への軍事物資の供給の禁止を断固として要求した。オットーは日本人に約束した、ベルリンに必要性を納得させ、それを促進することを。これを前にして、彼はゾルゲと会議を行った、それから出てきた、助言者を召還する必要があると、それは早いほどよい：「日中紛争において、我々はロシアと共同しているということである。中国軍の敗北の際に、我々の軍事助言者は責任を果たすことになる・・・」

オットーをベルリンに呼び出した、彼がどう見なしているのか、ベルリンの日本大使大島の熱心な働きかけに関して、ドイツと日本間の政治的及び軍事的同盟の締結に関する。同時期に、オットーの言葉によれば、第3帝国の指導部は自信がなかった、独日同盟の締結は価値があるのかどうか、中国における日本軍の困難さが増大していることを考慮しながら。

**「この歴史を君はどう考えるのか?・・・」**

その間に、ゾルゲに事件が起こった。彼の命に関わる、ラムザイグループ崩壊。オットーの大使への任命後、ゾルゲは香港へ短期の旅行をするつもりであった。彼に沢山の秘密の資料が集まった故に、彼はそれらを諜報局の関係者にそこで伝えなければならなかった。オットーはゾルゲに大使館の伝書士の役割を担うことを頼んだ。ゾルゲは、彼の個人の言葉によれば、「二股の伝書士となった。最初マニラへ、その後香港へ、両方のための書類を運んだ」。

5月12日に日本に戻り、彼はいつも通りに祝った、レストラン「レインゴリド」で、ウラフ公と一緒に。5月13日、深夜2時、酒場が閉まった時、ゾルゲはオートバイに乗った、マクス・クラウゼンから購入した。オートバイは彼に大いなる満足を与えた、彼の友人には若干の不安も与えた。町の狭い通りをゾルゲが疾走するので。

リヒャルトのポケットには、報告書が入っていた、暗号化をする必要がある。時間はぎりぎり残されていた。ゾルゲは東京の人通りのない通りを突っ走った。虎ノ門の所で、満鉄（南満州鉄道）の事務所の所で、広い通りから左に曲がった。スピードを上げ、通りを上の方へと壁に沿って疾走した、アメリカ大使館を囲んでいる。突然、横町から軽自動車が飛び出してきた。ブレーキをかけるのには遅すぎた。リヒャルトはオートバイの制御ができなかった。そして、壁に頭から激突した。

重傷を負い、傷から通りに血が流れ出し、事故の原因となった車で、聖路加病院に運ばれた。ゾルゲは日本の秩序をよく知っていた：被害者に直ぐに警察が駆けつける、記録を作成する、持ち物を調べ、書き留める、書類を要求する。これ故、意識を失わないために、全意志を緊張させ、ゾルゲはウラフの住所を告げた。警察は「帝国ホテル」に電話をした。ウラフが事故現場にやって来た。ウラフがやって来た時、ゾルゲは辛くも話すことができていた、が、ささやくように：「クラウゼンに話してくれ、彼が直ぐにやって来るように」。クラウゼンは帝国ホテルに駆けつけた、被害者のゾルゲが運ばれた。さらに何があったのか、クラウゼン自身が全てを書き残している：

「大怪我をしていたが、意識を失っていなかった。彼はイギリスとアメリカの通貨での精算書を私に差しだした、彼のポケットに入っていた。それはよそ者に見られてはならないものであった。その後彼は気を失った。ホテルから私はまっすぐに彼の自宅へ向かった、彼の書類全部を接收するために。我々の諜報活動に関係している、彼の日記も取り上げた。少しして、ここへ、バイゼ（東京のДНБドイツ通信局長）がやって来た、ゾルゲの全ての私有物を封印する、誰も触れることがないようにするために。私はびくっとした、バイゼが私より早くやって来ていたならば、全ての我々の秘密の仕事が外部に漏れ出すと考えて、」。

医者は診断した、リヒャルトには、頭部に重傷、肩の脱臼、顎の擦過傷。殆ど前歯全部が折れた。顔は台無しにはならなかった、しかし、事故の傷跡は残った。1938年5月に撮った写真で良くわかる。一人の目撃者の話によれば、「ゾルゲの顔の傷跡は日本の劇場用の仮面に似ており、彼の顔に悪魔の印象をもたらした」。

モスクワへの事故についての連絡は、極めて冷静に受け入れられた。諜報局長官ゲンジンが告書に書いていた：「HO-2 (? \*)。この事件について、君はどう思うか？話し合うように」。

## ルシコフの裏切り

ゾルゲが不幸な事故からようやく回復した時、非常に深刻な結果をもたらす出来事が起こった。1938年6月13日、朝5時半、内務人民委員部の極東に関する全権代表のゲンリヒ・ルシコフが満州国境を越えて、日本へ逃亡した。

ルシコフは内務人民委員部の高官であった。これ故、彼を直ちに日本へ送り出し、尋問をすることになった。とにかく、彼は逃亡の理由を語った。彼のもつれた説明によれば、ハバロフスクで自身の安全を感じなくなっていた、そこでは若い将校であるブルフェルを制裁しようとしていた。同じ時期に、彼が説明している通り、スターリンによって指導されていた全国に広がっている反対グループの浄化によって彼の裏切りが引き起こされた。それは内務人民委員部にも波及していた。「私は差し迫る危険を感じた。これが私の逃亡の直接の理由であった。私は電報をモスクワからもらった、私を首都に呼び出す、他の職務に私を移動するという口実の・・・」ルシコフの言葉によれば、彼の逃亡の基本的な理由は次の通りであった：「私は確信に至った、レーニン主義はもうソ連邦における共産党の基本的な法ではないと・・・私はスターリン政治の大いなる反対者であった。断固として確信していた、この政治はソ連邦を自滅に導くと」。

自分の逃亡までに、ルシコフは自分の家族をフィンランドへ移動させることを試みていた。

最初の尋問で、ルシコフは日本人に詳細に説明した、シベリアと極東における内部反対派の組織について。そして準備した、ソ連邦における内政助教についての報告書を。

ルシコフの意見によれば、顕著なソビエトの活動家―彼らは処刑された―には政治的経験が足りなかった。スターリンに反対する運動へ人民を引き入れるためには。スターリンへの反対運動は存在したが、そのリーダーには外交手腕と能力が足りなかった。その結果、運動は拡大することができず、成功することはなかった。

ルシコフは伝えた、極東に配置された将校団は、多くの場合には、仮小屋で自分の家族と生活している。これらの悪い生活条件は軍の道徳規律に影響はしていない。軍事物資と食料は不定期に送られた。それらの調達はロシアのヨーロッパ部分から運ばれる故に、輸送機関での停滞と停止に依存して。

これ以外に、ルシコフは日本人に非常に重要な情報を与えた、極東におけるソビエト軍駐留の強化についての。彼の情報は、ソビエト連邦に関する日本の政治に決定的な影響を与えた。

この情報を、日本人はショルリ少佐に伝えた。彼はそれをゾルゲに語った。暴露はドイツ大使館に大きな動揺を引き起こした。ショルリはベルリンに電報を打った、ソビエト連邦に関する専門家を東京に至急派遣することを要請して。ルシコフを尋問するために、ドイツ政府にとって特に興味を持っている問題に関して。同じ頃、ゾルゲはモスクワに多数回にわたる無線電報を送った、ルシコフの証言の中間的な結果の要約を持った。

しかし、中央は沈黙したままであった。

軍の防諜機関からカナリス将軍の特別代表であるグレリング大佐が到着すると、ルシコフの尋問が再開された。結果、100頁余りの記録が作成された。表題が「ルシコフとドイツの特別公使の間の会合の報告書と、この結果得られた情報」。

ショルリはこの書類をゾルゲに貸した、ゾルゲはその大部分を写真に撮った。その後、ラムザイはモスクワへ報告書を送った。その中で、大分厳しい形で、彼は指示を仰いだ、モスクワへこの記録書を送り返す仕事を引き受けることは彼に価値があるのかと。返答電報の調子で、モスクワの為した価値について判断することができた、モスクワがこの出来事に与えた。1938年9月5日の電報で伝えた：

「できること全てをするように、書類のコピーを得るために可能な全ての手段を利用するように、日本軍からカナリスの特別公使が得た、或いは書類のコピーを、ルシコフから個人的に公使が得た。全ての詳細な書類の取得について遅延なく報告するように」。

マイクロフィルムは急使によって配送された。その内容はモスクワの指導部に危険の程度を開示した。それをルシコフの証言が提示した、相応する反響を、それらが最も高位のレベルで引き起こす。

書類の詳細な分析に基礎をおいた主要な命題は次の通りであった、赤軍における広い不満とシベリアにおける強力な反対派の存在故に、極東におけるソビエトの軍事力は日本の侵入で倒れる。ルシコフが語っている：「軍の大半の将校や指揮官達、国内戦で積極的に活動していたが逮捕された。軍務に就いているのは極めて少ない。最近の粛正の手段への権力の影響は強力で広範なものである。逮捕されたものは市民を含めて100万人に上る。この数値は極めて正確である。人民と軍との連帯は極めて密接である、人民は政府に極めて不満であり、その程度において、兵士も政府に不満である」。

これ以外に、ルシコフは極東における軍団の配置、軍事電波暗号を教えた。彼が教えた技術資料は非常に詳細にわたっていた、特に、シベリアと極東における赤軍の兵団に関係して。ルシコフは各師団の位置、組織構造、武装を詳細に示した。彼の確信によれば、師団数は25であった。

著名な日本の歴史家で作家である檜山義昭は見なしている：「語って誇張ではないであろう、彼の供述を基礎にして、日本陸軍は、ソビエト軍の軍力、組織構造、武器、配置、戦術の基礎について完全な知識を得たと」。

多分間違いなく、日本とドイツの軍事諜報員には明らかになった、ルシコフが提供した資料は広範な粛正の繁栄であった、赤軍の指導部における、トハチェフスキイ将軍と他の軍高官が裁判にかけられた。ロシアの軍事力に対するこの事件の影響の評価のために特に重要であった。

ゾルゲは決して誇張しなかった、この出来事を後になって注釈した時：「ルシコフの供述の結果の一つとなったのは、ソ連邦に対する日独の共同軍事作戦の危険であった」。ゾルゲの主たる課題は次の点にあった、諜報活動の可能性がどれだけ許されるのかに、これを阻害する。

特徴的だ、ルシコフが自分の裏切りのそのような原因を正確に提示したのは。バリテル・クリビツキイ、ヨーロッパにおけるソビエトの軍事諜報のトップも。彼は後に、1938年11月に、フランスに入り、祖国（ソ連）を捨てた。

ルシコフの行為に関するゾルゲの反応は、彼の自身の尋常ならぬ確信に何の影響も与えていない。

「私は見なした、ルシコフは裏切り者となった、ソビエト権力と自分の関係に不満を持って、或いは、何らかの侮辱で、シベリアで生きていて。粛正の当時、内務人民委員部（H

К В Д) が既に直接関与していたという理由、彼は心配した、犠牲者の数に触れることができる。私は結論に至った、ルシコフは自分の逃亡の政治的原因を持ちだした、というのは、彼にはソ連邦内の反対グループに友人がいたからである。裏切り者の主張と彼の振る舞いは常に紋切り型であり、これ故、ルシコフに私は興味が殆どなかった」。

しかし、ルシコフの最初の告白を目にして、ゾルゲは直ぐに理解した、日本とドイツの政府グループに、それがどのような影響を示すのか。

最初、日本人達の反応は彼を非常に不安にした、彼らはドイツ大使館で伝えた、「ソビエト連邦は崩壊の際にある」と。ゾルゲは直ぐに日本の論理に反論し、指摘した、「ルシコフは頼りのない、二流の人物である」と。

ゾルゲが語っていた、「ルシコフのような人物の証言に従って、ロシアの内部状況を判断するのは危険だ。彼の言っていることは、ドイツの逃亡者達によって書かれた、ありふれた反ナチストの本で汲み取ることができるようなものだ。彼らはしばしば予言している、ナチス体制は不可避の破産を待っていると」。

### ハルハ河事件(日本ではノモンハン事変)に照らしてのルシコフの仕事

直接の証拠はない、日本とドイツの専門家達が、ルシコフから得られた資料をどう評価したかの。特に、赤軍の軍事能力に触れた。しかし、翌年に満州と内モンゴルの国境で、ハルビン・ゴール(ノモンハン)地区で、大規模な戦闘が行われた(1939年5月~9月)。関東軍にとっては壊滅的な結果を伴った。さらに後になったゾルゲの仕事に関して、主検事吉川光貞の証言に、ラムザイの役割が少し臭っている。彼は断言している、ルシコフから得られた情報を考慮して作戦が計画されたと。検事の意見によれば、その崩壊の原因の一つとなったのは、ゾルゲがモスクワに送った労農赤軍(P K K A)の戦力の日本の評価であった。ゾルゲが送ったマイクロフィルムをルシコフの資料と比較検討し、吉川が言明した:「その後で、ノモンハン事変はたまたま起こった」。

著者の手元にある資料は、一定の程度で、ハルハ河におけるルシコフの供述と日本軍の破滅の間の関係性を評価させてくれる。疑いなく、ルシコフの逃亡後直ぐに引き続いた、日本軍による1938年7月のハッサン湖地区のベズミャンナヤ丘とザオゼルナヤ高地の占領(チャクフィンスキイ事件:日本呼名 張鼓峰事件、1938年7月~8月)は、赤軍の軍事能力を調べる目的があった。

戦いの終了後、ラムザイが伝えた、日本の軍部がどのように赤軍を評価したのかを。1938年9月2日付けの電報で、ラムザイは書いていた:

モスクワ、労農赤軍諜報局長へ

オストロバ、1938年9月2日

日本の参謀本部は赤軍の軍事作戦について次のような批評を述べた:

1. 赤軍には、白兵戦のための勇気が足りない。
2. 夜間攻撃を下手に準備していた、攻撃が何時始まるか日本人が早めに感ずく。
3. 戦車の適用は日本人に印象を与えなかった。

「オットー」は証拠を持っている、8月9日までに行動した赤軍の部隊は訓練が非常にお粗末であったという。が、後になって非常に優秀な部隊が到着した。

180号。ラムザイ。

解説。マリニコフ。

シロトキン少佐が翻訳した。

事実が明らかとなった、中国軍の壊滅に向けた軍力増強と共に、近衛内閣で関東軍の立場の強化が行われた。それに伴って、ソ連邦に対する戦時準備も。1938年6月中旬に、近衛は軍事大臣のポストに板垣将軍を任命した。尾崎は直ぐにゾルゲに伝えた、板垣は皇道派であり、中国との関係により注意を振り向けるであろうと。

関東軍は東条将軍の任命を要求した、関東軍参謀司令官、軍事大臣次席として。ラムザイは伝えた、東条は自分の任命後直ぐに声明を出した：「中国における戦争は、ソ連邦に対する戦争の十分な準備を伴わなければならない」。

東条の起用は、ゾルゲには何の良いことの兆しにもならなかった日本の政治と日本軍に関する結構厳しく、時折えこひいきのない彼の評価に対して東条はこのジャーナリストを嫌っていた。彼は怒りで満ちていた、ゾルゲの名前に言及した時。そして、彼を日本から喜んで追い出そうとした。が、彼の後ろにはガウスゴフェルがいた、ガウスゴフェルの後ろにはゲーリング、ゲーリングの後ろにはヒットラーが。諦めるしかなかった。が、東条はじっと、冷静にゾルゲの動きを見守った。

7月には、日本政府は予備師団の編成を決定した、ソ連邦との戦争の場合における関東軍のために。満州における師団数は27までとなった。満州におけるこの目的を持って、相応する予備の武装の集中が行われた。本国では戦争経験のある予備役の準備も行われた。

ラムザイの報告は非常に正確であったので、労農赤軍の諜報局は報告に従って、「1939年2月20日の日本軍の配置状況について」を審議することができた。諜報報告で示された、日本の35歩兵師団の内、中国に24師団がいる、9師団が満州に、朝鮮と日本に各々1師団が。同時に、報告書ではいわゆる「予備師団」が示されていた：本国に14師団、朝鮮に1師団。これ以外に、台湾とサハリンに1歩兵旅団、さらに2つの混成旅団の位置は未だ確定されていない。このように、常備と予備の総師団数は同じ程度の旅団数があることを考慮して、27となる。(連隊<旅団<師団 \*)

その他に、1938年12月にラムザイが報告した：「”ジョー”の情報から判断すると、日本は赤軍の歩兵旅団の戦闘力を正確に知っている。これからすると、戦争の場合には、日本の歩兵の機関銃と迫撃砲の量は増加される、赤軍の歩兵部隊に対して火力での優勢を作り出すために」。

若干の日本の歴史家達（例えば、田中某）は見なしている、関東軍の司令部はルシコフを信じた。が、ゾルゲの時期を得た日本の意向についての情報の御陰で、モンゴルにおけるソビエト軍の集結、モンゴル部隊は10ヶ月以内に最新の武装が施された。

デキンとストリの意見によれば、ルシコフに関係したゾルゲの活動は「大いなる貢献の内の一つであった、彼が第4部に示した、彼の日本での使命期間において」。



## 2人の諜報員の結社

これら全ての出来事は急速に進む独日接近の背景の元で起こった。6月初め、ベルリンは日本政府の依頼を受け入れることにした、中国に対して予定されていた、ドイツの軍事助言員と軍事物資の召還についての。実際において、これは行われた、蒋介石のところではソ連邦との関係において政治的行動のための場が減少し、彼は可能性を失った、ソビエトドイツの不調和で仕事をする。実際において、ソビエト連邦側からの軍事援助における支持は選択無しに残った、西側は日中戦争に傍観的立場をとっていた故に。ソビエトの軍事援助に関する国民党政府の厳しい愛着とソ連邦のための可能性がこの結果となった、極東における軍事政治状況への効果的に影響する、そのために好都合な方向へ。ゾルゲは自分の報告書でさらにもう一つの勝利を書き足すことができた。

その勝利は小さいものであった。手柄を立てるためには、ラムザイは維持しなければならない、オットーとの慎重な関係を、独日同盟の展望に関する。この疑いが第3帝国の指導部に伝えられたことがゾルゲの知るところとなった。

しかし、どんな疑いもなかった、ドイツと日本の諜報員間の密接な連合の必要性に関しては。1938年6月、大島は、帝国の内閣の依頼を受けて、これを理由に、第3帝国の外務省大臣と交渉をした。そのために、大島はウイヘルムシュツラッセを訪れた。当時、そこにドイツの外務省が置かれていた。交渉の結果—作業中の同盟の計画—はリップントロップに説明された。

ドイツと日本の間の諜報分野における共同についての軍事同盟の計画

極秘！

1936年11月25日付けの反コミンテルン協約の精神に則って、ドイツの国防軍（海軍を除いて）と日本の軍部は次の通りの同意に至った：

1. 両方はロシア軍とロシアについての参謀本部の情報を交換し合う。
2. 両方はロシアに対抗する防衛業務において共同する。
3. 両方は年に一度以上、共同会議を開催する、上記の情報交換と防衛業務を容易にする目的で。同じく更なる前進の目的を持って、反コミンテルンの枠内での条約の実現の、ドイツ国防軍の興味に触れる。

共同会議は毎年2月に行うこととなった。会議の実施場所、その参加者、その議事日程は前もって打ち合わせることとなった。

もちろん、数週間後に大島浩がベルリンの日本大使に任命されたのは偶然ではなかった。これは、ベルリン—東京の軍事枢軸構築の信号であった。オットーと大島はこの目的を持って、両国の政府だけではなく特別局の行動を調整する必要があった。ソ連邦の軍事力に関する諜報情報の交換についての合意は、1938年10月8日に、日本とドイツの間で締結された。

その時期、日本とイギリスの関係に、高揚の後の、落下がやって来た。中国におけるイギリスの経済的興味の遵守に関する、集中的で非常に重要な交渉は破綻を我慢した。日本は保証を拒否した、イギリス人が要求していた、中国における「開放された扉」の地位を。日本は中国との戦争のために新しい動員をかけていた、武漢—国民党政府の臨時の首都—

への進撃を始めていた。中国における新しい直接の戦争は、満州からの部隊の派遣を要求した。

日本が中国との戦争に深入りすることは、ベルリンに危惧を醸し出していた。1938年7月末に、ハッサン湖地区で事件が始まった時、オットーは第3帝国の首都—そこでしっかりと指示を得た—から戻ってきた。彼は直ぐにゾルゲと会い、彼に話した、日本の疲弊故に、大島の提案している軍事同盟は締結されないだろうと。ラムザイは伝えた、ヒットラーとリップントロップから彼に委ねられた指示の主要点は、イギリスとソ連邦に対抗する日本との協力の世界的規模の強化についての指示にあった。中国におけるドイツの興味を犠牲にし—これは日本には必須であった—できるだけ早く中国との戦争に勝つために」。

同時に、オットーに対して要求した、「全ての可能なことをすることを、日本に、中国との合意に至るように刺激するように、蒋介石とも」。この際、彼は状況を見守る必要があった、新しいドイツの仲介を提案するために、「もし、これが他の日本と中国の間の和平に興味がある強国との共同行動を要求するとしても」。この電報において、ゾルゲは遅れることなく特別の情報を送った。

西側では、日本の軍事力に関して懐疑的な態度が成長していた。ルシコフから得られた情報によって反対に元気づけられたことを示すために、関東軍はソビエトと満州の国境で挑発軍事行動をすることを決めた。このようにして、「ハッサン事件（張鼓峰事変）」が起こった。

## ハッサン事変（張鼓峰事変）とブリュヘル將軍の罪

この事変の短い時間的順序は次の通りである。1938年5月—6月に、日本で、大きな宣伝キャンペーンが展開された、満州とソビエトの沿海州の国境におけるいわゆる論争地域として。1938年7月20日、モスクワの日本大使重光は、ソ連邦外務省人民委員リトビノフとの会談で、最後通告をした。ソ連の国境警備隊がハンカ湖の西で、ザオゼルナヤ高地とベジミヤンアヤ高地を占領したことに對して。この際、大使は脅迫した、この要求を満たすことをソビエト側が拒否するならば、日本は武力の行使も辞さない。

ソビエト政府は日本側にフンチェスク条約のテキストを提示した、1886年にロシアと中国によって署名された。条約に添付されている地図に、正確に記入されていた、湖の地域のロシアと中国の国境線の通過が。争点の2つの高地はロシア領となっていた。しかし、日本側はこの書類を無視した。

同時に、外交手段を持って、日本軍の参謀本部は自分の国境守備隊の増強を命令した、3万8千人以上の日本軍の移動による。この移動部隊は7月19日、ソ連邦との国境に集結された。7月29日、日本の部隊はソビエト領に侵入した。31日に、2つの高地を占領した。ソビエト領に4km深く侵入した。

8月2日、ソビエトの司令部は国境警備支隊に加えて、ハンカ湖に第1（沿海州）軍を派遣した。8月6日、日本軍から高地を解放する作戦を始めた。戦闘は困難を極めた。8

月10日まで継続した。ソビエト軍の決定的な作戦の結果、侵入してきていた日本軍はソビエト領から撤退した。8月10日、外交の経路で両軍は戦火を中止し、論争になっている国境線の再確定をすることに話し合いが決まった。1938年8月11日、12時に、戦闘行動は停止した。

血を流した戦闘は、両軍に大きな犠牲を強いた。最新の資料によれば、ソビエト側の死者は792人、負傷者は3279人。日本軍の損失は、日本側からの情報源によれば、死者は500人、負傷者は900人。

この10年間にハッサン事件は科学的文献で詳細に解明された。最近公開された古文書はあの時期について新しい視点をもたらしている。特に、衝突の期間におけるブリュフェル将軍の行動がそれである。これらの内の一つ書類が、1938年8月31日付けの労農赤軍の総軍事会議の速記録である。会議で、ブリュフェルは無行動で断罪され、極東赤旗軍の前線の軍指揮官の地位を剥奪された。

会議の速記録は示している、ルシコフは全体において原因と関係がなくはないことが。

ブリュフェルの行動の分析から明らかになった、「軍、参謀部、前線の司令部要員の戦闘準備は許されないほど低レベルであった。部隊はばらばらで戦闘能力がなかった；部隊の武装は組織されていなかった。露わになった、極東の現地は戦争に対して準備不足であった（道路、橋、連絡）。前線の倉庫中の不可避の資材の保管及び動員は、部隊と同じように、混乱した状態にあった」。

会議は確認した、「日本軍は撃破され、我々の国境の外に追放された、兵士の旺盛な戦闘意欲の御陰で、若い指揮官、中年、年配の政治将校の」。

ソビエト軍の不成功の行動の原因として、以下のことが言われた：

1. 多種多様な運営仕事への人事の転換。これは人事における大きな欠員と部隊の破壊へと導いた。そのような状態において、彼らは国境における戦闘警報に出動した。「この結果、戦闘行動期間中に、いろいろな支隊と個々の部隊から組織することになった。有害な組織的即興を許すことになり、あり得ない混乱を作り出した。我々の軍の行動について語っておかなければならない」。

2. 軍は戦闘警報に基づいて国境に出動した、全く準備をしないままに：武器も弾薬も持たずに。「多くの場合、砲兵部隊は前線で砲弾無しでいた」。多くの兵士は履き古した靴を履いて戦闘に送られた、半分裸足で。赤軍兵士の大半は外套がなかった。司令部と参謀部は軍事行動地区の地図を持っていなかった。

3. 各種部隊、特に歩兵、は「野戦での行動する機動作戦を行う、進軍と火砲の組み合わせ、地区を利用する能力がないことが明らかになった」。戦車部隊は利用することができなかった。その結果、軍事物資に大きな損失を受けることになった。

全ての示された欠点に対する罪は、ブリュフェル将軍に負わされた。彼は「インチキ」、「破壊分子」への寛大さと「人民の敵」の隠匿で罪に問われた。

紛争時におけるブリュフェルの行動は不十分であり、故意の敗北主義であったと見なされた。ブリュフェルを次のかどで非難した、彼は日本の挑発活動、これに関する政府の決定・・・を知っていた。しかし、何もしなかった、敵への反撃のための軍の準備の検査のための。具体的手段をとらなかった、国境警備隊の野戦の準備のための。

最も興味を引くことが始まる！ ブリュフェルを断罪した、反撃の準備の代わりに、7

月28日、彼は全く思いもかけずに、「ハッサン湖付近の我が国境警備隊の行動の正当性を疑問視した」。秘密裏に、軍会議委員マゼポフ、自分の参謀部長シテルン、防衛人民委員会次長メフリスと内務省人民委員会次長フリノフスキイに対して、当時ハバロフスクにいた、ブリュフェルはザオゼルナヤ高地に委員会を派遣した、国境警備隊司令官の参加無しに我々の国境警備隊の行動の調査を行った。この委員会は満州国境における我が国境警備隊のうわべの違反を見つけた。その結果、ハンカ湖における衝突の発生に、我々の方に責任があるとした。

その後、ブリュフェルは防衛人民委員会へ電報を送る、この「満州国境線の偽りの侵犯」について。遅くなることなく国境警備隊司令官、他の日本との「衝突の挑発に罪のある者」の逮捕を要求する。この電報はブリュフェルによって同じく秘密裏に送られた。

その後、スターリンから指令が届いた、「全ての会議と審議での騒ぎの禁止について、ソビエト政府の決定と防衛人民委員会の命令の正確な遂行について」。速記録は主張していた、8月1日、直通電話での話し合いで、スターリンはブリュフェルに課題を与えざるを得なかった：「話してくれ、ブリュフェル同志、しっかりと、君には日本と戦う希望が本当にあるのか？ もしそのような希望が君にないならば、直接言ってくれ、コミニストらしく。が、もし希望があるならば、君は直ちに現場に出て行かなければならないと、私は考える」。

この時には、国境警備隊と赤軍のばらばらとなった支隊—日本の第19師団の攻勢に耐えていた—は殆ど完全に殲滅されていた。

ブリュフェルを同じく断罪した、彼がごく最近まで空軍の適用の命令を出さなかったことに対して、「朝鮮の人民の敗北を救うために」。

ついに、ブリュフェルを非難した、8月10日に、彼が12歳を軍の兵にする命令を出したことで。1938年5月に主軍事会議が、極東における戦時にはほんの6歳を徴兵するという決定をしていたにもかかわらず。「ブリュフェルの命令は日本人を挑発して彼らによる動員を声明させることになり、我々を日本との大戦争に引き込んだ。命令は人民委員会によって直ちに撤回された」。

一見全ては明らかになったようであった。しかし、今日まで幾つかの問題が解決されずに残っている。何故、ブリュフェルが自分の軍隊に進軍の命令を出さなかったのか？ ハッサン湖にいるソビエトの国境警備隊の行動の適法性に、何が彼に疑いをもたらしたのか？ 何が彼らの行動を特別に開設された委員会で調査することになったのか？ 何が国境警備隊司令官の迅速な逮捕を要求したのか？ 他の問題—日本側の反応は相応しており、ソビエト指導部が提案した交渉の代わりに、日本側は武力への期待を好んだ。

今日だからよく見える、速記録の冷淡な文章は、同じような惨事の不吉な前兆を示していることが。その惨事は1941年6月に赤軍で起こった。ブリュフェルの運命は、西部軍管区の司令官であったパブロフ将軍（ドイツ侵攻時のソビエトの西部軍管区司令官、その責で銃殺される \*）の運命と驚くほど似ている。

敵への反撃における赤軍の不準備について、小さくない罪はスターリン自身にもあった、特に、狭量な雰囲気故に、弾圧の結果国に醸し出された。すなわち、そのような雰囲気、矛盾して、インチキ、無責任、あからさまな怠慢が大いなる発展を遂げた。それらはその後、大いなる犠牲をもたらした。人民の英雄的努力の御陰でのみ打ち勝った。すなわち、

ハッサン湖での事件がこれを示した。そして、すなわち、スターリンは認めたくなかったし、認めることができなかった。しかし、「贖罪の羊」が必要であった。そして、彼はそれを見つけた。

## ゾルゲ：「我々はそちらに警告をした・・・」

ラムザイは、日本の侵攻に対する赤軍の不準備に驚いた。ラムザイは中央に書いた、「私は非常に残念である、局地行動の差し迫った恐れに対する警告が、日本から、国境の高地への突然の侵入を行う可能性を奪わなかったことが」。同時にラムザイは極めて重要な情報を伝えた、オットーとショリから得た。高地を奪取した後に、日本は外交手段によって国境問題を解決するつもりであるとの。この目的を持って、紛争地域の回りにソビエト側の対抗措置の場合に前線部隊と予備隊の集中が行われた、朝鮮にいる日本軍の総司令官の指揮の下で。東京の外国人グループに、オットーとショリも含んで、日本軍の行動は強い印象をもたらした。着手した行動の結果に、日本軍はもう一つの目的を追加した。「日本は損ねられた威厳を回復した」と、ラムザイは伝えた。

当時、日本の司令部は自分の力をただ顕示したがった、ハッサン事件に重きを置かなかった。宮城は知った、事件は軍事行動の制限に関して戦争に拡大しないことを。彼はラムザイに説明した、「事件の発生の原因は、国境線の不確定さに起因している。軍事予算の追加の必要性も」。

これらの情報は他の情報源からも確定された。7月29日、ゾルゲから中央に情報が届いた、宇垣外務大臣がオットーとの会談で語った、中国での戦争が続いている間は、国境紛争の拡大は許さないとの。戦闘の最盛期、ゾルゲから非常に重要な情報が届いた：日本の参謀本部の将校達は見なしていない、国境での状況は非常に深刻であると、ソビエト空軍の爆撃にもかかわらず。しかし、彼らは予想している、問題はより深刻になるものと、朝鮮や満州のより深い地区が爆撃を受けるようになれば。

ラムザイのこの情報は非常に重要であった、が、情報は遅かった。報告は8月3日付けである。しかし、実際において電報は5日に受信した、8月7日に諜報局局長に届いた。8月4日に、ソ連邦防衛人民委員会の作戦命令が出された、極東前線部隊とザバイカル軍管区に、完全な戦争準備をするようにとの。この命令は野戦飛行場に航空部隊を移動することを要求した、「強力な攻撃のために強い打撃を持った」。8月6日を始めとして、占領した高地にいる日本軍の所を、強力な爆撃にあわせることが始まった。特に、すなわち、この打撃、日本側の目撃者の証言によれば、は日本軍に現状に留まることを強いた。

8月6日、ゾルゲから、大きな歪曲のある電報が届いた。その電報では、ハッサン湖地区における日本の行動に対するオットーの不満が語られていた。オットーとショリの意見によれば、日本軍に教訓を与えた。事件の結果、小磯将軍は退役した、彼は戦争の開始に反対であった、中国での戦争が継続している間は。ゾルゲは警告をした、準備する必要性について、日本の他の予期せぬ侵攻について。しかし、どこへ歪曲故に理解されなかった。ゲンデンはいらだちながら決済の印を押した：「HO-13。ウラジオストクからの電報

の受信状況を改善しなければならない。価値ある資料が無線の酷い動作で失われている。8月11日」。

同時に、日本の政府グループ内には、戦争の雰囲気が強まっていった。尾崎は知ることとなった、8月1日の内閣の会議で、関東軍の強化についての決定が採択された。シヨリの情報によれば、8月10日には、ハバロフスクとウラジオストクの地区に、すでに日本の師団が5個から7個集中された。シヨリ自身は、ゾルゲが伝えたように、近い将来に、ソ連邦との戦争が始まる可能性があると思っていた。(この電報で、諜報局局長ゲンデンは決意を下した：「ラムザイを経由して、満州における日本軍の配置について完全なデータを手に入れる試みは良くない」。12月に、ゾルゲはこの問い合わせについて全面的な返事を出した、シヨリのデータを基礎にして、満州を訪問時に彼によって得られた。)ハッサン湖のソビエト空軍の使用に関して、興味ある情報が「ジョー」から持ち込まれた。彼は軍の初めての演習について伝えた、日本における防空軍の。

## <「ジョー」はこの情報を確信している・・・>

一般的に、宮城（ラムザイでの匿名ジョージ \*）から多くの有用な情報が届いた。それらはラムザイには独自で集めることが難しいものであった。日本における価格と税金の高騰、地域軍事産業にとって神戸の壊滅的な浸水の結果、武漢への日本軍の進出の組織化。これら全てに関して、多くのものを宮城は収集した、大事で本質的な情報を、1937年と1938年に。これらの資料の内の幾つかは、公開されたものであり、誰でも手に入れることができた。しかし、1938年の初め頃から、中国での戦争がすぐには終わらないと明らかになった時、警察は全てをやった、書籍販売者には、外国人が日本の本や雑誌を購入すること止めるようにすることを、国の経済を詳細に具体的に明らかにしている本を、外国人に雑誌を売ることを禁止した。そのような本を購入した外国人について報告するように頼んだ、風貌を記録して。

このように、通常の市民警察は外国人に対して用心深い追跡を行った。憲兵隊（戦時警察）が配置され、それは極めて広範な詳細を「軍事機密」と解釈した。

中国の戦争は継続していたので、宮城はゾルゲに大きな寄与を示した。時折、彼に情報を提供した、公開され、全く合法的な情報源から手にした。1934年から、宮城は統計的に分析をした、ラムザイのために、専門的な日本の雑誌「軍事と技術」を。

宮城は尾崎と直接の連絡を維持していた。日曜日の朝に、彼は尾崎の娘である陽子に絵を教えていた。尾崎の妻さえ彼ら2人の関係について何の疑念も持たなかった、諜報活動について。「オットー（ラムザイでの尾崎の匿名 \*）」は書類と資料を英語への翻訳のために宮城に渡した、その後、それらはゾルゲに渡った。

尾崎との場合において、諜報機関「ラムザイ」における彼の仕事において、宮城にとって主たる動機となったのは、当時日本の社会の雰囲気を貫いていた戦闘的な侍精神の反駁であった。軍人会に出入りし、自分の友人の中で、宮城は見た、日本の上層部では進軍の計画が熟していることを。彼が従っていたゾルゲを助けながら、彼の言葉によれば、「日

本とソ連邦の間の戦争を回避する可能性に関する課題で。この課題の遂行のために、日本の状況について、ソビエト連邦とコミンテルンに正しい情報を伝えることが必須であった」。

リヒャルト・ゾルゲは彼（＝宮城？ ＊）にとって絶対的な権威者であった。逮捕後、宮城は尋問で認めた：「ゾルゲが話した、もし我々がソビエト連邦への日本の攻撃を2ヶ月以内を知るようになったならば、戦争は交渉の手段で避けることができよう。もし、1ヶ月以内に我々が攻撃を知るようになったならば、攻撃の撃退の準備を、ソビエト連邦は完全に準備することができよう、国境地区に十分な部隊を向けることによって。もし我々が2週間以内に攻撃について知ったならば、ソビエト連邦は第一線での防衛準備をすることができる。もし我々が1週間以内にソビエト連邦への攻撃について知ることになれば、あり得る損失を極めて低減する手段を講ずることができよう」。

## 日本は自らの選択をする－日英交渉の決裂

ハッサン事件（張鼓峰事変 1938年7月 ＊）の時期に、イギリスの外交活動が活発になった。オットーを通じて、ドイツとの協力の提案が話された、中国での問題に関して、ヨーロッパにおけるイギリスとドイツの不一致にかかわらずに。オットーは自分の助力を約束した。しかし、彼がゾルゲに話した通り、イギリス人の立場を説明する目的以上に。ドイツ大使の意見によれば、日英交渉は成功に至っていない。彼は正しかった。1ヶ月後、日英交渉の破綻についての情報がラムザイから届いた。

この不成功の原因は何か？ 多分、ドイツと接近しようというチェンバレン内閣の試みが、日本をソビエト連邦の極東部への拡張へ押しやるために、日本の上層部における認識とぶつかった。

当時日本で喧伝されていた白人への敵意とイギリスに対する日本の世論の雰囲気は、ここで役割を果たしていたのか？ それについて尾崎は何を語ったのか？ あるいは、これはイギリス人の勘定高い志向の結果であったのか？ ゾルゲが伝えたように、「商売でもうけよう」とする？ 多分、近衛閣下への尾崎の返答は一定の価値を持っていた。その取り巻きの中に彼は入っていた？ この問題について確かな解答をすることは難しい。きっと、イギリスと日本の関係の冷却化の過程で、これらの全ての要因が一緒の影響を与えた。

しかし、疑いがない、ここで一定の役割を演じた、ヨーロッパにおける自分の同盟者として日本の方向性がドイツに対して。1938年半ばに、ドイツはイギリスとの関係の悪化を避け、イギリスを反コミンテルン条約に引き込む試みを拒否した。イタリアと日本との同盟の単純明確な本部を設置した。9月9日、ラムザイは伝えた、大島はリップントロップの提案について軍事大臣板垣に電報を出した、イタリアと相応の一致の後に、3カ国の政治及び軍事同盟の締結、ヨーロッパにおける状況の先鋭化に関して。ゾルゲは書いた、「日本の参謀本部と近衛首相はこれに進むことをあまり同意していない。ヨーロッパのもめ事に引きずり込まれることを危惧して。彼らは、同盟がソ連邦に向けられる場合にだけ、同意した。それにもかかわらず、2人とも殆ど傾いている」。

1938年9月29日～30日のミュンヘン会議の時、リッペントロップはイタリアの外務大臣チアノに、ドイツ、イタリア、日本の間の3国同盟の計画を委ねた。

強力な日本軍をドイツは必要としていた、ソビエトの極東を脅かしている。日本が中国での戦争を引き延ばしている間、ゾルゲの報告書からすると、日本は、ヨーロッパでの戦争の場合にドイツに援助を示す準備にはなかった。

9月に、宇垣はオットーに話した。もし必要となれば、「ドイツの興味を考慮した最大の準備を持って」、ヨーロッパにやって来ると。日本政府にはソ連邦に対して侵攻する覚悟がある、ソ連邦がヨーロッパの戦争に引き込まれた時。

同じ時期、極めて大事なニュアンスが存在した、ラムザイグループの諜報員にとって気づかなかったものである。

第一に、明らかになった、あり得るヨーロッパの戦争では、日本の活動の程度は、その戦争はソ連邦にどれだけ向けられているかに依存していることが。参謀本部で、オットーに直接話した、精神的な支持の表現程度に、宇垣の声明を評価しなければならないと。日本はヨーロッパでの戦争の開始の場合の準備をまだしていなかった。アジアのイギリス人とフランス人を攻撃するという。もし戦争がソ連邦に向けられたものであったとしても。9月24日、ゾルゲはオットーのベルリンへの電報の内容を伝えた：「もし、中国でのしつこい戦争が継続するならば、日本の参謀本部はソビエト国境での衝突だけを始める。それを戦争の規模まで拡大しないで。それはドイツの助けになり得る」。参謀本部の視点を海軍参謀部は支持した。ラムザイのこの情報は諜報局の資料室に入れられた。資料は調査が必要であるという但し書きを付けられて。

第二に、尾崎の情報によれば、日本政府筋はそのような方向性で一致していた。一部はイギリスとの戦争を要求し、他の一部はソ連邦との。その際、遅れることなく。この土壌の元で、近衛と宇垣の間に矛盾が発生した。不一致の基礎に、以前通りに、一面では、中国での戦争の継続の決意、他の面では一危険、日本を弱体化する危険性の。対立は10月中に増大した、最高潮に達しないうちに。その時、基本的政党が複雑化を避ける目的を持って政府の回りに団結することを決めた。最も大事なこと一軍事独裁の確立。

その時期、ラムザイから中央に電報が届いた、中国において戦争のエスカレーションの政策を最終的にとるという内容の。ゾルゲはもう一度、確認した、「日本はドイツを援助する状態にはない、ヨーロッパの戦争において。日本が中国での戦争にとらわれている間は」。

## **ラムザイは「影響の作戦」を準備する**

持っている情報を基礎にして、ゾルゲは結論を出した。枢軸の同盟国の中の矛盾の中で何をすることができるかの。彼は一度ならず必要とされた場面で、出来事の「小突き」を応用していた、自然に、仕事の意味を持ってこれをした。十分に思い出す、1936年に、彼がどのようにオットーに情報を巧みに送り届けたかを、戦争における日本の不準備を。この情報を元にして、オットーは報告書を準備した。意識的に以下の事に向けられた、「日



本への間違った期待を一掃し、特に、軽率な約束を、ドイツ側との日本の関係において」。当時、オットーの結論は効果を発揮した、ドイツ国防軍の大臣の所で。ドイツ指導部はより十分に慎重に振る舞うようになった。独日接近の交渉の手順は遅れることになった。

中国からドイツの軍事顧問団の召還に、ラムザイは一定の影響を与えた。彼はデルクセンとオットーを説得することができた、この措置の必要性において。中国からのドイツ人の退去は、直ぐにトラウトマン（？ ＊）の可能性を極端に小さくした、日中紛争における彼の仲介任務において。蒋介石の可能性は縮小された、政治策略のための。ゾルゲはドイツ大使館における自分の身近な人たちを良くわかっていた、どのように振る舞うかを理解しながら。

今や、彼は「影響の作戦」に慣れさせることを次第に始めた。尾崎、極めてユニークな可能性が彼にはあった—近衛首相への直接の登場。ラムザイは大きな作戦を始めた。現時点においては、日本の内閣の立場の曖昧さを利用する可能性が出現した、「オットー」はここで些かの寄与をすることができた。

ゾルゲは尾崎の見方をよく知っていた。彼らは中国で様々なテーマについてよく話し合っていた。ヨーロッパでの状況を研究していた、同じく、中国での大国の競争も。尾崎は1935年に既に予想を語っていた。第2次世界戦争は不可避であると、近い将来始まると。支那事変はこの確信を彼にさらに強固なものにした。彼は見なしていた、第一次世界戦争の結果として、ソビエト連邦が出現した。それと似て、第2次世界戦争の結果多くの社会主義国が出現すると、世界革命にとって条件が創られると。

尾崎は常にアジアの独立のために戦っていた。彼は見なしていた、日本はイギリスとアメリカとの戦争を避けることができないと。日本、ドイツ、イタリアのイギリス、アメリカの対する戦争（伝統的な帝国主義と変化した帝国主義の戦い）は極端なものとなると。相互の破滅、或いは片方の勝利にたどり着く。

ソビエト連邦は、世界の政治を絶えず指導していた、帝国主義政府どうしの戦いには離れていた。崩壊した政府には、社会主義革命が燃え上がっている。勝利した政府は極めて疲弊しており、ソビエト連邦の比重は極めて大きくなっている。多くの可能性が出現している、大国の社会主義への道での発展への強制された転換のための。

ゾルゲと尾崎はお互いに良く理解し合っており、固く信じていた、ソビエト連邦を積極的に守る必要があると。彼らはこの元で自分たちの責任を理解していた。モスクワの指導部に敵の政府の計画について情報を知らせることだけではなく、様々な方法でこれらの計画の実現を阻害することを。

## 「我々について心配無用、ここでは・・・」

1938年11月、ゾルゲは日本軍の配置、国境の要塞地帯、ソ連邦との戦争の場合における日本の司令部の計画について沢山の情報を書いた。

最後のことが、諜報局の指導部の興味を引き起こした。日本の司令部は、ウラジオストクと内モンゴルを経由してチタ（バイカル湖の東方 ＊）への進撃を予定していた、ハイ

ラル・チチハル鉄道の方角へ。モンゴルを経由してムクデンへの自動車部隊の進撃は、地域の困難さと水不足のために、可能性が低かった。(興味を引く、1945年の満州の戦略的進撃作戦においてソビエトの司令部が、この意外な要因を利用したことは。)

日本の司令部は3つの戦略計画を持っていた。1番目の「最小の計画」として、人的資源の不足とドイツの援助無しで、ウラジオストクとサハリンスンへ地区のシベリア鉄道への進撃を提案していた。2番目の計画—チターイルクーツクの鉄道切り取りへの強力な進撃、同時にサハリンスンへの攻撃を伴い。3番目の計画—沿海州のソビエト海軍の殲滅とそこへの上陸部隊の上陸。諜報局長官オルロフの決意は以下の内容であった：「特別情報、第1軍、第2軍と3a6B0に特別な書類で事情を説明する」。

しかし、諜報機関ラムザイの全ての情報が実際において正しいことが判明したわけではない。1938年12月のゾルゲの次の情報は、特徴的な例であった。オットーはドイツ国防軍司令部から情報を得たという。それで語っていた、「近いうちに、日本、イタリア、ドイツは3国同盟を締結する。コミンテルンに向けられたものであるが、実質的にはソ連邦に」。この報告書はスターリン、モロトフ、ボロシロフ、ベリアに送られた。

実際において、状況はそのように展開した。ドイツ—イタリア—日本の軍事戦略のパートナー関係に疑念を残すことなく、条約の早急の調印。イギリス、アメリカ、フランスの全ての試みは、この同盟に加わるのか、或いはこの同盟を自分の目的（主目的はソ連邦に対抗する）のために利用するのか、はっきりしなかった。

イギリス政府が主導していた、そのような政治の目に見える形となったのは、イギリス—ドイツ海軍協約の調印であった。その協約で、イギリスは、一方的にベルサイユ平和条約の軍事制限のヒトラーによる違反を認可した。条約で規定されていたドイツ海軍の拡張はバルチック海に面しているソ連邦や他の国の最大の脅威となった。特に、これについて、チャーチルが自分の回想記で語っている。イギリス政府はドイツ海軍の拡張に同意したのは、「海軍がバルチック海の主人になる」ことを認識していたからであると。

しかし、これはヒトラーを満足させなかった。1938年12月、ドイツはイギリスに宣言した、ドイツは潜水艦隊を持つであろうと、イギリスと同じトン数の。1939年4月、イギリス—ドイツ海軍条約はドイツによって破棄させられた。

全ては3国同盟の調印に向かっていった。1938年10月末、リップントロップはこの目的を持って、ローマを訪問した。そこで、同盟締結についてチアノ（ムッソリーニの側近、ムッソリーニの娘婿）と会談を行った。

しかし、ゾルゲの諜報機関は軍事同盟に対する抵抗力を過小評価した、日本の影響力を持つグループ側からの。日本政府はいろいろな口実を付けて、回答を引き延ばしにしていた、条約締結に関する提案に。この引き延ばしは日本における内政の内輪もめの反映であった、日本の拡張の将来の方向性に関する。

このようにして、近いうちには、条約の署名は行われなかった。とにかく、ゾルゲの諜報機関の活動において、これは深刻な手抜きであった。これは彼の情報に関して不信感を増大させることになった。スターリンは諜報にそれほど信頼を持っていなかった。特に、諜報局の指導部における「人民の敵」の摘発の後には。

1938年に、これをラムザイは感じていたのか？ 明らかに、そうではなかった。というのは、彼の電報に対する中央からの返事で、より正確な問い合わせ、何度にもわたる

課題があった。

ゾルゲが感じたのは、極度な疲労であった。彼はジャーナリスト仲間と違って、休息を取ることができなかった、どこかで。大変な精神的で肉体的緊張がグループの同志達に影を落とした。1938年4月26日、リヒャルトは彼をモスクワに召還してくれるよう、電報を送信した。中央は長い間この要請へ返事を出さなかった。ただ、1938年の夏の末に、通知が届いた。ヨーロッパと極東における状況が、ラムザイの要請を満たしてくれないと。

10月7日、ゾルゲは自分の返答を伝えた：「この辺地で我々は退屈している。我々は疲れているが、以前通り、我々はしっかりしている、課題の遂行にしっかりした決断をしている、偉大な仕事として我々に委ねられた。貴方と友人達に挨拶を送る。私の妻に、収めている手紙を渡し、私からの挨拶も伝えて欲しい。彼女に気を遣って欲しい・・・」。

10月中旬に、南部中国に関する日本の指導部の計画が定まった。広東占領のために上陸部隊を上陸させる。その結果、海南島の占領も、中国軍の供給線を寸断するために。

1938年末、諜報機関ラムザイから、日本の参謀本部の計画についての情報が届き続けた。蒋介石を降伏させ、中国における戦争を早急に完了させ、ソ連邦に対する戦争準備に集中するという。「オットー」からの情報によれば、東条は1940年には日本軍の展開を完了することを提案した。しかし、ラムザイは自分の結論に注意した：「ソ連邦に対する戦争は1941年にあり得よう。それ以前は困難であると言える。中国との和平に賛成と反対のグループの間で不一致が拡大している。すなわち：関東軍と資本家グループと枢密院の間で深刻。が、中国いる前線の将校達は中国への更なる進撃の強い意欲を持っている」。

ゾルゲから戦争の場合における日本の戦略計画の修正が届いた：日本の参謀本部は主攻撃を計画した、東部の要塞地帯から、ウラジオストクより北の鉄道を寸断する目的を持って。シヨリのこの情報を「ジョー」が確認した。諜報局局長オルロフ師団長の新しい職務代行の決済：「ラムザイの全ての電報から一特別な知らせ」。

日本では動員の強化が始まった。東京は1939年を中国、満州での勝利を記念するべきものとして準備をする。大国側の黙認の政治が、その助けとなった。1938年10月30日、国際連盟総会で報告が審議された、極東の事件に関して連盟の審議委員会によって準備された、中国に対する日本の侵略に関して中国政府が提訴した。報告では明示された、中国に対する日本の軍事行動は、「存在する合意によっても正当化できないし、自衛の権利もない・・・」と。しかし、委員会はこの確認だけに制限された。「中国は侵略に対する自身の英雄的戦いにおいて権利を有している、連合の他の国々の同情と助力において。」報告においては中国への援助を示すことの集団的方法は審議されなかった。

10月30日の連盟総会で、中国代表は、演説で語った、報告は彼の政府を全く満足させていないと。彼は残念さを表明した、連盟の加盟国の一致した行動を組織できていないと、連盟の規則の第16条から出てくる義務の遂行のために。連盟加盟国の幾つか、特に、イギリス、フランス、ベルギー、その他の代表達は示した、彼らの政府は中国への援助を示すために、何らかの効果的な手段を採用するつもりはないと。

諜報機関ラムザイは組織してから6年目に入った。それは決して簡単のものではなかった。



# 第6章

## ナチスのハンマーと日本の金敷の間で 1939年

最も優れた戦争は敵の意図を打ち砕くこと；次策は敵の同盟者を打ち砕くこと；次次策は敵の軍隊を打ち砕くこと。

孫子。軍事論

### 南満州鉄道会社の秘密の知識の利用について幾つか

1939年は、東京での勝利のファンファーレの響きの中で始まった。更なる一押しが蒋介石政府を崩壊しそうであった。

1939年初めには、中国の日本占領地に殆ど全ての生産工場があった：紡績と製粉の98%、全ての溶鉱炉と鉄鋼採掘の99%、電力と機械製造の97%。占領地域に日本は植民地体制を作り上げた。この地域の経済は日本帝国に従属された。

中国内部への侵入後、日本は中国の北部と中央部で活発な植民地化を進めた。中国の企業や設備を安い価格で買い付け、これをベースに、帝国は会社の財産を作り上げた。時折、日中の旗の下で。

軍当局は軍への供給、本国の蓄えの補充のために、占領地区の資源を最大限に利用することに努めた：解体した生産設備、原料、様々な価値のある物の搬出。

実質的に、日本は、中国の占領地域で唯一の主人となった。イギリスとアメリカの所有物全ては没収され、敵国の所有物を管理する特別局の管理に移された。替わった条件下で、日本にとって、外国政府の特権を中国で保障する必要性はなかった、不平等条約の条件下で彼らが獲得したものであった。

最終形態で、「新秩序」を日本は満州に打ち立てた。操り人形の政府の枠内で、満州国を、日本の大コンツェルンの助けで。

満州の真の主人は南満州鉄道会社（＝満鉄）であった、この会社は本物の国立独占経済帝国であった、中国北東部の広範な地域の経済を支配する。

満鉄は1904年－1905年における露日戦争後に直ぐに生まれた。満州における日本の立場が特に強くなった時である。ポーツマス条約に従って、日本はロシアから関東州の借地権を得た。それ以外に、旅順と長春の間の鉄道を、その地帯の権利と特権を。1906年に、満鉄の組織化についての帝国の法令が出された。それは最初から、戦略的特徴をもたらされていた。

日本は独占権を得ていた、満州の鉄道の投資に関して。満鉄は日本の独占的な所有物であった。イギリス－1907年～1908年に満鉄に融資していた－は満鉄の株券を所有することなく、鉄道の管理に関して何の権利も利用できなかった。アメリカは、満州における日本の独占的支配を倒そうとはしなかった。そこで、「開かれたドア」の政治を破壊しているのを目にしなが。しかし、これらの試みは自分の目的を達成しなかった。

中国への全投資額の77%を、日本は満州に集中させていた；そのうちの大部分—40%以下ではない—を1931年に既に満鉄と37の子会社に。当時、会社は商業会社ではなかった。その主たる株主は日本政府であった。資本の50%以上を所有していた。政府が、会社における高い管理職務に役人の特権的指名権を持っていた。

満鉄は経済的使命より戦略的使命を持っていた。満州の軍事占領に関する経済的準備の実現、そして、その後には全中国の。

満鉄による収入は関東軍の財源の一つであった。1915年から1931年の期間に、日本政府は満鉄から1億2500万円の収入を得た。その設立で投資したものより大きな金額を。この金額から、6500万円が関東軍の維持に割り当てられた。

結局の所、満鉄と関東軍は当時、ソ連邦の国境に沿った北部中国の領域に支配権を確立していた、全面積が130万平方メートルに、日本列島の面積の約3倍大きな。満鉄と関東軍はシャム双生児のような関係であった：満鉄の占有者と関東軍の将軍は自分らの支配権の拡張へ熱心であったと、誰でも確信を持って語る事ができよう。これは示していた、権力者層の経済的拡張の興味が、軍事政治の目的と密接に絡み合ったことを。結局の所、本質的に、「関東州関係者」は日本政府の政治に多大な影響を及ぼした。満鉄は「大臣」を創った、日本の大臣達は、会社の社長や副社長になることを大なる名誉と見なした。すなわち、松岡洋右—長年にわたり満鉄の社長の椅子に着いていた—は最終的に外務大臣となった。1933年に日本を連盟から脱退させた。国際的規則に矛盾するものとして、連盟が満州への日本の進撃を非難したので。

満鉄の機関は、最大級の戦略情報源であった。ラムザイグループにとって、不断の観察下に、この経済の巨人を維持しておくことは極めて大事であった。この課題を、尾崎はやりこなしていた。尾崎は満鉄の人々—重要なポストにいる—から多くの価値ある情報を得た。中国の北部にある町ムクデン（？ \*）の会社の支社に、彼の信頼できる人として、後藤典明と海江田久孝がいた。満鉄の東京の調査所では、宮西義男が働いていた。彼の友人である高橋意宇はこの会社の株主総会の管理部で働いていた。後になって、1938年末、尾崎は近衛のコネで、満鉄調査部の相談員となった。

## **「私は思っている、日本は春に軍事挑発に打って出ると、 これは地域紛争へ導く・・・」**

諜報機関ラムザイには、苦勞の多い日々が続いた。1939年1月1日、ゾルゲは、1938年10月8日に調印された日独協定について情報を送った、ソ連邦に関する諜報情報の交換に関する。オットーとショリは信じていた、軍事条約は直ぐに締結されると。ラムザイは無線で伝えた、「私はこれに疑いを持っている、オットーを通じて明らかにすることを試みている。彼がこの交渉を知っている一人である」。

この時期、日本の政治状況に大きな変化が生じた。更なる拡張方向の選択問題が起こった。意見がばらばらであった。近衛を首班とする影響力のあるグループの一部は見なした、2つの前線—中国とソ連邦—での戦争は帝国の力量外である。このための国の人的及び資

源は十分ではなかった。このために、最初、中国事変を勝利の内に終了させることが提案された。この巨大な国を経済的に資源的に将来の進撃のためのベースに変える、その後、日本の軍事力をしっかり固めること、それらを北の隣人に対して投入することが。

この集団に他の集団が抵抗していた、平沼を主とした非常に強力な。彼を支持していたのは、軍事大臣である板垣将軍、軍事大臣次長である東条将軍、関東軍司令官である上田将軍達。前年の通りに、彼らの計画はソ連邦の極東地域の占領を第一に予定していた。平沼と彼の集団は見なしていた、ソビエトの極東部分の占領後に、中国の回りの包囲網を閉じ、中国を外界から孤立させることができると。日本の侵攻に対する戦いにおいてソビエト連邦が中国に示している、軍事援助を不可能にすることができる。

最初のグループは中国との断固とした戦争を要求した。中国が占領されない間は、そこから外国勢力を駆逐できないとして。2番目のグループは、関東軍によって形成され、中国との和平とソ連邦との戦争に注意の集中を要求した。第3のグループ—軍事大臣板垣、寺内将軍、その他が属している—は中国の中央と南部における作戦を中止する要望を表明した。中国北部とモンゴルにだけ保持しながら、ソ連邦に対する戦争の展開のベースとして。このグループには、平沼と政府のその他の大臣が属していた。1939年1月23日にラムザイがモスクワに伝えた、「主たる困難は、過激なグループの抵抗にある。彼らは中国における征服を拒否された場合に蜂起を心配している。過激グループの注目をソ連邦へ逸らすことが、内部矛盾を回避するための唯一の手段とみなされている」。

ソ連邦との戦争の準備に注目を集中することを要求する視点が勝利した。1939年1月に、平沼が首相の座を近衛と交代した。尾崎の意見によれば、近衛内閣の退陣の主たる原因は次のようなものであった：a) 以前通り、政治的問題と軍事的問題の関係は調整されなかった；b) 予想に反して、「支那事変」は長期にわたる特徴を帯びていた；c) 内閣は、ドイツとの友好関係とイギリスとアメリカとの関係の間の困難な選択の元でできた；d) 内閣は国内の世論の支持を失った。

しかし、近衛には仕事があった。彼は枢密院議長に任命された。

平沼内閣は直ぐにドイツとの交渉を継続した、軍事同盟締結に向けて。事態は日本の内閣を急かせた。1939年1月2日、イタリアの外務大臣チアノが、リッペントロップに伝えた、条約の署名にイタリアが同意するとの。が、強調して、「平和条約」としてこの条約を見なしたいとの要望を付けて。しかし、日本政府は同盟を締結することを希望していた、ソ連邦に対抗する意向を持った。内閣は条約の締結に興味があった。それが中国での戦争を終結させることを助け、帝国の国際的立場を強化し、自分のヨーロッパの同盟国から技術的経済的援助を得ることになるので。相応する指示がベルリンの日本大使である大島に出された。それを得て、新しい大使は活発な活動を展開した。リッペントロップからの同意を得て、2国間の交渉の継続において。

モスクワ、労農赤軍諜報局長へ

オストロバ、1939年1月23日

私は思わない、ソ連邦との戦争への注意を逸らすこの政治が具体化していると。オットー大使は見なしている、板垣は中国から北への進撃を支持していると。

シヨリがオットー大使に伝えた、参謀本部で高まっている意見について、北方に向けた作戦と満州での軍の再編成の加速について。彼は見なしている、これはソ連邦に対抗する新しい準備を示しているものと。政治におけるこのずれを示している、漁業問題における不安が。全ての外国人は見なしている、北部で何かが起こるに違いないと。しかし、私と知人は考えている、これはソ連邦との戦争の準備を意味していないと。このように、日本は今戦争を目論む状態にはないと。日本が中国と困難を持って踏みこたえている時に。

私は思っている、日本は春に軍事挑発行動に出ると、それは地域限定の。過激なグループを中国における戦争から逸らすために。その目的を持っての抵抗の必要性を押しつける、自分の弱さを示さないために。

第82、第83、第84。ラムザイ。

ラクチノフが解読した。

ポポフ少佐が翻訳した。

諜報局局長代理の決済：「\*\*\*\*\*」

しかし、日本の条件—軍事同盟はソ連邦だけに向けられていた—はドイツ政府には受け入れられなかった。ドイツ政府は1939年にヨーロッパでの戦争に対して準備していた、主張していた、日本はドイツと共同すると、イギリスとフランスとのドイツの戦争の場合に。そのような要求は、今度はこちらから、中国での戦争を終了させたがっている日本政府を満足させなかった。その後、ソビエトの国境に予備となった軍を投入したがっている。事実上、平沼内閣はジレンマに陥っていた。西の強国と揉めたくはなかった近衛。

## 平沼内閣の動揺

ゾルゲの意見によれば、1939年の彼の諜報機関の最大の成果は、独日同盟締結の交渉に関する情報を得たことであった。そしてこれに関する平沼内閣の動揺も。

独日同盟締結（1940年9月 \*）の問題は、1939年にドイツ側から出された、2つのルートで：ドイツの日本大使大島を通じて、日本のドイツ大使オットーを通じて。大島経由では詳細に述べられた、が、オットーを通じては同盟の総括的な計画が述べられた。

しかし、交渉は極めてややこしく進んだ。この政治的な原因となったのは、平沼内閣が内政に囚われていたことだけではなかった。ドイツの提案を受け入れた場合に西の国々との明瞭な断絶に入ることを、日本は危惧していた。というのは、他の国々との戦争の準備を十分にしていなかったからであった。これ以外に、ドイツの計画が極めて不明瞭であったからでもあった。それには、極めて曖昧な考えが含まれていた。例えば、提案されていた、日本とドイツは政治的及び軍事的同盟を締結し、日本或いはドイツとの関係において、敵対的政治を行っている任意の国に対抗すると。

反コミンテルン条約の締結時には、明らかに示された、ソビエト連邦がその対象国であると。新しい条約の計画には、条約の対象国は示されていなかった。

交渉の過程で、段々と、ドイツの本当の目的が明らかになっていった。同盟の対象国である敵国はソビエト連邦ではなく、イギリスであった。この結果に、平沼内閣は極めて複



雑な状況に陥った。当時、ヒトラーは既にオーストリア問題を解決していた。チェコスロバキアと特にポーランドに関係した問題の解決において、ヒトラーはイギリスとフランスとの軍事衝突を避けようとしなかった。すなわち、時はその国々との戦争のために最も適当であった。とにかく時の引き延ばしは、イギリスとフランスに可能性を与えるものであった、戦争準備のための。これは、本質的にドイツにとって一定の困難さをもたらした。

このようにして、同盟締結について日本政府に問題を突きつけ、ドイツは実質的にイギリスとの戦争を計画していた。

注目に値する、長い間、日本における第3帝国の全権大使オットーがベルリンの提案を知らなかったことは、日本と軍事同盟を締結するという。ようやく数ヶ月後になって、リップントロップはこの件に関してオットーに知らせた。東京の政府筋における雰囲気についてベルリンに情報を送るよう要請もした。1939年3月12日、ゾルゲが伝えた、オットーの意見によれば、「日本は何時でも条約の署名の準備ができていて、完全にソ連邦に向けられた」。1939年3月23日、エイゲン・オットーは次のような内容の暗号電を送った：「素晴らしい事情通の情報源から知ることになった。今日の夜2時に、首相と5閣僚の会議は、長時間の会議の結果、ドイツとの外交交渉を開始することを決定した、ソ連邦に対抗する軍事同盟に関して。オットー」。

疑いはない、オットーにとってこの素晴らしい事情の情報源がリヒャルト・ゾルゲであったことは。ゾルゲは、今度はこちらから、尾崎と宮城から全面的な情報を得ていた。1939年4月に、「ジョー」は日本の指導層の迷いについて伝えていた、ドイツとイタリアとの軍事同盟の締結を将来する危険性に関して。尾崎は状況について報告した、「日本、ドイツ、イタリアの軍事同盟に関して複雑化している」。日本政府はドイツにいる日本大使大島から軍事同盟についての手紙を得た。この手紙を平沼内閣は10回以上検討した。政府内でこの問題に関して意見は一致していなかった。特に、海軍代表は危険性を訴えた、有田は極めて懐疑的であった。これ以外に、雰囲気醸成が醸し出されていた、首相平沼自身が影響下にあることが。彼はイギリスとアメリカとの関係改善に取りかかっていた。

モスクワ、労農赤軍諜報局長へ

オストロバ、1939年4月9日

大島は再び軍事条約についての問題を取り上げた、日本政府に対する回答を要求して。長い審議の後、日本は軍事条約を受け入れることを決定した、ソ連邦に対してだけの。

軍の幾つかのグループは条約を要求した、民主主義国家にも対抗する。が、それは少数である。

ドイツとイタリアはイギリスに対抗する条約を要求した。が、日本の海軍グループ玉座に近い一は決定的にこれに反対をした、

オットー大使は外務省で知った、日本はアメリカとの良好な関係の最後に残された部分の根絶には向かわないと。民主主義国に対抗する条約に合流することに同意しながら。

オットー大使は見なしている、日本はとにかくこの条約に合流せざるを得ないであろうと。

第42。ラムザイ。

解読。マリノフフ。

翻訳。ポポフ少佐。

コロリコフが自分の本「К и о к у м и ц у !」(? \*)で書いている、尾崎はゾルゲの課題と要請に従って行動していた、「影響の代理人」(? \*)のように。コロリコフの言葉によれば、ソ連邦に対抗する軍事同盟締結の目的を持った、ドイツとの交渉を行うことの日本政府の同意を知ったゾルゲは、尾崎に仕事にもっと取りかかるように提案した。ラムザイが語っていた、「長年、我々は大きくて重要な出来事の準備した、この出来事は接近している、今や我々はそれに集中するだけではなく、予見する必要がある。が、それに影響を及ぼす試みも。その点で、私は理解している、我々の活力の向上を」。

4月9日～15日の期間に、「オットー」が伝えたように、次のような条件で、ドイツとの軍事同盟の締結が決定された：「もし、ドイツとイタリアがソ連邦と戦争を始めるならば、日本は適宜時に2国の仲間入りをする、何の条件も付けずに。しかし、戦争が民主主義国と始まるならば、日本は極東への侵攻だけに仲間入りする。或いはもし、ソ連邦が戦争で民主主義国の仲間に入るならば」。

軍事同盟についての問題の審議が極めて大変であったことは、次の事実を語っている。平沼の態度は極めて曖昧であることを。彼は西の国々との戦争を発言していた。1939年4月23日、ラムザイは中央に伝えた「オットーが伝えている、小磯の拓務（当時の植民地関係）大臣任命は大きな意味を持っている、彼にとって首相の地位への道が開かれてという点で。小磯は中国との和平の立場を堅持している、ヨーロッパでの戦争の開始までに。和平が必須であると彼は見なしている。小磯は声明した、彼は中国との和平を締結する計画であると。蒋介石とも・・・彼は強調している、日本は中国北部でのみ強固にならなければならない、南部中国と中央中国を多かれ少なかれ中国政府に残してと。北部中国、満州、モンゴルにおける日本の権益を確固とした後、ソ連邦との戦争を準備する」。

モスクワ、労農赤軍第5局長官へ

オストロバ、1939年4月15日

ドイツ大使館の次席秘書がベルリンから戻ってきた、ベルリンの外務省で会議に参加していたものである。会議にはリップントロップが在席していた。秘書は声明した、この1、2年以内に、ドイツの政治はフランスとイギリスの問題に集中するであろうと、全ての問題を考慮に入れて、ソ連邦に関係した。

ドイツの主たる目標—政治的軍事的力の達成、イギリスが戦争なくしてドイツの要求を認めるざるを得なくなるための、中央ヨーロッパにおける支配権と植民地の要求において。

これを基礎として、ドイツはイギリスと持続的和平を締結する準備がある、イタリアを放棄さえして、ソ連邦と戦争を開始さえして。

近日中に、秘書の言葉によれば、ヨーロッパで非常に危うい事態の発生が予想される、ドイツとイタリアはイギリスに勝つことを急がなければならないので。なんとなれば彼らは知っている、2年後ではあまりに遅すぎる、イギリスは大きな資源を有している故に。

ラムザイ

1939年4月、日本政府は、ドイツとイタリアの政府に知らせた、日本政府は条約の署名に同意することを、ソ連邦に対抗するものを。が、同時にイギリス、フランス、アメ

リカに対抗する条約の締結は不可能であると見なしていると。5月初めに、ラムザイが伝えたように、立場は少し穏やかであった—外務大臣有田と海軍は締結することに大まかに同意した、条件で制約された軍事条約でない「任意の国に対抗している、3国の内の一つの国に戦争を始めた、反コミンテルン条約を締結している、この戦争にイギリス、アメリカ、フランスが引き入れられたとしても」。しかし、日本側は希望していた、これについては条約の秘密付属文書で記述されることを、イギリスとアメリカとの摩擦を避けるために。ゾルゲが伝えた、「参謀本部が声明した、有田は辞職願を出すと、もし彼の視点が外れるならば、ドイツ大使オットーにほのめかした、参謀本部は責任を取ることはできないと、意見の不一致から現内閣の分裂することの・・・」

そのような日本の立場は、ドイツとイタリアの支配層の不満を引き起こした。これらの国の政府—世界の分割を志向している—は3国同盟の締結を獲得した、ソ連邦に対してだけでなく、イギリス、フランス、アメリカに対しても。

ヒトラーとムッソリーニは、条約の限定された機能についての日本の提案を拒否した。

日本の不確かな立場を考慮し、ドイツとイタリアは、日本の決断を待つことなく、1939年5月22日に2国間で軍事同盟に関する条約（＜鉄の条約＞）を調印した。

## **パドダボック(ゲームの一種 \*)での大ゲーム**

1939年1月30日、ヒトラーはドイツ国会で演説をした。そこで、彼はドイツにとっての「生活圏」の必要性に根拠を付けることを試みた。特に、彼は要求した、ドイツの元植民地をドイツに返還することを。同盟国の関係における政治について話ながら、ヒトラーは声明した、理由が何であれ、どんな戦争も、ドイツはイタリア側に立つと。

この有名な話の前の、1939年1月24日に、イギリスの外務大臣ガリファクスが秘密の方法でアメリカ大統領に情報を与えた、ヒトラーが「西の大国への進撃に関する問題を検討している。東方への次の行動に関する予備役な一歩として」。ドイツとオランダの関係が悪化していることを指摘して、ガリファクスが書いていた：「ドイツによるオランダと沿岸部の占領はヒトラーに可能性を与える、フランスを麻痺させ、イギリスに自分の条件を押しつけること」。

1939年1月28日付けの、ワシントンにいるイギリス大使への電報で、ガリファクスはイギリス政府の呼びかけの内容を述べた、この問題に関するフランスとベルギー政府への。彼は強調していた、「オランダとその植民地の戦略的価値は極めて大きい、閣下の政府の意見として。ドイツのオランダへの侵攻は、西側強国の安全の直接的恐れとして、見なされる必要がある」。それにもかかわらず、西側では、イギリス、フランス、アメリカはドイツの恐れを不明瞭と見なした、交渉や手段で対応できるものとして。

東側では、同じ1939年1月10日、日本が海南島を占領した。これは中国の状況を悪化させた、極東におけるイギリス、フランス、アメリカの立場に深刻な打撃となった。

しかし、これらの国々の政府は外交手段だけに留めた。その考えは要するに、日本政府の声明に回答を求めただけであった。

このように、1939年2月17日、東京のアメリカ大使グルーは自国の国会の指示に従って、日本の外務大臣を訪問し、口答で声明した。アメリカ政府は海南島占領における日本政府の目的の情報を得ることを喜びにすると。

日本の外務大臣有田は、グルーに返答して声明した、「海南島の占領の目的は、南中国海岸の封鎖の強化と蒋介石体制の制圧の加速にある」。有田は日本政府の以前の声明を繰り返した、日本は中国に領土的目的を追い求めていると。そして追加した占領は「軍事の必要性の限界を超えることはない」と(!)。

アメリカ、イギリス、フランスのそのような反応は、日本にとって、新しい証拠となった、罰せられずに拡張を続けることができるという。これらの政府はできること全てをやった、ドイツと日本と彼らの交渉に参加したイタリアが、ソ連邦に対抗する軍事同盟を締結するために。この際、ロンドン、パリ、ワシントンは見なしていた、ソ連邦に対する侵攻は西部と東部で始まると。この目的の達成のために、西側の外交は枢軸国に十分な譲歩をする準備ができていた。

当時、東京にいるイギリスとアメリカの外交代表団は、矛盾している報道に不安であった。軍事同盟の締結に関する交渉についての世界の出版の。出版物で情報を読むことができた、この同盟は民主主義国に向けられていることを。有田はイギリスとアメリカの大使を信用させることを急いだ、提案されている軍事同盟はソ連邦に向けられており、大国の興味に触れてはいないと。これは西の強国を励ました、イギリスとフランスの政府の返事で中国の要請を拒否することで。日本との戦争で中国に援助の提供について、中国の提案を拒否した。条約の締結についての、イギリス、フランス、ソ連邦、中国の間の、島の帝国に向けられた。

1939年5月22日、国際連盟の会議で、中国代表ベリントン・クが提案した、連盟が参加各国に勧めることを：

第一に、経済的、物質的援助を中国に提示すること；中国の抵抗力を弱めるどんな行動も自制すること；軍事物資と資源の日本への提供を自制すること、中国への進撃を継続させるのに必要な。特に、飛行機と燃料；日本商品の輸入を制限すること、同じく、影響の他の手段を講ずること、日本の国の契約の権利の計画的な違反に対する、連盟加盟国の；

第二に、行われる手段の調整の目的で、極東の仕事に直接に興味を持つ強国の特別な組織を作ること；

第三に、中国への援助と侵略国の孤立化を目的として、連盟で採択された決議の実行を継続すること。

その日、ガリファクスが連盟の総会で演説をした：「我が国の政府は中国の名前で現在動いている提案を維持することは可能であると見なしていない」。

これらの条件下で、1939年5月27日に連盟で採択された決議は、期待の表現だけに留まった。従来通り、幾つかの政府によって採用された手段が実行されるであろうと、中国への援助を示すことに関して、この問題に関して連盟で採択された決定を遂行する。連盟の加盟国への呼びかけによって、中国への将来の援助の手段についての問題を研究する。

「天津事件」がそのような政治の極めて顕著な発露となった、1939年6月にそれは起こった。日本政府—イギリス、フランス、アメリカに中国占領を認識させることを強いる目的を持って、不断に圧力をかけ続けている—は1939年6月14日、天津のイギリス租界の封鎖を行った。日本軍は租界の全ての入り口を閉じて、侮辱的な検査と尋問の後にイギリス人を通過させた。この租界での仕事は止まった。日本人殺害に罪のある4人の中国人の租界権力による引き渡しについての日本の要求が、この封鎖の理由となった。東京のイギリス大使クレイクのイギリス租界の封鎖解除の要請に答える形で、1939年6月24日に有田が声明した、日本政府は以前通りの政治を継続するであろう、中国においてイギリスが日本と共同しない間は。

結局の所、1939年7月24日、日英の合意（有田—クレイクの合意）が公開された。それに従うと、英国政府は実質的に中国における日本の占領の「合法性」を認めたことになった。

ハルヒン・ゴール川地域における日本軍とソビエト軍の衝突（ノモンハン事変 1939年5月～9月）が最盛期の状況下で、この合意は日本の立場を補強した。

そのような政治が、ソビエトの指導者を刺激しないわけにはいかなかった。1939年5月10日の共産党第18回大会で、スターリンが直接声明した、「この政治は戦争の全ての参加者達に向けられた、戦争の泥沼に深く引き込むために。ここでひっそりと彼らを励ます、彼らをお互いに弱らせる。その後、彼らは十分に弱くなった時、真新しい力を持って場面に登場する。もちろん、” 平和の興味の中で”、弱体化した戦争の参加者に自分の条件を押しつける」。書記長はしっかりと思い浮かべていた、ミュンヘンの後、西側はポリシェビキとの戦争にドイツと日本の小突きに格別に向かったと。スターリンは脅した、「しかし、気づく必要がある、大規模で危険な遊び、不干渉が政治の追随者達によって始まる、は、彼らにとって深刻な崩壊で終わる」。

共産党第18回大会で、防衛人民委員ボロシロフは好戦的な演説をした。彼は語った、1934年から、2つの大会の間に、赤軍の人員は2倍となったと。「赤軍の歩兵軍団の一斉射撃の力は1939年に78932kgとなった、フランスは60981kg、ドイツは59509kgである。ソ連邦の空軍は1934年と比較すると2倍に成長した。爆撃の能力は3倍になった」、ボロシロフは割れるような長い拍手のもとで演説した。

#### 写真

リヒャルト・ゾルゲによれば、これは気に入った写真。東京、1936年。

日本の首相近衛文麿公爵は尾崎秀実（ほつみ \*）の結構な情報源であった。

尾崎秀実—ゾルゲの第一の助っ人であり、同時に首相の相談員。

ラムザイグループの通信員であるマックス・クラウゼン、東京で。1930年代初めに中国でゾルゲと一緒に働いていた。

ブランコ・ブーケリッチ—ゾルゲグループの一員。ジャーナリスト、優れた写真家、有名

なフランスの通信社「ガバチ」の特派員。

日本におけるドイツ大使エイゲン・オットー、陸軍少将、ゾルゲの「親友」。肩章と大使の職務はソビエトの諜報員の助力無しには得られなかった。

日本での任務中のリヒャルト・ゾルゲ。

1941年のゾルゲ、逮捕まで残り数ヶ月。

1920年から1930年におけるソビエトの軍事諜報の著名な指導者ヤン・カルロビッチ・ベルジン。コミンテルンの国際関係部から彼の所に1929年にゾルゲが異動してきた。

兵団長セメン・ペトロビッチ・ウリツキイ、1935年5月にベルジンに変わる。1935年夏に、ゾルゲは彼に会っていた、モスクワへの旅行の時に。

アンナ・クラウゼン、マックス・クラウゼンの妻であり、援助者であり、親友。上海、1930年代初め。

1932年、上海での尾崎。アグネス・スメドレーがゾルゲと彼を引き合わせた

マックス・クラウゼン、中国におけるゾルゲグループの無線士。上海、1930年代初め。

相変わらず一緒のマックスとアンナ・クラウゼン。ベルリン、1967年

東京のゾルゲの家のテラス。

東京の巣鴨刑務所、1944年11月7日、ここでリヒャルト・ゾルゲは刑死した。

東京の多磨墓地中のリヒャルト・ゾルゲの石碑。ソビエト連邦におけるゾルゲの認定までの石碑の様子。

1964年以降の石碑の様子。

東京におけるゾルゲの最初の無線士ブルノ・ビント。1936年、スペイン共和国で武官コンブリク・ゴレフの無線士となった。

ルト・ベルネル、中国においてのゾルゲ諜報グループの協力者。

リヒャルト・ゾルゲの最後の写真、1944年11月7日刑死。

リヒャルト・ゾルゲの妻エカテリナ・アレクサンドロビッチ・マクシモバ。彼らは1933年に結婚した。

エカテリナ・マクシモバと彼女の姉妹タチヤナとマリア、1933年。

石井花子、リヒャルト・ゾルゲの東京での愛人、1935年。

汽船「リヒャルト・ゾルゲ号」。

## 今度は－ポーランド

「ポーランド問題」はヨーロッパの政治の舞台に常に出てきた、大国の意向により、これらの国の興味の犠牲になる時に。ナポレオンの侵略時に起こったように、ヒトラーの拡張時にも起こった。

1938年10月3日に既にゾルゲが伝えていた：「駐在武官（松木大佐）から、情報を得た、スデットスキイ問題の解決の後には、次の問題となるのはポーランドである。が、それはドイツとポーランドの間で解決されるであろう、友好的に、ソ連邦に対抗する共同の戦争と関係して」。

しかし、1939年初めから、特に、ドイツ国会でのヒトラーの演説後に、ポーランドに関するドイツの政治は急変した。ヒトラーは同等の隣人としてポーランド人を見なすつもりはなかった。1939年3月21日、リッペントロップがポーランド大使リプスキイにポーランドについてのドイツの提案を述べた。それは次のような内容であった：ダンチッヒは独立した形で再びドイツ第3帝国の一員に帰着させること。ドイツは治外法権を持った鉄道と幹線道路の建設の権利を得ること、それらはドイツと東プロシアを結ぶ。

この時、リッペントロップは次の点を力説した、ダンチッヒのドイツへの引き渡しの結果、ポーランドの国際的立場は確固となる。同時に、ドイツとポーランドは同じ東方政策を行うことができる、両国の興味は一致しているので、「ポリシェビキからの防御」で。

しかし、3月26日、リプスキイはリッペントロップにポーランド政府の覚え書きを渡した。その中では、ドイツの提案は逸れていた。

ヒトラーの返答は長く待たなかった。4月28日、ドイツは、不可侵に関する1934年のドイツ－ポーランド宣言を破棄した。ドイツの提案を採用することをポーランド政府が拒否したことを引き合いに出して。

同じ日、ヒトラーは国会で演説した。その演説で、ヒトラーはベルサイユ体制を危機にさらした、オーストリアの併合とチェコスロバキアの占領を正当化して。また声明していた、ミュンヘン協定は全ての問題を解決はしてくれない、特にヨーロッパの国境の再構築に関係した。総統はイギリスとの関係の悪化に突き進み、1935年のイギリス－ドイツ協定の廃棄通告を宣言した。同時にイギリスとの友好関係の樹立の希望を宣言しながら、

イギリス側からドイツの興味への理解を示すという条件の下で。

これはロンドンにとって全く予想外のことであった。ロンドンは長い時間態度を表明さ  
えしなかった。6月27日になって、ようやく、ドイツにいるイギリス大使ゲンデルソン  
が、ドイツの外務省の国务大臣バイツゼッカーに覚え書きを渡した、海軍協定のドイツに  
よる廃棄通告に関した。覚え書きで、イギリス政府は示した、政府は、この行動を相当の  
理由があり合法的なものであると認識できないことを。同時に、イギリス政府はドイツと  
イギリスの間で新しい海軍条約の締結の交渉を始めることの希望を語った。しかし、第3  
帝国（ヒトラーのドイツのこと \*）の指導部は、軍事手段によって、「ポーランド問題」  
の解決を全力を挙げて計画していた。

1939年3月、労農赤軍諜報部は情報を集めることを始めた、ポーランドに関するド  
イツの計画について、信頼できる筋から。このエージェントがボリフランクであった。ド  
イツのジャーナリストで коммуニスト、ソビエトの軍事諜報部で働いていた。彼の基本と  
した情報源には、ルドルフ・フォン・シェリアーワルシャワにおけるドイツ大使の相談員、  
有名な貴族の出身者一がいた。彼はヒトラーとナチストを憎んでいた。彼らを成り上がり  
者と呼び、ボリフランクと接触を持っていた。彼を西側国の諜報の一つの代表者と見なし  
ていた。

#### ボリフラングー中央へ

我々が知り合った最初の日から、シェリアは私に全ての情報をくれた、彼にとって重要と思ったものを。これは、  
政治的な情報、個人的な陰謀、金の話、彼の妻や女中との個人的な喧嘩、私に興味があった文書。彼がそれを口頭で  
読み上げる、或いは私にそれを読むことを許した。とにかく、彼は認識していた、自分の仕事の義務に違反している  
ことを。何時も話していた：「警戒のために新聞を手にして。もし誰かが入ってきたならば、新聞で電報を覆ってく  
ださい・・・」

シェリア以外に、ボリフランクは他に情報源を持っていた。リップントロップの同僚で  
あるクレイスト博士との会合を元に、彼が伝えた。ヒトラーの当面計画は「西に対する  
行動」の準備であると。将来における戦争で、ポーランドの役割の最重要な過大評価が起  
こった。ヒトラー指導部は補助力としてのポーランド人の利用を拒否し、ポーランドの  
領土分割の実現を決めた。クレイストは述べた、「東の無慈悲な浄化の後に、”西の段階  
”が控えている。それはフランスとイギリスの壊滅にある。政治的及び軍事的手段によっ  
て達成される」。この行動の成功後に、将来、「ソ連邦に対する戦争が残っている。ドイ  
ツの政治の最終的、決定的課題として」。

諜報局の新しい長であるプロスコフ將軍は、1939年5月に、スターリンに報告し  
た、質問に対する短い内容を持った返答を。1939年3月末に出された、ドイツ軍の最  
高統帥の東方局局長キンツェル少佐とソビエトの軍事諜報のエージェントの会議で。キン  
ツェルが疑念を話した、ロシアがポーランドに大量の物質的援助を示すことができるとい  
うことに。「とにかく、彼らは明らかに、日本との深刻な仕事を直ちに学ぶ」。彼の情報  
によれば、日本は決して見なしていない、ハッサン湖で敗北を被ったと。「日本は戦いの  
先鋭化に興味はなかった。これ故、彼らは必要な防衛だけに制限する命令を出した。しか  
し、ロシアをすっきり撃退するために十分であった。日本人達は自分を極めて強力である



と感じている。日本人達は中国での紛争を直ぐにでも終了したがっている。ロシア人を強力に攻撃するために。これは直ぐにでもやって来る。その時には、ヨーロッパでの紛争に関わる気が失われる。従って、ポーランド人は十分に孤立して残る」。

全く明らかである、ドイツは日本軍を利用したがっているのは、ポーランド問題からモスクワの注意を逸らすために。

ボリフランクは最初の一人となった、ドイツのポーランドの進撃の大凡の日にちについてモスクワに知らせた、1939年7月から8月であると。

5月末に、ラムザイグループから、この情報の確証が届いた。

モスクワ労農赤軍第5局局長へ

オストロバ、1939年5月31日

ショリ少佐(？\*)が情報を得た、日本は3年で自分の航空機を5倍にするつもりであるとの。日本の参謀本部はドイツ大使オットーに伝えた、参謀本部は手段を講じた、軍事条約締結に関する交渉が決裂に至らないために。とにかく、参謀本部は条約の締結に期待をかけている、平沼がなした最近の失言にもかかわらず。オットー自身は見なしている、今日まで、平沼と海軍グループ-天皇に近いところにいるグループ、経済グループもがこの問題に反対している間、交渉からは何も出てこない。日本はイギリスとアメリカとの不和を避けたがっている。東京にやって来たファシストのドイツ人-ヒトラーの近くにいる-が語った、ドイツの今後の行動はヨーロッパで行われると。ダンチヒは1939年10月に占領されるであろうと。

この年に、ドイツはポーランドから旧ドイツ領土を奪い返し、ポーランドをヨーロッパの南東部に、ルーマニアとウクライナに退けるであろう。ドイツはウクライナに特別な興味を持ってはいない。戦争の場合には、ドイツは資源獲得の目的を持ってウクライナを占領する。東京を訪問中のモスクワのドイツ武官キョストリング将軍が話した、現時点で主要で最初の敵はポーランドであり、その後、二番目としてウクライナ。

第70-71。ラムザイ。

解説。マリンニコフ。

翻訳。イワノフ上級中尉。

この時期に、ハルハ河での衝突は最盛期を迎えていた。

## 東部での「小さい戦争」

モンゴル占領の問題は、既に1927年に、日本の首相田中義一によって、天皇への彼の覚え書きによって持ち出されていた。彼は書いていた：「中国を獲得するためには、我々はまず始めに満州とモンゴルを獲得しなければならない。平和を獲得するためには、我々はまず始めに中国を獲得しなければならない」。田中の考えは発展した。1932年、日本の軍事大臣荒木貞夫は冊子「昭和時代における日本の課題」を公刊した。それに書いていた：「我々は満州-モンゴル問題は重要であると見なしている。というのは、もし我

々が満州とモンゴルに簡単に自分の威光を打ち立てなければ、我々は偉大なる理想を何も拡張することはできない、日本の3000年にわたって発展してきた。日本は自分の開花だけに満足してはならない。日本は自分の理想を全極東に広めなければならない。更には全世界に」。

これは日本の統帥部の軍事計画の思想的基礎となった。参謀本部には「小規模ながら勝利の戦争」が必要であった、日本の意向を西側強国の目に見せるために。他の面では、司令部が造られた、もっぱらソ連邦に向けられたドイツとイタリアとの軍事同盟の締結するという日本の提案を勝手に力でもって補強するために。このことから、日本の参謀本部で、モンゴル人民共和国の領土へ進入することが決められた。軍事作戦の成功裏には、極東の国境線全線に渡って展開することが提案された、バイカルからウラジオストクの領土獲得のために。この際、日本の内閣が予想していた通り、ドイツは西でソ連邦へ侵攻しなければならなかった。

モンゴル人民共和国にはソ連軍が滞在していることを、東京は良く知っていた。そして、十分に理解していた、この主権国家への日本軍の進撃は赤軍部隊との軍事衝突を招来することを。帝国の首都では、軍事作戦に対して、そのような見通しを持っていた、第一撃の後に、ソビエトとモンゴルの合同軍に勝利を得るためには、タムスク・ブラクスク突出部でこの軍を粉砕する予想であった。その後、共和国の首都ウランバートルを經由し、一息に、チタの南でソ連邦国境に出る。その後、バイカル方向へ更なる一撃を加える。シベリア鉄道を寸断するために、極東を他の領土から分断するために。同時に、バイカル方面への攻撃と共に、沿海州への進撃を始め、ウラジオストク地域の占領が予定されていた。

公然とした衝突を行いながら、日本の指導部は大きな期待を寄せた、準ソビエト体制に反対をしているモンゴルの封建的上流階級層と高級ラマ宗教階級層の自分の作戦への活発な支持に。司令部（モンゴルの \* 訳者注）はモンゴル人民革命軍の破壊を行った、1936年から1937年における弾圧で骨抜きにされた。高級と中級の圧倒的多数の幹部士官が抹殺された時。それ以上に、1939年にモンゴルではこの弾圧は未だ継続していた。

30年代末に、日本軍は自身の技術装備において格段の進歩を成し遂げた。軍事産業—「中国事件」の開始後に加速度的なテンポで発展した—は軍に新しい現代的軍備を供給した。中国における戦争は、帝国の陸軍の定員の急速な増大のきっかけとなった。日本の陸軍の師団数は1937年の23個から、1939年には44個に、陸軍の定員数は95万人から124万人に。航空大隊はこの期間に54個から91個に。日本の軍隊は、完全に近代化された、戦時定数に従って。良く訓練され、将校も一兵卒も十分に教育され、大いなる脅威となっていた。その後の出来事が示した通り、深刻な対抗者となっていた。

1939年に、関東軍は大規模な軍の集結を行った、幾つかの軍団からなる。プリモリエの国境に、第1と、第2の軍団が配置された。それらの軍団には、9個師団と1個の騎兵旅団が入っていた。ブラガベシェンスクに対抗させて、第11歩兵師団が集結されていた。第4軍団はモンゴル人民共和国とザバイカルの東の国境線に対抗して配置された。それには2個師団が入っていた。親衛師団と2個騎兵旅団が入っていた。また、満州国軍も。

各歩兵師団は、戦時定数を満たし、定員数においては、赤軍の歩兵軍団と同じであった。満州において、日本軍の全兵員数は35万9千人に達していた。関東軍の武装は、大砲1052台、戦車585台、飛行機355機。これに、朝鮮にいる日本軍が加わることにな

る、2個歩兵師団で、人員が6万人に増加された。それらは大砲264台、戦車35台、飛行機90機。2つの師団はソビエト国境の所の朝鮮北部に配置されており、ウラジオストクへの攻撃が予定されていた。

モンゴル人民共和国の東部国境線に集中された日本軍には、モンゴル軍の騎兵師団（4860人）、第57特別旅団—その人員は1939年5月25日で5544人—が対峙していた。1939年6月に、ソビエト・モンゴル軍の指揮官の職務にジューコフが就いた時には、軍は指揮官と戦闘員が1万2500人、大砲109台、装甲車266台、戦車186台、飛行機82機。

1935年と1936年と同じように、衝突はタムツァク・ブラクスク突出部の国境で始まった。突出部の国境線は殆どぴつたりと通っていた、大興安嶺山脈の山麓に沿って。そこには鉄道と幹線道路があり、山の峠を通り過ぎ、バルギ地区の平原に踏み入れる。ソルナからガミジョウへ、日本によって建設された鉄道は、この地域で国境の傍を通っている。これは2つの路線の内の一つであった、バルギ地方を連絡する。この地方を、関東軍の参謀部は、満州の内部領域から、ザバイカルへの侵攻において重要な橋頭堡と見なしていた。

軍事作戦地域としての、日本の軍国主義者によるタムツァク・ブラクスク突出部の選択は、大興安嶺の峠に近いこの地域は好都合な橋頭堡として利用できると思なされた。日本・ソビエト戦争が始まった時に、モンゴル人民共和国の領土から満州にソビエト軍が侵攻するための。この突出部から、満州のハイダルスクの要塞地帯の背後に強力な打撃を与えることができる。突出部は日本の戦術家にとって頭の痛い問題であった。1935年、モンゴル人民共和国に政治的及び軍事的圧力をかけることで、この問題の解決を目論んだ試みは失敗に終わった。そして4年を経て、東京で、関東軍参謀本部で軍事力でこの突出部を殲滅することを決定した。

軍事衝突の準備は、1939年の初日から始まった。モンゴル人民共和国の東部国境線に、満州中央部から強化された歩兵軍団が集結した。軍団を運んだ2つの線路はフル稼働した。中国北部と本国から、空軍部隊が配置された。ポルト・アルツルからは重火器が。中国戦線での戦いは中止され、戦闘経験のある帝国の優秀な部隊はモンゴル国境に配置された。軍事作戦への準備は慎重に行われた：ハッサン（張鼓峰事変）の経験が十分に検討された。司令部要員の野外視察、差し迫っている軍事作戦の地区の検討が行われた。その地区の詳細な地図が作成された。

1939年2月、「ニューヨークタイムス」の特派員が上海から伝えた：「わかった、日本は満州一ゴ、チャハル、スイウアニに60万人以上の兵士を集中した、ソビエト国境近くの中国の箇所から部隊の移動をし続けている。北部へ大量の部隊の配置は疑いを強めている、日本はソビエト連邦への侵攻を目論んでいることの」。

1939年4月、関東軍司令官上田将軍は第1488号作戦命令を出した、要約が「ソビエト・満州の国境の争論の解決の原則」の。この命令の作戦は、ソ連邦と条約を結んでいたモンゴル人民共和国に広く知れ渡った。命令中のひとつは配下の指揮官に指示していた、「国境線の不明瞭な場所では、自身の判断で国境を作ること。もし敵対者がこれを邪魔する場合には、勇気を持って戦いに挑み、勝利すること。結果を恐れるな、上級指揮部がその世話をする」。

1939年初めに、尾崎はゾルゲの注意を、日本人によって行われているハルピンーチハルハイダル鉄道の活発な仕事に向けた。同じく、加速度を上げて建設されている鉄道支線ガニチジュールソロンに。軍の素早い配置のために対応された、これらの鉄道はモンゴル人民共和国の国境線方向に延びて、その近くで終わっている。それに関する、ゾルゲが他の情報源から得た、日本の軍団についての補足の情報は、次のようなことであった、日本はモンゴルを経由してソビエト連邦に侵入するつもりであると。5月に、宮城はゾルゲに伝えた、日本軍とその武装について詳細に、ハイダルに配置された(ハルハ河地区の)、満州国境の東部分についての。

この地区で事件が始まった。5月12日、モンゴル軍の騎兵部隊がハルハ河を越境した、モンゴル人民共和国の領土にある。日本軍はそのような行動を国境侵犯と見なした。前述の対処命令第1488号に従って、この部隊を攻撃した。返答として、モンゴル軍は新しい武力をこの地区に投入した。

これに続いて、5月28日の夜、日本軍が攻撃に入った。5月と6月の戦いで、力の上回っている日本軍と満州軍がソビエト・モンゴル軍を圧迫した。損害を受けて、ソビエト・モンゴル軍はハルハ河に退却した。モンゴル人民共和国内のソビエト空軍は大きな損失を被った。5月27日、28日の2日での空中戦で、ソビエト空軍は戦闘機15機とパイロット11人を失った。日本はただ1台の自動車。これは厳しい叱責の原因となった、国防人民委員ボロシロフは第57軍団の司令部を直通電話で行った。

6月には、ハルハ河地区での活発な戦闘行動は行われなかった。大地には一時的な静寂がやって来た、が、空中戦は最盛期を迎えていた。強力な空軍を集中し、中国での戦闘の経験を有する優秀な航空部隊を集中し、日本の司令部はソビエト空軍の殲滅、それにおける支配権の獲得を指向した。

最初の敗北の後、ソビエトの空軍部隊は熟練したパイロットで直ちに強化された、スペインと中国で軍学校を卒業したパイロットで。これはソビエト空軍の作戦の効率を格段に上昇させた。6月20日に、特に頑強な空中戦が展開された。今回は、ソビエト側の勝利となった。日本は90機の飛行機を失った。ソビエトの損失は38台の自動車。

## 「・・・日本の全兵力はソ連邦に対して投入されよう」

ハルビン・ゴールでの最初の戦闘(ノモンハン事件\*)の期間、モスクワは蒋介石への援助を禁止しなかった。1939年6月13日、モスクワでソビエト社会主義共和国連邦と中国共和国の間で条約が署名された、1億5千万米ドルの融資の実現に関する。条約では予見されていた、両国は契約を結ぶことが、融資に従った商品と装置の様々な分野での供給の。中国政府の要請に従い、ソビエト政府は、中国の指定地に供給する製品を輸送することを請け負うことに同意した。

この融資は、中国にソ連邦で新しい飛行機、大砲、機関銃、その他の武器の購入ができるようにした。同じく商品、自動車、石油産物、その他も。公表された条約に記述されていた一覧表に同意して、ソ連邦は中国に大砲250台、機関銃4400機、ライフル銃5

万機、トラック500台、爆弾1万6500個、弾丸50万個以上、薬包1億個、その他の軍事物資を供給した。

これ以外に、1939年6月13日に、条約に沿って締結された引き続く3番目の契約に従って、ソビエト連邦は中国へ送った。飛行機300機以上、トラックとトラクター350台、大砲250台、機関銃1300機、多数の爆弾、砲弾、薬包、電気装置、航海装置、修理装置、石油潤滑材料、他の軍事物資、総額で7千万ドルに及ぶ。

ノモンハンでの軍事作戦時、尾崎は近衛内閣の秘書達の誰とも交際していなかった。しかし、1939年6月初めから、南満州鉄道の東京支所の研究部署の顧問として働いていた。この新しい地位で、彼は満州に関する全ての諜報情報に接し得ることになった。彼の情報によれば、日本政府はロシアとの大規模な戦争を開始するリスクを冒すつもりはなかった。日本人民も同じく戦争を欲してはいなかった。これ以外に、噂では、日本軍はこの事件で、良いところはなかった。

宮城は、自分の方から、ゾルゲに情報を与えた。武器の種類、その他の装備一式について、戦いで使用される、民心の雰囲気、日本軍内の戦闘心について。

日本政府は、まず第一に、ドイツとイタリアとの交渉に熱心に取り組んだ、軍事条約締結に関して。

ドイツ大使オットーのドイツ外務省への電報から

1939年6月7日

全く信頼できる軍グループから、極秘の情報を得た。5月5日、大島大使に電報が送られたとの、日本はドイツの戦争に自動的に参加することに同意したとの、もしドイツの戦争の対抗者にロシアが入っているならば。第3国とのドイツの戦争時、ロシアが中立にいるならば、その時には、日本は同意を得た後のみにだけ戦争に参加する、戦争への日本の参加が同盟国の興味に合致するならば。

権威ある人物が強調した、陸軍と海軍は、長い審議の後、一つの意見にまとまったと、差し迫っている決断に関して。これは重要な進歩を示している、海軍は条件を拒否していたので、それに同意する、西の強国に対する戦争への日本の参加は日本の興味に格別に依存していた。

6月24日、ゾルゲは最新の日本の提案を伝えた：

1. ドイツとソ連邦の戦争の場合には、日本は自動的にソ連邦に対しての戦争に入る。
2. イタリアとドイツがイギリス、フランス、ソ連邦との戦争の場合には、日本は同じく自動的にドイツとイタリアと共同する。
3. ドイツとイタリアがフランスとイギリスとの戦争を始めた場合（ソ連邦を戦争に引き込まない）には、日本は第一に、ドイツとイタリアを自分の同盟国と見なす。が、軍事行動はイギリスとフランスに対して始める、ただ全体の状況に依存して。が、もし3国同盟の興味が要求するならば、日本は遅れることなく戦争に参加する。

ラムザイは強調した：「この最後の条項は、ソ連邦の立場を考慮してなされた。明らかに、ソ連邦はヨーロッパの戦争に引き込まれるであろうから。同じように、アメリカの不明瞭な立場故に。日本の積極的な軍事行動は制限された：2番目と3番目の場合には、日本はシンガポールより先には進撃しない。日本の全戦力はソ連邦に対して投入される、という最初の点に同意した」。

この通知は国の高位指導部に配布された。

1939年6月、ラムザイはモスクワに詳細な報告書を送った、極東における軍事政治状況についての。これについて大胆な結論を出しながら：「ソ連邦に対するドイツと日本の軍事侵攻は近いうちにはありそうもない。ドイツはポーランドの占領とイギリスとの戦争の準備にかかり切りである。日本の軍事力―陸軍、海軍、空軍―は根本的な再組織化と再軍備化を要求している。この再組織化の遂行には、さらに1年間～2年を要する。日本は大戦争の準備をしている、1941年より早くはない時に」。

## バインーツガンスク会戦

6月末に、関東軍司令部はモンゴル人民共和国の国境線に最大級の軍を集中させた。ソビエト―モンゴル軍を3倍上回っていた、兵員で、大砲で、航空機で。

ソビエト―モンゴル軍の司令官の職務に就いた後、ジューコフはモンゴルにおける戦闘機と爆撃機の機数の増大を提案した。ソビエト連邦からハルハ河へ3倍以上の歩兵師団、1戦車旅団の移動、多数の大砲、特に重砲を。これら全ての提案は労農赤軍の参謀部で裁可された。軍の移動が始まった。

7月1日、ソビエト―モンゴル軍はハルハ河の東岸の5km～6kmで防衛体制をとった。拠点の軍は少なかった。深部に軍の配置はなかった。ハルハ河の東岸には1500人の兵、7機の対戦車兵器、24台の歩兵砲、機関銃55機。防衛部隊の攻撃力は、装甲車98台、45mm砲であった。ソビエト司令部が戦闘に投入できる最も近くにある在庫は、前線から120km離れているタムツァクブラクにあった。ここに集中させていた、第11戦車隊、第7装甲車隊、第24自動車歩兵隊を。タムツァクブラクに第8装甲車隊の隊列が近づいてきていた、ハルハ河から400km離れているバインーツメニからここまで数日間をかけて。

6月の凧の時期に、日本軍はモンゴル国境に集中した。7月1日に、関東軍参謀部は作戦計画を作った、「ノモンハン事件の第2期」と呼称する。類似の5月作戦のアイデアに従って：ハルハ河東岸にいるソビエト―モンゴル軍の包囲と殲滅の目的を持って、右翼の攻撃軍の移動による進撃。しかし、今回は5月の戦闘より、課題は広がった。川の東岸に沿っての進撃の代わりに、西岸への渡河が予定された。中央渡河への出口、ソビエト―モンゴル軍の包囲と殲滅。その後、ハルハ河西岸に拠点の拡張が予定された、その後の作戦のために。ソビエト―モンゴル軍の奥にいる予備隊の殲滅のために。この課題に対応して、モンゴル国境に日本軍の集中が行われた。

ハルハ河地区への日本軍の攻撃集団に入っていた：第23歩兵師団、第64、71、72歩兵大隊と第23騎兵大隊からなる；第7歩兵師団、これは第26歩兵大隊と第28歩兵大隊の一部、第3、第4戦車大隊、ヒンガンスク騎兵師団、3つの騎兵大隊からなる、バルグツスク騎兵大隊、2つの砲兵大隊。他の騎兵隊、砲兵隊、工兵隊。日本軍は空を5つの航空隊で防御した、その中に、225機の戦闘機と爆撃機が入っていた。日本軍の全兵員数は3万8千人に達した。これらの数値から明らかである、日本軍は殆ど6倍を超え

ていた、拠点で防御に入っていたソビエトモンゴル軍より。歩兵数では7倍以上。ヒンガンスク騎兵師団を苦勞して撃退した大隊がいた南翼では、日本軍の優位差は9倍であった。

日本の司令部は完全な勝利を疑っていなかった、関東軍参謀部が作り上げた新しい侵攻作戦に。膨大な軍事力が投入され、ソビエトモンゴル軍に対する優越はあまりにも明かであった。

ハルハ河地区には、小松原中將—1927年にモスクワの武官であった—指揮の第23師団を助けるために、関東軍の航空司令官と砲兵司令官が参加していた。6月30日、小松原は命令を出した：「師団は全力でハルハ河を渡河し、敵を捕捉し、それを殲滅すること」。将軍は作戦の成功を確信していた、この命令で彼は伝えていた：自分はバインツァガンに基本兵力で侵攻し、そこに参謀部を配置する」。

日本の司令部の勝利の確信は大きかった。司令部は外国特派員、武官を招聘していた。7月3日から15日の期間、軍事作戦地域を訪問させた。日本軍の「勝利」をしっかりと見せるために。作戦を7月中に完遂するつもりであった。そして、秋の到来までにモンゴル人民共和国内での全ての軍事作戦を終了するつもりであった。

招待されたジャーナリストの中に、ブランコ・ブーケリッチ（<ジゴロ>（ラムザイグループの一人 \*））がいた。彼は、フランスのニュース通信社ガバスの特派員として働いていた。ゾルゲは彼に注意し、何もしないように警告していた。注意を引きつけないようにと。それにもかかわらず、研究者達は主張しているように、ブーケリッチはこの旅行で、日本の飛行場について重要な情報を得ていた。その設備、そこを基地としている飛行機の数と形式について。日本の砲兵隊と武装について極めて特殊な情報を。極めて重要な情報を、ブーケリッチは関東軍の情報局の同僚から得た：「この事件がソ連邦との大規模な戦争となるための何の根拠もない。日本政府は軍に命令を与えた、越境を禁止すると」。

7月2日の夕方、夏の暑さが弱まった時、日本の砲兵隊はソビエト軍の位置に向けて砲火を開いた。大砲の援護の下で、安岡中將の指揮の下で、日本軍は進撃していった。日本軍はソビエト軍をハルハ河の東岸に釘付けにしなければならなかった。攻撃軍の川への側面行進を、バインツァガンの所での渡河を保証する。その後、側面から拠点にいるソビエト軍を捕捉し、それを殲滅する。第9装甲車隊と第149歩兵隊に対して、2つの日本の歩兵隊と130台の戦車を有する2つの戦車隊が投入された。

拠点での戦いは厳しく、頑強であった。軍力はあまりにも違いがあった。我が（ソビエト側？ \*）軍は次第に川岸に後退していった。日本の司令部は約80台の戦車を戦いに投入した。それらを大砲の火力と第9装甲部隊の装甲車で迎えた。20mm砲で武装している日本の軽戦車は、速度でも武装でも、ソ連邦の大砲と装甲車には太刀打ちできなかった。この戦いで、約25台の日本の戦車が破壊され焼却された。

7月3日の夜、ソビエト軍はハルハ河に退却し、拠点の北部の維持を継続した。ハイラスチンゴールより南、第11戦車隊の歩兵機関銃大隊、ヒンガンスク師団の騎兵隊の攻撃を撃退し、川の方に後退した、東岸での拠点を維持しながら。安岡中將の日本軍は進撃し、兵員の圧倒的優位さにもかかわらず、彼らに課された課題を遂行することができなかった。ソビエト軍は包囲されなかった、川に追い込まれなかった、拠点の維持に努めた。この拠点の占有は決定的な役割を果たした、将来の8月の作戦において。

日本軍の進撃開始の知らせは直ちに、タムツァクブラクにある軍参謀部に伝えられた。軍司令部に、敵の意図を定める問題が立ち上がった、その攻撃に対する撃退の具体的手段を計画することの。7月2日、拠点での兵士の行動が示していた、敵の基本的な攻撃はソビエト軍の側面に進んでいることが。得られた情報を基礎に、予想が話された、敵は主攻撃をバインツァガン山地区の右翼に向かっていていると。そこへ、タムチャクブラクから全ての予備兵力を集結させることが決められた。第11戦車隊、第7装甲車隊、第24自動車化歩兵隊がハルヒンゴールへ移動し始めた。第6騎兵師団はバインツァガンより北の川の西岸を強固に保持することになった。

拠点で粘り強い戦いが続いている間、小松原指揮下の攻撃軍はヤミフ湖からハルヒンゴールへモンゴル領土に沿って移動した。その軍は、3個の歩兵隊と1個の騎兵隊、工兵隊、砲兵隊、対戦車隊、高射砲隊からなっていた。軍団の課題は次の通りであった。ハルヒンゴールを経由して渡河し、バインツァガン山を占領すること。そして、川の西岸に進出し、渡河地区に進出し、東岸にいるソビエト軍を孤立させること。攻撃軍の全兵力は約1万3千人、その指揮下には、100台以上の対戦車砲、連隊砲、師団砲があった。

7月3日、夜2時、小松原の攻撃軍の先頭部隊はハルヒンゴールに近づいた。最初、日本軍はボート、筏で渡河した、泳いでさえ。その後、工兵が船橋を施設した。それを渡って、川の西岸に歩兵の大軍と戦闘用具が殺到した。朝8時、渡河は終了し、日本軍は、激しい戦闘の後、第6騎兵師団の少人数の第15騎兵中隊を駆逐し、バインツァガンの頂上に進軍した。急斜面に沿って、彼らは手で山に対戦車砲と師団砲を引き上げ、砲の発射位置を準備した。工兵達は掩蔽壕を施設し、歩兵達は蝟壺を掘った。やれることを全てやった。この有力な高地を確りと確保するために。

7月3日の夜明け、アホニン大佐一元モンゴル軍の顧問は第6騎兵師団の位置に向かった。ハルヒン・ゴールの西岸に沿った部隊の防御を調べるために。バインツァガンの所に、渡河してきた日本軍を見つけた。軍力の優位差を利用して、日本軍は師団の支隊を攻撃し、支隊を高地から北へ追い払った。状況を判断し、アホニンは直ぐにハマルダバ山の指揮所に向かった。そこで、状況について説明をした。

日本軍の渡河とバインツァガン山の占領の知らせは、直ぐにタムツァクブラクの軍団参謀部に伝えられた。軍団司令部の無線は空中を飛んだ：戦車旅団と装甲車旅団によって、山を占領した日本軍を攻撃すること、立ち止まらずに。

7月3日11時、第11戦車旅団の大隊がバインツァガンへ接近した。長い行軍の後準備もなく立ち止まらずに直ちに日本軍陣地を攻撃した。歩兵が到達し、共同して攻撃するための待っている時間はなかった。軍団の指揮官は全責任を負ってかような勇気ある決定をとった。戦後の1950年に、コンスタンチン・シモノフとの会談で、ジューコフが7月3日の出来事を思い出して語っていた：「・・・ヤコブレフの戦車旅団で立ち止まることなく日本軍を攻撃する決定をした。わかっていた、歩兵の支援無しでは、戦車旅団が大きな損害を受けることを。が、我々は敢えてそれをした」。

バインツァガンの所では勝利となった、小林の攻撃軍は殲滅された。しかし、これはソビエトとモンゴルの部隊には高くついた。第11戦車旅団は兵員の半分を失った。その188台の戦車の内、82台を失った。ソビエトモンゴル軍の装甲部隊の損失は少なく



なかった。バインーツァガンでの7月中におけるソビエトの損失は戦車175台、装甲車143台となった。

バインーツァガンでの敗北の知らせに対する東京の反応は極めて荒れていた。日本政府は意見を固めた、ドイツとイタリアとの同盟無しには、ソ連邦との戦争での勝利はおぼつかないと。影響力のある東京の新聞「報知」が7月28日に伝えた：「ソビエト—モンゴル国境における中国での事件は、命令調でドイツとイタリアとの条約の締結の必要性を示唆している。なんとなれば、同盟無しには日本は勝利する状態にはない」。

## ハルヒンゴールの壊滅

ゾルゲの大使館の大使と高位職員との関係は特別な、もし「不明瞭」といわないならば、性質を持っていた。ゾルゲは疑いなく、ドイツ大使館にとって、例外的に価値のある情報源であった。オットーはよく知っていた、ゾルゲは近衛の顧問に特別な関係を持っており、彼がソビエトのことを良く研究していたことを。

ゾルゲは後になって書いていた：「私は確信していた、私が彼らを少なくとも引きつけていることを。それ故、大使館で何らかの職務に就くことを希望してはいなかった。というのは、私には明瞭な知識と慎重な判断があった、政治的、経済的、軍事的問題に関して。私は歴史や哲学に十分に精通してもいた。大使館に近い人々の中の唯一のドイツ人でもあった、学術書に大いに興味を持っていた、ドイツの大使館にしばしば出入りしていた。通常、私はそれを借り出し、家に持ち帰った、読破するために」。

もちろん、これは大使館の大使や同僚達に印象を起さずには行かなかった。

ゾルゲは断言した、大使館の高位職員達は彼の視点に何時も興味を持ったと。「例えば、彼らは私に話した、彼らにはこのようなあのような情報があるとか、私はあれについて考えているとか」。時折、大使自身がゾルゲに電報の下書きを見せ、その意見を聞いた、どこか変更する箇所があるかどうかと。「このようにして、私は多くの重要な電報と公文書の内容を知ることとなった。時折、私の視点は議論を呼び起こした。その過程で、私は補足的な情報を手に入れた」。

ハルヒン—ゴールでの軍事行動の規模の拡大に伴って、ラムザイグループは自分の仕事を活発化させた。南満州鉄道で送られる軍団の記録を作成した。宮城は情報を手に入れた、新型武器と武装について、日本の陸軍と空軍で使用のために送られる。同じく住民の様々な階層における雰囲気についても伝えた。特に、1939年7月、彼はゾルゲに伝えた、「日本人は、ノモンハン地区における軍事的成功という軍情報部の宣伝を信じてはいない、極めて悲観的な雰囲気である」。

モスクワの中央部は、軍と装備の日本の輸送についての情報に興味を抱いていた。これに関して、ゾルゲには相対的に好都合な情報があった：日本の軍事省が前線から「鈴木」師団を呼び返した、朝鮮総督を、2つの朝鮮軍団を。山名政実（ゾルゲグループの一員

＊)は北海道から通常以外に軍事郵送がなくなったことについて伝えた。宮城は満州における日本軍基地での状況を説明した、基地にある戦車と飛行機の数を数えて。

水野繁(ゾルゲグループの一員 ＊)は地元の京都から伝えた、そこに布陣している陸軍師団が7月～8月にモンゴル国境ではなく、中央中国のアニホイ県に派遣されたと。

ドイツの駐在武官である松木大佐はゾルゲとの雑談で断言した。彼の情報によれば、帝国参謀本部はハルヒンゴールでの戦闘を利用することを禁止した、ソ連邦に対する進撃の更なる拡大のために。

他面から、諜報機関ラムザイは多くの情報を得ていた。日本の指導部は新しい進撃を準備したとの、日本軍は紛争地域で経験を積み重ね続けているとの。ここにおいて、進撃開始の具体的な期限が設定された、8月24日と。コロリコフが指摘した、これらの情報を宮城が手に入れたと。今回は、包囲攻撃はソビエトモンゴル軍の右翼で実行することが計画された。それを迂回し、ハイラスチンゴールの小沼の多い岸に追い詰め、完全に殲滅する予定であった。

コロリコフが書いていた、「マックス・クラウゼンは働きづめであった、彼は殆ど毎日、電波通信をしていた・・・健康は低下し始め、心臓は弱った、クラウゼンの目の下に病の兆候が現れた」。

ゾルゲを周期的に襲い始めた、鬱と無気力の発作が。

労農赤軍第5局局長へ

オストロバ、1939年6月4日

「・・・・・・・・」

私には印象があった、この場所での私の仕事の良い時期は既に過ぎ去ったか、或いは、少なくとも、長い間に。新しい目標或いは完全な再構築が定まらない間、何も得ることはない。新しい力を持った新しい企図が、私は最も信頼できるものと見なしている。我々は次第に監視している施設と重要人物との関係において、利用され、不必要になって来ている。

フリッツ(? ＊)は仕事ではついていく。連絡と彼の合法化は素晴らしい。しかし、ここで私は繰り返す、私の古い要請をもう一度：新しい人を派遣して。最低でも助手として。その後、替わって仕事ができること。私が実質的に仕事をフリッツに渡すということではない。我々は何年も前に助力を得るべきであった。援助は交代で発展し、新しい助手を引きつけたであろう。忘れないで、私は既にここに6年間住んでいる。極東に9年間、ごく短期間の帰国で。大変不幸な出来事、1年前、私は克服した、それにもかかわらず、海外での9年はそれ以上のものを感じさせる。

カーチャによろしく伝えてくれ。私は非常に残念だ、これほど長く彼女を自分の帰国で元気づけることを。しかし、これに対する責任は、局長殿、貴方自身が負っている。

我々は貴方の古くて信頼でき従順な同僚である。皆さんによろしく。

ラムザイ

第5局の書類。

師団長ブロスクロフが命令した：

ラムザイの意見をどのように補償するか、根本的に考慮する。

ラムザイへ電報と手紙を出す、交代と原因の説明の遅れに対する詫びのある。彼には未だ東京で働いてもらう必要がある。

ラムザイとその組織の他の同僚達に同時に金銭を与える。

ハルヒンゴールでの国境紛争は急速に局地戦争に拡大した。7万5千人の日本軍は、5万7千人のモンゴル・ソビエト軍と対峙した。両軍から、時間と共に、100台以上の砲と迫撃砲、1000台以上の戦車と装甲車、約900機の飛行機が参加した。

ハルヒンゴールでの決定的な会戦の始まりまでの少し前に、日本の第6軍司令官荻洲立兵は、前線の視察に東京のドイツ大使館の代表団を招待した。その団の中に、出版の代表としてゾルゲが入っていた。この国境地区を、ゾルゲは既に1936年に訪れていた、ドイツの研究調査団の一員として。詳細に研究した。

侵攻作戦の詳細な計画の作成において、ソビエト軍司令部は十分に注意を振り向けた、その意図と、準備段階を極秘とするために。作戦計画の全容は数人だけが知っていた：ジューコフ、ニキシェフ、ボグダノフ、シテルンと軍団の参謀部の作戦課長。計画の書類は幾つかの冊子に印刷された。大砲指揮官、航空指揮官、工兵指揮官は計画の担当分野だけを知っていた、自分に関係しているところの。準備が次第に進むに従って、作戦は師団の指揮官、連隊の指揮官、部隊の指揮官に知れ渡った。兵達には、進撃作戦開始まで3時間と告げた。

作戦準備における重要な価値を、注意深く熟慮されたシステムが持っていた、敵のデマの。知られていた、日本の司令部が電波傍受に従事し、ソビエトの発信所の電波を傍受し、解読を試みていたことは。北翼と南翼に集結していたソビエト部隊は、原則的に無線の使用が禁止されていた。その時点で、中央部隊の無線は、タムチャックブラクとウランバートルと盛んに交信していた。無線は単純に暗号化されていた、敵に知られていた。が、それらの無線では防御設備構築のための材料、冬用軍装品の受領について語られていた。冊子「防御における兵士の心得」が造られ、発行された。諜報員は心配した、その見本が日本軍の手に入ることを。敵に盗聴されているモスクワへの直通電話で、構築中の防御設備、工作用資材の要求に関する嘘の報告をした。ソビエト軍は防御の準備だけをしているという印象を敵に思わせるために、あらゆることをやった。ソビエトの戦車隊の集結をカムフラージュするために予定した手段は結構重要であった。ハルヒンゴールの上空での不断の飛行機の飛行に、敵を慣れさせる必要があった。少数の戦車のマフラーを外すことを決めた、毎日、前線に沿って、全速力でそれらを走らせる。日本軍は最初は不安になった。が、その後それに慣れた。ロシア側の軍律が悪いと決めつけた。前線に沿って、戦闘機と爆撃機部隊を系統的に飛行させた。日本軍は次第にそれに慣れ、それを通常の現象と見なした。敵をデマで惑わすために、強力な雑音発生器はすばらしい役目を果たした、杭打ち工事や他の土木工事をまねた。100人の工兵は素晴らしい仕事をした、ソビエト軍によって行われている大規模な防御工事の印象を作り上げるために。

8月18日から19日にかけての夜、工兵によって設けられた渡河点で、東岸へのソビエトの歩兵隊と戦車隊の進軍が始まった。戦車は小さいグループで渡河した、エンジンの騒音に慣れた日本軍の見張りを驚かせないようにするために。渡河した部隊は直ぐに、以前に準備した隠れ場所を利用した。ハルヒンゴールの西岸と東岸にいた砲兵隊は、予定目標に既に試射していた。飛行場では爆撃隊に燃料を給油し、爆弾を取り付け、航空士は飛行ルートを確認していた。通信士は補充の電話線を敷いていた、ハマルーダバ山上の第

1 軍団の司令部の連絡を確実にするために、東岸に配置された部隊との。

8月19日から20日にかけての夜、東岸への部隊の渡河が続いた。8月20日の明け方に、作戦の準備が終了した。作戦の開始まで3時間前に、進撃命令が読み上げられた。

8月20日早朝、ソビエトモンゴル軍は進撃を開始した。8月23日には、日本軍は包囲され、崩壊し始めた。8月31日、ソビエトモンゴル軍は、マンチジョウゴの国境線に達した。各箇所で、敵は9月12日まで敗北に対する雪辱を試みた。空での戦いは9月15日まで続いた。9月16日、軍事行動は停止し、交渉が始まった。

ハルヒンゴールでの日本軍の損失は、兵士と将校は約6万1千人、その内の約2万5千人が戦死。ソビエト軍は23926人を失った、その内戦死は約9千人。

研究者達の圧倒的多数は見なしている、ゾルゲグループはハルヒンゴールでのソビエトの作戦の成功に価値の付けられない貢献をもたらしたと。モデルは、ソビエトの極東地域へのその後の攻撃を持った、日本のモンゴル人民共和国への侵攻計画と期間についてのラムザイの情報を「戦略的に第2番目の、特に重要な報告」と呼んだ。

ドイツの外国諜報局も満州に自分たちの視察者を送っていた、イバル・リッスネル博士を。彼は自分の回想記に書いていた：「その時、満州で奇妙なことが起こった・・・衝突を予防する目的を指向していた東京は、遠方のモンゴル地区にある拠点から撤退する命令を出した。そこで戦いが行われていた、2つの朝鮮の大隊と有名な鈴木師団が、しかし、何か不可解なことから、この命令をソビエトが知ることになった、その実行の開始の大分前に。ソビエトは日本の関東軍に教訓を与える珍しい可能性に気づいた・・・ノモンハンでの事件は4ヶ月にわたり、日本軍の壊滅的敗北に終わった。将校や兵達は天皇に辞世の句を書いた。踏みつけられたモンゴルの草原の中で切腹をした。磯谷将軍、関東軍参謀部指揮官、は激怒した、彼の軍にかような汚点が降りかかったことに、・・・彼の軍人としての頭に、計画が生まれ始めた、彼の軍の拠点を維持し、戦いを継続することの、チタへの一撃を加えることにより、ロシアに復讐をしながら」。

しかし、ゾルゲの功績は、彼がモンゴル人民共和国への日本の計画について警告をしただけではない。タイミング良く得られた情報で、彼はそれをモスクワに伝えた。日本の内閣は大規模な戦争までハルヒンゴールでの紛争を拡大する計画がないと。この際、ドイツ大使館からの情報以外に、尾崎と宮城からも、ラムザイは紛争地区へ日本から優秀部隊の派遣に注意を集中していた。ラムザイは明らかにした、ハルヒンゴールに戦車部隊、重砲、他の大きな部隊は派遣されなかったことを。ことは、満州と中国北部の日本軍の兵団の集結であった。すなわち、この事実をゾルゲは中央に伝えた、ハルヒン・ゴールにおける事件の局所的性質を示すものとして。

デキンとストリが断言しているように、オットーとの話し合いでゾルゲはノモンハンでの壊滅の非常に詳細な分析をした：「予想された赤軍の弱さについてのルシコフと他の人の断言は今や嘘であった、と私は指摘した。もし、日本軍が赤軍をその拠点から駆逐しなかったならば、400台から500台の戦車が必要であった。これは日本の軍事産業の能力をうわまっていた。ドイツはより深くノモンハン事件を研究する必要がある、古い思想を拒否することも、赤軍は頑強な抵抗を示す状態にはないかのような」。その後で、ゾルゲは注記していた：「しかし、私は思う、ドイツはルシコフのアイデアに同意した、私のものより」。

それにもかかわらず、ノモンハン事件の間、ゾルゲの情報に、中央側には不信の証拠があった。デキンとストリの主張に従えば、1939年9月1日、モスクワからゾルゲは次のような通知を得た：「現行の戦争及び政治問題は、夏の間、次第に悪化していった。この期間に、日本はソ連邦への侵攻の準備に重要な歩みをなした。が、我々は君からそのような顕著な何の情報も得ていない。ドイツ大使館はこのテーマに関して素晴らしい情報を出しているのだから、彼らの所から情報を仕入れ、我々に無線で知らせること、延期することなく。君は仕事に良くなれており、大使館における君の立場は異常なほど高いので、我々はお願ひし、待っている、広範で十分に生の情報を、軍事と政治問題に関して、君からの。しかし、君は我々に情報を送るという立場にそのまま留まること。特別に価値のある情報でなくても。

私の親愛なるラムザイ、私は再び、君にお願いをする、情報を集める君の方法を変更することを・・・君の日本の滞在は我々の仕事に何らかの価値を持つであろう。良好な質の情報を集めるために、ジョウ、ミキ、オットーの可能性を利用する必要があった。彼らが自分の仕事を遂行するか否かに関係なく、彼らに報いてください。君は我々の仕事の重要性を考慮する必要があります・・・我々は確信しています、君は永久に自分のロシアに献身することを。我々は感じている、我々は良い仕事ができる。受領を確認してください」。

ちょうどその日に、他の知らせが送り届けられた：

「2ヶ月前に、私は示した、我々の最も直接で重要な問題となったのは、何人かの日本軍の将校の奉仕を利用することであった。が、現在まで、返答を得ていない・・・私はこの仕事を見なしている、問題の解決のために切実に重要であると。監視と計画を送信して欲しい。君はこれに成功すると、信じている」。

「編集長」の署名のある2つの知らせは示していた。それらは諜報局の局長から個人的に出たものであることを。デキンとストリが書いている、「彼の使命についてのこれらの考えに対して、ゾルゲの返事の痕跡は何もない。彼は既に自分の長に警告をしていた、日本において十分に価値のある活動グループの組織化は時間を要すると。その通り、彼は5年を要求していた、試験と実験に。無線士クラウゼンの助けを借りて無線通信を確立させるために。しかし、今、ゾルゲは準備ができており、そのようなせきたてを必要としていなかった」。

そのような「急き立て」は、第2次世界戦争の開始と関係していた可能性がある。1939年9月10日付けのラムザイの電報が、この「追い立て」の間接的な証拠となろう。それで、彼は日本軍の大増援部隊の移動について知らせた、特に、朝鮮から、満州とモンゴルの国境線への。「オットー」の情報を引用して、ゾルゲは伝えた、帝国軍はハルビンーゴールでの敗北を利用した、畑の代わりに、磯谷或いは多田の指名をダメにするために、軍事大臣のポストへの。

日本の右翼層は、日露不可侵条約の締結の運動を大いに拡大させた。しかし、ラムザイの意見によれば、これは、復讐を渴望している関東軍側からの軍事的脅かしを排除しなかった。特にこれは次に関係していた、ヨーロッパでの戦争の開始は日本に強い印象を起したことに、それは現在全く信用されていない、イギリスの実力と戦争の終了とで。

ゾルゲのこの報告書に決済が存在している：「1. ラムザイに通告が影響した。2. 特

別な報告のために練り上げること。プロスクロフ。 9月15日」。

ありえる、これは「通告」であった。それについてデキンとストリが書いている、が、ありえる、他の、その時期に日本の準備についての証拠が要求されていた、ハルヒンゴールでの軍事行動を継続する、始まったヨーロッパの戦争を念頭に置いて。もしそうならば、ラムザイの「報告」を受けとった時期について明かである、日本の指導部は紛争継続の将来性がないことを認識した。1939年9月9日、モスクワの日本大使東郷茂徳は外務人民委員会を訪れ、日本政府の名の下で、休戦条約を締結することを提案した。国境分界に関する委員会の創設、ソ連邦と満州国との間の将来の紛争を処理する委員会の組織化、ハルヒンゴール地域を非武装地帯にすることも。

ともかくも、その時期に、諜報局の指導部は自分たちの東京の諜報機関の仕事に一定の不満を述べていたことは、明かである。

## スターリンはヒトラーと接近する

書類が証明している通り、日本の指導部はハルヒンゴールでの紛争の間、ドイツとの軍事同盟の締結、そしてドイツをソ連邦との戦争に引きずり込むことの希望を捨てなかった。東京にいるソ連邦の武官のスパイ情報によれば、様々な情報源から得られた、1939年5月30日に、日本政府における相容れない不一致の根本的原因となっていたのは、ドイツとの軍事同盟の問題であった：参謀本部は遅れることなくドイツの条件（ソ連邦に対抗させるだけではなくイギリスとアメリカにも対抗させる）で同盟の締結を要求していた。海軍と経済界は反論した。このさい中国南部から日本軍の撤退と中国北部での固定を要求して。当時、ドイツは同盟の締結に同意していなかった、ソ連邦にだけ対抗するような。何の条件もない条約の調印を要求していた。矛盾点は平沼を甘受させることはできなかった。結局、日本政府は軍事同盟を締結しないで、反コミンテルン条約を強化することを決定した。

しかし、ノモンハンの紛争が過熱するにつれて、日本の海軍グループに、好戦的な雰囲気が増大していった。日本におけるソ連邦の海軍武官が1939年7月25日伝えた通り、「関東軍派」の圧力のもとで、大湊の司令部（日本の主要海軍基地、ここに海軍の参謀部が配置されていた）は、6月26日と7月20日に、脅しを持ってソ連邦に発言をした、「ソビエト政権の不法な圧力に対して、断固たる手段を講ずる」と声明ながら。これは最も深刻な結果をもたらした：日本の将軍達は参謀本部との不一致を忘れ、何の条件もなくドイツとの軍事同盟の調印を行うことができた。海軍武官コバレフが伝えた、「この観点から、ウラジオストク、サハリン、カムチャッカの防衛部隊は強化されなければならない」。

1939年9月に先行する月に、諜報機関ラムザイの第一の課題は、日独交渉の動きであった、政治的かつ軍事的同盟の方向に向かっている。交渉はドイツ側の提案に沿って始まった。しかし、進行は遅かった、非常な困難を伴って。日本は中国以外の他の国との戦争の準備はしていなかった。この交渉において、ドイツの提案は、極東においてイギリスとの戦争に日本を引き込む目的を追求していた。

ソビエトの指導部にとって、軍事同盟締結についてのドイツと日本の交渉についての情報は、極めて重要な意味を持っていた：当時、ソビエト連邦はドイツと秘密交渉を行っていた。これ故、日本とドイツの交渉を知ることは重要であった。交渉は反コミンテルン条約を発展させるものであるとして。

1939年1月から始めていた。ドイツの外交筋から、自分のエージェントであるボリフランクを通じて。諜報局は情報を得ることを始めていた、第3帝国の指導部の東方政治の再検討についての。

様々なドイツの公人（ポーランドにいるドイツの武官ヒメル、ポーランドとルーマニアにいる空軍武官ゲルシテンブルグ、ゲーリングに近い人物、ドイツ外務省の東方局局長クレイツ博士、その他）との話し合いで、1939年1月～6月に、段々と以下のような様相が明らかとなった。

ミュンヘン協定の後、ヒトラーはモスクワとの争いを加速させるつもりであった、ポーランドに圧力を加えたソ連邦に対抗する同盟国のふりをして保証する目的を持って。当時、ヒトラーは例外的にリップントロップとローゼンベルグの影響下にあった、ソ連邦との戦争を主張している、ウクライナ問題のやり方を利用して。\*\*\*\*\*、政治的及び軍事的判断から、彼らはドイツとソ連邦の間の軍事衝突のありそうな結果を評価した、殆ど耳を貸さずに。

東ヨーロッパにおける戦争において、政治的状況と可能性の評価についての決定的転換は1938年のクリスマス前後にやって来た。偶然ではなかった。ベルリンでは印象が形成された、地中海に関してのムッソリーニの計画（コルシア島の占領）に真剣に向かわなければならないような。その結果、西の強国との紛争が起こりそうとなった。

東部を確定しよう（1939年3月－4月での、チェコスロバキアとリトアニアの残りの部分の占領、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビアへの圧力）とするこれらの方法に関して、第3帝国の指導部の意見によれば、西側での衝突のために確りした後方線を構築した。5月に、ヒトラーはフランスに対するドイツとイタリアの植民地宣伝を始めることを計画した。ベルリンでは、フランスを倒すことを期待した、平和的手段でこれを段階的に実現して。そして、ヨーロッパにドイツの支配状況を獲得する。

極秘

労農赤軍諜報局の特別連絡

第143463

1939年3月23日付け

東ヨーロッパにおける出来事について

報告する：

全般状況。

ワルシャワのドイツ外交官筋から出た情報に注目すると、ドイツには次のような手段が見受けられる：

1. イギリスの反応はドイツにとって予想以上に極めて弱いものと評価される。というのは、ドイツは東ヨーロッパに自分の行動の拡大を決定した、クライペリの併合とルーマニアへの攻撃を持って。

2. ワルシャワのドイツの空軍武官ゲルシテンブルグが、ゲーリングの命令に従って、3月24日に、ブカレストに出発する、重大な最後通告を持ってルーマニアへ。カロリへの圧迫は降伏まで行うつもりである。

3. チェコスロバキアとルーマニアでの成功の容易さに鑑みて、作戦の順番を変更する、西での圧迫の代わりに、ポーランド人の反抗を根絶すると。

「・・・」

ソ連邦、フランス、アメリカの間のあり得る合意の場合に、ポーランドはドイツ側に残らざるを得ない、何らかの領土の合併が約束されているので。

「・・・」

労農赤軍諜報局局长

師団長 オルロフ

ドイツに対抗する西の強国の行動は、ヒトラーを刺激した。ヒトラーが予期している以上の強烈な方法を彼らは採用した。まず第一に、これはアメリカの活動に関わるものであった。警告した、ドイツとの戦争の場合には、世界的連合が立ち上がると。それは（ドイツ？）軍事的にも経済的関係においても、それ（連合？）に対抗することができない。

ボリフランクとゲルシテンブルグの会談は極めて内容のあるものであった。4月21日、表明した、「総統は夜の談話会で、このところ、モスクワとの条約についてしばしば言及している。これは我々にとって出口となろう。ベルリンの影響力のあるグループは確信している、ソビエト連邦との和平は可能であると。段々と明らかになっている、我々はソビエト連邦を必要として、軍事的に、東方における経済的支えとしても、もし我々が西との勘定を清算したいのならば。多分、モスクワは我々を平和の鳩として待っている。

反コミンテルン条約は我々にとっては問題ではない。日本は中国で無力さを示した、日本は中国から大目玉を食らった、日本人には目も耳もない。同盟国のために、ドイツは販売の中国市場を犠牲にした。

我々の政治において、この展望の視点を持って変更をしなければならない。ソビエト連邦との合意は決定事項である」。

5月に、ゲルシテンブルグはより明瞭に話した：「ソビエト連邦は征服されなければならない。しかし、今日、ソビエト連邦はもらってはならない、かじられた骨を掴まえながら。今日、ソ連邦は甘い汁を要求している—確りとして、力強い協力を、これらを彼らは要求している。ゲーリング将軍がいる空軍省で我々は考えている、3つの補償対象を持っていると、それらを我々はソ連に提示できるし、しなければならない：

1. ポーランドの一部、とても素晴らしい一部。この政府はそれがなくては存在できない、そこから必要性が生ずる、我々がソ連邦と新しい国境に関して一致するために。この際、我々はコセコセしてはならない。

2. ペルシャの港湾。これらの港はアジアにおけるソビエトの立場を極めて良くしてくれる。特に、モスクワの立場を、イギリスと日本との関係において。我々はこれらの港を所有するよう彼らに援助をしなければならない。

3. 我々は日本を裏切らなければならない。これは辛い、正しい。我々は我々の東アジアの政治を終了しなければならない。それは基本的に、我々に怒りだけをもたらした、ロシア人と一緒になり、日本に対抗している中国を守らなければならない。これにより、我々は極東におけるロシアの立場を決定的に除ける」。

ゲルシテンブルグは付言した：「未だ行きすぎてはいない。何もわかっていないあまり



にも多くの者達が問題に手を突っ込んでいる。しかし、出来事は私の指摘した方向に向かって進んでいる。現在、基本的に、全てはロシア人次第である。もしロシア人が時を手にすれば、彼らは我々と一緒に大きな仕事を成し遂げられる」。

配布：

- 1部 1番—スターリンに
- 1部 2番—モロトフに
- 1部 3番—ボロシロフに
- 1部 4番—ベリアへ
- 1部 5番—メフリスへ
- 1部 6番—シャポシニコフへ
- 1部 7番—事務へ

1939年7月5日

資料の翻訳文を送付する。ポーランドに関して、ドイツの侵略の更なる計画を特徴付けている。リップントロップの官房の東方局主任クレイストが語った、我々の情報源との会談で、この年の6月17日と19日に。

資料は若干の箇所、クレイストの以前の発言を発展し、補足している。ソ連邦に対するドイツの政治に関して、差し迫っているドイツとポーランドの紛争における最近の立場について（クレイストの会議のメモは39年5月17日付けの第472376で提供された）。

ドイツのポーランドへの侵攻は、クレイストの資料からすると、8月から9月が目論まれている。同時に、彼のそのすぐ前の報告からすると、7月に起こるかもしれない。

ソ連邦との接近の傾向は「ベルマンの手紙の抜粋」に現れている。同じく「ベイツセッケル大臣のメモ」に、「ゲルシテンブルグの会談」に、39年7月3日付けの第472519で「軍事政治問題に関する諜報資料の翻訳集」として提供した。しかし、それらを見なすこと、具体的な確証はないとして。我々が利用している情報源からのものである。

付録：頁6枚

ソ連邦防衛人民委員会次長  
労農赤軍第5局指揮官  
ソ連邦英雄  
師団長（プロスクロフ）

ソ連邦と接近したいというドイツの意向の真剣さは、1939年6月17日—19日のボリフラングとクレイスト（ドイツの高官 \*）との会談に現れていた。クレイストが語った：「総統は許していない、条約に関するイギリス—フランス—ロシアの交渉の結果が彼の意志に影響を与えることを、ポーランド問題の根本的解決の仕事において。ドイツ—ポーランド紛争はベルリンによって許されるであろう、成功するという条件の下で。その時は、条約に関する交渉は不成功の結果となろう。とは言っても、総統もリップントロップも信じてはいない、ソビエト連邦がドイツに対抗するアメリカとフランスの軍事行動に参加することを。この意見は帝国の指導部の所で形成された、イギリス—フランス—ロシアの交渉過程でだけではなく、なりよりもまず、ベルリンに関してモスクワの最近の行

為によって。モスクワは我々に理解を与えた、モスクワは我々と交渉をしたがっていることを、モスクワはドイツとの紛争に全く興味がないことを、モスクワはイギリスとフランスと争うことに興味がないことを。

ソビエト連邦の招待に応じて、外務省から秘密の助言者シヌレがモスクワに派遣された、ドイツ大使館の館員として、ソビエト連邦との経済についての交渉を開始するために。リップントロップは私に課題を与えた、ソビエト連邦と非公式の接触を図るという。明かである、我々がドイツ軍の若干の将校を利用するのは、ポリシェビキに非常に受けが良い、そして、何人かは優れた経営者、彼らはソ独通商に於ける以前の参加を基礎にして、モスクワで知られ、かつ尊敬されてもいる彼らを通して、ソビエト人と親密になり、ベルリンとモスクワの間に確りとした交流を打ち立てる。はたして、ドイツの大企業家ボリフは、ドイツーロシアの経済問題に関してミコヤン（ソビエトの高官 \*）に興味をかき立てていないのか、それから、もちろん、我々にとって政治的可能性が生まれないのか？ その際、現在の状況で、我々はそのような人物を手に入れていない、トハチェフスキイのような、彼とはあつという間に連絡を取ることができる。我々は今ソビエト連邦の中立を殆ど信用している、とにかく、ドイツがポーランドとの紛争に踏み込んだ時。我々の意見によれば、ソビエト連邦は紛争があった場合には、離れた立場に残る、もしソビエト連邦が何らかの書類の条約に署名しているならば。総統とリップントロップは現状では不可能であると見なしている、ドイツとポーランドの間の紛争時、反ドイツの立場で活発に動くことは。この一週間に、総統は注意深くソビエト連邦を調べ、リップントロップに話した、ポーランド問題解決において、ドイツーロシアの関係に、新しい”ラッパロ段階”がやって来るに違いない、ドイツーポーランド協定を手本にして、ある程度の時間内に、モスクワと接近と経済協力の政治を行わなければならないであろう。ドイツとロシアの間の平和愛好関係は、この2年は、総統の意見によれば、西ヨーロッパにおける問題解決の前提となる」。スターリンは当時におけるドイツとの接近の有益さを全て理解していた、特に、チェンバレンとダラデエの露骨な不本意を背景に、彼と関係を持つことの。どう見ても、この方向でのドイツ代表との接触は1939年5月初めに実現した、5月3日。外務省の人民委員の地位からリトビノフが更迭され、その地位にモロトフが就いた、ヒトラーとの秘密の接触計画においてスターリンの命令をきちんと遂行する準備を持って。

当時、書記長を非常に不安にさせていた、軍事同盟についてのドイツと日本の交渉に関する情報は。もし2国がソ連邦に対抗しているならば、スターリンはドイツとの秘密交渉を直ぐにでも中断した。そういうわけで、その時期にラムザイの情報が戦略的に重要な価値を持っていた。すなわち、このために、プロスクロフはゾルゲに頼んだ、仕事の継続の交代についてのゾルゲの要請に対する返答で。彼の上司に再考するように命令した、これをどのように埋め合わせるのか、彼とグループの同志達に臨時の金銭を出すことも。

諜報機関ラムザイは全く申し分ない状態にあった。1939年4月初めに、ゾルゲはドイツ大使館の友人から知ることとなった、「ドイツの提案による独日同盟締結の交渉は中断された、同盟の締結に反対する武力外交と関係して、平沼内閣、海軍、財務グループとの」。

同時に、日独交渉の過程で、ゾルゲは説明をした、提案した同盟の反イギリス的傾向についてドイツ側からの頑固な要求を何が擁護しているのかを。ドイツはこの時にソ連邦と

の秘密交渉を開始していた。後になってゾルゲが書いていた、「オットーが私にそれとなく言った、この交渉は中立についての条約の締結に限定されない。可能性がある、独ソ軍事条約の締結に至ることもあり得る。この際、困難な状況にある平沼内閣は、様々な口実で交渉を引き延ばした。そして、ドイツの不信を引き起こした。その時に、日本にシタメルがやって来た、リップントロップの特別使者として。何度かの外務大臣有田との会談後、彼は交渉開始のための支持を取り付けることに成功した、実質において、彼の使命は不成功であった」。

数ヶ月間、しばしばゾルゲはオットーから日独交渉について話を聞いた。それをモスクワに報告した、何らかの情報を得る度に。

ゾルゲは後になって追想していた：「私の報告を利用してソビエト連邦は結論に達した、日独交渉は反イギリスの方向を向いていると。この結果として、ソ連邦はドイツとの条約を結んだ。私は思っている、日本とドイツの交渉過程はモスクワに私によって電波で送られた、この際、私はオットーとシタメルから得た情報を利用したことは、話すまでもない」。

ゾルゲは主張している、「すなわち、日独交渉の失敗故に、独ソの不可侵条約が締結された」。

## モトフーリップントロップ協定、或いは「何も起こらなかった」

1939年8月7日、ボリフランクはゲルステンベルグと定例の会談を行った。ボリフランクがゲルステンベルグから得た情報は非常に重要な価値を持っていた。直ぐにモスクワに伝えた。ゲルステンベルグの言葉によれば、8月5日、6日にモスクワにいた。そこで彼は知った、ポーランドとの戦争が決まったことを。ヒトラーは信じていた、紛争の場合、イギリスは中立に残ると。ヒトラーは知っている、モスクワでイギリス—フランス—ソビエトの交渉が進んでいることを。しかし、見なしている、参加者の一致を得るためには多くの時間を要することを。これ故、ドイツは第一撃を行う必要があると。ゲルステンベルグが声明した、「ポーランドに対するドイツ軍の展開と必要な物資の集中は8月15日から20日の間に終了する。8月25日以降に、ポーランドに対する軍事行動を開始するであろう」。

この頃、スターリンは知ることとなった、日本の内閣はドイツとの軍事条約締結に関して合意に至ることが相変わらずできていないことを。

モスクワ、労農赤軍第5局局长へ

東京、1939年8月15日

6月、日本の内閣はドイツとイタリアとの軍事同盟締結について、軍部の提案を拒否した、民主国家に対抗するように向けられた。反コミンテルン条約の強化について決定をした、すなわち、ソ連邦に対抗する同盟を。イギリスとの妥協を希望している軍部は、一時的に同意せざるを得なかった。

アメリカとの条約の破棄、イギリスとの交渉の遅延、日本軍だけではソ連邦を負かせないという危惧の結果、軍部

は軍事同盟についての7月の決定の再考を要求した。

8月8日、この問題は5人の閣僚の5時間にわたる会議で審議された。ここで、大きな不一致が判明し、決定は採用されないこととなった。審議の継続は8月18日に予定された。

宮廷と財政グループはソ連邦だけに対する、が、全ての民主主義国家に対するものではない、それをドイツとイタリアが要求している、同盟の締結を支持している。

海軍グループの大半は、財政グループを支持している。国内軍は無条件の同盟を要求している。

#### ミシン

ハルヒン・ゴール地区から、ジューコフが報告した、決定的な進撃へ移行する準備が全て完了したと。最も都合の良い瞬間がやって来た。一撃によって、「優雅に」演ずる手口の組み合わせを遂行し、ナチスの「ハンマー」と日本の「金敷」から逃れるために、西側の指導者達がスターリンを酷く苦しめる時。

1939年8月23日、ハルヒン・ゴールでの戦闘の最盛期、ソビエト・モンゴルの進撃の勝利が明らかになった時、モスクワで、ソ独不可侵条約の署名が行われた。ドイツ側からの支持の期待を日本側から奪った。全ては、ゲルシテンブルグが予言した通りになった。

この条約の調印は日本の軍事・政治グループに大きな衝撃を起こした。

東京のイギリス大使クレイギがロンドンへの自分の報告書に書いた、ソ独の不可侵条約の署名は、「日本にとって大衝撃であった」と。

8月24日、日本にいるソ連邦臨時代理大使ゲネラロフが伝えてきた：「ソ連邦とドイツの間の不可侵条約の締結のニュースは、ここでは衝撃をもたらした、特に軍部とファシストグループに歴然たる当惑をもたらした・・・新聞は載せ始めた、日本とソ連邦のそのような条約の締結の可能性の検討を、慎重に。多くの顕著な活動家の発言では、認めている、日本の外交の根本的な再構築の不可避性を」。

日本にいるソビエトの武官クリロフが、8月26日、似たような情報を伝えてきた、締結されたソ独条約に関して日本の出版物の記事を元にした：「ドイツは非友好的立場を表明した。ドイツとイタリアとの同盟と反コミンテルン条約は紙屑となった」；「全ての責任は政府に委ねられる、政府はこれを予見できなかった」；「有田の外交は日本に完全な孤立を招いた、軍事外交の構築を必須とする」；「ドイツと新しい同盟を締結する必要がある、ドイツはイギリスと対抗しようとしている」；「軍部はソ連邦とイギリスに関して自分の断固とした不動のコースを声明した、基本的な敵として」；「ソ連邦とドイツの接近は中国での事件に悪影響を与える。東におけるソ連邦の活動が活発化する」。

日本の右翼の反応の情報は、ゾルゲグループからのものと同じであった。8月28日、彼は伝えた、ドイツとの不可侵条約締結の交渉は大きな反響とドイツに対する敵愾心を引き起こしたと。ラムザイが書いていた、「内閣の退陣があり得る、条約締結の詳細がはっきりした後。ドイツ大使オットーは出来事に同じように驚いた。内閣の大半はドイツとの反コミンテルン条約の破棄を考えている・・・国内政治の危機が増大していく」。

実際において、8月28日、平沼を首班としている日本の内閣は退陣を強いられた。そ

の交代に、阿部信之を首班とする内閣ができた。自分退職を理由づけて、平沼は声明した、ソ独条約締結の結果、新しい状況が形成されたと。この状況は、日本の外交の全く新しい方向を必須とした。

日本政府はドイツにいる自分の大使大島に、ソ独同盟締結に対して抗議をすることを委ねた。この同盟は反コミンテルン協定に矛盾していることを指摘して。外務省内でのろまな官僚と見なされていた、エイゲン・オットーはこれについてリップントロップにまず報告した。重要なニュースを知るやいなや、彼は書いた、「非常に重要！ 秘密に。暗号で送った。直ぐに渡すこと！ ベルリンにいる大島大使に向けられた指示について私は知ることとなった。彼に声明することを委ねた、ソ独同盟の署名は、現在の軍事同盟についての独日交渉を無効にすると。日本政府は、ロシアとの不可侵についてのドイツの条約を、秘密協定の深刻な違反であると判断している、反コミンテルン条約述べられている。この結論に関して、大島に厳しい抗議を声明することを委ねた。オットー」

この期間、ソビエトの指導部は、偉人である孫子の遺訓の一つを実現することができた：「最も優れた戦争—敵の意志を打ち砕くこと；次の手段—敵の同盟を打ち砕くこと・・・」しかし、この時期、スターリンは自分の絶対的な天分と無謬性を信じ切っていた。概念を構築したヒトラーは西側と戦争をするであろうし、彼と適宜に話し合えるであろうと。この概念から、後になり、ドイツの戦争準備についての全ての諜報員の報告が疑わしいと見なされることになった。

## 日本でのショック：他の報道を基にしたラムザイの情報

この時期における、ゾルゲと東京にあるソビエト武官の機関とを比較するのは興味がある。ゾルゲは自分の情報源から知ることになった、8月24日に、「通商と財政のグループはイギリスとアメリカと話がついていた。他のグループ—橋本と宇垣についている—はソ連邦との不可侵条約締結と中国からイギリスの駆逐の立場に立っている」。

武官代理ミシンが伝えた、1939年8月31日に：「安倍内閣成立後、私の意見によれば、日本の政治は基本的には以前のままである：

1. 大陸への進行行動の継続。
2. 国の戦争準備の拡大。
3. 国外商業の再生。
4. 国々との友好関係の構築、日本の真意を理解している、独自の国外政治を維持しながら。アメリカとイギリスとの相互関係の正常化のための手段の適用を期待する、ソ連邦との関係において今後の挑発的政治を」。

ニュアンスに気づくことは難しくない、ゾルゲの報告が特徴をなしている。東京のソビエトの武官の通知—日本軍部内の過激グループの反応についての情報。このグループは常にソ連邦に対抗する気分にあった。そして突然、ラムザイの情報によれば、ソ連邦との関

係の正常化とイギリスとの関係において厳しい立場を唱え始めた。ミシンにはこれはなかった、確認しただけである、ソ連邦に関して「扇動的な政治」の継続を。

自分の次の報告において、ラムザイはこの明らかな矛盾をハッキリさせた。9月10日、彼は伝えた、ショリは「ソ連邦との不可侵条約締結に日本の参謀本部を仕向けることに努力している」と。ここで、彼は伝えた、過激グループの活発化している運動について、中野、橋本、小林、ソ日不可侵条約の署名のための。明らかだ、日本軍部へのドイツの影響があったことは一リップントロップは交渉においてスターリンに約束した、ソ日関係の正常化の仕事において日本に影響を示すことを。これは疑いがなく、ソ日関係における変化を示す証拠であった。これ故、ラムザイの電報にプロスクロフの手によって再び書き込みがあった：「特別通信として処理すること」。

ゾルゲの情報は分析によって確かめられた、外務人民委員部（НКВД）によってなされた。1939年8月26日、ソ連邦外務人民委員会次長ロゾフスキイとソ連邦にいる中国大使ヤン・ツゼとの会談が行われた。大使が語った、日本は極東で孤立した状態にいる、が、すなわち、これ故日本はイギリスとの合意を探している。これに、ロゾフスキイが反論した：「日本の出版物から判断すると、日本はアメリカとの共同を探している。第一に中国への圧力を高め、その後、イギリスとソビエト連邦へ。中国の奴隷化の線は、日本の既定路線である。アメリカに何らかの譲歩を日本はする、と言うのは難しい。日本は今、非常に困難な状況にいる。日本と外国の刊行物から判断すると、日本には大きな当惑がある。近日中の日本政府の声明を待つ必要がある、今後の政治問題に関しての。天津、北京、上海、山東、広東と10都市、そこらはイギリスの財政的経済的興味が非常に大きいところ、を占領し、香港を包囲し、イギリスの商業を根絶し、イギリスの輸送を強奪し、イギリスの工場と銀行を混乱させ、日本はイギリスと妥協にこぎ着けようとしているのであろうか、イギリスでは降伏のムードが非常に高まっているにもかかわらずに。これはすなわち、日本とイギリスとの戦いはさらに先鋭化するであろう。大いにあり得る」。

注目に値する、ソ独不可侵条約の締結後、ドイツの大使館と日本の参謀本部の間の関係が冷却したことは。9月15日の無線通信で、ゾルゲは愚痴をこぼした、ソ連邦に対抗する日本の戦争準備について、ドイツ武官と再び話し合いを持ったことに（明らかに諜報局の依頼によって）、しかし、「ドイツとソ連邦の不可侵条約の締結時、ドイツの武官は参謀本部でこれについて何の説明もすることができなかった」。

この問題に関する情報は尾崎からもたらされた。尾崎はゾルゲに伝えた、安倍内閣、設立された状況から判断して、は前内閣より極めて脆弱であった、イギリスとアメリカとの合意の達成の興味を宣言せざるを得なかった。近いうちに、政府はヨーロッパにおける戦争に関して不干渉を宣言する。しかし、これは一時的な現象である、すなわち、待ちの政治の発露である。

1939年9月13日、日本政府が公式文書「政府の政策の基本」を公表した。そこで、一般的な形で新しい方向を定義した：「＜中国事件＞の処理を政治の基本とする。外交に

において必須である、断固として独自の立場をとり、複雑な国際状況に従って行動する・・・国内に、注意を集中する、戦争準備の完遂と、戦争のための総動員に、政府の全力をかけて」。

より具体的な証拠を、ラムザイは9月27日に伝えた。

モスクワ。労農赤軍第5局局长へ

オストロバ。1939年9月27日

「オットー」は近衛から知ることとなった、彼は汪兆銘の新政府に特使として中国へ行くことを拒否していると、次の通り：

モンゴル人民共和国の国境における休戦は、冒険主義からの日本の政治の離脱を示している。

シベリアに対抗する戦時活動の関係において、行動は中国における領土拡大だけに限定されている。

完全に希望がなくなった、関東軍は長きにわたって中国に関する政治をソ連邦に対する冒険と両立させることに。

この原因は：独ソ条約、ノモンハンのブルド・オボで得られた教訓とポーランドに対するドイツの行動。

これ以外に、軍の武装、特に技術的な、は数年を要する、武装を優れた水準にするためには。

ソ連に対する冒険的な政治を禁止する問題において、現在、全ての分野の同意を得ている。

「オットー」は日本の新しい政策を疑っている、条約や協定の手段によるこれらの事実の公認の問題において、中国におけるフランスとイギリスとの関係問題。

これらの問題に関して、分派はお互いに争っている。

108号、109号、ラムザイ

解説 マリンニコフ

翻訳 イワノフ

諜報局局长の決裁：HO-2と5 特別通報とする。プロスクロフ。10月1日」

結局、10月に、宮城から、日本軍の軍事演習についての情報が届いた、満州東部国境における。これは通常の演習であった。ソ連邦への進撃の準備ではなかった。

獄中記で、ヨーロッパにおける第2次世界戦争開始と関連した日本の政治についての情報を、ゾルゲは最も重要な証拠に分類した、日本での仕事の期間中に彼によって得られた。

## 日本の新しい政策

10月末に、ゾルゲは政治報告の内容を知ることとなった、オットー大使がリップペントロップに10月16日に送った。報告で書かれていた、ソ独条約は、日本の全ての政治グループに大きな衝撃をもたらした、特に、参謀本部に。参謀本部はドイツとの友好関係を維持すること、ソ連邦との関係においてはドイツの例を見習うことを決めた。ラムザイが伝えた、「日本のソ連邦との関係の全般的な調整は必須として見なされている」。同じ頃、宮廷グループと大企業グループの一部ーイギリスとアメリカを向いているーは日本における政治状況とハルヒンゴールでの日本軍の敗北を利用した、「安倍政府で勝ること、参

謀本部のドイツへの更なる傾倒に反対すること、同じく、日ソ関係の有効な調整に反対するために。」

デキンとストリは合意ができたのであろうか。彼らが断言しているように、ヨーロッパでの戦争開始への日本の反応について「無数の報告書」、オットーはそれらをベルリンに報告した。ゾルゲは短縮した形で何度かそれらをモスクワに送信した、「極めて一般的な情報である、内容的には重要ではない」。イギリス人の研究者達が書いている：「明かであった、日本の政治及び軍事グループは見解で別れていた。ナチスとソビエトの条約は極めて否定的な印象をもたらした。東京におけるイギリス支持勢力とアメリカ支持勢力の影響を拡大することを助力した。ヨーロッパの戦争に参加するというアイデアは日本政府の高官グループで指示を得られなかった」。

これは今や明かである。諜報機関ラムザイが得た情報は当時、モスクワを助けた、ドイツと日本の指導者達の外交政策の本質的な動機を理解するのを。ドイツにとって、重要であった、日本の反イギリスの政策を確保することが。同時に、モスクワと東京の間の緊張を弱めることが。これらの条件の下で、日本を太平洋においてイギリスに対する進撃に突き動かすことはベルリンには容易であった。ヒトラーの戦略の意図に合っていた、もし、イギリスが西ヨーロッパで、地中海で、極東で複雑な状況下にあるならば、イギリスはドイツと戦争をすることはないのであろうとの。これを基礎に、それに応じて指示が作られた、特に、東京のドイツ大使館に向けられた。

オットーとの話し合いで、ゾルゲはこの問題に関する完璧な情報を得た。相応する分析と再確認の後、その情報をモスクワに送った。後になってゾルゲが書いていた：「ドイツ人は信じていた、シンガポールへの日本の進撃は、地中海と大西洋へのイギリス海軍力の削減に通ずるものであることを、イギリス島への侵入をドイツに可としてくれることを」。

他面では、日本の右翼、特に軍部、は同じように、日ソ関係の正常化に興味があった。日本では、良く理解していた、これは中国へのソビエトの援助を中止へ導くものであると。それ以上に、先勝の早期の完遂を助けるものであると。1939年11月、日本の参謀本部で、中国を3つに分割する計画が提案された：中国の占領地区と満州は日本に、中国の北西部はソ連邦に、重慶政府が中国の残りの地区を。11月24日、ゾルゲは書いていた、「参謀本部は満足するであろう、もし、ソ連邦が自分の影響範囲に行動を制限するならば、そこは正確に定まり分離される、重慶政権の影響範囲から」。

しかし、この計画は実現しない運命になっていた。ソビエト・フィンランド戦争（1939年11月から）が始まった。この戦争は日本社会の全ての階層の反ソビエト気運を極めて強くした。12月8日、東京のソビエトの武官が伝えた：「日本のソビエト連邦との真剣な接近は不可能であるとの話で持ちきりである。出版物が語っている、アメリカはソ連邦と日本の交渉に用心深さを示している、その都合な結末には興味がないと」。

12月、フィンランド問題に関するソビエトとアメリカの不一致は極限に達した。アメリカは極東におけるソ連邦の立場を弱める目的で積極的な一歩をとった。東京のソビエトの武官からの報道によれば、アメリカはイギリスとフランスとドイツの和解の試みをし始めた。日本には中国における日本の興味を承認することを約束し、日本と蒋介石との間の妥協の可能性を力を入れて探した。これらの試みは恵みの土壌の上にのしかかっていた。日本の国会は安倍内閣に不信を表明した、ソ連邦との関係におけるその政治との不一致から、



その厳しさを要求し。

諜報機関ラムザイに、日本における出来事の正確で最新の情報が再び要求された。

## 諜報の日常

1939年が終わった—日本でのゾルゲの仕事の6年目、緊張の仕事と不安と危険に満ちていた。諜報グループは自分の基本的な仕事を遂行した、ドイツと日本の計画についての指針とソ連邦の安全の保証の通報。ラムザイの大きな成功は、日本の軍事準備についての情報の時期を得た通報であった、ハルビン・ゴールでの戦争時における。しかし、より大きな成功は、軍事同盟締結に関する日独交渉についての正確で時期を得た通報であった。この情報は戦略的な価値を持っていた。スターリンにドイツとの接近に歩を進めることを促した、2つの前線での戦争の恐れを回避させて。

しかし、これら以外に、ゾルゲグループは多くの有益な情報を通報した。

モスクワ。労農赤軍諜報局長官へ

オストロバ、1939年1月5日、16日

(続報)

シヨリが関東軍の諜報活動について次のように伝えた：

諜報の3つの方法を実現する。

第一—国境線の監視。沢山の場所に哨所が配置されている。哨所は近距離からソビエト側での生活を観察している。シヨリは、ブラガベシェンスクに対向しているそのような監視哨所を訪問した。そこから双眼鏡で見ることができた、赤軍の兵舎で何が行われているかを。兵舎での各行動が記録される。

第二—白衛軍兵士との仕事。有名な会社チュリナが利用される、支社の設立のために、遠方地区と満州の連絡のために。

友人や白衛軍兵士の親類の全ての住所は登録される。

特にシベリアに関する情報を集める。

日本人は人々を駆り立てている、ソビエトの住所を持っている、これらの住所に手紙を送る、或いは他の手段を講じている。この仕事の中心になっているのはハルピンである。

諜報の第三の方法は、ユダヤ人を通して実現する、ソ連邦或いはアメリカに住所を持っている。彼らを通じてソ連邦での関係を構築することができよう。

諜報のこの方法は大連と上海から行われる。

シヨリは印象を抱いた、関東軍は非常に情報に通じているとの、大量の情報を入手して。

シヨリはまた知ることとなった、国境を通過しての白衛軍兵士の越境は成功裏に行われていたことを。

第74、第75、ラムザイ

解読 マリンニコフ、翻訳 ポポフ

諜報局局長の決裁

1939年4月に、ラムザイから突然の情報がやって来た。それは次の言葉で始まっていた；「”オットー”が情報源から次のような奇妙な情報を入手した、それを彼は冒険的、挑発的と呼んでいる・・・非常に疑わしい」。さらに語っていた、日本指導部は非常に満足している、ソビエト政府がシベリアからウクライナに大人数の朝鮮人を移住させたことに。「ウクライナで非常に悪く感じている朝鮮人達は、ドイツの代理人達によって扇動されるであろう、彼らはウクライナで仕事をしている、いわゆる独立したウクライナのために。日本とドイツはこれら朝鮮人達を扇動に巻き込むことで合意に達した」。この電報の一つの見本はベリアに送られた。プロスクロフの命令に従って。

興味を引く、ラムザイの情報は正確に実際の状況を反映していたことが。朝鮮人の移住（この手段はスターリンの直接の命令に従ってのものであろう）後に極東とウクライナで複雑化していた状況を。ゾルゲは特徴を知り、推定することができた、彼は疑いなくこの手段の愚かさと有害さを理解していたと。しかし、彼は明らかに、理解していた、何かの承認を得て、これをした。ここから、この警告を否認する前もっての試み（＜奇妙な＞情報、情報源から得られた、＜冒険的、挑発的、決定的に非常に疑わしい＞）、しかし、同時に、彼の情報部分を保持し。この時の条件下で、そのような行為は少なくない勇気を要した。それ以上に、ゾルゲはソ連邦における大量弾圧について知っていた。何人かの研究者達が予想していた通り。早くに疑っていた、モスクワでの制裁のために、彼を呼び出す試みがなされていたことを。

第2次世界戦争の開始後、ゾルゲは始めてドイツ大使館と公的に共同することを始めた。大使館のニュース広報の編集を安い賃金でゾルゲに委ねた。このために彼に小さい部屋が割り当てられた、そこでラムザイは送られてきた電報を仕分けし、広報に入れるために、それらから最も重要なものを選び出した。

これ以外に、諜報機関ラムザイは系統的な研究をした、日本軍の組織構造と戦闘能力の。ゾルゲは、日本軍の研究目的を持ってドイツ大使館に設立された「研究グループ」の一員として加わった、という状況がこれを後押しした。オットーは良く知っていた、ゾルゲには日本人の知人がいることを。その中に、近衛に近い人物も。これ故、オットーはゾルゲの情報に特に注目していた。ゾルゲはオットーとショリの意見に注意深く耳を傾けた。グループの毎月の詳細な報告書を写真撮影し、マイクロフィルムとしてモスクワに送った。

これらのマイクロフィルムを移送するために、コロリコフが書いているように、ラムザイはある時、利用した、オットーが彼に香港で外交郵便であることを提案したことを。外交急使で採用されている習慣に従って、ゾルゲは彼のトランクを封印するように願い出た、諜報局への資料に、ドイツの外交郵便の地位を与えて。香港のホテルで、そこに彼が留まった、夕方に彼を呼び出し、アグネス女史に問いかけた。リヒャルトは冗談で答えた：「残念だが、私は彼女の代わりはできない・・・君は多分間違っている」。

これは合い言葉であった。その後ゾルゲはマイクロフィルムの入った箱を、ハンガーと並んで机に置いた。明かりを消して、待った。少し立つと、ドアがノックされた。入ってきた者が英語で問い合わせた：「私が包みをもらえますか？」ゾルゲが答えた、「ハンガーと並んで机の上に」。人物は包みを持って去って行った。お互いに見合うことはなかった。

これは資料の引き渡しの一つの方法であった。ラムザイグループが入手し、東京からモ

スクワへの。重要な原則—接触を最小にすること。このような資料の引き渡しの方法は、長きにわたって、諜報機関の比較的安全な機能を補償してくれた、東京で厳しい警察の管理下にありながら。

ゾルゲの言葉によれば、大使館の正規職員になるように、彼は何度も誘われた。しかし、彼は断固として拒否した。1939年、ドイツの外務省にさえ要求した、オットーがゾルゲを十分に高い地位に任命するために、情報と出版関係の主任に（現代の「パブリック・リレイシェンズ」（？ ＊）に似た）。しかし、ゾルゲは拒否し続けた。オットーの戸惑いや侮辱さえ引き起こしながら。理由は一つであった、ラムザイの危険に。任命された場合、ゾルゲは保安機関の不可避な調査に処せられる。それは彼の過去のコミンテルンのことを詳細に暴露しかねなかった。これは崩壊の危険を伴っていた。

# 第7章

## 西での惨事とスターリンの秘密外交

### 1940年

戦争は勝利を好む、継続を好まない。これ故、戦争を理解している司令官は、民衆の運命の支配者である、国の安全の主人である・・・これ故、百戦して、百勝する。これは最良ではない。最良は、戦わずして、敵の軍を支配下に置くこと。

孫子。軍事論

### 日本における内閣の交代

1940年は、ソ連邦にとって、極めて不都合な条件下で始まった。ドイツとの不可侵条約の締結の結果、それに引き続いたポーランドの分割によって、クレムリンは実質的に敵側の陣営となった、侵略国のドイツ、イタリア、日本と。締結された条約はソ連邦の安全を極めて確りさせたが、それは同時にスターリンと彼の体制に政治的孤立を招いた、西の民主主義国との。状況はさらに増大した、1939年12月にフィンランドとの戦争が始まると。これは明瞭な侵略であった。西のリーダー達は、それだけでなく、ヒットラーの同盟者のスターリンを見ていた。直ぐにソビエトの独裁者を懲らしめることにとびついた。国際連盟からソビエト連邦を除外した。ソ連邦に対して様々な制裁をした。アメリカの行政機関はソ連邦に対して、「禁輸」を実行した、ソ連邦への商品の輸出において。フィンランドに4000万ドルの借款を提示した。西側世界では、反ソビエトのムードが増大した。

それにもかかわらず、ソ独条約の結果、極東での対立が極めて弱まった。ソ連邦とドイツの接近は日本の右翼層に、自身の政治の見直しを強いた、ソ連邦との関係において。

日本政府は良く理解していた、ソ日関係の正常化は、中国へのソビエトの援助の停止を導き、日本の重要な問題の解決を助けるものとして：この国での戦争の早期の完了を。これ故、東京では、傾いた、ソ連邦との不可侵条約締結における交流において、設定した目的を得るために。このアイデアは、1939年12月28日に、軍部と一緒に外務省で作成された「外国政府との関係において政治の基本原則」に反映された。そこで語られていた：「不可侵条約締結の必要で中間的な条件である、中国へのソビエトの援助を停止の公的公認は」。

それにもかかわらず、日本では、ソ連邦との関係において、非妥協的な政策の支持者達の発言は禁止されなかった、彼らは不可侵条約のアイデアに反対した。日本の出版物に、ソ連邦との関係において、日本の厳しい政策の必要性を訴えていた、漁業問題に対して力による解決も。

1月初めに、東京で、政府の危機が起こった。

極秘

特別通報

第251029

1940年1月8日

内容：「日本における政府の危機について」

報告する：

1. 信頼に値する諜報データによれば、ドイツ大使オットーがリップントロップに電報を出した、日本政府の危機の評価について。彼の評価は以下に帰する：「阿部内閣の退陣は必須である。宮廷グループは新内閣の設立を準備中である、政党代表の広い参加をもつての。宇垣は待っている、首相の地位を得ることを。が、日本の内政及び外政に大きな変更を示すことはないであろう。日本では、確信が増大している、汪兆銘政府の設立は無分別であり、蒋介石との直接交渉が必要であるとの。しかし、軍部はこのような交渉のやり方に反発している、少なくとも現在は、汪兆銘政府の設立を要求している。

近い将来において、日本は状態にはない、アメリカ、ドイツ、ソ連邦との関係において、何らか本質的に新しいことをなす。

大島（元ドイツにおける日本大使）は確信している、内閣の若干の変更が必要であることを、日本がドイツとの友好とソ連邦との幅広い合意を進める前に」。

2. 我々の情報源のデータによれば、阿部内閣は持ちこたえることができるのか？ 軍事グループがその退陣を希望していないにもかかわらず。政党の反対と阿部に対する世論の反対が強い。これ故、軍部は安倍内閣を擁護し続けることを危惧している、軍部の権威の更なる喪失をしかねないので。

新首相の候補者に宇垣がなっている。が、軍部はこの候補者を支持していない。これ以外に、宇垣は近衛の支持を得ていない。首相の地位に、他の候補者から、近衛、大隅、寺内の名が上がっている。新しい外務大臣の候補者には小磯が上がっている。阿部内閣の退陣はこの年の1月10日が予定されている。

皆は思っている。新内閣の最初の一步は蒋介石との直接交渉であろうと、日中戦争の終息を目的としての。

3. 信頼に値する諜報データによれば、日本の参謀本部がドイツの武官に伝えた。日本人はアメリカ人にこびるであろう、アメリカ人が貿易条約を結ばなくなるまでは。その後、日本人は中国問題に断固とした路線を進む、それはアメリカ人に対抗したものとなろう。

結論：

1. 明らかに、阿部内閣の退陣は近日中に起きる。その退陣の基本的原因は中国問題の解決と、日本の内政の困難さに無能であること。これに関係して、日本の右翼層内での戦いの先鋭化。軍部と中道層の間での戦いの更なる先鋭化を待つ必要がある、蒋介石との直接交渉試みに関して。

2. あり得る、蒋介石との直接交渉をしようとする日本の試みがアメリカ側からの圧力の結果であることが。

プロスクロフ

1940年1月1日の東京グループの資料を基に、特別通報が作成された。

1月7日、ゾルゲはモスクワに情報を送った、日本と汪兆銘の間の達成された同意について、南京に親日本の中国政府の樹立について。

1940年1月14日、阿部が首班である日本の内閣が退陣した。尾崎がゾルゲに伝えた、安倍政権末に複雑化している状況について。彼の政府は、その弱さとヨーロッパにおける不安な状況のために存在を止めた。国内では、過激主義者達の集団が活発化した。安倍の権力からの罷免のなかで、軍部がハッキリと頭を出した。しかし、軍部は政治の舞台

に出ていないでいた。

2日後、将軍米内光政を首班とする新内閣が組閣された。彼の主たる努力は中国における戦争の停止に向けられた。巨大な中国の領土は日本の権力下にあると見なし、東京では新しい「中国共和国改造政府」を創設することを決めた。南京を首都として、元国民党政府の後継者として。新しい政府は日本との戦争を遅れることなく停止することが予想された、日本軍による中国の北部と中央の占領を認めて、その力を中国共産党との戦いに向けものとして。この際、重慶政府の活動家に、「改造政府」の一員に入るように提案がなされた、彼らが中国共産党との共同を拒否し、日本との戦争を止めるならば。

汪兆銘—国民党の2番目の人物で、蒋介石と公然と絶交した—は彼（蒋介石 \*）に幾つかの電報を出した、日本との戦争を停止することを提案した。特に、1940年1月16日付けの3番目の電報で、彼は書いた：「もし君が、民族の運命と国民の生活、そして日本との戦争の停止の最近の偉大な計画の決定の名に立つならば、近衛の声明で述べられている基本に基づいて和平交渉を開始するならば・・・私と全ての同志達は無条件に君に同調するであろう、そして一緒に我々は全ての国家によりやく平和を実現する」。

1月18日、日本にいる武官の一人クリロフが伝えた、米内新内閣は3つの課題に注意を向けている：戦争からの出口に；アメリカとソ連邦との関係正常化；国の更なる軍国化。1月19日、ラムザイははっきりさせた：「新しい政府はアメリカとイギリスと政治的接近を指向している、そのような政治にとって可能性は大きくはない、特に、軍部がアメリカに対して非常に疑っている態度を示している。新しい政府はドイツには非常に友好的である、ソ連邦に対しては雰囲気は非常に悪い」。

尾崎はゾルゲに直ぐに伝えた、新内閣の行動力の評価を。その特徴から、この政府は弱いと。というのは、政府は旧政府を維持するための勢力のもとで作られたので、改革の実現のためと称して。2月に、オットー大使がゾルゲにこの評価を確認して言った：「期待に反して、有田の声明は非常に弱い。これ故、政府はドイツの大使と国民の不満を引き起こしている」。

1940年初め、ゾルゲの基本的な情報源で前線の同志の一人であるショリが仕事を引き渡し、ベルリンに去って行った。彼の出立の後、ゾルゲがドイツ大使館を訪れることが少なくなった。これ故、1940年の最初の月に、ラムザイは軍事情報の収集の主要な負担を尾崎と宮城に移した。

諜報グループの報告の大半は、第一に、軍事・政治問題に関してであった。興味があった、日本の右翼が思っていること—ラムザイの情報によれば—に、ドイツが戦争で敗北するか、或いは、イギリスと和平を結ぶか、ソ連邦との密接な関係を破棄して。他の方からは、ドイツの武官の情報によれば、日本の参謀本部に、ソ連邦に対してドイツと一緒に戦うという古い期待を抱いているグループがいるらしい。このグループの計画は出てきていた、ドイツがソ連邦に対して向きを変えることは必須であるということから。その時に、日本は遅れることなくシベリアに侵入するというものであった。

モスクワ、労農赤軍第5局局長へ

オストロバ、1940年2月1日

国境に関する日ソ交渉の今後の発展を、ドイツ大使館オットーは非常に心配している。というのは、これは遂行において彼の期待を打ち砕いたから、少なくとも、リップントロップが彼に提示した一つの課題を、ソ日同意の達成という課題を。

オットーは非常に悲観的な気分であった。というのは、この同意に関して日本の参謀本部の本心を彼は知ったので。オットーは同じく参謀本部の新しい冒険の開始を危惧した。ソビエト・フィンランド戦争が2つの関係において参謀部に影響を示した。

第一に、日本人は納得している、この戦争でソビエト連邦は大きな敗北を被っていない、西に投入した大きな力にもかかわらず、このようにして、シベリアへの進出という古いアイデアが再び出てきている。

第二に、参謀本部はノモンハンでの敗北に思いをはせることができたのか？

これ以外に、確信の後、フィンランド人は、少なくとも、赤軍に抵抗の成功を示しているという、ノモンハンでの敗北は非常に耐えられないものであり、それについて全ての新聞がフィンランド人の勝利について大きな歴史を書いている。

このようにして、小さいフィンランドと高慢な日本の参謀本部との比較はますます参謀本部のためにならなくなる、特に、国民は中国での戦争に既に満足している故に。

ドイツ大使オットーも非常に落胆した、国境線交渉手段が日本によって彼と武官に秘密とされたことに。この事実により日本の参謀本部の増大する疑いを感じながら、独ソ友好の関係とイギリス・アメリカ側への日本のあり得る転換の危険性について。

オットー大使はリップントロップから特別指示を受けた、ドイツと日本の政治的相互関係を確固し、あらゆる手段で他の強国への転換を引き留めるようにとの。

私はしつこく予見している、極東の国境線の準備の必要性を全てのあり得る紛糾に対して。

200号、2月1日。ラムザイ

ザイツェフ解説。

パポフ翻訳

#### 第5局局長の決裁

重要な結論は、1940年2月1日付けのゾルゲの全般的報告の一部となっていた、日本はドイツと力を合わせることを急いではいない、再び孤立となることを恐れて。日本の主要な目的は時間を稼ぐことであった、「戦争がどのようになるか、じっくり見定めるため」。ラムザイが伝えたように、他面では、日本における影響勢力「東方会」グループ、中野、国会議員三宅と元国会議員ミワハベ（？ ＊）との「社会大衆」党一はモスクワとの接近の政党綱領の立場であった。

このように、日本の参謀本部はソ連邦との関係において、自分の立場を少し緩和させた。この顕著な兆候は、ドイツと日本の参謀本部の間でソ連邦に関する情報の交換にあった、ゾルゲが書いていたように、「ある程度一時停止した」。実際において、同時に、日本とドイツの海軍省の間で協定が締結された、ソビエトの海軍とイギリス海軍の配置に関する全ての情報の交換について。

この時期に、第三帝国の指導者達は、独日とソ日関係の強化に興味があった。日本はドイツから情報を得た、ソビエト政府は二国間関係の正常化の準備をしているとの。

ラムザイはオットーから知ることとなった、リップントロップからこの方向での仕事を要求する電報を得ていた、「イギリスと他の国との日本の同調を何が何でも阻止すること」。

同時に、ゾルゲは伝えた、日本にリップントロップの右腕であるシタメルがやって来た。同じく、男爵コブルゴトと子爵ドエルゲイムも、ドイツ大使の仕事を助けるために。

日本にいるアメリカ大使ジョゼフ・グルーの近くにいる情報源から得られた、ゾルゲの情報に従うと、アメリカ側には日本に対する禁輸を力でもって行うつもりはない。とにかくアメリカ政府は日本の内閣と合意に達したがつているので。

しかし、この期待は、全てから判断すると、結構幻であった。ラムザイはベルリンに送られるドイツ武官の1月報告書を撮影することができた。この報告書に書かれていた、軍部は政府の交代を待っている、強い政府を作るために、「太平洋におけるイギリス・アメリカの影響に対向してドイツと共同するため」。同時に、日本の指導部はわかっていた、これは、中国問題に関して、ソ連邦との協定の締結後にだけできることを。しかし、この雰囲気は決して意味していない、ソ連邦に対する日本軍の伝統的な敵対関係の中止を。ラムザイは2月18日に書いていた：「日本の参謀本部は、未だ完全には、ソ連邦とのあり得る戦争についての期待を拒否していない。フィンランドに対する戦争でのソ連邦の失敗とノモンハンの恨みを晴らす願いは強い因子となっている、日本の参謀本具の政策の」。

## 西での大戦争の初めての兆候

3月初めに、中国にある自分の諜報機関から、諜報局（ソ連の \*）は北中国での日本軍の大幅な移動の準備についての情報を得た、中国軍の一扫のための。北京にいるフランスとアメリカの武官の会議から明らかとなった、日本は満州に軍を集中していることが、春にソビエト連邦に一撃を加えるために。武官の言葉によれば、日本の参謀本部は意図していた、これには好都合となると、ソ連邦はフィンランドの件で西の強国との深刻な紛争に引き入れられることが、従って、極東の前線は西への軍の移動によって弱体化される。日本にいるソビエトの武官グシェンコの情報によれば、フィンランド軍と接触のある日本の右翼層の中で、反ソビエト、新イギリスの機運が増大した、それらはアメリカとイギリスのジャーナリスト達によって少し刺激された。アメリカのジャーナリストであるゴルドン・ケシェンの記事中で語られていた、ソ連邦は自分の軍隊の一部を極東からフィンランドに動かした、これが日本の参謀本部を武力の試しへと徴発した。このような情報はスターリンの注目を引かないわけではない、ソビエトーフィンランドの調整の道を急ぐことに彼を強いた（フィンランドの冬戦争 1939年11月30日～1940年3月13日\*）。

時間の経過と共に、ソビエトーフィンランド前線での出来事は拡大していった。1940年3月ー4月、赤軍は多大な犠牲を出しながら、「マンネルハイム線」を突破し、ピボルグに入った。3月12日、モスクワで、平和条約が署名された。それに従うと、カレー地峡とその付近の領土はソ連邦の手に渡った。

この平和条約の締結は日本の右翼グループに当惑をもたらした。日本にいるソビエトの武官グシェンコが伝えた、日本の出版物から判断して、日本の指導部は考えている、ソ連邦は「フィンランドで手を抜き、極東での軍を強化する、ハッサンとノモンハンの繰り返



しの可能性を排除しない。極東におけるソ連邦の圧力を待っている。汪兆銘との関係については、ソ連邦は反対を表明している、蒋介石の援助を強化している」。

ラムザイは確信した、フィンランドとの平和の締結は日本指導部にとって全く予想外であった、日本にとって恐れが増大すると評価していると。ソ連邦との密接な政治的関係の構築の支持者の数が急激に増大した。これは引き起こした「フィンランドとの戦争におけるソ連邦の勝利の評判を落とす雰囲気を、イギリスとの緊密な政治的接近についての交渉を継続するために」。同時に、ゾルゲが伝えた通り、イギリスに向けられた政治におけるソ連邦とドイツの最近の成功は、日本に反イギリスの雰囲気の増大をもたらした。しかし、反ソビエトの雰囲気はさらに強くなった。将来の日本の政治の方向が決まった。アメリカとの理解の達成の希望はなくなった。それにもかかわらず、ゾルゲが書いた通り、「アメリカは理解したがっている、新ソビエトの政治に対する日本の抑制は、日本に対する経済的禁輸を延期するか或いは避けることになるう」。

モスクワ、赤軍の労農赤軍第5局局长へ

オストロバ、1939年3月6日

ベネッカー将軍が（ドイツから）日本にやって来た、海軍武官としての職務を引き受けるために。今後、ベネッカーは「パウリ」の名で登場しよう。彼は私に伝えた、今後のヨーロッパの出来事に関して、2つの基本的計画があると。

その第1—今年の初めに、決定的な進行が始まる、西部戦線の破壊を目的に、ベルギーを経由して、或いはベルギー国境辺り、フランス、ベルギー、オランダの海岸方向への進出を拡大しながら。必要である、イギリスに打ち勝つためには沿岸は絶対に。

オランダの海岸はイギリスに対する防衛が弱いことを鑑みると、フランス、ベルギー、オランダの海岸は占領されるに違いない。この計画の最大の危険性は、次のことにある。ベルギーとオランダの領土に作戦が広がった時、アメリカが戦争に参加するかもである。

その第2は次の通りである。「秩序を維持しながら」、ソ連邦と共同して、自分の経済的独立の確立に全ての力を集中し、経済的に力を保つこと。

しかし、ベネッカーは見なしている、第一の計画がヒトラーとリッペントロップに好まれていると。それ故、とにかく、第一の計画が実行されるであろうと。

リッペントロップはしつこく努力をした、ドイツに対向する戦争にアメリカの参加を予防するために。彼はアメリカに多くの重要な人を送った。日本での仕事のために、オットー大使とベネッカーに、同じような課題を与えた。オットーとベネッカーは日本側からそのような政策を得なければならなかった、アメリカが常に不安な状態にあること、南太平洋への進行のための戦争に日本がアメリカの参加を利用すること。このように、戦争へのアメリカの加入の場合に日本の動きに関して確固としていないアメリカは、より長く自制するであろう、ドイツに対する戦争への参加を。

ベネッカーは日本の海軍参謀部部長次席と会った、彼とあけっぴろに意見の交換をした。この政治に関して海軍は日本のグループの中で他よりそれを理解している。

31号、32号、33号。ラムザイ

ゾルゲは補足の電報で正確を期した。ベネッカーの言葉によれば、ドイツ軍の主攻撃はフランスの海岸方向である、「イギリスの派遣軍の場所にいち早く達するために」。この通報の全ての価値を評価するためには、気づくことが必須である、ドイツ参謀本部のこの

戦略計画は最も重要なところで、第一次世界戦争で適用された、シリヘン計画と異なっていたことに。当時、カイゼル軍団がパリに主攻撃をかけた。今は、カレー方面へ、ラマンシャ海岸へ。後になってわかったように、すなわちこの計画はフランスの粉碎とイギリス軍の慌てふためいた撤退を導いた。しかし、このゾルゲの電報には、何の痕跡もない、この結構重要な通信に諜報局指導部の反応を判断させてくれるような。

ゾルゲも伝えた、日本との妥協についてイギリスとフランスの共感の兆候があると、日本の一定層の理解があると、太平洋側からドイツの封鎖に対する日本の同調に賛成の意見を言っている。ゾルゲの分析に同意する、妥協へのこの共感は、ソ連邦に対する日本の進出を煽ろうとする意図と相変わらずに関係していた。リヒャルトが書いていた、「ここから日本の招待が生まれ出ている、西での緊張を利用する、東でソ連邦を攻撃するために」。このような政治が続いた、ソビエト―フィンランド戦争終結後も。イギリスはシグナルを出した、日本と妥協の余地があることの、ドイツの封鎖への共感とソ連邦への敵意の維持での交換で。しかし、ここに、ラムザイが伝えたように、アメリカが邪魔をした。アメリカは日英協定に介入した、アメリカ政府の同意のない。

## 中国での仕事・・・

1940年初め、最初の計画に、中国での出来事が出てきた。この時、中国軍の状況は悪化していた、1939年から始まったことに関係して、唯一の反日国民戦線で分裂が深刻になっていた。国民党指導部で、反共産主義の傾向が勝るようになった。国民党中央委員会は秘密に指令を出した、共産党の活動と影響の制限をするような。秘密の内に、特別軍団（30師団以上）を組織した、特別国境地区（陝西省―甘肅省―寧夏回族自治区）と国内にある共産党のパルチザン基地の封鎖のために。

1940年、日本軍は中国における広範な進撃作戦を中止した、占領地域の「開発」に主眼を集中して。1940年春には、日本軍は国の937の郡のうち552を占領した（全領土のうちの約30%）。反日国民戦線の分裂は導いた、国民党の指導での日本に対する何の共同行動も、共産党による行動もできなくするように。

蒋介石政権は、日本軍に対する防衛を制限し、中国共産党との戦いに全力を注いだ。1930年代末から、1940年3月まで、国民党軍は、中国共産党の第8軍と新第4軍に対して活発な戦闘を行った。両軍とも損失を被り、日本の占領軍に対する戦いの前線を弱めることになった。

中国の占領地区の日本の行政機関は、地区の対敵協力者の支持を指向し、それにいくらかは成功した。中国の対敵協力の原因は、第一に、この当時の中国社会の深刻な思想的分裂に潜んでいた。抵抗力は矛盾で分裂していた。とにかく、統一国民反日戦線の強化は、愛国的な力の立場の強化を伴っていた。日本の侵略との戦いで、その援助に対して、ソビエト連邦に好意を抱いていた、中国人のソ連邦の成長する権威に支えられていた。これは国民党指導部と中国社会の富裕層を驚かした。彼らは赤い共産主義に、自分らの利益に対する直接の恐れを見ていた。日本の占領権力と協力をする準備をしていた。ソ連邦の影響

と同様に国にいる中国共産党の拡散に対向するために。

日本の占領行政機関はこの雰囲気を利用した。それらに支えられ、直接の武力による圧力と買収の方法を適用し、中国人に景気の良い約束、「白人の帝国主義の重荷」からの解放ということも、日本人は中国住民の大半を強力に仕切れることができた。それは対敵協力の汪兆銘政権とその軍—1941年の春には既に35万人を数えた—の構築のための基礎となった。

3月半ばには、諜報機関ラムザイは情報を入手した、汪兆銘政権の構築過程は最終段階に入ったとの。1940年3月17日、公的布告の2週間前、ゾルゲはモスクワに伝えた、傀儡の中国政府の創設と中国北部にいる軍の移動計画について。この情報は、中国の諜報機関から以前に得られた情報を確固たるものとした。北中国における日本軍の大移動の準備について、パルチザンの対するその浄化と、そこでの日本の占領行政機関の引き続く強化の目的を持って。

1940年3月30日、汪兆銘を首班とする中国の「中央政府」が宣言された。この政府の声明は、ドイツ大使館と外務省の懐疑的關係を引き起こした。3月末に、ドイツ大使館の職員から、ゾルゲは知ることになった、「とにかく、汪兆銘は自分の要求を屢々変える、和平交渉は非常に延びている。これ故、外務省と企業グループは汪兆銘政府に反対を表明し、蒋介石との和平を指向している」。

日本にいるドイツの外務省の代表ゲンリッヒ・シタメルがオットーとゾルゲに語った、汪兆銘政権の公認問題は、独ソ協定無しには解決できない。ドイツの外務省は良く想像している、スターリンは汪兆銘の公認に賛成しないことを。これ故、その代わりとして、日本の参謀本部によって提起された中国の3分割を復活させることを提案した：中国の占領地は汪兆銘の管理に移す、北西部はソ連邦の管理に、残りの部分は蒋介石に。この計画の基礎には、ドイツの仲介による、ソ連邦と日本の相互理解の達成が予想されていた。

1940年4月、尾崎は中国へ出張した。戻ってきて、ラムザイに伝えた、上海へ旅行した結果明らかになった：日本政府内部に人物がいる、蒋介石と直接交渉を主張している。

全般的なデータを元に、4月初めに、ゾルゲは政治状況の素晴らしい分析を送り届けた、汪兆銘政府の成立後に生じた。ゾルゲは見なした、日本の右翼層の興味はアメリカとイギリスに密接に関係していると、これ故、日本政府は「イギリスとアメリカの援助の代わりにソ連邦を売り渡すことを何時でも準備をしていた」。これに反対するために、ラムザイは第一に、ドイツ側から汪兆銘公認の予防に力を注ぐように助言をした。彼はドイツ大使館と外務省における雰囲気を良く知っていた。それらは新政府を決して支持していなかった。

他面において、汪兆銘の公認のアメリカの拒否は、同時に、日本への援助の拒否を意味していた。これは日米関係を複雑にした。同時に、ソ連邦に対する連携の構築を困難にした。他の面では、ベネッカーの情報によれば、日本陸軍と海軍は、イギリスとの何らかの妥協を日本の外務省に警告をした。

ゾルゲはこれをして、アメリカとの相互理解を探ることを提案した、アメリカを日本との妥協に傾けるというイギリス政府の試みに抵抗するために、日本は独ソ連携に荷担することができるということを口実として。この代案をゾルゲは完全に除外した、当時の右翼グループの立場を考慮して。明らかに、彼は推定した、アメリカにはこれは完全に明らか

であると。このようにして、汪兆銘に対向するソ連—ドイツ—アメリカの連携の構築は、極東におけるソ連邦に対向する連携構築の全ての計画の破綻を意味している。

電報からはわからない、中央からの問い合わせの返答として、ゾルゲが分析をしたのか、それとも、文で主体的にしたのかは。プロスクロフの手によって余白に書き込まれていた：「情報グループによる。電報—特別通信である」。問題は次のことにつきる、自分の無謬性を信じ切っているスターリンが日本からの諜報員の助言をどれだけ気に入ったのかが。ソ連邦と日本の間の妥協の不可能性に関して、その後の出来事が示した通り、正確ではなかった。しかし、あり得たであろう、蒋介石との相互関係における若干の複雑さにもかかわらず、ソ連邦は蒋介石に援助を示し続けた、汪兆銘を無視して。

## ゾルゲ博士の分析システムは結果をもたらす

1940年のゾルゲの報告から判断して、彼は感じていた、情報を簡単に手に入れる以上を入手できると。緊張する毎日の分析の仕事は、自分の実を結び始めていた。ラムザイは短期間だけではなく、長期間にわたる極東における出来事の予想をするようになった。

第一に、これは日本の内政の基本的な方向に関わった。ゾルゲは大分前からわかっていた、その基本には、資源の獲得にあると。この獲得は満州の占領後急速に増大した、特に、1937年に中国での戦争が始まってから。当時、日本は資源の在庫の不足から、軍事商品の強力な生産に移行し、軍事方面へ経済を移行した。

気を向けておく必要がある、これをモスクワの専門家達は理解していたことを。軍事目的のために、大量の資源を放出することは、国の全ての資源において厳しい欠乏を作り出さないわけにはいかない。重工業に利用されるべき、輸入に頼る資源の依存性はますます増大した。

日本は全てにおいて不足を感じていた、石炭、銑鉄、鉄鉱石、石油。銅の生産は、1931年には、日本の需要を完全に満たしていた、1936年には62%だけがまかなわれた。生産の軍事部門の拡大は資源の枯渇を招いた、いくつもの一次生産物の所で、資源の形で。

**表1 日本における重要資源の生産、1936年における内需に関して百分率で。**

(石油は? \*)

資源の種類	生産	植民地からの輸入	他国からの輸入、満州を含む	満州からの輸入
銅	61.7	0.8	37.5	2.7-
アルミニウム	40.5	-	59.5	-
亜鉛	37.5	-	63.6	-
鉛	8.0	-	92.0	-
ニッケル	-	-	100	-
錫	28.8	-	71.2	-

日本の輸入において、特に軍事戦略的資源は、主たる地位を2, 3カ国が占めている。日本の対外貿易の70%以上を独占的に占めている。その主たるのはアメリカとイギリスである。太平洋国からは金属の73%、鉱石の73%、錫と鉛と亜鉛の100%、石油の95%、ゴムの100%。綿、毛、大麻、その他の全体の輸入は90%以上。

**表2 軍事戦略的資源の輸入に対する日本の依存性**

(石油は? \*)

資源の種類	輸出の主たる国	全輸入における割合 (%)
銅	アメリカ	97
鉛	カナダ	45
アルミニウム	カナダ	77
錫	英領植民地	57
鉛	カナダ	35
硫安	オーストラリア	32
	ドイツ	44

この依存性は、次第に日本経済を引きずり始めた、特に軍事産業を袋小路へと。1938年における国内市場での日本の購入能力は、1937年と比較すると極めて落ち込んだ。1939年には、日本は全力を集中して、基本は金属の輸入を増大させることができた、が、石油の輸入は減少した。軍事戦略資源の輸入の減少は、日本の金保有の進行している枯渇で説明された。

特に、アメリカ、イギリス、イギリス領インド、オーストラリアとの貿易バランスが芳しくなくなった。これらの国とのバランスを平衡にしようとの日本の試みは全て無駄であった。1938年と1939年における貿易バランスについての欠損を埋め合わせるために、日本政府は巨額の資金を支払わなければならなかった、金で約100億円。中国での戦争開始以来、日本はアメリカに6億ドル以上の金を輸出した。日本銀行の金の在庫は、1936年12月から1938年9月まで、3分の1に減少した、その上、アメリカ、イギリス、オランダではこれの在庫は安定して成長した。

ゾルゲは次第に結論にたどり着いた、価値のある天然資源を支配する指向と資源の依存性から免れる指向は、重要な理由となっている。日本の指導部がアメリカ、イギリス、オランダの植民地を占領するというあり得る決定の。

1939年に、ゾルゲが指摘していた、「南太平洋地域へのあり得る拡張の方向、もし世界の政治において異常な出来事が起こるならば」。日本の内閣の政治と彼に詳細に知られている帝国の経済の潜在力の分析から、彼は当時慎重な結論を出した。ガウスゴフェル博士の雑誌「ツァイトシリフト・フェル・ゲオポリテク」のために準備した分析概要で、ゾルゲが書いた、「日本にとっては、存在していない、”北の”拡張も、”南の”拡張も、何の他の”コンパスで示される”拡張は。今日、この拡張の方向の選択と島の帝国から日本人の脱出にとって決定的な因子となっているのは、近さ、大陸の地政学的配置である。

同じく、各敵国の軍事的政治的システムの弱さである。事の本質に従って話すと、此は中国での拡張を示している。その際、朝鮮は中国の一部として見なされている。この課題の決定後に、この数年の期間に異常に強力に形成された、日本は基本的な占領目的を自分の前に置いた。シベリアの果てしのないモンゴル草原の方向、或いは、南太平洋地域へ、インドシナへ、インドへ、或いは太平洋の島々へ・・・ 基本的な努力—日本の支配の拡張に向けられた—は近い将来に、中国に集中されるようになり、それに関係したことに。個々の攻撃的発言からすると、最大でウラジオストク、香港、あわよくばタイまで達するであろう」。

モスクワの、専門家達はこの傾向を同じく良く理解していた。リフが書いていた、「ヨーロッパでの戦争は太平洋における国際状況を変える。日本は中国の完全封鎖を確立しようとする。出来るだけ短期間で、中国での戦争を終了し、インドシナに、オランダ領インドに。太平洋における他の植民地の領有者達に自分の影響の拡大に取りかかろう。太平洋で強国との戦争の更なる先鋭化に行き着くのは避けられない」。

日本の政府支出の量的面の定期的研究に、ゾルゲは留まっていなかった。首尾一貫して長期にわたってそれを行なった。平行して多くの注意を予算の分配に割いた、武力の2つの主たる種類の。これについて、下に引用した総括的な日本の直接の軍事支出の表が物語っている。

軍事支出の全体的増加の傾向が明らかに見て取れる。同時期に、1937年の中国への日本の侵略後、武装の分野での政策が海軍のために変更された、進行の過程で陸軍の大規模な作戦実行中にもかかわらず。

多くのことがはっきり見えるようになった、1940年3月末に、政府の予算が審議され採択された時に。後になり、第2次世界戦争に参戦において、日本は補正予算を準備せざるを得なくなった。ゾルゲ博士は批判を行い、深刻さを持ってはっきり現れた危険な不均衡を指摘した。

1940年初め、「日本の陸軍・海軍強化の6年計画」についての情報をゾルゲは得た。この政府の財政計画は、同じく海軍の優先的な拡張を予定していた。日本指導部の戦略の再構築について証言していた、南アジアと南東アジアの領域で海からの打撃を加えるという目論見を持って。

**表3 1912年-1939年における日本の軍事費の分配の分析**

財政年	軍事費支出比 (%)、 政府予算の 全支出に対する	軍事費、 (100億円)	それらのうち (%)	
			陸軍に	海軍に
1912 / 1913	2.9	0.20	50	50
1918 / 1919	1.9	0.28	43	57
1932 / 1933	4.5	0.68	54	46
1935 / 1936	4.5	1.02	48	52
1936 / 1937	4.7	1.07	48	52
1937 / 1938	4.6	1.41	52	48

補正予算				
中国での戦争の予算	—	6. 4 9	7 7	2 3
1 9 3 8 / 1 9 3 9	4 3	1. 2 4	4 5	5 5

陸軍と海軍の予算における差違は、一見ではそれほどではない。しかし、日本の陸軍は100万人であり、2年に渡り休むことなく中国で戦闘を行っているということ、不可避敵に大きな損害、武器の原価損と弾薬損を被っていることを考慮するならば、この差は果てしなく増大した。

軍事予算の分析は情報によって裏付けられた、日本は南アジアの諸国への侵入の準備をしているとの、豊富な資源を求めて。そのような侵入のための前提は、いつも通り新しい軍艦製造と軍港の拡張に割り当てられる資金の増大であった。軍事予算の数値は、ゾルゲに、本質的に、極めて雄弁に語るものであった。彼は深い研究と不断の諜報活動の結果において、全ての事情に通じていた、日本の軍力の装備の充実度に触れる。

**表4 軍事費の分配は「日本の陸軍と海軍の強化の6年計画」に従っている**

軍事費の種類	(×100億円)	%
総額	11. 0	100
陸軍への支出	5. 4	49. 0
その内訳：		
軍の強化に	3. 1	28. 2
師団の再編と増強に	1. 4	12. 7
軍事産業への追加資本投資に	0. 8	7. 3
海軍への支出：	5. 6	51. 0
その内訳：		
新軍艦の建造に	3. 4	31. 0
軍港の拡張に	1. 0	9. 1
海軍の航空機に	0. 5	4. 5
軍艦の近代化に	0. 4	5. 6

示された全ての数値はラムザイによって、1940年2月に新聞「フランクフルト・ツァイティング」のために書かれたゾルゲの論文中に引用されたものである。ゾルゲは屢々この雑誌のために論文を書いていた。後になって、この新聞の編集長で責任ある同僚であるパウリ・ゼテ博士が思い出していた、ゾルゲは新聞から高額の報酬をもらっていたのであろうかと、新聞とは掛け持ちで協力していたので。「金銭的な目的無しで、ゾルゲは我々の所で働いた。私は思っている、彼は、第一に、考えを話す可能性を探していた、通常はうちに秘めておかなければならないものを。第二に、情報の収集の過程で臨時の全権を持ちたがっていた・・・ゾルゲを私は評価している、知識が豊富な人物として、実務能力、

客観性、自分の仕事のスタイルの正確性がある人物として。これらの特性の御陰で、彼は自分に多くの他の専門家達の評価を手にした、新聞に関係を持たずに・・・」。

## 中央が情報を要求している

ディキンとストリが断言しているように、1940年2月と3月に、ゾルゲ宛に、中央から電報が届いた。さらに詳細な情報を要求する、陸軍と海軍の武装と軍事産業における生産について。

1940年初めに発行された、ドイツの新聞と雑誌のためのゾルゲの論文から判断して、ゾルゲは積極的な分析を行っていた、彼にはモスクワへ伝えることがあった。

自分の状況を利用して、ラムザイは様々な情報源から情報を得ていた。1940年2月半ば、松木武官がゾルゲに伝えた、「飛行機、戦車、エンジン、その他の生産に関する工場の詳細なデータを、同じく、それらの生産能力についても」。1940年春、東京のドイツ大使館の職員が、合成燃料を開発している工場の名前を、その生産能力を、同じく、日本における鉄と銅の精錬についての詳細なデータを。

ゾルゲはユニークな能力を持っていた、モスクワにとって必要とされる情報を収集することにおいて。マデルの主張によれば、一度ならず彼は成功していた、彼がクラウゼンに話したように、「裏の裏で探し出す」。例えば、大島大使の所で、日本の軍事省からの宇都宮、山形の所で。公爵フォン・ウラフー極東におけるナチスの出版の特別全権を付与された軍事特派員はゾルゲ博士に新しい日本の軍事技術の希な写真を供給した。例えば、最新の戦車、自走曲射砲、空冷式機関銃と大砲。ポリフラング・フォン・ゴロウナウ、空軍に関する専門家、後になって東京における空軍武官、はうらやましさを持って知ることになった、ゾルゲは1936年に彼に資料を示した、日本の新型の飛行機についての、小口径の大砲と機関銃についての。彼はそれらをやっと入手することが出来た、機知に富むジャーナリストとして。元武官ゲルハルド・マトツキはこれらの年について苛立たしい様子で思い出していた。ゾルゲは日本軍の部隊配置、部隊の武力、それらの移動について知っていた、ドイツの軍機関より多く・・・」。

1940年3月、武官はゾルゲに伝えた、第106、第109、第110、第114、第116師団の配置場所について。

極秘

東部における出来事についての報告

第5/251506

1940年3月29日

### 1. 日独関係。

信用に値する諜報のデータによると、日本にいるドイツ大使オットーは、ドイツ政府の顧問であるヘリヘリグー独日経済関係を改善する課題で日本を訪問したと一緒にベルリンに電報を出した。日本をイギリスから離脱させる目的で、ドイツは日本の若干の深刻な経済的譲歩に乗り出す必要がある。



日本は日本で稼働していないドイツの汽船を必要としている、人口肥料とエンジンも。

電報で、オットーとヘリヘリグはドイツ政府の返答を得た、日本のどんな譲歩も原則的に拒否する内容を含んでいる、日本がシベリア経由でドイツのために商品の搬送に同意しない間は。

電報では、ベルリンの不満が強調されていた、日本によって占められている立場に。東京でのドイツ大使オットーの仕事の不成功に対する不満も。

## 2. 日本における政治状況

諜報データによれば、日本の参謀本部は、日本の国会の最近の会議で、多党からなる反政府グループの創設を試みた：久原、中島、大峰会、国民、その他極小グループ、米内内閣を退陣させる目的を持って。ベルリンにいた元日本大使大島がこの方向で活発に働いている、ドイツ大使オットーと連絡を密にして。大島は近衛をこの新しい反対派を主導するように説得するつもりであった、将来の首相として。今のところこの計画は失敗した。

参謀本部の指導部では、軍事内閣創設のアイデアが大きくなっている、日本の経済的困難が増大し続けているこの時に。もし近衛が新しい政府を主催することに同意しなければ、参謀本部は軍事内閣を直接に指導することになる。

結論：

ドイツは日本において活発な政治活動を継続している、日本の内政方針の変更を得ながら。日本の参謀本部の計画と大島の活躍は、多分、日本におけるドイツの政治と関係している。

プロスクロフ

当時、ジョー（宮城の呼称 \*）がゾルゲに情報を伝えた、大阪の自分の友人と友人「ミキ」から得た、最近満州から戻ってきた。これらの情報によると、関東軍は2年間にわたって、ソビエトの国境要塞下にトンネルを掘っていた。「ミキ」の友人達はちらりとこのトンネルを見た、要塞地帯の個々の対象物をどのように攻撃するのかを教えている指示書を目にした。トンネルには2種あった：火点の破壊のためと、第1と第2防衛戦の背後へ軍隊を勧めるため。両方のトンネルは、琿春（コンシュン）地区に近い東国境線にあった。諜報局の指導部は結構懐疑的にこの情報を受け取った、この情報は他から裏付けられていなかった。

モスクワ。赤軍第5局の局長へ

オストロバ、1940年4月23日

オットーが伝えている、日本の参謀本部、同じく、全ての経済層は納得している、新予算は実現することは完全に不可能であることを、致命的な経済結果無しには。これゆえ、日本の参謀本部内で、支出の削減問題に関して不一致が起きた。

日本陸軍の参謀部は、中国とカレサ（朝鮮？ \*）で、関東軍の支出の削減を要求している。というのは、陸軍は日本国内で資金のうち70%を支出している、中国にいる陸軍に30%。

不一致は、あり得る。先鋭化し、北の国境線で新しい事件を引き起こすことが、もし、中国にいる陸軍が彼らの視点の成功を得るならば。関東軍が欲する資金全部を獲得する必要性を示すことが出来るならば。

73番。ラムザイ

5月に、ゾルゲグループから極端に短い情報が寄せられた。多分、これは出来事と関係していた、西部で繰り広げられている。ラムザイはこれらの出来事に対する日本の右翼グループの反応についての情報を待っていた。日本政府は様子を見た、フランスへのドイツ

の侵攻がこの先どうなるのかを。

1940年5月10日、ドイツ軍はベルギーとルクセンブルグの国境で攻撃を行った、アルデンヌを経由してフランスに進撃していった、イギリス軍を回り込んで。すなわち戦略計画に従って。リヒャルトが既に3月6日に伝えた計画であった。ポーランドでのことと同じように、ドイツ国防軍は戦車の「楔」を利用した、敵の防衛戦を突破し、敵の後方補給路に積極的に突き進んだ。5月20日には既に、ドイツ軍はカレーに出た。連合軍の34万人の軍隊を海岸に包囲し、圧迫した。イギリスの司令部は、これら部隊のイギリスへの緊急撤退を指示した。2週間で、包囲された軍の大部分を撤退させることが出来た、この際、軍装備の全てがドイツ軍に残された。6月14日、ドイツ軍がパリに入城した。2日後、フランス政府の新しい首班であるペタン将軍が休戦を申し込んだ。

ヒトラーは素晴らしいスペクタクルを演出した：コンピエーニュの森で休戦協定が署名された。博物館から引き出してきたフェルディナン・フォッシュ将軍の司令部用の車両で。この車両で、1918年に、あの休戦条約が結ばれて、ドイツの敗戦を示した。フランスを2つに分割した：北部は占領地に、南部にはフランス政府が、首都をビシーとし、若干の軍隊も。海軍は武装解除となった。フランスの植民地はフランス人の行政機関の管轄に残された。

デキンとストリが主張しているように、5月25日、中央からグループの仕事に次のような厳しい批判が送り届けられた：「そちらの次のミッション、次の要求を満たさなければならぬ：我々は書類、資料、情報が必要である、日本軍の再編に関する。新しい組織はどのような兵団となるのか？ どのような兵団が最初に再組織されるのか？ 新しい兵団の名称は？ その司令官は誰か？ 我々は詳細な情報を手に入れたい、日本の内政における変更についての。出来事後の報告書は我々には不満である。出来事に先んずる情報が、我々には必要である」。

ラムザイは直ぐに応答した。5月29日、彼は伝えた、オットーの情報から、海南島にいる日本軍はオランダ領インドシナに対して軍事行動の準備をしていると。陸軍と海軍の司令部は、南への新しい軍事行動に未だ入りたがってはいなかった、フランスにおける軍事行動の終結を待っていた。「ヨーロッパにおけるドイツの勝利が確かになれば、新ドイツの反対派は政府と指導グループに、南への作戦を開始し、内閣の改造を強いる」。

1940年5月、ラムザイはモスクワに報告した、オットー、松木、シタメル、「他のドイツ人とリップントロップの大事な顧問」らの意見を元にして作成した。

報告書の基本的な結論を、彼は5月29日付けの電報で繰り返した。ゾルゲはナチスの高位指導者における2つの傾向を説明した。第一の視点、ドイツのより若いエリート達が持っている、は侵略的特徴を帯びており、近い見込みではソ連邦との戦争を照準していた、西での勝利の後に。日本はこのグループを戦略上の同盟者と見なしていた、彼らを東でソ連邦に対して利用できるものとしていた。

第2の視点は、ドイツ指導部のより熟練し経験豊富なグループより重要な政府内での地位を占めている一はソビエト連邦とは平和的關係を指向していた。ドイツの政治的、経済的、軍事的優位差をソ連邦が認めるという条件の下で。このグループは、自分の興味のもとで、ソ日の矛盾を利用したがっていた、が、同時に、その代わりとして、西の国々に対するドイツの指導の下で、ドイツーソビエトー大アジアブロックの創設を見込んでいた。

見なしていた、このブロックは日本に向けられ、対抗させるものであった。日本の「ヨーロッパでのドイツの戦いに関して、期待の持てない、あやふやな態度」の故に。この視点をオットーとシタメルが堅持した。シタメルはリップントロップの右腕であった。

電報の資料により、決裁に従って、特別通報が作られた。

6月4日、ラムザイは補足を送った。彼は以下の事を伝えた、2つのグループは日本を利用する意向で一致した、ソ連邦への圧力的手段として、ヨーロッパでのドイツの勝利後。

さらに、ゾルゲは提案に移った。彼は書いた：「そのような政治をすることは必須である、ドイツもイギリスも彼らの勝利の場合に、ソ連邦に対抗する必要な同盟国として日本を見なすことは出来なかったために」。この目的を持って、彼は次のような作戦の変形を提案した：

1. 最も有効な中国への援助となるのは、日本の弱化である。
2. ソ連邦と一緒に、中国との政治経済ブロックの構築のために、ドイツに影響を示すこと、西と日本に向けられた。
3. もし、この政策を実現できないならば、アメリカと交渉を始めること、全般的な反日本的政策の問題について、中国と全極東に関して。

著者には、ラムザイのこの提案について諜報局の指導部の関係がわかっていない。とにかく、慣習に従って、「登録して」おいた、が、上部に報告しなかった。

## 日本は南に進軍を開始した：インドネシア

1940年6月9日、日本政府はソ連邦と、ハルビンーゴール地域の国境線についての同意に署名した。1940年7月2日、ソ連邦の外務省の人民委員モロトフとモスクワにいる日本大使である東郷茂徳との会議で、ソ連邦との平和、友好関係、相互の領土保全の尊重を維持したいという日本の意向が声明された。大使の言葉によれば、日本とソ連邦間の関係は、原則の遵守のもとで安定化する：もし、両国のうちの片方が第3国からの侵略にあったならば、他方は侵略国を助けないこととする。このテーゼの発展として、東郷は、中立に関するソ日条約の計画をソビエト指導部の審議に付した。

6月10日、ドイツの勝利に関して新ドイツの雰囲気が増大について伝えた。彼の意見によれば、これは証言するものであった、将来の日本政府は南に大きな注意を振り向け、それに応じて、ソ連邦のための危険が小さくなることを。

中央はラムザイに問い合わせた、オランダ領インドネシアに関する日本政府の計画について、オランダを経由したドイツの進撃に関係している。ゾルゲは返答した、日本がどのような方法をとるかは、知らない。同時に、彼の情報によれば、日本の陸軍と海軍は、インドシナ半島に大いなる興味を表していた、オランダ領インドネシアではなく。尾崎が伝えた、日本とタイとの間の平和と友好条約の締結の結果、南への進出において、日本の拠点はより確固としたものとなった。タイの首相ピブンソングラムは親日的である。

同じ頃、ラムザイが伝えた、影響力のある日本の階層における危惧感について。イタリアにいた日本の元大使白鳥がオットーとの話し合いで、彼（オットー？ \*）のアイデア

を確りと否定した。日本、ドイツ、ソ連邦、中国の間の協定についての、日本の束縛を解く目的を持って、イギリス、フランス、アメリカに対抗する。白鳥の意見によれば、日本の参謀本部は考えを傾けている、もし、ドイツがソ連邦と戦争を開始したならば、日本は即刻ドイツと同盟するという。帝国にとってはより危険となろう、もしドイツとソ連邦が友好的になったならば。この場合には、白鳥の意見によれば、帝国にとって、ソビエト-アメリカの脅威が極めて増大することになろう。

同時に、ラムザイは意見を語っていた、近衛内閣が政権に就いたことは、ソ連邦とのより肯定的な関係を示したとの。

インドシナ半島への侵攻準備についてのゾルゲの情報は、日本にいる武官によって確かめられた。1940年6月半ばから始まり、グシェンコから日本における新しい大動員についての情報が出てきた、イタリア、フランス、イギリスの武官との話から得たデータについて。内容は次のことであった。ドイツ、イタリア、日本の間において、合意が達せられた、フランスの植民地、特にインドシナ半島の関係において作戦の自由は後者に任された。この際、日本は同時に蒋介石への武器の供給を遮断するつもりであった、インドシナ半島を経由しての。

日本を東アジアの繁栄圏として認めるドイツは、フランス領インドシナ半島とオランダ領インドに関する自分の一定の権利を認めることを強いた。これは客観的に存在した状況から生まれ出た、ドイツはフランスと休戦協定を結んだので。フランスは地域の一部を所有し、オランダはドイツ軍によって占領されていたから。しかし、これは全く意味していなかった、日本がこの権利を認め、日本とドイツの間で合意が達成されたことを。日本には、ドイツに通知する約束だけが委ねられていた、フランス領インドシナ半島における何らかの作戦を前に。ラムザイはこれらの交渉の全ての詳細を知っていた、オットー大使とシタメルから。彼はまた全ての電報での指示に触れてもいた、ベルリンから、ドイツ政府からシタメルに届いた。定期的にモスクワに情報を送った。

1940年6月22日、ゾルゲが伝えた、オットーがリップペントロップに助言した、日本に許すことを、インドシナ半島での作戦の自由を。同時に、日本にインドシナ半島を占領するようにと。この進撃の目的となったのは、アメリカをヨーロッパから目を離させることであった。そして、日本をドイツ側に引き入れることでもあった。

6月24日、ラムザイは、日本の全師団における総動員についての情報を送った、中国に決定的打撃を与えることを目的として。が、フランス領インドシナ半島と香港の事前の占領を伴った。6月27日、「ユリイ (? \*)」が南中国への日本軍の進撃開始について伝えた。

ゾルゲ博士の予想は的中し始めた。

モスクワ。赤軍第5局の長へ。

複写：シテルナへ

東京。1940年6月28日

民間人から私が得たデータによると：

1. 東京に住んでいるアメリカ人の中で、西と東へのドイツの進軍を一時止めるために必要なことが話されている。これはソ連邦とアメリカが一緒になってすることが出来る。多くのアメリカ人が日本からの避難の準備をしている。

2. 東京にいるドイツ人の仕事仲間の中で、ソ連邦とドイツの戦争の不可避について話されている。その際、この話は秘密となっており、会社内でお互いに大きな秘密のもとで伝えられている。

私は見なしている、これらのデータは基本的に正確であり、我々側からは十分に注目しておく必要がある。

第102。ユリイ

コマロフが解説

日本と蒋介石の間の和平の可能性について噂に尾ひれを付けることが再び活発に始まった。グシェンコがイタリアの武官との話し合いを持ったことについて伝えた、武官は確認した、日本と蒋介石は再び和平の問題を入念に研究していることを。

それにもかかわらず、北京のロカグループ（？ ＊）が6月29日に伝えた、「アメリカ人の確かな情報によれば、重慶は戦争を継続するであろうと、インドシナ半島とビルマを經由しての供給が遮断されても」。

7月17日、日本側からの圧迫を受けている、イギリスはビルマの幹線道路の閉鎖に同意した、最も重要な道路、南と中国の南西部を繋いでいる、外部世界と。この後、中国へ外国から資材、燃料、武器を送り届ける唯一のルートとなったのは新疆自動車道路であった。この道を通じて、絶え間なくソ連邦から飛行機、戦車、大砲、機関銃、軍事物資、燃料が送られた。

イギリス政府は出来ることは全て行った、日本の指導部を刺激しないで「北」側に「軽く」押しやるために。ソビエト政府は、中国の抵抗継続に興味を持ち、クレジットに関する自分の責務を完全に履行した、これが日本との対決を避けられないものとするにもかかわらず。

## 近衛第2次内閣：新しい急変

1940年の春と夏における、オランダとベルギーの強奪、フランスとイギリス軍のダンケルクにおけるあつという間の壊滅、ヨーロッパにおけるヒトラーの他の軍事的勝利、は日本の体制に魔法のように作用した。東京は自分の同盟国の選択における自分の迷いを捨てることに決めた。そして、ドイツ側に断固として立った。日本の右翼グループは、都合の良い時期を逃すことを心配した。或いは、東京で語られていた、「バスに乗り遅れることを」。西の強国の植民地を占領するための。

7月6日、ゾルゲが伝えた、「南方への日本人の集中が決まった」。同時に、新疆とモンゴルにおける問題において、ソ連邦との相互理解への日本の意向がはっきりとなった。オットーの言葉によれば、インドシナ半島やそれより南への日本の進軍に反対するつもりはドイツにはない。そのようにして日本がアメリカと衝突することを見越して、その際には、傍観者の立場に立つことにして。当時、ドイツの指導部は蒋介石との関係を維持したがっていた。

7月13日、ラムザイが伝えた、オットーがイギリスとフランスの植民地、同じくオランダ領インドネシアの強奪について近衛を強く突き動かしたとの。この情報は部分的に日

本の出版物で正しいことが判明した。日本の新聞の一つに、グシェンコが伝えたように、必要性についての記事が掲載されていた、「太平洋の南部を力で奪取すること」の。新しい借款の提案を持った高官のアメリカ代表の日本の訪問にもかかわらず、7月20日、全日本に新しい動員が宣言された。これについて、遅れることなくモスクワに知らせた。

リップントロップがオットーに電報を送った。その中で、独ソと独伊関係の状態に満足していることが表現されていた。また、リップントロップは伝えていた、イギリスとの戦争の継続することの合意の達成について。この際、「イギリスに対する作戦は技術的にも戦術的にも、全てにとって全く予想外なこととなるう」。

が、有田が日本の外務省のトップであった間は、日本側からの決定的作戦は予定されなかった。指導部に新しい人物の到来が要求された。1940年7月、米内政府は近衛内閣に取って代わった。尾崎の情報によれば、米内内閣はヨーロッパにおける事件の拡大に関係して崩壊した。親独グループの圧力によって、軍首脳部にいた。

外務大臣に松岡洋右がなった。新内閣の組閣と共に、日本、ドイツ、イタリアの間の3国同盟の手続きが彼の最初の仕事となった。松岡はオットー大使に語った、日本がドイツと同盟を締結することが出来ることは素晴らしいことであると。

語っておく必要がある、この声明まで、ドイツはドイツにいる日本大使大島を経由し、オットー大使を経由し、同盟締結に関して日本へ公式の提案をした。このようにして、松岡の返答はそれなりの同意であった。その後、日本へ、特別使節としてシタメルがやって来た。彼はオットーと一緒に松岡との交渉に出席した。そして、3～4週間を経て、両方は特別な変更もなく、提案された同盟の計画に同意した。校訂だけが残された。

目下の条約の規定はソビエト連邦には適用されなかった。ソビエト連邦はドイツとの間に友好条約があった。このようなわけで、条約の主たる対象はイギリスであった。しかし、条約の効力はアメリカに拡張されていた。もし、アメリカがドイツに敵対する場合には。当事者の一方である近衛と松岡と、他方の当事者であるオットー大使との間で、いろいろな場合において同盟の規定の積極的適用について会議を行った。両方の当事者は主たる規定に同意した。どちらかの当事者に、任意の政府が侵攻した時、相互援助を示すことについて。後になってゾルゲが書いていた、「この問題に関して詳細な報告を、私が準備し、モスクワへ送った。ソビエト連邦は第一に次の問題に興味を持った。この同盟はソ連邦に対したもののなかのどうか。このようにして、出来事は大きくなっていった、私が以前に指摘したように」。

1940年7月、シタメルがゾルゲに伝えた、「日本、ドイツ、イタリア間の3国同盟の対象は、イギリス、アメリカである、ソ連邦は例外である」。

松岡の明瞭な新ドイツ的傾向にもかかわらず、ゾルゲの評定に従えば、過激で親イギリスの要素の間に妥協を示した。日本の外交のゆっくりで中途半端な変更を示すことで。この評価は次のことで確かめられた。松岡はアメリカの日本大使に、親アメリカ的傾向を持っている野村吉三郎を任命した。尾崎はゾルゲの注意を振り向けた、ルーズベルトを始めとしたアメリカ人の多くの活動家との野村の知己以外に、彼の任命は、アメリカとの交渉を開始したいという松岡の希望と関係していたことに。

オットーの意見によれば、米内の退陣に関して、親イギリスの日本の政治は最終的に終了した。しかし、従来通り、不明瞭のままであった、日本の反アメリカ的政治がどれだ

け進むのかは、日本とドイツの間でどれだけの親密さが確立されるのかは、日本とソ連邦の相互関係がどうなるのかは。リップントロップの優柔不断がソビエトの指導部に可能性を与えた、日本との関係において、その作戦に大きな影響を持つことの。

ゾルゲは非常に重要な細部を伝えた：尾崎が見なした通り、蒋介石にとってはもっとも危機的な瞬間がやって来た。イギリス人にはビルマの道での荷物の搬送が中断しただけではなく、蒋介石への圧力となった、国外への彼の出国をその気にさせる目的を持っての。同時に、中国への自身の仲介を日本人に提案する。日本の指導部はどんな仲介も否定した、数ヶ月のうちに、重慶の降伏を確信していた故に。陥落を予防するために、蒋介石はソ連邦とアメリカ側からの緊急援助を要求した。

ラムザイの情報からすると、日本の参謀本部は既に、香港を砲撃するための重砲を準備した、もしイギリスが平和裏に町の引き渡しを拒否するならば。軍は近衛に対して、香港の至急の占領に同意することを要求した。

7月27日、近衛内閣は、「国際状況に於ける変化に対応した手段の計画」を承認した。この書類には、重要な課題として、「大東アジアに於ける新秩序の構築」がはっきりしていた。計画で予定されていた：1. 日本、ドイツ、イタリアの同盟を強化すること；2. ソ連邦と不可侵条約を締結すること。それにより、戦争に対する武力の準備を行うために、それは敗北を排除しよう；3. イギリス、フランス、オランダ、ポルトガルの植民地の編入のために積極的手段を実行すること、東アジアに於ける日本の「新秩序」圏内にある；4. 東アジアに於ける「新秩序」の創設の過程で、アメリカの軍事干渉を除去する断固とした決断をすること。

この時期、日本の参謀部と政府では、熱い議論が交わされていた、日本の将来の拡張の方向の選択について。陸軍は北への軍の移動に固執し続けたが、陸軍の立場はハッサンとハルヒンゴールでの事件で大にくじかれた。これ故、南洋への進軍が優先された、そこにはイギリスとアメリカの興味があった。「北の問題」の解決は延期された。

このように、「方策のプログラムにおいて・・・」は、「2方面での戦争を回避する」という要求が登用され、ソ連邦との中立条約の締結が、日本外交に於ける優先的課題の一つとなった。東京日日新聞が7月16日付けで書いていた、「ソ連邦との関係は、ソ独の不可侵条約をベースとして処理されなければならない。この道によって、日本は北の国境線の安全を担保することが出来る。南への拡張の政策を実現できる可能性を日本に与えてくれる。これはまた日本に、アメリカとの戦争に対しての準備を日本に与えてもくれる」

興味を引く、8月3日付けの自分の電報で、ゾルゲは近衛の外政の基本的方向の特徴を提示していることは。それは極めて違っている、「国際情勢に於ける変更に対応した方策のプログラム」とは、「太平洋に於ける戦争の歴史」に掲載された。

モスクワ。赤軍参謀本部の諜報局長へ

オストロバ、1940年8月3日

情報源「オットー」が探り出したように、近衛の外交は次のことに帰する：

1. 反イギリスの政治家側における変化、イギリスに対するドイツの進撃の成功に依存している、それは、期待されていたように、7月18日に開始されるに違いない。
2. ドイツとイタリアの密接関係、が、同盟の締結はない。

3. アメリカとのあからさまな衝突を避けたがっている、すなわち、これ故、松岡は外務大臣のポストを得た。

4. ソ連邦との相互関係の改善、若干の条件下で、必要な場合に、不可侵条約の締結さえ。しかし、この最後の一步（不可侵条約）は今後の出来事の結果次第である。とにかく、現在、近衛は未だ軍部の支配下にはない。軍部は星野と松岡と一緒に行動している。軍部は近衛と一緒に或いは近衛無しに、軍部は結局、軍事独裁の準備をしている。

135号、136号 ラムザイ。

気づくことは難しくはない、ゾルゲの叙述中に、近衛内閣の外政の基本的方向がより小さい対決の特徴とより大きな緊迫した特徴を帯びていることに。これはイギリスとアメリカとの関係において、同様にドイツとイタリアとの同盟においても。ソ連邦との関係においても、一義的ではない—関係の改善のコースが声明された—これは可能である「一定の条件下で、必要な場合に」。同時に、軍事独裁のあり得る樹立に関する危険性が語られた。（その後の出来事が示した通り、この危険性は根拠があった）。

尾崎が伝えたように、噂が広まっていた、近衛は政府の首班となることに同意した、条件の下で、軍部が政治に干渉しないという。しかし、軍指導部との交渉の結果は約束として見なしてはならなかった、厳しく守ることを決心させる。近衛は当分軍部を満足させた。しかし、すなわち、当分。

近衛内閣の組閣には、期待が関係していた、新しい政治システムの構築と新しい政策の遂行の。尾崎はゾルゲにこの問題に関する理由を提出した。近衛殿下は声明において、軽井沢で行われた、強調した、彼は断固として「将軍政府式」での権力の創立を避けると。

7月末に、ヒットラーとドイツ参謀本部では、固い信念が熟した、イギリス本島への大陸の準備と並んで、軍事外交の努力に着手する必要性に、1カ所に戦力を集中させることをイギリスにさせないために。7月31日、ベルグフォフで、会議が行われた。その会議で、総統が長演説を行った。ドイツ陸軍の参謀長ガリデルの簡潔な発言の内容は、「・・・我々はイギリスには進撃しないであろう、幻想を打ち砕く、イギリスに抵抗の意志を与えている。その時、イギリスの立場の変更を期待することが出来る。とにかく、戦争は勝つ。フランスは「イギリスの獅子」から脱落した。イタリアはイギリス軍を身動きできなくした。潜水艦隊と空軍は戦争に決着を付けることが出来る。が、これには2年から3年かかる。

イギリスの期待は、ロシアとアメリカである。もし、ロシアへの期待が崩れるならば、アメリカは同じようにイギリスから剥がれる。とにかく、ロシアの壊滅によって、東アジアにおける日本の有りそうもない強化が追う。

ロシアは、日本に対するイギリスとアメリカの東アジアの剣である。ここに、イギリスにとって不穏な風が吹く・・・イギリスはロシアを特に当てにしている」。

7月末に、オットーと松岡の会談が行われた。松岡がオットーに語った、今、主要な問題は蒋介石の抹殺であり、とにかく妥協は不可能であると。その後、松岡は打診した、日本の意向に関するドイツの立場について、「東アジアにおける日本の影響圏の拡張すること、南太平洋の地域を含んだ」。この際、松岡の見解によれば、その「拡張」は戦争無しに実現することが出来る、という期待があった。オットーは日本の外務大臣に言った、「ドイツは現在ヨーロッパのことで忙しい、ドイツには興味がある、もし、日本が全東アジアに優先的状态を持つならば」。



同時に、オットーが3つの事前の条件を持ち出した、肝心の協定の締結までに、日本が遂行しなければならないという：

1. ドイツの敵に対してそれなりの活動をする事；
2. 購入された商品の移送に最大限の保証をすること、シベリア鉄道で満州を經由しての；
3. 中国における日本の軍事行動で、ドイツの商人が被った損失を埋め合わせる事。

会議の後、数日を経て、松岡はオットーに電話をして、話した、提示された3つの条件は内閣で承認されたと。

この会議の詳細を、ゾルゲは直ぐにモスクワに伝えた、そこで彼の情報は大きな興味を持って迎えられ、第2番書類として配布された(国の軍事政治指導部の拡大メンバーに)。

宮城の情報によれば、日本の指導部—フランス領インドシナ半島の占領の準備をしている—はドイツ、イギリス、アメリカとの紛糾を心配していた。予想された、近いうちに日本がインドシナ半島を占領することが。香港はというと、イギリスへのドイツの進軍が最盛期にならないまで待機するという理由がある。8月10日に中央が受け取った電報で、ゾルゲはもう一度、ソ連邦にとって有利な方向へ、リップントロップに働きかけることを執拗に勧めた。ゾルゲが書いていた、「私は考えている、貴方は大きな影響力を持っている、リップントロップの将来の意向に、日本との関係において」。

7月2日に東郷大使によって提案されたソ日中立条約の計画に、8月14日、ソビエト政府の反応がようやく続いた。モロトフは東郷を招待し、彼に次のように語った：「日本政府によって提案されたソ連邦と日本の中立条約アイデアに関して、ソビエト政府は肯定的な関係を確認する。もし、これに関して、日本だけではなくソ連邦の興味も考慮されるならば」。

条件を言っていた：1925年の北京条約の廃棄、両国間の相互関係を基礎として、ポーツマス条約を有効に残す；北サハリンにおける石炭と石油の権利の解消、正当な補償の条件で、利権所有者によってなされた投資に対して；次のことの考慮、ソ連邦は中国や他の国との関係において悪化を被りかねない、太平洋と南洋に大いなる興味を持っている。その結果、ソビエト連邦に大きな損失をもたらしかねない、経済部門だけではなく。これ故、日本との中立条約締結まで、ソビエト政府は日本政府から得ることを希望した、その立場の説明を、この損失を最小限にするために手段の質問に関して。

「国際情勢に於ける変化に対応した方策のプログラム」を採択したにもかかわらず、日本政府は、第一に東アジアにおける深刻な仕事に割り込むことを恐れ、南方への自分の進出へのドイツの支持を期待した。ドイツにいる日本大使大島はオットーと会談をし、質問した、日本の東アジアの新しい政策にどの程度興味があるかと。オットーは極めて厳しく返答した：「ドイツはヨーロッパのことで忙しい、日本のアジア政策に何らかの興味を持つのは、日本が示すことが出来る時だけである、日本人がドイツに何らかの利益をもたらす時」。

8月17日、ゾルゲから、非常に興味を引く報告がやって来た。南方へ進出する日本の計画に関してドイツの外務省の本当の態度を特徴付ける。オットーが「ラムザイ」に、ドイツ外務省極東部の局長の手紙を見せた、日本の態度と東アジアの植民地におけるドイツの視点に関して。これらの視点は次のことに帰着する：

1. フランスの降伏時、ドイツは東アジアへの日本の進出に興味はない；
2. 許してはならない、ヨーロッパの植民地が日本の所有となることを；
3. イギリスとの戦いにおける日本の援助は結構疑わしい、それはドイツには考慮されていないので。

実際に、この時日本政府は出来ることを全てやった、イギリスとアメリカとの直接の軍事衝突に至ることがないようにするために。尾崎がラムザイに伝えた：「日本はインドシナ半島とオランダ領東インドにおけるの優先権を得るために、せつせと努力をするであろう。アメリカとの衝突を避けながら」。

9月14日、ラムザイはモスクワに伝えた、シタメルが東京を訪問した、リップントロップの特命を持って。日本と新しい政府との密接な共同を得るために、以下の事を基本として：

1. オランダ領インドシナ、シンガポール、全ての南洋の島々における日本の影響を、ドイツは完全に認める。
2. ドイツは南太平洋において、日本の譲歩を要求する。
3. ドイツは日本に対して明確な反イギリスの行動を要求する。同じく、太平洋におけるアメリカに対抗するドイツの支持も。

再度強調した、育っている独ソ協力を鑑みて、同盟締結に関する交渉はソ連邦に対抗する方向に向かないことを。オットーは見なした、モスクワの大使として立川の任命を、最初の兆候として、日本のアメリカとイギリスに対向する方向の。ソ連邦との相互理解を見いだそうとする日本指導部の試みと、南方への進軍のために手を自由にするための。

オットーの意見は9月16日に確かめられた、以下の事が明らかになった時に。日本の天皇とその取り巻き達は意見を表明した、親イギリスと親アメリカの立場に対する硬い拒否についての。日本人は蒋介石との和平を得たがっている、ドイツの仲介を持って。同じく日本のソ連邦との接近を、ドイツが助けてくれることを。

モスクワ。赤軍参謀本部の諜報局局长へ

オストロバ、1940年9月21日

オットー大使から。天皇の代表者達の特別会議が、日独協定を完全に承認した。

日本人は条約の署名の準備が出来、オットー大使にその署名を急ぐように圧力をかけている。条約は英文で署名されるであろう。条約の細かい部分は今後、オットー大使と松岡によって正確にされるであろう。

これに関係して、リップントロップはイタリアに向かった、イタリアの同意を得るために。オットー大使はリップントロップからの早い返答を待っている。オットーが私に伝えた、イタリアの加入後、ドイツの条約は新しい条約となる、直ぐに公開されるであろう。若干の秘密の部分は公開はされない。新しい条約の秘密の部分には、全ての軍事的、政治的、経済的問題での交渉が予め見越されている。

更なる内容：ドイツ側はこの条約にソビエト連邦を引き寄せる試みをするであろう。条約中には、ソ連邦に対抗する点は何もない、それは公開される。オットーの意見によれば、ソ連邦における新しい大使の任命後、日本側は、ソ連邦との不可侵条約の署名のために取りかかるであろう。

73号、74号、75号、ラムザイ

## 3国同盟

緊張した議論の4週間後、1940年9月27日、東京で3国同盟が調印された。それにイタリアも参加したのである。ベルリン—ローマ—東京の軸を形成した。尾崎が伝えた、3国同盟の締結を急がせた要因の一つに、ソビエト連邦が満州で自分の勢力を拡大しているという情報があった。

この協定の本質は次の点にあった。同盟は主としてイギリスに向けられた、同時に、ヨーロッパと極東における枢軸国に対抗する戦争に、アメリカの参加を予防することにもあった。もし、アメリカがドイツに対しての戦争に参加する場合には、条約はアメリカに対しても向けられる。

ソ連邦はというと、条約には5つの条項があった。それにはソビエト連邦を条約の機能圏外とするという規定が含まれていた。

しかし、これについては、ドイツの指導部の本当の意向を、軍人的素直さを持って自分の軍事日記に、ハルダーが書いていた：「明かである、今週中に、日本とイタリアとの同盟が締結されるであろう。条約は効力を発揮する、ヨーロッパ或いはアジアでの戦争に、新しい敵国の干渉があった場合に。この同盟はアメリカとロシアに向けられている」。

シタメルの東京訪問時に、日本とドイツの間で、合意が達成された。それに従って、ドイツの指導部は、日本とソビエトの関係改善に「誠実な仲介」の役割をする準備があることを表明した。ソ連邦にいるドイツの臨時大使チップリスキルフが9月26日、モロトフを訪れ、リップントロップの名代として説明をした。特に次のことを：

「1. 民主主義国で戦争の点火のキャンペーンが行われ、イギリスの最終的な征服の現在の状況で、戦争の拡大と長期化での最後の出口を探し、ドイツとイタリアの間で交渉を行った、一面で。日本とは他面で。この交渉は、多分、近いうちにこれら3国間の軍事同盟の署名に至る。

2. この同盟は、その誕生の理由に従って、民主主義者の戦争の挑発者に例外的に向けられたものである。条約ではこれにもかかわらず、慣例に従って、直接には話されないであろう。しかし、これは出てくる、その定式化から全く明瞭に。

3. 自明の理だ、この条約が何の攻撃的な目的を追求していないことは。その例外的な目的は、次に向けられている、戦争の長期化と拡大へ指向させる要素をたしなめる、彼らにはっきりと示しながら、現在進行中の戦争への参加の際に、彼らは自動的にこれら3国にまず第一に敵対することになる。

4. 交渉の始めから、条約国間に、完全な同意が存在した。彼らの同盟はそんな形でも関係には触れないという、各国がソ連邦と持っている。この点に関して全ての疑念を完全に除去するために、条約に特別な項目が入っている。条約を締結した3国の各々とソビエト連邦の間に存在する政治的状态について話すと、条約ではそれには触れられない。この決定は示している、これら3国とソビエト連邦とで結ばれた条約だけではなく、特に独ソ条約、1939年秋に署名された、完全に効力を持っている、が、これはソビエト連邦との彼らの政治的關係の総体に関係している。

5. 考えておく必要がある、民主主義国家にいる戦争の挑発者達に、この条約はおとな

しくさせる影響を与える。それは現在の戦争の将来における拡大に抵抗するであろう、この考えにおいて、多分、全世界的な平和の復興の役割を果たす・・・」

この声明、手紙の形式でなされた、はモロトフに十分な用心の反応を引き起こした。彼は要望を表明した、3国同盟についての条約文を見せて欲しいとの、さらにその補足の秘密項目も、もしそうすることが出来るならば。この時、モロトフが指摘した、もしソビエト政府が似たような条約を締結したならば、ソビエト政府はそれをドイツに見せるであろうと。同時に、モロトフはチッペリスキルフに質問した、ドイツーフィンランドの協定の調印についての報道を解説してくれるようにと、ノルウエーへドイツ軍のフィンランドを經由しての通過についての。特に、ユナイテッド・プレス通信社が伝えた、9月24日、ドイツ軍のフィンランドのバーザ港への上陸について、軍と一緒に到着した高位の将官達が町のホテルに入ったことも。この際、モロトフは付け加えた、彼はドイツ軍の上陸についての情報を持っていると、同じく、フィンランドの町ウレアボルグとポリへ。チッペリスキルフが語った、彼はこれについてはジャーナリストからだけ耳にしたと。しかし、モロトフは語った、明らかに、ドイツとフィンランドとの間に、何らかの条約が結ばれていると、それについて、ソビエト政府は情報を得たがっている、同じく、その条約と補足の秘密条項の完全な文章を、もしそれが出来るならば。

1940年9月末、モロトフは、メモ「3国同盟についてのベルリン条約」を準備した。このメモは9月30日に公表された、新聞「プラウダ」に署名無しの社説として。

モロトフの「3国同盟についてのベルリン条約」のメモから

1940年9月30日より遅くはない

条約の重要な特徴の一つは次のところにある。それは公然とその参加者達の影響範囲と参加者達の間での範囲の分割を認めている、これらの範囲の相互の保護の約束を持って、他の国からの企てに対する。もちろん、第一にイギリスとそれに友好状態にあるアメリカ側からの。「大東アジア圏」は日本に委せることに条約は同意し、「ヨーロッパ」はドイツとイタリアに。他の問題—影響範囲の詳細な分割の仕事を実現することは、条約の参加者達は成功するのであるか？ 疑いがない、詳細な計画の実現は、戦争をしている国の現実の力関係に依存していることは、現在の入口と出口に、より先鋭化している戦争の。

条約の他の重要な特徴は、それにあるソビエト連邦に関する但し書きである。条約に示されている：

「ドイツ、イタリア、日本は声明する、この合意は決して触れない、政治状況に、現在3国の各々とソビエト連邦との間に存在している」。

この但し書きを理解する必要がある、第一に、中立の立場に対する条約参加国からの敬意として、ソ連邦が戦争の初日から行っている。

さらに理解しておかなければならない、ソ連邦とドイツの間の不可侵条約とソ連邦とイタリアの間の不可侵条約の効力と意味の確証として。

平和と中立の自分の政治に忠実な、ソビエト連邦は、自分から、確認することが出来る、この彼の政治は、彼に依存するであろう故に、変わることなく続くであろうと。

極めて注目に値する、ソビエト指導部の警戒は、その時期に次のことに現れた。9月1日から26日まで、軍事演習が行われた。西特別区、レニングラード特別区、ザカフカス

特別区、キエフ特別区、ザバイカル軍管区で。しかし、ソビエト指導部だけが警戒したわけではなく、ドイツ指導部も警戒した。9月29日と30日に、諜報局とベルリンとビシーの内務人民委員部（НКВД）が得た諜報データによれば、ドイツは先の2、3週間に西から東に約20個師団を移動した。ベルリンの「メテオル」の情報によれば、「ドイツは恐れていたし、恐れている、ドイツとイタリアと日本の条約が、ソ連側から対抗処置を呼び起こすことを」。

3国同盟の署名後、ベルリンの基本的な課題は次のことであった。イギリスに対する戦争に日本を引き込むこと。ドイツはイギリス島に侵入する最初の試みに失敗していた。それ故、ヒトラーは決断した。ヨーロッパに形成された手詰まりの状況を変えるのは、極東での戦争の開始で変えることが出来ると。ゾルゲは形成された状況を次のように評価した：「ドイツ人は確信している、シンガポールへの日本の進撃は、地中海と大西洋におけるイギリス海軍の縮小をもたらすと。そして、イギリス島へのドイツの侵入を実現させてくれると」。

オットーはベルリンから公式の指令書を受け取った、日本政府にシンガポールへの進撃を説得するよう試みることを指示する。丸一週間、彼は武官と、毎日大使館で会っていたようである、図上演習のために、シンガポールに進撃する作戦の前に必須である。ゾルゲは主張した、彼はこの会合に在席していなかったと、目撃者の証言があるにもかかわらず。少なくとも、彼は一度この模型を研究した、大使と一緒に作戦を調べた。

この研究からなされた結論は、日本の陸軍と海軍の司令部に伝えられた。しかし、「彼らは笑顔で迎えられた、ドイツ人は何の確りした返答を得ることは出来なかった」。

他の面では、オットーがゾルゲに語った、3国同盟は同じくアメリカに向けられていると、ヨーロッパにおける戦争にアメリカの介入を予防する目的を持って。最後に条約の秘密の点の署名を両方とも断った。交渉が行われ、オットーと松岡の間、或いはドイツと日本のそれ相応の委員会を経て、後になって合意するであろうとされた。オットーの意見によれば、リップントロップは条約の署名に大きな意義を与えた、政治的デモンストレーションとして。彼は秘密の軍事条項には興味がなかった。

これからゾルゲは結論を出した：「ドイツに於ける状況は、おそらく次のように違くない、イギリスとの戦争に、日本の参加を執拗に要求している・・・ ドイツは既にロシアとの戦争を決定した、イギリスが小休止することはさせないと」。

この間接的な確証を、ラムザイは10月初めに暴き出した。10月8日付けの彼の電報で、彼は伝えた：「ドイツにいる武官松木とオットー大使が声明した、3国条約は例外的にアメリカに向けられていると。しかし、後になって、この条約は新しい政治状況の下で、ソ連邦に向けられるようになった。もし、ソビエト連邦がドイツの視点に好ましくない政治を執るようになったならば」。

次の事実に注目しておくことは興味を引く。1939年、不可侵条約の締結についてのソ独の交渉の過程で、ドイツ側は、ソ日関係の正常化においてソ連邦を援助するという同意を与えた。ドイツ指導部のそのような「お人好し」は次のように説明された。モスクワと東京の間の緊張緩和の条件下で、西の強国との戦争の期間、太平洋においてイギリスに対する作戦を日本に駆り立てることはベルリンには容易であった。ヒトラーの見込みによれば、イギリスの極東の領地への日本の進撃は、イギリスを「中立化」させる。「西ヨ

ヨーロッパ、地中海、極東における複雑な状況において、イギリスは戦うことをしないであろう」と、ヒトラーは声明した。ベルリンにいる日本大使大島との会見で、ドイツの外務大臣リッペンロップは語った：「私は思う、日本―ドイツ―ソビエトの不可侵条約の締結と、その後のイギリスへの進出は我々にとって良好な政治である。もしこれが成功するならば、日本は障害なく東アジアへ自分の勢力を拡大することが出来、南方に向かうことが出来る。そこには日本の生活の興味がある」。

しかし、これら全ては、ヒトラーの進行中の戦略計画の枠内でなされた、ドイツの興味を保証に向けられた。1940年12月、ドイツは次の年の5月に、ソビエト連邦襲撃を実行することを決めた、これについて同盟国の日本に知らせることなく。シンガポールへの進軍を日本に説得することがドイツに出来たならば、イギリスは疑いなく日本と戦争状態になる。ドイツにはロンドンを中立にしておく説得は極めて容易であった、来たるべき独ソ戦において。そのようにして2方面での戦争を回避する。

## ゾルゲ博士の論文「大転換」

1940年11月13日、新聞「フランクフルト・ツァイツング」が、ゾルゲの論文を公開した、「大転換。3国同盟に関係した日本の外政の”修正”」の題名の。論文は10月末から11月初めにかけて書かれた。ラムザイの長期にわたる調査とジャーナリストとしての仕事の結果であった。それでは、分析が行われていた、近衛内閣が権力に就いてからの最初の2ヶ月間における。ゾルゲは書いていた：「この年の7月の米内内閣（外務大臣有田）の解散から、最後の試みが崩れた。日本の拡大する要求を満足させる、”伝統的な日本の外政”の名のもとでの”生存圏”に対する、イギリスとアメリカの強国との相互理解の精神のもとにあった」。

当時、中国との衝突は日本と中国、「伝統的な友人」の間に、緊張を醸し出していた。解決できない矛盾の中で、それは中国の戦争の中に流れ出していた。他面では、ドイツとイタリアの政治と戦争における大きな成功は、日本の権力に示した、もし彼ら（？ 記者）が伝統的な外政の目標に従うならば、日本の拡張の現実性を危険にさらすと」。

日本の体制の「若干の影響層」は新しい目標を推薦する試みに着手した：「2つの大きな対抗する陣営の一つとの同盟に入らないで、ヨーロッパにおける大戦争の果実を手に入れること」。彼らは見なした、ソ連邦との不可侵条約の締結後、ドイツはヨーロッパでの戦いにあまりにも集中した、そして、ドイツには東アジアと日本と密接な関係を維持するに関わる時間も興味も残っていない。ドイツは決定的な一步を踏み出した、日本政府の危機感を吹き飛ばすために、友好への準備をあからさまに示しながら。

日本の外政に劇的な転換が起こった。「短期間に、重心は意向段階を殆ど通り過ぎ、アジア大陸の北部分から、太平洋の南地域へ移った、シナ海が洗っている。」ゾルゲが書いていた通り、これを助けた、一面では、”中国の大きさ”の影響が戦いにおける武器として、他面では、ヨーロッパにおけるドイツの勝利に関係したイギリス―フランスの立場の弱体化が。このようにして、思想が生まれ、より強健になった、「大東アジア」の、「中

央中国と南部中国と南西太平洋に重心を持った日本の真の生存圏」として。3国同盟は、日本に、この新しい生存圏「大東アジア」を認めた、義務的な慣習で。「偉人である秀吉の最も古い予見、彼は中国への日本の支配を夢見た、太平洋の南端まで。現在の日本の目的となった、ヨーロッパの百戦錬磨の強国によって認められた、条約上で」。

この劇的な転換の後、「潜在的な」軍事上の敵は直ぐに入れ代わった。「ロシア、” 和解の出来ぬ敵” に対する興味は失われた；ロシアでは新しく眺めることが始まった、可能な友好的な隣人のように」。その代わりに、日本とイギリス、アメリカとの興味の衝突が先鋭化した。ゾルゲ博士が指摘した、「なんとなれば、彼らは” 大アジア圏” の支配者であった。そして、この役割を現在でも自身で感じ続けている」。

そして、ここで、彼は問題の核心に達している。そのために、多分、この論文を書いた。「即ち、これら2つの大国は、主として、10年間にわたり、自分の太平洋の所有権の維持のために、大陸の北への拡張を日本に突き進めることを試みていた」。日本は、著者の意見によれば、自覚するに至った、イギリスとアメリカとの伝統的な友好は、主として、「イギリス—アメリカの経済ブロックへの日本の経済的服従」の問題に役立った。

長期にわたる友好関係は、日本の経済に、最小の抵抗の道を進むことを強いた。石油、鉄、綿は日本の大コンツェルンによって、イギリスとアメリカの友人から調達された。最小の苦勞と大きな利益で。これが可能であった、南太平洋で部分的に未だ発展していない地区に対する経済的で政治的争いで。

非常に重要である、日本の新しい外政のグループは、日本の同盟国—ドイツとイタリア—からの支持を得た。しかし、大事なこと、ゾルゲの意見によれば、日本人によって動いているもの—これは「日本の” 大アジア” の政治に対する、アメリカとイギリスの政治的敵意の意識、必要性の完全に独特な意識、もう一度構築された政治によって、古い経済的な依存性から直ぐに解放されるという」。さらに推測される：「相当な力の日本の適用を予想することが出来る、ドイツとイタリアの同盟者として」。

ラムザイのこの論文の調子と傾向は全く明らかだ：

1. 極東について、イギリスとアメリカに対する日本の伝統的な理解は過去のものとなった。
2. ロシアとソ連邦に対する伝統的な敵意は、現在では、その切実性を失った。それ以上に、日本の利益に、北の隣人との良好な関係を発展させることは。
3. 日本の利益のイギリスとアメリカとの衝突がますます先鋭化している。日本の指導部の意向と一緒に、イギリス—アメリカの経済依存から解放されることは必然的に、極東における元の「伝統的同盟者」に対抗する日本の力を変更させる。

この論文の例で明らかである、ラムザイは、多分、必要な方向へ出来事の発展を軽く押すだけでなく、知っており、見ていた。どのような方向にそれらが実際において発展するのかを、いずれかの時期に。それにもかかわらず、論文から判断すると、彼は絶えず提起した課題に従っていた—ソ連邦と日本の軍事衝突を許さないという。もし、示した課題の方向に出来事の発展を助力するようになるならば、ゾルゲはそれなりに活動し、この発展を必要な方向へ向かわせた。

ゾルゲ博士の論文を、ベルリンと東京で注意深く読んだ、ブリゲリム・フォン・リトゲン—当時、ドイツ電報通信社編集長—の評価によると、ゾルゲは極東のことを良く知って

いる、この地域における力関係の筋の通った信頼できる評価を常に与えている。フォン・リトゲンは見なしている、日本の内政事情についてのゾルゲの論文はこの国について印刷された全てのものの中で、最も優れていると。ドイツの諜報部の指導者であるシェレンベルグの証言によれば、ゾルゲは個人的な手紙で、フォン・リトゲンと繋がっていた。その際、彼の手紙は、実際の所、詳細なひとまとめにした報告であった、非常に情報に富み、有効な。

シェレンベルグが書いているように、ゾルゲは、「3国同盟はドイツにとって大きな価値（主として軍事的に）を持たないであろうと予言した。その後、我々がロシアでキャンペーンを始めたように、彼は我々に警告をした、どのような状況としても、日本はソビエト連邦との平和条約の破棄を通告はしないと・・・ゾルゲが伝えた、日本陸軍は十分な量の石油と他の燃料を持っている、6ヶ月間維持できる。海軍と空軍はさらに大量の燃料を供給されていると。このことから、ゾルゲは結論を導いた、日本の軍力の重心は、地上作戦（中国に対するアジア大陸へ、我々が期待している通り、ソ連邦に対して）から太平洋における海洋作戦に移行するであろうと」。この際、シェレンベルグが追加している、「一つの機会もなかった、ゾルゲはドイツの秘密局を誤解させることを試みようとした事は」。

シェレンベルグは全く正しい！ゾルゲが誰も誤解させるつもりはなかった。彼はしっかりと見ていた、出来事がどのような方向に進展していくのかを。そして、ドイツの指導部に実際の事態を示すことを試みていた、即ち：日本を信頼してはならない、日本はドイツの政策の方針に従うことを考えてはいない。日本には自分なりの興味がある。これらの条件の下で、この情報は戦略的な虚報の特徴を帯びていた。それ故、一面では、第三帝国のリーダーに自分だけの力を当てにすることを強いた。他面では、分裂をもたらした、それだけでなくとも3国同盟の同盟国間に結構複雑な関係を。

## 日本はソ連邦との接近の路線をとる

3国同盟の調印の後、日本政府は、ソ連邦の中立の保証の目的を持って、太平洋におけるアメリカ、イギリス、他の強国に対する軍事作戦のできる限りの間は、モスクワで打診し続けた、中立条約の締結に関して。日本の外務省はソ連邦との条約締結の条件について提案を作成した。この提案の8番目の点は次の内容である：「適当な期間の後、平和的手段によって、日本の影響圏に組み入れる（購入或いは領土の交換の結果）、北サハリンと沿海州を」。ソビエト政府が、もしこれに納得しない場合には、該当する領土を非武装化とすることが規定された。

ソ連邦に、日中戦争に関して自分の立場を再考させるために、中国における影響圏の分割についてソ連邦と交渉することが計画された。日本の外務省のプログラムには書かれてもいた：「ソ連邦は内モンゴルと北部中国の3つの地方における日本の伝統的な権益を認める。日本は外モンゴルと新疆におけるソ連邦の権益を認める。ソ連邦はフランス領インドシナとオランダ領インドへの日本の進出に同意する。日本は将来においてソ連邦のアフ



ガニスタン、ペルシア（その後インドが含まれる）方向への進出に同意する」。

アジアのこのような分割へのソ連邦の参加は、日本の見方では、ソ連邦を4カ国同盟（日本、ドイツ、イタリア、ソ連邦）に引き入れるものであった。そして西側の民主主義との戦争を容易にする。「北の敵を味方にする」という政治は、ソ連邦、アメリカ、イギリスの同盟の戦争の手段の形成の展望を極めて心配している日本とドイツを除外しなければならなかった。3国同盟の署名前に、松岡は枢密院で声明した：「我々が新秩序を構築する間、我々は余裕がない、ソビエト連邦は我々を敵と見なしていたから」。

モスクワ。赤軍参謀部諜報局長へ

東京、1940年10月3日

ドイツ人との話し合いで、私が出た：ドイツは東アジアにおける指導的役割を日本に対して公認するために、南太平洋地域を占領するように日本を突き動かしている。自身の力量と可能性の範囲内。これによって、ドイツは目当てにしている、極東でアメリカと連携することを、アメリカ側からのイギリスへの援助を禁止する問題を抱えながら。南への日本の行動の自由を保障する以外に、ドイツは、明らかに、ソ連邦との日本の国境線の安全を保証している、それ無しには日本のための条約は効力を発揮することは出来ない。それ故、明らかに、東京にいるドイツの外交代表団は、日本とソ連邦との友好関係を確立するように強力に我々に勧めている。この条約の基本は、中国への援助を禁止することである。南洋への日本の作戦の自由はオーストラリアの占領まで認められている。

アレクセーフ

ペフテレフが解読

このように、日本の指導部では決定が熟した、ソビエト連邦と合意に達するのが良いという。日本にいるドイツ大使オットー松岡との会談を根拠にして一はベルリンへ1940年10月4日に電報を出した：「3国同盟の内なる目的は、次のことにある。イギリスの世界的支配権の抹殺を通して、ヨーロッパと極東に力の新しい分配を引き起こすことに。この目的の達成手段として、アメリカの抵抗とソ連邦の争いからの離脱が役に立つ」。

10月8日、ゾルゲから情報が届いた、オットーとシタメルは楽観的な雰囲気であると、新しい条約へソ連邦を引き入れることに、イギリスとアメリカに対抗して日本の南方への進出を保証するために。ラムザイが書いていた、「シタメルは見なしている、ソ連邦の基本目的は中国の北西部の支配、そして、多分、ボスポラス或いはペルシャ湾への進出。日本は、明らかに、中国の北西部に関してはソ連邦を満足させる準備が出来ている、もし、ソ連邦が蒋介石の援助を停止するならば」。

この見込みに支えられて、日本は自分の拡張の南の件の実現に取りかかった。1940年9月23日、日本軍は北インドシナ半島地域へ進出した。これは日本の南方進出の始めとなった。

更なる進出は、アメリカとイギリスとの関係の悪化を引き起こした。

明かである、日本政府一「支那事変」の解決を計画しながら一は当時、アメリカやイギリスを攻撃することを考えていなかった。日本政府は見なした、逆に、南方での日本の拡張、彼らの国家的な興味の制限と衝突する後者の国々は、日本に宣戦をしかねなかった。それで、当時、ソ連邦との中立条約が役に立った。ソ連邦は日本を「包囲せず」、2方面の戦争をすることがない。

この状況の中で、ソ連邦との交渉の引き延ばしは、日本には都合が悪かった。日本の右翼層は極めて興味を持っていた、北の前線での安全の保証に、ソビエト連邦の中立に。ソ連邦の極東における、その軍事力は良く知られていた。

10月30日、モスクワはゾルゲの情報を得た、尾崎がゾルゲに伝えたものである。尾崎は近衛の取り巻きから知ることとなった、日本はイギリス—アメリカの活動に対する返答として、内部の状況（軍部の圧力）から、オランダ領インドシナ半島に対する作戦を始めざるを得なくなるであろうと。ラムザイの意見によれば、これは示していた、不可侵条約の締結について、ソ連邦は日本との交渉に乗り気であることを。

同時に、ゾルゲは日本の内閣の計画について伝えた、交渉の非常に重要な2点について。第一に、日本指導部はソ連邦側から「中国の共産主義の宣伝を中止」を要求するつもりであった、第二に、日本政府は「内政の困難さ」のために、満州や南サハリンでのどんな領土的譲歩も受け入れるつもりがない。

この情報は極めて最新のものであった。1940年10月30日、再びやって来た日本の大使で退役軍人の立川善継がモロトフと会談した。立川が声明した、近衛を首班とする日本政府はソ連邦と不可侵条約の締結を希望していると。1939年8月23日のソ独の不可侵条約と似た、これに関係して、中立条約の締結についての交渉は中止すると。両国間にある論争中の全ての問題は、不可侵条約締結後に解決されるものとする。

中立条約と不可侵条約の2つの日本政府の提案の間にどのような違いがあるのかという、モロトフの質問について、立川が説明した。中立条約は不十分であった、なんとなれば、それには、不可侵についての問題が明瞭ではなかった。ドイツとイタリアと日本が3国同盟を締結した後、日本政府はソ連邦との不可侵条約の締結は目的にかなっていると認識した。ソ連邦との不可侵条約締結後、日本政府は取りかかる準備がある、北京条約の再考に関しての交渉と他の問題の審議に。

立川大使はソビエト側に伝えた、不可侵条約についての自分の計画を。

11月12日、ゾルゲは中央に伝えた、モスクワは日本との交渉において何が出来るのかを。「重慶は今以前より極めて強く感じている。中国における希望のない状況を避けようとする日本における気分は増大している。日本の以前の要求—ソ連邦は中国における自分の政策を放棄するという—は以前より無意味になっている。ソ連邦と日本の間の交渉の課題として、この古い日本の要求を残すことは信用できなく危ない」。ラムザイのこの結論は非常に価値があった、ソ日関係の正常化の仲介役をになっていたドイツは、枢軸国の新しい条約へソ連邦を引き入れる目的に努力している。同時に、中国政府が支持を失うために、そのようにして、中国政府に戦争を停止させることを強いるために。

とにかく、日本は期待していなかった、日本によって提案された不可侵条約にモスクワが賛同することを。日本は同時にドイツの指導部へ条約の実現化に助力してくれるように依頼をしていた。11月13日、ゾルゲは松岡とオットーの会談の詳細について伝えた。その中で述べられていた、日本は無条件に、ソ連邦との不可侵条約の締結を望んでいると。が、予想している、「赤色側」が何らかの特別な要求を提示することを。これ故、松岡はオットーにリップントロップに伝えるように願い出た、彼（松岡）が交渉に彼（リップントロップ）の協力を願い出ていることを。

11月10日～14日の間に、外務省の人民委員モトロフはドイツ政府の招待に従って、

ベルリンを訪問していた。リップントロップは客に保証した、「地球にはどんな力もイギリス帝国の崩壊を予防する状態にはない」、そして、3国同盟の国家とソ連邦の間の興味圏を区分することを提案した。この際、リップントロップが提案した、ソ連邦と日本との関係の正常化のために仲介をすると。彼は許した、ソ連邦と日本との不可侵条約締結の場合には、後者は、彼の意見によれば、「外モンゴルと新疆ウイグル自治区におけるソ連邦の興味を認める準備ができていて、中国との合意が達成できたならば。3国同盟にソ連邦が参加した場合には、日本との不可侵条約と同等である、イギリス領インドにおけるソ連邦の興味圏を設置することが可能となろう。サハリンの利権の問題において、日本もまた促進することになろう、もし合意が達成されるならば。しかし、日本はこのために、国内の幾つかの抵抗に打ち勝つ必要がある」。

モスクワに戻り、11月18日、モロトフは立川を自分の所へ招聘した、リップントロップとの会談を引用して、声明した。彼（リップントロップ \*）はソ連邦との関係を正常化したいとの日本の要望を歓迎すると。しかし、ソビエトの世論は不可侵条約の締結を受け入れることに好意的ではない。もし、それが領土の損失の復帰を伴わなければ、極東でロシアが失った。即ち、南サハリンとクリール（千島）列島の。もし日本にこれらの問題の検討の用意がなければ、ソビエト連邦は不可侵条約の代わりに、中立条約の締結を提案する。同時に、特別な暫定協定の署名を、北サハリンにおける利権の消滅に関する。

モロトフはこの際、指摘した、中立条約は必要な全てのものを与える、南方での日本の活動を自由にしてくれる。そして他面では、日ソ関係の改善において大きな歩みをしてくれるために十分なものとなる。不可侵条約の締結の際には、以前にロシアが失った領土の復帰についての問題に触れることになろう、モンゴルと新疆ウイグル自治区の問題と同じように」。

モロトフは日本の大使に伝えた、中立条約についての計画と北サハリンにおける日本の権益の消滅についての暫定協定の計画について。

後者の書類は同時にソ連邦と日本との間の中立条約の署名から、北サハリンにおける石油と石炭の日本の権益の1月での抹消と、モスクワで1925年12月14日にソ連邦と日本との間で締結された相応している権益条約の破棄を予見していた。ソビエト政府は、同意を表明した、権益企業の所有者達に支払うことを、彼らによってなされた投資に対して正当な補償を。それと日本政府に保証する、毎年、10万トンのサハリンの石油を5年間にわたって、通常の商業条件の下で。

立川は、モロトフの提案を交渉のための基礎として受け入れられると見なし、同時にソビエト政府に要請した、石油の毎年の供給を20万トンまで増加することを。大使の言葉によれば、モロトフの提案を日本政府に推薦できるようにするために。

当時、日本の内閣は蒋介石に圧力を加えていた。汪兆銘政府を公認すると脅かして。1940年11月30日、日本は南京政府と、友好と相互援助の条約を署名した、「・・・共同の開花の東アジア圏の建設の戦いのために、共産主義と重慶の国民党に対抗して」。同時に、日本政府はアメリカが戦争に出る場合に対して、防御の準備をしていた、ソ日とソ米関係における小さな変化を注意深く分析しながら。

当時のソ米関係の進化について触れよう。1937年～1939年、ソ連邦とアメリカの関係は極めて低い水準であった。アメリカの世論には明瞭な反ソビエト主義が優勢であ

った。国会がそれを主導した。ソビエトの首都で、多くの時間をアメリカの大使は持てなかった。この調子で、ワシントンはクレムリンの意見を見下していた。そのような条件下で、もちろん、何の話も進まなかった、集団的安全の分野における共同行動については。アメリカはソ連邦を世界から孤立させ、出来るだけソ連邦に対してドイツと日本を攻撃的な作戦をとらせるようにしていた。

1939年～1941年、ヨーロッパで「奇妙な戦争」と呼ばれたように、アメリカでは孤立主義の最盛期で中国では軍事行動の風、ルーズベルトは深刻な鬱であった。彼の出世における危機の時であった。アメリカ大統領を疑念が苦しめた、不明さの感情が捨てられなかった。アメリカは国際連盟に入っていなかった。国際情勢への影響の十分な推進力を持っていなかった。ソ連邦とドイツの間の不可侵条約の締結後、ルーズベルトは単に知らなかった、都合の良い立場で状況の変更のために着手できることを。西の民主主義国にとって迫り来るカタストロフィーの予防のために当時皆が知っていた。

もちろん、ドイツとの同盟からソ連邦を引き離す若干の可能性はあった。しかし、この場合、多くのことを変える必要があった。特に、世論を、どうにかして反ソビエトの風潮を弱めるように。

1940年半ば、アメリカは決定をした、ソ連邦の構成国であるバルト3国からの金を止めることを。各国の船を拿捕し、これ見よがしに、リトアニア、ラトビア、エストニアの公使館と領事館は残された、エストニアの人員は誰もいなかったが。通商における差別は残された。

本当である、1940年末には、状況が段々と良くなっていったのは。1937年の米ソ通商協定の1年延長についての書簡が交わされた。アメリカはソ連邦にアメリカの船舶を提供することに同意した、特に、タンカーの；太平洋を經由して郵便連絡を確立する；組み立て工や他のアメリカ人の専門家のソ連邦への旅行の禁止を中止する。金の運命についての了解が出来た。禁輸が解禁された。

同時期に、ウラジオストクを經由して、アメリカの中国へ援助を示すためのアメリカの貨物の通過の要請を、ソ連邦は断った。ソビエト大使パヌシキンが自分の回顧録でこれについて書いていた、アメリカの右派グループ—そのような提案をしてきた—はソ日関係の先鋭化を目的として要求した。そのようにして、ソ連邦を日本との戦争に引き込もうとした。

この他に、蒋介石はアメリカ人を通して、クレジットを得る可能性を積極的に打診していた。それらの次の利用のために、ソビエトの武器の購入の目的を持って。

軍の経路での、情報の交換の試みが始まった。

モスクワ。赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1940年11月29日

アメリカの武官が伝えた、中国で第10歩兵師団が抜け、ハーン川地区での作戦に参加する。

アメリカの海軍武官が、彼の支援者を通じて、エゴリチェフに伝えた、日本の海岸防御図を。そして話した、彼らは今、日本の爆撃計画の作成に従事していると。

アレクセーフ、  
ベリャコフが解読。

これらの条件下で、日本は急いだ。11月21日、すでに立川は日本政府の返事をモロトフに伝えた、11月18日付けのソビエト連邦の提案に対する：日本政府は中立条約の計画を、審議の価値のあるもの見なしている、絶対的に受け入れられない利権の消滅についての暫定協定の計画。

同時に、ソビエト連邦に日本に北サハリンを売り渡すように提案した、論争を終結させるために。

モロトフは北サハリンの売却についての問題について、ソ連邦の最高会議に1940年3月29日付けの自分の報告で引用した。そして宣言した、この問題は冗談として見なすと。

会議の最後に、モロトフは日本政府の返答を得ることの期待を表明した、11月18日の会談で立川の発言に従った。同時に、強調した、もし日本がそのような返答を必要がないものと見なすならば、協定は成立しないと。

ソビエト連邦政府は断固とした立場をとった、日本との漁業協定に関する問題においても。1940年12月13日に、立川を招聘して、モロトフが表明した、もし日本がポーツマス条約を永遠に変更しないという考えならば、西ヨーロッパでベルサイユ条約を見なしていると同じように、ソビエト連邦でもポーツマス条約を見なしている、これは深刻な間違いであると。日本はこの条約を破った。それ以外に、この条約はロシアの敗北後に締結されたので、訂正されなければならない、特に、漁業問題で。ソビエト側は同意できない、ソビエト海域における日本の漁業が、ソ連邦の国家的利益によってなされたということには。

ソ連邦の確固たる立場と衝突して、日本政府は印刷物で、騒々しい反ソビエトキャンペーンを展開した。千島列島開発の委員会が設置された。その指導部に軍や政治での活動家達が入った、ソビエト連邦に極めて敵対的な立場で有名な。日本は口実を探した、漁業問題、北サハリンでの日本の利権、その他に関しての様々な要求のために。このようにして、1940年末、ソ日関係において、否定的な傾向が増大した。

尾崎からの情報が警報を鳴らした、オランダ領インドシナにおいて、通商大臣小林の交渉の目的は、日本のために石油を調達することであるとの。これは証言した、近衛内閣が石油獲得の二者択一の源泉を見つけることを試みていたことを、日露関係の複雑化に伴って。

12月2日、ゾルゲから情報が届いた、日本政府は、蒋介石との交渉に成功を得ていない、最終的に汪兆銘を承認することを決定したとの。オットーは自分の意見をリップントロップに話した、汪兆銘の承認は日本の大失敗であるとの。

同時に、ラムザイは中央に伝えた、日本の参謀本部の元次長である沢地（？ ＊）とオットーとの会談について。沢地は次のように話した：「ソ連邦との問題が解決されない間、日本は敢えて対抗はしない、中国での戦争が終了しない間は」。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1940年12月27日

外務省の次席大臣がドイツの海軍武官ベネッカーに話した、日本は実質的に、不可侵条約に関するソ連邦との合意

に至る期待を放棄した、ソ連邦があまりにも多くのことを要求するために。ベネッカーはさらに指摘した、ドイツは援助を示す用意があったと、この言葉の広い理解において。が、次席は答えた、日本の内政状況はそのような広い援助をなすことは不可能であると。日本政府側からの譲歩、特に、満州におけるソ連邦の領土の譲歩、がそのような状況を作り出した。近衛内閣は深刻となっている内政危機を乗り越えることは出来ない。

130号。ラムザイ

解説 マリンニコフ。

翻訳 ソニン

## 「ドランク ナハ オステン」(? \*) ヒトラーは東方進出の決定をする

1940年7月3日、ドイツの陸軍参謀本部の長であるフランツ・ハルダー元帥が日記に書いている：「最近、イギリスの問題が最優先となっている・・・そして東方問題。基本的内容は次の通り：ロシアに決定的な打撃を与える方法、ロシアにヨーロッパにおける支配的役割をドイツに認めさせることを強いる」。(独ソ戦 1941年6月～1945年5月 \*)

7月22日、ハルダーは大会議でのヒトラーの発言を日記に書いていた、ベルリンでその日に開催された：「イギリスは明らかに、ロシアの助けによって、バルカンに混乱が起こる可能性を期待している。我々から石油源を取り上げることを、それにより我々の空軍を麻痺させることを・・・スターリンはイギリスにこびている、イギリスに戦争を継続することを強いる目的を持って。まさにそれにより我々を団結させている、彼が占領したいところを占領する時間を稼ぐために、が、和平が訪れると、出来ない。ドイツがあまり強くないように、彼（スターリン？）は努力している。しかし、我々に対抗するロシアの積極的な進出の何の兆候もない。ロシアの問題は進撃で解決されるであろう」。

ソ連邦への進撃の最終的決定は、ヒトラーの大本営で1940年7月末に行われた。ハルダーが述べているように、彼の主題は次のような考えであった：「もしロシアが撃滅されるならば、イギリスは最後の望みをたたれるであろう。その時には、ドイツがヨーロッパとバルカンを支配することになる。結論：この判断により、ロシアは粉砕されなければならない。期日は、1941年春」。さらにヒトラーは作戦計画を述べた：「軍事キャンペーンの開始は、1941年5月。作戦期間は5ヶ月。目標は、ロシアの生活力の抹殺。作戦は以下のようになる：第一撃：キエフ、ドニエプル川への出口；空軍は渡河を破壊する。オデッサ。第二撃：プリバルチクの国を経由してモスクワへ；更なる2方面での攻撃でー北と南から；その後ーバクー地方に対する部分的作戦」。

7月23日、ハルダー大將はマルクス少將に、7月21日にヒトラーが述べた意向を元に計画を立案するように課題を与えた。この計画は、ソ連邦への侵略を実現するために文書の中での最初のものであった。彼（マルクス？）はキエフへの主攻撃とウクライナの占領を見越していた。しかし、ハルダーの指摘により、マルクスは自分の提案を変更した。参謀本部で提示された次の変更案で、2つの軍団の設立について話が進んだ：北軍団はモ

スクワへ到達すること。その後、南軍団と一緒に、ウクライナを占領すること。

ドイツ国防軍最高司令部（OKB、ヨードル大將）の参謀本部では、平行して他の案が練られていた。参謀本部のロスベルグ中佐によって、1940年9月15日に作成され、3つの軍団（北方、中央、南方）の創設を見込んだ。プリピャチ湿地の北方地区を核心とすることが提案された。そこで北方軍団と中央軍団が作戦行動をすることになっていた。この決定は比較的発達した道路網の存在によっていた。軍の集中にとって極めて好条件を保証していた。これ以外に、予定されていた通り、短時間でレニングラードとモスクワを占領することが出来る。この考えは南方へ主攻撃を行う決定のための重要な論拠より優勢であった。ルーマニアの危険な状況のように、ドイツの機械化軍団の供給の可能性、比較的短い交通路を経由しての、ついには、ウクライナの意義。

作成は3つの可能な変更を見越していた、状況に応じて：

1. ロシアの予防攻撃を集中する、ドイツ軍に対して国境線で。この際、東プロシアと総督府の北部へのロシアの大規模な侵入は有りそうもないと見なされた。大いにあり得ると思われた、小規模の作戦が、フィンランドとルーマニアの石油地区に対して。

2. 国境線に沿ってのロシア軍の強固な防衛線、最大の富を保つために、特に、最近征服した領地（プリバルチクとベッサラビア）を。この変更案が最も理想と見なされた、予想された故に、ロシアのような強力な軍事大国は、自身の領土を戦い無しで譲らない、技術部門で良く整備されているので（空軍の地上施設網）。同じように予想された、国境線における戦闘において、軍事力の大量の後、ロシアの司令部は全軍の組織ある撤退を保証することは出来ない。

3. 1812年の例（ナポレオンのロシア遠征 \*）にならったロシア軍の撤退、進撃している敵に困難を押しつける、延びきった連絡と供給の。その後反撃をするという。そのような事件の変種は最も都合が悪いものと見なされた。が、それにもかかわらず、あり得なかった。見なされたので、ロシア人は決して戦うこと無しに「かけがえのないウクライナの領土」を放棄しないと。

同じように注目しておくことが大事である、ロスベルグ（ドイツの参謀本部の）の立案で、ドイツ軍の急速な集中の可能性についての重要な結論がなされたことに、進撃のために、その開始の前に直接に。

さらにもう一つの案が、ゾデンシテルン少将によって立案された、ヒトラーの最初の考えを基礎にして。彼は、モスクワ占領に軍力の最大限の集中を前提とした。その際、同時に、スモレンスクとキエフの方面に強力な集中攻撃を行うことを前提としていた。その後、ゴメリ地区でソビエト軍の包囲網を閉じる。中央へ、ブレストーコベリ線へ、支援の攻撃列を行う計画であった。

OKB(ドイツ国防軍最高司令部) 作戦指導本部の指令、

外国諜報局指導部へ、

ソビエト軍司令部の虚報に関する方法について

1940年9月6日

このところ、東部での軍の集中が極めて拡大している。10月末には添付した図で示しているような状況となるこ

とは必須である。

これら我々の軍の再編成から、いかなる場合においても、ロシアに我々が東方へ進撃するという印象ができてあがることはない。同時に、ロシアは理解するに違いない、総督府（？ \*）に、東方の地方に、保護領に、強力で戦闘能力のあるドイツ軍がいることを。これから結論される、我々が何時でも十分強力な武力の準備をしていると、ロシアの干渉に対抗してバルカンにおける我々の利益を守るために。

自分の諜報の仕事のために、ロシアの諜報の問い合わせの可能な回答のためと同じように、次のような基本的な原理の状況で指導されなければならない。

1. 東方におけるドイツ軍の全員数を隠すこと、出来るだけ噂と知らせの伝搬によって、この地区で行われている軍団の強力な交代のような。軍の移動を、演習地への異動、編成替え、その他、として理由づけること。
2. 印象を作り上げること、我々の移動の方向が総統府の南方へ、保護領とオーストリアへであり、北方への軍の集中は比較的小さいような。
3. 軍団の武装の状態と水準を誇張すること、特に戦車軍団を。
4. 印象を作り上げるために、きちんとした情報を広げること、相応する例を持って。西の進軍終了後に、東部の対空防衛は強力にされた、フランスの技術の戦利品によって。
5. 幹線道路網、鉄道網、飛行場の改良における仕事は、征服した東部地区の発展の必要性で説明される。この際引き合いに出して、それらは通常の進捗で行われ、経済目的として主要な例となる。

そのように、個々の真のデータ、例えば、軍の番号付けについて、守備隊の人員数、その他、は外国諜報局に伝えられる、それらに対諜報目的での利用のために、陸軍総司令部が決めている。

最高司令部参謀部次長 ヨーデル

11月12日、モロトフのベルリン訪問時、ヒットラーは訓令第18号に署名した。それで、ソ連邦に対する作戦を準備するよう命令した。「モロトフとの交渉に無関係に」。スターリンはこの事を知らなかった。地政学においてヒットラーと「遊ぶ」ことを試みていた。11月25日、ドイツの大使シュレンブルグと会談をし、彼に外交文書を渡した。それには、ソ連邦の合意の条件が書かれていた、4カ国条約計画についての、11月13日にリップントロップが提示した。

ソ連邦政府の対案を持つ外交文書から、  
リップントロップの提案への回答として、

1940年11月13日付けの

ドイツ大使シュレンブルグに渡した、1940年11月25日。

ソ連邦は4カ国条約の計画に基本的に受け入れることに同意する、4カ国の政治的共同と経済的相互援助についての、1940年11月13日にベルリンでモロトフとの会談でリップントロップによって提示された、4点からなる以下の条件の際に。

1. もし、ドイツ軍が今すぐに、ソ連邦の影響圏である、フィンランドから撤退するならば、1939年のソ独協定に従って、その際、ソ連邦はフィンランドとの平和的關係を保証することを約束する。同じくフィンランドにおけるドイツの経済的利益も（木材、ニッケルの搬出）；
2. もし近いうちに、プロリフ（海峡？）でのソ連邦の安全が保証されるならば、ソ連邦とブルガリアの間の相互援助条約の締結によって。ソ連邦の黒海国境の安全圏に地理的位置に関してある、ボスポラス海峡とダルダネス海峡地区に、ソ連邦の陸軍と海軍の基地の設置の、長期の賃貸方式で；



3. もし、ソ連邦の要求の重心としてバツミとバクーから南の地区が認められるならば。ペルシヤ湾への一般的な方向として；

4. もし、日本が北サハリンにおける石炭と石油の利権を断るならば。正当な補償の条件として。

自分の対案に対する回答を、モロトフは得られなかった。ヒットラーは既に最終決定をしていた：「ロシアはヨーロッパにおいて重大な問題となる。全てをしなければならぬだろう、ロシアの完全な制裁に向けた準備となることの」。

1940年初めに、ドイツ陸軍の参謀本部で、最終的な作戦の決定の作成のために、パウルス中将の指揮下で図上演習がなされた。ヒットラーに報告されたその結果は、ヨーデルの参謀部で利用された、総統の指令第21号の計画作成のために。この指令は1940年12月18日にヒトラーによって署名された。ソ連邦に対するより具体的な計画の作成は、ハルダーの参謀部で準備された、1941年1月に。2月5日に、ヒットラーによって裁可された。その後、何度かそれは細部で修正された；その最終案は1941年6月8日の日付である。

ドイツ軍最高司令部の指令第21号から

(作戦 バルバロッサ)

総統と軍最高司令部

総統本営

作戦指導参謀部

1940年12月18日

国家防衛局

9部印刷

第33408号

極秘

司令部のみ

### I. 全般的な計画

ロシアの西にいるロシア陸軍の基礎的な武力は粉碎されなければならない。戦車の楔形突撃部隊の縦深で急速な進撃の直接の勇氣ある作戦において、敵の戦闘能力のある部隊の退却、ロシア領土の広範な領域での、は未然に防がなければならない。

急速の追撃手段によって、戦線を達成しなければならない。その戦線から、ロシアの空軍がドイツ帝国の領土に飛行して行くことが出来ないであろう。

作戦の最終目的は、ボルガーアルハンゲリスク線に沿っての東ロシアの遮断壁の構築である。そのようにして、必要な場合には、ウラルに残っているロシアの最後の工業地帯を空軍の助けで麻痺させることが出来る。

この作戦の過程で、ロシアのバルチック艦隊は急速に自分の基地を失い、それで、戦闘を継続することが出来なくなる。

ロシア空軍の有効な行動は、我々の強力な攻撃によって未然に防がれる、作戦の初期段階においても。

「・・・・・・・・」

### III. 作戦の実行

#### A. 陸軍。(作戦思想に従って、私に報告された。)

軍事行動の現場は、プリピャチ湿地で南部と北部に分割される。主攻撃の方向はプリピャチ湿地より北に準備されなければならない。ここで、2つの軍団を集中しなければならない。

これらの軍団のうちの南側は、全戦線の中心となり、特に強力な戦車兵団と自動車化兵団による進撃する課題を持

つ。ワルシャワ地区とそれより北の、そしてベロロシアの敵の力を粉砕する。このようにして、前提を作り上げる、行動中の強力な部分を北への転向のために。北の軍団との相互協力によって、東プロシアからレニングラード方面に進軍して、バルチック沿岸にいる敵の力を殲滅する。この緊急の課題の遂行後、レニングラードとクロンシュタットの占領が続かなければならない。モスクワ共産主義と軍事産業の重要な中心―占領の作戦に取りかかる必要がある。

ロシアの抵抗の急速な崩壊は、これら2つの課題の設定と遂行を正当化することが出来る、同時に。

「.....」

ブリピャチ湿地より南の軍団は、集中攻撃の手段をすべきである、両翼に基礎武力を持ち、ウクライナにいるロシア軍を殲滅する。ドニエプル川への出口まで。

この目的を持って、主攻撃を、ルブリン地区からキエフ方向へ加える。同時に、ルーマニアにいる軍はブルート川を強行突破する、下流で。そして、敵軍を大きく包囲する。ルーマニア軍の役割は、ロシア軍を釘付けにする課題となる、形成された挟み撃ちの内側にいる。

ブリピャチ湿地の南部と北部での戦いの終了に関して、追撃の過程で、次の課題の遂行を保証しなければならない：

南部―ドネツ川流域の軍事的経済的關係において重要なものを完全に占領すること。

北部―モスクワに向かって急速に進むこと。この町の占領は政治的にも、経済的にも決定的な勝利を示すことになる。ロシアは失うこととなる、鉄道の中心地を。

「.....」 アドルフ・ヒットラー

\*\*\*\*\*「署名」

ソ連邦に対する進撃計画のコード名は何回も変更された―「フリッツ」、「オットー」、そして「バルバロッサ」（最後のコードの名称の著作権はヒットラーにある）。ドイツの作戦計画の内容はソ連邦の諜報員によって明らかになったにもかかわらず、コード名称は長い間わからないままであった（それについては、後でジューコフが回想していた）。

1940年末に、ゾルゲは何度か、ソ連邦に対するドイツ側からの進撃の準備についての資料を伝えた。それについてはゾルゲがドイツの大使から知り得たものであった。

既に話したように、東方へのドイツの進撃あり得る方針変更の間接的な兆候を、ゾルゲは既に10月には嗅ぎ出していた。指令「バルバロッサ」のヒットラーの署名後、10日後に、ゾルゲはソ連の国境線における軍の展開について伝えていた。ドイツ軍80個師団とハリコフ―モスクワ―レニングラード線に沿ったソ連邦の占領計画について。

赤軍参謀本部情報局長へ

東京、1940年12月28日

ドイツから日本へやって来る人物が語っている、ドイツは東部国境に80個師団を持っている、ルーマニアを入れて、ソ連邦への政治的働き目的を持って。もし、ソ連邦がドイツの利益に反する活動を拡大するならば、バルチック沿岸で起こったような、ドイツは、ハリコフ、モスクワ、レニングラードの線に沿っての地域の占領をすることになる。ドイツはこれをしたくない、が、これに頼ることになる。もしソ連邦の行動によってこれを強いられるならば、ドイツは良く知っている、ソ連邦はリスクを冒すことは出来ない。とにかく、ソ連邦の指導者達はフィンランド紛争後に良く知った、赤軍は少なくとも20年が必要であると、ドイツのような近代化した軍隊とするためには。この意見は、多くのものが表明している、モスクワのキョストリング将軍によって分かれた、東京の新人のドイツ武

官の意見となる。彼はソ連邦に何度かいたことがあった。私に話した、80個師団の数値は若干大ききであると。

第138号、139号。ラムザイ

これは、もちろん、示してはいなかった、ゾルゲが指令「バルバロッサ」について知ったと。彼は単に注意を振り向けた、多くの者達がソ連邦国境にドイツ軍の集中について話したことに。

この情報に関して、ゾルゲは以下の事に注目する必要性を感じた。第一に、多分、それは情報に基づいていたらしい、1940年12月7日のフォン・ゾデンシテルン将軍の作戦作成について得られた。それはハリコフーモスクワーレニングラードの線に出口を見越していた。第二に、「諜報報告書大8号（西に関して）」に一致していた、1940年12月の参謀部諜報局の。東プロシアとポーランドの総督府への軍の終結、1940年11月15日で76個から79個師団からなる。これ以外に、ブラスコビッチの軍団は15個～17個師団でなっていた、報告書で指摘されていたように。10月～11月に、基幹としてルーマニアに移動され、ソ連邦国境に集中された。このようにして、ソビエト国境にドイツの全師団数は、ルーマニアも入れて、91個師団～96個師団と見積もられた。同時に、1940年12月30日付けの諜報局の特別報告と一致した。ルーマニアにおけるドイツの軍団は9個師団を数えた。このように、諜報データに従うと、1940年の11月から12月には、ソ連邦国境におけるドイツの軍団は85個師団から88個師団となった。注目しておくことは興味を引く、この数値は実質において、4月1日まで変わることがなかった：1941年4月4日の参謀部諜報局（P Y 「山」）の特別報告と一致する、「ソ連邦の国境帯にいる各種のドイツ師団の数は83から84に達していた、チェコ、モラヴィア、ルーマニア中部に終結している軍団を数に入れなくて」。

実際において、1940年12月末、ソ連邦との国境にドイツの29個師団がいた。

1940年が終わった。スターリンの秘密外交はその実を結んだ。彼は成功した。偉人である孫子の言葉を借りれば、「戦わずして、敵軍を支配下に置く」。実質的に自分の敵を片付けた、ヒトラーの手によって。今や、彼は影響圏の分割についてヒトラーと交渉することに期待をかけた。

しかし、ヒトラーにはもうスターリンと交渉するつもりはなかった。ヒトラーには征服されたロシアが必要であった。大きくもなく小さくもなく。

12月29日、諜報局にベルリンから「メテオル」の情報が届いた：「有田が伝えた、高級情報グループから”アリエーツ”が知ることとなった。ヒトラーが命令を出した、ソ連邦との戦争を準備するようにとの。戦争は1941年3月に通告されるであろう・・・」。

# 第8章

## 東部での大惨事

### (1941年1月－6月) (独ソ戦6月～ ＊)

敗戦は自身に原因があり、  
勝利の可能性は敵に原因がある  
孫子

#### 日本の内閣の策略

日本の高位の軍事・政治指導部に、直ぐに明らかとなった、ドイツの最高司令部がソ連邦に対する戦争の詳細な作戦の戦略計画に取りかかったことが。この情報のチャンネルの一つとなったのは、アメリカ政府の代表者であった。1940年秋に始まった日米交渉時に、両国の相互関係における緊張緩和についての。アメリカの外交官は、アメリカの諜報によって得られた情報を日本と分かち合うことを急いだ、ソ連邦へのドイツの進撃が近づいているとの。アメリカの政府高官であるハルが後になって認めた通り：「ロシアへの侵入のヒットラーの準備について我々が手にしている情報は、日本との交渉において我々には極めて有効であった。それはロシアと日本との協定の全ての可能性を不可能にした」。

類似の情報がベルリンから届いた。日本大使大島が1941年冬（1月か2月 ＊）に東京へ伝えた、「近いうちに、ドイツとロシアの間の戦争を予想する十分なる根拠がある」と。

ドイツの指導部は相変わらず、シンガポールへの進撃に日本をけしかけ続けていた。ドイツの意見によれば、この時期が日本の政治にとって最良の方針であると。このために、日本人に「シンガポールの異案」の巨大な利益を納得させるためにヒットラーはベルリンに松岡を招聘することを決定した。さらに、三国同盟の署名時、リッペントロップは、無線電話での挨拶交換のさなか、日本の外務大臣に伝えた、ヨーロッパ訪問に招待する旨を。

1941年1月18日、ゾルゲが中央に情報を送った：「ドイツ大使から知り得た：大島が全ヨーロッパの主大使となろう、3国軍事同盟の発展の課題を持った、シンガポールへの日本の進軍行動を持った、もし必要ならば、アメリカに対抗して。

白鳥と日本の参謀部と海軍省の職員の部分は、近衛の同意無しに、大島を支持している・・・大使は主張している、日本は行動を開始する、3国同盟の修正のために、攻撃的な同盟へ」。

同じ頃、ラムザイが伝えた、日本政府は内政の困難さから、イギリスへのドイツの準備している侵入の終了を待っていた。そして、その成功後に、シンガポールへの進撃の決定をすることができた。

ゾルゲは同じように中央に通告した、リッペントロップが松岡をベルリンに招聘した、3国同盟の問題の審議のためにと。その際あり得る、ソ連邦と日本との交渉の問題に新

しい進展を与える試みに着手するつもりであることが。この際、ラムザイは興味を引くニュアンスを伝えていた：「松岡はベルリンを訪問したがっていた、自分の提案を強化する目的を持って。それは若干ぐらついていた、平沼内閣での導入に関して一彼と大島は松岡の案に反対であった。

ゾルゲのこの情報は次のことに関係していた。状況の不明瞭さは議事日程に載せた、ヨーロッパに出向く、日本の外務省のために必要なことを、ベルリンで、ローマで、モスクワで必要な情報を直接本人の手で入手するために。同時に、日本政府と軍事官庁の指導者達は松岡のヨーロッパ訪問に関する関係を分かち合った。一連の政府の会議が要求された、が、限定された指示の元で、彼はドイツとイタリアとの何の公式の条約を締結しないよう命令されていた。日本の名前で、何の約束も引き受けないようにとも。彼は（松岡？）はヨーロッパに於ける状況を調べなければならなかった、個人として、ドイツ人とイタリア人の論拠と希望を聞くことも。帰路途中で、松岡は命令された、モスクワに立ち寄り、条約締結の展望についての交渉をするようにとの。それはソビエト連邦との友好関係を回復させるものであった。日本の代表団の中に、公式の人物が入っていた、指令の枠で松岡の抑えきれないエネルギーを制限する職務を委された。

1月18日、ハルダーが自分の日記に書いている：「日本の外務大臣松岡の到着がある。おそらく、交渉時、フランス領インドシナとオランダ領インドについての課題が言及されよう。日本との積極的な協力を我々が希望するならば、我々はオランダ領インドで日本に譲歩することになる。私は個人的に考えている、この譲歩は目的にかなっていると、とにかく、自分の力では我々はそれを維持することが出来ないのも当然だ。オランダの植民地としてそれを保つ試みによって、我々はオランダ人との関係を困難にする」。

1941年2月3日、政府の調整委員会と帝国司令部との会議で、文書「ドイツとイタリアとソビエト連邦の交渉の行動原則」が採択された。その中で、日ソの外交関係の正常化のための条件として、必要事項が示された：1) 北サハリンの日本への売却において、ソ連邦へのドイツの圧力援助を実現すること；2) 売却についての提案をソビエト連邦が受け入れない場合には、北サハリンにおける日本の利権の拒否の代わりに、ソビエト側からの約束を取り付けること、日本に5年間にわたり250万トンの石油を供給することの；3) 新疆ウイグル自治区と外モンゴルへのソビエトの影響を認めることに同意する、北中国と内モンゴルへの日本の影響のソビエトの認知への返答として；4) 中国へのソビエトの援助の禁止を得ること。これらの提案はソ連邦との予定している条約の基礎となるものである。

尾崎は自分の友人である西園寺から十分に情報を得ていた。近衛内閣の閣僚間の話し合いについて、ヨーロッパを松岡が訪問するつもりであることに関して。彼（尾崎？）はゾルゲに伝えた、近衛の取り巻き達はこの旅行に大きな期待をかけていないと。代表団に入っている西園寺は尾崎に語った：「我々が期待できる最も大きなことは、ヨーロッパの事情に松岡を良く知らせてくれることであり、将来において外政の方向に正しい選択をさせてくれることにある」。尾崎は情報に納得し、日本の右翼においては、どう見ても期待していなかった、旅行が具体的な成功をもたらすとは。

しかし、ドイツ側では具体的な結果を期待していた。リップントロップはもう一度松岡

を説得する試みを欲していた、シンガポール作戦に取りかかるように、独ソ関係が悪化した場合に日本をドイツ側に引き込むことを。オットーの言葉によれば、ドイツ大使は感じていた、モスクワでのどんな交渉も経済問題にだけ限られ、それ以外にはないと。

アメリカとイギリスは活発な外交活動を展開していた。1941年初め、ハリー・ホプキンス大統領の側近である一はイギリスを訪問した。後になってホプキンスが書いていた、「イーデンは何度か私に問いただした、我々の国が何をするのかと。もし、日本がシンガポールかオランダ領インドに進出したならば。彼は指摘した、これを知ることは、彼らの政治の確定のためには極めて重要であると。もちろん、全く明らかである、大統領もハルもこの質問に対してイギリスに確実な返答を与えることは出来ない。というのは、国会が戦争を宣言するので。孤立主義者とアメリカ国民の大半は極東における戦争に興味がなかった。日本人がオランダ人を攻撃するだけのこと」。

チャーチルは当時の孤立主義のアメリカの政治を間違っていると見なして、話した。世界の状況を極めて容易にしてくれると、もしアメリカ政府が、どんな試みも認めないという準備が出来ていることを断固として声明するならば、極東における現状を武力で変更しようとする。当時、チャーチルはアメリカに提案した、海軍基地としてシンガポールを利用するようにと。

しかし、アメリカの研究者達が考えているように、当時、ルーズベルトはこれを行うことは出来なかったし、軍事力を適用する何の約束も与えることは出来なかった、アメリカを直接侵略する場合を除き。国会における力のある孤立主義の雰囲気を知っており、国会は彼を支持しないことを知っていた故に。少なくとも重要な役割、明らかに、を果たしていた。アメリカ人は「老人」のチャーチルのために、火中の栗を引き抜くつもりはなかった、不安な、もちろん、第一に、イギリスの極東の領地について。

その頃、ワシントンは増大する危惧を持って、インドシナと中国における日本の行動を注視していた。そこではアメリカの利益に対す実際の脅しが増大していた。事実上、日本はアメリカとイギリスの鼻先で中国への「扉をバタッと閉じた」。インドシナ半島の占領への返答として、アメリカは1940年9月に、屑鉄と鉄の禁輸を行った。日本からアメリカ資本の引き上げも。アメリカ政府は汪兆銘政府を認めることを拒否した。国民党に対する財政支援を強化した。ソ米関係の雪解けが起こった、1月22日、アメリカの国会はソ連邦との貿易関係において「道徳的禁輸」を取り消した。

1941年初めに、ルーズベルトは自分の特使としてロチリン・ケリーを中国へ派遣した、この国における経済的と内政的状況の調査の目的で。2月7日に、重慶に到着し、アメリカの特使は蒋介石に要請した、中国がソ連邦との外交関係において特別な活動をしないうように、ソビエトと接近を勧めなかった。

1941年2月、アメリカとイギリスは国民党政府に莫大な借金を提供した：合衆国は5億ドル、イギリスは5千万ポンド。そのような確実なクレジットを彼らは中国に決して与えていなかった。これは次のことを証言した、ワシントンとロンドンに中国に極めて興味を持ったことを、極東における重要な同盟国として、日本との彼らの戦いにおいて。日本はこの地域においてアメリカの利益に直接触れていた。それ以上に、アメリカもイギリスもこの地域に大きな陸軍力を持っていなかった。太平洋における戦争の開始時、中国は戦闘で鍛えられた300万人の軍を持っていた。

1941年1月末に、ワシントンで、アメリカとイギリスの参謀部の交渉が始まった。参謀部の交渉は、3月29日まで継続し、名称「ABC-1」として知られる同意に達した。この中身は次の通りである。ドイツと日本との戦争に、イギリスとアメリカ軍が参加する場合には、最初はドイツに対して軍の集結をする。同時に、日本に対してはドイツの崩壊まで兵力を釘付けにする行動を行うことが予定された。

当時、平行して、合衆国は日本との協力関係を達していた。2月14日、ルーズベルトは公式に、新しく任命されたアメリカにいる日本大使の野村に、秘密の段階で米日交渉を行う提案に着手した。交渉は1941年3月8日にワシントンで始まり、12月7日まで続いた。即ち、パールハーバーを日本が襲撃する時まで。

## 「我々はイギリスに平和を求めることを強く求めている・・・」

ソ連邦をドイツが襲撃する準備について伝える、中央への無線通信の量が増大していった。1月4日、ベルリンの「メテオル」(スコルニャコフ)から、「アリタ」と「アリーツ」の、先行していた報告書の証拠が届いた。伝えていた、情報は噂ではなく、ヒットラーの特別命令に基礎をおいていると。その命令は極秘であり、ごく僅かの人物しか知っていないと・・・。ヒットラーは考えている・・・赤軍の状況は今は最低であり、春には疑いのない成功を得ることになると・・・。」

1月初めに、外国の諜報機関の助けを借りた報告書が届いた、1940年12月18日のヒットラーの演説についての、スポーツ宮殿で行われたドイツの5千人の将校の卒業において。外国諜報のベルリンの機関「レソボド」が伝えた、ヒットラーは攻撃的発言をした、「・・・6千万人の大ロシア人が地球の6分の1を占めているが、世界に存在する不公平として、9千万人のドイツ人は地球の極一部に身を寄せ合っている」。ヒットラーは若い将校達にこの不公平の除去を呼びかけた。1月27日、ベオグラードから、「ソフォクル」が伝えてきた、ユーゴスラビアにいるドイツ大使ヘリングの発言について、ドイツ大使館での非公開の会議における。その会議で彼が発言した、「ドイツにとって、バルカンは決定的な部分である、バルカンはヨーロッパの「新秩序」に組み込まなければならない。が、ソ連邦はこれに決して同意しない。これ故、ソ連邦との戦争は不可避である」。ソビエトとの国境に、ドイツ軍の移動についての情報が増大していった。ソ連邦領内にドイツの諜報機関によって投入されたスパイの数が急激に増大した。

1月31日、ドイツの陸軍総司令部、それにヒットラーは「バルバロッサ」計画の更なる改良を委ねた命令を出した、戦略的集中と軍の展開に関する。この命令で、北、中央、南の3軍団の課題がより明確にされた。命令第21号で、プリピャチ湿地より北で、スモレンスク方向に中央軍団が打撃を加えることが、主攻撃として計画された。これにより、ベロストクス突出地区でまず始めにソビエト軍を包囲する。その後、ミンスク地区で。この方向でのソビエト軍の崩壊の後、戦車軍団は北に向きを変え、北プロシアから進撃し、レニングラードに向かっている北軍団と共同して、パルチック沿岸にいるソビエト軍を殲滅する。

このようにして、課題が課された、「ロシアの北部における敵軍の抵抗力を完全に抹殺すること。そして、次の課題のために作戦の自由を保障すること、ドイツ軍の相互協力の下で。南のロシアで行動中の」。この際、重要な但し書きがなされた、「ロシアの北での抵抗を示す、敵の企ての突然で完全な崩壊の際、北へ軍団の転回の交代に関する問題が生ずる、モスクワ方向へ急速な攻撃によって……。この作戦の枠内で軍団の指導のために、力を保存する、ポーランド戦役時に得られた経験と原則」。

避けられぬ時のカウントダウンが始まった、人類史において最も流血のある戦争開始までの。

戦争の準備を隠すために、ドイツの指導部は偽情報の拡散手段を採ることを計画した。

2月12日、ベルリンから、テヘランにあるドイツ大使館に、武官のための回状電報第73号が送られた。電報で語っていた、「ルーマニアにおけるドイツ軍の一部の移動に関する問い合わせにおいて、回答を控えなければならない。より執拗な質問においては、ベルリンを引き合いに出すこと。避けられない場合には、回答は一般的な視点で語ること。示すこと、ルーマニアへの我々の軍の派遣の政治的理由は、ギリシア（のサロニク）にイギリスの各種軍の集中についての証拠を持っているからだ。ドイツ軍の戦力については、不明としておくことが望ましい。ドイツ軍の総兵員数に関して回答を与えなければならない時には、おおぼらをつくように」。

2月15日、「偽情報に関する方策についてのOKB参謀部の指令」が印刷された。書類は要求していた、「第一段階で、4月半ば近くまで、現在存在している我々の意向についての情報の不確実性を維持すること。次の第二段階で、作戦「バルバロッサ」の準備を隠すことはもはや出来なくなった時、デマ情報を流し、イギリスへの侵入の準備へ注意を逸らすことに向けるように、相当している行動の説明をしなければならない」。

この際、偽情報に関する課題は段階毎に具体化された。第一段階で、イギリスへの差し迫った侵入についての末に複雑化された印象を強化することが要求された。第二段階の作戦「マリト」と「ゾンネンブリュメ」の価値を過大視させることも。参加する軍力についてのデータを水増しすることも。作戦「バルバロッサ」のための軍の集中は計画の変更のために必須なこととして説明する。作戦「マリト」のための軍の再編として、ロシア側からの可能な進撃に対する背後の防御に関する防衛手段として。

イギリス島への急襲が迫っているという雰囲気醸し出す目的を持った世論を起こさせる課題が提起された。この際、全ての方法を採用する、ドイツ軍の中に「イギリスへの襲撃の準備をしているという雰囲気が保たれるように、完全に新しい手段であるとして」。同時に、「新技術を西に隠れて移動させるという情報をばらまく」ことも計画された。空挺団本部に、英語が達者な通訳を配置したという情報も拡散させる。イギリス領土の地図の増刷、ラマンシ海峡の一定地帯に地雷の施設を模造し、これまで知られていなかった「ロケット隊」の模型を構築する。

第二段階で、バルバロッサ作戦のために軍の集結についての意見を広めることが予定であった。戦史において最大級の気を逸らされた演習として。イギリス襲撃の準備の偽装のために。問題が生じた時のために、襲撃をどのような武力で実現するかとの、答えることが予定されていた。作戦の第一段階でイギリスへの大軍の移動はイギリス海軍の海洋での優勢のために不可能であると。その時には、第一打撃として、新しい戦闘手段の適用の御



陰で、比較的小さい武力となろう。これ故、イギリスに対する主力の集中は「第一打撃を加えた時に始まる」。

偽情報の効果を高めるために、幾つかの作戦を一致させる予定であった、作戦「マリト」の開始（軍団の行動のぎっしり詰まった作業スケジュールの実施、休暇の中止、その他）。偽情報の伝達を組織化することが計画された、中立国にいるドイツ武官に、ベルリンにいる中立国の武官達に。この際、命令された、「これらの情報は途切れ途切れの特徴を持っている、が、一つの共通の傾向に込んでいる」と。

その後の出来事が示した通り、偽情報に関するドイツの行動は成功であった。ドイツによって喧伝された、ソ連邦国境線へのドイツ軍の集結の噂は、継続中の独英戦争或いは中近東への進軍の条件下では本当のように見えた。

ソビエト国境へのドイツ軍の集結についての情報量が増大していった：2月14日、ベルグラードの「ソフォクル」（ユーゴスラビア参謀部のデータから）から－127師団；2月21日、チューリッヒの「ドラ」から：「スイスの参謀本部の諜報局の指揮官の情報によると、ドイツは現在東に150個師団を持っている・・・ドイツの進撃は5月末に始まる」。2月28日には、ベルリンにいる「アリタ」と「アリーツ」から：3つの軍団が形成された、即ち：将軍ボック、ルンドシテットとリッテル・フォン・レーフの指揮下に。「ケニスベルグ」軍団はペテルブルグ方面に進撃する、「ワルシャワ」軍団はモスクワ方面に、「ポゼン」軍団はキエフ方面に。予定された作戦開始の日は5月20日か。多分、120個師団の力で、ピンスク地方に包囲攻撃が計画されている。

ソ連邦に対する戦争の準備と関係して、目まぐるしい独日の活動が始まった、立場と優先度の相互の解明に関して。

1941年2月23日、リップントロップの公邸（フシリ宮殿）で、外務省の大臣と日本の大使大島との間で会議が行われた。

相互の極めて真剣な挨拶の後、会議の速記録で述べられているように、リップントロップは仕事に取りかかった：「我々は全ての可能なことを考慮に入れた。戦争は既に勝った、軍事的に、経済的に、政治的關係において。我々は戦争を終わらせたい、出来るだけ早く、イギリスに平和を懇願させて。総統は力に満ちあふれ、健康で、勝利を確信している。総統は戦争を急いで勝利の結末とすることを決めた。日本との共同は極めて重要である、この意向を実現するためには。しかし、日本は自分の利益において出来るだけ早く戦争に参加する必要がある。このようにして、イギリスは極東における自分の枢要な立場を失うであろう。逆に、日本は極東で優位な立場を得ることになる。しかし、これは戦争の手段によってのみなすことが出来る。

初めて、公的なレベルで、ベルリンはいわゆる「シンガポール案」の音入れをした。「極東におけるイギリスの枢要な立場を抹殺するために、決定的な攻撃をシンガポールに与えなければならない。シンガポールの占領は稲妻のように、もし出来るならば、宣戦布告無しに、最も平和時に。これら全てが我々の利益のもとで戦争を早く解決し、アメリカに戦争への参加を思いとどませる。

シンガポールの占領はイギリス帝国の心臓への決定的打撃を意味するであろう。イギリスは戦争に出てこれない。まだアメリカは戦争の準備が出来ていないので。ハワイ諸島より遠方に自分の海軍を派遣する危険を冒さない。もしアメリカが戦争に出てくるならば、

アメリカは手の出しようもなくただ眺めているだけである、日本がフィリピン諸島をアメリカから奪うのを」。

リッペントロップは良く理解していた：南に進出し、日本は冷静である、日本の新しい進出がソビエト連邦から何の反抗も引き起こさないとして。それ故、ドイツの大臣は極東の同盟国に冷静さと確信を吹き込む準備が出来ていた。一面において、彼は多くのことを指摘している、「ドイツは既に・・・将来の2つの国民のために行動した」：「フランスは極東の大国としてこれ以上は存在しないであろう。イギリスは同じく極めて弱体化し、日本がシンガポールで次第に力を持つようになる」。他面において、リッペントロップは大分間において大島に話した、「もしロシアと予想外の衝突が起きるならば、その場合には、我々は基本的な重荷を背負うことになるであろう。ドイツとロシアの衝突の結果となるのは、ドイツの大勝利とソビエト体制の終焉である」。

リッペントロップの個人的な署名のなされたこの会議のメモは、次のように終わっている：「大島大使は私の論拠に完全に同意した。彼は語った、この政策の実現のために、個人的には可能なこと全てをやりたいと。彼は指摘した、彼が日本の外務大臣にベルリンに派遣するように要請したと、より具体的で受容できる提案を持って。私は大島に話した、悪くはないだろう、もし、日本の外務大臣がシンガポールへの急襲についての最終的な決定を持って来るならば。そうすれば、我々は個々で詳細の検討を行うことが出来よう。私はさらに説明をした、全ての分野における密接な共同、特に、出版において、戦争の共同の遂行には必須である。既にイタリア、ルーマニア、ハンガリー、スロバキア、ブルガリアで構築された。

大島は内密に私に伝えた、近衛と松岡は考えている、彼と同じように、彼らはシンガポールへの急襲に同意している」と。

この会議に関係して、1941年1月18日のゾルゲの報告は分かり易いものである。それで彼はオットーの言葉を持ち出していた、「大島は全ヨーロッパにとって大事な大使であろう、3国軍事同盟の発達の課題を持った、シンガポールに対する日本の攻撃的な行動を持って。そして、必要になれば、アメリカに対しても」。リッペントロップと大島の会談はこの調子で何度も行われた。

しかし、中央ではゾルゲを理解しなかった。1941年1月24日、「オルガニザトル」（諜報局極東局の局長）が無線電信を送付した：「そちらの第146号の中身がわからない。理解して良いのか、大島は全ヨーロッパの総大使となり、日本は3国同盟の変更のために行動を始めるのか？ その目的は何か？」

これに、2月7日、ラムザイの回答が続いた：「そちらの電報第46号に回答する：大島は公的にはヨーロッパの総大使とはならない。が、作戦的にこの役割を遂行するつもりである」。

リッペントロップと大島の会談は、日本の内閣に受け入れられた、異常に重要な出来事として。明らかとなった、ドイツはソ連邦との戦争を精力的に進めていることが、近い将来において。しかし、何故、極東においてソ連邦を同時に攻撃することを日本に呼びかけないのか？ 逆に、シンガポールの方面に日本を突き動かすのか？ この疑問の正確性の必要性は、書類によって補足された、ヨーロッパへの松岡の緊急訪問のための。

同じ頃、ヒットラーの戦略計画の発展において、戦争からイギリスの撤退についての、

ドイツ国防軍最高司令部は3月5日、日本との協力についての指令を出した。

ドイツ国防軍最高司令部

1941年3月5日

14冊印刷。第2部

極秘書類（将校同伴で伝えること）

日本との協力についての指令第24号から

総統は、日本との共同について次のような命令を出した。

1. 3国条約に基づいた共同の目的は次の通りである。出来るだけ早急に、極東における活発な行動に日本を駆り立てること。このようにして、イギリスの大兵力が拘束されよう、アメリカの利益の中心がアメリカから太平洋に移ろう。

日本は勝利への大きなチャンスを持つことになる、早く軍事作戦を始めることにより。日本の敵は未だ戦争の準備が不十分なので。バルバロッサ作戦は、この特に都合の良い政治的で軍事的前提のために作成された。

2. そのような共同を準備するために、全ての手段が必要である、日本の軍事能力を確固とすることを助けるために。これ故、各種軍の最高司令部は、ドイツの軍事経験、軍事経済と軍事技術の援助を得たいという日本の希望を完全に満足させねばならない。ここにおいて、相互関係が望ましい、が、その不在が交渉の遂行を困難にする事情となつてはならない。この際、当然ながら、第一に、日本の要求を満足させなければならない、それは近い将来において戦争の遂行において影響を示すことが出来る。

特別の場合において、総統は決定権を自分のものとして確保している。

3. バルバロッサ作戦について、いかなる情報も日本側に知らせる必要はない。

最高司令部参謀部長官 カイテル

指令第24号はドイツの優先権を確り決めていた：イギリスを戦争から離脱させ、まさにそれにより、アメリカを戦争に引き込ませない。同時に、ソ連邦への進撃の準備について何の情報も日本側に伝えることを、それは禁止した。

しかし、第3帝国の海軍司令官であるデーニッツ將軍は総統を納得させた、ドイツの意向について松岡に予告することを、慎重な形で。デーニッツがヒットラーに書いた：「日本は出来るだけ素早く行動する必要がある、シンガポールを占領するためには。状況は今ほど都合が良くないであろうから。日本はそのような作戦の準備はしている。が、日本の代表者の主張に同意する、ドイツがイギリスに上陸を行ったならば、日本は進撃を遂行するという。つまり、我々は全戦力を集中しなければならない、日本に遅れることなく行動を強いるためには。もし、シンガポールが日本の手に入ったならば、アメリカとイギリスに関係した、全ての他の東アジアの問題は、解決されるであろう。

野村將軍の表明（？ ＊）に同意し、外務大臣松岡は困難な状態にいることになる、ロシア問題の解決に関して。これに関して、ベルリンでの差し迫った交渉時に質問するつもりである。これらの条件下で、ロシア関係における我々の計画について松岡に通報することは目的にかなっていた」。

ヒットラーは焦らずに、ベルリンへの松岡の訪問を待った：日本人は何を語るのか？

## 決壊・・・中立へ

松岡の出立の前に、日本の内閣では、彼の旅行の目的に関する最終調整を行った。活発な審議を行った、「朝食グループ」で。それに尾崎が参加していた。彼は巧みに侮辱と矛盾をかき立てた、日独関係に貯まっていた。彼は訴えた、ヒットラーと同じように、第一に自分の利益を守ることを。ドイツの指導部は日本をシンガポールへと突き動かしている。ドイツの目論見はわかった、太平洋でイギリスとアメリカとの戦争を起こすこと、そして、ヨーロッパでの2国の立場を弱体化すること。大島が書いている、ヒットラーは再び露わにする、日本の政策を服従させようとする明らかな意向を、より弱い同盟者として、ドイツの計画と行動によって。しかし、深刻な戦争を始めることができるのであろうか？ 背後に和解の出来ぬ敵、ロシアを持っていて。ハルビンゴールの教訓は多くのことを語った。特に、ヒットラーの狡猾さについて、ノモンハンでの最も大変な戦闘時に、日本を援助する代わりに、ソ連邦と不可侵条約を署名した。これは同盟者の背後のナイフではないのか？！ 今、これを思い出しながら、君主（？ ＊）は怒りをもちこたえることは出来なかった。否、この段階で日本の興味はソ連邦との平和関係を要求している。この問題を研究し、スターリンとモロトフとの会談で審議するように松岡に指示を与える必要がある。もちろん、日本の条件では、妥協が可能である。大事なことは、蒋介石への援助の停止をソ連邦から得ること、それを見よう。もちろん、ロシアとの条約の締結への特別な期待をかけることはない、が試みなければならない。日本は自分の背後を安全にする必要がある。尾崎が言っている、ドイツ参謀本部も必要なものであると見なしている、日本に対するソ連邦の進出からの保証を得ることを。尾崎は知っている、言っていることを、日独関係の専門家としてからは見なされているのは無駄ではない。自分の利益について考える時である、ヒットラーのお先棒を担ぐのはいい加減にしる！

1941年3月、ゾルゲはオットー大使から知ることになった、松岡がヒットラーの招聘を受けてドイツに行くことを。が、この訪問は非公式なものであると。3月11日諜報局はゾルゲの長い電信を受け取った。電信は2部からなっており、3月13日にゴリコフに報告された。

赤軍参謀部諜報局長へ

東京、1941年3月10日

シンガポールへの日本の急襲に関するオットー大使へのリップントロップの電報は、3国同盟における日本の役割を活性化させる役目を持っている。

ウラフ王子（ドイツの特使、数日前にここへやって来た、リップントロップと親密な関係にある。彼については私は長年にわたって知っている）が私に話した、ドイツは欲している、日本が次のような場合にシンガポールに進出することを。もしアメリカが戦外に留まり、日本がソ連邦への圧力のために大いなる利用が出来ないならば。ウラフがさらに付け加えた、この視点—ソ連邦への圧力のために将来の日本を利用する—は、ドイツでは大いに認められている、特に軍部では。

新しいドイツの武官（BAT）が前の武官から手紙を受け取った、極めて反ソ敵傾向を記述している、ドイツの高位将校とヒムラーのグループの中で。新しいドイツ武官は考えている、現在の戦争の終了に関して、ソビエト連邦に

対するドイツの無慈悲な戦争を始めなければならないと。この見解に関して、彼は見なしている、日本は相変わらずソ連邦に対して重要な役目を持っていると、しかし、協定を達成する必要があり、シンガポールに対する日本の進出を達する必要がある。

新しいドイツの武官もシンガポールへの進撃を支持している。

第87号、88号。ラムザイ

複写をスターリン同志、モロトフ同志へ。ゴリコフ

赤軍参謀部諜報局長へ

東京、1941年3月10日

近衛大公が個人的にオットーに語った、彼は強く賛成していると、ドイツへの松岡の訪問に。しかし彼は指摘した、若干の日本人グループが松岡のこの訪問を止めさせるよう動いていると、ドイツ指導部が松岡に多大な影響を与えることを恐れて。近衛は松岡の旅行の目的を次のように見なしている：

1. 3国同盟に対する熱狂の強化は、イタリアの敗戦後、日本において急速に弱体化している、そしてドイツのイギリスへの侵入を阻止することに関して。親イギリスや親アメリカグループは、日本にドイツとのより密接な相互関係をさせないために、強気に働きかけている。

2. 松岡はヒットラーとその他との私的会談を経て、イギリスに関するドイツの本当の意向を説明しなければならない：ドイツはイギリスと戦争をするのかしないのか？ 日本の指導部は警戒し続ける、米独の妥協の可能性を、ドイツがイギリスに侵入できなかった場合に。そのような妥協の場合には、日本は南方への拡張に関して注意しなければならない。

3. ソ連邦に関しては、松岡は自立行動に大きな全権を有している。近衛は信じていない、松岡が不可侵条約をソ連邦と締結できると。しかし、彼は期待している、この方向に、松岡は何かをする事が出来ると。近衛はまた期待している、ソビエト政府から、日本が注文したドイツの軍事物資をシベリアを經由出来る通行の許可を得ることを。結局、彼はソビエト連邦と協定を得ることを期待している、重慶政府との協力関係を停止することの。

松岡は最初にベルリンを、その後にローマ、ビシー、モスクワを訪問し、その後ベルリンに戻り、そして再びモスクワを訪れる。

第89号、90号、91号。ラムザイ

複写をスターリン同志、モロトフ同志へ。ゴリコフ

長い間、ゾルゲはそのような評価を受けていなかった、全てが大目玉を食らっていた。ほら：「そちらの電報は価値がある」！ 即ち、情報は最上部に報告された、ちょうど良い時に到達した。これは本当の成功であった。

ラムザイの報告は本当に価値があった、日本の意向に関する他の情報源からの情報と共に、スターリンの気を引いた故に。

スターリンは最後まで東京からの報告書を読んだ。その後。机を離れ、いつも通りに室内を歩き回り始めた、手に火のついたパイプを持って。こんなわけで。一面において、ドイツは直ぐに全てを得たがっていた：日本が太平洋において、アメリカとイギリスに対して進撃し、同時に、将来において、ソ連邦へ圧力的手段で留まるような。他面で、日本において、日本とドイツのあまりにも密接な接近とドイツの政治の水路への移動に反対する雰囲気が強まっている。日本はヒットラーを警戒し、恐れている、彼がイギリスと妥協するのではないかと、ノモンハン事件の時に、ソ連邦とこれがあったように。ソ連邦との交

渉において、松岡は大きな全権を持っている。やっぱり、ヒットラーの関係における日本の緊張感を利用し、中立条約の締結に関して彼らと交易をすることができる。上品な組み合わせがくっきりと表れた：状況を利用し「正確に逆にガムビット」(? \*)を繰り返すまで」。1939年8月に演じられた(何が? ノモンハン事件は1939年5月～9月張鼓峰事件は1938年7月～8月 \*)。ほら、どれだけが得られたか。得ることがなければならぬ。締め付けないことができるだけ必要である、松岡との会談で。もし会議がそれなりに進められるならば、話はまとまろう。松岡は日本政府の内部の矛盾から、困難な状況にある。松岡はソ連邦との交渉で結果を出さなければならない。日本との交渉は我々には切羽詰まっている。ヒットラーはソ連邦との国境において軍を増強している。言うならば、イギリスの爆撃から遠方に軍を引き離して、イギリスへの侵攻の準備をしている。よろしい、もしそうならば、もう6ヶ月が必要である、全ての予想外のことに對する準備をするためには。見てみる！ ゴリコフ(ソビエトの諜報局の)に話す必要がある、もう一度東京のこのドイツ人のところで、オットーへのリップントロップの電報の正しい内容を問い合わせるために。

対応した質問が發送された。ラムザイは3月15日モスクワに伝えた：「私はドイツ大使オットーへのリップントロップの電報を読んだ。それはドイツ語で次のように読まれた：「私はそちらが持っている全ての手段で、日本を速急にシンガポールへの進撃にかき立てることをお願いする」。さらにオットーが私に語った、ドイツ参謀本部は満州への赤軍のあり得る侵攻に對抗しての保証と見なしている、シンガポールへの軍事行動の開始前に必要な条件を」。ゴリコフの決裁に従うと、この知らせはスターリン、モロトフ、チモシェンコ、ジューコフに送られた。

ラムザイのこの電報は極めて重要な価値を持っていた。その中で初めてゾルゲは伝えた、ドイツの準備について、ソ連邦を拘束する軍事手段でもっての。そのような方法で、シンガポール占領時における安全な背後を日本に保証する。同時に、ゾルゲは情報を伝えた、ビシー政府に再び任命された日本の大使から尾崎が得た。これらの情報に合致している、日本とタイとインドシナとの交渉時、日本は要求することを避けた、彼らに何らかの軍事的特典を。しかし、後になって日本は不可侵条約の締結を要求するつもりであった。両国は、日本に空軍基地と海軍基地を提供することになる：サイゴンから南に、タイ国境から遠くないところに。この課題に関する交渉は、松岡の帰還後に再開されるであろう。この情報は、日本の拡張の南進がそのままであることを証明していた。そのようにスターリンとモロトフに報告された。

注目に値する、ドイツ参謀本部の意見—オットーが引き合いに出した—は1941年1月16日のハルダーの日誌に最も明瞭に反映されたことが：「日本。偽りのない共同への準備にある。ロシア問題(ドイツとの)の解決は東におけるイギリスに対して日本を自由にする。これ故、問題の早急の解決が必須である。出来るだけ早く！」。

3月23日、日曜日、日本の外務大臣がモスクワにやって来た。北駅のプラットホームに、儀仗隊が並んだ。日本の代表団をスターリンが出迎えた。松岡にとってはこれは予想外のことであった。

翌日に、松岡とスターリン、モロトフの会談が行われた。

松岡が声明した、日本政府は長い間に渡って日ソ関係を改善し、不可侵条約の締結を指

向ってきていると。昔は、これを日本の世論が邪魔をした。今でも、不可侵条約の締結に反対する人々はある。しかし、松岡は近衛と一緒に、「両国間の関係改善の決定的意見を持っている」。

この後、松岡はスターリンに、ベルリンとローマからの彼の帰還までに、2つの課題について考えてくれるように願い出た。

第1番目の課題は日本とソ連邦の思想的一致に関係している。松岡の言葉によれば、日本には「道徳的共産主義」が存在する故に。アングロサクソンの伝統は日本に損失をもたらした。産業革命は道徳的共産主義の発展を止めた。今、日本では資本主義よ、個人主義よ、ようこそというスローガンが掲げられている。しかし、このためには、アングロサクソンを抹殺する必要がある、その目的を持って、ちょうど3国同盟の締結が現れている。松岡は声明した、「もしスターリン同志が理解するならば、彼（？ 訳者）が言いたいことを、もしソビエト側に対応する理解と共に進みたいという要求があるならば、我々は貴方と手を携えて進む準備がある」。

第2番目の課題は日中戦争に関してである。その戦争では、日本は中国人民とだけでなく、アングロサクソンとも戦っている。イギリスとアメリカそれにアングロサクソンの資本主義の召使いである蒋介石と。これに関して、松岡は中国における日本の意向を検討するように要請した、即ちこの観点から。

スターリンが語った、今は短い解答だけをする事が出来ると。しかし、松岡はこの課題について考えてくれるように要請し、ベルリンから戻った後に回答をくれるようにと。

スターリンはこれに同意した。それにもかかわらず、自分の意見を短く述べた。第一に、思想はそれほど大事ではない、接近し関係の改善に対して両側が期待しているならば。第二に、アングロサクソンについては、「ロシア人は決して彼らの友人ではない、今では、彼らとの友好を全く希望していない」。

松岡は述べた、「彼は深く信じていた、アングロサクソンの思想を抹殺すること無しでは、新しい秩序を作り出せない」と。

会談は終了した。

3月25日、諜報局は日本にいる武官グシェンコから大量の報告書を受け取った、松岡の旅行の基本的な動機についての。報告書は次の通りである。状況の変化—アメリカの抵抗—に対応して、日本の内閣はフランス領インドシナとオランダ領インドへの日本の進出を停止し、三国同盟の再考について課題を提示した。オットー大使—この課題の解決を引き受けることは出来なかった—はベルリンに出立するつもりであった、松岡との交渉に在席するために。

出発前に、彼（オットー）は大使館の外交と軍事の職員との会議を招集した、条約に関しての彼らの意見に耳を傾けるために。武官クレチメルが2つの案を発言した。一つドイツは一月後に、イギリスに総攻撃を始める。その時これら全ての問題が解決する。しかし、この案の実現性に疑念がある、アメリカ側からの大規模な援助故に。それで作戦は失敗するであろう。2つめの案—トルコとアフガニスタンに進む。ソ連邦はこれに反抗するであろう。ドイツはこれを考慮に入れる必要はない、ポーランドとフィンランドにいる赤軍は不十分な戦闘力なので。クレチメルがこの問題を東京ではなく、ベルリンで解決するように提案した。この後、オットーがベルリンに出発した。

さらに、グシェンコ（日本にあるソビエト大使館の武官）が伝えた、松岡をベルリンに招聘し、ドイツ人は自分の基本的目標を見る、彼と日本政府を納得させるために、アメリカを逸らす必要性を。「この際、ベルリンにいる松岡はモロトフか彼の代理と会い、探りを入れるように指示を受けた、ヨーロッパでの戦争拡大の場合に、ソ連邦がどのように反応するか。モスクワでは、中国の問題は話題にならなかった」。伝わった、ベルリンから戻ってから、モスクワで主要な会議を行わなければならないと。最後にグシェンコが結論を出していた：「私は見なしている、主要会議での報告はもっともらしく出来事を照らす、最近東京で秘密に起こっている」。

この電報は、第一に、興味がある、それは全般としてソビエト指導部を松岡の訪問の目的に関して正しい方向に向けただけではなく、ベルリンのリッペントロップか彼らが手にした「指令」に関しても。松岡がこれらの「指令」から逸れた時、スターリンとの会談で「中国問題」を理解しながら、これは最初のベルとなった、日独の矛盾においてなすことが出来ること。第2に、著者の手元にある、電報のコピーから、理解することは不可能である、それがどのような情報源を元にして作成されたかを。グシェンコがある報告書について書いている。電報中の話はドイツ大使館内での秘密会議でのことであると見なして、ほぼ確実に予想することが出来る、この情報はゾルゲから得られたと。

3月26日、松岡はベルリンにやって来た。そこでヒトラーとリッペントロップに会った。第3帝国の指導者達は、作戦バルバロッサの内容とその実行期間について隠しながら、日本の大臣に自分たちの意向を伝えた。直ぐわかるようにほのめかしながら。3月27日、松岡との会談でリッペントロップが話した：「東部に、ドイツは軍を維持している。この軍は何時でもロシアに対して進撃する用意が出来ている。もしロシアがドイツに敵対的立場をとるならば、総統はロシアを打ち砕く。ドイツは確信している、ロシアとの戦争はドイツの完全なる勝利と、ロシア軍と国家の最終的な粉砕で終わると。総統は信じている、ソ連邦へ進撃した場合には、数ヶ月でソ連邦を滅ぼすであろうと」。

1日おいた3月29日、リッペントロップと松岡の間でもう一度の会談が行われた。

ドイツ外務大臣と日本外務大臣との会談の議事録から

ベルリン、1941年3月29日

外務大臣リッペントロップは、松岡と事前会談を始めた。モスクワで差し迫っているロシアとの交渉に関して。彼（\*）は意見を表明した、全般的な状況を考慮しながら、ロシアと度の越えた関係の拡大をしないことが最良であろうと。彼は知っていない、状況が今後どのように進展するかを。しかし、完全に断言できる：ロシアがいつか日本に進撃するならば、ドイツは同時に進撃する。彼はこれを松岡に保証することを全く確かにした。このようにして、日本は南に進撃することが出来る、シンガポールへ、ロシアとのあり得る紛糾を心配することなく。ドイツ軍の大部分は、帝国の東部にいる、何時でも進軍できる。彼（第3帝国の大臣）は思っている、ロシアは軍事状況の複雑化は求めていると。しかし、もしドイツとロシアの間に紛争が起ると、ソビエト連邦は数ヶ月間で粉砕されるであろう。この場合、日本は何も恐れることはない、もし日本がシンガポールを攻撃したいならば、日本はどんな場合においても、ロシアを恐れてこの作戦を止めてはならない。

ロシアとの問題がそのように進展するか、もちろん、知り得ない。スターリンが、ドイツとの関係において最近の非友好的政治を継続するのか、しないのか、わからない。彼（第3帝国の大臣）は全てのことに松岡に教え



たがった、ロシアとの衝突が限界点にあることを。どんなことがあっても、自分の帰還後、松岡は日本の天皇へ報告することは出来ない、ロシアとドイツの間の衝突の可能性が排除されるようにと。それどころか、そのような衝突があり得るという事態が。が、有りそうもない……

松岡が触れたサハリンについての問題はその後には解決されよう。ロシア人が無鉄砲な政治をし、ドイツに彼らを攻撃することを強いるならば―彼は正しいと見なしている―、中国における日本軍のムードを考慮して、自分の側からロシアに対して発言することを妨げるために。何よりも良いのは、日本が共同の仕事を助けること、もし日本が何物にも逸らされず、シンガポール作戦を行うならば。共同の勝利の場合には、前述した日本の希望はとにかく実現される。全ての希望するものは日本の手に入る、特別な苦労もなく……これに関して、松岡が答えた、彼が友好関係を持っている有力な海軍将校達は意見を堅持している、シンガポールを占領するためには日本軍には3ヶ月が必要であると。慎重な外務大臣である彼はこの期間を2倍に拡大している。彼は考えている、6ヶ月が必要であると、アメリカを起源とするあらゆる危険を防止するためには。もし、シンガポールの件にさらに多くの時間が必要となり、作戦が1年まで延びるならば、アメリカとの状況は極めて危機的な状態となる。彼は知らない、それから脱せるのかは。もし、この欲求が何らかの段階で可能とわかるならば、彼はオランダ領インドシナに手を付けないであろう。すなわち、彼は恐れている、この地域への日本の進撃の場合に、石油業は放火されるであろうと。1年或いは2年後によくそれらを復興させることが出来る。……最後に、松岡は……請け負った、日本は常に忠誠な同盟国であることを、同盟国は全ての仕事を完全に支持し、いい加減ではなくなすことを、まじめに。

松岡は全てを理解した！このようにして、ドイツ人はロシア人を攻撃することを決めた。まあ良いさ、これは悪くはない、試してみよ。しかし、リップントロップは非常に甘い歌を歌う、日本人を請け負いながら、彼らはとにかく苦労なく全てを手に行けると。我々はこの歌を知っている：ドイツ人は必要な時には、直ぐに日本に圧力を加え始める、日本がロシアに反対するために。そんなことはない（？\*）！近衛首相は全く正しい：ヒットラーのお先棒を担ぐのはもう沢山だ！日本にはとどのつまり、自分の利益がある。シンガポールへの進撃は容易な散歩ではない、全ての予想外のことに対する深刻な準備が必要である。明かである、アメリカはイギリス側に立つことは。4月4日の会議で、ヒットラーが語った、アメリカと決定的な戦いをする事になり、アメリカ人の一人もヨーロッパに上陸させることはないであろうと。ドイツには十分な戦争経験がある、言うまでもない、「ドイツ兵はアメリカ兵より遙かに優れている」。ヒットラーは約束した、日本がアメリカと衝突した場合には、3国同盟に従って、ドイツは行動すると。ドイツの保証が日本によく知られていたとしてみよう。ヒットラーが必要とした時には、彼は全ての保証を全く無視した、1939年に反コミンテルン条約を無視した。不可侵或いは中立条約の締結をロシアと真剣に話し合わなければならない、相違はごく僅か、言葉に言いがかりを付ける価値はない。今これを最大限進めなければならない。というのは、ドイツとロシアとの戦争はロシアをアングロサクソン陣営に確実に追いやる。これは意味している、日本は敵に囲まれることを―ロシアはアメリカに沿海州とカムチャッカに基地を提供することになる。これは現実的な脅威である！ロシアと条約を締結しなければならない、そして考えてみる：必要な時に、日本はロシアへ進出することが出来る、その利益がこれを要求するならば。

ヒットラーとリップントロップは完全に確信していた、松岡は全てを理解したと、彼らが希望した通りに。シンガポールへの進出の期限を彼は挙げなかった、複雑な状況につい

て愚痴をこぼし始めた、アメリカ側からの危惧を。しかし、総統は明確に語った、アメリカとの衝突の場合は、ドイツは日本を支持すると。何も危惧することはない。日本側の全ての質問—経験と軍事技術の交換に関する—は完全に満足され遅れることもないと。戦いが必要ならば参加すれば良いであろう。ロシアについては、松岡は多分、全てをわかった—何の同意も今はない、状況の発展を待っている。数週間で、ドイツ軍の圧倒的な進撃でソビエトは崩壊する。日本はもちろん、ロシア製のお菓子の分け前を欲している。が、見てみよう、日本がどのように振る舞うかを。ドイツ兵はそのために血を流さない、勝利の果実を他人に利用させるためには！

3月29日、ハルダーが自分の日記に書いた：「松岡との交渉は、おそらく成功である。明らかに、シンガポールへ進出するつもりである。しかし、期日は決まっていない。松岡に伝えた、露日の不可侵条約の締結について我々は興味はないと；漁業協定、その他の締結で十分である」。

4月に松岡はモスクワに戻った。翌日に、モロトフとの交渉が始まった。ソビエト側は、不可侵条約ではなく中立条約について審議することに固執した。1937年8月に、中国との条約を締結し、よく知られているようにソビエト政府は約束をした、「中国と日本の戦争期間には日本と不可侵条約の締結はしない」との。

交渉は困難を極めた。主な障害となったのは、マンチュウゴウとモンゴル人民共和国(MHP)、そして北サハリンに触れた問題であった。中立条約締結に全体的に同意した松岡はマンチュウゴウとモンゴル人民共和国に関しては反論した。北サハリンに関しては、それを日本に売却することに固執した、東京から得た厳しい指示を引き合いに出しながら。ソビエト側は厳しい立場をとり、原則的に、この要求を拒否し、今度はこちら側から提案した、北サハリンにおける日本の利権の消滅を、相応する金銭補償で。

問題は解決されずに残った。4月12日、松岡はスターリンと最終会談に臨んだ。

会議の始めに、松岡は愚痴をこぼした、中立条約に署名することなく、モスクワを去ることになると。条約は日本だけではなくソ連邦にとっても非常に大事なのに。松岡は彼のソ連邦訪問時に条約を締結したかった、「何の条件もなく、外交的電撃戦で」。これは悔しさを引き起こす。日本がドイツと同盟条約を結んでいるにもかかわらず、全く認識していない、「ソ連邦の武力を束縛」しなければならないことを。逆に、ソ連邦とドイツの間で何かが起こった時に、日本は仲介者になろうとしている。松岡が述べた、「彼は何時も明けっ広げに話し、協力している、些細なことやしがたい商売に囚われずに」。サハリンは、小さい問題である、この問題は後で解決することが出来る。大きな問題を解決する必要がある。例えば、ソ連はインドを通過してインド洋へ出たがっている。日本は反論はしない、目を閉じている準備も出来ている、もしソ連邦がパキスタンのカラチを領有したいならば。

松岡が知る限りでは、ドイツも反論しないであろうと、もしソ連邦がイランを経由して暖かい海洋に出ることを指向したとしても。結局、松岡は納得した、アジアの運命を2つの国—日本とソ連邦—が決定し、争うことなくお互いに手を取りあうことが両国により都合が良いことを。現在、それ以上に、些細な問題を捨てることが重要である、アジアにおいてアングロサクソンから解放することが必須である故に。このためには、第一に、中国から彼らを追い出すことが必要である。イギリスとアメリカの資本主義の代理人である蔣

介石との戦いを最後までする覚悟に日本があるのはそのためである。松岡の意見によれば、「蒋介石の支持を拒否することが最も目的にかなっている、中国からアングロサクソンの追放を成し遂げるためには、そうすることが」。

結局、ソ連邦と日本の思想的接近に触れると、松岡は政治的で社会的共産主義には納得していないのも関わらず、基本的に、彼は共産主義に従い、決定的にアングロサクソンの資本主義に対抗する雰囲気であった」。大事なことは、アジアでその影響を一掃すること、その後に判断すれば良い、共産主義が良いのか、ソビエト的な或いは日本的な。残念ながら、日本人全員が「道徳的共産主義」の信奉者ではない。「日本で、進んでいる、明かではなく、しかし厳しい戦いが、資本主義と道徳的共産主義の間の」。

スターリンは松岡に黙って耳を傾けた。室内を歩き回り、パイプに火を付け、テーブルに向かって座っている日本人に向かった。そう、彼は同意した、中立条約の締結に関する問題に、無条件に。熟していた、これは最初で重要な歩みであった、大きな問題に関する将来の共同への。これは敵から味方への実質的な変更でもあった。

しかし、当時、残された問題を外すことにしよう。日本側は条約文にマンチュウゴウとモンゴル人民共和国についての項目を入れることを嫌がった。うまくいって、日本とソ連邦の間に条約が生き残るであろう。が、モンゴルとマンチュウゴウの間の紛争のための場所が残される。あれこれの形式でこれについて語る必要がある、とにかく、反対の場合において得られている、「日本はモンゴル人民共和国に進撃し、ソ連邦はマンチュウゴウに進撃できる。その結果として、ソ連邦と日本の間に戦争となる」。

松岡は注意深くスターリンに耳を傾けた。が、彼は事の本質について反論しない。とにかく、日本はマンチュウゴウとは同盟関係になかった。マンチュウゴウとモンゴルについては声明で話すことの方が良い。スターリンはこれに同意した。つまり、北サハリンにおける日本の利権の消滅についての議定書に関しての不一致だけが残る。

松岡は限ることを提案した、秘密の手紙のモロトフへの伝達を、今や中立条約を署名することを、利権の消滅についての議定書無しに。彼の見解によれば、直に商業条約と漁業協定が締結される、良い雰囲気が作られている、利権についての問題の解決のために。

スターリンは室内をうろつき始めた。松岡は緊張して彼を見続けた、モスクワのボスが何を語るのか。スターリンは自分の席に戻り、座った。松岡をマジマジと見ながら語った：「松岡さん！ モロトフと行った会談と、今日の貴方との2回目の会談は私を納得させた、条約についての交渉に、外交的駆け引きはない、実際において日本はソ連邦との関係改善を真摯に願っている。以前には、私はこれを疑っていた、これをしっかりと認めなければならない。今や、私からこの疑念は消え去った。今や我々は関係改善への本当の意向を持っている、遊びではない」。

モロトフもまた付け加えた、松岡との会談において、同じような印象を持ったことを、スターリン同志と同じように。

スターリンが続けた：「松岡さん！ 私は喜んで聞いた、貴方が確りと直接話をしたことを、何が欲しいのかについて。喜んで、というのはこの時代、この時代だけではなく、心から明けっ広げに話をする、外交官に出会うのはかなり希である。よく知られていることだが、ナポレオン時代にタレイランが語った、自分の考えを隠すために、外交官に口を与えたと。我々、ロシアのポリシェビキは他の見方をし、考えている、外交の場では、

誠実で正直であると。私は貴方の立場を困らせたくはない、日本における貴方の反対者との戦いを最後までせざるを得ない時、貴方の立場を軽減しようとして、貴方がここで外交的電撃戦を達するために。よろしい、次のようにしよう。我々は利権の消滅についての議定書を松岡の手紙と取り替える、それには、明らかに、モロトフ同志の回答の手紙が与えられよう。松岡の手紙は条約に縫い付けられることになるべきである、公開すべきではない」。

松岡が語った、利権の消滅についての責務を負うことは出来ない、2ヶ月から3ヶ月で。しかし、日本に戻り、しかるべく日本の意見を準備する。彼はこの方向で働くことを努力する、ここに素晴らしい意志がある、冗談ではない。松岡は彼を信じ、最初の手紙で満足するよう要請した、日本に自由に帰ることが出来ることを彼に与えること。彼には厳しい司令があった。それには北サハリンの売却についての話があった。が、とにかくソ連邦は同意しなかった、仕方がなかった。

松岡のこれらの話の中で、スターリンは地図に近づき、沿海州と海洋へのその出口を指し示し、話した：「ソビエトの沿海州の海洋への全ての出口を、日本は手にしている。カムチャッカ岬の所のクリル海峡、サハリンの南の宗谷（ラペルズ）海峡、朝鮮の所の対馬海峡。今、そちらは北サハリンを手にし、ソビエト連邦を完全に閉じ込めることをしている」。スターリンは松岡に向き直して、微笑みながら話した：「君は我々を絞め殺したいのか？　これが友好というものなのか？」

スターリンを納得させる希望を失わずに、松岡は返答した、これはアジアに新秩序を創り上げるために必要なことであると。ソ連邦が暖かい海洋にインドを經由して出て行くことに、日本は反対はしないと。日本はそれを助ける準備は出来ている、「インドには日本が指導しているインド人がいる」。ソ連邦には巨大な領土がある、何故あのような寒い場所にある大きくはない領土を譲りたくないのか？

スターリンが問い返した：「では何故、そちらは寒いサハリンを必要とするのか？」

松岡が答えた、「地域での安定を作り出す、それ以外に、日本は暖かい海へのソ連邦の出口に同意する」。

スターリンは再び地図に向かって、インドを指し示し、語った：「そうか、これは日本に平穏を与えるが、ソ連邦はここで戦争をしなければならない。これではダメだ」。

松岡は南洋地区とインドネシアを指し示し、話した。ソ連邦がこの地域で何か必要とするものがあれば、日本はソ連邦にゴムや他の産物を提供することが出来る。日本はソ連邦を援助する、邪魔はしない。

これに、スターリンは少し反応した：「北サハリンをとること、これはソ連邦が生きることを邪魔をする」。

松岡は理解した、これがソビエトの頭領の最終意見であると。彼が議定書の線に進むことに同意した、これは結構なことだ。秘密の手紙中の「2-3ヶ月の間に」の代わりに、「数ヶ月中に」とすることが必要であった。ソ連邦の石油をどれだけ日本に提供するのかという問題については、10万トン或いはそれ以上、これについては今後の話題とする。松岡は約束した、利権に関する問題の解決に向けて全力を尽くすことを。

今度はスターリンが松岡の手紙の文章を訂正することを提案した、「・・・利権に関する問題・・・」を「・・・利権に消滅に関する問題・・・」と書くようにと。

松岡はこれに同意し、さらに話した、中立条約の締結においては、天皇からの全権を得る必要があると。これ故松岡はモロトフに中央電報局に指令を与えることを求めた、東京からの電報に遅れが出ないようにするために。

モロトフはこれを遅れることなくすることを約束した。

終わりに、両方が合意した、各代表を選抜することに、条約の文面の正確さとモンゴル人民共和国、マンチュウゴウとその他に関する共同声明の作成のために。

これで会議は終了した。

日本の代表が退去した後、スターリンは室内をゆっくりと歩き回り、再びパイプに火をつけた。その通り、この会談は間違いなく成功であった。外交的電撃戦は双方に満足をもたらした。もし全てが正常に進むならば、明日には中立条約に署名をする。しかし、松岡は何という人物か！ 道徳的な共産主義者！ ゴリコフ（ソビエトの諜報局の）に話す必要がある、自分の東京の情報源に問い合わせるために、この「道徳的な共産主義者」の発言について、彼の東京への帰還後に、ソ日条約の署名に関しての雰囲気全般について。

1941年4月13日の日曜日、一方がモロトフ、他方が松岡と竹川大使がクレムリンでソ連邦と日本の中立条約に署名をした。

4月14日、中央はラムザイに問い合わせた：「日本とソ連邦との中立条約の締結について、日本政府の外交政策と司令部の軍事手段を見守る必要がある：

日本の南進と中国における戦争の完遂に関しての具体的な方法について；

日本の世論と日本の出版物の反応；

アメリカとイギリスと日本の相互関係；

条約に対する同僚の関係と彼らの意見を説明すること；

芝浦における日本軍部隊の乗船の情報を伝えること」。

4月17日、海外諜報のルートを通じて、ベルリンの「ステパノフ」から、報告が届いた：「スタルシナ」が通告する、彼はモスクワにいるドイツの海軍武官の報告書を読んだ、それに書いている、スターリン同志が車で松岡の出迎えた時にクレブス（？ \*）の肩をパチンとたたいて、語った：「我々は良い友人である。違いますか？」。

## ソ日中立条約についての反応

ソ日中立条約の署名は、全世界に大きな反響を引き起こした。しかし、ソ連邦と日本以外に、一つの大国もこの締結を歓迎しなかった。

アメリカとイギリス、同じく中国は理解した、ソ連邦は極東における自分の安全を確固とし、国境を危険から守り、日本の拡張を南に向けた。条約の署名に、ホワイトハウスと国会の反応は非常に病的であった。「ルーズベルトにとって、ソ日条約の署名はただただ嫌な情報であった。その前の独ソ条約の締結の情報と同じく」。その結果として、ソ米関係は極めて冷え込んだものとなった。それどころか、アメリカ政府はソ連邦に対して経済制裁を行った。この制裁はソ連邦と関係した経済的結びつきに全面的に波及した。

ソ日中立条約の署名は、中国の右派グループに当惑と不信を引き起こした。それは中国

におけるソビエト的労働者に対する中国人の關係に顕著な影響を与えた。国民党（ゴミニダン）黨員、軍の勤務者、公務員の様々な秘密集会や會議で声が上がった、ソ連邦は裏切りの道へ進んだと。それにもかかわらず、蒋介石（チャン・カイシ）は極めて現実主義的な立場をとった、条約に高い評価を与えて、ソ連邦の政治の成功として。彼はあちこちに電報を送った、自分の指導部へ、国民党委員会へ、地方政府へ。そこで特に語られていた：「ソ連邦が条約締結の主唱者となっている。語ることが出来る、条約は日本との關係において、ソ連邦の計画の成功であると。日本にとっては、この条約は本質的に、うまみがない。それは敗北におけるそのチャンスを増大している。この条約の最も深遠な意味あいは、ソ連邦がこのような行動でドイツ、イタリア、日本のブロックの基盤を揺り動かすことであった。それはドイツに理解することをさせた、日本はブロックを壊すことに気兼ねしていないと……。ドイツとイタリアからの報告書から判断して、日本はもうドイツの信頼を得ることは出来ない。日本とドイツの關係は、この条約の結果、次第に冷え込んでいく。将来、關係は全く悪化する。条約の結果、日本はさらに孤立することになった、ソビエト連邦の大いなる成功とならない」。

蒋介石の言うことは全体的に真相に近い。ドイツの指導部はショックを受けた、理解して、条約は極東のパートナーを縛るものとなったことを、ソ連邦への侵攻が計画された時に。松岡との交渉時にベルリンに滞在していたオットー大使がゾルゲに語った、「不可侵条約の調印の時、松岡はチョットしたことをした、ドイツが期待しておらず、希望もしていないようなことを」。しかし、モスクワから戻り、松岡はオットーに保証することに努めた、ロシアとドイツの間に衝突が起こった場合には、日本はどんな場合においても中立ではないと。松岡は声明した、「この場合には、日本はドイツ側に立って、ロシアへ侵攻することになる。中立条約は何の助けにもならない」。

4月16日、大島大使は東京へ電報を出した、それで明確に伝えていた：「今年、ドイツはソ連邦と戦争を始める」。4月28日、ドイツの早急の進撃の不可避を確信し、大島は日本の内閣へ進言した：「独ソ戦の開始後、南方へ進撃し、ドイツに確実な支援を示すこと。その後、ソ連邦内における無秩序を利用し、軍事力を行使し、ドイツとの合意のもとでソ連邦の問題の解決に取りかかること」。

それにもかかわらず、ドイツの外交は大きな不成功の状況にあった。4月に、アメリカと日本の間の交渉が始まった、シンガポール進撃の問題は重要ではなくなった。

尾崎は歓喜した。彼（？ \*）の意見に耳を貸した。まさにそれにより、日ソ条約は一時的に、ソ連邦へのドイツと日本の進撃の恐れを除去した。松岡の日本への帰還後、尾崎は松岡に同行していた西園寺に質問した。ソ連邦とドイツの間に戦争があるのかと。西園寺は答えた：「關係は緊張しているが、おそらく戦争はないであろう」。

しかし、4月11日に出された電報で、ラムザイが伝えた、ヒムラーの第一級の人物から彼は知ることとなった：「ソ連邦とドイツの間の戦争は松岡が東京に戻った後、何時でも開始することが出来る……」。

ドイツの大使はリップントロップから電報を受けた、それでは伝えていた、ドイツはソ連邦に対して戦争を開始はしない、もしドイツがソ連邦によって挑発されなければ。もし戦争が起こるならば、戦争は短期間であり、ソ連邦の悲惨な敗北で終わる。ドイツの参謀本部は全ての準備を終了した。ヒムラーのグループと参謀本部には強い傾向がある、ソ連

邦との戦争を開始するという。しかし、この傾向は未だ優勢となっていない」。(文章中のこの段下りはゴリコフの手でなぞられている。)

明らかに、ゾルゲの情報は意見を反映していた。ドイツの軍指導部の一部に広がっている。ハルダーのメモと一致する、1940年7月30日に、彼の所で行われた会議の、陸軍司令官フォン・ブラウヒッチと。会議で次のような考えが述べられた：「状況から脱する問題について、もしイギリスに決定的な勝利を得られないならば、イギリスとロシアの接近の危険性を生ずる。我々に2方面での前線を強いることになる。第一にロシアに対して、答えは一つ—ロシアとの友好の堅持。スターリンとの面会が望まれる」。

注目するのは興味湧く、ゾルゲがこの報告で伝えたように、ドイツの海軍武官はシベリア経由ではなく、船での原料を発送する命令を突然受け取った、南太平洋を敵船奇襲攻撃の作戦行動をしている。しかし、後になってこれを拒否した。彼は思った、ドイツとソ連邦の間の相互関係における緊張は小さくなったものと。

何故そのような迷いが生じたのか、1月28日付けのハルダーのメモにしたがって追跡調査することが出来る：「2月末には、我々のゴムの在庫がつかえてしまう。その後、1万2千トンが期待として残るだけ。それらはインドシナと南アメリカから船で運んでこななければならない、封鎖を突破して。さらに、2万5千トンのゴムはフランスによって買い付けられる、が日本はその搬出を許していない。4月以降は、何の予想もすることは出来ない。5月からは、我々は疑わしい輸入に完全に依存するようになる。全ての期待は輸入に」。メモではさらに触れている、1月28日の会議に、作戦「バルバロッサ」の準備状況について：「天然ゴムの在庫は1月に尽きる。その輸入はロシアを経由してのみ・・・状況は非常に深刻である・・・」。疑いはない、ドイツの指導部は理解していた、海を経由しての資源の輸入は異極めて大きな出費と危険を伴っていると、シベリアを経由しての鉄道輸送よりは。

しかし、これは大事であった。が、全ては推論。書類が必要であった、或いはせめて証拠が、戦争の計画を見た、或いはそれについて聞いたという者の。

4月18日、ゾルゲが日本の内閣の反応についての情報を伝えた、ソ連邦との中立条約締結についての。

ラムザイの電報第110、111、112、113号からのメモ

1941年4月14日付け

伝える、オットーが近衛を訪問した。いつも通りに、近衛が松岡から中立条約締結についての電報を得た時に。近衛と臨席していた全員は条約締結を大いに喜んだ。近衛はこれについて直ちに軍事大臣東条に電話で知らせた。東条は驚きも怒りも喜びも露わさなかった。が、彼は近衛の意見に同意した、陸軍も海軍も関東軍も、この条約に関して何の声明も公表すべきではないと言うことに。

条約の結果についての問題の審議時に、シンガポール問題は取り上げられなかった。臨席した出席者全員の基本的な注目は、中国との戦争の終結のために、この条約を利用する問題に注がれていた。もし蒋介石がアメリカに支持され続けられるならば、もう一度アメリカに問いかけることが有効であろう、中国問題に関して日本と相互友好関係を達成することを提案して。オットーは考えている、前述の点が日本の外政の基本となると。

近衛の声明について、彼が考えていることについての、ベルリンで松岡と大島の間小競り合いがあったことの、大島が電報を送った、そこでベルリンにおける松岡の行動に自分の不快感を表明している。

その後、オットーは近衛にシンガポールについて問いただした。近衛が返答した、ドイツの大使オットーやその他の者達はこの問題に非常に興味を持っているので。

オットーは思っている、イギリスが更なる敗北を被るならば、今のように、シンガポール攻撃の問題は再び焦眉の急となる。

前述のことに、ラムザイは指令を求める。オットーは近衛や他の人物に若干の影響を持っている。シンガポール問題を焦眉の課題として取り上げることが出来る。これ故、彼は問い合わせる、我々は興味があることについて、日本をシンガポールへの進出に突き動かすために。

さらに伝える、彼（ラムザイ）はドイツ大使オットーに対して若干の影響を持っている、突き動かすこと、彼を支持することが出来る、シンガポールへの日本の進出問題で日本に圧力を与えることで。

指示を仰ぐ。

決裁\*\*\*\*\*

このように、日本の内閣は大いなる満足を持って条約の締結を受け入れた。日本の軍部は何の声明も出さなかった、日本の条件では黙認を示していた。シンガポール問題は、ドイツに有利で日本には不利益である事業として、脇に押しやられた。オットーの全努力はこのように成功とはならなかった。ついでながら、これはオットーを深く傷つけ、松岡との関係に影響を与えた。近衛にとっての主課題は、中国に関してアメリカと交渉をし、戦争とならないようにすることであった。これが喫緊の日本の政治となった。

ゾルゲは感じた、指導部に単に報告する以上により大きなことができると。彼は日本の内閣とオットー大使に影響を与えることを提案した。これに中央は不満であった：諜報の原則に従えば、諜報員の通報—彼によって通報された指導部の戦略的指令についての情報の影響に関しての—は許されない。それ以上に、ゾルゲの問い合わせはゴリコフ（ソビエト情報局）の怒りの反応を引き起こした：ラムザイは何にうぬぼれたのか？ ラムザイは、神の髭をつかんだと考えているのか？ ラムザイが誰かに何かに影響を与えたのか！

情報を集めるのが仕事だ、大仕事ぶるな！

これ故、4月24日、ラムザイに回答を送った：「貴方の基本的課題となっている、ちょうど良い時に確実に伝えることが、ソ連邦との条約締結に関して日本政府と司令部の具体的手段について。軍の配置換えについて彼らによって具体的になされる、どんな部隊がどこからどこへ集中されるのかという。近衛と影響ある人物に影響することと突き動かすことは、そちらの課題にあっていない、これをするのはしない」。

客観的に話をすると、これは正しい決断であった。全てのデータからすると、日本の指導部はシンガポール進撃の準備をしていなかった。その通り。これをそれほど欲していなかった、とにかくアメリカとの交渉を期待していた。もう一つの極めて重要な要因があった、「関東軍」である。関東軍はソ連邦に対する戦争の準備を渴望していた。東条は1941年4月に直接声明した：「条約を無視して、我々はソ連邦に対する戦争の準備を行う。常にソ連邦に対する圧力を与える必要がある」。

1941年4月14日付けの日本の参謀本部の「秘密の戦争日記」中に、次のような記述が現れた：「この条約の価値は南方への進撃の保証に有るのではない。条約はアメリカ



との戦争を回避する手段としてではない。条約はただ時間的余裕を与えている、ソ連邦に対する戦争開始の独自の決定のために」。

これらの発言やメモについては、ソビエトの諜報員は知ることができなかった。しかし諜報員は他の情報源から情報を得ていた。4月26日、ソウルから諜報局に情報が届いた、朝鮮の日本軍の参謀部長高橋が4月22日記者達に声明した：「日本の軍事力を知っているソ連邦は日本と中立条約を締結した、軍を西に集中させるために。軍事力だけが条約の効力を保証することができる。これ故、関東軍と朝鮮軍（朝鮮における日本軍—著者）の新しい編成は弱化されないし、その立場に変化はない」。

この状況で、近衛を「突く」ということは、尾崎にはリスクがあった、不必要な疑念を招く、「招聘」において。尾崎は近衛や彼の側近達の目に、日本の愛国者であるという評判を勝ち取っていた、国益を第一とした。オットーを突き動かすことは必要なかった、リップントロップが常に彼を突き動かしていたので。

もっとも、第一にゴリコフが再保険の考慮に動いた公算が大であった。確かなこととして、ラムザイのこの提案はスターリンに報告されなかった。

それにもかかわらず、あるニュアンスがあった、気づかれそうもない。中央からラムザイへ伝えられる全ての電報—始めはいつものように—は英語に翻訳されていた。その後暗号化され、東京に送られた。注目するのは興味が湧く、最後の文章（近衛や彼の側近達に影響を与え突き動かすことはそちらの仕事のうちではない、それに従事する必要はない）は次のような形に英語に翻訳された：「To influence and encourage Konoe or other politicians is not your job and to do that is not necessary」。ロシア語への逆の変換で、これは次のように響いた：「近衛や他の政治家達に影響を与え突き動かすことは君の仕事ではない、これをするには必須ではない」。

このようにして、上手く行った、状況の発展への影響に関してゾルゲと尾崎のでき得る行動を原則的には禁止しないことが。後になって、ゾルゲは獄中記で書いていた：「私の問い合わせは大雑把に行われた、尾崎や他の者達の活発な活動を保証するために。しかしモスクワの返答は否定的であった。実際において、それでは直接に詳細な活動は禁止されていなかった。が、それでは単に必要ではないと指摘されていた。1941年のドイツとソ連邦との戦争の開始後、状況は極めて緊張したものとなった。このような状況の下で私は考えた、モスクワの返答を無理に原則的ではないと解釈さえしないで、私の権限の枠内で活動することを何も妨げない。」必要がない”ことを広い意味で考え、私は見なした、指摘された活動をする我々ははっきりと禁止はされていないと。

これ故、近衛グループ内での尾崎の活発な活動の邪魔をしなかった。それ以上に、私自身はドイツ人の中で確りと仕事をするに決めた。考慮しながら、この問題に関する私の立場はこの数年の間変わることがなかったことを。

当時、4月に、ゾルゲは勝ったと感じていた：ソ連邦との中立条約締結に関して、日本の内閣の動向を、間に合って彼は予言することが出来た（もし、一定の考えに傾けないならば）。

1941年に、東京にいるソビエトの武官の機関で働いていたイワノフが思い出している、彼は4月に初めてゾルゲを見た。それは羽田空港であった。そこでは大使館とジャー

ナリストの集団が、ベルリンとモスクワの訪問して戻ってきた外務大臣松岡を出迎えようとしていた。「報道、警備隊、外交官の集団が着陸した飛行機に突進していった。飛行機から笑みを浮かべ、満足げの松岡が降りてきた。カメラのシャッター音、フラッシュ光、叫び声、拍手・・・ 大使館の領事ザイチェフが私を突いた、頷いて脇を示した。そこをリヒャルト・ゾルゲが歩いていたーカメラを持たず、メモ帳も持たずー申し分なくアイロンのかかった、返しにナチスの徽章のついた三つ揃え、疲れて、少し足を引きずっている。私は直ぐに感じた、彼は孤立しているように、このせかせかした群衆の中で、レポーターの目下のセンセーションを渴望する。スキャンダルのニュースの大騒ぎで、(日本はファシストの同盟国の興味を”売り渡”して、ソビエトと取り決めをした。スターリンは密かに敵意を抱いてない、という確信が大きいのか？ その他) ゾルゲを自分の目で見て、私は感じた、歓喜と深い悲しみを同時に。彼はドイツ国防軍の兵士でもソビエトの兵士のようなでもない様に歩いていた」。彼は自尊心と失望を持って歩いていた、酷く疲弊した一人の人間の、政治家の他人の偽の気苦勞の、深くて避けがたい本質を理解して、積み重なった大事件の・・・」

### **3月：「イギリスとの勝利後に、ソ連邦への侵攻を行う・・・」**

当時のヨーロッパの出来事は非常に危険な特徴を帯びていた。3月1日、ブルガリアは3国同盟に参加し、3月2日にはドイツ軍がこのブルガリアに進駐してきた。3月6日、アルバニアへのイタリアの進軍が始まった。3月8日、全ソ連邦共産党（ВКП(6)）の中央委員会政治局は秘密の決定を行った、兵役義務者の訓練招集に関する。防衛人民委員会に1941年の徴兵が許された、975870名の。内訳は：期間90日は192869名；期間60日は25000人；期間45日は754896人；期間30日は3105人。

全ソ連邦共産党の第18回大会の2周年を記念する、3月10日の新聞プラウダの記事に書かれた、「スターリンは、ソ連邦を戦争に引き込み、イギリスとフランスの資本家達の利益のために戦うことをソ連邦にさせようとする企てを見破った」。

1940年3月12日、モスクワで、ソ連邦とフィンランドの間で条約が署名された。それにしたがって、フィンランドは領土の譲歩を強いられた。

3月25日、新聞イズベスチャで語られた、ソ連邦外務人民委員会（Народный комиссариат иностранных дел СССР（НКВД СССР））の報道として、もしトルコが侵略にさらわれるならば、自分の領土の保護のためにトルコはソ連邦との中立を当てにすることが出来ると。

3月27日、ユーゴスラビアで軍事クーデターが起こり、政権にシモビッチ将軍がついた、明白な反ドイツの傾向を持って。その日に、ヒトラーは会議を開いた、その基本課題はユーゴスラビアに対する作戦であった。これに関して採用された決定に、バルバロッサ作戦の4週間の延期があった。

4月5日、友好と不可侵についてのソ連邦とユーゴスラビアの条約が署名された。翌日

には、ドイツ空軍によるベルグラードの大爆撃が始まった。ドイツ軍はユーゴスラビアとギリシアの領土へ侵入した。4月17日、ユーゴスラビア軍は降伏した。4月23日、ギリシア軍は武装解除された。

ヒトラーは東方への進軍を開始した。

3月から4月に、モスクワには、様々なルートで、ソ連邦への進撃のドイツの準備についての情報が届き続けた。アメリカにいるソ連の全権代表ウマンスキーは3月1日に、モロトフに電報を出した、アメリカの国務長官次席ウエレスが彼になした声明に関して：「秘密情報によれば、アメリカ政府の指揮下で手にした、何の疑いもない、ドイツの戦争計画はイギリスに勝利した後、アメリカの后者の支持にもかかわらず、ソ連邦へ進撃する。この際、この進撃計画は詳細にドイツ司令部で検討された」。ウエレスが声明した、アメリカ政府はあり得る不信を考慮している、ソビエト政府がこの情報に不信の態度をとる、それを「宣伝、陰謀或いは嘘」と見なして。それにもかかわらず、ウエレスの意見によれば、この情報のアメリカは完全な証拠を持っている。彼が強調しているように、これはイギリスの情報源からのものではなかった、彼はそれをソビエト政府に伝えた、というのはただみなして、限りない侵略のドイツの計画を前にして自分のまとまりと独立を擁護する国家は詳細な情報と友情溢れる警告の受領に於ける道徳的権利を有している。

ウマンスキーがウエレスに語った、この情報は、「国際状況のよく知られている様相におさまらないと……。ドイツ政府はそのような計画の必滅さを理解できなくはない、ソ連邦の高い防衛力を鑑みて、戦略的立場と経済力は極めて確固としていた。近年では、特に、最近の戦争の開始時期から」。

様々なルート（軍事諜報、政治エージェント、外交官の報告、その他）でホワイトハウスに届いた情報は、断言した。ヒトラーはソ連邦への進撃を準備しているとの、その開始はイギリスとの戦争の勝利後に計画されているとの。特別な注意を持って、各通報は注目された、1940年秋から増大した緊張についての、ソ独関係における、軍事進撃の反映に対する赤軍の準備についての、ソビエト連邦の他の手段について、国境の安全を確保するために、ファシストの連合との不可避の衝突の予見のもとで。1940年2月に既に、国会はルーズベルトに特に重要な書類を送った、ソビエト連邦への進撃作戦案のドイツでの作成の開始を断定している。

ブダペストにいる武官から5月1日に通知が届いた、現時点においては、ソ連邦へのドイツの進撃はイギリスの崩壊まで考えがつかないと見なせるとの。ルーマニアにおけるドイツ軍の再編は、バルカンへのイギリスの侵入に対抗させるものであると、あり得る侵入に対する対策であると、トルコ或いはソ連邦の。イギリスの崩壊後、ドイツはソ連邦へ侵攻する。

それに対して、自分の情報源から得られたのをもとに、ルーマニアにいるドイツの武官は伝えた、イギリスに対する大規模な軍事作戦は、ドイツ外務省グループやドイツ司令部では、「あり得ないと見なされている。というのは、この手段はあまりにもリスクが大きくあまりにも大きな損害を伴うために……。近いうちにおける東方へのドイツの進撃は除外されよう、ソ連邦に対するドイツの戦争の計画についての噂は意識的に広められている、モスクワに不信を醸し出すために、ソ連邦の政治にドイツの軍事目的の実現のために今後努めさせることを強いるために。ルーマニアに集結しているドイツ軍の進撃の可能性

は、ソ連邦に対する、ベルリンでは全く除外されている」。

3月6日「コルシカネッツ」(ドイツ経済相の秘書)が伝えた、ドイツ参謀本部はソビエト連邦の速急の占領を期待している、特にウクライナの。ここで、ハルダー(ドイツ軍の参謀長)の評価に従えば、「良好な鉄道と幹線道路が作戦の成功を助けてくれるであろう」。ハルダーは同じく見なしていた、バクーとその採油業の占領は簡単な課題であると、工場は急いで復興することが出来ると。「ハルダーは見なしている、赤軍は期待されるほどの抵抗を示す状態にはないであろうと、ドイツ軍の電撃的侵攻に対して、ロシアは軍事物質の抹消する暇もないであろうと」。この通知の補足として、3月8日に、彼から情報が届いた、近々におけるドイツの作戦に関して：最初トルコとトリポリタニアへ進出する、その後、ソ連邦に対する軍事行動、その後によりやくイギリス島への全面的な侵攻。

3月9日、ベオグラードから、武官サモヒンが伝えてきた、ドイツ参謀本部はイギリス島への進出を拒否したと。この年の3月から4月における差し迫っている課題はウクライナとバクーの占領を実現すること。この情報はブラド・リブニカリーベオグラードの諜報機関の情報源一から持ち込まれ、論評無しに「ソフォクル」によって送られた。ゴリコフは直ぐにサモヒンに要求した、得られた情報に対しての自分の関係を説明することを。

3月11日、ゾルゲは同じようにモスクワに伝えた、新しいドイツの武官(BAT)クレチメルを引用しながら、ドイツはソ連邦に進撃すると、この戦争の終結に向けて(即ち、イギリスとの戦争を)。情報の量が増大していった、ラムザイは中央に要請した、「ビスバデン」(ウラジオストクに)に指示を与えてくれるように。規定の日以外に、フリッツの局を聴くことを、日曜日毎に、とにかく日曜日はフリッツ(ゾルゲの友人?)の仕事にとって最も都合が良いので」。

3月11日、赤軍の参謀本部によって、西と東におけるソビエト連邦の軍事力の戦略的展開計画が準備された。この計画に従って、ソ連邦は2つの前線で戦争の準備をせざるを得なくなった。西では、ドイツとその同盟国(イタリア、ベルギー、ルーマニア、フィンランド)に対抗して。東では、日本に対抗して、「武力中立の立場をとる敵として、何時でも衝突があり得る」。データによると、当時ソビエト国境に展開していたドイツの260個師団のうち、76個師団(6個戦車師団と7個自動車師団を含んだ)と35個師団が集中していた、ルーマニアとブルガリアに。

戦争の場合には、ソビエトの参謀本部が予想した通り、ドイツとその同盟国はソ連邦に対して268個師団までを展開することが出来た。日本は、60個歩兵師団をソ連邦に対して派遣する。それらのうち30個歩兵師団と戦車と大砲の大部分はソ連邦国境に25日から30日の間に集中する。

2方面での戦争の場合には、西には261個師団の軍事力の展開を、日本に対しては37個師団と数個旅団。

省略した形で日の目を見たその書類の、どこにも未だ公開されていない第5章で、西における我々の戦略的計画の基礎が述べられていた。強調されていた、プリピャチ川の南に(南西方向に)赤軍の主力の展開が最も有効であることが。ルブリン、ラドム、クラコフにおいて強力な攻撃でドイツの主力を撃破することが予定された。戦争の第一段階で、ドイツをバルカンの国々と分断すること、ドイツの重要な経済的ベースを奪い、これらの国々に決定的に影響を与えること。ソ連邦に対する戦争に、この国々の参加を阻止するた

めに。

赤軍の主力の更なる戦略的目的として、状況に依存して、選択することが提案された、「作戦の拡大、ポズナニ（ポーランドの）を經由してベルリンへ、或いは、プラハとウィーンへ南東への行動、或いはトルニトダンツィッヒへ北への攻撃、東プロシアを迂回する目的を持って」を。軍の集中期間に予見された：強固にした地区に支えられながら、確りした防衛力で我が国境線を防御する、ソビエトの領土への敵の侵入を許さない。書類に書かれた目的の全ての達成のために、対応する軍の再編成が計画された。チモシェンコとジューコフが署名したこの参謀本部の計画は承認されないで残された。

その時、3月11日、諜報局の特別報道「ドイツ軍の展開の方向とその状態の変更について」が配布された。この特別報道に合致するように、ソ連邦（東プロシアとポーランド総督府）との国境にドイツ軍の集中は、1940年9月1日に於ける状況と比較すると縮小され、61個師団となった。

その報道の中で、東プロシアとポーランドにおける要塞と飛行場の建設に関する結論が導き出されていた。得られた資料から判断すると、ドイツ司令部は手段を採用した、ネマン川、ナレフ川、ビスラ川、サン川の渡河における防衛の安全を保証する。要塞地帯の建設は強力に進められた。しかし、諜報局（P Y）の評価によれば、その完遂には数年を要求する。飛行場はというと、同じように積極的に進められている、新しい飛行場の建設、古い飛行場の最新化が。この際、新しい飛行場は主として、ワルシャワ・ブレスト・リトフスクの方向に建設されていた。3 a n O B Oに対抗する西の方向にある、少し南に移動しているが。それにもかかわらず、結論を出している、3 a n O B OとK O B Oの境目で建設が行われていると、区域の間の分界線は少し南を通っているにもかかわらず、プリピャチ川に沿って。

高位で情報関係の人物から得た証拠を引用して、3月14日、「コルシカネッツ」が伝えてきた、ソ連邦に対するドイツの軍事進出の問題が解決されたと。それはこの年の春であると。ドイツ参謀本部の意見に従えば、赤軍の抵抗は持つて8日だけであり、その後壊滅する。ドイツは見なしている、退却に当たってロシア軍は穀物を焼却することさえ出来なく穀物はそのまま残る。その後、ドイツはウクライナの占領を計画した。ソ連邦からその基本産業基盤を奪いながら。ソ連邦が完全に依存していた産業基盤を。引き続いてカフカスの奪取、東方へウラルまでドイツ軍の進撃が続く。

3月15日付けのハンガリーにいる武官の報告によれば、ソ連邦の国境に沿ってのドイツ軍の再編は100師団に及ぶ、ルーマニアを入れて。

ブカレストの「エシェンコ」から、3月15日に報告が届いた、ドイツは完全に計画を変えた、ソ連邦への進撃は3ヶ月後となった。主たる動機は、ソ連邦側からの危険を防止すること、最初に打撃を与え、まず第一にウクライナを奪取すること。

3月20日、ゴリコフがH K O、C H K、共産党幹部会で報告「見解、ソ連邦に対するドイツ軍の軍事行動案」をした。報告は次のような文句で始まった：「諜報資料の大部分—1941年春にソ連邦との戦争可能性に触れる—はイギリス・アメリカの情報源からのものである。疑いなく、今日問題となっているのは、ソ連邦とドイツの関係悪化の指向である」。それにもかかわらず、さらにゴリコフはヒットラーのファシズムの侵略的性質を引用しながら、説明を行った。彼の言葉によれば、「重要な注目の」。さらに、一

般的な形で、報告書の最も重要な箇所が列挙された、諜報局がいろいろなルートで得た。報告された全ての情報は、次のことに帰する、ソ連邦へのドイツの侵攻はこの年に行われる、5月15日から6月15日の間が予想される。その当時は、ドイツ軍の可能な行動案は極めて曖昧で概略的なものであり、ドイツ司令部の実際の計画を反映していなかった。

最後に、ゴリコフは結論を出した：

「1. 先に行った説明全部と、この年の春における行動の可能な案を基礎に見なしている、ソ連邦に対する行動開始の最もあり得る期間は、イギリスに勝利した後、或いは、ドイツにとって名誉ある講和のイギリスとの締結後。

2. ソ連邦に対する戦争の、この春の不可避の噂と書類は、デマとして見なす必要がある、イギリス側、或いは多分ドイツのスパイから出させた」。

気づいておく必要がある、ゴリコフの結論には理由がないわけではないことに。この時期の大量の情報、様々な諜報情報、は一つの結論を導くことにはならなかった。予想することは難しかった。ヒットラーとドイツ参謀本部が2正面で戦争をすることに決めたことを、第一次世界戦争での辛い経験を背負っていたのに。

現在では、軍事的及び政治的諜報の様々な情報源からの沢山の諜報資料が秘密解除され公表された。これを元に、著者達は質問に回答する試みを行う：ソビエトの指導部は1941年3月末に得られた諜報資料を基礎に、ドイツが何時どこでどれだけの武力で攻撃を仕掛けるか、予想できたのか？

究明してみよう。

質問「何時？」は、正しい回答が得られた。ソ連邦へのドイツの侵攻の最初の時期は十分正確に決まっていた：5月15日～6月15日（ユーゴスラビアとギリシアに対する作戦のために、4週間延期するというヒットラーの決定は未だなかった）。その時点では、通報の殆どは指摘していた、イギリスとの勝利の達成後に侵攻が行われると。イギリスに対する行動は極めてリスクがあると見なされたという通報と、ドイツが自分の計画を完全に変更したことが無視された。

質問「何処」については、十分満足する回答は得られなかった。ウクライナとカフカスの名が挙げられた、これは明らかに、他の理由も伴い、南西方向の参謀本部による評価を判断した、第一撃の最もあり得る方向として。「アリタ」はドイツ軍の再編と作戦の基本的な戦略目的の内容を暴くことが出来た。しかし、ドイツの120個師団の武力によるピンスク（ベロルシアの西端）地域の包囲攻撃についてのアリタの通報ードイツ指導部の実際の思惑に極めて近かったにもかかわらずーは実際にはドイツ参謀部が計画したことーベロストクとピンスク地域の包囲ーを全て反映していなかった。他面では、プリピャチ湿地帯の中央に位置しているピンスク自身は包囲攻撃のための最終目的ではなかった、ドイツ軍が単に湿地帯にはまり込んだ。120個師団という数値は、包囲攻撃に割かれたかのような、多分、諜報局に驚きを引き起こした。ドイツ軍の実際の集結について完全に迷わせた故に。

語っておく必要がある、完全に正しく暴かれた、ドイツによる要塞地帯と飛行場網の建設の基本的な性格の特徴が。それにもかかわらず、これは全体的には、ドイツの準備の特徴（攻撃的或いは防御的）を定める可能性を与えなかった。当時、新しい飛行場の建設の方向（ワルシャワーブレストーリトフスク）は、とにかく、ドイツの司令部は主たる方向

としたのは西であった、しかし、諜報局はそのような結論を出さなかった。

このように、1941年3月末には、多くの情報下で主攻撃の方向は不正確であった。ウクライナ、南翼、バルバロッサ計画に一致するにもかかわらず、主攻撃は北翼の辺りに加えられた、バルチック海側への引き続く転向を伴い。

注目しておく必要がある、1941年3月17日、ヒットラーの所での会議で、総統は断固として宣言した、北方軍団と中央軍団はドニエプル川まで進軍しなければならないと。その後、偽装して北へ軍を向ける。この際、モスクワの奪取－ヒットラーが声明した－は意味を持っていない！ 南方軍団においては、総統は要求した、「ルーマニアに隣接している地域で、その防御のために必要なだけの軍団を始動させることを。他の全ての軍団はカルパチより北で利用すること：正面から、北翼への攻撃的軍団集結の更なる増強手段。新しい稼働軍団の終結の」。ヒットラーは同じく、ルーマニアから戦車部隊の出来るだけ素早い移動を要求した。この指令はドイツ参謀本部によって文句を言わずに採用された、指針として。

質問「どれだけの武力で？」について、諜報員達は正確な回答を与えなかった。2月～3月に、ソビエト国境で暴露されたドイツ師団の数は、120個師団～150個師団まで変動していた。この際、3月1日におけるドイツ軍集結についての資料の間に、参謀本部の戦略的展開計画に含まれている。その準備に疑いなくPY・ΓШ（76個師団）とPYの特別報道によれば（61個師団）、差は15個師団となる、その際、両方の書類の日付は同じである！ 完全に理解できない、これがどうしてそのようになったのかが。

ドイツ軍の実際の集結を隠すことは簡単ではなかった。東方への軍の移動は非常に上手く行われた、作成した計画に従って、必要な偽証手段を遵守して。この際に、同時に、他の方向への移送を行った（西方向と南東方向への）。第1番目に、歩兵兵団と兵站物資が移送された。その後、陸軍の戦車と自動車兵団そして空軍（BBC）の飛行部隊が。

軍団の集中と展開は1941年2月の半ばから始まった。移動は6つの梯団の予備で行われた。その内の5つは攻撃軍団に指定された、6番目の梯団－OKB（ドイツ国防軍最高司令部）。注目しておく必要がある、1940年の夏と秋には既に、ドイツの26個師団が東で配置換えされていたことに。軍の移動は幹線鉄道で行われた、秘密裏に。具体的な軍事的政治的状況下ですることが出来た。ただ最後の段階で、幾つかの戦車師団は自力で移動させられた。移動において、1個師団は2昼夜から7昼夜かかった。

最初の梯団に、1941年2月20日から3月15日までに、東方に7個歩兵師団が移動された。同時に、西から3個歩兵師団がバルカンに向けられた、マリト作戦に参加するために。ドイツに7個師団、ドイツから15個師団が西に移動された、そこでこれらの師団は戦闘準備を完遂することになった。

このように、3月15日には、東方におけるドイツの軍団は33個師団を数えるようになった、3月末には39個師団。全く明らかである、これらの数値は61の数値とは全くかけ離れていることが、3月11日に諜報局（PY）の特別通告で用いていた。

結局、単なる偽情報であった、ソ連邦に対する軍の集中が行われているかのような、圧力を示すために、近いうちにドイツの東方への進撃が排除される；ルーマニアへのドイツ軍集結はバルカンへのイギリスの侵攻に対抗するためのものである、トルコやソ連邦のあり得る進撃に対する対抗処置。

通報では、基本的な原理を示していた、進撃における成功のドイツ指導部の確信を、赤軍の弱さを。どうもらしい、この事実が注目を引いたことが、ソ連邦において軍の構築が加速度を持って行われていること故に。結局、ゾルゲは襲撃に関するドイツの準備の極めて重要な指標を示した、シベリア経由ではない物資の輸送、太平洋の南部で作戦をする奇襲攻撃船での。しかし、ゾルゲ自身が自分の結論を無効と宣言した、知らせて、これを放棄した（これはそうであった、ハルダーがこれを支持している！）、これ故、ドイツとソ連邦の間の相互関係における緊張度は小さくなった。

しかし、諜報員の次の報告において、ドイツのソ連邦侵入の準備が明瞭となった、西での戦争の結果に関係なく。問題は残った：何処へ、何時、どの程度の軍力で第一撃を行うのか？

## 4月：主攻撃の方向－ウクライナ？

4月2日、「ザハル」がベルリンから報告書を送った、それに証拠を持ち出していた、いろいろな情報源から得られた。「スタルシナ」が伝えた、ドイツ参謀本部の将校の言葉によれば、ソ連邦との戦争のために2つの軍団が創設されたと。侵攻の作戦計画は、2つの電撃的攻撃からなっていた、ウクライナと北の東プロシアからの。この際、北部軍団は南部軍団と一体となり、そのようにしてソビエト軍を包囲する。残念ながら、実質的に、そのようにして、再び1940年7月30日に行われた会議でのヒットラーの演説の内容が繰り返された。既に話したように、総統のこの考えは、後になってフォン・オデンシテルンの作戦計画の基礎となった。

「コルシカネッツ」の情報に従うと、海洋を通じてドイツへのゴムの輸入の方向が決定された、ロシアを経由してではなく。ソ連邦を経由しての輸送の停止は、彼が考えているように、侵攻の準備の兆候であった。「スタルシナ」からの情報は非常に重要であった、ユーゴスラビアに対する作戦の準備に関して、ソ連邦への攻撃の期日が3週から4週延びたということ。スターリンと軍部は正しく理解した、ユーゴスラビアのために、そうなるであろうと。5月半ばから末に予定されていた、ドイツの進撃開始の期日は、6月半ばから末に移動するであろうと。

この報告書には、「リツエエスト」から得られた情報が入っていた。彼はウクライナ襲撃のために東部へのドイツ軍の集結について拡大する噂について報告した。これについて、一人の高位のドイツ軍将校の言葉を引き合いに出した。彼は次のようなことを語っていた：「我々は世界戦争時には大規模な軍の移動をすることが出来る、ドイツ指導部の実際の意向を隠すようにして」。

「リツエエスト」がドイツの諜報の課題にしたがって活動していた（これは戦後に明らかにされた）、ということを検討するならば、全く明らかである、もっともらしい情報のもとでドイツの意向が、主攻撃の方向であるウクライナに関してソビエト指導部をデマで誤魔化すこと。全般的に、「リツエエスト」の通報のためにその極めて最もらしい特徴、デマを上手にまき散らす特徴：ウクライナへの基本的打撃、ドイツの供給を保証するため



に、危機的状況にいる；松岡はドイツで作成されている計画をもとにモスクワで交渉を行った；軍事的準備は終了し、ただ好都合な時を待っている。それはバルカンでの出来事の展開に依存している、エジプトに対する進撃の成功に。

モロトフへの、4月3日付けの、ベルリンにいるソビエトの全権代表デカノゾフの暗号電報で、情報を伝えていた、ソ連邦との戦争に対するドイツの準備に関して様々な情報源から得られた。それにおいて、ドイツの進撃の基本的な方向として再びウクライナの名が挙げられていた。

4月、一連の諜報報告書に、新しく重要なニュアンスが現れた：これは全て「神経戦」である、ソ連邦をより素直にさせるための。ヒトラーはソ連邦に最後通告を突きつけ、ソ連邦に3国同盟に参加することを要求するつもりである、と同時にドイツの経済援助の供与を。

4月10日、もう一つの通報が「スタルシナ」から届いた。それでは、ゲーリングと関係のある将校との話し合いを引用し、伝えていた。軍事行動の開始前に、ドイツはソビエト連邦に最後通告を通告する、3国同盟への加入について。ドイツの政治にソ連邦の従属を要求する、特に、経済面の供給の拡大で。もしソビエト連邦がドイツの要求を拒否するならば、ドイツは戦争を始める。ギリシアとユーゴスラビアに対する作戦の終了後に、要求の最後通告が出される。この情報を「スタルシナ」は羨ましい不変性を持って他の通報で伝えた：4月30日－資源の供給に関するドイツの経済的要求の提起が迫っている、5月5日－軍の集結ソ連邦に対する圧力手段としての。5月8日、「スタルシナ」が伝えた、最後通告に関する問題は取り消されないと。4月に内務人民委員部（НКВД）によって横取りされたモスクワのトルコ大使館のメモに、トルコ外務省との、ドイツの侵攻の他の期日があった：5月初めか末、6月半ば。

4月16日付けの諜報局の特別通報に語られていた、東プロシアと特別区におけるドイツの師団数は78まで達した（モルダビアにおけるドイツ軍無しで）。

4月18日に、ドイツ陸軍の総司令部の命令が有効となった、ソ連邦に対するデマキャンペーンの開始についての、空軍（BBC）と海軍（BMC）の代表と一致した。

その日、ソ連邦の外務人民委員会の第1次官ビシンスキーとイギリス大使クリップスの会談が行われた。会談は厳しい状況で進み、会談の最後にはクリップスは、モロトフのために予定されていた自分のメモを撤回したかった。メモ自身は結構曖昧な警告の内容を含んでいた、「東方へのドイツの進撃の可能性」について、場合において明らかな恐れ、もしソ連邦がドイツの経済的援助を継続することに同意し、満足するならば、イギリスとの関係が、「戦争の最後まで今の全く否定的な特徴を保持するという」。

4月19日、クリップスはビシンスキーに、4月3日付けのチャーチルが手にした外交郵便を渡した、それはその後スターリンに渡された。イギリスの首相（チャーチル）が書いていた：「・・・私は信頼できるエージェントからの信用できる情報を持っている。ドイツはユーゴスラビアを自分の側に取り込んだと見なした時、即ち、3月20日以降、ドイツはルーマニアからポーランド南部へ自分の5個戦車師団のうちの3個師団を移動し始めた。ドイツはセルビア革命を知ることになり、この移動は中止された。閣下は、この事実の価値を容易にわかっている」。

全く明らかである、この親書はスターリンには何の新規さも伝えていなかった。諜報員

は行われているドイツ軍の集中について間断なく報告していた。その代わり、明らかに、この親書はソビエトのボスの不信を大いに高めることになった、ソ連邦へのドイツの進撃に関する通報について。人はどうであれ、スターリンは疑いさえしなかった、彼とヒトラーのおでこを鉢合わせにするチャーチルの願望を。ソビエト指導部にヒトラーの試みについて報告した、イギリスとアメリカの指導的政治と社会のグループの証拠を提示しようとしている。彼の新しい戦争計画は「アメリカとイギリスの国益に触れることはない、がルーズベルトとチャーチルはこれがわからず、私との戦いを欲している」と。

知られていた、ドイツへの進撃にソビエト連邦を突き動かしながら、同時にチャーチルがソ連邦への攻撃をドイツにそそのかしていたことが。1963年に、アメリカで、第2次世界戦争時における、ニューヨークのイギリス諜報センターの活動についての本が公刊された、カナダ人の富豪であるウイリアム・ステフェンソンが指導していた、チャーチルと密接な関係を維持していた。この本の著者、このセンターの元職員、はセンターの書類を使用して、伝えている、1941年春、イギリスの諜報センターはアメリカの連邦調査ビューローと一緒にワシントンのドイツ大使館に資料を掴ませた、それが知らせていた：「確実さのある期待できる情報源から、明らかとなった、ソ連邦は軍事行動を実行するつもりである、ドイツが何らかの大規模軍事作戦を行う時に」。

国境警備隊の報告に納得する、4月にドイツ側は要塞の建設に力を注いでいたという、ドイツの飛行機による国境違反が増しているという。

4月23日、トルコにいるソ連邦全権代表ビノグラードとユーゴスラビアの大使シュメンコビッチとの会談で、最後に語られた、確実な情報によると、ドイツは襲撃に150個師団を準備していることが：ソビエトとドイツ（東プロシア）の国境に80個師団、ポーランドに25個師団、ルーマニアに10個師団、バルカン作戦後に解放される全ての師団。

ドイツの海軍司令部へのモスクワにいるドイツ海軍武官の電報

番号34112/110

1941年4月24日

1. ここで広まっている噂が語っている、独ソ戦争の危険が迫っているとの。ドイツを経由してやって来た報道がそれを促進している。
2. イタリア大使館の同僚の情報から、イギリスの大使が戦争の開始日として6月22日を挙げたとのこと。
3. 他の者は5月20日を名指している。
4. 私は噂を否定しているが、無駄骨である。

海軍武官バウムバフ

4月24日、「スタルシナ」から少し予想外の通報があった。彼は強調していた、襲撃計画は議事日程から外されなかったことを。同時に指摘していた、「オランダへのドイツ軍の進撃の成功に関して、ソ連邦への進撃のために戦う軍団の雰囲気は若干静かになった。とにかく、ドイツは今イギリスとの戦争に勝つことに期待をかけているので。その交通路と中近東における石油源への攻撃の手段によって。これ故、アフリカでの勝利が今差し迫った注目となっている」。

4月24日、ハンガリーにいる武官リャフテロフがドイツ軍の集結についての情報を伝えた：ポーランドと東プロシアに85個師団、ルーマニアに12個師団、バルカンに45個師団。初めて情報が出てきた、ルーマニアとソ連邦の国境への軍の集結についての、第一ドイツ空軍の。ゴリコフは電報に決裁の判を押した：「・・・現場での予備隊の配分はあまり信用できない」。

4月25日、ハルダーが日記に書いていた：「休暇の提供を5月5日から禁止する、鉄道輸送列車のダイヤグラムの過密故に・・・バルバロッサ作戦に関する移送は上手く進んでいる」。

4月26日、ドイツにいる武官トピコフがゴリコフに自分の観察と結論の入っている長いメモを送った。特に彼は書いていた、ソ日の中立条約はドイツの政治の「基本的本質をひっくり返した」、ドイツは日本と同時にソ連邦へ進撃する計画であった。しかし、これは攻撃の延期として評価しなければならない、「軍事力の再評価と可能な他の同盟の設立」の必要性における。ドイツの計画においては、ソ連邦は変わらぬ敵として取り上げられている。トピコフの意見によれば、東方－東プロシア、ポーランド、ルーマニアに、118個から120個師団がいる、軍の集結は継続している。衝突開始の時期は、多分、結構近い、もちろん、今年中に。この際、トピコフが推定している、ベルリンとローマを經由しての松岡の旅行のようなものでドイツの計画を停止することが出来ると。しかし、これはファンタスティックな予想の範疇のものであった、とにかく、スターリンには政治的アバンチュールに対する彼の愛はやまやまながら残っていなかった。日本との条約締結後には、イギリスとは話し合いが進んでいなかった。

4月26日、諜報局参謀本部（P Y Γ 山）の特別報告が出された、「軍事作戦のドイツ軍の配置について、41年4月25日現在における」。それでは示されていた、2方面へのドイツ軍の大量の移動が間断なく続いていることが：ソ連邦国境とバルカンへ。ソ独国境とソビエト・ルーマニア国境（モルダビアを含んで）へのドイツ軍の総数は95個師団～100個師団と見積もられた。この際、注目しておく必要がある、1941年4月25日には、ドイツ軍のバルカンへの移動は既に縮小され、バルバロッサ計画に従って大量の軍移動が全力で進んでいた。さらに、4月15日、16日、陸軍参謀本部の作戦部の指揮官がハルダーに報告した、ドイツ陸軍のバルバロッサ作戦への切り替え計画を、バルカンからの軍の移動の原則を。

4月30日、H K Γ Bの第1局に、諜報の報告が届いた、フィンランドの大企業家の発言についての、ドイツと幅広い交流を持ち、屢々ドイツを訪れている。彼がフィンランドを訪れたイギリスの代表団に話した、彼が会談したドイツの高位の官僚はソ連邦へのドイツの攻撃は不可避であると確信していると、バルカン作戦終了後直ぐに。

4月30日、「スタルシナ」が伝えた、「ソビエト連邦へのドイツの進撃についての問題は最終的に決定され、その開始は今日にも」。

4月末に、ソ連邦の内務人民委員会はスターリン、モロトフ、チモシェンコ、に得られた諜報情報から幾つかの結論を出したメモを送付した。特に示されていた、ポーランドに配置された軍の総数は大凡120万人～150万人（60個師団～75個師団）と見積もられた。これは諜報局が4月26日に評価したものとほぼ一致していた、ワルシャワ方向とルブリンスク・クラコフスク地区に60個師団という。

このように、3月と同じように4月にも諜報部は十分な回答を得ることが出来なかった、主たる課題についての：何時、何処、どれだけの武力でソ連邦に進撃するのか？

「何時？」という問題には、非常に矛盾する情報を得た：作戦は3週間～4週間移動する（即ち、6月半ばから後半に）；バルカン作戦後直ちに進撃が行われる。今日にでも、5月初め、5月末、6月半ば。全く時期が定まらなかった。あり得る、直ぐに、絶対に、今年の末に」。その際、信頼していた同じ情報源がことなる日付を与えていた。

「何処？」という問題には、再びウクライナという回答が得られた。これは全く現実に対応していなかった。特にドイツによるデマ宣伝の結果であった。それにもかかわらず、この信用のない評価は、主攻撃の方向の、労農赤軍（PKKA）の参謀本部の計画の基本となっていた。戦略的展開と対応している国境警備隊の部隊への指令についての基礎をなしていた。

「どれだけの武力で？」についての問題には、正しい回答を得ることが出来ていなかった。4月末に、ソ連邦との国境におけるドイツ軍の師団数は異常に多かった（95個師団～100個師団）、その際、非常に信用できない評価がルーマニアにおけるドイツ軍の集結に関して与えられていた。そこからドイツ軍団はヒットラーの命令によってスロバキアへ展開されていた。信用できる情報が、ユーゴスラビア大使シュメンコビッチから得られた、150個師団との。ドイツのこの軍団は攻撃の準備に入っていた。同じ頃、不明であった、これが上部で受け入れられたのかが、書類に決裁がなかった。バルカンからのドイツ軍の移動開始は全くタイミング良く隠された。ドイツ空軍の集中、第一空軍はその後東プロシアに集中された、ルーマニアではなく。

実際には、3月から4月におけるドイツ軍の集中は増大していたが、それにもかかわらず、ソビエトの諜報員が見なしたより極めて少なかった。1941年の3月16日から4月10日までの期間に、東部の第2兵団に19個師団（18個歩兵師団と1個戦車師団）が移動した。同じ頃、ドイツから西方に、9個歩兵師団が向けられた、占領勤務のために予定された。ドイツにはオランダから歩兵師団が移動した。

このようにして、実質的に、4月半ばには、ドイツは東に52個師団を有していた、4月末には54個師団、95から100ではない、ソビエトの諜報員が報告したような。

注目しておくのも興味がある：1941年3月25日付けのハルダーの日記についてのドイツの出版社の注釈に語られている、1941年4月と5月には東部に、75個師団がいたと。

ようやく、襲撃の兆候に触れてみる。ここでは深刻な間違いをしでかしていた。一方では、正しく示された、ソ連邦領土を経由してのゴムのトランジット輸送の中止、国境付近からの住民の避難のような。同時に、注目された、兆候の真実からかけ離れている、バルカンにおける作戦或いは北アフリカへのドイツ軍の成功した進撃の終了のような（デマ！）。しかし、誤解させた最も大事なこと、これは最後通告についての情報、それはドイツ指導部が攻撃の前にソ連邦に宣言するつもりであった。

全体として、幾つかの評価においておとなしい調子が響いていたにもかかわらず、神経戦であったようである、ソビエト指導部に譲歩を強いる目的を持って、諜報の報告から導き出した全体の結論が語っていた。ソ連邦へのドイツの攻撃は必須であり、それは最大限の武力を持って行われる。ウクライナの占領の目的を持って南西方向に。

これ故、ソビエト軍の最大の移動はキエフ管区に集中された。ついでながら、ドイツの司令部はこれに直ぐに気がついた。4月6日、ハルダーが日記に書いていた：「ソビエト軍の集結：ウクライナに軍の集団が目につく。総指揮官が思っている、ハンガリーとブコビナへのロシアの攻撃の可能性を除外できないと。私はこれは全くあり得ないと見なしている」。その日、ちょうど、ユーゴスラビアに対する作戦が始まった。これ故、4月7日に不安が高まった：「ロシア軍の集結の解析は次のような結論を出す基礎を与えている：もし、ロシアが平和を望み、進撃をしないという陳腐な確信を拒否するならば、次のことを認める必要がある、ドイツの集結は進撃への急速な移動を完全にさせてくれると、それは我々にとって全くの受け入れられないことであった」。

## 5月：「いかなる場合においても、ドイツ司令部に行動のイニシアチブを与えるな・・・」

5月、世界はイギリスに近づいている崩壊の不安が広まっていた、チャーチルが強調していた、その我慢強さにおける信念の外的な発露にも関わらずに。中近東とバルカンにおける軍事状況は、1941年春には、イギリスを完全な「戦略的崩壊」の極みに追いやった。5月に、イギリスにクレタ島（地中海中部の島、ギリシアの南 \*）が残った。ドイツの潜水艦隊は大西洋でイギリス艦隊に大損害を与えた。食料と軍事物資のイギリスへの供給の細い糸は今にも千切れそうであった。しかしながら、アメリカ大統領はイギリスの期待にもかかわらず、護送艦隊についての自分の決定を見直すことを拒否した、アメリカ海軍に防衛任務を遂行することを許さないで。ホワイトハウスでは、イギリスの状況を危機的で殆ど絶望的であると見なした。

1941年5月14日、アメリカの財務大臣ヘンリー・モルゲンタウー大統領の側近一はホプキンスとの長い会談の後、日記に次のように書いていた：「私は思う、彼ら2人、大統領とホプキンスは、今後どうしたらよいのかとの解答を探していた。彼らは感じていた、何かに着手しなければならないと。が、これが何か彼らは知らない。ホプキンスが話している、大統領はいつも通りあまり話をしない。しかし、彼は考えている、戦争に引き込まれることはルーズベルトには不快なことであり、大衆の意見に従うことを好んでいると」。

歴史の進行を転回させるような出来事が起こった。5月10日、ヒットラーの最側近であり、党の次席であるルドルフ・ヘスが、自分で整備した飛行機Me-110に乗ってイギリスに飛行した。彼は着陸を試みた、ハミルトン卿の領地の傍に。そこで彼は話し合いをするつもりであった、新ドイツグループの代表者と。しかし、ヘスは燃料の計算で間違いをおこしていた。スコットランドでパラシュートで降下する羽目になった。地区の住民が彼を捕らえた。

1941年5月14日

バジムがロンドンから伝えた、：

1. 「ゼンヘン」からの情報によると、イギリスに来たヘスが語っている、彼はハミルトンとまず第1に会うつもりであったと。1934年の航空競技大会と一緒に参加した知り合いである。ハミルトンはいわゆるクリブレンドスク (? \*) の一味に属していた。ヘスはハミルトンの領地付近に着地した。

2. クリク・パトリクへ、ヘスを最初に確認した「ザコウルク」の役人へ、ヘスが語った、和平の提案を携えてきたと。和平提案の内容は我々は未だ知らない。(クリク・パトリク＝ベルリンのイギリス大使館の元顧問)

ジュラブレフの注記がある：「リフキナヤ同志へ＝ベルリン、ロンドン、ストックホルム、アメリカ、ローマに電報すること。提案の詳細を解明するように」。

ドイツの軍部は、ヘスの飛び去りを5月12日に気づいた。ヒトラーは軍指導部の高官に、ヘスの飛行はドイツ民族を団結させる試みであると知らせた。飛行は彼には全く予想もしていなかったと語った。そして説明された、飛行はヘスの精神的不安定性と鬱のせいであると。とはいえ、リップントロップをローマに派遣した、ヘスの飛行は単独和平についての提案を伝える試みであったとドーチェ (=ムツソリーニ) に伝えるために。

5月11日、ハミルトン卿が電話でチャーチルに連絡した、スコットランドにルドルフ・ヘスがやって来たことを。ヘスは自分自身で操縦していた飛行機からパラシュート降下した、イギリス権力に拿捕され、語っている、ハミルトンと是非とも会いたいと。彼の領地の近くに着地した。始まった、今日まで深い秘密で隠されているヘスとイギリス政府の代表との交渉が。

1941年5月18日にキム・フィルビが伝えたように、外務大臣イーデンと指導的保守党員の一人であるビベルブルクがヘスを訪ねた、公式報道によってこれは覆されたが。ヘスの目的は、「妥協の和平」の締結であった。イギリスとドイツの消耗を一時的に停止し、イギリス帝国の最終的な抹消を予防するために。ヘスは考えていた、彼の飛行は強い反チャーチルの正当さに力を与え、「和平の締結のための戦い」に強い刺激を与えるものと。

極めて興味を引くニュアンスを帯びることになった、フィルビが伝えたように、彼が飛行までに書き上げた、ハミルトン卿へのヘスの手紙は、イギリスの諜報機関によって取り上げられたが、その後、宛名人に送られた。しかし、ハミルトンは手にした手紙を、諜報機関に渡した。

後になって、説が広がった、ハミルトン卿の援助によりイギリスの諜報機関の特別作戦に誘い出されて、ヘスはイギリスに飛行したのであるとの。この説は1942年10月24日付けのスターリンとモロトフへのベリアの報告書中にある。チェコの軍事諜報局長モラベッツのロンドンにある内務人民委員部の諜報指導者への通知を根拠としたものである。後者の情報に従えば、ハミルトン卿とヘスの間の全ての書類はインテリジェンス・サービスの管理下にあった。ヘスへの返答をハミルトンの名前で作り上げていた。その結果、ヘスをイギリスに誘い出すことに成功した。モラベッツの言葉によれば、彼は個人的にヘスの手紙を見た。それには「ソ連邦への侵攻に関係した、ドイツ政府の計画が十分明瞭に述べられていた」。同じく、「イギリスとドイツの間の戦争の停止の必要性について論証

された提案」の内容も含んでいた。モラベッツは確信した、この手紙は「ソ連邦への進撃の準備において、ヘスとその他のナチストの頭目達の有罪の証拠になると」。

しかし、注目しておかなければならない、ヘスの提案は極めて独特なものであったことに。イギリスの活動家達は理解した、彼によって本質的に、イギリスがドイツに従属するという条件で和平が提案されていることに。これからは次のようなことになる、ドイツがソ連邦に勝利した場合には、その従属性は次第に増大していくと。ヘスのもたらした提案は、イギリスの右派グループにとっては全く受け入れられないものであった

チャーチルにとって、それは全く受け入れられないものであった。ヘスはチャーチルの権力からの罷免と、親ファシストの雰囲気を持つ政治家による新しい政府の創設を要求した。知られてはいない、チャーチルがヘスの提案にどのように評価をしたのかは。自分の回想録で、チャーチルはこの事については一言も語っていない。フィルビの情報によれば、国会でなされた質問で、チャーチルが答えた、ヘスは囚われ人である、正にそれにより何らかの陰謀への反対を予告している。しかし、確信を持って予想することが出来る、彼はイギリスにとって、自分個人にとって、この提案の全ての危険を理解していた、その拒否に賛成した。

フィルビの意見に従えば、その時、イギリスとドイツの和平についての交渉のための前提条件はなかった。しかし、彼は除外しなかった、将来において、ヘスが陰謀の中心になり得ることを、妥協した和平の締結の目的を持っての。

実際において、ヘスの提案は採用されなかった。当時、イギリス政府は謎の沈黙をとり続けた。この奇妙な振る舞いは何が原因であったのか？ イギリスと幾つかの国において、ヘスのミッションについて動揺が起こった。危険が存在していた、ヘスとの交渉において。ヒットラーのドイツと取引の条件を練り上げるのではないかと。イギリス政府にとっては、そのような意見の拡散は、文字通り好ましいものではなかった、戦争継続の政府の決定に陰をもたらすものであったので。それにもかかわらず、知られているように、噂を引き払うために、政府は何もしなかった。十分な根拠を持って推定することが出来る、この沈黙はヒットラーにバルバロッサ作戦に関する準備行動をより決定的にさせるように突き動かしたことが。

ヘスの飛行は、ドイツとイギリスの間の共謀の可能性についてスターリンの推測を確信させた事件の内の一つとなった。ロンドンの指導部はだまり続けた、ソビエトの頭領には不信の考えが生まれた：「クリップスの警告は偶然ではなかったのか？ 彼らはお互いに何を共謀しているのか？ 多分、とにかく、イギリス人をよりデリケートに待遇しなければならない、チャーチルに理解させなければならない、我々はヒットラーとは不倶戴天であることを」。

スターリンは苛立ちが湧き出すように感じた。否、クリップスの鼻をはじいた！ ヨーロッパにおける「奇妙な戦争」がまさに示した、西はヒットラーと戦う気分ではなく、ソビエト連邦を彼に身代金として与える準備をし、生き残ろうとしている。アメリカ政府の会議の速記録が書記長に報告された。それには、「もしソビエト連邦が戦争を挑発するならば、アメリカは中立の立場をとる」。アメリカが中立の場合には、イギリスは単独講和についての提案を真剣に検討する準備があった。スターリンはこれについて詳細な情報を得ており、理解した、西側はソビエト連邦をドイツと一対一にしておきたいのであると。

ロンドン政府の沈黙は、ヘスのことに関しての、塾考のために補足的な糧を与えた。諜報機関は一度ならずソビエトのボスに報告をした、ロンドンの親ドイツの右派グループの意向について、ドイツとソ連邦との衝突を一度ならず、イギリス帝国から危険を取り除くために。

スターリンはクリップスの電報の内容を同じく知った、4月18日のビシンスキイとの会議の後、イギリス外務省への。クリップス（イギリス大使）が書いていた：「・・・恐怖が最も強力な釣り合いとなっている、我々が、西ヨーロッパにおけるドイツの占領地域の撤退の条件下での単独講和を結ぶことがあり得る、ヒットラーに東方への手の自由を提供すること。私は自覚している、これは極めてデリケートな問題であると、間接的なチャンネルを通じての検討のためには。それにもかかわらず、私は見なしている、極めて困難なゲームにおいて、それを最も価値のある切り札であると、そして多分そのようなカードの利用のための何らかの手段は見つかるであろう。非合法チャンネルを通しての情報の獲得におけるソビエトの才能ある人は、少なくとも今回は、自分のために我々を利用することになる」。

これ故、クレムリンでは、両側からの挑発とデマを恐れた。ソビエトの独裁者の個性によって、これら全ては次のように処置された。スターリンはさらに大きな疑念を持って、ソ連邦に対するドイツの軍事の準備についての諜報機関の情報に対応するようになった。それらの情報をデマであると評価して、イギリスとアメリカのグループから端を発した。

5月1日、ヒットラーはソ連邦への進撃の期日を決定した、1941年6月22日とした。5月23日から、東部国境への軍の加速された移動計画が実行に入った。

5月1日、ベルリンの「フランクフルテル」からスターリンに情報が届いた、ドイツの軍需省がゴムの厳しい不足にあっているとの。毎月6千トンのゴムを必要としているが、合成ゴムの生産能力は4千トンだけをカバーしていると。ゴムの不足分は、日本とソ連邦を経由して、フランス領インドシナからの天然ゴムの輸入の方法でまかなうことが提案されていた。これ以外に情報では語られていた、進撃の準備を早めるドイツの意向について、エジプト側からトルコを経由してイラクへの、油田の占領と先細りの石油の補充の目的を持って。情報源は噂について伝えていた、高位司令部内で流布している、「イラクへの進撃が成功した場合に、ソ連邦へ、トルコからカフカスへ、西からウクライナへの進撃となる」。

5月1日、ブダペストから「マルス」が伝えた：「ドイツ軍の中では、噂に尾ひれがついている、20日後にはイギリスは戦争の要因として、ソ連邦に対する戦争の不可避・・・」。

「コルシカネッツ」から5月5日に得た情報によれば、ドイツはソ連邦に枢軸国側としてイギリスに進撃することを要求するつもりであったと、「ソ連邦が枢軸側で最後まで戦うという保証として、ドイツはソ連邦に対してドイツ軍によるウクライナの占領を要求するであろう、同じくプリバルチクも」。

5月1日、ワルシャワの「イワン」から情報が届いた、ドイツ軍が昼夜を問わず隊列をなしてワルシャワを通過していると、「ドイツとソ連邦の間に迫っている戦争について、ドイツの兵士も将校も全く明けっ広げに語っている、賽は投げられたと」。ドイツは考えている、西からの直接攻撃でまず始めにウクライナを占領し、5月末には、トルコを経由



してカフカスに進軍すると。ドイツ軍の将校達は熱心にロシア語を勉強している、ソ連邦の国境の地図を与えられている。強靱な道路の改修と、プーク川に渡す渡河橋の準備。

5月5日、スターリンは、労農赤軍軍学校の卒業生を前にして演説をした。この演説はソビエトの頭領の心情をよく示している。スターリンは具体的に示した、もし始めはドイツがベルサイユ体制の重荷からの解放をスローガンを持って戦争を始めるならば、いまではこのスローガンは侵略戦争のスローガンに変わってしまった、それらはそれを勝利に導かない。それは出来事の拡大の予想に止まった。スターリンの意見によれば、ドイツは敗北する、もし2方面での戦争となれば、第一次世界戦争であったように；ドイツの基本的な軍事と経済における潜在能力は既に失われている、戦争の将来の結末はアメリカとソ連邦が決める、これらの国には素晴らしい技術がある；ドイツ軍には独りよがりとうぬぼれが現れた、これは崩壊への直接の道である。終わりに、スターリンはある乾杯の時に語った、赤軍は防衛体制から「進撃体制」に移行する必要があると、プロパガンダ、アジテーション、出版物、全ての教育を「攻撃の志氣」に作り直すことも必要である」と。

もし、判断を投げ捨てるならば、この話は予防攻撃に関する序幕であり、その考えは社会的意識の改革にあった。1939年8月以降、ヒトラーが憎むべき敵から、憎むべき友人に変わった時、社会的意識を混乱と大騒ぎが支配した。スターリンのこの話は向けられていた、混乱と大騒ぎを克服し、ドイツの明瞭で不可避の侵攻故に示すために、真の敵が誰であるかを。これ以外に、スターリンは示したかった、「悪魔も絵に描いているほどは怖くはない」、ドイツ軍は無敵ではないことを。その上、もし2方面で戦争をするならば。

5月6日、ソ連邦最高会議幹部会の指令が公示された、スターリンをソ連邦人民会議（CHK）議長に任命するという。

注目しておく価値がある、5月5日、ハルダーが日記に書いていたことを、国境の状況について：「ロシアは厚かましくなっている・・・」。モスクワから帰ってきたばかりのクレブスの意見を引き合いに出して、そこで彼は一時的に武官キョストリング將軍の代理を務めた：「戦争を避けるために、ロシアは全てをなしている。領土要求に対する拒否以外に、何らかの譲歩を期待することが出来る」。

ブカレストから、5月5日、情報が届いた、ソ連邦に対する軍事行動の期日は5月15日から6月15日に移ったと。ルーマニアにいるドイツの武官ゲルステンベルグの情報によると、ロシアの空軍基地の位置はドイツに白日の下にさらされている、それらは戦争の初日に襲撃にさらされるであろうと。しかし、意見が述べられた、極めて少数であったが、第1に、戦争に関するドイツの準備、これは単にドイツ側の示威行動であるとの、ソ連邦に圧力を示し、ソ連邦に譲歩を強いるための。

「1941年5月5日の東部と南東部へのドイツ軍の集結について」の諜報局の特別報道に納得がいく、2ヶ月でソ連邦に対するドイツ軍の総数は37個師団増強され、103個師団～107個師団に達した、そのうちの戦車師団は2倍の、6個師団から12個師団にまで。

5月7日、ベルリンの「シタルシン」から、情報が届いた、「5月がソビエトとドイツの関係が最も緊迫した月となろう」との。

5月8日、ソビエト連邦への進撃の宣伝用準備に関する文章が印刷された、OKB（ド

イツ国防軍最高司令部)の参謀部で作られた。その中で、特に、強調されていた、「今日までイギリスに対する宣伝を強化すること」が目的に合っていたことが。

5月8日、ブダペストの「マルス」から：「やって来たドイツの兵や将校達は明けっ広げに語っている、ソ連邦に対する差し迫った戦争について・・・、ソ連邦に対する拳骨は既に集中された、今日中にドイツはソ連邦を攻撃する」。

5月9日、ソフィア（「マルガリト」）からードイツ軍はトルコを經由してイラクに進軍している。軍事行動は2ヶ月後に始まる、1941年の夏に、穀物の収穫までに。攻撃は同時にポーランド、海からオデッサへ、トルコからバクーへも及ぶ。

5月9日、スターリンはタス通信への反駁文を個人的に作成した。ニューヨークからの日本の通信社「同盟通信」の報道に関して、ソ連邦は西の国境に大規模な軍を集結しているということに関しての。報道には同じように語られていた、この軍の集中は異常な大規模で行われていると、極東と中近東から大規模な軍の移動を伴っていると。

タス通信への反論で主張された、「ソ連邦の西側国境には、大規模な軍の集中は何もないし、予見もされない。一片の真実ー同盟通信の報道にあるーは・・・次のことである、イルクーツク地区からノボシビルスク地区への軍の移動であるーノボシビルスクの方が住み心地が良い故にー1個歩兵師団。同盟通信の他の報道は全くの虚構である」。

内務人民委員会（НКВД）がモスクワにいる日本大使の郵便物を横取りした。5月9日、ケーニスベルグ（カリーニングラード旧名）の日本領事杉原が立原に伝えた、ベルリンとケーニスベルグの間における大規模な鉄道輸送について、北方に向かう。東プロシアに、大規模な軍の集中が行われた、量的にはリュブリンスク地域の軍事力に引けをとらない。独ソ関係は6月に決定的になるに違いない。5月末には、ロシア語の読み書きが出来る大量の将校を必ず準備するように命令が出された。

5月9日、「スタルシナ」が伝えた、ソ連邦に対する作戦の準備は最大の速度で行われており、全てのデータが語っている、近日中に進撃が予定されていると。5月20日がソ連邦との戦争の開始日であると屢々言われている。最初、戦争は最後通告に先行するであろう、「ドイツへのより広い輸出の要求と、共産主義の宣伝の拒否を持って」。これまで、ソ連邦の士気喪失の目的を持った「神経戦争」が行われるであろう。ソビエト国境に、「全ての自由になる」人的資源、武器、輸送の集中を行っている。最近、準備の手段はカモフラージュされている。

この時期、ドイツ軍と社会には分裂が存在している、「ドイツの将校の大部分、国家社会主義党の若干のグループはソ連邦との戦争に反対の雰囲気である。これらのグループでは、ソ連邦に対する戦争を無鉄砲な事業であると見なしている、それはヒトラーを破産に導く」。

5月12日、OKB（ドイツ国防軍最高司令部）の作戦指導参謀部が「デマ報道の第2段階の遂行に関する手段についての指令について」を公布した。この段階は5月22日から始まった、同時に、鉄道輸送の最大限の密なダイヤグラムの導入と共に。この期間は、あらかじめ見込まれていた：

イギリスへの進撃の準備を全力を傾けて続行する、バルバロッサ作戦のための軍の集中は、「西の敵の誤解を招く目的を持って、よく考えられた演習のように見えるように」；

東部にいるドイツ軍の中に噂が広まること、ロシアに対して背面の防御を逸らす演習の

カモフラージュの課題を遂行しているという。が、西の軍は信じていなければならない、実際において、イギリスへの侵入に対する準備がなされていると；

野外警備隊を置くまで東部での出来るだけ大量の集中は、西への移動の命令を得る必要がある、噂の新しい波を引き起こすために；

クレタ島への上陸作戦は、イギリスへの本格的な上陸のように見せなければならない；イギリスに対する誇張された行動の実行に関する課題を内閣の関係者が得た。

書類には、デマ報道の手段の行動の一般的原理が公式化されていた－「作戦開始日が近づけば近づくほど、手段は大雑把になる、我々の意向の粉飾のために利用できる」。

5月13日、キエフ特別軍管区（КОВО（Киевский особый военный округ））の軍指揮官へ参謀本部の指令、狙撃旅団の受領と管区領域の配置についての、4個の1万2千人の狙撃師団、と北カフカスВО（военный округ）からなる1個の山岳狙撃師団。

ウクライナの内務人民委員会（НКВД）が情報を総括した、飛行場、着陸場の建設と改装についての、ソビエトとポーランドの国境付近の。2つの飛行場の拠点を持っていることを伝えた：ザモステとリュブリンスキイ。ザモステ拠点には飛行場7個と着陸場2カ所があった。リュブリンスキイ拠点には3個の古い飛行場と、建設中が2カ所、1カ所が着陸用。

ウクライナ内務人民委員会はソ連邦との国境におけるドイツ軍の集中に関する強力な動きを暴いた。飛行場の加速された建設と、国境付近における要塞化も。

諜報局の特別報道「1941年5月15日に於ける状況に関して、軍事行動の前線における軍事力の配置について」で語られていた。ソ連邦に対するドイツの軍団の継続している強化について、師団総数は114個から119個師団に達していると。ドイツ軍の配置は次のようであった：東プロシアに、23個から24個師団；ワルシャワ方面に30個師団；ルビリンスク・クラコフスキイ地区に33個～36個師団。スロバキア、プリカルパツスキイ・ウクライナ、モルダビア、北ドブルジェに配置されている、南西における師団総数は、諜報局のデータから55個～60個師団に達した。これらから結論された、総督府の南部、スロバキア、モルダビアの北部が軍集中の地域となっていると。

これらのデータはチモシェンコとジューコフのメモの基本となっていた、ドイツとの戦争の場合における戦略的展開計画の判断をもつての。それは5月15日の後にスターリンに提出された。第1に予想していた、ドイツは南西方向に主攻撃を仕掛けると。予想された、支援の攻撃は東プロシアからビリノ、リガ、方面に行われると。スバルカとブレストの方面から、ボルコビスク、バラノビッチへ短期集中攻撃が。

証拠立てされた、ドイツは既に自分の軍を総動員しており、展開された背後も持って、展開においてソビエト軍に先んじており、突然の攻撃をなしえと。

これを防ぐために、提案された、「ドイツ軍司令部に行動の先行権を与えないで、展開において敵に先んじ、ドイツ軍を攻撃すること。ドイツ軍が展開の最中にあり、前線と軍の共同作業が組織化できていない時」。この際、主攻撃はクラコフ、カトビチェ方向に南西前線の武力で行い、ドイツ軍をその南の同盟国から分断する。支援攻撃は、西側前線の左翼から、ワルシャワの軍団を釘付けにし、南西前線に協力をしなければならない、的のリュブリンスクの軍団の粉砕において。

この計画を実行するためには以下の事が必須である：

予備役の教育の目的で軍の総動員を秘匿で行うこと；

野営地への出撃の形で、西側国境付近に軍の秘匿の集中を行うこと。第1に、総司令部の予備役全軍を集中すること；

遠方の管区から野戦飛行場に秘密裏に航空隊を集中すること、航空の背後の展開を始めること；

予備兵と背後の演習の形で、段々と展開すること、背後と野戦病院を。

総司令部の5つの軍団を前方に進めることが提案された、主攻撃と支援攻撃の方向に。

しかし、スターリンはこの書類を承認することを断固として拒否した。「私をヒットラーと争わせたいのか、君たちは？」スターリンはチモシェンコとジューコフに語った、苛立ちを隠さずに。

それにもかかわらず、中央軍管区から軍の移動が始まった、同じく極東からも、ザバイカルからも。

特に、1941年4月26日と5月13日のНКО (Народный комиссариат обороны国防人民委員部) の決定に従って、西部国境への派遣が行われた：ザバイカルから第16軍団 (第5機械化軍団、構成：第13戦車師団、第17戦車師団、第109自動車師団；第32狙撃軍団、構成：第46狙撃師団、第152狙撃師団、第82自動車師団、第57戦車師団)；極東から第31狙撃軍団 (第21狙撃師団、第66狙撃師団)、第211空挺旅団、第212空挺旅団。

軍の集結は全物資を持って、完全なリストの構成で実現しなければならなかった。大祖国戦争の開始までに、極東とザバイカルから西へは人員はその約10%、戦車の20%、大砲と迫撃砲の6%以上が派遣された。これらの武力の基本 (90%以上) はザバイカル軍管区から引き抜かれた。

これの原因となったのは、ソ日条約にもかかわらず、スターリンが日本の中立を全く信用せず、極東における日本の準備に注目していることにあった。これ故、極東方面における軍の集中は戦争開始まで殆ど不可触のものとして維持された。

同じ頃、諜報の線から、スターリンに重要な報告が届き続けた。5月17日、情報が届いた：ルーマニアにいるユーゴスラビア大使が、ソ連邦にいるユーゴスラビアの大使に伝えた、ドイツの将校達との会話によると、ソ連邦との戦争は6月半ばに始まると。

ソフィアの「コスタ」が5月19日伝えてきた：「収集した情報からすると、確実である、最近ドイツはポーランドに120個師団を集中しており、6月末にはソビエト国境に200個師団となる。7月初めに、ウクライナに対して大戦争行動をするつもりである」と。

チューリッヒからシャンドル・ラドが5月19日、伝えてきた全くファンタスティックなことを、ベルリンにいるスイスの武官の言葉によれば、ソ連邦に対するドイツの進撃は、イギリス海軍が黒海に侵入する可能性を失い、ドイツ軍が小アジアで足場を固めた時に、行われると。これ故、ドイツの次の目標は、ジブラルタル海峡とスエズ運河の占領となる、イギリス海軍を地中海から追い出すために。

防衛人民委員会と総参謀部の指揮官が1941年半ばに、極秘指令「特別に重要」に署名し、それを西の軍団、キエフ軍管区の司令部に通知した。主要課題は次の通りであった

：「1941年5月20日に、貴方の個人的に参謀部の指揮官と軍管区の参謀部の作戦課の指揮官と、国境線の防衛の詳細な計画を作成すること・・・」 プリバルチック軍管区の軍団指揮官に、同じような指令が少し遅れて出された、5月30日にカモフラージュした計画の作成を要求して。

同時に、全ての軍管区で、登録人員の招集が始まった。43万人以上が集められた、その中で、10万人以上が西軍管区、キエフ軍管区、オデッサ軍管区に。この際、最も早い招集期日はキエフ軍管区で、5月15日～5月20日、他の軍管区では、7月1日以降。

5月22日、ハルダーはいつも通り日記に書いていた：「航空写真は我々の見解を確かなものとしている、ロシアは国境に踏みとどまる決定をしているとの」。

5月23日付けのブダペストの「マルス」の報告に従うと、ドイツ武官（BAT）が伝えた、ドイツは6月15日より遅くない時期に進軍すると。

「リツェイスト」は真実と空想の難しい混じり合いを追い続けた：ドイツがソ連邦との国境に160個師団～200個師団を集中させた。が、ソ連邦とドイツの間の戦争は有りそうもない、戦争はドイツ国民には非常にありふれたものになっているにもかかわらず。同じく、ヒットラーはソ連邦との戦争を欲していない。とにかく、これはナチス党の団結を脅かすので。ヒットラーの目論見は、スターリンにもっと譲歩をさせること、ドイツに対する陰謀を止めさせること、ドイツに必要な商品を提供させること。

諜報局のブカレストの諜報機関の情報によれば、ソ連邦に対するドイツの軍事の準備は継続されている、6月に戦争が開始されようである。軍の展開は計画通りに行われ、6月半ばまでに終了されよう。ドイツ側では、早い勝利に何の疑いも持っていない。

5月31日、諜報局の特別通知が出された、1941年6月1日におけるドイツ軍の集中についての。5月の後半に、バルカンで解放された武力によって、ドイツの総司令部が行った：

イギリスとの戦いのために西における軍の集中の復活；

ソ連邦に対する武力の増大；

総司令部の備蓄の集中。

ドイツの軍力の全般的な配備：

イギリスに対して（全前線に）－122個師団～126師団；

ソ連邦に対して－120個師団～122個師団；

予備－44個師団～48個師団。

東プロシアとポーランド総督府に、軍事諜報の情報によると、88個師団～90個師団、モルダビアと北ドブルジェに、17個師団、この際、キエフ軍管区に対抗して集中された軍力は35個師団～36個師団。

同じように物語っていた、ユーゴスラビア、ギリシア、ブルガリアからルーマニア領土へ大軍を投入し、ドイツは急いでソ連邦に対する自分の右翼の強化を行っていた、その比重を高めることで、ソ連邦に対する自分の東部前線の全体の配置においてルーマニアにおいて、モルダビアと一緒に、6月1日には28個師団を数えた。

5月31日、内務人民委員会（НКВД）は、ケーニスベルグの日本大使館からモスクワの日本大使への定時電報を掠め取った。それにはドイツの軍事準備の大量の情報であふれていた。最後に語っていた：「これら全ては戦争の開始の考えに導く」。

このように、全てが語っていた、戦争が始まるに違いないと。しかし、第1に、正確な答えがないままに、大事な問題が残されていた：何時、何処へ、どれだけの武力でドイツがソ連邦へ進撃するのか？

5月中の諜報機関の報告書から判断して、「何時？」という問題について、第1に、評価に大きな差違が存在していた：「今日ではなく明日」；「5月－危機の月」、「5月20日」；「5月末に、カフカスへ進撃」、「6月15日より遅くはない」、「2ヶ月後、収穫までに」、その他、7月に；「7月初めに」。

期日は多かれ少なかれ6月の半ばに近い、が示されていた。しかしこれらの報告は大量の報告の中で埋もれてしまった。中央の分析者達はそれを強調しなかった。

ドイツ国防軍の主攻撃は第1番目にウクライナであると思われた。この際において、トルコからのカフカス（バクー）への、海からオデッサへの攻撃についての報告、ドイツによる南西方向（ルブリン、ザモステ）への飛行場の建設についての報告は、どうも次のことらしい、ドイツ軍は主攻撃を自分の南翼で攻撃を計画していると評価されることを。これ故、キエフ軍管区に対するドイツ軍の集中が最も大きく評価された。然るべき結論が諜報局の特別報道と参謀本部の戦略展開計画でなされた。そこでは、第1に南西方面がドイツの主攻撃の方向として取り上げられた。これから、ウクライナにおけるソビエト軍の更なる集中の強化が行われた。

「いかほどの武力で」という問題には、諜報機関はドイツ軍の集中の展開の決定的な様相を与えることが出来なかった。明らかにされた、武力の増強が続けられていることが：5月5日－103個師団～107個師団；5月15日－114個師団～119個師団；6月1日－120個師団～122個師団。情報のデマ宣伝が公に行われた：「ドイツはポーランドに120個師団を集中させた、6月末には、ソビエト国境に200個師団を」（ソフィアの「コスタ」）；160個師団～200個師団（「リツェイスト」）。情報は多かれ少なかれ実際に近いものであった（ケーニスベルグの日本大使：「東プロシアに、膨大な軍の集中が行われた、量においてリュブリンスク地域の軍力に劣ることはない）、おそらく、無視された、既にできあがっているイメージにおさまらなかつた故に。

実際において、次のような状況であった。バルカンの作戦行動に関係して、師団数、第3、第4梯団にドイツ司令部によって投入された、は初期の計画と比較すると少なかった、が、第5梯団は増強された。第3梯団の第17師団への投入は4月11日から5月21日に行われた。師団の大半は西からやって来た、が2つはドイツから。全43個師団、最初の3つの梯団の構成としてやって来た、はカモフラージュ作戦のもとで、ケーニスベルグ、ワルシャワ、タルヌフの西の国境に配置された。5月半ばに、ドイツから西へ、占領勤務の遂行のために第14線に8個の歩兵師団が派遣された。

1941年5月22日から、ドイツの鉄道輸送網は過密ダイヤとなり、東方への軍移送が極めて増大した。11個歩兵師団と9個警備師団への第3梯団の移動は5月22日から6月5日の間に行われた。5月末には、ドイツから西に、占領勤務のために、1941年春に創設された第15軍団に5個歩兵師団が送られた。6月5日、3つの軍団の師団数は89個師団を数えた。

3月から5月の期間に、東に63個師団が移動された。諜報局のデータによると、当期間におけるこの数値は50個師団～52師団に達した。移動におけるある程度の遅延を考

慮すると、5月の末には、加速を付けて軍移動が始まった。注目しておく必要がある、軍事諜報機関はドイツ軍の移動の規模を完全に正確に決めることが出来ていたことに。

襲撃のドイツの準備を警告する指標はというと、ここでは正しく示されていたロシア語の熱心な勉強と将校達への国境線辺りの地図の配布が。他の情報は混乱をもたらしただけで、指導部を迷わせた：襲撃はイラクの油田の占領後である；ドイツ軍はトルコを經由してイラクへ進む；ソ連邦に対するドイツの示威行動が行われる、イギリス海軍が黒海に侵入する可能性を失い、ドイツ軍が小アジアで強固となったときに；ドイツの次の目標は、ジブラルタル海峡とスエズ運河の占領である。しかし、明らかに、情報は最も悲惨な影響を示した、その中で語られていた、ドイツによる最後通告のあり得る提示と分裂について、ソ連邦への進撃についてドイツの軍部と党内に存在するかのよう。その際、そのような情報はいろいろな情報源（「シタルシナ」と「リチェイスト」）からやって来た。それらは語っていた、最後通告のアイデアはドイツの手の込んだデマであるとの。

一般的に語っておかなければならない、ドイツ指導部によって行われたデマ宣伝は極めて成功した。基本的にその目的を達することに成功した。エージェントの報告を基礎とした、リップントロップが5月28日に表明した情報に同意する。ベルリンの外交幹部グループの一部は信じた、ドイツとソ連邦の間に幅広い一致が達成され、この2国間の戦争は少しの間は予防されたと。

それにもかかわらず、諜報機関の貢献により明らかとなっている、諜報機関はとにかくスターリンまで、早いうちにおける戦争の不可避についての考えを伝えることが出来た。これ故、返答の手段が採用された。特に軍隊の集中が、予備兵の非常招集と国境の防御計画の作成が。予防攻撃案さえ考慮された。しかし、戦略的間違いは、この手段は遅すぎたということにあった。これ故、ザバイカルと沿海州から、4月26日から6月22日までに、計画された軍力と物資の約半分だけを送ることが出来ただけであった：5個師団（2個狙撃師団、2個戦車師団、1個自動車師団）、2個旅団、2個連隊。これ以外に、基礎的強化を再び南西方面で行った。南西前線には23個師団が集中され、西前線には9個師団。これはドイツの主攻撃の方向の不確かな評価の結果であった。

限られた期間と既になされた軍集中の条件下で、国境防衛計画は幾つかの重大な欠点を持っていた。最初の欠点は次の点である。大半の師団の防衛前線は国境線に沿っており、安全地帯がなかった。作り上げた防衛は敵の主力の反撃を見込んでいなかった。軍の配置に影響を与えた、攻撃的特性が、計画されていた戦略的行動の。

2つめの欠点は次の通りである。国境防衛に関する軍事行動の過小評価のために、ソビエト軍の最大の力を向けた軍集中がベロストクスとリボフスク突出部で行われた。このとき、敵はこれら突出部の基部への主攻撃を計画していた。ここで、軍管区と防衛地区の間に接合部が出来、防衛が弱かった。

さらにもう一つの欠点があった。軍の集結の構成を決める際において、この軍集結に入る兵団の実部隊配置の考慮が弱かった。

西とキエフの特別軍管区の大半の師団—第1に防衛に従事する—は距離60kmまで再配置をする必要があった。部分的に国境線から至近距離の前線に沿って。防衛の二者択一の案、例えば、地帯の深部或いは部隊配置の地区で見越されていなかった。合同舞台の再従属の複雑な手順、特に西特別軍管区で、確りした管理を保証していなかった、敵の突然

の襲撃に対して。防衛部隊は敵の監視網内にあり、大砲の火力で攻撃を受けるようになっていた。このように、作戦において、ソビエト軍の将来の失敗の条件が整いすぎていた。

5月30日、いつも通りに、ハルダーが自分の日記に記していた：「バルバロッサ作戦のための展開計画に従った移送は上手い具合に進んだ。総統は決断した、バルバロッサ作戦開始の期日は、以前と同様、6月22日と」。

## **6月：「もし、バルバロッサ作戦（1941年6月22日～ 12月5日 ＊）が成功するならば、全世界は息を殺し・・・」**

ドイツ軍が集中しているのを、国境警備隊は不安を持って見守った。6月2日、国境警備隊の報告を元に、内務人民委員会（НКВД）はソビエト指導部に報告書を作成した。国境警備隊はドイツの航空隊の移動を明らかにすることが出来た、特に爆撃機の、偵察飛行とドイツの軍高官の視察を。同じくブレストとリポフ方面における渡河用資材の集中を。

6月3日、内務人民委員会（НКВД）第2局のエージェントが報告してきた、日本の外交官グループからの情報によると、ソ連邦とドイツとの戦争は直ぐに始まる、6月の15日か20日に。ソ連邦の西国境へのドイツ軍の集中は150個師団（150万人）を数える。ドイツは同じく、南への侵攻の可能性を準備した、トルコを經由して。若干の外交官の予想に従うと、ドイツはソ連邦に何らかの条件を提示した、ソ連邦への圧力手段として戦争の脅しを利用して。これに関して、事実が語っている、ソ連邦に対する戦争のドイツの準備の情報は、ドイツの情報源から中立国の出版物に出たという。残念ながら、書類としての発送についての何の決定も証拠もない。これ故、それが指導部に報告されたのかということ判断出来るようには思われない。

ドイツにいるソビエト大使デカノゾフの評価によれば、ソ連邦とドイツの間の新しい合意が存在するかのような噂—特に、「ウクライナの賃貸」に触れた—はドイツ自身によって広められた、ドイツの関心について証言した、ソ連邦との関係を「歪んだ光」として表現している。

6月5日、ヒトラーはOKB（ドイツ国防軍最高司令部）への指令を承認した、バルバロッサ作戦の計画に関しての、時を計算しての。

6月6日、ハルダーは日記を付けた：「ルーマニア：ロシアは国境で増大する不安を見せている。共産主義者の宣伝」。

6月7日付けの諜報局の特別通知「ルーマニアの軍事準備について」の中で語られていた：「ヨーロッパにおけるドイツ軍の右翼の更なる増強の手段としてルーマニアの動員を相応するものと考慮して、特別な注意を振り向けることが必要である、ポーランド領域におけるドイツ軍の継続する増強に」。

6月10日、中央は内務人民委員会のベルリンの機関に質問を出した、ソ連邦に対するドイツ軍の詳細について正確に報告するようにと。

6月10日、ドイツの陸軍本部は命令を出した。バルバロッサ作戦の開始日を6月22日にすると。6月21日の13時、作戦開始の信号「ドルトムンド」が伝達されると。



6月22日の3時30分、ドイツ軍の進撃が開始されなければならない（その後、時刻は朝3時に変更された）

6月11日、「ザハル」が「シタルシナ」の報告を伝えた：「有力筋が語っている、ソ連邦への進撃の問題は決定した。ソビエト連邦に予め何らかの要求を突きつけるか、わからない。

突然の攻撃があると見なさなければならない。ゲーリングの参謀本部はベルリンから移動する、「シタルシナ」の予想によればルーマニアに。そこへ、ゲーリングは6月18日移動する。第2空軍はこの時期、フランスからポズナニに移動する。ドイツとフィンランドの参謀本部は熱心に交渉を行っている。

毎日の偵察飛行に、フィンランドのパイロットが参加している。「シタルシナ」の意見によれば、主攻撃の目標となるのは最初はムルマンスクである、ムルマンスクの鉄道、ベリノ、ペロストク、キシネフ。「シタルシナ」が指摘している、彼らの手にした書類に目を通して、あきらかである、ドイツの司令部は北から、東プロシアから、ルーマニアから、南から敵を包囲するルートを指向している、赤軍の包囲の目的を持って、総統府の境界に配置されている・・・」6月12日、この通知はスターリン、モロトフ、ベリアに報告された。

ソ連邦の内務人民委員会の通知によると、1941年1月1日から6月10日まで、ドイツ側からの国境侵犯件数は2080件に達した。この件数のうち183件は、ドイツの諜報活動によるものであった。携帯無線を装備し、良く武装したドイツのスパイの場合が頻発した。

6月11日、ハルダーが記している：「東部戦線は全て順調である、準備は計画通りに進んでいる」。6月12日、「南方軍団の参謀部と一緒に、ハンガリーとルーマニアへの嘘の軍移動の組織化は・・・バルバロッサ作戦開始まで、何の新しい命令を出す必要はない」。6月13日、「バルバロッサ作戦に関して、敵を混乱させる目的を持ってハンガリーでラジオ放送」。

6月13日、労農赤軍の参謀本部で、西方での戦争の場合におけるソ連邦の軍の展開についての書類が準備された。この書類からすると、西の国境における軍の展開のために、186個師団が割り当てられた。その中で、北の前線に22個師団、北西前線に23個師団、西の前線に44個師団、南西前線に97個師団。これ以外に、総司令部の予備として、西部前線にウラル軍管区からの第22軍団（9個師団）、南西前線にはザバイカル軍管区から第16軍団（12個師団）と北カフカス軍管区からの第19軍団（11個師団）が集中された。このようにして、西部国境には全部で218個師団が展開された。

タス通信

1941年6月13日

ソ連邦のイギリス大使クリピスのロンドンへの到着まで、特に、彼の到着後、イギリスの、外国の印刷物で、噂がわき上がった、「ソ連邦とドイツの間の戦争の接近」についての。この噂によると：1）ドイツはソ連邦に領土と経済についての苦情を申し立てている。現在、ドイツとソ連邦の間で交渉が進んでいる、両国の間の新しく確りした合意の締結についての；2）ソ連邦はこの苦情を拒否した。それに関して、ドイツはソ連邦への進撃の目的を持ってソ

連邦国境に軍の集中を行った；3）今度はソビエト連邦が、ドイツとの戦争の準備に取りかかった、国境付近に軍の集中を行った。

この噂の明かなばからしさにもかかわらず、モスクワの責任あるグループは必要であると見なした、しつこい噂の尾ひれ故に、TACCに声明することに全権を与えることを、この噂はソ連邦とドイツに敵意を持ち、戦争の拡大と開始に興味がある勢力による不器用ででっち上げられた宣伝であると。

TACCは声明する、：1）ドイツはソ連邦に何の苦情も提示していない、何の新しくより確りした合意も提案していない。それ故、これに関する交渉はあり得なかった；2）ソ連邦のデータからすると、ドイツはソ独の不可侵条約を絶えず守っている、ソ連邦と同じく。それ故に、ソビエトグループの意見によれば、条約を破棄し、ソ連邦へ侵攻をするというドイツの意向についての噂は全ての根拠を失った。最近行われているドイツ軍の移動、バルカン作戦から自由になった、はドイツの東と南東で結びつく。見なさなければならぬ、他の動機を持って、ソ独関係に関係を持たない；3）ソ連邦は、その平和的政治から出てくるように、ソ独不可侵条約の条件を守ってきたし、守っていくつもりである。これ故、ソ連邦がドイツとの戦争の準備をしているという噂は、嘘であり、挑発でもある；4）現在行っている赤軍の年次予備役招集と演習はそれなりの目的を持っている。予備役の訓練と鉄道の機能の確認、よく知られているようにこれらは毎年行っている。赤軍のこれらの行動をドイツに敵対するものと描写することはばかげたこと以外の何物でもない。

6月14日、ドイツ外務省PCXA代表親衛隊ルドルフ・リクスがリップントロップに報告した、ベルリンの外交団の中で、従来通り、広く伝わっていると、行われているらしい独ソ交渉についての意見が。この際、リップントロップとモロトフの会談の可能性或いはヒトラーとスターリンの会談を除外しないという、最後のドイツの試みを行うために、ロシアにより強い圧力をかけて示す。TACCの声明の公表はこの説を補強した。スターリンの増大する不安の発露であると受け入れられたので、ドイツとの衝突と交渉の準備を前にしての。

6月15日、ブタペストにいる武官が伝えてきた、東スロバキアに新しい4個師団のドイツ軍が出現した、それらのうちの2個師団が自動車部隊。ソビエト武官の情報によると、6月15日、ドイツはソ連邦に対する戦略的展開を終了しなければならない。「あり得る、ドイツは今ソ連邦に出撃はしない、が、この準備をしている。将校は明けっ広げに語っている」。

この日、内務人民委員会の外部の諜報機関の筋から、スイスのビジネスマンを経由して、ゲーリングと近い関係にある、結構奇妙な情報を得た、ドイツは6月15日頃、ソ連邦に対する戦争行動を始めるとの。

間断なく情報が届いた、ルーマニアとフィンランドにおける継続した動員施策についての。

イギリスにいるソ連邦の大使マイスキイが、6月16日、ロンドンから伝えてきた、イギリスの参謀本部の情報について。それは彼にイギリスの外務省次官カドガンが伝えたものであった：ソビエト国境に集中されているドイツ軍の総量は、ポーランドに80個師団、ルーマニアには30個師団、フィンランドと北ノルウエーには5個師団、全てで115個師団。ルーマニア軍の動員は見られない。

ソ連邦内務人民委員部の通知、スターリン、モロトフ、ベリアへ

1941年6月17日、極秘

ベルリンからソ連邦内務人民委員部が入手した諜報情報を送る。

人民委員

ソ連邦国家保安局 メルクロフ

ベルリンからの情報

ドイツ空軍の参謀部で働いている情報源が伝えている：

1. ソ連邦に対する軍事侵攻の準備のための、ドイツの全ての軍事手段は完全に終了した、攻撃は何時でも行える。
2. 空軍参謀部内では、6月6日付けのTACC通信は極めて皮肉たっぷりに受け取られた。この声明は何の価値も持っていないと強調する。
3. ドイツ空軍の急襲の対象物は第一に以下のものである：発電所「ズビリー3」、飛行機用の部品を製造しているモスクワの工場（電気機器、ベアリング、タイヤ）、同じく自動車修理工場。
4. ドイツ側での軍事行動に、ハンガリーは積極的に参加をする。ドイツの飛行機の一部、特に戦闘機は既にハンガリーの飛行場にいる。
5. 重要なドイツの飛行機修理工場は以下に配置されてた：ケーニスベルグ、グリーン、グラウデンツ、プレスラブル、マリエンブルグに。ポーランドのワルシャワには自動車修理工場マリチャ。オチャチ、ヘイリゲンケイルには特別重要な。

ドイツの経済省で働いている情報源が伝えている。ソ連邦の占領地域の軍事経済庁の長官が指名された：カフカスには、アモンが指名された、デュセルドルフで国家社会主義党の指導的労働者の一人。キエフには、ブランツ、経済省の元同僚、最近までフランスで経済省で働いていた。モスクワには、ブルゲル、シュットガルトでの経済省の指導者。これらの全ての人物は軍務についており、集合場所であるドレゼンに出発した。

「ソ連邦の占領地域」の経済省の全体の指導のためにシュロテレルが任命された、経済省の外国局長である、未だベルリンにいる。

経済省で語られている、「占領された」ソ連邦の地域のために指名された経済責任者の会合でローゼンベルグが発言した、「ソビエト連邦の概念は地図から消し去らねばならない」と。

その通り：

ソ連邦人民委員会第1局局長フィチン

スターリンの決裁：「メルクロフ同志へ。ドイツ空軍参謀部内の君の情報源に伝えること\*\*\*\*。これは情報源ではなく、デマ報道者である。ヨシフ・スターリン」。

6月18日、国家保安人民委員メルクロフはスターリンに報告した、ドイツ大使館員と彼らの家族のベルリンへの大量の出立について：6月10日から6月17日にかけて34人。書類のドイツへの急いだ発送と現場での書類の焼却が行われた。

6月19日、ローマにあるNKVDの諜報員「チト」が伝えてきた。ローマの諜報機関の情報源からの情報によると、6月18日、イタリアの外務省に、ベルリンにいるイタリア大使の電報が届いた。その中で彼は伝えていた、ドイツの最高軍事司令部は彼に伝えたと、ソ連邦に対するドイツの戦争の開始について、6月20日から26日の間の。書類には何の決裁もなかった。これ故わからない、それが指導者に報告されたのかは。

6月19日、リクスは再びリップントロップに報告した、独ソ関係に関する外国の外交官グループの間の噂について。トルコの指導部の意見によれば、ドイツがソ連邦に提示した要求（ルーマニアのベッサラビアの返還、ドイツ国防軍による油田の利用と40年に渡

るウクライナの利用)はスターリンによって採択されたい、両方によって、「ソビエト連邦に許す公式が見つかった、大国のメンツを保ちながら、ドイツの希望を満足する」。

6月20日、ソフィア(ブルガリアの\*)の「ユスタ」が伝えてきた、ドイツの軍事筋からの情報によると、軍事衝突は6月21日か22日が予想され、ポーランドにはドイツの100個師団、ルーマニアには40個師団、フィンランドには6個師団、ハンガリーには10個師団スロバキアには7個師団。自動車師団は全部で60個。ブカレストから飛行してきた急使から明らかになった、ルーマニアでは動員は完了した、全部隊は軍事行動の開始を待機している。

НКВДの資料からすると、ドイツの諜報機関は、10昼夜から15昼夜の期間にはなつた自分らのエージェントを向かい戻るようにした、課題完遂の後、ドイツに戻るのではなく、ソビエト領土のドイツの部分となつたところへ。

もう誰も疑ってはいなかった、戦争が近日中に始まることを。

6月20日、ハルダーが日記に書いていた：「展開は計画通りに進んでいる。天候は結構である。水深は何時もより浅い」。6月20日夕方、ドイツ軍に、バルバロッサ計画に関する総統のアピールが届いた。ハルダーが書き残していた、「わざと政治的調子の檄文、檄文としては言葉が多すぎる」。

西軍管区の軍司令部の指令、

第3、第4、第5軍の軍司令部への

1941年6月22日

迅速な遂行のために、防衛人民委員会の命令と伝える

1. 1941年6月22日～23日の間に、レニングラード軍管区、プリバルチク軍管区、西軍管区、キエフ軍管区、オデッサ軍管区の前線へのドイツの奇襲があり得る。襲撃は挑発活動を伴って始まり得る。

2. 我が軍の課題—いかなる挑発行動にも屈してはならない、大きな紛糾を引き起こす可能性がある。

同時に、全ての各軍管区は完全な戦闘準備に入り、ドイツ及びその同盟国のあり得る突撃を迎えること。

命令する：

a) 1941年6月22日の夜の間に、国境線の要塞地帯の火点を隠すこと；

б) 1941年6月22日の夜明け前に、全ての飛行機を原野飛行場に散開させること、特に、部隊のものを注意深くカムフラージュすること。

в) 全ての部隊は戦闘準備をすること。軍を散開しカムフラージュをすること。

г) 対空部隊を戦闘準備とすること、徴用要員の付け刃なしに。

д) 何の他の手段を行わないこと、特別命令なくして。

チモシェンコ ジューコフ

パブロフ フォミリフ

クリモフシキフ

注記がある：「1941年6月22日、1時45分に処理された」、「1941年6月22日、2時25分—2時35分に発送された」。

ドイツ側では戦争の準備をしていた。6月10日から、攻撃軍団はソビエト国境から7km—20kmから20km—30kmまでの出発点へと出ていった。6月18日から、

第1軍団の師団は出発位置に移動し始めた、暗いときに、注意深くカモフラージュをして。

6月21日の昼に、第一撃の合同BBC（空軍）がビスラの西方の飛行場に集結した。この日の夜、飛行機は一機ずつ、低空飛行で、町を避け、無線封止を守り、野戦飛行場に移動した、ソ連邦の国境線から至近距離の。同時に、ドイツ軍と一緒に、ドイツの同盟国の軍も展開を行った。

多分、1941年2月3日の会議で総統が語った「予定」を実現するために全ての準備が行われた：「もし、バルバロッサ作戦が成功すれば、世界は息を殺し・・・」。

こんな訳で、ソビエトの諜報機関は成功していたのであろうか、問題に返答を6月に出すことに：「何時、何処で、どれだけの軍力でドイツが攻撃を仕掛けるのか？」

「何時」という問題には回答が得られた：6月15日か20日；6月20日から25日の間；6月21日か22日。期日がばらばらであった、但し書きが付けられた：「多分、ドイツは今ソ連邦を攻撃しない、が、その準備はしている。将校達は公言している」。これ故、攻撃は何時でもあり得るという「シタルシナ」からの情報を得たとき、スターリンは不機嫌となった。スターリンのそのような対応を知って、諜報報告の場合において、明らかに、単に彼に報告しなかった、これはローマにある内務人民委員会の諜報機関からの電報であるとして。

他の方面から、6月22日という情報は文字通り戦争開始の数日前に得られたにもかかわらず、少なくとも攻撃に反抗する赤軍の準備の増強に大事な役割を果たすことは出来た。しかし、早めの軍移動を行う全ての試みは上の方から禁止された。が、カモフラージュの計画に従って軍の移動についての決定がなされたとき、時間の余裕は全くなかった。ソビエト司令部は、6月22日、23日を見込んでいた。とにかく軍の展開の成功を見込んでいた。

西部におけるソビエト軍の戦略的展開の最終的状态を判断すると、「何処」という問題には不確かな答えが得られた：基本的な武力、特に戦略的な予備力、南西方面に集中された。諜報局の分析にもかかわらず、結論に達した、ポーランドにおけるドイツ軍の増強に特に注意を払う必要があると。少なくともこの結論は諜報機関の他の情報の陰で失われた、それは再び南（トルコ経由さえ）と南西方向での危険を示していた。「シタルシナ」は大体においてドイツ司令部の戦略的考えを指摘していた、赤軍の国境警備隊を包囲するという。しかし、再び不正確に主攻撃の方向を判断した：東プロシアの北からとルーマニアの南から。

「どれだけの軍力で」の問題については、大凡正しい答えが得られた。1941年6月15日での西部に関する諜報情報では、6月1日では120個師団～122個師団であった、ドイツ軍の大規模な移動が6月22日まで継続していたが。明らかに、他の諜報情報を考慮しないわけにはいかない。それは正しそうなものであった、全くファンタスティックな数値であった（150個師団－150万人！、163個師団、その内の60個師団は自動車師団！）、それ故、指導部に報告したデータではなかった。十分に本当らしい数値はイギリス参謀部の評価値であった（115師団）、マイクシイがイギリスの外務省から得て、モスクワに伝えたものであった。

実際において、事は次の通りであった。31個師団からなる5個軍団（14個戦車師団、12個自動車師団、2個歩兵師団、3個軽歩兵師団）と2個自動車梯団が6月6日から1

8日に東部へ集中移動された。6個軍団（陸軍総司令部の予備）の移動—28個師団と1個梯団からなる—は6月19日に始まり、数週間継続した。戦争開始後まで。（ハルダーが5月1日に日記に書いていた：「陸軍総司令部の予備の移動は、西方には位置されている陸軍総司令部の予備はより長く留まり続けているように、するべきであるために」）。

1941年6月21日の終わりには、ソ連邦との国境線には、バルチック海から黒海まで、ドイツ司令部は第一撃のために直接に軍を集中し、展開させた、120個師団と2個軍団。これ以外に、南翼にルーマニア王国の13個師団と9個軍団がいた。

ソビエトの諜報機関が侵攻に関するドイツの準備の確かな兆候を暴くことが出来たことは、諜報機関の疑いのないであると認める必要がある。大事なことは、諜報機関が伝えてきた通り、6月15日、それはソビエトに対する軍の戦略的展開の手段を終了し、急襲待ちになったということである。これらに関して、諜報機関は近日中における襲撃に関するドイツの準備の確かな兆候を説明することが出来た：ドイツ空軍の移動、特に、爆撃機；第3帝国の高位指導部の代表者（ゲーリング）のソビエト国境への移動；ドイツの高位軍指揮官達の視察と偵察行動；戦闘経験のある突撃部隊の移動；渡河手段の移動；良く武装されたドイツのエージェントの派遣、携帯無線機を装備した、課題遂行後の命令を持った、ソビエト領地でドイツ軍の陣地に出る；ドイツ大使館の職員と彼らの家族のドイツへの大量の退出；モスクワからの大量の書類の発送と現地での書類の焼却。

これら全ては一つのことを語っていた：近日中にドイツの襲撃がある。それは突然に開始される、何の事前の要求を突きつけることなく。対抗策を講じなければならなかった。彼らはそうした。先頭部隊のカモフラージュにかかる時間の短縮の手段を講じた、国境警備隊の支援のために割かれた。これ以外に、6月15日から、国境付近で補充の軍の集結が始まった：第16軍—キエフ軍管区へ、第22軍の5個師団—西軍管区へ。しかし、結局、6月22日までに、一部分だけを移動することが出来ただけであった。同時に、第一に、軍には原則的に禁止した、国境付近で戦闘態勢に入ることを。実際においては、完全に、国境警備隊だけが襲撃の時に戦闘態勢に入れていただけであった。国境警備隊は強化した体制で勤務に就いていた。しかし、国境警備隊は余りにも少なかった、彼らの激烈な抵抗は急速に崩壊した。

ソビエトの諜報機関の功績として、次のことを挙げておかなければならない。攻撃の前に、外交官筋で強まり確実な噂にもかかわらず、確立した：ドイツ人自身が噂の源となっていた、ソ連邦とドイツの間に新しい合意が出来たという。特に、「ウクライナの借用」に関する。この時の状況は、ヒットラーの指導部の意向についての情報がある、特に政治的手段の採用を要求していた。それらの手段の内の一つが6月14日付けのTACCの声明であった。手元の事実に照らして、この声明は、多くの研究者達はスターリンの間違いと見なしている。それ故、見なしている通り、声明は「骨抜きの効果」を示した、特に、明らかに、他の目標を追跡した。ドイツの指導部はTACCの声明に反応するか、或いはそれに反応しないか、どの場合においても真の意向は明らかになる。ドイツ側からの更なる何の返答がなければいほど、ソビエトの指導部は戦争の不可避についての結論に傾く。

それにもかかわらず、思っている通り、この声明は軍に驚きを引き起こした。時折、指揮官と政治機関の中に当惑を、個人的な心理的安定性、警戒心と戦の準備での損失をもたらした。

6月21日夕方、ハルダーは自分の日記に次のように書いていた：「個々の区域でロシアの監視が強化されているのが目につく。(第8軍団の前線で、敵が陣地を構えている)・・・」

## ラムザイ：「ドイツとソ連邦との間の戦争は不可避であり・・・」

大きな出来事が熟していると、東京のラムザイは感じ、ものすごい力を注いだ。ドイツの襲撃の期日とその主攻撃の方向の確かな情報を得るために。

ゾルゲにとっては既に明白になっていた、ヒットラーがソ連邦を攻撃する準備をしていることは。オットーとベネッカーとの最近の会合は彼に確信させた、ヒットラーは決意したことを。ソ連邦を粉碎し、穀物と資源の基地としてソ連邦のヨーロッパの部分に占領する、ヨーロッパにおけるドイツの支配を保証するために。5月2日、ラムザイは伝えた、オットーとベネッカーの意見によると、ユーゴスラビアの敗北の後、ドイツとソ連邦の相互関係において、2つの重要な期日がある：

ソ連邦における種まき終了時期、その後、戦争は何時でも始められる、ドイツは収穫を奪うだけである；ドイツとトルコの交渉—ドイツの要求のトルコの受け入れの問題に、もしソ連邦が何らかの障害を生み出すならば、戦争は避けられない。

ゾルゲは同じく伝えていた、「何時でも戦争となる可能性は極めて高い。というのは、ヒットラーと彼の将軍達は信じている、ソ連邦との戦争はイギリスに対する戦争に何の阻害ともならない」と。ドイツ軍部のこの確信は、赤軍の軍事力の極めて低い評価を元にしていて、赤軍は数週間で崩壊するであろうと見なしていた。

ソ連邦に対する戦争の開始についての決定に触れると、それは「ヒットラーによってのみ決められる、5月か或いは、イギリスとの戦争後かは」。この通報はゴリコフの考えと良く合致していた。彼は「すぐにゾルゲの電報を高位指導部へ送致するよう指示した。戦争開始が5月であるという補足的な事実となったのは、ラムザイの意見によれば、オットーがナチスの半官紙「フォリキシェル・ベオバフテル」の特派員ウラフ王子に述べていたことである、5月にドイツに戻ると。

当時、ヒットラーとリッペントロップは努力を中止しなかった、日本の内閣にシンガポールへの進撃を強いることの。この目的を持って、ベネッカーは、イギリスに対する共同の独日進撃の見込みについて近藤将軍に質問した、日本にシンガポールへの進撃を強いるリッペントロップの指示に言及することなく。

ラムザイはドイツ語でベルリンへのベネッカーの近藤の返答についての報告書を読んだ、それは次のような内容であった：「日本海軍はシンガポールへの進撃のために全ての準備をした。進撃は必用な時に行える、他の活路がない時に。しかし、今のところ、アメリカから重要な資源を得ることが出来ている。適当な時は未だやって来ていない」。

大事な時であった、参謀本部と日本の全軍、同じく関東軍司令官梅津将軍がソ日条約に同意した時が。反動主義者の一部分が反対した、荒木のような、若手の一部分が、富山（？\*）グループに属している。

5月10日、ゾルゲはこれら全てについてモスクワに伝えた、追加して：「シンガポールへの進撃問題への活動は現在顕著ではない。ドイツ大使オットーはこの問題に関して松岡との会見を試みた。が、病気を理由に松岡はこれを拒否した。

オットー大使の情報によると、ヒットラーは松岡にほのめかした、彼はシンガポールに対して日本側から明確で素早い行動を期待していることを。もしこれを日本がするならば、ドイツは自分の権利を放棄する準備がある、太平洋の南部の島々における。もし日本がシンガポールに進撃しないならば、戦争の勝利後、ドイツは自分の権利を譲ることはない」。ゴリコフの決裁：「5カ所に渡すこと」。

これは全て、枢軸国間の全くバラ色ではない関係を物語っていた。

5月19日付けの次の電報で（21日に得られ、5月23日にゴリコフに報告された）、ドイツと日本指導部の間の深化する分裂の確証が届いた。「アメリカの代理人」が絡んできた、アメリカは日本にいる自分の大使ジョゼフ・グルーを通じて、日本に提案をしていた、「新しい友好関係の構築」の。これはゾルゲが直ぐに知るところとなった、オットーと尾崎から。同じく確証はブーケリッジからも届いた。彼はアメリカの電報代理店の特派員ポール・ニューマンから情報を得た。アメリカは、日本の内閣と蒋介石との間の交渉における仲介者となる準備があることを表明していた、次のような条件：

日本は中国から自分の軍隊を引き揚げること、南太平洋への軍事侵攻を断念し、3国同盟を拒否すること；

中国における日本の立場と商業上の優先権を認める；

アメリカは南太平洋における日本の「特別な経済的必要性」を認める。

この提案は、ゾルゲの言葉によれば、「日米交渉に対する大きな宣伝を引き起こした。それは松岡が東京に戻った時に始まった。このようにして、松岡はシンガポールへの進出についてのドイツの要求を満たし、アメリカに対する決定的な立場をとる時間を持てなかった」。

さらにラムザイは伝えてきた、「政府では、積極的なグループと静観の立場をとるグループの間で深刻な争いが生じている。後者を平沼と海軍が指導している。スエズ運河が陥落した後に、海軍は進出を始め、この場合でも急がない。松岡はドイツ大使オットーに伝えた、この内部の争いについて。が、これを楽観視していた」。

尾崎は非常に重要な情報を得ていた。彼は知ることとなった、独ソ戦争の場合に、日本は中立を保つことを、最低で最初の一週間は。ゾルゲが伝えた、「しかし、ソ連邦の敗北の場合には、日本はウラジオストクに対して軍事行動を開始する。日本とドイツの武官は東から西へのソビエト軍の移動に注目している」。この情報は同じく最高指導部に送付された。

ラムザイのメモ

1941年5月19日

ドイツ大使オットーが伝えた、松岡が國務長官ハル（Хэлл）に電報を送った、アメリカとの相互関係の改善について。この電報で松岡は伝えた、ドイツの国力と勝利の可能性に関する彼の意見は、ヨーロッパへの出張後により確固となったと。

松岡は伝えた、2つの条件の下で、日本は交渉を開始することに同意すると：1）日本との合意を達成するために、



重慶にアメリカが圧力を示すこと。2) アメリカは全ての行動を控えること、日本がドイツに対抗する軍事行動と見なすことを。(日本は護送船団を軍事行動と見なす。) ドイツへの電報での質問に、松岡は返答を得た、ドイツはアメリカとの交渉に反対はしない、が、交渉はドイツに対抗しないように。松岡は声明した、彼は期待を抱いてはいないと、これらの条件でアメリカと条約が締結できるとの。

新しいドイツの武官は極めて悲観的な雰囲気であり、日本の裏切り行為を待っている、関わっている職務から解放するように要請した。オットー大使は期待を持っている、日米合意をアメリカが止めることが出来ることを。

決裁 HY : 「5カ所に配布すること」

5月20日、ハルダーが日記に書いていた：「松岡は予告した、彼はジグザクな道を進まざるをえないと。アメリカによってなされた日本への提案。フィリピンの現状。ヨーロッパの衝突に介入しない相互約束を与える提案(防衛だけ)」。直に、ドイツの武官クレチメルはベルリンへ自分の判断の入った報告書を送った、予想される「直接的日本の裏切り」に関する。ドイツの参謀本部は日本の動揺についてよく知らされていた、アメリカからの石油の輸入の禁止とイギリス封鎖の拡大によって引き起こされている、日本の興味に直接触れている、特に、日本の軍事力。6月4日、一般的な状況の下で、ハルダーは日記に記していた：「日本：政治の基本に一枢軸国の堅持。この政治の結果の特徴は明確ではない。内部での問題」。

無線で

赤軍参謀本部諜報局局长へ

東京、1941年5月19日

ベルリンからここへやって来た新しいドイツ代表団が述べている、ドイツとソ連邦との間の戦争は5月末に始まる。それで、彼らはこの時までにはベルリンに戻るよう命令を受けていた。

しかし、彼らはまた述べた、この年は、危険は通り過ぎると。彼らは述べた、ドイツはソ連邦に対して、150個師団からなる9個軍団を持っていると。一つの軍団は有名なライヘナウの指揮下にある。ソビエト連邦への進撃の戦略図は、ポーランド戦の経験を踏んでいる。

125号。ラムザイ

決裁 HY : 「\*\*\*\*\*」

\*\*\*\*\* ゴリコフ」

5月23日、ゾルゲに質問が送られた、ゴリコフの決裁に従った。返答は約1月後の6月15日に得られた。それでゾルゲは強調していた、彼の通報では「軍について明瞭に語った、軍団についてではない」と。これはどういうことなのか：通信における「フリッツ」の間違いか、或いは翻訳の間違いか？ 何故ゾルゲは質問に長い間返答しなかったのか？

これはラムザイの謎の内の一つである。これは英語で書かれた彼の電報の原文と比較することで謎解きが出来ると。実際において、6月22日、東部へのドイツ軍の集中に、同盟国と一緒に以下の軍が入っていた：「北」軍団(第18軍団、第16軍団、第4戦車軍団)；「中央」軍団(第9軍団、第4軍団、第3戦車軍団、第2戦車軍団)；「南」軍団(第6軍団、第17軍団、第11軍団、第1戦車軍団、同じく、ルーマニアの第3軍団、第4軍団、ハンガリーのカルパチア軍団)；独立ドイツ軍「ノルウェイ」とフィンランド・

カレリア軍一全部で8個ドイツ軍と4個戦車軍団、同じく同盟国の4個軍。

ゾルゲ博士の分析システムは仕事をし、成果を得続けていた。1940年12月から1941年春まで、尾崎は日本、ドイツとイタリアの経済の合意について伝えた。ドイツは交渉のために日本に代表団を派遣した。その目的は日本からソ連邦を経由して商品を得ることであった、軍事目的に必用とする：満州産の大豆、錫、ゴム、その他。しかし重要なのは天然ゴムであった。その在庫はドイツにはなかった。これに関して、イギリスとオランダ領インドは日本に警告を出していた、日本を経由してドイツへの可能な商品の供給について。

しかし、ゾルゲはドイツが日本から供給する商品に興味を持っただけではなく、その量と供給期間にも。日本からドイツに輸出される戦略商品の情報を、ゾルゲは彼の入手した他の情報の確認にも利用した。もしドイツがソ連邦を経由して商品の搬送を試みるならば、即ち、ドイツはソ連邦と戦争をする計画はない。本当にそうなのであるか？

この仮説の確証のために、ゾルゲは利用した、ドイツ参謀本部によって要求された生ゴム、タングステン、錫の供給を。これらの資源はアジアからドイツへ運ばれるものと予想された。ベネッカーからゾルゲは知った、1940年11月14日から軍命令について、ドイツの海軍（BMC）の出張の。この命令には、全ての手段が列挙されていた、海を経由しての生ゴムの移送の安全に関する、ソビエト連邦への計画された襲撃と陸上の輸送手段の利用の全ての可能線の喪失の後についてさえ。その他の中で、ドイツの全ての貨物船の日本への派遣が考慮されていた、その時点で太平洋の港に滞在している、天然ゴムを積載するために。

封鎖突破の船長や将校達の話で、ゾルゲは知ることとなった、これら戦略的に重要な輸送についての詳細を、ソ連邦に対するドイツの戦争計画の一部分を最近からなしている。

（思いだそう、ドイツ国防軍の最高司令部の命令第24で日本との共同について語られていたことを、1941年3月5日に出された：「天然ゴムの供給は戦争への日本の参加の後も継続されなければならない、ドイツにとっては死活に関わるほど重要であるので」。）ラムザイは結論を出した：もし、ドイツが戦略的に重要な生ゴムの供給を海路で保証するつもりであったならば、ソ連邦の領土を通り過ぎて、即ち、ソ連邦との戦争を計画している。それ以降の出来事が示しているように、このインジケーターは実質的には間違いであった：1941年5月に、ラムザイは知ることとなった、ソ連邦領土を経由しての天然ゴムの搬送は最小まで縮小され、ドイツ船に天然ゴムの積載を行っている。

電報で

赤軍参謀本部諜報局局長へ

東京、1941年5月30日

ベルリンがオットーに伝えた、ソ連邦に対するドイツの進撃は6月後半に始まると。オットーは95%信じている、戦争が始まると。確かな証拠を、最近に私は見ている、次のような：

私の町のドイツ空軍の技術部は早急に帰還する指示を得た。オットーは武官に要求した、彼はどの通報もソ連邦を経由して送っていないことで。ソ連邦を経由しての天然ゴムの輸送は最低まで縮小された。

ドイツの進撃のための理由：強力な赤軍の存在はアフリカにおける戦争を拡大させる可能性をドイツにさせない。なぜならば、ドイツは東ヨーロッパに大軍を維持する必要がある。ソ連邦側からの危険を完全に消滅させるため

に、赤軍は出来るだけ早急に追い払わなければならない。オットーがそう語っていた。

30番、31番、ラムザイ

翻訳 ダブロビンスキイ 23時00分、41年6月2日

ドイツ空軍の技術部について語られている箇所には、ゴリコフの手による下線が引かれている。ソ連邦を経由しての天然ゴムの輸送の短縮についてのゾルゲの言葉に、諜報局長の長は、明らかに注目をしていなかった。電報は情報局長ドロノフと指導部に書いて知らせられた、が、明らかに、報告されなかった。電報への注記から判断すると、ゴリコフの決裁による東京への質問は発送された、しかし、残念ながら、作者は情報を持っていなかった、どのような回答がグシェンコから得られたのかという。

この報告の直ぐ後に、ラムザイは次のようなことを送った。現在騒動となっていることを、それについて長年にわたって論争が静まっていないことを。

電報で

赤軍参謀本部諜報局局長へ

東京、1941年6月1日

独ソ戦争の開始が6月15日頃である予想はもっぱら次の情報に基礎をおいている、将校ショリがベルリンから携えてきた、そこから彼はバンコクへ出発した。バンコクで彼は武官の地位に就いている。

オットーが語った、彼はこれに関して直接のベルリンから情報をもらっていないと、ただショリからの情報を得ていると。

ショリとの会談で、私は確信した、赤軍に対する進撃の問題において、ドイツを引きつけている、大きな戦術的間違いが、ショリの説明するところの、ソ連邦が行った。

ドイツの視点に納得する、事実、ソ連邦の防衛線は、基本的に、大きな分岐のないドイツの戦線に対抗して引かれている、という事実は大きな間違いをしている。それは、最初の大戦闘において赤軍を粉砕することが出来る。ショリが語った、最大の大攻撃はドイツ軍の左翼で行われると。

136号、137号。ラムザイ

翻訳 ダブロビンスキイ

決裁 HY :「HO-3。\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\* ゴリコフ」

「最大の大攻撃はドイツ軍の左翼で行われる」との文章の所に、ゴリコフの手による大きな疑問符が書き込まれた。

6月17日、ラムザイの定時の電報が届いた、6月15日付けの。

赤軍参謀本部諜報局局長へ

東京、1941年6月15日

ドイツの急使が武官に話した。彼は確信している、ソ連邦に対する戦争は、多分、6月末まで延びると。武官は知っていない、戦争になるのかならないのかを。

私はドイツへの通報の最初の部分を見た。独ソ戦争が起こった場合に、日本は約6週間を要求している、ソビエトの極東部に進撃を開始するために。が、ドイツは見なしている、日本はより長い時間を要求する、というのは、これ

は陸と海での戦争となるので（文の最後は妨害されていた）。

138号。ラムザイ

翻訳 ログフ

決裁 HO-4 : 「H-1。\*\*\*\*\*」

赤軍参謀本部諜報局局長へ

東京、1941年6月15日

ソ独国境における第9軍団についての私の報道で、軍について明瞭に語っていた、が、軍団についてはなかった。アメリカの報道からわかった、ドイツはソ連邦との国境に、第一線に90万人を配置している、予備として約100万人を。

決裁 HY : 「\*\*\*\*\* グリコフ」

赤軍参謀本部諜報局局長へ

東京、1941年6月15日

アメリカは未だ日本に回答を出していない、中国における仲介の条件の詳細について。松岡はオットーに伝えた、彼は野村の通報を待っていると、交渉を行う準備についての日本の通告に対するアメリカの最初の回答の入手についての。

松岡は噂に非常に不安となっている、ドイツとソ連邦の間のあり得る戦争に関しての。彼は唯一の期待を感じている、ヨーロッパの戦争に参加することからアメリカの阻止とドイツ軍によるイギリスの占領によって、それによりソ連邦との戦争がないことを。

松岡はこれについてリップントロップに報告するようオットー大使に頼んだ。

決裁 HY : 「\*\*\*\*\* グリコフ。1941年6月18日」

注記 HO-9 : 「スターリン、モロトフ、チモシェンコ、ジューコフへ送付済み」。

遂に、6月21日の12時00分、モスクワでゾルゲからのもう一通の無線電報を受信した。

赤軍参謀本部諜報局局長へ

東京、1941年6月20日

東京にいるドイツ大使オットーが私に語った、ドイツとソ連邦との戦争は不可避であると。ドイツの軍事的優位性は崩壊の可能性を与える、最後の大きなヨーロッパの軍の。最初になされたように上手く・・・(妨害)。このため、ソ連邦の戦略的防衛体制は今日までより戦闘能力がない、ポーランドの防衛の場合より。

インベストが私に語った、日本の参謀本部は体制の問題を既に検討している、戦争の場合に採用する。

日米交渉についての提案と、松岡と平沼の間の内部抗争の問題は止まった、というのはソ連邦とドイツの関係についての問題の解決を皆が待っているのです。

143番。ラムザイ

マリンニコフが解読した、6月22日、14時35分

決裁 HY : 「情報局、パンフロフ」。「HO-3。登録へ。HO-31へ紹介、6月22日」

この無線電報は、6月21日、17時05分に諜報局第9部で得られ、6月22日、14時35分に解読された。その後上司に報告された。その職務をパンフィロフが勤めていた。決済から判断すると、指導部に報告されていなかった、執行者の注記から。ようやく6月23日に報告された。既に戦争が始まっていた。

この後直ぐに、もう一つの無線電報が届いた：「ドイツの武官の情報から、イギリスに対して今まで戦っていたドイツの一つの空軍部隊が、今ポーランドのクラコフに移動した。インコン」。

ソ連邦へのドイツの襲撃までの、ラムザイグループの活動の期間は、この電報で完了し、大祖国戦争が始まった。

ここで、最大の問題を提起してみよう：「ゾルゲと彼のグループは、何時、何処で、それだけの軍力で、ドイツがソ連邦に攻撃を仕掛けるのかを知ることができたのであろうか？」。

「何時？」という問いには、ラムザイに対して矛盾する証拠が持ち込まれた。3月に：ソ連邦に対する戦争は「現在の戦争、即ちイギリスとの戦争が終了次第」始まる。4月には：「ソ連邦とドイツの間の戦争は何時でも始まり得る、東京に松岡が帰還した後に」。

5月初めには：「5月に、或いはイギリスとの戦争の後に」；「ソ連邦での種まきの終了後何時でも」；「ドイツとトルコの交渉時—もしソ連邦が何らかの障害を作り出すならば、ドイツの要求のトルコによる採用の問題において」；5月半ば：「5月末に始まり得る、が、今年危険は回避されるかも」。さらに確かな情報が5月末から届くようになった：「ソ連邦に対するドイツの進撃は6月後半に始まる」。この際、オットー大使の意見が引用された、「戦争が始まるのは、95%確実だ」。しかし、6月半ばに、ゾルゲから再び情報が届いた、彼の先の通報と矛盾している：「ソ連邦との戦争は遅れた、多分6月末まで」。同時に、武官クレチメル（どこの国？）の意見を引き合いに出した、彼は戦争になるのか、知らなかった。

明らかに、ラムザイは、諜報局と国家保安人民委員部の他の情報源と同じように、ソ連邦へのドイツの襲撃期日を正確に断定することが出来なかった。それ以上に、ゾルゲは、幾つかの他の情報源（コルシカネッツ）と同じように、戦争の間もない開始の間違いない兆候を見定めた、ソ連邦領土を経由しての天然ゴム輸送の停止。その上、これを簡単に確かめた！ しかし、この情報をゴリコフは無視した。ラムザイが示した他の指摘は注目されなかった：5月に東京からドイツに戻る、ナチスの半官紙「フォリキシェル・ベオバフテル」の特派員ウラフへのオットーの提案；ドイツ武官へのオットーの要求、彼がソ連邦を経由して何の重要な情報を送らなかったために；日本にいるドイツ代表へのベルリンからの命令、5月末にドイツに戻る事との。

明らかに、これらの情報を検査することは出来そうもない、これ故、情報は同じく注意を引かなかった。

ラムザイによる判定は相対的に正しかった、「種まきの終了」のような指摘の。他の諜報員達がこれを指摘した。しかし、時間は過ぎた、種まきの仕事は大分前に終了した。が、ドイツは戦争を始めなかった。

他方面から、証拠は完全には確定されなかった、戦争が不可避になっているとの。もし

ソ連邦がドイツとトルコの交渉に介入するならば。この秘密の交渉は5月から6月に行われた、トルコにいるドイツ大使フォン・パペンによって。トルコ・ドイツ条約の締結をもって6月18日に終了した。スターリンはこの時期極めて緊張していた、ヒトラーを挑発しないために、しかし、これは助けにならなかった。

武官のためのドイツの急使の情報－戦争は6月末まで延びたという－は全くのデマのように思われた。注目するのは興味を引く、書類がどのように証言しているのか、戦争前日の実際の状況下で、軍と軍管区を指揮するソビエトの合同司令部、軍の集中と展開、前線の準備、大砲の発火地点、飛行場と集積所のカモフラージュ、その他。敵の襲撃は6月前半より早くはないと見なされた。

「何処？」について、ゾルゲー全ての諜報員の中でたぐいまれな－は相対的に正しい回答を得ることが出来た：「最大の攻撃はドイツ軍団の右翼で行われるであろう」。この際、彼に価値ある情報をもたらされた、ソビエト連邦への攻撃の戦略図はポーランドに対する戦争の経験から採用された（これは他の情報源からの資料で裏付けられた、特に「アリタ」からの）。結局、ゾルゲーだけが警告をした、ドイツは「大きな戦術上の間違いの」事実を利用するつもりであると、労農赤軍の司令部が犯した、「大きな支線のない」密な防衛線の存在、そして、縦深配置の不十分。

研究者達は主張している、実際において、この通報はデマであったと、シヨリがゾルゲーに故意に伝えたい。この問題を詳しく検討してみよう。

全く明らかである、第一に、ゴリコフはわからなかった、ソビエトの防衛戦における「支線」の不在の報告を（残念ながら、著者達は電報の原本を手に持っていない、これ故、判断することは出来ない、翻訳において間違いがあったのかもしれない）。実際において、電報のこの部分は全くわからない：どのような支線について話しているのか？ ハルダーの1941年5月22日付けの日記の記述が、この問題をある程度説明している：「ベストベルグ少佐（飛行大隊参謀部の空撮部局）：ロシアの国境警備地区上空で飛行大隊が撮った写真の開示。国境線に沿って防衛の強化へ大きな努力をしていることは明らかに見れる（特に、対戦車壕の一部）。連絡用ケーブル線のための数多くの塹壕は密な防衛線の存在を証明している。航空写真によって、国境を堅持するというロシアの決意についての我々の意見は裏付けられる。

シリツクネフト少佐（部局「外国軍－東方」）：ドイツ国境におけるロシア陸軍の集中についての報告。軍団は極めて前方に進んでいる」。

このように、「大誤算」が以下の点にあった、軍力の戦略的展開の考え、西の戦略的方向への軍の確実な集中の構築は大いに攻撃の目撃を反映していた。ソビエト司令部では軍は前線で2800kmまで、縦深500kmまで展開された。そのような戦略的軍団の広範囲への分散は時節にかなった展開と確りした戦略的相互関係を保証しなかった、敵に各個撃破することをさせた。

全体として、戦争開始時に、西の軍管区の司令部は進撃の防衛の軍集中をすることが出来ていなかった（そのような状況をゾルゲーが書いていた）、完全な軍事態勢に赤軍を配置するにはそれなりの時間を必用としていた。

戦争の初期時、防御軍の108個師団のうち、侵略者への軍事反撃を示したのは不完全に総動員された約40個師団だけであった。それらのごく僅かだけが国境の防衛線

で予定された計画に従事することが出来た。西国境軍管区の軍団（約58個師団）は全国境線に沿って展開していた。国境に直接に配置されていた部隊は、戦争の初期時、敵の大砲と敵の空軍の攻撃の目標地帯にいた。

赤軍司令部はしなかった、とにかくドイツ参謀本部が恐れるようなことを。特に、それについてロスベルグ少佐が警告をしていた、自分の作戦計画で、国境から軍を引き離さなかった。考えは許されなかった、敵は軍力と手段で非常に優勢であり、防御軍に打撃を与えることが出来るとの。ソビエト司令部の計画では、可能性を考慮していなかった、敵による主導権奪取の、長い防衛戦にわたる軍の行動の、その300km～500kmの深さにわたる後退を。結果として、ソビエトの58個師団はドイツの120個師団の攻撃を受けることとなった。それは直ちに深い縦深を破った、全くの自由なところへ出て行った。実際において、ゾルゲが警告したことが起こった。赤軍の国境帯の集中は「第一撃」で粉碎された。

それにもかかわらず、注目してみよう、ラムザイは少し正確ではないが軍事的に本質を定式化した、赤軍側の「戦術上の大誤算」を。或いは、多分、クラウゼン（ラムザイの日本にいた無線士 \*）が無線電報文を不完全に送信した？ 疑問・・・だらけである。

今、ショリの情報を詳細に吟味してみよう、「右翼からの最大の攻撃」についての。例えば、サハロフが書いている：「このように、最大の軍力を持った攻撃はドイツ軍の左翼で始まるであろう、プリバルチクの東プロシアから。ここに、「北方」軍団が配置されていた。この軍団はドイツ国防軍の最強ではない、ゾルゲが伝えていたように。逆に、最も弱かった軍団である。これが第一である。第二に、実際において最強の攻撃を行う場所からは、ここは大分離れている。その代わりに、ちょうど良い時に、バルバロッサ作戦に従って、赤軍の大軍団を包囲するべきであった。この情報は客観的に突き動かした、そのような軍団移動への我らの軍事的-政治的指導部を、ファシストの思惑の実現のために非常に期待されていた」。

さらに：「我々（サハロフ \*）の本では、描写する傾向が出来上がった、戦争が近づいているとの彼の情報が信用されなかったという意識によるゾルゲの精神的ダメージを・・・ここにゾルゲの悲劇を見ることができる。ファシストの戦いに自分の人生を全力で献げた諜報員そして人間としての悲劇はここにあるのであろうか？ 私は思う、否と、そうではないと。我が国のために、死の危険を持って情報をモスクワへ移送するために、彼は役割を努めた、それを希望していなかったが。個人的に、ゾルゲはこれに罪はなかった。しかし、彼によって与えられたこれについてのデマの危険性は小さくはなかった。矛盾しているかのよう、モスクワでは信用しなかった、ゾルゲは悲劇ではなく幸福の状態にあったことは。ゾルゲはファシストに価値ある情報を与えた、が、その情報は後になって国に悲劇をもたらさなかった、これ故、抹消されない、彼は2番目の祖国のために素晴らしい仕事をしたことは」。

ここで、サハロフに同意することが出来るであろうか？ もし、バルバロッサ作戦の計画をもう一度注意深く読むならば、1941年6月22日の状況図を見るならば、明らかに見て理解することが出来る。ショリが言おうとしていたのは、プリピャチ湿地での北側で主攻撃が行われると。ドイツ司令部の目論見は、フランスに対する作戦行動と似たものであった。当時、ダンケルクの海岸に沿った電撃戦によって、ドイツはフランス軍の主力

とイギリスの遠征軍を分断することが出来た。バルバロッサの主課題は次の点にあった、北方軍団と中央軍団の行動によって、プリバルチクとレニングラード地区のソビエト軍を分断し、消滅させることにあった。「それらの拠点のロシア艦船を奪取しながら」。即ち、この目的を持って、ベロロシヤのソビエト軍の崩壊とスモレンスク地区における崩壊後、中央軍団の北への可動の集結の「急転回」を予定していた。北方軍団との協力の下でレニングラード方面に進出するために。疑いは生ずることはない、即ち、これがショリが言おうとしたことであつたと、ドイツ軍の左翼について話した時に。

しかし、これは断固として矛盾した、諜報局に届いた全ての情報だけではなく、ソビエト軍の確りし複雑で継続されている戦略的展開とも。これはソビエトのボス（スターリン\*）の意見と矛盾していた。彼は語った、南西方面が最も危険であると。すなわち、これ故に、ゾルゲの報告はゴリコフによって疑いがあり、デマであるという評価がなされた。もちろん、指導部には報告されなかった。

今では、この「赤軍の大誤算」は良く理解され、詳細まで研究された。しかし、当時、ゴリコフはこれを理解しないで、ラムザイに説明を要求した。彼の情報は余りにもあり得なかった。ゴリコフはこの権利を持っていたのか？ もちろん。考慮さえ入れて、ゾルゲグループはその時期には人並み外れた努力をしていたことを、一面では手に入れた情報を追跡し分析する、他面では胸襟を開かずに。グループを囲む輪は絶えず縮小してきていた。ゾルゲはこれを感じていた。

しかし、ゴリコフの質問に対する回答はようやく7月3日に届いた。ドイツ大使館で、皆が「ドイツ国防軍の勝利の行進」について話をしている時に。自分の回答で、ラムザイは明らかに憤慨を持って書いていた：「今や、貴方に回答するのは遅すぎる、右翼の攻撃と若干の戦術的間違いの関係についての質問に。ショリが当時話した、最初の主攻撃はドイツによる赤軍への、その右翼から。ドイツは完全に確信していた、赤軍の主力は、強力な攻撃のために完全な可能性を与える線に対して反対の方向に集中されていた。ドイツは非常に恐れた、主攻撃の通報に従って、赤軍が若干の距離後退することを。敵の力を調べ、主攻撃の方面に何らかの対策を講ずるために。ドイツの主目的は、赤軍を包圍殲滅すること。ポーランド軍で行ったように」。ゴリコフが無線電報で、明らかに、若干の怒りを持って書かれていた：「H O - 4、報告せよ、彼はどれだけの時間右翼についての我々の要求に返事をしなかったのか、3 / 7 - 4 1（1941年7月3日\*），ゴリコフ」。

このところに、同じくラムザイの謎の一つがある、何故彼は長く沈黙したのか？ 彼の情報に対する不信に憤慨したのか？ クラウゼンが話した：「私はリヒャルト（・ゾルゲ\*）の所に行った。我々は奇妙な無線電報を得ていた。その内容をもう逐語的には思い出せない、それでは語っていた。中央に提示した襲撃の可能性は信じられないと。リヒャルトは我を忘れた。彼は飛び起きた、何時もの通りに、非常に興奮した時に、そして叫んだ：「これはあんまりだ！」彼は良く熟知していた、ソビエト連邦がどれだけの損害を受けるのかを。攻撃開始に対する準備を適宜にしていなければ」。予想することだけが出来、ゾルゲの反応をクラウゼンが極力和らげていたことが（実際において、中央からの無線電報の内容がどんなものであつたのかは知られていない）。しかし、これが侮辱であつたならば、ゾルゲは正しくはなかつた。余りにも多くのものが図面上に提示され、ソビエト指導部と国民に対する正しくない戦前の評価が回り回っていた。ここに侮辱まではな



かった、それどころか、ところによっては、諜報活動には、鉄の規則が存在している、情報の確認そして再確認の、と「健康な懐疑論」の原則。

同じくわからない、何故、7月3日付けの無線電報で、ラムザイが極めて詳細に問題について説明したのかが、右翼からの攻撃とソビエト司令部の戦術的間違いの関係における。ラムザイが6月1日になしていた以上に。予想することが出来る、ラムザイはあり得るデマに対する責任をとりたくはなかったことは。多分、ラムザイには何らかの疑念があった、処理の真実性さだけではなく、情報の性質においても。ショリとラムザイは長い密接な関係にあった（彼らは第一次世界戦争時、同じ学生大隊で戦っていた）。ショリが彼に伝えた、ドイツ参謀本部で聞いたことを。そしてバンコクに去って行った。オットーはバルバロッサ作戦については明るくなかった公算が大であった。これ故、誰もショリの情報の確かさを保証することが出来なかった、或いは「大きな戦術的誤算」の本質を説明することを十分にわかっていた。これ故、ショリの情報を確認し、或いは反駁することは、諜報員は出来なかった。残されていたのは事態の進展を待つことだけであった。

同じく注目に値する、ゴリコフはラムザイの「不規律性」をめぐるスキャンダルを誇張しなかった、彼の回答の遅延に関する、彼を、東京からの重要な情報が指導部に送られなかった、という責任を問うことができた。これをどのようにするか、ゴリコフには良くわかっていた。「主人」（スターリン \*）が反論に耐えられないぶん、彼は直ぐに他のものに責任を転嫁できた、口実に：「何故論争をしなかった？ 何故自分の正当性を納得させなかったのか？ 不安だったのか、そうなのか？ 君はどんなコミュニストなのか？」。この時、スケープゴートは必要であった、今までになく。ゴリコフにはこれをする暇がなかった一軍使節団の長として彼（ゴリコフ \*）をイギリスに派遣した。これ故ゾルゲを「許し」、日本に関する情報を要求した。

同じように、サハロフの主張は批評に堪えない、右翼についてのラムザイの情報は「具体的に我々の軍事・政治指導部をそのような再編成に突き動かしたという、それは非常に望まれていたことであった、ファシストの考えの実現のために」。とにかく、何の再編成もする必要がなかった。そのとおり、これはそのような条件下では不可能であった。もし、ゾルゲの情報が注目されたならば、次席の戦略軍団、特に、第19軍団と、第16軍団、はウクライナではなく、スモレンスク方面に集中することが出来たであろう。

ジュエコフが自分の回想録に書いている：「・・・戦争の初日には、第19軍団、第16軍の部隊が当たることになった、以前にウクライナに集中させておいた、ごく最近にそこへ集中させておいた、西部方面に移動し西部戦線での戦闘を考慮に入れていた」。この状況は疑いなく、西部方面における防衛行動の手段に影響した」。それについて将軍は特記していた、「我が軍の鉄道移送は様々な理由で中断を伴って実現された。到着した軍隊は完全な集中なくして屢々配置に入れた。否定的に語られた、部隊の政治的精神的状态とその戦闘的安定性において」。

実際において、次のようなことが起こった。戦争の5昼夜目に、ソビエトの総司令部は最終結論に至った、ドイツの主攻撃は西方面で行われた、南西方面ではなく。この方面における敵の深い侵入は、戦略的集中計画において重大な変更をなすことを要求した。従って、軍の大規模な再編成を。このようにして、1941年6月27日、第16軍団は総参謀部の指令を受けた、ベルデチェフ、プロスクロフ、スタロコンスタンチノフ地区から、



ていた。ドイツの思惑、国境紛争の特徴はここでは完全に間違ってみられていた。つまり、戦争開始時に、約百万の力を攻撃に向け、残り（90万人）は待機させる。特に、予備軍には師団の4.5%（全軍総数は460万人）。差は？ どんな？ ドイツは第一撃に全てを注いだ。すなわち、そのようにして電撃戦を保証した。が、ゾルゲは？ 強烈な第一撃で、電撃戦の司令部による、急速で深い突破。彼の情報から、逆に、明確である、攻撃力は段々と増大する、戦いに予備の投入に従って。この呪法は何の役割を果たすのか？ 読者自身がこの問題に解答してみよう。スターリンはゾルゲを信用していたと創造してみよう。意外な出来事が5日後に彼を待っていた！ 残念ながら、我々には確証はない、スターリンはゾルゲを信じていなかったという。これに関しては、多分、有名な最初の命令が証言している、ドイツ軍の襲撃の際における軍事課題を示した。

しかし、語っておく必要がある、サハロフは自分の判断に非常に偏向していた。ある非常に重要な瞬間を幾つか見落としている。第一に、彼はゾルゲの情報を間違えて引用している。「アメリカの通報」に関しての重要な言及を無視して、ゾルゲが引用していた。これは諜報員の正常な仕事であった、中央に情報を伝えるという、彼が公然の或いはエージェントの情報源から得た。当てにしながら、中央でそれらを他の情報と比較し、究明することを。

第二に、スターリンはゾルゲの情報を信用したという事に関しての一節は、一般に批判に耐えなかった。無線電報の決裁から明らかなように、この通報は一般的に指導部に報告されなかった、諜報局内部での登録のために残された。しかし、それがスターリンに報告されたと予想して、スターリンはそれを信じたであろうか。彼は何も信じなかったのも、イギリスやアメリカの情報源からのものを。

高まり完全に根拠のある興味を引き起こした、ラムザイの情報は。ソ連邦に対する日本の進撃の準備段階についての、戦争が始まった場合の、中国における仲介についての日米交渉の経過について、ソ連邦に対する戦争の開始のドイツの意向に関する日本の内閣の関係について。この情報は直ぐに、上層部に報告された。

このように、3つの基本問題：「何時？ 何処？ どれだけの軍力？」 ゾルゲは十分に信用のおける回答を与えることが出来た：「6月の後半、左翼で150個師団」。ゾルゲは見る事ができた、「敵の中に、勝利の可能性があることを」、それについて古代中国の司令官孫子が書いていた。彼の情報は素晴らしい結果を与えたであろう、もし指導部の決定と作戦に生かされていたならば。しかし、その情報は他の情報の中に紛れてしまった。特に、デマ情報の中で。デマは洪水のように諜報機関に流れ込んできていた、外交官や他のチャンネルを経て。これ故、スターリンは直ぐにすることが出来なかった、持っていたはずの無敵の手段を講ずることが。

これ以外に、ゾルゲの疑いのない貢献は、非常に重要な事実を見極めたことである：ソ連邦へのドイツの襲撃はほぼ確実であった、というのは、ヒットラーと彼の将軍達は2つの前線で戦うことが出来ると信じていたからである：イギリスと、そしてソ連邦と。ドイツ軍部のこの確信は赤軍の戦闘能力の異常に低い評価に基礎をおいていた。数週間で崩壊されるであろうと見なされていた。ラムザイの情報に納得する、ソ連邦へのドイツの進撃の不可避は、ソ連邦の資源と穀物を略奪しようというヒットラーの意向によるものである、ヨーロッパにおけるドイツの支配を保証し、自分の背後の安全を図る、アフリカにおける

軍事行動の拡大のために、スエズ運河に進出するために。

今日の立場では、この情報はユニークなものである。ゴリコフを認めてやる必要がある、彼は遅れることなく彼の上層部に送付するように指示した。彼はスターリンの意見を知っていたにもかかわらず：ヒトラーは2方面で戦争はしない。あり得る、「主人」の怒りの反応を危惧しながら（ドイツ將軍達の赤軍の戦闘能力の低い評価）、ゴリコフはこれを通報から削除するように指示し、単に登録させることにしたことは。

ゾルゲはどう感じたのであろうか？ ソ連邦へのドイツの襲撃を知った時に。これは彼にはショックであった、彼は確信していたにもかかわらず、これは起こる、これについて彼は警告した。ゾルゲは帝国ホテルのバーに座り、黙ってウイスキーを飲んだ、陰鬱な気持ちになって。突然彼は飛び上がり、よろめき、バーにいる人たちを見回した、アメリカ人、イギリス人、フランス人だけであった。ゾルゲは机にもたれかかり、英語で大声で叫び始めた。ヒトラーは犯罪者だ、なぜなら彼はソ連邦を襲撃した、スターリンと締結した不可侵協約を破って。客達は、彼の叫びを聞きたくない、身振り以示した。エルビン・ビカルドー当時ドイツ大使館職員一の言葉によれば、彼は度々このバーにやって来た、この場面に出会わせた。彼はゾルゲに近づき、脇に座り、小声で語った：「リヒャルト、注意せよ。回りはアメリカ人、イギリス人、フランス人だけだ、バーには憲兵隊の職員もいるかも」。ゾルゲが答えた、「くそ食らえ！ 酒をつけ」、彼はバーテンに告げた、が拒否された。

リヒャルトは罵詈雑言を吐いた。が、椅子に座り続け、愚痴をこぼした：「この戦争は私をすっかり参らせた・・・参らせた！ 全ての豚が泣くだろう・・・」 夕方近くになり、彼はぱっと立ち上がり、フラフラしながら電話に近づいた。最初に、オットーに電話をした。「この戦争は負ける！」—あっけにとられている大使に電話口で叫んだ。その後で、ビリとアニテ・モルに電話をした。悲痛な調子で語った：「私は語る、ヒトラーはロシアで自分の歯を折ると！」 モーリ夫婦はオットーに電話をし、憤激した批判を交わし合った：もちろん、ゾルゲは酔っていた、が、ここで彼はまことにやり過ぎであった。

ゾルゲの日本の愛人である石井花子の思い出によると：「私はゾルゲの側に座り、彼の背中をさすった。彼の顔を見ると、彼が泣いていることがわかった。泣いているゾルゲをどうしたらよいのか私はわからなかった。私がびっくりして、どうしたのかと彼に聞いた。だと、彼が返事をした：「私には友人も親友もない。辛い」。その時、私は思った、彼の仕事は人を一人ぼっちにさせていると」。

6月26日、「インソン」(? \*)が中央に無線した：「困難な時期に、我々の要望を述べる。我々はここで確りと仕事をしている。松岡はドイツ大使オットーへ語った、疑いはない、直に日本はソ連邦へ進撃することは」。この通報の最後の部分は、国家防衛委員会(ΓΚΟ)、防衛人民委員会と総参謀本部の長へ、急いで配布された。

## 第9章 極東での大勝利

人々にその力に応じて配置する者は、人々に戦いへ行くように強いる、木と石のように転がるように。木と石の性質は次のようなものである、地面が平らな時には、木と石は止まっている；地面が傾いていると、木と石は動き出す；木と石が四角形な時には、木と石は留まっている；木と石が丸い時には、木と石は転がる。

孫子 戦争論

### 「虎穴には入らずんば、虎兇は得ず・・・」

1941年6月22日のソ連邦へのドイツの進撃は、日本の内閣にとって予想もしていなかったことであった。4月16日に既に、大島大使はベルリンからドイツが準備している進撃について全くの明白さを持って伝えていた。これについては同じく、他のヨーロッパの国々に居る日本の武官も伝えていた。4月28日、大島は再度自分の電報で、自分の以前の態度を明瞭にし、同時に忠言した：「独日戦争（？ ＊）の開始後、南方に向かい、まさにそれによりドイツの間接的援助を示すこと。その後、ソ連邦内の国内の無秩序を利用して、軍事力を適用し、ドイツとの同意の下でソ連邦の問題の解決を行うこと」。

5月28日、リップントロップが松岡に伝えた、ドイツとソ連邦の間の戦争は不可避であり、ドイツ軍の展開は終了し、ソ連邦は2、3ヶ月で崩壊するであろうと。結局、6月6日、大島は東京に電報を送った：ヒットラーはリップントロップとの会議で、断固として語った、ドイツはソ連邦に対して侵攻の意図を持っている、「ロシアは数ヶ月で大国としての存在を止めることになる」。同時に、大島は伝えた、日本がソ連邦との戦争に参加することを希望していると。

この電報は帝国参謀部の政府調整委員会の会議で検討された。会議は直ぐに招集された、衝突が起きた場合に対する日本の立場を決めるために。しかし、最高司令部の代表と松岡は、ドイツとソ連邦の間のあり得る戦争についての予想を徹底的に否定した。ここにおいて、近衛、木戸、影響のある軍人達は、南方への日本の以前通りの進出計画を維持することを主張した。

イギリス外務大臣イーデンへの、東京に居るイギリス大使  
の奪取した電報に関する政治諜報の報告

1941年6月24日

「・・・」

ドイツ大使は松岡に強い圧力を加えた、ドイツ側に立って日本の積極的な発言を彼から得ようと努力しながら。彼は沿海州を日本に約束している、彼がそう考えている。日本の参加は軍事的発言で表現されるべきか？ 或いは、ただ手段で、補給船のウラジオストクへの入港禁止の；未だ明かではない。

ドイツの陰謀に対する反抗のために、イギリス大使は計画を提起する、イーデンに個人的手紙の送付を、松岡宛に、ソ独戦争時に厳格な中立を日本が遵守するために、論拠を持って。

それと共に、ソ連邦に居る日本大使立川善継がモスクワから伝えてきた、近日のうちには、独ソ戦争の可能性は少ないと。

戦争開始後、6月29日の立川とモロトフの定例会談で、モロトフが確認をした、モロトフが、つまり、彼のヨーロッパ旅行時に全く知らせてくれなかった、ソ連邦とドイツの間に戦争が起こることについて。即ち、人民委員は付け加えた、そのような計画の存在について、松岡は全く蚊帳の外に置かれていたと。

これについて立川が答えた、これは彼には全く奇妙であったと、とにかく事実が全く明白であったので、4月5日、ベルリンを去った松岡はそれについて何も知らされていなかった。実際において、立川が付け加えた、4月末に、ベルリンに居る大島大使にこの考えについて若干臭わせていた、が、その時、立川は気がついた、東京ではこれを信じていないことに。そのあと、立川は語った、もし日本政府がソ連邦との関係におけるドイツの計画について知っていたならば、事件までほんの2、3日前に。彼によって語られた考えの確証において、日本はそのようなことについて通報されていなかったという、更に語られた、最後の外交急使が6月20日、東京からベルリンに派遣された。立川は自分の秘書2人を休暇でベルリンへ派遣した、ほら「彼らはそこで今は長居した」。結局、大使は追加した、6月21日、彼はイランに大使秘書と武官を派遣した、彼らについてはこの数日間何の情報もない。このようにして、立川は結論を出した、日本政府は明らかに正しく知らされていないと。

立川がモロトフに話したことは、もちろん、外交上の仕事であった。外交が必用とされなくなったところでは、日本大使は一本気な軍人氣質であった。既に7月5日、彼は、例えば、東京に伝えた、「赤軍は勝利への確信を失った、モスクワの陥落はただただ時間の問題である」。さらに彼は推奨した、「極東問題を自主的に解決することを」。

どんな場合にも、一つが明らかである：6月20日、尾崎がゾルゲに伝えたように、日本の参謀本部は既に戦争の場合に日本のとるべき立場についての問題を審議していた。

6月23日、ゾルゲはモスクワから指示を受け取った：「日本政府の立場についての貴君の資料を伝えるように。ドイツとソビエト連邦の間の戦争に関しての。局長」。

#### ハルビンからの政治諜報の通報

1941年6月27日

ソビエト連邦へのドイツの侵攻に関して、この報道に日本の最初の反応が記入されている：

この地の軍上層部は沈黙している。諸々が語っている、西における事件の進捗を待っていることを。ハルビンにいる我々の情報源からの通報によれば、ドイツは日本に対して断固として要求した、4日以内に枢軸国としての自分の立場を決めるようにと。情報源が伝えてきた、日本はモンゴル人民共和国の国境に軍と砲兵隊を集結し始めた。戦争の準備を固めていると。日本の住民の中に、ソ連邦との戦争の発生の危機感が高まった。不確かなデータによれば、日本の予備役の招集が進んでいる。

政府と帝国大本營の調整委員会の会議が6月15日に始まった、7月2日まで継続して

行われた。この会議で、ソ連邦との戦争に主要な案内人の立場を松岡がとった。彼は最初から、政治的解決手段に固執した、ソ連邦に対する遅延なき行動を利用して。

6月22日は、松岡はソビエト連邦への襲撃の提案を天皇に述べた。これは南方への襲撃に対する拒否を示しているか、という天皇の質問への回答として、松岡は答えた、「まず、ロシアを攻撃しなければならない」。このために、南方への進撃を少し遅らせることを提案した。「北から始め、その後南へ。虎の檻に入らなければ、虎の子を引きずり出せない。決断が必要である」、—松岡が語った。

1941年6月23日、松岡と日本に居るソビエトの大使スメタニンとの会談が行われた。スメタニンは独ソ戦争に対する日本の立場を外務省に正した。

スメタニンの日記に記されていた：「・・・私は松岡に基本的な質問した、このソ独戦争に関する日本の立場についての。日本は中立を守るのかと、ソ連邦が守ってきている、今年の4月13日にソ連邦と日本の中立条約にしたがって。

松岡は直接の回答を避けて語った、この問題に関する彼の立場は、この年の4月22日に述べた、ヨーロッパから戻った後での彼の声明中で。松岡は強調した、3国同盟が日本の基本的な外政であると。現在の戦争と中立条約がこの基本と3国同盟と矛盾するならば、中立条約は、”機能しなくなるであろう”。しかし、日本の最終的立場は明日の閣議の後に発表される。

これに引き続いて、松岡は詳細に話した。彼はそのような展開を期待していなかった、ドイツの立場を擁護していたと、特に、強調しながら、モスクワからイギリス大使クリップスの退去と関係して、彼に思いが湧いたと、”アングロサクソnbロックとソ連邦の陰謀について”の。

さらに松岡が語った、今は彼には難しい”誰が正しく、誰に罪がある”と理解し、説明することは。彼は再び全ての資料に目を通す、特に、モロトフの声明に、その後、自分の判断をするであろう。

私はモロトフに、現在の事実の分析に客観的であるようお願いした、活動家らしく、ソビエト人民はソ連邦と日本との友好関係の改善の支持者と見なしていたし、見なしている」。

東京における最もドラマチックな出来事が6月25日から始まった。調整委員会の会議で、松岡は断固とした攻撃に転じた。もし彼がドイツがロシアに戦争を宣言することを知っていたならば、彼は中立条約を締結することはなかったと述べながら。ドイツとの関係において、より友好的な立場をとることを好んだと。陸軍大臣東条は彼に反論した：「極東軍の西方への移動は明らかに、ドイツへの強力な作用を示している。が、もちろん、これに関して日本は無駄に生きてはならない。我々はドイツを完全に信用してはならない」。海軍大臣及川は彼を支持した、海軍はアメリカ、イギリス、ソビエトと同時に戦争を行うことは出来ないと述べて。「考えてみよ、もしソビエトとアメリカが一緒に行動するならば、アメリカは海軍と空軍基地、無線所、その他をソビエト領に展開する。考えてみよ、もしウラジオストクに配置されている潜水艦がアメリカに提供されることを」。及川は断固としていた：ロシアに攻撃を計画してはならない、ロシアを挑発してはならない、南方への進撃の準備が必要である。

当時、松岡は日本の国家的興味に取り組むことを決めた。彼は語った、ドイツは勝利し、

ソ連邦を占領する、が、日本は勝利の果実を利用できていない。ソ連邦に攻撃を仕掛ける必要がある、敵の軍がシベリアから西に移動した時に。

6月26日、調整委員会の会議が再開された。軍の参謀本部司令官杉山が、日本にとって重要なのは北か南かという、松岡の質問に答えて語った：「ここにおいて重要性に差はない。状況がどのように進展するか、我々は見守るつもりである」。杉山を彼の次官である塚田が支持した：全てが状況に依存している。というのは、我々は同時に両方面で行動することは出来ない。現時点においては決定することは出来ない、第一撃を何処で行うかを、北方、或いは南方を。ここにおいて、塚田は特に強調した、日本の選択はドイツが直面している状況ではなく、「特に好都合な条件」のその評価に依存するであろうことを。彼は次のように説明した：「もし、ドイツが条件を特に都合が良いものと見なしたとしても、条件は我々に都合が良いとは限らないであろう。我々は進軍しない。逆に、もしドイツが条件を不都合であると見なすならば、我々は進軍する、もし条件が我々に好都合であるならば」。

内務大臣の地位に就いている平沼男爵が思慮深く発言した：「武力の適用無しに戦争に入り込んではいけないのか？」松岡がこの考えに飛びついた：もちろん、戦争への参加と武力の行使の間に、一定の期間がある。

6月25日、諜報局は、東京に居る武官グシェンコから電報を受け取った。報告では、日本人の世論の分析がなされていた。ソビエトの武官の判断によれば、日本人にとって、ドイツのソ連邦への攻撃は全くの予想外であった。他面では、意見が広く知れ渡った、日本はソ連と戦争をすることはないと。とにかく、これから日本は何も得ることはないの、ドイツのために戦争することは、馬鹿だけがすることであると。日本には、ソ連邦とは経済的に有利な関係にある。中国での戦争に皆が疲れ果てていた。同時に、グシェンコはドイツの宣伝力の大きさに注目していた。印刷物で展開されている「ドイツ軍の勝利」について。多くの日本人はそれを信じていた。

しかし、電報の最も大事なものは次のことであった（ゴリコフはこれを欄外で強調していた）：「政府は既に3日間会議をしている、結論を出すことが出来ていない、戦争に関する関係の問題について。噂がある、彼らは3週間引き延ばし、戦争をよく見たがっていると、戦争がどのように進むのかを。政府内では、今、非常に複雑な争いが進んでいる。親イギリス派と親アメリカ派はソ連邦の敵しい敵であった。が、チャーチルの話の印象では自分の視点を変えたようであった。政府の立場を定めることは今では非常に困難となった。国民は信じている、決定は為されるであろうと、戦争には進まない・・・ドイツはイライラしている、政府のはっきりしない立場に不満を持って。日本を戦争に引き入れようと全力を傾けている。ファシストによる中傷とデマの全ての手段が始動した」。しかし、結論として、グシェンコ（在日ソビエト武官 \*）が書いていた：「政府を信用してはいけない、政府は最もあり得ない歩みをとるものである。内政状況の分別ある考慮にもかかわらず」。グシェンコの通報は示していた、東京にいるソビエト武官は十分に良く情報を提供されていた、出来事について、日本の指導部で起こっている。



ソ独戦争の開始と関係して、日本政府の外政は多分次の通りとなるであろう：

日本は現在、ソ連邦に対して活発な意向を持っていない。戦争を宣言し、ドイツの立場に立つような。この政策が将来どのようになるか、わからないにもかかわらず、どう考えても、近日にはそのような意向はない。ソ連邦との関係において、何の要求も提示されないであろうし、自分の明確な関係も発表されないだろう。日本は戦争の進展を黙って見たがっている。言うならば、そのような日本の政策は次のような理由で説明される：日本はソ連邦との戦争の準備が出来ていない。戦争を急いでではない、とにかく、もしこれをする必要があるとなれば、これが遅ければ遅いほど、日本はより少ない損失を被ることになる。

最近、日本では、多くのことが語られている。3国軍事同盟の見直しについて、アメリカとの戦争の危険性が高まるにつれて。5月30日、松岡は自分の外政についての話しの中で認めた、日本においてこの意見は十分に強く広まっている。もし日本がソ連邦との戦争を開始するならば、アメリカは日本との戦争を開始する。日本は2方面で戦わざるを得なくなる。簡単に言うと、日本は今自分の外政を見直している。これ故、ソ連邦に対する日本の関係は未だ定まっていない。

権威ある日本人達は見なしている、南方への日本の拡大は直ぐには実現されない。とにかく、海軍がこれに極めて神経質となっている。が、北方はというと、軍はこれの準備が出来ていない。

(報告者は誰？ 誰宛？ \*)

7月3日、モスクワではゾルゲの電報を受け取った、その日付は6月26日であった。グシェンコの情報と政治諜報が追加されていた：「オットー大使は、日本を戦争に参加するよう働きかけるべき指令を受けてはいない。「オットー」(ゾルゲは尾崎の古い偽名を用いた一著者)の情報によれば、日本海軍は戦争への参加を見守り待機するつもりである。松岡(当時点の外務大臣 \*)はアメリカとの相互理解に何の期待も抱いていない。しかし、彼はオットー大使に保証した、時が経てば、日本は無条件にソ連邦に進撃すると。

6月27日、東京で調整委員会の会議が継続していた。松岡は再び主導権を握った。松岡はベルリンからの大島大使の通報を引き合いに出した。日本は気まづい状態に有る、独ソ戦争は短期間に終了し、独英戦争は秋、或いは1941年末までに終了する。これに関して、彼の見解によれば、まず始めに北に攻撃を開始しなければならない。松岡は興奮して述べた、「もし我々がソ連邦を急襲するならば、アメリカは参戦しない。アメリカはソ連邦を助けることは出来ない。ただ一つの理由で、アメリカはソ連邦を嫌っているからである。もし我々が、最初に南に侵攻するならば、我々はイギリスとさらにアメリカと戦争することになる」。

日本の将軍達は松岡の長広舌を石のような顔をして聞き入った。その時、松岡は切り札を出した：「わかってくれ、進めている、無鉄砲ではなく。もし我々がソ連邦に進軍するならば、私は確信している、外交手段によって3、4ヶ月間はアメリカを抑えることが出来ると。もし、我々は状況の進展を見ているならば、大本営の計画で提案されているように、我々はイギリス、アメリカそれにソ連邦によって包囲されるであろう。我々はまず北に進撃をしなければならない。その後、南へ攻撃をする。もし何の手立ても打たなければ、何も得られない。我々は決定的な行動をとらなければならない」。

その時、陸軍大臣東条が立ち上がり、質問した：「この問題は中国事変とどのような関連があるか？」これに関して、松岡は断固として述べた、もし日本軍がイルクーツクまでの道の半分まで進軍するならば、これは蒋介石に影響を示し、蒋介石に日本との和平を

懇願することをさせる。これ故に、北へ進軍する必要がある。これのために、中国への圧力を弱めることとなっても。

東条は断固としてこれを受け付けなかった：「中国事変の処理はやり遂げなければならない」。海軍大臣及川が東条を支持した。次のように述べながら。世界戦争は10年は続くであろう、この間に、中国問題は解決され、北への進撃が可能となろうと。

この時、松岡は「外交における道義的原則」を要請することを試みた。次のように語りながら。三国同盟を拒否してはならない、というのは、これを同盟国は理解していない、日本には「不確定な未来」への準備が必要であるから。ソ連邦への進撃が準備に一定の期間を必用とされるならば、いま、ソ連邦への進撃の決定をし、この意向についてドイツに伝える必要がある。

その時、杉山将軍が話し始めた、彼の言葉には明らかに立腹したことが感じられた：「道義的で上品な外交、これは素晴らしい。が、現在では、我々の最大軍事力は中国にある。正直に話すことは素晴らしい。しかし、実際において、我々はこれを行うことが出来ない。我々は現在決めることは出来ない、我々は進撃するのが北なのかそうでないのか。関東軍の準備作戦のためには40日から50日が必要である。補足的な期間が必要である、現有軍力の組織化とそれらを進撃作戦へ向ける準備のための。この期間に、独ソの前線に於ける状況は明白になるに違いない。もし条件が都合良くなれば、我々は戦いをするであろう」。

松岡は主張し続けた、「ソビエト連邦へ進撃することを決定するのを、私は希望する」。「ダメだ!」、杉山が厳しく返答した。杉山を、海軍の参謀本部長永野将軍が支持した。

6月27日、ゾルゲはモスクワから無線電報を受け取った：「東京へ。インソン（ラムザイ）同志へ。日本政府がどのような決定をしたか通報してくれ、我が国との関係において、ソ連邦とドイツの間の戦争に関係した。我が国境への軍の移動の場合には直ぐに通報してくれ」。署名：「組織者」－諜報局極東部の長のコード名。

6月28日、ゾルゲは諜報局への新しい無線電報を準備した。

赤軍参謀本部諜報局局长へ

東京、1941年6月28日

サイゴンへの作戦についての決定は、作戦を要求している急進派の圧力で決定された。が、アメリカとの衝突を避けるという条件下で。第二には、独ソ戦争の中で時間を稼ぐために。情報源インベスト（? \*）が断言している、赤軍が敗北するような時に、日本は北に進出すると。しかし、示した、日本はサハリンを平和的手段で購入したいことを、場合・・・（2つの単語が歪んでいる）、ソ独戦争の期間における政治。

ドイツ大使オットーはこの最初の部分の関係を確認した。が、松岡は2番目の部分の関係においてのオットーの質問に語った、日本はソ連邦に進撃すると。彼はこれについて何時も保証している通りに。その後、松岡はオットー大使に話した、天皇はサイゴンへの作戦に同意したと。少し前に、これはこの時には変更されないと。これ故、オットーは理解した、日本は今北へは進撃しないと。

インベストが語った、山下将軍の到着は南か北への日本の進出に大きな影響を持っている、が、進出についての決定を山下さえ既に変更することは出来ない。重光の到着とワシントンでの交渉は同じく将来の決定にそれなりの影響を持っている。

接近の関係におけるアメリカの回答が満足する形で届いた、が、未だ明かではなかった、が、主張している、回答

は全体的に中国に触れており、日本は中国において大きな優先権を得ていると、もし日本が南洋を要求しないで、三国同盟を破棄するならば。

インベストは直ぐにより確りした情報を得ることになる。

第156, 157, 158, 159. インコン

翻訳 ログフ

決裁 局長：「\*\*\*\*」

配布に当たっての注記：「スターリン同志、モロトフ同志、ジューコフ同志に配布。1941年7月4日17時40分。」

明かである、電報の文面を作り上げた後、ゾルゲがそれを直ぐには送付しないことに決め、状況の進展を待つことにした。これ故に、クラウゼンはようやく7月4日に、電報をモスクワに送信した。

6月30日の月曜日に、日本政府と帝国参謀部（大本営？）の会議が東京で続けられた。松岡はまず第一に自分の考えを貫こうとした。脅かしながら、南への作戦の場合には「深刻な問題」と衝突することになると。軍の参謀本部の長はこれが起こらないと保証することが出来るのか？ 多くの人々は自分の意見を変更しなければならなかった。もし日本が南インドシナを占領した場合に、日本への石油、天然ゴム、錫その他の調達に困難が起こるとして。

武藤将軍がこれに反論した、日本の軍需省の軍事局長：「南インドシナを占領し、我々はそこで天然ゴムと錫を手に入れることが出来る」。

その後、近衛殿下と杉山将軍が発言した。彼らの視点は次のことに帰着した、戦略的状況の更なる研究の後に決定が為されるべきであると。政治と同じように、同じく軍事的視点を持って。北への日本の計画の決定は、「政治的戦略の要求の” 必用な考慮” の後のみ決定することが出来る、日本の軍力の準備の水準の確定と世界に於ける状況の」。

東条将軍は付け加えた、決定をするにおけるの困難は次の点にあると。日本は未だ中華事変に引き込まれている。中国での戦争がなければ、決定は容易である。

杉山将軍が述べた、南方への進出の具体的な計画はある、それはオランダ領インドシナまでの進撃を予定している。この際、良くない場合を避ける可能性を考慮しながら、日本に対する同時の示威行動、イギリス、アメリカ、ソ連邦の。計画はイギリスとアメリカだけの戦争の可能性を予想していた。

議論に再び近衛首相が参加した。海軍の意見を引き合いに出して。近衛が語った、全ての目的を達成することは一度の攻撃では不可能である。この段階においては、フランス領インドシナに進軍する必要がある。そして、一步一步と進める。

南京の英雄である朝香王が問いた、  
「我々は余りにも慎重すぎるのではないか？

ドイツの問題を決定するのに比較して」。近衛は少し考えてから、返答した、朝香（上海派遣軍司令官を拝命し、直後の南京攻略戦に参加、現地にいたこともあって、いわゆる南京事件の実際の責任者の一人）を直視しながら：「その通り。が、この問題は我が国民の運命にとって非常に重要な問題である。仮説の状況と違って、簡単に扱ってはならない」。

7月1日、調整委員会の会議で、杉山が語った、軍は戦争の準備を実行していると。この際、第一に、満州における日本軍の戦闘準備を行っている。杉山は特に強調した、この

仕事においては、最大の注意をする必要があると、「軍が服従から脱していない」とするために。

東条はこれに同意し、指示した、全ての準備が秘密裏に実行されるために。

商工大臣小林がくどくどしい演説をした。彼は日本の資源に関する問題を取り上げた。彼の見解によれば、日本は十分な資源の在庫、軍事材料を持っていなかった、陸と海での軍事作戦の保証のための。これ故、作戦を実行することが必要である、イギリス、アメリカ、ソ連邦との同時に衝突する危険を万全に回避するために。問題を注意深く研究する必要がある、何処へ進出するか：南方、或いは北方へ、帝国には資源と材料の十分な在庫がないことを考慮して。これ以外に、「支那事変」を解決する努力をしなければならない。

7月2日、天皇自身の在席の元で会議が行われた、天皇は郊外の邸宅から特別にやって来た、極暑にもかかわらずに。会議には、近衛公、陸軍大臣東条、軍参謀長杉山、海軍参謀部長永野、その他が在席した。参集者の検討用に、文書「状況の変化に対応して、帝国の国家的政治のプログラム」が提示された。

会議で、最初に近衛公が発言した、彼は以下の点で言及した：

支那事変の早急な解決の必要性；

南方への進軍の必要性；

北方での困難を免れる必要性。

その後、杉山、永野、松岡、枢密院議長原、陸軍大臣東条が発言した。

発言の基本的な内容は次の通りであった。日本にとっての初段階の課題は中国における戦争の終結である。南方への早急の進撃を要求している、重慶政府のイギリスとアメリカの関係を遮断するために。この目的を持って、第一に、フランス領インドシナの南部に進出する必要がある。次の段階で、中国の外国人租界に日本の管理を打ち立てる必要がある。北の問題に関しては、三国同盟の精神のもとで行動している日本は、独ソ戦争に若干の期間は参加はしない。支那事変とイギリスとアメリカとの調整が必要であるために。杉山が発言した通り、それは微妙な状況にある。

好都合な条件下で、日本は北の問題の解決のために武力を利用する。これ故、軍事作戦の準備の秘匿を保証する必要がある。杉山が一般的な意見を述べた：「私は見なしている、北の問題の解決のために、様々な手段を実行し、特に軍事力に触れながら、我々は維持に大きな価値を与えなければならない、障害にもかかわらずに、我々の原則的立場は、イギリスとアメリカとの戦争に対する不断の準備の保証である。日本に対するこれらの国の関係は楽観論を呼び起こさないで」。

原（枢密院議長）は自分の発言において、ソ連邦への進撃することの差し迫った必要性を強調した、「都合が良い時での」。「誰が言うことが出来ようか、中立条約に関して日本にとってソ連邦への進撃が背徳であるとは。しかし、ソ連邦自信は協約の不履行になれている。もし我々がソ連邦に進撃するならば、誰もこれを裏切りとは見なさない。私は焦らずに可能性を待っている、ソ連邦への攻撃のための。私は軍と政府にお願いしたい、これを出来るだけ早急に行うことを。ソビエト連邦は消滅されなければならない」。他面から、原は危険性を述べた、インドシナへの進撃はイギリスとアメリカとの戦争を引き起こすと、日本はこの戦争の準備が出来ているのか？

杉山はインドシナへの政治決断に賛同した。同時に、彼の意見によれば、独ソ戦争の因

子を考慮に入れる必要がある。彼が見なしたように、戦争の状況がドイツに有利に進行する間、アメリカは戦争に出てこない、もし日本がフランス領インドシナに進撃しても。ドイツとソ連邦の間の戦争の状況は50日から60日で明らかになる。この期間に、支那事変の解決の問題とイギリスとアメリカとの交渉を進めなければならない。

#### 政治諜報の通報

東京、1941年7月5日。

「.....」

日本の政府筋からの情報による。直に、南方作戦の準備が終了する。この終了後、直ちに南方への進撃を開始する。次のような計画に従って：インドシナ南部への軍の派遣、隊への軍事力の供与。さらに、シンガポールへの進撃。アメリカとの戦争を回避するために、全てを行う。もし、この回避が成功しなかったならば、アメリカとの戦争さえ、目的に追加する。

ソ連邦関係の政策は次のような因子を持って処理する：遅くないうちに、中立条約を締結する。その決裂は住民の憤慨を引き起こす。北方への進撃の準備は怠らない；その結果、日本は中立の立場を維持しなければならない。

アジアに新秩序を確立し、日本は民主主義国家とソ連邦との戦争に取りかかる、ドイツ側に立って。これ故、北方への進軍のための軍の準備は急がなければならない、何時でもソ連邦に対して軍事作戦を開始しなければならないので。

ゾルゲは大きな緊張を感じていた：日本はどの方向に進撃するのか。フランス領インドシナの占領が決定されたという情報が元気づけた。特に、時間を稼ぐ目的を持って、ソ独戦争がどのように進捗するのかを見定めることが。極めて示唆的であった、松岡の約束にもかかわらず、オットーは理解した：サイゴンへの進撃の決定は最終的で断固としたものである。それを取り消すことはもう誰にも出来ない。日本は今や北へは進撃しない。オットーはベルリンに書き送った、「この数日に、日本の内閣で、参謀部長の在席で4回の会議が行われた。ソ独戦争を理由に何の決定もされなかった。軍からの通報は裏付けている、ロシアへの襲撃準備が精力的に始まった、しかし、それは少なくとも6週間を必用とする、極東におけるロシアの決定的な弱体が行われなければ。信頼できる秘密情報に納得する、近衛首相と内閣の大半は立場にある、中国における戦争状況を悪化するような事をするべきではないとの。これら全ては北における日本の作戦を阻害する。オットーはゾルゲに自分の電文を構成するように頼んだ、ゾルゲは喜んで請け負った。オットーの情報はゾルゲが持っている証拠を裏付けた。

しかし、最終的な確定は尾崎からやって来た。後になって西園寺が回想記に書いた説によると、帝国司令部の会議の結果について、尾崎は彼から知ることとなった、満鉄の建物内のレストラン「アジア」での彼らの会食中に。尾崎は質問した：「それで、全てが決まったんですか？」西園寺が答えた、窓を見ながら考えながら：「その通り、決まった。しかしそのために、これをしないために」（?）。尾崎は感じた、彼の心臓が突き刺さるような。が、動揺をばらさないようにして、友人に質問した：「そうらしいのか？」西園寺は窓から尾崎の方に視線を動かし、黙って、まぶたを下ろした。尾崎は全てを理解した：日本は当分ソ連邦へは進撃しない。

これについてゾルゲに伝えた、尾崎は「朝食グループ」の会談に根拠をおいた、その過

程で明らかとなった、近衛公は日本は「支那事変」に束縛されていると見なしていることが。次に重要な時となったのは、日本とアメリカの関係における不確定性であった：アメリカとの交渉がどのように終わるのか、近衛は知らなかった。

ゾルゲは日本の決定についての情報を伝えた、当分ソ連邦への進撃はないとの、7月4日付けで。この情報は直ぐにスターリン、モロトフ、ジューコフに伝達された。

前日、7月3日、ゾルゲは無線電報を送った。それはゴリコフを激怒させていた。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年7月3日

今では既に遅すぎよう、貴方に返答するのは、左翼からの攻撃と若干の戦術上の間違いに関する質問に。

ショリ中佐があの時語っていた、ドイツによる赤軍への最初の主攻撃はドイツ軍の左翼で行われると。ドイツは完全に確信している、赤軍の主力は、攻撃に関して十分な可能性を与える戦線に対して対抗している方面に集中されるであろうと。ドイツは非常に危惧していた、主攻撃の通報に従って、赤軍が若干の距離後退することを、敵の軍力を調べるために、主攻撃の方向に何らかの手段に着手することに。ドイツの主目的—赤軍を包囲しての赤軍の粉碎、ポーランド軍で行ったような。

ドイツの武官が私に話した、日本の参謀本部は活動を満了した、大きな敵へのドイツの進撃を考慮して、赤軍の壊滅の必然性によって(?)。

彼は思っている、日本は戦争に参加する、それほど遅くなく、6週間ほどで。日本の進撃はウラジオストク、ハバロフスク、サハリンで始まる、ソビエトの沿海州のサハリン側から上陸部隊を持って。ドイツの作戦と日本の賛同に対する国民の一般的雰囲気。

君の外交面での活動はより強力でなければならない、これが他の面でなされる以上に。

情報源のインバストが思っている、日本は6週間後に参戦すると。彼は同じように伝えた、日本政府は三国同盟を堅持すると、が、ソ連邦との中立条約を堅持すると。

サイゴン(インドシナ)へ3個師団を派遣することが決まった。松岡さえ賛成した、これを前提に、ソ連邦を目標とすることに。

情報源インテリとイラコが語った、北中国から若干の軍による東の国境線の堅持に関して耳にしたと、同じく北海道における軍の強化も。

京都に帰還した師団は北に向かうであろう。

ラムザイ。

翻訳 ログフ

陸軍大臣東条が述べた、ソ連邦への進撃は、「ソ連邦、熟れた柿は地面に落ちる、日本の足下に」、その時に行われなければならない。影響力のある山下将軍は東条を納得させた、独ソ戦争終了までにロシアの極東部を占領することで。彼は話した、「熟した柿の理論の時は過ぎ去った。待機はアメリカとソ連邦の団結を加速させる。柿に未だ少し苦みがあるならば、木から柿を払い落とす方が良い」。

しかし、これは助けとならなかった。状況の進展を待つことが決まった、2ヶ月ほど。その期間に日本は最終的な行動を決めなければならない。ドイツとの戦争において、赤軍は国のヨーロッパの部分に大軍を移動させざるを得なくなった。その時に、日本にとって「絶好の機会」が到来する。

## 不安な7月：独ソ戦線に於ける状況は似ていた 「東京の雨が数日間降り止まないのに・・・」

帝国会議の仕事の完遂後の7月2日に、松岡はスメタニン（日本に居るソビエトの大使）を自分の所に招聘し、伝えた。日本政府は問題の真剣な検討を行った、ソ独戦争の開始で生じた。事前の口答での声明で、松岡はもう一度遺憾の意を表した、この衝突が起こったことに。日本の同盟国であるドイツとイタリアの戦争、日本の隣人ロシアに対する、ロシアとは日本は独自に最近関係の良好化を行った、日本を非常に複雑でデリケートな状態にしている。彼は心から期待している、敵対行動が早く終了することを、特に、それらが極東に広がらないことを。そこには日本は切実な重要な興味を持っている。松岡は声明した、日本政府は欲していない、ドイツとイタリアとの日本の関係が、ソ連邦との関係を複雑とすることを。関係において、東京は何の変更をしようとは思っていない。彼の政府は日本の興味を守ることが可能であると見なしている、自分の支持側との良好な関係を保ちながら、ソ連邦とも。松岡はスターリンとモロトフに通知するようにスメタニンに頼み込んだ、彼はソ連邦との戦争を希望していないし、そのためには何でもすると。お互いの国の間の友好関係を維持するために。それにもかかわらず、彼は認めた、中立条約の日本政府の遵守は更なる状況の発展に依存していると。

スメタニンは回答した。松岡の声明を直ちに評価するのは難しい、が、彼は大臣に感謝した、ソビエト連邦との善隣関係の維持のために働くという彼の約束に。

このようにして、外務省筋では、日本の意向についての情報は完全に不明確であった。

同じ時に、ドイツ大使オットーに松岡が説明した、「ソビエト大使への日本の声明のそのような考え方の理由となっているのは、ロシア人を誤解させる必要性からである。或いは、究極的に、ロシア人を不確定状態にしておくこと、戦争準備は未だ終わっていないゆえに。現在、スメタニンは知っていない、ソ連邦に対しての日本の急いだ準備について・・・」。

ドイツの指導部はそのような状況の展開には非常に不満であった。特に、中立条約を守るという日本政府の決定の採用にドイツ指導部は満足しなかった。7月5日、リップントロップはオットーに電報を送信した。

東京のドイツ大使（オットー \*）へのドイツの外務大臣（リップントロップ \*）の電報から

1941年7月5日

ソビエトロシアに対する日本の関係について触れると、私は希望した、貴方の個人的な理解力のために、通報を正しく解明することを、貴方に松岡によってなされた、彼と我々との会談について、不可侵或いは中立に関する日ソ条約について。・・・。

松岡が貴方に述べたこと一同じようにシュレンブルグ卿にも一は現実に答えていない。不可侵及び中立の日ソ条約のテーマは、1941年3月26日の松岡と私の間の交渉で取り上げられ、メモが同意された、我々の交渉後にシミ

ット大使によって作成された、このテーマはそのように展開した。

長く審議されていた露日商業条約締結についての批評に関して、松岡は私に直接問題を提示した。彼は帰り道、モスクワに長居する必要はないのかどうか、ロシアと不可侵或いは中立条約をロシアと審議するために。この際、彼は強調した、日本国民は三国同盟へのロシアの直接の参加を許容しない、後者は日本全国に憤激の嵐を引き起こした。私は松岡に回答した、同盟へのロシアの参加について何も考えていないと。彼に助言した、言及した不可侵或いは中立条約の締結についての問題をモスクワで取り上げない可能性について。最近の状況の枠内に収まらないので。漁業と商業条約の締結は日本とロシアの関係を良好とした、という松岡の指摘に私は回答した。純粋な商業条約のようなものは何の異議を受けることはない。

このように、私は松岡に全くあけっぴろに反論した、日露の不可侵或いは中立条約の締結を適切と見なしていないと。これ故、条約が成立したという通報は、私にとって、非常に予想外のことであった。しかし、私は当時見なしていなかった、これを松岡に知らせる必要があると。

しかし、松岡に間違いを指摘する考えを持ち合わせていなかった、彼が当時貴方に述べたことの、同じように、起こった事実の前に、帝国政府に条約の締結を提起したことを。しかし、私は出来事の本質的な過程について全てを伝える、とにかく貴方に、将来における政治的交渉に際して、多分、機会が到来する。その時には適当な方法で松岡に示すことは有効である。この問題に関して、事情の本質的な状況を。

多分、同じように出来事の将来の過程において、松岡に思い出させる機会が到来する、彼は、その交渉時、そこで彼は日ソ条約について言及した、次のような注釈、十分な注意をした：「どの日本の首相或いは外務大臣も日本を中立にしておくことは出来ない、もしドイツとソ連邦の間に衝突が起ると。この場合には、本質的に、日本はドイツ側に立ってロシアへ侵攻せざるを得ない。中立条約は何の助けにもならない」。

もし、貴方が、これら2つの点について、松岡にそれとなくいう場合が必要であると見なした時、私は貴方にお願ひする、最も穏便な形式ですることを。松岡が感じないようにするために、私が彼にこれに対して責任を問うというような。

#### リップントロップ

7月8日、グシェンコ（東京に居るソビエトの武官）から定期電報が届いた。それではソ独戦争に関した日本の出版物の所説が分析されていた。これ以外に、日本の世論の基本的な傾向について結論を出していた：「住民の中には、不信、危惧、未知を感じている。ここから、日本にとって戦争の必要性についての様々な話しが・・・」。日本の軍司令部のあり得る計画に関して、グシェンコが書いていた：「日本の冒険主義者達の次のような計画が微かに認められる一状況の複雑さを口実に、日本の興味を妨げることができる、全ての可能な力を準備し、それらを軍備に振り向ける、このためには2、3ヶ月を要すると見なしている。南方への話すと、そこへの若干の部隊の派遣で、ソ連邦の注意を逸らす。適当な価値を持って、中国で自由にする、崩壊と蒋介石との取り決めによって。準備の後に、日本の国民に示す、彼らは実際の軍力で支えられていると、むき出しの冒険主義ではなく。ドイツの計画に従っての第一撃をウラジオストク、カムチャッカ、サハリンが被ることになる。これによって、ソ連邦はアメリカの援助から切り離される。その後、計画通りのソ連邦の侵入を始める（日本人の情報源から）・・・」。

結論：日本は我々との中立条約に束縛されないと見なしている、遅れる事なくソ連邦との戦争に入る準備をしている。が、これに軍、経済、国民は準備できていない。準備には日本は少なくとも7ヶ月から10ヶ月が必要である。ドイツは勝利し赤軍を強力に束縛す



るであろう事を考慮すると、明らかに、準備には2ヶ月から3ヶ月で十分であるとみなしている。

#### 政治諜報の通報

東京、1941年7月7日

我々の情報に従うと、日本政府はソ連邦へのドイツの侵入について前もって通知されていた。政府の立場は前々から決まっていた、即ち、ドイツ側に立つことが。しかし、このためには適当な時期を選ぶこと。

日本の外務省は外交官全員を祖国に呼び戻すことを決めた。今年の6月27日、大臣の提案によって、政府は指示を与えた、課題の解決に必用な場合には、外交官全員を日本に呼び戻すことを。

日本の将来の政策について触れると、ここで見なす。日本は最初は南に侵攻する、いかなる場合においても北ではない。権威ある政治家は思っている、日本政府は中立の立場を公表している、が、この立場はそう長くは続かない。

経済界には噂が流れている、ソ連邦がサハリンを日本に渡す提案をしたという、中立の立場を保証するために。

一般の意見は次のようなものである：ソ連邦との戦争は遅かれ早かれ必要である、が、今はその時ではない、極力損害を最小にする必要がある。

「・・・」

明らかになった、日本政府はシベリアに対して直接の軍事行動をとらないと決めた事が。これの代わりに、南に侵攻することを決めた。この目的を持って、日本軍は移動した、フランス領インドシナの北部から南部に。軍が集結している、他の場所からも。同時に政府は決定した、近日中に国会の臨時委員会を設立することを。情報源は指摘している、国会議員の70%が南への進撃に賛成し、30%が北への進撃に賛成していると。情報源はさらに追加した、北への進撃をしたがっている日本人達は理解している、そのためには、準備に少なくとも2ヶ月から3ヶ月が必要であると。

(誰が誰に出した？グシェンコがモスクワ中央に \*)

1941年7月2日の帝国会議の決定にしたがって、日本の参謀本部と陸軍省は大規模な対策の作成に取りかかった、極東とシベリアへの進撃作戦遂行のための準備の促進に向けられる。日本の秘密書類中で、それは「関東軍特別演習」の暗号名称を得ている。略称で「関特演」。1941年7月11日、大本営は関東軍と北中国にいる日本軍に特別指令第506号を発した。それで、裏付けられていた、「演習」の目的は、ソビエト連邦に対する侵攻の準備の強化であることが。「関特演」はソビエト連邦に対する戦争の戦略的計画の基本であった、1940年に陸軍の参謀部で企画された。

この計画に従えば、軍の移動と集中は7月20日に始まり、戦争についての決定は8月10日となっていた。8月29日には沿海州のソビエト軍を攻撃するつもりであった、ウラジオストク、ハバロフスク、ペテロパブロフスク・カムチャッカの占領を目的として。10月中旬にはバイカル湖まで進出する。

作戦予定表にしたがって、7月5日、大本営の命令書が印刷された、動員の第一段階の行動についての。それに従って、関東軍は2個師団増強された。7月7日、天皇は50万人の秘密動員を裁可した。同じく、排水量80万トンの船も、満州に軍事物資を輸送するために。

行われる動員の秘密を守るための手段が講じられた。それは予備兵に対する教育招集の形で実行された、「臨時招集」の名前で。「動員」の項目は全ての書類と指示において「臨

時編成」で置き換えられた。全ての見送りと式典は厳格に禁止された。

7月10日、ゾルゲは中央に定期の報告を作成した。それは7月11日に送信された。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年7月10日

ドイツ大使オットーがリップントロップから指令を受け取った。日本を戦争に参加させるように、出来るだけ早くにと。オットーはリップントロップが急いでいることに非常に驚いていた。リップントロップは知らなければならぬ、日本は未だ準備が出来ていないことを。もし日本が今始めるとしたならば、それは戦争の見かけだけであろう。

情報源インベスト（？ ＊）が語った、幾つかの師団が、南方での作戦のために既に派遣されたと。

軍を載せた37隻の輸送船が、台湾方面の航路中にある。

噂がある、第16師団が北に向かっているとの。

私は京都で特別に探査をする人物を派遣した。

第164号、インコン（ゾルゲの別名の一つ ＊）

翻訳 ログフ

配布についての注記：「スターリン、モロトフ、ボロシロフ、マレンコフ、ベリア、ビシンスキイ、ジューコフへ」。

電文中で、改行で強調された文節が指導部に送られた：日本はソ連邦との戦争の準備が未だ出来ていない。

この後直ぐに、諜報局長に、ゾルゲのもう一通の無線電報が報告された。尾崎の証言によれば、天皇の所の会議でサイゴンに対する作戦計画を変更しないと決まった。が、同時に、ソ連邦に対する作戦の準備をすることも、赤軍が崩壊した場合における。ドイツ大使オットーが話した、ドイツがスベルドロフスクに達したならば、日本は戦い始めると。

ドイツの武官クレチメルがベルリンに電報を出した。彼は次のようなことを確信したと：日本は戦争に参加する。が、7月末或いは8月初めよりは早くはない、準備が終了したい直ぐとなる。

通報のこの部分は、パンフィロフの手で丸で囲まれていた。

ゾルゲはオットーと松岡との会談について同じように通報した。会談で松岡は深刻な危機感を述べた、ソビエト空軍のあり得る攻撃に関して、日本の「生命中心」に対する。オットーはこの危惧感を吹き飛ばすことを試みた、ソ連邦は極東に全部で1500機の第一級の飛行機を持っている、その内の300機だけが日本を往復できる重爆撃機である。これ以外に、彼の証言によれば、ソビエト連邦は2つの形の飛行機を持っているだけである、そのような任務を遂行できるのは。それらは今極東に配置されていない。

ゾルゲが伝えてきた、日本ではソ独戦争に賛成しない者達の迫害が始まったと。ドイツ側に立って戦争に参加することの熱狂者達と同じように。影響力のある山下将軍には満州に留まることを命令した、政府の決定への彼の影響を避けるために。

諜報局長の決裁の内容は次の通りであった：「情報局。特別通報。準備すること、今日。パンフィロフ。7月14日」。これ以外に、電報の余白に、赤軍参謀本部の諜報局の注記があった：「情報源の大きな能力と彼の以前の通報の大部分の信頼性を顧慮して、通報データは信頼するに足りる。赤軍参謀本部諜報局長パンフィロフ」。

注目することが大事である。極東におけるソビエト空軍の脆弱さに関してのオットーの楽観的な請け合いにもかかわらず、日本は他の証拠を完全に掴んでいた。7月半ばに、日本の総参謀部は通報を受け取っていた、西にはソビエト空軍のほんの30個飛行大隊だけが移動したことの。ソ連邦の東部に、爆撃機の多数が存在していることが特別な不安を引き起こした。見なされた、日本がソ連邦に侵攻した場合に、日本領土への空軍による大爆撃の実際の危険があり得ることが。

日本の大本営は諜報情報を持っていた。1941年にソビエトの極東部に60機の重爆撃機、80機の長距離爆撃機、330機の軽爆撃機、450機の戦闘機、60機の襲撃機と海軍航空隊の200機の飛行機が存在しているとの。6月26日付けの首都防衛に関する参謀部長の報告で示されていた：「ソ連邦の戦争の場合、夜の10時間にわたる何回かの飛行機による爆撃、そして昼の10時間から12時間にわたる爆撃の結果、東京は灰燼に帰すると」。疑いなく、ソ連邦に対する戦争の開始の決定へ影響を示した。

ついに、中央で受け取った一連の無線電報で、ゾルゲの通報は7月11日が最後となった、オットー大使が話している通り、参戦するという日本への彼の提案に回答が続いた、日本は当分中立で残りたいという。日本の指導部では意見が対立していた：古い将軍達は南方への進撃を発言する、関東軍の若い将校達はソ連邦との戦争に入ることを。ゾルゲは最終的な結論を出した：「戦争への準備は、6週間以上延びるであろう。日本は戦争の経過を見守っている。もし赤軍が敗北するようなことになれば、日本は無条件に戦争に突入する。もし敗北がなければ、日本は待機の立場をとるであろう」。無線電報の文書は直ぐに国家防衛委員会の委員であるビシンスキイとジューコフに送られた。

7月12日、スメタニン（駐日ソビエト大使 \*）と松岡の会談が行われた。会議の始めに、ソビエトの大使は松岡に質問をした、本当であるのか、アメリカ大使とイギリス大使との交渉において、日露中立条約を何の法的効力を持たないものと見なしたことは。現在の条件下で日本にとってそれを遵守することは必須ではない。スメタニンが述べた、「条約は短い、が、全く明らかである、何の例外も許されないことは、両方の政府によって引き受けられた中立の約束から。条約の署名時には何の但し書きもない、日本の約束の結果、条約違反の許容について。それ以上に、君はソビエト政府の指導者に口頭で述べた、三国同盟は日本に義務を負わせてはいない、何らかの場合に、ソ連邦に対して侵攻するという。我が政府は見なしている、日本の中立違反は目に余るのがあり、ソ連邦との条約違反を正当化はしないと」。最後に、大使が期待を述べた、「ソ日条約の堅持の約束」を日本から得られるという。

次の日、松岡は大使に回答のメモを渡した。それには日本の立場が矛盾し、不確かな形で書かれていた。最初から、メモに示されていた、中立条約は効力を持っている、独ソ戦争には適用されないにもかかわらず……。条約は効力を有している限り、それは三国同盟に矛盾しない、その論拠において、そこにおいて日本は三国条約の目的と精神を大事にしなければならない」。さらに松岡は書いていた、「今日まで、ドイツとイタリアは、三国同盟に従って、日本に参戦することを要求してこなかった……。私の個人的な提案として、将来において、三国同盟に従って日本の戦争への参加についての要請には従わない」。メモの最後で語っていた：「これは最近の戦争に関する故に、私は断言する、確信している、現在、日本は立場をとるであろう、日本が自由である、中立条約と日独伊三国

同盟に束縛されることなく、独自の政策をとることになる」。

スメタニンは松岡の言質をとろうと試みた。そのような解釈では、締結した条約に関する自分の約束を疑惑にさらすということを示して。しかし松岡は答えた、ここには矛盾はないと。全ては言葉の上ではなく、実際においてである。ドイツはソ連邦との戦争に参戦することを日本に要請しなかったし要請もしていない。他面において、ソビエト連邦は、期待している通り、合衆国にカムチャッカに基地を提供していない、或いはシベリアにイギリス軍に、それについては新聞でいろいろと書き立てている。

7月15日、ゾルゲは自分の情報を確認した：「ソ連邦に戦争の通告無しに侵攻する、ドイツがレニングラード、モスクワを占領する」。これに追加して彼は通報している、7月17日から21日までの期間に、日本はサイゴンを占領するつもりであると。日本では、27歳から39歳までの住民の動員が行われていると。召集兵を朝鮮、中国、満州に送っている。

実際において、ソ連邦に対するドイツの侵略の開始の直ぐ後、達成したことに従って、日本とドイツの間の秘密の合意のもとで、ソ連邦への日本の進撃は行われるであろう、ドイツ軍がキエフ、レニングラード、モスクワを占領したように。

7月15日、松岡一彼の独断専行を軍部は批判した一は退職を強いられた。近衛は新しい内閣の組閣に取りかかった。外務大臣には豊田貞治郎が任命された。

その日、モロトフは立川を招聘した、7月12日に署名したイギリス―ソビエト合意について彼に伝えるために。

人民委員会は大使に声明した、ソ連邦とイギリスの間の合意は次の場合にだけ存在している、その場合に合意は公布され宣言される、何の他の合意もない。委員会は特別にそのような声明をした、あれやこれやの噂と誤解を避けるために。合意はもっぱらドイツを考慮に入れている、ドイツは条約を犯し、背信的な方法でソ連邦に侵攻した。他の中立国とソ連邦の関係は、この合意には触れられない。モロトフは立川に要請した、しかるべく日本政府に伝えることを、中立条約の価値を強調して、ソ日関係のために。そして声明した、「ソ連邦はこの条約を遵守し、堅持する」と。

回答で立川は請け負った、ドイツとソ連邦の戦争は日本にとって極めて好ましいものではないと。彼の意見によれば、松岡は欲していた、ソ連邦が日本、ドイツ、イタリアと共同行動をとることを、イギリスの崩壊の目的を持って。そして、中立条約は松岡のこの希望の現れであったと。そして、ソ連邦とドイツの間に戦争が勃発した、非常に残念である。もちろん彼は理解していた、戦争が始まったからには、全く自然なことであるが、ソ連邦はイギリスに接近する、彼らの興味が一致しているので。しかし、日本国民は見なしている、イギリスは日本の敵であると。ソ連邦が日本の敵と協定を結んだ、あり得ないと彼は見なしている、ソ連邦に対する日本国民の感情を冷却の方に影響しない。日本は大いに期待している、ソ連邦が更なる一步をとらないことを、それは日本の世論にソ連邦に対抗する雰囲気醸出す理由となる、「なんとなれば、そのような場合には、日本国民の感情の本質的な発露を抑えることは極めて困難になるであろう、日本政府には」。

7月22日、作業予定表からほんの2昼夜だけズレて、ソビエト国境に日本軍の集中が始まった。満州に多数の部隊が到着し始めた、日本軍の集中を20個師団までするつもりであった。軍の大半は中国―日本前線から移動してきた。結果として、関東軍は2倍とな

り、兵員70万人を数えた。1941年7月16日の命令第102号に従って、第2段階の動員の結果、満州と朝鮮地域に、日本軍の85万人の兵士と将校が集中された。

1941年に、ソ連邦との戦争の準備のために、定数を大幅に増大させた。戦車、飛行機、大砲、騎兵隊、工兵隊、鉄道部隊と後方部隊を。満州と朝鮮には、大量の弾薬と燃料を集積した。関東軍には、弾薬、燃料、食料の倉庫が作られた、2ヶ月～3ヶ月期間の戦闘行動が出来るための。「関特演」の計画に従うと、ソ連邦との戦争において、満州国と内モンゴルの傀儡の軍隊も参加することになっていた、同じく白衛部隊も。

極東とシベリアでの軍事作戦行動のために、最初、34個師団の軍集中が計画された。独ソ戦争の開始時には、満州と朝鮮には、常備していた14個師団だけであったので、関東軍に、本国から6個師団、中国戦線から14個師団の移動を予定した。しかし、中国に派遣されている軍の指導部はこれに反対した。この時点で、日本軍は51個師団を持っていた、その内の27個師団を中国での軍事作戦に当てていた。軍司令官である畑将軍が声明した、日中前線でそのような軍の縮小は極めて危険である、戦争をさらに長期化させる。結局、東京はこの論拠に同意した。

日本政府は、7月半ばに始まったスモレンスク攻防戦を注意深く見守った。7月半ばにおける赤軍の努力と犠牲の目的は敵を押さえることではなかった。いくらかの期間前線を安定化させることが出来た。東京では、期待していた、極東とザバイカルから西へ赤軍の大部隊の移動を。

日本の大本営の目論みによれば、ソ連邦に対する軍事行動は、極東とシベリアにいるソビエトの師団の縮小—30個師団～15個師団への条件下で始めることになっていた。飛行機、装甲車、大砲、騎兵、工兵、輸送部隊が3分の2に。見なされていた、満州と朝鮮への日本の師団の戦時編制での補充、部隊の追加の結果、日本師団の軍力はソビエト師団の軍力を25%上回る事となる。ここから結論が出された、例えば、日本の11個師団はソビエトの15個師団の相当すると。これ故、戦争のために予定している24個師団はソビエト軍の2倍以上となっていた。

ゾルゲの情報はモスクワに状況を見極めさせることとなった、ソ連邦に対する軍事作戦開始に関する日本の司令部の実際の準備期間に関して。この情報は極東にいる内務人民委員部の外部諜報機関によって確認された。

#### 政治諜報の報告

上海、1941年7月24日

中国グループからのデータからすると、中国中央から北へ、日本軍の移動が観察されている。その際において、軍は完全には移動されず、部隊の一部は元の配置位置に残している。

日本の近い将来の計画に触れると、アメリカ軍の諜報グループの意見によれば、南方への拡張の日本の準備はカモフラージュされている、ソ連邦への進撃準備から注意を背けさせるために。このために、日本は2ヶ月間の限定期間を設定している。が、断っておく、この期間内に、もし重大な損害を被らなければである。

(誰が誰に?\*)

同じ問題に関する重要な情報は、蒋介石のソビエトの軍事顧問グループから届いた、チュイコフ将軍を長としている。これ故、極東からソ連邦のヨーロッパへのソビエト軍の移

動規模は、日本の司令部の期待にはほど遠かった。1941年7月12日付けの日本の大本營の諜報部のデータからすると、戦争の開始後3週間で、極東から西へ、ソビエトの師団のうち17%だけが移動された、機械化部隊は3分の1。実際において、7月～8月に、2つの師団—第102師団と第26師団—だけが移動した。これについて、日本の軍事諜報員は伝えた、赤軍の減少した部隊の代わりを、現地住民の招集でまかなっていると。報告書では、特別な注意を向けていた、ザバイカル軍管区の軍が基本的に西に移動している、が、東と北の方向におけるソビエト軍の集中は実質的に以前通りであると。

これは、日本の司令部に、24個師団だけの武力で進撃の成功を見積もらせることはなかった。それにもかかわらず、ソ連邦への可能な進撃の改革は継続された。これ故、日本の参謀本部と陸軍省の会議で、ソ連邦との戦争のために追加師団の抽出の問題が検討された。任意の時に、ソ連邦に対する戦争の開始の準備が出来るようにする課題が討議にかけられた。このために、満州と朝鮮にいる軍の更なる増強が目論まれた。ソビエト連邦に対して30個師団と総員120万人を参加させる問題が熱心に審議された。

その後、7月に、ソ独前線での状況がもつれた時、主攻撃を20個師団の軍力で行うことが決められた。そして、7月31日、参謀本部の作戦局長田中と陸軍大臣東条との会談で最終決定がなされた、ソ連邦との戦争に24個師団を振り向けることが、日本の参謀本部は極東におけるソビエト軍が縮小されると見込んだ。遅かれ早かれ、ソビエト連邦は軍の西への大移動をせざるを得ないので。

日本の待機の立場は、ヒットラーを大いに怒らせた。ヒットラーは日本に戦争への早急の参加を要求した。これに関して、1941年7月9日、リップントロップはベルリンで大島と個人的に会談した。

リップントロップのオットー大使への指示書で、示されていた：「私は貴方に努力を払い続けることをお願いする、ロシアに対する戦争に日本の早急な参加を得ることの・・・

貴方の指揮下にある全ての手段を利用するように。というのは、戦争への参加が早ければ早いほど、良いので。なりよりもまず、目的は、冬が到来する前に、シベリア鉄道でドイツと日本が出会うためにある」。

ベルリンからの指示に従って、オットーはドイツ大使館に、日本軍の指導者達を招聘した。陸軍大臣東条を首班として、大本營長杉山、土肥原將軍を。彼は熱心に説得をした、「日本は戦争への参加を決めた。しかし、松岡と日本の軍幹部はオットーに待つことを願った、というのは、日本は未だ動員を完了していないのでと。彼らは期待を述べた、動員は2ヶ月で終了し、日本は戦争に参加すると、ドイツがモスクワを占領し、ボルガ川まで進撃した時に」。

東京では、ドイツの「決定的勝利」についての報告を待っていた。これはドイツ政府に怒りを引き起こした。ベルリンは正式に日本政府に通告した、もし7月25日までに日本政府が決断をしないならば、一見越している「三国条約と反コミンテルン協約の条件の遵守の見直し、この日で露日条約を廃棄通告をしない」—ドイツは見なすであろう、自分の作戦に自由があり、ソ連邦との勝利後は、「最大の手段を探すであろう、自分の影響と力を利用するために」、自分の独自の興味において。ドイツ自身理解していた、日本の参謀無しでは、極東とシベリアのソビエト領土の獲得は勘定に入れることは出来ない。

これにもかかわらず、東京では安心感が広まった。日本指導部は待ち続けた、「次第の

好都合の時を」。この際において、ドイツ政府に声明を出して、日本は三国同盟に関する自分の責務に忠実に残ると。

7月後半に、ソ連邦への進撃の日本の準備が完全に完了した時に、日本の将校団の中に、ドイツの電撃戦に疑念の最初の兆候が現れた。7月16日、帝国司令部の「秘密の戦時日記」中に、第2次世界戦争の前線における出来事と状況をその中で評価をしていた。次のように書き込みがなされた：「独ソ戦線において、積極的な行動が見られていない、静かである」。その後の7月21日：「独ソ戦線における状況の進展には、明確さが無い。数日間降り止まない東京の雨に似ている」。

しかし、東京ではソ独前線における状況の進展を待機していただけではなく、1941年7月2日の帝国会議の決定に従って、ソビエト連邦への進撃の活発な準備と平行して、南方への進撃を始めた。日本の内閣はわかっていた、これはアメリカとイギリスとの武力衝突を招くものであると、それで、両国との戦争を準備した。

7月23日、日本政府はフランスのビシー政権に協定の署名を強要した、南インドシナへの日本軍の配置についての。これに従って、南インドシナは日本軍によって占領された。この結果、南インドシナはマレー、シンガポール、オランダ領インドシナ、フィリピンへの進入路となった。

日本指導部が見込んでいた通り、この進撃はアメリカ側からの戦争の手段をおこさせなかった。この時期のアメリカの戦略は、第2次世界戦争に直接の参加を避けるところにあった。

それにもかかわらず、アメリカ政府は対応手段を講じた。1941年7月25日、アメリカは日本への禁輸を行い、アメリカにおける日本資産の凍結を行った。同じような決定をイギリスとオランダも行った。8月1日、アメリカの禁輸は、重要戦略物資の日本への輸出にも及んだ。日本との貿易は実質的に禁止となった。この経済手段は、日本とアメリカ、日本とイギリスの関係を大いに先鋭化させた。軍事手段による南方における資源の奪取を日本に決定させることとなった。

司令部の局長辻が戦後に書いていた：「8月初めに、陸軍省では結論に至った、ソ連邦に対する作戦では、半年から1年の期間で、石油の在庫が尽きると・・・これ故、石油に触れると、南方への進撃以外に道はないと」。オランダ領インドシナでは、毎年、800万トンの石油が採掘されていた。これは日本での採掘量のおよそ20倍多かった。南方の早急の占領と資源の長期にわたる確保は日本の司令部にとっては、第2次世界戦争において日本の勝利の担保となるものであった。

これが重大な原因となった、アメリカとイギリスに対する戦争が見込まれた、海軍の基本的軍力のもとで行う、1941年に向けて極めて増強された。ゾルゲは日本の軍事予算を良く知っていた、「陸軍と海軍の増強の6年計画」から、1940年に帝国司令部で採択された。これ以外に、海軍には少し多くの資金が割り当てられた、海軍にとっては条件は陸軍より、この上なく好都合であった。陸軍は中国で戦っていた、そこで損失を受け、それに対して戦争への巨額の支出を要求していた。1941年7月末、陸軍大臣東条は声明した、中国での戦争期間において、海軍は成員の10%を損失した、同じ期間に陸軍は40%を失ったと。南方への進出は、日本の司令部の思惑によれば、ソ連邦への狙いを定めることを弱めることなく、軍の集中ができる。南方での戦争のために、ホンの10個歩

兵師団を割り当てた。

海軍への支出の過大な割当は新しい軍艦と軍港の拡大に向けられた。これについて、ゾルゲは知る事となった、日本は世界で最大級の排水量を持つ戦艦を作ったことを、その武器は口径400mmを有していた。日本海軍力の移動能力は計り知れないほど成長していた：1936年には、日本海軍は6隻の航空母艦を有していた。1941年には、既に16隻の航空母艦を、航空機400機も。

南方作戦を準備した日本帝国海軍は、通常クラスの軍艦230隻からなっていた。その内の10隻が戦艦、10隻が航空母艦、38隻が巡洋艦、112隻が駆逐艦、65隻が潜水艦。アメリカは太平洋に172隻の軍艦を持っていた（9隻の戦艦、3隻の航空母艦、24隻の巡洋艦、80隻の駆逐艦、56隻の潜水艦）。

他面において、ゾルゲはこれも良く知っていた、日本は南方で強力な抵抗にあつていないことを。全体として、アメリカ、イギリス、オランダの武力は極めて強力であったにもかかわらず、彼らは日本に対する組織された反撃の準備が出来ていなかった。植民地軍からなっている、極東と太平洋における西側強国の軍事力は一つの司令部も持っておらず、分散し、特別に防衛の戦略を堅持していた。特別研究グループ「部隊82」によって、1941年7月30日に日本司令部に提出された事前の南方での戦争計画において、マレーシアの防衛の弱さが暴露された。フィリピンにおけるアメリカの立場の深刻な不十分さ、オランダ領東インドシナにおける抵抗の可能性の弱さ。

ようやく、尾崎がゾルゲに近衛公の視点について教えた。近衛は思っていた、ドイツは日本の信頼を裏切ったと。彼の判断のロジックは次のようなものであった：日本の三国同盟への参加は、アメリカとの戦争へ日本を引きずり込む恐れがあり、中国での軍事作戦を勝利まで導くことの邪魔をすると。近衛の意見によれば、条約は2つの基本目的を追求していた：1) ソ連邦との関係の正常化、ソ連邦を第4番目の国として加入させる手段を持って、2) 戦争へのアメリカの参加を妨げる。その後、アメリカとイギリスはヒトラーとの戦いでソ連邦を支持すると声明した。条約はその価値を失った。近衛は条約における日本の義務を再考することを提案したのか、あるいは一般的にそれを拒否したのか？ 近衛の立場を、海軍の若干の指導者達が支持した。特に、海軍参謀長の永野治が。彼は天皇への報告で述べた：「この同盟が存在する限り、日米の外交関係を正常化することは出来ない」。

日本におけるゾルゲの仕事の前述の経験、最近に得られた情報との組み合わせにおいて、彼を次のような結論に至らせた。日本軍は避けがたい行動に動き始めた、南方への進軍をせざるを得ないという。しかしゾルゲは理解していた、予想には十分に注意を向けなければならぬことを。

7月30日、ゾルゲから定期報告を受け取った。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年7月30日

情報源インバスト（？ \*）とインテリ（？ \*）が話した、日本における新しい動員では、20万人以上が招集されるであろうと。このように、8月半ばには、日本において、約200万人が動員されることになる。8月後半始めから、日本は戦争を始めることができる。ただ次の場合においてのみ、もし赤軍がドイツ軍に敗北した場合に。そ



の結果、極東における防衛能力は弱くなる。そのようなものである、近衛の軍集中の視点は、が、日本の参謀本部は長く待つつもりである、これは今語るの難しい。

情報源インバーストは確信している、もし赤軍がモスクワの前面でドイツ軍を留めることになれば、日本軍は進撃しないと。

第168号。インソン（？ ＊）

ゾルゲのこの通報を、パンフィロフは指導部に配布しなかった。余りにも大きな責任、日本政府の行動の予想を引き受けることの。次のような条件で、赤軍が西で敗北した時に、日本はドイツ側に立って圧力をかけ、極東に進撃するという。これまで、ゾルゲはソ連邦への進撃に関する日本の準備期間を6週間としていた（尾崎とクレチメルの情報から）、7月末－8月初め（クレチメル）。今やゾルゲは極めて断定的に断言し始めた。日本は進撃しない、赤軍がドイツを押しとどめるならば、ただし書きにもかかわらず、日本の参謀本部は自分自身の一存で行動し始めることが出来る。これは重大な変更であった、日本の内閣の立場の。明らかに、諜報局の指導部には、この情報の信頼性に対して疑念が生まれた。指導部はゾルゲと彼の情報源について問い合わせを要求した、これまで彼らを信頼に値すると特徴付けていたにもかかわらず。

7月29日、帝国司令部の「戦争の秘密日記」中に新しい文章が現れた：「独ソ戦線は、相変わらず変化がない。北の問題の武力解決の時が、この年やって来るのであろうか？ 引き続き10日に、戦争は歴史を定めるに違いない」。

（ドイツは9月にモスクワ攻略戦（タイフーン作戦）に乗り出す ＊）

## **「日本は何の宣言もなく戦争を始める、 8月の初めの週か次の週の間・・・」**

東京では、注意深い分析を行った、得られた全ての情報の、ソ独前線における状況とソ連邦の内政状況に関しての。特に注意深く分析した、参謀本部の諜報部第5局の情報を。ここに様々な情報が集まった、諜報機関からの情報、関東軍の諜報書類、盗聴データ、武官の暗号、大使館の報告書と分析書類、会社「満鉄」の研究所の指示とその他の資料。

8月初めに、局によって準備し、そして軍事省の指導部に提出された、「ソ連邦における最近の情勢の評価」と名称された報告書が。報告書は4章からなっていた。1. ソビエト連邦の政府機構の評価（政府の政治、政府機構の強さ、ロシア国民の特徴、資源の保有量、地域毎の住民の分布）。2. 外交戦略（特に、アメリカとイギリスとの関係）。3. 軍事問題（赤軍の軍事力、赤軍の極東における戦時能力、ドイツと日本の軍と赤軍の比較）。4. ドイツとの戦争遂行におけるソビエト連邦の能力の分析、国際状況の進展の一般的評価）。

報告書の重要な結論で指摘されていた、戦争は長引く公算が大であると：「赤軍が今年モスクワを失っても、赤軍は降伏はしないであろう。早急の決定的会戦を遂行するというドイツの意向は実現しない。更なる戦争の進展はドイツ側に得ではないであろう」。この結論の内容を説明し、日本の研究者達は指摘している：「8月初めに、諜報部第5局は

結論に至った、1941年の間に、ドイツ軍はソビエト連邦を征服することは出来ない。翌年はドイツにとっての展望は極めて悪い。全てが語っている、戦争は長引くと」。

この報告書はソ連邦に対する戦争の開始についての問題の決定的な解決を出していないにもかかわらず、それにもかかわらず、それは日本政府に強いている、より冷静に評価することを、独ソ戦争の展望とそれへの日本の参加を。

8月初めに、モスクワで、十分に期待できる情報がスメタニン大使（ソビエトの駐日大使 \*）から外交チャンネルを通じて得られた。これまでソビエト大使は何度か松岡と会談をしていた、彼は中立条約の遵守についての質問の回答をしていた、矛盾し不確定な点についての。

松岡の退任は、本質的に、モスクワに明確にすることの必要性を引き起こした、これはソ日関係にどのように反映されるのかを。これ故、7月25日、スメタニンは新しい外務大臣豊田に質問を出した：中立条約は有効に残るのか？ 豊田は詳細な回答を与えた、条約を十分に精査した後に。

8月1日、定例の第43回会議が行われた、政府調整委員会と大本營の。緊急課題となっていたのは、報告書「ソビエト連邦との外交交渉の基本的原則」の審議であった、外務大臣豊田が提案した。

審議において、三国同盟の揺るぎない遵守の必要性が指摘された。それは「ヨーロッパに新秩序の確立のための条件と東アジアにおける日本の新秩序の確立のための条件を作っている」。同じように見なされた、公に声明することが出来ない、中立条約の遵守或いはこれに関して何らかの確たる約束を与えることは。同時に、松岡の立場からズレることが目的にかなっていると見なされた。彼は声明していた、中立条約は三国同盟に影響を与えることはない。出席者達が気がついた通り、ソビエト連邦に今詳細を話すことは正しくはなかった。

発言者の何人かが意見を述べた、独ソ戦争は長引くであろうと。しかし、軍の参謀本部長と軍事大臣東条が述べた：「これは全くそうではない。事実、現在、独ソ戦線における戦闘において、必用な前進はない。ドイツの利益になるように行動する・・・極めてあり得る、戦争は直ぐにでもドイツの勝利で終わることが。ソビエトには、戦争を長引かせることは極めて困難である。独ソ戦争が長引くという断定は、早まった結論である」。海軍大臣及川はこの意見に賛同した。

8月4日、調整委員会の新しい会議が催された。その会議で、ソビエト連邦との外交交渉の基本的原則が審議にかけられた。基本的問題—外務省次官の山本がそれを述べた—は次のことであった、「中立を遵守する約束を（明らかに）我々はするのか、それとも、我々は同意するのか（お互いに）、中立を守るのか」。会議の結果、決定が採択された、「ソビエト連邦に声明することが、もし、ソビエト連邦が中立条約を確りと遵守し、極東で帝国に不安を引き起こさないならば、我々は中立条約を維持し続けるであろう」と。同時に指摘された、公約は効力を失うことが、もしソ連邦が沿海州やカムチャッカの領土を日本との関係において非友好的な立場をとっている第3国の軍事基地に提供するならば、或いは全体として。

次の日、豊田はスメタニンに伝えた。ソ独戦争、中立条約、三国同盟に関していろいろな視点が存在するにもかかわらず、彼は個人的に見なしていると、日本は中立条約の全文

を熱烈に遂行する準備があると、ソビエト連邦が日ソ交渉における内容を維持し続けるならば。日本政府はソビエト政府に対して要求した、蒋介石体制に直接或いは間接的な援助を中止するとの約束を与えることを。彼は同じく2国間に立ちふさがっている重要な問題の解決するための多少の期間を要求した、北サハリンにおける日本の利権所有者への圧力の禁止、ソビエト連邦によって布告されている海域についての安全の問題、日本側の航行を制限などの。

スメタニンは満足を表現した。松岡と異なって、豊田が日本の意向について明確な声明をなしたことに、中立条約を確りと遵守するとの。彼は繰り返した、彼の政府は条約を全く有効であると見なしていると、そして同意していると、2国間の問題の解決を望んでいると。ソビエト政府と蒋介石の関係について触れると、スメタニンは認めた。これについては通報されていないと。が、これに関する質問を出すことを約束した、モスクワに、他の問題についても。

豊田との会談は証言した、日本の内閣は決定を下したと、複雑な状況の中でそれなりの益を得る目的を持ってモスクワに外交的圧力を示すという。実際において、「ソビエト連邦との外交交渉における基本的原則」に従って、予定した、「ソビエト側への圧力によって、中国へのソビエトの援助を禁止させること、北サハリン、カムチャッカ、アムール川から東のソビエト領の日本への譲渡、極東の全てのソビエト領からのソビエト軍の退去を」。

日本の大本営の長と次長は参謀本部の各長に明らかにした：「武器の使用は北方問題の解決を目的としている。しかし、もし問題が外交交渉の手段で解決できるならば、そのために我が軍力があるのだが、そのような問題の解決がより望ましい」。

8月6日、オットーが豊田を訪問した。彼はスメタニンとの会談の内容について質問した。豊田が回答した、話し合いは北サハリンの日本の利権と、日本の会社のそこでの障害のない活動のための条件の作成についてであったと。その時、オットーは単刀直入に質問した：「日本の立場はどうなのか？ もし、アメリカがウラジオストックを経由してソビエト連邦に武器を送るとしたならば。」 豊田は直接の回答を避けた。オットーは要求した：日本はアメリカとどういう風にしたいのか？ 豊田が答えた：「アメリカが興奮する、我々はそれを宥めにかかろう。」 最後に、オットーが語った、噂では、バイカル湖から東の地域の譲渡の交渉を日本がするというが。豊田はこの噂を否定した。

オットーは非常な不満を持って豊田の所を去った。直ぐにゾルゲにこれら全てを話した。リヒャルト（・ゾルゲ）が彼に語った、「君はどうしたいのか？ 私は大分長い間君に話してきた、日本は自分の興味を第一に考えている、日本の基本的興味は南方である」。オットーは反論した：「いや、イキ（ゾルゲの仲間内の愛称 \*）、君は何時も、余りにも原則的である。近衛の新内閣はいつも通り、我々との共通路線を守るであろう。もちろん、松岡と私の関係はあっさりしたものであった。彼はとにかく、豊田より新ドイツ的立場を堅持している。彼は、新しい内閣と同じように、極めて平静に我々との興味に関係している。しかし、それにもかかわらず、私は思っている、日本の基本的な政策は変わることはなかった、戦争への参加を長引かせていたにもかかわらずに」。ゾルゲはフンと言い、オットーを意味ありげに見て語った：「良からう、今にわかるさ」。

8月6日、調整委員会の定例会議で、豊田がソビエト大使とドイツ大使との話し合いに

ついて述べた。彼の言葉によれば、彼には印象が出来上がっていた、中立条約を遵守するという日本の準備についての彼の声明後、スメタニンはほっとしていたという。会議では審議され、可決された、「日本とソビエト連邦の間の関係の最近の状況と関係した帝国の手段について」の書類が。会議は決議した、日本が自分の防衛をより完全なものとし続ける間、ソビエト連邦との戦争を避けなければならない。挑発行動を自制し、日ソ関係の古い問題を出来るだけ許さなければならない。ただ、「第一撃」があった場合には、日本軍は進撃で答える。

「インソン」の電報からのメモ

(差出人ゾルゲ?) 1941年8月7日付け

ドイツ大使オットーがベルリンのリッペントロップに電報を送った、近衛内閣に關係する。彼は指摘している、内閣は、無条件に、ドイツに依存している。私にとって新しいものとなった、外務省の元大臣松岡は新ドイツであったことが。

オットーは關係についての視点を語った、基本的政策は変わっていないが、戦争への参加のテンポは非常に遅いとの。オットーにとっては、彼の仕事において非常に困難なことである、新内閣は松岡のいた前内閣よりドイツ關係には極めて無関心である故に。

日本では、23歳から45歳までの動員がなされた。新しい師団は定員2万人である。動員は7月7日から始まった。

高射砲隊が満州に配置される。第2歩兵師団は7月23日動員を開始した、第14歩兵師団に高崎の第15連隊が動員された。第16師団は満州への移動の準備をしている。

確かに：上級政治委員 キジム

電報には諜報局長パンフィロフの決裁：「不確かー嘘をついている。軍団以上に送付。その仕事を報告せよ。1941年8月10日」

確かに：第一分隊長ログフ。

このように、ゾルゲを再び信用しなかった。

本質的に、動員の規模を隠すことは不可能であった。計画に従っての軍の移動及び集中時、基地から朝鮮へ、一日に1万人の兵と将校と3500頭の馬が通過していった。しかし、ゾルゲを嘘つきとして非難することが出来るであろうか。彼はデータを伝えた、その時に手に入れた。満州と朝鮮への日本軍の移動に関する総括的な情報を与えなかった、これを彼は後になって行った。

それにもかかわらず、8月11日、パンフィロフに情報が報告された、それには、「インソン」の基本的人口動態のデータと、第4局代理パポフによって空で作成された彼の仕事に関するデータ (!)。しかし、この情報を判断する時に、パポフはうっかり忘れていた、とにかく、それには重大な事実上の過ちがあることを。これ以外に、印象が積み上げられている、ゾルゲは信用できないという情報を作り上げた、単にゾルゲは好きではないと、明らかに、彼の高いうぬぼれと自尊心故に。ゾルゲは素晴らしい個性を持っており、良く自分の価値を知っていた。これが多分中央の誰かを立腹させた。

諜報局長パンフィロフへの報告書から

1941年8月11日

1. 長期間にわたって、インソン（ロシア諜報機関からのゾルゲの呼称？ \*）は諜報局の元指導的職員の指導下で働いていた。そして、人民の敵であることが発覚した。ここから結論が出る：もし人民の敵が外国のスパイとして寝返るならば、疑問が湧く、何故彼ら人民の敵がインソンを引き渡さずにいられようか。とにかく、例えば、元第2局長カリンはドイツのスパイであった。彼の言葉によれば、中国にいる我々の若干の秘密の代理人を売った。カリンが局長であった時、インソンは日本で働いていた。日本局長パクラドクは日本のスパイであった。

2. 日本局の前局長（パクラドクの後）シロトキンは同じく日本のスパイであった。シロトキンは内務人民委員部の組織に明らかにした、彼は日本にインソンを売ったと、彼の情報源と共に。内務人民委員部におけるシロトキンの尋問の時、ポポフが在席していた。

シロトキンの証言によれば、彼はインソンを1938年末に売り渡した。この時以降、インソンの働きが悪くなり始めた。疲労を訴え、彼を帰還させてくれるように強く要求した。まさに、1940年にはインソンはソ連邦への帰還を要求する。

3. 人民の敵のメモから明らかである、インソンには妻がおり、彼女はベルリンに住んでいることが。彼女は知っている、彼は共産主義者であり、どこにいるのかを。1935年に、中央はインソンに無線士フリッツ（＝クラウゼン 訳者）を派遣した、人物像は極めて不明瞭であった。ただ知られている、彼はセルビアの将校であり、白衛軍のロシア人女性を妻にしていた、それ以上は何もわかっていない。無線士としては優秀であった、連絡の中断はなかった。

インソンには党に入るまでの歴史はない。彼は党で働き、党に入り、その後、諜報局へ。インソンは東京にあるドイツ大使館におけるファシストの秘密党員の一人であった。しかし、インソンに問いただすと、何故インソンは大使館の公的仕事を行うことがなかったのかとの、答えは何時も決まっていた：「君は知っている、私の過去を、ドイツの機関で仕事をする者を、ゲシュタポは注意深く調査をしていることを。これが私の害になる」。

インソンの問題は新しい物ではない、何度か審議の対象となっていた。基本的な問題：何故、日本或いはドイツは彼を抹殺しないのか？ もし彼がソビエトのスパイとして売り渡されていたならば。何時も一つの結論を出している：日本もドイツもその価値故にインソンを抹殺していない、諜報活動のために、彼を我々の所に派遣するために。

インソンの情報は何時も必要であった、他の情報源と比較することが、国際情勢の、同じく注意深く彼を分析し、批判的に彼に関係すること。

インソンは極めて自尊心が高く、自分なりの意見を持ち、彼を始動する場合には考慮する必要がある。

注釈：インソンの基本的な人口動態のデータと、彼の仕事についてのデータ。局の次長であるポポフによって空で作成された。

赤軍司令部諜報部第4局長 コルガノフ

この書類から明らかのように、ゾルゲの直接の上司はゾルゲを信用していないだけでなく、ゾルゲの経歴さえまともには知っていなかった。全般的に彼に名誉を与えていない。あり得なくはないにもかかわらず、その条件下で、書類の内容において、再保険の判断に影響したということが。十分に物騒な推挙が彼のグループの人物についてあった。特に、マックス・クラウゼン（「フリッツ」）。彼は何故か「セルビアの将校」と呼ばれていた。ゾルゲの情報を検査する必要性についての最後の一節と、他の情報源のデータと彼の情報を比較することは、どんな諜報員に対しても関係するものであった。

しかし、翌日の出来事の旋風が諜報局の指導部にゾルゲの関係における嫌疑について忘れ、再び、彼の情報を最上層部に送ることを強いた。

8月9日、陸軍の上級司令部の書類「帝国陸軍の作戦計画」が採択された。それでは予見されていた：

1. 満州と朝鮮に16個師団を持ち、ソ連邦への進撃の準備をする。
2. 中国での作戦を継続する。
3. 11月末に、南方における戦争の準備を完遂する。

これは極秘の書類であった。その内容については、5人が知っていた。軍事大臣、軍事大臣代理、軍事管理長、参謀本部長、参謀本部作戦長。

8月12日、インソンから幾つかの無線電報が届いた。それらは文字通り状況を爆破した。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年8月11日

十分に警戒するよう貴方をお願いする。というのは、何の宣戦布告無しに日本は戦争を始める、8月の最初の週と最後の週の間に。

第71号。インソン。

情報局職員の執行についての注記：「執行された。ゲルチェンシテイン。1941年8月12日」

決裁 HO-4：

自分の次の無線電報で、ゾルゲは伝えた、ソ連邦とドイツの間の戦争が始まるやいなや、日本政府はソ連邦との戦争の準備をする決定をした。90万人を動員する、その内20万人を満州に派遣する。さらに50万人の動員を目論んでいると。インソンの情報に従えば、日本の参謀本部はブラゴベシェンスク方向が最も防御が薄いと見なしていた。が、全面的侵攻の際においては、主攻撃はウラジオストクにする計画であった。これは実質的に、ベルリンにいるハルダーへのクレチメルのコピーであった。

ゾルゲが書いていた、「しかし、6週間後に戦争、戦争を準備している日本の指導者達はわかっている。ドイツ軍の進撃は滞っており、大軍が赤軍によって殲滅されたことを。アメリカの立場は全くの反日本であった。日本の経済封鎖が強化される、が、日本の参謀本部は動員を止めるつもりは全くない。参謀本部では確信している、近いうちに、最終決定をしなければならないと。冬が近づく前に」。

この他に、テキスト中で幾つかの文が強調されていた、報告のこの部分は円で囲まれ、明らかに、特別報告で利用された。

「この2、3週間のうちに、日本の決断が最終的に決まる。あり得る、参謀本部が進撃する決定をなすことが、政府との事前協議無しに。

ドイツの大使オットーは知った、戦争を口実に、日本の外務省がソ連邦政府に対して要求していることを、自身の最大級の請求の充足を」。

無線電報には同じく情報局の印がある：「特別通報のために利用された」。

ゾルゲのこの通報に、幾つかの点が注目に値する、それらは諜報局の分析員の注目を引いた。

第一に、動員された兵士の配置：その内の4分の1だけが満州方面に向かった。ソ連邦との戦争準備を遅らせるという以前の通報の確証となった。

第二に、ソ連邦に勝利するというドイツの能力に関しての日本政府の増大する疑念。7月から8月初めに、明らかとなった、ドイツ軍の進撃速度が遅くなっていることが。モスクワとレニングラードを予定された期間に占領できなかった。これに関して、大島はリップントロップと会談をした、説明を得るために。会談にはカイテル将軍が招聘された。カイテルが説明した、ドイツ軍の進撃の遅延は「延びすぎた連絡補給路と前線部隊からの後方部隊の遅れにある。作戦の計画と実際の進展の不一致は3週間である。このような大きな作戦行動では、深刻な意味を持っていない」。

そのような説明は、日本の内閣の疑念をただ大きくしただけであった、短期間に戦争に勝利をするというドイツの能力に対して。これはヒットラーの度重なる要求によって裏付けられた、極東へ出来るだけ早く進撃するようにとの。

この意向を、ゾルゲは8月12日付けの自分の2件の無線電報で論証した。が、東京から送られ、8月15日にモスクワで受け取った「遅延することなく」の注記のついた。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年8月12日。

ドイツは毎日、日本に戦争に参加するよう強いている。ドイツが日本の高官グループに約束した、最後の日曜日にモスクワを奪取できなかったという事実は、日本の熱狂を下げた。

日本への日本が出動するようとの働きかけを目的として、リップントロップは毎日電報を送っている。これに関して、土肥原将軍と岡村将軍との交渉が行われた。オットー大使は考えている、日本は時期を待っている、赤軍が弱まるのを。とにかくこの条件がなくては戦争への参加は危険きわまりないので。日本の石油の在庫が極めて少ないのでなおさらである。

第81号。インソン。

翻訳 ログフ

第三に、ゾルゲが書いていた、アメリカの政策における反日傾向の強化について。これは重要なことであった、日米関係における状況を、日本の内閣の目で見られる故に。8月8日、日本の内閣報道官石井が公式声明を出した、「アメリカ、イギリス、中国、オランダが、日本の回りに軍事的、経済的、政治的封鎖を作り上げた」と。8月9日から12日かけて、ニューファウランド沿岸のアルゼンチン湾で、ルーズベルトとチャーチルの会談が行われた。極東問題の審議において、ソ連邦への日本の進撃の場合における両国の立場について何も話されなかった。それにもかかわらず、8月16日、アメリカにいる日本の大使大島は東京に伝えた、日本は「合衆国と同意に達することは出来ない」と。

第四に、諜報局では気がついていて、冬の到来を考慮して、「近い将来に」と最終決定がなされたことに。日本の参謀本部の見解によれば、北への大規模な軍事行動は、冬期は非常に困難である。これについては、1918年から1922年に渡るソビエトの極東部における日本軍の戦闘行動の経験が物語っていた。当時、日本軍は厳しいシベリアの冬の中で多大な損害を受け、大規模な進撃行動をとることが出来なかった。

日本の司令部はソビエトでの経験を考慮した、軍の武装についての。参謀部の作戦局長田中が東京の新聞で声明した：「ロシアーフィンランド戦争で、1939年冬に、ロシア

軍は作戦を実行した、200 km以上に延びている連絡補給路の確保を目指して、-50度以下の中で。これらの事実を鑑みて、また、ノモンハン事変におけるソビエトの補給の有効性にも鑑みて、作戦への供給するソビエト連邦軍の能力を過小評価してはならない」。

第五に、諜報局ではゾルゲの通報を考慮に入れていた、進撃は政府との事前の協議無しで行われる可能性がある。極東には、至急電報が送られた。それは警告していた、「日本はソ連邦に対する軍事行動を開始する、8月の後半に、宣戦布告無しに、短期間の戦争を行うつもりであるとの。この際、主攻撃を日本軍は沿海州のウラジオストクに行うであろう」。極東前線の軍司令部は、全ての配下の司令部にこれについて通知した、必要な手段をとるよう要求した、進撃を撃退する準備のための。

ようやく、中央では、同じく通報に注意を向けた、オットーのデータによれば、近いうちに、日本の外務省側から、ソビエト政府への決まった要求の提示を待機するべきであるとの。ソ連邦に対する外交的圧力は、松岡が外務大臣であった時から始まっていた。このように、前に触れた7月2日のスメタニンとの会議で、松岡が問題を提起した、ウラジオストク経由でのソビエト連邦へのアメリカの軍事援助供給について、日本の傍を。松岡は同意した、ドイツとイタリアが日本に対してこの経路を防御することを要求することが出来ることに。これはソ英関係に触れている、「類似の複雑さ」を作り出した。松岡は伝えることを要請した、スターリンとモロトフが真剣にこの問題を考えるために。

8月5日、外務大臣豊田は、スメタニン大使との会談で、同じようにソビエト連邦に対する要求を出すことを試みた。中立条約の破棄の可能性を明らかに臭わせながら。

8月13日、スメタニンは日本側にモスクワの回答を渡した。その中で伝えていた、ソビエト政府は喜んで豊田の声明を受け取った、日本が中立条約を遵守するとの。そして、自分の決定を確認した。その中で要望が表現されていた、北サハリンにおける利権の問題が解決されるために、松岡と達成した合意に従って。「約束の日から6ヶ月経ても、遅くはない」、モスクワ訪問時の4月13日に、彼は合意を与えた。

ソビエト政府は問題の提起を否定した、ソ連邦から中国への援助の供与についての、指摘しながら、中立条約は第3国との関係を規制していないことを。示された、日本はソ連邦より大きな権利を持ってはならないことが、中国、ドイツ、イタリアとの相互関係において。しかし、日本側を安心させるために、ソビエト政府はモロトフの約束を確認した、1940年7月2日に彼によってなされた、モスクワの日本大使東郷に。彼が中立条約締結についての問題を取り上げた時に。当時、人民委員会は声明した、蒋介石の援助問題は重要ではない、とにかく、ソビエト連邦は民族安全の問題にかかりきりである。現在、ドイツの進撃後、この立場はさらに重要となっている。

第3国との同盟についての問題に関して、ソビエト連邦は豊田にモロトフの声明を思い出させた、現在の日本大使立川への7月15日の、イギリスとのソビエトの合意はドイツにだけ関したものであり、日本には関係していないとの。ソビエト政府は豊田に保証した、ソビエト連邦は提供しなかったし、提供するつもりはないと、ソビエトの極東に軍事基地或いは領土的利権を。同時に、外交文書で、ソビエト政府は語っていた、満州における日本軍の大規模な移動について説明を得たいと。それは、中立条約を遵守するとの日本政府の声明と相容れないとして。

豊田とスメタニンとの会談時、日本の外務大臣松岡の手紙について話をし、述べた、あ



れ以来、世界の情勢は大きく変わったと。これは問題の本質の再検討の必要性を引き起こす。全くわかっていた、日本はソビエト連邦に対して要求していることが、利権において障害のない仕事を保証してくれることを。スメタニンが質問をしたとき、豊田は日本の義務と見なしていないのか、松岡の手紙に基礎をおく、破棄された、大臣は再び確認した、北サハリンにおける利権の問題は更なる研究を要することを。

豊田は軍の大移動と満州における軍事手段を正当化した、日本は自国の防衛の問題に不安であるので、隣国が戦争状態にあるときには。彼は保証した、軍事的準備はソ連邦に対してしたものではないと。ソ連邦とは日本は良好な隣人関係であることを望んでいる。そして断言した、日本は中立条約を守るであろうことを。しかし、彼は述べた、三国条約は日本の基本的な外交政策として残るとも。しかし、ウラジオストクを経由してのアメリカの軍事援助の供給量の増大は日本を極めてデリケートな状態にしている。

ソ連邦との戦争に対する日本の準備の遅延と日本の内閣と司令部のソ独戦争の迅速な終了への不信についてのゾルゲの報告、直接報告の形で指導部に配られた、特別報告として、は疑いなく、日本の要求に対してソビエト指導部によって採用された立場を幾らか緩和した。

それにもかかわらず、今のところ、東京からの情報は慰めとはならなかった。ソ連邦に対する戦争の準備は継続され続けた。これについて、ゾルゲが通報した、引き続いた2つの無線電報で、8月15日にモスクワが手にした。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年8月12日

東京のドイツ大使館の武官が朝鮮と満州へ出張して、私に話した、ウラジオストクへの進撃を予想して朝鮮に6個師団が到着したと。満州には4個師団が。武官は正確に知ることとなった、満州と朝鮮における日本の武力は30個師団に上ることを。作戦の準備は8月の20日から月末までの間に終了する。が、武官は個人的にベルリンに電報を送った、日本の進撃の決定は未だ決まっていないと。もし日本が進撃をするならば、第一撃はウラジオストクであろう、日本の大軍力をそこへ集中する。ブラゴベシエンスクへは3個師団が向けられた。

第80号。インソン

翻訳 ログフ

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年8月15日

ドイツの武官が確信した、ウクライナにおけるドイツ軍の勝利に関して、無条件に、レニングラードへの新しい攻撃とモスクワへの新しい攻撃が必要であることを。これら2つの町の占領は極めて重要である、日本への影響の目的を持って。武官は話した、ドイツによって設立された空軍師団は未だ利用されていないと。彼は考えている、この師団はレニングラード、モスクワ、バクー油田地帯の占領に利用されるものであると。武官は考えている、南部におけるドイツの勝利は日本の参謀本部へ影響を示し始めた。

第82号。インソン

翻訳 ログフ

8月15日、オットー大使と豊田（現外務大臣 \*）の新しい会談が行われた。オット

一が述べた、前外務大臣松岡のドイツへの親書の一つで語られていた：日本は準備が出来ていると感ずるや否や、日本はソビエト連邦における共産主義体制を覆す。この計画で何が起こったのか？ これに豊田が答えた、ソ連邦に対する最近の軍事準備は、ソ連邦に対する将来の作戦の第一歩であると。彼の意見によれば、これは三国同盟の精神に答えていると。オットーが言った、豊田のことは良く理解した、ソ連邦に対する作戦の第一歩という声明は非常に重要であると見なしている。オットーとの会談の内容を、豊田は8月16日の調整委員会の定例会議で述べた。

ドイツの進撃の遅いテンポにもかかわらず、日本の司令部には疑念はなかった、ドイツは最終的に勝利することの。実際において、キエフにおける赤軍の包囲についてのドイツ軍の作戦の成功は、日本の参謀本部を目に見えて奮い立たせた。宮城はゾルゲに伝えた、参謀本部は以前には、モスクワの占領のドイツ軍のチャンスは五分五分と評価していたが、今では7：3となったと。陸軍大臣東条は、8月14日のトルコの武官との会談で声明した、一ヶ月でソ連邦は崩壊するであろうと。ソ連邦は既に消耗している証拠となっているのは、不可侵についての声明を持ってトルコ政府への呼びかけの事実。

それにもかかわらず、東京のドイツ大使館は楽観的な予想をした、ソ連邦への日本の進撃の見通しの。オットー大使はベルリンに伝えた：「極東における赤軍は、相変わらず高い戦闘能力を有している。これ故、春より早くに日本の軍事行動の開始を待つてはいけない。ドイツとの戦いでソビエト連邦が発揮している根気は示している、8月或いは9月における日本の進撃によってさえ、この年におけるシベリアへの道を開くことは出来ない」。

東京で、とても信じられない噂が出回った：松岡を首班とする新内閣のあり得る創設について、アメリカ、ソ連邦、中国の空軍の日本の都市の襲撃の準備について、様々な問題の検討のためにソ連邦から最大級の政治家達の日本への至急の訪問について。新聞の発行が火に油を注いだ。アメリカの「アドベルタイゼル」の特派員がローマから伝えた、センセーショナルなニュースを：ソ連邦に示す援助の見返りに、アメリカは日本を標的としてウラジオストクを突然借用するつもりであるらしい。

危機の日時と見なされていた8月15日は平穏に通り過ぎた。戦争開始の決定は採用されなかった、日本軍の動員は継続された。ゾルゲは理解した、冬が近づいてきた、そのような条件でソ連に対する戦争は可能と認めた、が、非常な困難を伴うものである。

8月半ばに、宮城は関東軍の将校の東京への出張を知ることとなった。彼らは彼らの司令部の結論を携えていた：「関東軍はソビエト連邦への進撃のための準備を行った。しかし、国境線を何度か偵察をして、結論に至った。ソビエト連邦は同じように対応する準備をしていた。これを元にして、進撃は不可能であるとの結論に至った・・・」。

尾崎はこの情報を直ぐにゾルゲに伝えた、厳しい警告を付けて：ドイツとのロシアの戦争が予想外の展開になり、シベリアで無秩序が始まったならば、日本は再び北への進撃についての課題を見直すことになる。これにもかかわらず、尾崎が後になって思い出しているように、ゾルゲは非常な安堵感を感じていた。

これ以外に、ゾルゲはドイツ大使館で重要な情報を得ていた。土肥原将軍と岡村将軍との会談で、オットーはわかった、日本は待機の立場をとり続けていることが、赤軍が消耗しきるまで。日本の襲撃が完全に安全となるまで。土肥原が語った、日本は長引く衝突に引き込まれるわけにはいかない、極めて限られた石油の在庫故に、確信なくして戦争を始

めない。この戦争は短期間のものとなろう。

オットーは非常に憤慨してこの事をゾルゲに伝えた：「我らが勇敢な国防軍はロシアの大地で血を流している間、日本は待機している、美味しい物を手に入れるまで。そのような場合において、総統は正しい—そのような者達は我々から何も得ることはない！」。

ゾルゲにベネッカー将軍が語った、「リヒャルト君。エイゲン（オットー \*）がどんなに荒れ狂っても、日本は北へは進出しない。日本には、海軍のための燃料は2年分しかない、陸軍には6ヶ月分だけ、市民生活には同じく6ヶ月分。もし日本がソ連邦へ侵攻するならば、冬の前においてさえ、これは日本の経済に大きな緊迫状態をもたらす、特に少ない石油の在庫の支出に。この際、もし日本がシベリアと沿海州の部分を占領したならば、それは経済の本質的な助けになるであろうか。日本経済的な興味は南にある。ロシアとの戦争でドイツが勝利した場合に、日本は何の損失もなく、日本に必要な物を手にすることが出来る」。ベネッカーは声を潜め、ゾルゲに身を傾けた：「海軍参謀部の信頼できる人物が私に話した、政府と海軍は今年は戦争に出ないと決定したと。南方のタイ、ボルネオに進出する。これ以外に、海軍指導部は近衛に要求している、アメリカと交渉を継続するようにと。この情報は全く信頼でき、私を信じさせている」。ゾルゲはじっとベネッカーを見て、笑みを浮かべて語った：「パウリ、今回は君は私を凌駕した、私は今まで思っていた、日本はとにかく北へ攻撃を仕掛けるものと」。ベネッカーは反駁した、「何の、時折狡猾になる。君のように、イキ、全てを知っているとは限らない」。

8月20日から23日まで、東京で調査委員会の定例会議が開催された。その会議で、ソ連邦との戦争問題が審議された。関東軍の代表は北での戦争開始に反対した。

尾崎は直ぐにこれについてゾルゲに伝えた。その結果、8月24日には、モスクワは一連の無線電報を受けることになった。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年8月23日

インベストが伝えた、土肥原と東条は見なしている、日本には未だ戦争へ突入する時機は到来していないと。ドイツは日本のそのような振る舞いに大分不満を持っている。近衛は梅津に指示した、あらゆる挑発行動を避けるようにとの。同時に、タイの占領問題の審議、その後のボルネオ、は政府筋に、以前よりより深刻になっている。

外務省の職員が語った、アメリカの明確な反日的立場を考慮すると、今年における日本の戦争への進出はあり得ない、この問題は未だ解決されていないが。

第85号。インソン。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年8月23日

インテリが宇垣の秘書から聞いた、第一次と三次の動員のうち20万人が満州と北朝鮮に振り向けられた（同じような数値をドイツの武官も話していた）。満州には今では25個から30個の歩兵師団、既存の古い歩兵師団を包含して、35万人の兵士が中国に派遣される。40万人が島に残る。多くの兵士は半ズボンを着ている、短い乗馬ズボンを、暑い国での特別の。これから予想される、大半は南方へ向かうことが。

第83号。インソン。

これ以外に、デキンとストリが書いているように、ゾルゲは伝えた：「会議では、この問いには宣戦を布告しないことが決まった、繰り返す：この年にはソビエト連邦に宣戦を布告しない。次の但し書きがされていた：この決定は独ソ戦争における予想外の出来事の進展状況によっては変更される、状況を作り出すことができるとき、シベリア地区で重大な結果をもたらすことが出来ると、もしそのような軍事状況・・・(はっきりしない) 多分9月15日より遅くに、ソビエトロシアとの戦争についての問題は次のシーズンまで決定は引き延ばしされるであろう。満州に派遣された合同軍は、多分、そこで越冬する、もし状況が次の春にロシアへの進出の可能性を予定しているならば。

尾崎が軍の情報源から得た情報に従うと、軍は戦争を始める、以下の2つの条件が満たされたときに：

関東軍が武力において赤軍の2倍となったときに。

シベリア軍の内部崩壊についての肯定的な兆候が現れたときに」。

8月末に、オットーと豊田の定例会談が行われた。日本の外務大臣がオットーに伝えた、ソ連邦と行っている交渉について、サハリンに関しての。この問題に関するロシアの関係において十分に筋が通っているものと見なして、彼は話した、中立条約を確りと遵守するという日本の立場をソビエトの大使に保証したと。オットーは黙って豊田の言い分を聞き、冷たく別れを告げて、去って行った。

彼(オットー \*)はゾルゲに憤りを持ってはなした、「私は何をすべきか、イキ。私はリップントロップに話す！ 総統は、日本がロシアと戦争をすることを決めたという私からの通知を待っている。しかし、彼らはこのかわりに彼らに保証している、この愚かな中立条約を堅持することを。ゾルゲはオットーを宥めた：「がっかりするな、エイゲン。私は君に話した、我々の楽観主義は結構早すぎた。日本では全てを軍部が決めている。彼らは今南方を見ている。結局の所、もし彼らがこの方向に攻撃を仕掛けるならば、これは又我々の帝国の助けとなる。私はそのような気分である、リップントロップのために電報を作成しなければならない」。オットーが問いかけた、「イキ、お願いする、電報を作ってくれ。私は豊田との会談の後で何のやる気も起きない」。「心配なく、エイゲン。いつも通りにやる。ベルリンを和らげよう」。

数時間後、ベルリンに、電報が届いた、オットーの署名入りの：「相変わらず、日本は決めなかった、実行すべき何の歩みも。日本がサハリン問題に関してロシアと行っている交渉をダメにすることは難しくはない。しかし、これは日本政府をしてロシアへの宣戦布告へ突き動かすであろうか」。

返事は9月初めに届いた。オットーはその内容をゾルゲに伝えた、これについて話をしながら、リップントロップは通信で暗澹としていると、日本はソビエト連邦に対して戦争を始めないとの。

**インベストが話した、9月15日の後に、  
ソ連邦は完全に解放されるであろうと。**

日本が北それとも南に進出するかの問題は、調整委員会の最終決定によっていた、政府と帝国参謀部の。

9月3日、調整委員会は第50回の定例会議を招集した。書類「帝国の政府政策実現の課題」を審議した。

基調報告者は、日本の陸軍の参謀本部長である杉山将軍であった。彼は特に強調した：「我々は北で、2月まで、大規模な作戦を展開することは出来ない。このため、北での行動のため、我々は、急いで南での作戦を行わなければならない。もし我々が遅れることなく進軍するならば、作戦は翌年の春まで延びるであろう。しかし、我々は手間取る。これ故、北での行動をとることは出来ない」。

しかし、1941年9月6日、帝国会議で、「帝国の政府政策実現の課題」は最終審議にかけられた。

発言で海軍は直ぐに課題を出した。海軍の参謀本部長永野が指摘した：重要な軍需物資は、石油を含みながら、日ごとに少なくなっている。それは積極的な行動をする帝国の能力に相当している。そのような状況は極めて危険である、特に、極東における重要な地域のアメリカとイギリスの防衛と、彼らの武力は急速度で増大している故に。「来年の後半には、アメリカの軍の準備は極めて進み、我々にはそれを抑えることは難しくなるであろう」。永野が語った。もし近いうちに南方へ進撃することになったならば、容易に成功を得ることは出来るであろう：「海軍、イギリスが極東に向けることが出来る、はヨーロッパにおける最近の戦争のために、制限されるであろう。そこから結論が出る、アメリカ海軍との衝突の場合には、空軍と他の因子を考慮して、我々の勝利に多きなる期待を持つことが出来る・・・」

杉山は再び「北方問題」に触れた。彼が話した、満州と朝鮮における軍の集中の強化に関する適用される手段は、あらゆる予想外のことから守っている、さしあたり、日本軍は南方で戦闘行動を行えるであろう。もちろん、アメリカとソ連邦の間に連合を形成させる危険性はある。しかし、差し迫っている冬期におけるどんな場合においても、北方における大規模な軍事行動は、天候条件故に極めて困難なものとなる。もし、アメリカとソ連邦が力を合わせるならば、冬期には、空軍と潜水艦の利用に関する彼らの能力は大して大きくはないであろう。杉山の判断の論理は申し分なかった：「もし、我々が冬期を利用し、南方での軍事行動を急いで完遂するならば、私は思っている、北方における状況のどんな変化にも受け入れる準備が出来ていると。来年の春に起こりえる、或いは、その後の時期に。他面において、冬期が我々に提起している可能性を見逃すと、南方での行動の手段で、北方における安全を保証することができない」。

杉山は少し沈黙した、全ての出席者が、自分の話したことの意味を飲み込めるために。その後、天皇に向かって話した：「さらにもう一つの問題がある。その問題を私は特に強調したかった。南方に進撃すると、帝国は自分の力だけを頼りにすることとなる。同時に、ドイツとイタリアに早めに我々の意向を伝える必要がある、戦争開始前までに彼らとの同意を得るために。彼らがアメリカとイギリスと単独和平を結ぶようなことをさせないために」。

会議場には賛成のどよめきが響き渡った。叫び声が聞こえた：「ドイツは一度我々を裏切った、ノモンハンの時に！」杉山は腕を振った：「すなわち、これ故に、そのような

協定の締結を、私は戦争遂行のために特に重要であると見なしている。ドイツとイタリアはイギリスを跪けさせるために自ら共同の努力をしなければならない。同時に、我々は自分の政策を実行し、南方作戦の遂行を拒否してはならない、ドイツとイタリアには好ましくはないのであるが」。会議場には再び賛成のどよめきが聞こえた。

会議の後直ぐに、ゾルゲは尾崎から打ち合わせの信号を得た。レストラン「インペリアル」で、昼に出会った。

尾崎は秘密会議の決定の内容の抜粋を伝えた：

「日本は南方への進出の政策を維持している。これは第1。第2：10月後半に、我々の要求がアメリカによって満足されるという期待を失うならば、我々はアメリカ、イギリス、オランダとの戦争の準備をする必要がある。第3：「オツ（？ ＊）」と「関特演」の計画は従って延びることになる。これが全て。南方方向への海軍の差し迫った行動についての情報を宮城は確証した。私は彼と出会った」。

ゾルゲはタバコを吸い始め、別れの挨拶をした。尾崎の情報は十分な再検討が必要とされた。このため、ゾルゲは直ぐにドイツ大使館に向かった。

オットー大使は尾崎の情報を裏付けた。

「ゾルゲが長崎通りの自宅に戻ったときには、既に夕方となっていた。仕事に取りかかった。まず最初に、ゾルゲは机の上にあるオレンジ色の竜の模様の入った笠付きの電気スタンドのスイッチを入れた。それを窓に近づけた。これは直ぐに接触したいという合図であった。これはクラウゼンが自分の車で傍を通った場合に備えてのものであった。自宅へ戻るとき、通常では、クラウゼンはゾルゲの自宅の傍を通り抜けていた。

ゾルゲはかなり使い古した統計便覧を棚から取り出した。古い便覧はゾルゲに信用と真実を持って役に立ち続けていた。この便覧は暗号伝達における鍵となっていた、完全に自分で、言うことを聴いてくれる、そのたびに新規である。これ故、解読することが出来ない。同じような便覧がクラウゼンとブランコ・ビーケリッジのところにもあった。頁を開くことだけが必要であった、暦の日にちに対応した。更なる暗号化はそれほどの苦勞を要しなかった・・・紙の上に、5桁の数値群が現れた」。

日曜日となった、9月14日。ゾルゲは待ってられなくなり、自分でクラウゼンの所に出かけた。前もって公衆電話で彼に電話をした。クラウゼンはいた。ゾルゲは彼に暗号化した文書を渡した、直ぐにモスクワに送信するように頼んだ。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年9月14日

情報提供者インバストが満州に出発した。彼が語っている、日本政府は今年に露連邦へ進撃しないことを決定したと。が、軍力は来年の春における進撃の可能性を持って満州に残すことになる。その時点におけるソ連邦の打破のために。

インバストが強調した、ソ連邦は9月15日以降、完全に解放される（文言が明確ではない）。

情報提供者インテリが伝えた、第14歩兵師団の一つの大隊が北に派遣されるに違いない、東京の親衛師団の兵舎に残っている。

ボロシロフ地区の国境線にいる将校や兵士からの手紙から明らかである、彼らはムダニツジャン地区に展開されていることが。

第86号。インソン。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年9月14日

ドイツ大使オットーは全ての期待を失った、ソ連邦への日本の進撃に対して。白鳥（日本の元イタリア大使、この時外務省で働いている）がオットーに語った。日本が戦争を始めるとすれば、南方であると。そこでは日本は資源を手に入れることが出来る一石油と金属。北方では日本は十分な援助を得ることは出来ない。

海軍の知人の一人が、パウラ（東京のドイツ大使館の武官）に語った、ソ連邦への日本の進出はたいした問題ではないと。海軍軍人達は近衛とルーズベルトの交渉の成功を信じていない、タイとボルネオへの進撃の準備をしている。彼は考えている、マニラを占領しなければならないと、これは即ちアメリカとの戦争を意味している。

第87号。インソン。

1941年9月14日のインソンの電報に関するメモ。第89号

東京

伝える、海軍代表と白鳥が、東京にいるドイツ大使オットーとドイツ海軍武官に語った、アメリカとの交渉は最後の試みであることを、国民と大資本家達に、アメリカとの理解の達成は不可能であることを示すために。もし、アメリカとの交渉が不成功に終わるならば、日本は遅くなく南方へ進出する。近衛と大資本家達は期待している、アメリカとの理解はその内に達成されることを。

その通り：プロフチェンコ

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年9月14日

オットー大使の意見によれば、ソ連邦への日本の進出は今のところ問題外である。日本は次の場合にだけ進出する、もしソ連邦が極東から自分の軍隊の大部分を移動させた場合に。

様々な筋において、大規模な動員の責任を問う厳しい声が出始めている、膨大となった関東軍の維持費にも関して。この経費が国に疑いなく大きな経済上の政治上の困難さをもたらすことを。

第90号。インソン

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年9月14日

パウラ（東京のドイツ大使館の海軍武官）が私に語った、彼は信じている、ドイツの大進撃はドニエプル川を経由してカフカス方向となることを。

パウラは考えている、ドイツが近いうちに石油が得られなければ、ドイツは戦争に負けるかもしれないと。これ故、サンクトペテルブルクとモスクワ付近における闘争は多かれ少なかれ見せびらかしのためとなる。主攻撃はカフカスに違いない。

第91号。インソン

これらの一連の無線電報は、1941年9月19日付けで、事実上完全に諜報局の定期的特別通報に入れられた。特別通報は2つの章からなっていた。最初の章は「海外政策手

段に関する日本の右翼における戦い」、次の章は「日米交渉」。最初の章の締めくくりとして次の結論がなされていた：「これらの全てのデータは、日本政府内部で起こっている戦いに関して直接の関係を持っている、日本の外交政策と関係した問題に関する。しかし、日本の右翼における一致の不在にもかかわらず、ソ連邦への襲撃のために準備している軍事手段の緩和の兆候は全くない」。第2章では簡単に総括されている：「このように、日米交渉において、明らかに、近いうちに、両方の側の間に何らかの合意の達成という実際の可能性を作り出した。しかし、エージェントの報告から判断すると、日本政府はとにかく巧みに切り抜け、様子を見ている、それなりの責任を自分でとることを避けながら、もしかしたら3国同盟を破る」。

このように、ゾルゲグループは事実上自らの課題を完遂した—日本政府の計画について通報すること、西部でのドイツの侵攻という厳しい時期におけるソ連邦は極東での自分の安全に危険が及ばないことを。

これら一連の無線電報の中で、当惑を引き起こしている、ドニエプル川を經由してカフカスへのドイツによる新しい進撃の準備についての通報が。ゾルゲはベネッカーの意見を引用している。明らかに、海軍武官は同じ論理をドイツと比べることを試みていた、日本に対して。日本は原油の在庫が限定されていた。しかし、そのようなことの到来は、ドイツの参謀部は後のことと計画している。当時、ドイツ軍はモスクワへの決定的な攻撃を加えるために軍の集中を行っていた。

## **新聞「フランクフルト・ツァイツング」の ゾルゲ博士の新しい記事**

9月4日、新聞「フランクフルト・ツァイツング」にゾルゲの新しい記事が掲載された、題名は「日本は封鎖に逆らっている」。それは1941年8月末に署名されていた。記事の最初で、日本政府の決定について書いていた、「3国」からの資源の調達を拒否し、日本帝国自身の経済的可能性を考慮に入れるという。同じように、東アジアの国々、既に日本と密接な結びつきにある（満州国、南京政府が支配している中国領土、インドシナとある程度までのタイ）。まさにそれにより、ゾルゲは結論づけた、「日本政府は事実上初めて事実を受け入れた、日本は殆ど完全な封鎖を被っていると、アメリカ、イギリス帝国、蒋介石政府の支配する中国、オランダ領インド側からの」。この封鎖の始めは基礎をおいた、アメリカが警告手段として、1939年に日本との通商条約を破棄したときに、1911年から実施されていた。その後、様々な手段が着手された、日本への若干の重要な戦略物資の輸出を阻止することがその目的となった。これらの手段は警告の特徴を持っていた。しかし、それらは日本政府に影響を示さなかった、南インドシナの日本軍の占領が引き続いた。これに対する返答として、アメリカ、イギリス、オランダ領インドシナにおける日本の全ての活動が凍結された。その結果、日本の完全封鎖が到来した。

これは、もちろん、日本の経済にとって大打撃となった。アメリカとイギリスが日本の輸入需要の50%以上をまかなっていたので。オランダ領インドシナも一緒にすると日本



の戦略物資のうちの70%。この記事に従うと、資源である石油とガソリンは日本ではそれ以上であった。同時に、経済関係の破綻の結果、外国為替の流入は激減した、日本の増大する需要の支払いのために必須な、資源と武器における。

ゾルゲは結論づけた、「今日、封鎖はまるっきり経済的立場の限界を超えた・・・ 軍事的政治的攻撃手段に変わり始めている」。ここでゾルゲは極めて重要な批評を差し挟んでいる：「封鎖が完全となるためには、その参加者として拠点としてのウラジオストクを有するソビエト連邦を引き入れる必要がある。「ウラジオストク、北のシンガポール」という表記は、政治討議において知られた役割を持ち始めている」。このように、間接的な警告がなされた、もし日本がソ連邦に進撃をするならば、これは日本の状況を増大させるだけであり、既に西側の国々が始めている日本の包囲の完成に導くことになる。

ゾルゲは断定した、「日本は封鎖との戦いを始めた」と。第一に、戦争遂行に必要なではない全ての商品の輸入を縮小した、為替で手に入れられる。例えば、原綿の輸入はこれに触れた—アメリカからの重要な日本の輸入品目の内の一つ。他では、以前にはアメリカから到達していた物の代わりに、未熟な日本の自動車産業を基礎にして自前のトラックを生産することを始めた。

そのような方法は厳しい経済に「軍事に関係した重要な資源と材料の送達を拡大させただけではなく、日本の軍力の異常な増大と改良を可能なものとした、在庫を増やし、その量は不明となっている」。これらの蓄えは封鎖に対する日本の抵抗を保証する。

他面においては、封鎖は日本政府に強いた、管理地域の資源の開発を強力に推し進めることを。記事で結論づけている、「基本が設定された。それを元にして、封鎖を眼前にして、準備するだけではなく、明確な目的を持って、重要な資源と生産物を利用する」。この際、管理する地域の資源は十分豊富である。鉄、石炭、重要金属、綿、天然ゴム、米、その他を含んで。

唯一の大きな問題となっているのが原油である。まず第一に、その十分な在庫は日本には不足している。ゾルゲは指摘している、「日本の支配」から直接の近傍にある2カ所の原油地—北サハリンとボルネオ—について。この際、重要な但し書きをしている：「サハリンは非常に評価が悪い」。ゾルゲの意見によれば、「石油不足の除去はただ時間の問題である、もちろん、その際、明確な問題が残されている、日本の供給を充足できるのか、石油産出国との平和な交渉の手段によってのみ、これらの国から十分な量の石油を」。

結局、結構予想外の要約：「日本の抵抗には一つの力がある、封鎖の厳しさを限界におく、回りの政治と同じように、敵によってなされた。これが日本の軍事力である。見破ることは決して容易ではない。時折、非常に激発しやすい日本人の特徴はいつも日本の敵を緊張させている。敵に決意させない、封鎖の無慈悲の実行と回りの政治を。ここに、抵抗の日本の力の本質がある。

このように、ゾルゲ博士はさらに一つの信号を送った、日本政府の準備についての、北より南へ直ぐに進撃するという。この信号において、警告の形をとっただけではなく、「自己弁護的な予言」の形も。ゾルゲの結論に、ベルリンでも東京でも皆は何時も注意深く耳を傾けていた。若干の研究者の説によれば、「フランクフルト・ツァイツング」のゾルゲの記事は近衛に大きな影響を示し、断固とした拒否の原因となった、(ドイツからの \* ) 特別使節シタメルへの、シタメルはソ連邦への進撃を日本に説得するために東京にやって

来ていた。見なす根拠がある、ゾルゲの結論に対して、ロンドンもワシントンも耳を傾けていたという、当時東京のジャーナリストグループ内で日本に関して有名で指導的な専門家である、ラムザイの結論に対して、同じようにモスクワも耳を傾けていた。

#### 政治諜報の通報

ハルビン、1941年8月29日

8月27日に、モスクワからやって来た日本の外交官のうちの一人が、地域の日本人との秘密会合で話した、「いうまでもなく、ドイツは見込み違いをした」と。ソ連邦への進撃を「ヒットラーの冒険」と呼んだ。モスクワにいる日本の大使の意見によれば、ソ連邦は春まで持ちこたえる。この情報は、ソ連邦への日本の早急な進撃を期待していた現地の日本人達を非常にしらせさせた。個人的な会談で、著名な日本人（古沢 \*）が語った、一般的に、ソ連邦との戦争は避けられないと。期日は西における軍事作戦の進展次第である。彼はほのめかした、「春まで静観している」ことを。

（誰が誰に？ \*）

### 「極東の、支えは確りして・・・」

いつも通り、スターリンはゴリコフの報告を黙って聞いた、手にタバコを持って室内をぶらつきながら。「報告は以上です。スターリン同志」、諜報局長は公式に報告した。スターリンは未だ沈黙しながら室内を歩き回った。ゴリコフの前で立ち止まり、ゴリコフを直視して、問いただした：「それで、東京にいる君のドイツ人の情報を信用することが出来る、と君は考えているのか？ 何故だ？」 ゴリコフは前もって返答を準備していた：「彼の情報は国境諜報の証拠を裏付けています、日本は国境線から軍隊を引き上げているとの」。「が、もし、そのようにして、彼らが我々を誤解させようとしているならば？」

ゴリコフは感じた、額に汗が噴き出るのである。が、それにもかかわらず、断固として語った：「そのようなことはありません、スターリン同志。諜報の資料から確定されました、日本は冬の準備をし、兵舎と住居の建設に取りかかっている事が。それ以外に、軍の大部分の南への移動に関して情報源の証拠が裏付けています。北中国から満州への同じような軍の移動は記録されていない」。

スターリンは室内を再びうろつき回り、ゴリコフの前で立ち止まった：「よろしい、ゴリコフ同志、君を信用する。退室してよろしい」。ゴリコフは向きを変え、去って行った。

スターリンは机に近寄った。その向こうにはモロトフが座っていた。「ところで、ビャチェスラフ（・モロトフ）、君はこの結論をどう思う？」 モロトフは鼻眼鏡を外し、それをハンカチで拭いて、再び元のところに据え付けた。注意深く言葉を選んで話した：「私は思います、日本にとって、現在は北より南が重要であると。戦争をするためには、日本には資源が必要である。が、今はそれが無い。日本は中国にはまり込んでしまっている。我々の外交情報、海外の印刷物での公表によると、日本にとって、アメリカとの交渉は上手く進んでいない。同時に、アメリカ、イギリス、オランダは日本とその回りに厳しい封鎖の政治を行っている。もし日本が我々に進撃するならば、包囲環は閉じることになる。日本はこれを理解していないわけではない。これ故、私は思う、近い未来は、日本は我々に

侵入することは出来ない」。スターリンは窓辺に近づき、沈黙して立ち止まっていた。その後、モロトフに向かって、「俺もそう思う、ビャチェスラフ。しかし、ラブレンチャー（ベリア）と話し合う必要がある」。

ベリアはいつも通りに、夜遅くにやって来た。その時には最後の訪問者は既に去っていた。「どうだ、ラブレンチャー、新しいニュースか？」 「主人」の気分を何時も確りととらえようとしているベリアは慎重に話をした：「良いニュースがあります。我々の情報によると、ハルピンからの、モスクワにいる日本の大使が東京へ通報した、ドイツは見込み違いをしたと。個人的な会談で、ソ連邦への進撃をヒトラーの冒険とも呼んでいる。これは東京における若干”熱くなった頭”を大分冷やした」。

スターリンは厳しく質問をした：「君は同じく考えているのか？ 近いうちに我々を襲撃する危険を日本が起こさないと。が、君は通報した、私が理解している限りでは、アメリカの意見によれば、日本の南方への準備は、我々への襲撃の準備のカモフラージュであると」。ベリアはこの「同じく」を自分のためとして気づいた。彼は理解した、スターリンは何かを彼から聞いたがっていることを。それどころかアメリカとイギリスからの情報源からの情報に関して「主人」の関係を知りながら。そして、再び注意深く話した：「全てがどうやらこれを示しているらしい。しかし私は思っている、全てをもう一度注意深く調べ、よく考えることが必要であると」。スターリンは、モロトフとの会談と同じように、窓辺に近づいた。窓の向こうは暖かい9月の夜であった。「その通りだ、ラブレンチャー。が、我々には時間が残っていない。予備隊も。決定をしなければならない、極東とシベリアから軍を撤退させる」。

9月11日、ГКО（国家防衛委員会）は第660号の法令を採択した。それに従って、その極東前線に基準量が決められた。51万1000人分の月の配給量、85万3709人の前線の名簿上の人数に対して。この命令を受け取って、前線の司令官アパナセンコは9月16日、スターリン宛に電報を送った。その電報で、前線の軍を現状で残してくれるように請願した、「日本との戦争を遂行する状態に準備させておくために」。9月21日、アパナセンコは参謀本部長に、前線の兵員数の削減に関する考えを提出した、非戦闘員を犠牲にしての79万人までの。アパナセンコは断固として主張した、そのような削減数を維持することを。彼は自分の報告書に書いていた：「私はこの手段（削減に関して一著者）を主張する、最高司令部に報告する、ソ連邦国防人民委員委スターリン同志に。とにかく、ГКОの決定した基準では、戦闘部隊さえ寝かせておかない。もし基準内の部隊を考慮するならば（鉄道部隊と建設部隊）、この基準は平時に於ける人員数より少ない。これ故、今年の9月11日付けのГКОの決定によって決められた基準に移行した場合、予備役から招集した者達を解放し、部隊の編成を解かなければならない。これは前線を極めて弱体化させ、軍の戦闘能力を維持することが出来ない。同時に、敵は我々の国境線に自分の軍団の集中を終了しており、何時でも敵対行動をする準備が出来ている。現在、特に極東での状況が緊迫している。

しかし、アパナセンコの論拠はスターリンを納得させなかった。彼（スターリン ＊）は既に命令を出していた、極東から10個師団とザバイカルから4個師団の移動に関する指令を準備しておくようにとの。これらは師団であった、戦時定員に従って補充された（1万4千人）、2個砲兵部隊と戦車部隊を有する。これらの合同軍の兵員は戦闘経験を持つ

ていた、軍装を良く支給され装備されていた。大事なことだが、戦闘に直ぐにでも参加したいという情熱に燃えていた。これは極めて恐るべき力であった。

それにもかかわらず、軍の移動は始めは極めて注意深く行われた。9月の半ばには、輸送列車に乗せられ、西方へ最初の4個師団が出て行った：ザバイカルの2個師団（第65師団と第114師団）、沿海州からの2個師団（第21ペルミ・赤旗師団と第32赤旗師団）。この行動が全く時期にかなっていたことは、10月初日に、ドイツ軍がブヤジマ地区で前線を突破した後に、明らかとなった。

9月6日、ヒトラーは命令第35号に署名した、東部戦線に於ける秋の大攻勢に関する。主力は今やモスクワ方面に再び移動した。「中央」軍団には9月末に遅れることなく進撃に移行することが指令された。ブヤジマ方面で2重の包囲環を作り出し、スモレンスクより東方のソビエト軍を殲滅することが。作戦は「タイフーン」とコード名が与えられた。

最高総司令部はモスクワ方面へのドイツの司令部の思惑を見破れなかった。これ故、前線の主力の集中地域はドイツの主攻撃の方向とズレてしまった。同じく、前線司令部の独自性の不存在もあった。司令部は全ての決定を最高総司令部に伺いを立てていた。モスクワ戦に於ける指導的な祖国の専門家であるネブゾロフが書いている：「西方前線の参謀部は、例えば、敵の軍団について十分に正確な情報を手にしていた：第30、第19軍団の8個師団に対して、ドイツは17個師団を展開していた；他の軍団の地帯において、関係はほぼ同じであった。偵察データは敵の攻撃のあり得る方向を直接に示していた。しかし、スモレンスクーブヤジマ方向であると、参謀部は見なしていたために、コーネフ将軍は文句を言わずに、主力を集中させた状況の条件が要求しているところではなく、彼に最高司令部が指示したところに」。

オリョール方面へのドイツ軍の進撃は9月30日に、ブヤジマ方面へは10月2日に始まった。グーデリアンの戦車軍団の自動化師団が、ブリヤンスク前線の左翼の軍に対する攻撃が最初であった。10月1日に終わりには、ドイツ軍は前線を80km奥まで突破した。

10月2日の早朝に、「中央」軍団の全ての部隊と参謀部で、ヒトラーの声明が読み上げられた。いつも通り、総統は多弁で気取った表現でドイツ軍兵士達に伝えた、最後の偉大な始めについて。彼の言葉によれば、東部前線に於ける決定的戦いの。この同じ日に、ホートとギョプネルの戦車師団と自動車師団は攻撃を行い、西部前線の防衛を突破した。10月3日、グーデリアンの戦車隊は約200kmを進み、オリョールに突入した。ブリヤンスク前線の部隊に、包囲の危険が迫った。

ソビエト軍は大砲と反撃によって、ドイツ軍の進撃を阻止しようと試みた。が、主攻撃の方向に大損害を被り、退却した。10月7日、敵は包囲網を閉じた、ブヤジマの西方のソビエト軍の回りの。状況は破滅的となった。

同じ頃、東京では、ゾルゲは積極的に裏付けの収集を続けていた、日本がソ連邦へ進出しないということの。10月6日後に、大連で会議「日本の政治と経済に対する新情勢の影響について」が開催された。尾崎は、ゾルゲの要請に従ってこの会議に参加した。その後、長春、ハルピンを訪れて、東京に戻ってきた。旅行中、彼は多くの様々な情報を得た。鉄道の状況と満州に於ける日本軍の鉄道移送計画について触れるような。これ以外に満鉄

の同僚から尾崎は知ることとなった、軍の大移動と供給不足に関係して、満州に於ける経済状況が悪化しているとの。

尾崎は満州にいる日本の師団の番号を知ることではできなかった。師団は司令官の名前で呼ばれていた。司令官の肩書きに従って、これが師団なのか大隊なのか決められていた。満鉄の同僚から、尾崎は情報を得ることができた。この2ヶ月間で、満州に約40万人の新兵が移動されてきたことを、満州の日本軍の全兵力は70万に達したことを。

尾崎は同じように、補足的な具体的情報を知ることとなった、今年日本はソ連邦には侵攻しないと。特に、関東軍司令部は冬期に軍を南方へ移動することを決定した、満州の北部に配置されている。軍の一部分は日本へ送還された。得られた証拠において大事なことは、中国北部の軍団が満州に移動されなかったことであった。北中国からそこへは3千台のトラックなどが派遣されていた。その際、千台のトラックはその前に満州から北中国に派遣されていたものであった。ついには関東軍司令部は自分の命令を取り消した、3千人の熟練鉄道員の動員についての。シベリア鉄道に沿っての軍事通信設備の設置のための、それはソ連邦への進撃の準備の1週間に渡された。

ゾルゲは尾崎の報告に注意深く耳を傾けた。最後に語った：「これら全ては示している、今年戦争はないことを」。リヒャルトが語った、「私は納得した、これは確かな証拠であると。私はこれを直ぐに中央に伝える。しかし、今、我々の前にもう一つの課題が立ちふさがっている。私にオットーが話したように、シタメルが特別な問題を持ってやって来ている：ソ連邦に対する戦争行動のために日本の潜在的な可能性を発揮する。上手く行かなかった、彼が何らかの証拠を掘り出すことに、日本の能力の、南方だけではなく北方へ侵攻する、”大戦争”の同調者達の支持を得る。近衛に注意深くほめかす必要がある、シタメルは断固とした課題を持って日本にやって来たことを、実際には。私はその時には新聞「フランクフルト・ツァイツング」に記事を送るのに取りかかっていた。

尾崎の情報を持った無線電報は、10月3日と4日にモスクワに届いた。このシリーズの通報の最後で、ゾルゲは結論づけていた：「これらの全ては示している、今年には戦争は起こらない」。

1941年10月3日付けの第98号と第99号のインソンの電報のメモ

東京

通報する、インベストの資料によると、アメリカへのイカツキ（アメリカの日本大使館の責任者）帰還と共に、日米交渉は最終段階に入った、近衛と海軍の高官の会談後に。

近衛はある段階まで楽観的であった、中国における日本の武力の大幅な削減、中央と南中国の大きな部隊の削減の道を見いだすことに。同じように、インドシナでの8つの航空基地と海軍基地の建設の削減に。

もし、アメリカが10月中旬までに現実的な妥協に達しなければ、日本はタイに向けて侵攻する。その後、シンガポール、マレーシア、スマトラに。ボルネオへの侵攻は予定されていない、というのは、シンガポールとマニラが両翼となるから。

日本は見なしている、スマトラの防衛はボルネオより弱いと。その石油の資源は極めて大きく良質である。

しかし、この進撃は、日本とアメリカとの間の交渉が決裂した場合だけである。

日本側から、全力が注がれている、アメリカとの合意を得るために、ドイツ側の注意に気をとられることなく。

(誰から誰へ \*)

その間に、西での出来事はソビエト軍にとって崩壊の方向に拡大し続けていた。包囲に陥ったのは、15個軍団のうちの7軍団、95個師団のうちの64個師団、13個戦車旅団のうちの11個旅団、62個砲兵連隊のうちの総司令部配置の50個連隊。包囲されたソビエト軍は絶望的であった、ブヤゼムスクとブリヤンスクの包囲を破る試みは成功しなかった。調査報告によると、モスクワ手前での戦闘の最初の2、3週間で、赤軍は100万人を失った。その中で、ドイツの情報によれば、約68万8千人が捕虜となった。

ブヤジマとブリヤンスクでの勝利は第三帝国に歓喜の爆発を呼び起こした。「東方行進」の開始後、初めてヒトラーの声明が公表された。声明は喝采を受けた、「敵は粉碎され、二度と立ち上がれなくなった」として。ドイツの新聞の第一面で、巨大な見出しが叫んだ：「東部戦線の中央部が破壊された！」、「東方への行進の入り口が決まった！」、「ソビエトの最後の師団が粉碎された！」

10月8日、西部前線に於ける状況の分析のために、レニングラードから至急に呼び出されたジュコフはスターリンに報告した：主要な危険は、モスクワへの全ての道が開かれていることであると、モジャイク線に於ける弱い援護は敵の装甲軍のモスクワ前面の突然の出現にから守ることが出来ない。直ぐに軍を集中する必要がある。そこから出来るだけ早く、モジャイクの防衛線に。

このような状況下で、極東とザバイカルから軍の移動の継続が決定された。政治諜報の線からの若干の通報がゾルゲの情報に矛盾していたにもかかわらず。

#### 政治諜報の通報

上海、1941年10月20日

我々の情報に従うと、日本の軍指導部は見なしている、ソ連邦との戦争の問題は解決され、適当な時期を待っていると。ドイツは確信している、ドイツによるレニングラードの占領後に日本は進撃すると。もし、日本政府が同盟から離れるならば、軍は内乱を始めると、天皇の殺害に至っても。

ソ連邦との戦争の可能性を確認しながら、日本は極東に於ける赤軍について、カムチャッカ、オホーツク、ベーリング海における海軍基地と空軍基地について、鉄道についての情報の収集を始めた。日本の参謀本部では確信していた、ウラジオストクは10月には封鎖され、同時に、朝鮮から進撃が始まると、モンゴルからペルフネウデンスクへ。

ソ連邦との戦争に否定的であった参謀本部中にある重要な軍人のうちの一人が述べた、明らかにこれは避けられない。彼の言葉から、満州に20個師団と戦車隊が集中された。台湾、南海、福建からの全ての歩兵部隊は北中国に派遣された。

(誰から誰へ? \*)

極東前線から、3個狙撃師団(第92、第78、第413)と1個戦車師団(第60)を引き抜いた、ザバイカル前線からは1個自動車化狙撃師団(第82)、と1個狙撃師団(第93東シベリア)を。移動された合同隊から、1個狙撃師団と1個戦車師団が北西前線へ、残りは西方前線へ派遣された。

10月26日、東京のНКГБ(国家保安人民委員部)の代表から電報が届いた、その中で代表は伝えていた、ソ日関係の進展について彼の視点を。日本の影響ある政治家の一人との個人的会談を引用しながら：

「貴方は知らなければならない、ドイツと日本の関係はそれほど良好ではないことを、これは一見してわかることでもある。今週、ドイツは何回か日本に要求した、ソ連邦に侵攻し、シベリアを占領するようにと。しかし、日本はこれをしたくはない。天皇自身がソ連邦との戦争を。これが理由で、ドイツは極めて日本に対して不満である。大島は長い間リップントロップと会談することが出来ていない。リップントロップは大島に会いたくないのである。オトターは不満だらけで、豊田を非常に怒っていた。日本には、多くの政府活動家達がいた、3国同盟の締結は間違っていると見なしている。内閣は次第に同盟に対する自分の立場を変えていった。これ故、近衛が新しい外務大臣を任命したのは偶然ではなかった、海軍からの人物を。しかし、満場一致ではなかった（数週間前に、近衛の暗殺未遂で4人が逮捕された）」。

現状の日本の政治に触れ、対談者が述べた。主要で差し迫った日本の課題は、4年も続いている中国事変を解決することである。「もちろん、そちらは私に質問をする、何故日本は動員をかけ、ソ連邦国境に軍の集結を行ったのかと。答えは次の通り：政府には2つの意見が存在している：一つは、ソ連邦国境への最大限の軍の集中、2つめは、平和的手段で全ての問題を解決すること。

これ以外に、現在行われている交渉に関して、アメリカに印象を与えるために、この軍の集中は我々によって行われた。アメリカはドイツとソ連邦の単独和平を非常に危惧している。我々はこれを考慮している。これ故、我々のアメリカとの外交において、ソ連邦は我々に他の手段をとるように要求している。ソ連邦に関しては、我々は一つを希望している、ソビエト連邦は蒋介石の援助を拒否すると大声で声明を出すことを。もしそうなったならば、我々は日ソ関係の希な良好化の証人となるであろう」。

モジャイスク方面では、時々刻々と状況は悪化していった。勝利で鼓舞され、良く武装し、訓練済みのドイツ軍に対して、僅かで貧弱な合同軍が行動した。10月初めの崩壊の後、再編成された師団の各兵員は出来事に圧殺された。兵士の武装は貧弱であり、指揮官を信用できなくなっていた。精神的ショックの状態で、自分の行動をコントロールする能力を失っていた。耐えがたい恐怖、特にドイツ軍戦車と飛行機を前にして、敵の第一次攻撃時に彼らを包囲した。首都への脅威が増大した。前線は首都まで75kmの所となった。

その日の大きな出来事はモジャイスク方面で転回された。ここへ、4個軍団からなるドイツ第4軍の大攻撃が向けられた。

10月14日、ドイツの第10戦車師団と親衛隊師団「ライフ」がロシアの聖地であるボロジノに進出した。モスクワまでモジャイスク幹線道路に沿って100kmまでとなった。当日、首都から北西方向に160kmのところドイツ第1戦車師団がカリーニンを占領し、モスクワレニングラード鉄道を遮断した。南翼でゲーデリアンの戦車がツアーを迂回し、南からモスクワを襲う危険が生じた。首都ではパニックが始まった。

ボルコゴノフがその時のことを書いている：「10月17日か18日の朝、スターリンは自室に、国家防衛委員会、政治局、軍の役員を招集した。モロトフ、マレンコフ、ミコヤン、ベリア、ボズネセンスキイ、シェルバコフ、カガノビッチ、ワシレフスキイ、アルテムエフがやって来た。挨拶を交わし、スターリンは全員に着席するように語り、直ちに

命令を出し始めた：今日、重要な社会及び政府の活動家を避難させること、大工場に地雷を施設すること、モスクワが占領された場合にそれらを起爆させる準備をすること。モスクワへの全ての入り口に、対戦車及び対歩兵障害物を設置すること。ここで決定された、動員計画で記述された通り、政府はクイビチュフに疎開する、参謀本部はアルザマスに。少し沈黙した後、スターリンが付け加えた、彼は良好な結果を期待していると：シベリアと極東から師団が到着し始めている。軍用列車への搭載は既に始まった」。

しかし、同じ頃、ザバイカルと極東からの最初の師団は既にモスクワとレニングラードに到達していた。最初の師団の内の一つがポロスフィン大佐の第32赤旗狙撃師団であった。その2つの連隊が10月12日以降、ボロネジの防衛に従事した、2日後、モスクワに突撃しようとするドイツの戦車との戦闘に進撃した。西部戦線の指揮に従事していたジューコフに報告した、「ポロスフィンの師団は期待できる。ポロスフィンは熟練した指揮官である」。ボロネジ村の平野で、コロチ川とエレンキ川の岸で、激しい白兵戦を展開していた。戦闘は5日間止まることはなかった、住民地区は手から手と何度か渡された。ソビエト軍はモスクワの戦闘の始めから、初めてドイツの戦車を前にして慌てふためいて逃げることはなかった。が、ゆっくりと後退した、武器でくってかかり、間断なく敵に反撃を加えながら。

12日の激しい戦闘の結果、敵はただモジャイスク要塞地帯からソビエト軍を押し出すことが出来ただけであった。ミンスク街道に沿っての進撃を進めようとした試みは不成功に終わった。

ボック將軍は主攻撃の方向を北西に向けることを決定した。10月25日、ドイツの機動軍団はボロコラムスク・モスクワ街道に入る任務を持って北へ移動した。しかし、この日、ザバイカルの第82師団は、軍用列車から荷物を下ろして直ぐに、第25戦車旅団と一緒に、反撃をし、道路を閉鎖した。ドイツの第40軍団の侵攻を10日間にわたって食い止めた。10月末、極東の第78師団と第413師団は、軍用列車から直接にモスクワの戦闘に参加した。ザバイカルと沿海州からの5つの師団は、9月から10月にタイミング良くレニングラードに到達し、チフビンスクとマロビシエルスク方面でドイツ軍の突破をふさぐことが出来た。

10月末、モジャイク防衛線で敵は食い止められた。これにより、参謀部は新しい軍団を脅かされているところに移動させ、防衛を安定させることが出来た。極東からの軍の移動は継続された。11月初め、モスクワ沿いにさらに4個師団がやって来た：2個の狙撃師団と2個の戦車師団。各師団は直ぐに戦闘に参加した。再び第32師団が殊勲を挙げた、ドイツ軍にクビンカへ突破させなかったのである。11月末には、モスクワへのドイツの進撃は勢いを失った。

10月末には、ゾルゲは日米関係の追跡に完全に切り替えた。10月6日、ゾルゲは中央に送るための書類を作成した。それに書いていた、日本の内閣は待っている9月末を、アメリカとの交渉に関するアメリカ政府からの通報を得ることを。しかし、交渉は延期されている。日本政府はとにかく10月7日か8日のルーズベルト大統領からの返答を待っている。この回答は非常に重要なものとして日本の指導部は評価している。しかし、高位の外交官の情報に従うと、交渉の発展は日本の期待と矛盾していた。多分アメリカは次のように回答する：「審議にかける根拠はない」。



さらにゾルゲは示した、最近の状況で、内部問題は日本政府にとって深刻なものとなっている。これ故、次のように思われる、南方に於ける問題を調整しようとする、アメリカに対する日本の政府の要求はいい手段となっている、面目を失わない。今日までの交渉の進展は日本の期待と矛盾しており、高位の日本指導部の中で動揺さえ引き起こした。

ゲオルギエフが指摘しているように、この電信の手書き原稿は、クラウゼンの部屋で警察が見つけた、彼の逮捕時に。これらのことから判断すると、この通報は中央には送られなかった。

日本の警察は、ゾルゲを逮捕したとき、英語で書かれた電報の同じような書類を見つけた、ゾルゲが10月17日に作成した、ちょうど逮捕の前日に。中央に送ることが出来なかった。後になり、ゾルゲは尋問で説明した、彼は最初にこの電報をクラウゼンに示した、この電報をモスクワに送り出すために。しかし、その時ではないと少し考えて、それを取り戻した。

中央に送信できなかった、ゾルゲの最後の無線電報、

東京、1941年10月17日

日本とアメリカとの交渉で、もし満足のいくような結果が得られなければ、日本の内閣は再改造されるか解散することになる。これは次のことを示している、直ぐにアメリカの戦争が始まることを。日本がアメリカとの衝突を避ける、唯一の期待は、グルー大使と関係している。

ソビエト連邦との関係には意見が存在している、ソ連邦に対するドイツの勝利とソ連邦への侵攻は来春以降を待たなければならない；アメリカの問題と南方への進撃は、北の問題より重要なものとなっている。

12月と1月の軍への招集は、過去のものより大規模なものとなると見なしている。

10月に、貴方から500米ドルを手にした、ブーケリッチの妻の旅費の支払いのためとして。

我々は深い同情の意を示す、貴方のドイツとの英雄的戦いに対して。我々は深く残念がっている、ここに残り、何の助けも示すことが出来ないことに。我々は自分の仕事を知っている、そして信じている、国境を横断し、貴方へ向かうか、ドイツへ向かうかすることが出来ると、新しい仕事を始めるために。指示を待っています。

インソン

## ゾルゲはモスクワを救ったのか？

モスクワ戦において、リヒャルト・ゾルゲの役割に関する論争は既に60年以上にわたって続いている。今では皆が知っている、彼の情報は、特に日本の意向に関する、全く正しかったことを。しかし、従来通り、問題として残っている、どれだけがスターリンによって決済として採用されたのかが。

西側の研究者達は断固とした視点を維持している、ゾルゲの情報はモスクワ戦で決定的な役割を果たしたという。60年代に出版された本「リヒャルト・ゾルゲの仕事」の著者であるデキンとストリの主張によれば、ラムザイから得られた諜報情報の御陰で、極東からの補強部隊がドイツ軍からモスクワを救った。この際、彼らは特別の研究を引用した、アメリカの歴史家ジョン・エリックソンによってなされた。その研究で主張されている、

10月から11月の間に、西部に11個狙撃師団が投入された。この作戦では25万人以上が負傷した。

時が経過しても、この状況は変わらなかった。イギリスの歴史家エントナ・ビボルの本「スターリングラード」(1998年)で、同じように主張されている。東京にいる重要なソビエトのエージェントであるリヒャルト・ゾルゲが暴いた、日本はアメリカに対抗して南方への進出を計画しており、ソビエトの極東に対してではないと。ビボルが主張している、「スターリンはゾルゲを完全には信用しなかった。しかし今回、彼の情報は無線傍受によって裏付けられた」。

祖国の専門家達の意見は多岐にわたっている。ある者達は思っている、ゾルゲはモスクワの救援において極めて重要な役割を果たしている。他の者達は、ラムザイの情報の価値の評価に極めて注意深く見ている。ついには、スターリンが採用した決定に対するゾルゲの何らかの影響を断固として否定する第3のグループが。デキンとストリの意見によれば、この理由は次の通りである。公式なソビエトの情報源は無視する傾向があった、極東とザバイカルからの軍の移動に関する手段を、その歴史的価値を最小とする。これはソビエト時代のイデオロギー的な見地を確りと説明できる—日本の侵略的意向の強調を目標とした、南方への進撃するという明瞭な決定にもかかわらずに。これに関係して、ソビエトの歴史家は不断において強調した、ソ連邦への進撃計画の作成の事実を、コード名「関特演」のもとで。それは実際において1941年7月中旬に準備された。このため、ソ連邦は極東に大規模な軍団を維持せざるを得なかった、実際にゾルゲの報告は、戦争を前にして、注目されなかった。

1995年に出版された本「戦争と平和の年に於けるロシアとドイツ(1941-1995)」で、アナトリー・スドプラトフ—伝説となっている将軍スドプラトフの息子—は父の資料に支えられて、結論を出している、「祖国の軍事史の著作と同じように、ドイツ人のスパイの回想記はスパイ機関の役割の過大評価と神話を作ろうとする意向で欠点を持っている。ドイツとソ連邦が被った軍事的敗北と損失は、ヒットラーとスターリンによるスパイ機関の警告的な結論の無視の結果となった」。ゾルゲの活動に関して、彼は主張している、「ゾルゲの悲劇は次の点にある、彼の英雄的仕事と情報は我々の司令部で利用されなかった。アメリカへの日本の差し迫っている侵攻についてのゾルゲの極めて重要な資料は、1941年9月~10月に於けるソ連邦に対するドイツの攻撃に関しての日本の不同意は、我々の古文書館にお蔵入りとなっていた。極東からの師団は1941年10月にモスクワに移動された、というのはスターリンは戦闘への他の予備兵団を準備していなかったから。ゾルゲの判断は考慮されたにもかかわらず、採用された決定に対して本質的な価値を持っていなかった」。

## **実際において、シベリア師団と極東師団は どのような役割を果たしたのか？**

極東とザバイカルからの基本的な軍団は、1941年10月末から11月初めにモスク

ワ近郊に到着した。時折、軍団は軍用列車から荷下ろしの後、直ぐに戦闘に参加した。9月から10月の期間に、ザバイカルと極東の前線から西部へ、14個師団が移動された。その中に、10個狙撃師団、1個の自動車化狙撃師団、3個の戦車師団があった。その中の大半(9個師団、その中に2個戦車師団と1個の機械化師団)はモスクワ方面に進んだ、残りはレニングラードへ、そこでの防衛強化のために。ドイツ司令部に「北方軍団」をモスクワへの進撃に利用させないようにするために。

最初の師団の到着の予定表から判断すると、その移動に関する決定は、9月15日後に直ぐにスターリンによってなされた。10月初めには3個師団がレニングラードの前線に到着した、1個師団はモスクワ近郊に(第32師団はボロデンスク平野での戦いに参加した)。しかし、残りの師団の移動の決定は、西部戦線での大惨事の影響下でなされた公算が大であった—ブジャマでのドイツ軍の突破。極東前線の司令部の断固とした反対と慌てふためいた電報にもかかわらず、採用された。

これは非常に強力な師団であった。平均でその補充率は90%を下回っていなかった。これ以外に、シベリア人は常に高い軍人氣質で優れていた。更には、ナポレオンとの戦いにおいて、「規律を乱す」—命令無しで戦いに飛び込んだ—行動で売り込んでいた。極東とザバイカルからやって来た多くの師団はハッサンとハルヒンゴールでの戦いに参加していた、戦闘経験を持ち戦いに突進した。これは非常に大事な条件であった。ブジャマでの敗北の後、我が軍の士気は、いうならば、全く上がらなかつたで時あつた。10万人が捕虜となった。

しかし、それ以外に、モスクワで戦っている師団の戦闘能力で、若い中堅の幹部の専門性の不足と、兵士の訓練不足が露呈した。これは戦争初期に於ける大損失に関係していた。初期の3ヶ月の間に、常備兵を280万人失っていた。それに変わって補充された兵は訓練不足であった。ネブゾロフが見なしているように、そこに潜んでいた原因は、

「20年代初めから30年代末まで、ソ連邦で毎年の召集定員は90万人以上であった。が、陸軍と海軍の限られた召集容量故に実務に就くのは30万人ほどであった。毎年60万人が軍務を外れるということになっていた。1941年夏には軍事訓練のない100万人が、召集兵の大部分を占めていた。このような人たちで軍団、部隊、中隊が形成され、モスクワの防衛の前線に向かった。彼らのうちの多くの者にとって、戦争の無慈悲な”基礎教育”の授業が最後のものとなった。授業には大量の血が流された」。

到着したシベリア師団と極東師団は勇敢に戦った、敵に著しい損害をもたらした。特に優れたのは、クリンの戦闘での第107自動車化狙撃師団である。第32師団と第82師団はモジャイスク方面で。マロヤロスラベツ、セルポフ、ツーラ、カルーガ、スフニッチで。第93東シベリア師団、第239狙撃師団、第413狙撃師団、第415狙撃師団、第122戦車師団は、巧みに、情け容赦なく敵を撃滅した。

モスクワの戦いで、英雄的に戦闘をした多くのシベリア師団と極東師団は親衛隊の名称に改名した。

約90個の定格ソビエト師団(定格師団には戦車部隊と砲兵部隊が含まれている)が包囲された、ブジャマでの惨事後、参謀本部は約100個の定格師団をモスクワ付近に追加投入した。ザバイカルと極東からの軍団がモスクワ方面に於ける赤軍の全戦力のほぼ10割を占めた。これ故、語っている、彼らがモスクワでの戦いの帰趨を決めたと。多分、

全く正しくはないであろう。しかし、もし彼らがいなかったならば、モスクワでの状況は、2倍も3倍も大変なことになる。特に、もし考慮に入れるならば、専門家達が考えているように、モスクワ方面への師団の追加された部隊は弱く補充された、或いは訓練の行き届いた兵員では全くなかったことを。

モスクワはどのようにゾルゲに耳を傾けたのであろうか？ ラムザイグループからの諜報通報の基礎のもとで、モスクワへの師団の移動の決定がスターリンによってなされた、と結論することが出来るのであろうか？ これを一義的に断定してはいけない。それ以上に知られていること、スターリンはスパイの報告に接していた、ある不信感を持って、特にゾルゲの。

よく知られている、スターリンは何時も全てにおいて自分自身しか信用していなかったことが。これは個性によるものだけでもたらされたものではなかった。明らかに、彼は良く理解していた、彼の指導の下で複雑化した体制の条件下で、ごく僅かの人だけを残した、確りと明けっ広げに彼に正しいことを話すことが出来るような人を。同時に、圧倒的な多数がただだ彼を信用した、或いは、彼を恐れた。スターリンのうぬぼれを、戦争の初期段階に於ける巨大な計算違いさえ、揺り動かすことが出来なかった。

しかし、ラムザイの情報がソビエト指導部で考慮されたと、見なすような根拠が存在している。イワノフが自分の回想記に書いている、1941年6月22日以降にスターリンの所ではどうもゾルゲについての意見が変わったらしいと。彼はゴリコフに二度質問した：「東京から君のドイツ人は何を書いているのか？」 諜報局の政治局長、その後、諜報局長のイリイチェフが密談でイワノフに伝えた、「ワシリエフ将軍が在席している場で、スターリンが話した、軍事諜報局は日本にスパイを持っている。彼の価値は軍団、いやそれ以上である」と。

イワノフの証言によれば、1941年9月に、東京にいるソビエトの武官が彼の特別な同僚に伝えた、極東とザバイカルからシベリア鉄道で軍の移送が始まったと。ゾルゲはこれについて秘密の経路で知っていた。

## 崩壊

ラムザイグループは長い間確りした安全な関係を保持することが出来ていた、クラウゼンが東京のいろいろな場所に無線局を設置したことなどにより。この際、送信場所は屢々変更された。クラウゼンは極力送信機を小さくした、何の嫌疑も受けないようにするために、それを分解し鞆に入れるようにしていた。

それにもかかわらず、ゾルゲは長い間感じていた、グループの回りの輪が縮まってきていることを。偶然にドイツ大使館のあるレセプションで、ゾルゲは耳にした、クレチメルが誰かに、新しい無線方位測定器について話したと、それは日本の参謀部の要請により日本に到着した。ゾルゲはクラウゼンに指令した、送信時間を極力短縮するようにと。これは助けとなった。新しいドイツの技術の適用によっての、秘密の非合法の無線所を見つけ出すという日本の対諜報の全ての努力を当分の間無駄にした。無線局は規則正しく電波を

出し続けた。その際、その毎に暗号を変更した、日本の対諜報員が解読出来ないような。

オットーからゾルゲはドイツ大使館への訪問を知った、日本の対諜報局長である大崎の。大崎が話した、怪しい無線局を彼らが探しているとの。そして、多分それを発見したとの。大崎はオットーに決定位置の地図を見せた。クラウゼンが住んでいた部屋の所が赤丸で囲まれていた。印の赤色の三角形にブーケリッジとゾルゲの家があった。そこからマックス・クライゼンは屢々送信をしていた。

他の説によれば、ドイツ大使館でのレセプションの一つに参加した大島が、ドイツの武官に、ドイツから最新の無線方位測定器を得られるように頼んだことは本当であると。オットーはその場に居合わせ、それについてゾルゲに伝えた。

痕跡をもつれさせるために、ゾルゲはクラウゼンに指示した、海岸にある茅ヶ崎の彼の別荘に直ぐに引っ越すようにと。ウアイトン（？ ＊）が書いているように、ゾルゲは命令した、マックスが大きな船を借り出すようにと。その船に、彼らは船室の特別な箱に無線機を設置した。箱には特別な鍵が取り付けられた。鍵を回すと爆発させることが出来た。危険な場合に備えて全ての証拠を消滅させるようにした。この船で、ゾルゲとクラウゼンは遠出の釣行を行った、「ビスパデン」（ウラジオストク）へ通報を送り出した。ウアイトンが書いている、「時折、クラウゼンは数字列をたたき出し、ゾルゲ自身は愛想の良い主人の役割を演じていた。彼が主催したパーティーに、日本の外務省、国際的新聞、ドイツの大使館、日本の高位の司令部からの客を船で迎え入れて。そのような場合には、良くあるように、アルコールはつきものであった」。

東京に到着した新しいドイツ製の無線方位探査器は、もう秘密の無線局を見つけ出すことは出来なかった。時は経過した、日本の無線士がクラウゼンの無線機を再び発見できる前に。日本の対防諜機関は困惑した一信号は日本の領海の限界より遠くにある所からやって来ていた。送信は潜水艦から出されているのではないかという予想も語られた。

いろいろあったが、日本の対防諜機関は、迫り来る戦争と関係して大きな努力を傾けた。無線基地の跡に行き着くために。それを掴まえるために。無線愛好家、郵便、電報さえも対象となった。

疑いはない、ラムザイグループの者達が容疑者となったことは。しかし、東京に於けるソビエトの軍事諜報網の崩壊の原因にこれはならなかった。

現在では、十分に高い信頼度を持って、崩壊の様々な説を切り捨てることが出来る。以前には誇張された説、批評に耐えなかった説などを列挙する：

諜報機関ラムザイはドイツの特殊機関によって暴かれた、最終段階で、憲兵隊が加わっていた；

イギリスのスパイの暗黙の了解によって、30年代初めに中国の防諜機関によってゾルゲは暴かれた。それについては日本は後になって知った；

ゾルゲはソビエトの軍事諜報機関の直接の管理者によって引き渡された；

ゾルゲの諜報機関は日本の共産主義者（伊藤律）によって引き渡された。最近まで、この説が日本で公的に容認されていると見なされていた；

中国での事件に関係し、国境と税関の管理施設の通過の困難さにより、ラムザイ機関との非合法の出会いが日本で行うようになった、直ぐに日本の対諜報機関によって気づかれた；

ゾルゲは女性との愛情と不注意によって失敗した、日本の対諜報機関がつけ込むより先に。諜報機関は、ゾルゲの諜報活動の否定できない証拠を手にした、細かく引き裂かれた諜報報告書。

実際には全ては違っていた。今日ΦCБ(? \*)の書庫に保管されている戦利品の日本の書類が少し秘密を漏らしている。これは日本の政治警察(特高)の職員の賞状である、スパイ機関ラムザイの活動の捜査に積極的に関わった高度な専門性知識についての戦功報告以外に、日本の対防諜機関の根気と洞察力が、ラムザイグループの最後の日々について新しい事実を明らかにした。

潜在的な敵国からの外国人、敵国を訪れた日本人も、尾行を初めのは、1940年7月であった。当時、近衛公が政権を取っていた。当時、特命を受けた日本の大隊の無線士が不明な無線通信に気がついていて、何処の国が無線を利用しているのか、わからなかった。明らかに敵国である。誰か? ソ連邦かアメリカか?

1940年9月から、日本とソ連邦の間の不可侵条約の調印が準備されたということも考慮して、結論された:アメリカである公算が大である、アメリカは秘密情報に大いに興味を持っているはずなので。しかし、アメリカのエージェントは日本でどのように振る舞うことが出来るのか? もう一つの結論がなされた—アメリカから帰還した日本人のうちの誰か。

ある説によれば、日本の防諜機関によって、詳細な名簿「アメリカ人」が作成された、その中に宮城が入っていた、同じように日本に於ける彼の友人達も。アメリカと何らかの関係を持っている日本人を尾行・監視した。数ヶ月間にわたって全般的政治探査を行った、憲兵隊が数年間得ることが出来なかった。

最初に嫌疑をかけられたのは60歳の北林トモであった、1936年にアメリカから戻ってきていた。東京では彼女は最新の裁縫師として評価され、彼女の顧客には将軍や上流階級の婦人達がいた。皆が好奇心に注意を払った、彼女は好奇心を示した、著名な注文主(高位軍人や外交官の妻達)の寸法をとりながら。4年後の1940年に、彼女の夫が帰国したことが、疑いを深めた。日本の防諜部は確信を深めていった、北林はアメリカのスパイと関係していると。彼女に確りとした監察が行われた。そこに宮城が直ぐに捕捉された。

北林トモと彼女の夫芳三郎は1941年9月28日に逮捕された。

政治警察第1局の職員、副署長友藤竹虎(?)の賞状から

1941年6月27日、彼は友藤ケン(? \*)から重要な自白を得た、アメリカから帰国した北林トモはスパイであるとの。この自白を元にして、然るべき捜査を行った。このようにして、我々は大きなスパイ組織を暴くことが出来た。もし、副警察署長友藤竹虎の貢献がなかったならば、この事件での逮捕は考えられなかった。

副警察署長友藤竹虎の手に入れた資料に基づいて、署長田中登にスパイの疑いのかかっている北林トモの仕上げが委ねられた。北林の伴侶を1941年9月末に逮捕し、年配の裁縫師から警察は苦もなく任意の証言を手に入れた。その通り、彼女は隠す必要性を感じてはいなかった、アメリカで彼女の部屋に日本人の画家宮城が住んでいたことを。宮城は

同じく祖国に帰国していた。田中は重要な自白を得ていた、画家の宮城がスパイ活動に従事しているとの。が、北林は諜報の仕事には誘い込まれなかった。しかし、後になって彼は結論した、北林トモは全くのスパイであり、宮城はスパイグループの指導者の一人であると。

画家を逮捕し、警察は12日間にわたり彼の関係を調べ上げた。宮城の家に張り込みをした。画家の素行が記録された。宮城は10月10日に逮捕された。逮捕の際、思想の正しさと、敵への深い軽蔑の印として、宮城は切腹をしようとした。

政治警察第1局の職員、酒井ヤス（？ ＊）の賞状から

1941年10月10日、この事件の中心人物である宮城の逮捕に参加した。10月11日、高橋警察署長と一緒に警察署の2階で宮城を尋問した。隙を見つけて、宮城は窓から通りへ飛び出した、自殺するために。重傷を負う或いは死に至るかも危険を顧みずに、酒井は犯人の後に続いて飛び出し、彼を捕縛した。その後、入院した。20日間の入院を15日間で退院し、勤務に復帰した。警察官としての献身的な振る舞いは犯人に強い印象を与えた。犯人は証言しない気持ちを諦めた。

厳しい尋問は宮城に自殺することを再び強いた。宮城は殴打と拷問から回復することが出来なく、1943年8月2日に牢獄で死んだ、裁判の決定を待つことがなく。

宮城から尾崎に細い糸が伸びていた、尾崎からゾルゲへ、ゾルゲからクラウゼンとブーケリッチへ。

尾崎の確りした監視の結果、彼は秘密裏にジャーナリストのリヒャルトゾルゲと会っていることがわかった。その時には、アメリカと諜報機関との疑わしい関係についての嫌疑は確定できなかった。その代わりに、他の図が描き出された、モスクワとコミンテルンとの関係が。尾崎の高い地位とドイツのジャーナリストとしてのゾルゲの立場が、様々なグループとの広い付き合いを持っており、特高に早急な行動をとることをさせなかった。仕事は陸軍大臣の東条将軍に報告された。東条は単独政権を目指していた、秘密警察に命令を出した、近衛公の評判を落とす資料を集めるように。近衛のポストに替わることを期待して。東条の意見によれば、近衛は余りにも優柔不断であった、まず支那事変に決着を付け、その後に、イギリスとアメリカとの戦争を考えるべきと考えていた。外国のスパイとの関係で近衛を糾弾するために、陸軍大臣は10月15日に尾崎を逮捕するよう命令した。

それにもかかわらず、特高は未だ優柔不断に行動した。尾崎は10月15日におとなしく逮捕された、仕事の終了時、待ちの電車の出口で。理由は先に逮捕された目黒地区の若者の反軍行為に関与したとして。イワノフ（？ ＊）は考えている、尋問に答えることを単に拒否せよ。彼を長期で拘留することは決まらなかった。一時的な逮捕であったので、尾崎は何としてでも、妻や近衛の友人へのメモで、ゾルゲとブーケリッジに出来事について警告をしたかった。が、彼はこれをしなかった。

拘禁に際して、どのように振る舞ってよいのか、宮城も尾崎もどうやら知らなかったらしい。危険の信号はグループで練られていなかった。

尾崎は平和と自由の気高い騎士であった、自分の関係を隠そうと考えていなかった。その通り、彼は画家の宮城を知っている、尾崎は宮城の工房を訪れるのが好きである。彼の風景画を歌麿や偉大な北斎の精神として評価している。宮城は一人ではなかった、彼の友

人にはヨーロッパ人、例えば、有名なジャーナリストで日本の研究者であるリヒャルト・ゾルゲ博士、象徴主義者達の通人であるブランコ・ブーケリッチ。彼らはまた宮城の意見に同調している。

名前が再び挙げられた！ 尋問の結果は直ぐに東条に報告された。誰とも相談することなく、尾崎との「会談」を早めるよう要求し始めた。秘密警察の予審判事は尾崎の純真な自白を利用した、彼の拘留に関する誤解を最後まで明らかにするふりをした。この際、日本人の国民性をかき立てることが出来た、友人により厳しくなければならないことを強調して。同時に、明らかにすることに努力した：「それで、君は彼らと何を話し合ったのか？ どのような疑問点を、我々の災難と苦勞を知っている外国人の友人に聞かせたのか？

政治警察第1局の職員、高橋洋祐の賞状から

この件の摘発において、以下の貢献がある：宮城の根気強く綿密な尋問を行った。宮城はとにかく組織を隠すようにしていた。証拠を示されて、犯人は自殺を試みた。

警察副署長高橋は綿密な尋問にかけて、著名な人物である尾崎を逮捕した。尋問では、犯人は気絶に近かった。彼を正気に返らせて、罰の適用無しで尋問は継続された。尾崎はスパイ活動を認めた、その活動に10年に渡って従事していた。

尾崎はゾルゲとブーケリッチに全てを話した、知っていることを、絶えず強調しながら、彼ら全員は同志であることを、日本とソ連邦の間の友情に興味を持った。それ以上に、近衛公はこの考えを共にしていた—天皇の政治的意志の伝達人・・・そして、マクス・クラウゼンの名前が挙げられた。

この件について東条に報告したとき、彼は飛び上がり、早足で歩き回った。東条は途切れがちに大崎大佐（？ ＊）に話した、「天皇の意志は誰に知られているのか？ この屑で意気地無しの尾崎は自惚れていた、祖国の興味に世話を焼いているとして。他の意気地無しの近衛は彼に耳を傾けている」。大崎大佐はこびるような調子で報告した：

「陸軍大臣殿！ 尾崎はマクス・クラウゼンの名を挙げました。我々は直ぐに、ばらばらの証拠、電報の横取り、屋外の監視の報告の間の関係を明らかにした。しかし、彼らは主犯ではない。主犯はジャーナリストのゾルゲである」。東条は突然立ち止まった。彼の頭の中を、瞬間的に通り過ぎた：尾崎の純真な平和主義の話、ドイツの人（或いはソビエト人—未だ明かではない）でスパイのゾルゲとの関係（遂に私は彼までたどり着いた、この汚い三文文士まで！） そのようなチャンスを見逃していいことになる、最終的には天皇の面前で近衛の評判をおとしめることになる。同時に、3つの衝撃を引き起こす可能性が現れた：ベルリンに（ドイツの背信の確定とロシアとの中立条約の正当化に）；モスクワに（スパイの派遣による中立の違反の告発）；アメリカに（アメリカからの帰国移民の関与の告発、日本に対する破壊活動に関して）。侍の刀の一振りですべてを仕返しをする！ これだけを夢見ている！

ゾルゲを用心させることを心配して、東条は熟練した人物のいる憲兵隊を参加させるように命令した。近々来たるべき事実の前に政府を追い込まなければならなかった、近衛が何も出来ないときに。

崩壊を未然に防ぐ可能性はあったのか？ 理論的には出来た。イワノフが見なしている



ように、ゾルゲは自分の盛んな活動を中止する、マックスの送信機を停止する、無線機を遠くで組み上げる、ブーケリッチと妻と子供を中国大陸へ送り出す、ゾルゲは保養地の軽井沢か熱海に逃れる。大事なのは宮城の反軍エネルギーを抑えるべきという、スパイの戒めの一つを忘れていた：敵は手抜かりを許さない。崩壊は避けることはできた。

しかし、ゾルゲは成功で元気づけられていた。ゾルゲは、偉大な孫子のように、物事の本質を究明することが出来た。孫子が書いていた：「人を戦いに向かわせることが出来る者の能力、遠方の山から丸石を千サージェント転がせる人の能力である」。ゾルゲは日本の拡張方向の戦略的かつ経済的課題を定めることが出来た。日本人を良く知っており、読んでいた、偉大な古代中国の司令官を、「山で石を転がす」つもりはなかった、良く理解していた、これは徒労であることを。ゾルゲは世界戦争の成り行きを計算した、皆が彼を信じた！ カバーが掛けられた武器を持った兵、羊の長い外套を着た歩哨とともに、銃剣を光らせ、冷たいシベリアの霧の中を突進する、モスクワへ突進しようとしているドイツの戦車師団を食い止めるために・・・。

ゾルゲの歓喜は限界がなかった。彼を何処でも見かけた。ドイツのジャーナリスト、他のヨーロッパの国の友人の集まりの中心に何時もいた。彼はまさに張本人であった、小話や卑猥な出来事を大声で語りながら。彼の甲高い声が遠くから聞こえた：「私は賭ける！」或いは、「私がごちそうする、シャンパン万歳！」・・・

10月16日の17時、天皇裕仁の面前で良く演出された陰謀のドラマが演じられた。最初の調書は、祖国の裏切り者達のグループの摘発についての報告、日本の心臓部に潜り込んでいた：政府内に、助言者と専門家のグループ内に。尾崎の名前、活動の動機を開示しないで、が公開された。近衛—そのような事件の急転回を予想していなかった—は衝撃を受けた。近衛が正気に返るのを待たずに、東条は天皇の前で、全ての裏切り者達と彼らの共犯者達の逮捕について準備した命令を述べた。そして直ちに勅令を、政府の退陣と新首相の任命の。もちろん東条の。

3人組（ゾルゲ、ブーケリッジ、クラウゼン）の逮捕は10月18日早朝に行われた。クラウゼンの所の家宅捜査で。直接の証拠が発見された：ラジオ、暗号表、通貨。マックス（・クラウゼン \*）はそれらの所有権を否定しなかった。

赤軍参謀本部諜報局長へ

東京、1941年10月30日

手持ちの情報によると、5日前に、インソンとジゴロがスパイの罪で逮捕された、何のためかわからない。情報を調べている。

10月29日、イゾポと会った。彼が話した、インソンをこのところ見かけていない、彼が今どこにいるか知らない。逮捕について、イゾポに我々は何も話していなかった。危険がある、ジゴロが、もし彼が我々の仕事に関係なく逮捕されたならば、インソンの会社の全容が暴かれるかもしれない。もし情報が確認されたならば、私はイゾポに通告する。

第311号。<・・・>

組織ラムザイは自分の課題を見事に完遂した。自分の活動で何のへまもすることなく。しかし、徹底的な追跡、予想外の出来事。それらは当然の特徴を帯びるようになった。仕

事に於ける空前の緊張と日本の防諜機関の厳しい取り調べは悲劇的な最後を決定した。

# 結語の代わりに リヒャルトゾルゲの大成功と悲劇

君は私について悪く思っていない、

私の厳しい時代は・・・

(誰の詩? \*)

真実は当たり前のこととなった、自国には預言者はいないことが。しかし、我が国では、この真実は補足的な幻想的響きを持っている：我々は自分たちの預言者に耳を傾けなかっただけでなく、屢々同国人を有名にしている、外国で知られるようになった後に。

即ち、リヒャルトゾルゲはそのような人物であった。彼の名前は40年代の末に、ヨーロッパで広く知られるようになった。50年代には、彼の「スパイ網」の活動に触れたシリーズ本が出版された。我々にはゾルゲは文字通り偶然に知られるようになった。ニキータ・セルゲービッチ・フルシチョフがイフ・チャンパの映画「君は誰だ、ゾルゲ博士？」を見たかどうかはわからないが、この諜報員は有名になった、今のように。

ここで、事は、10年間にわたる特殊勤務と100年間にわたってエージェントとしての秘密が隠されていただけではない。あれやこれやの秘密の暴露は破裂する爆弾の効果をおこしている。個人の過去、個人の歴史に関する我々の関係の特性\*\*\*\*\*。そこに、大偉業、破局的な間違い、大発見、達成があった、が、流血の出来事、百万の人命を要した、人間の精神の前例のない高揚、恥と汚名の底なし沼への恐ろしい転落。この「巨大マニア」の背景のもとで、\*\*\*\*\*

しかし、ラムザイの諜報員の場合は特別である。もちろん、リヒャルトゾルゲについては長い間我々は思い出さなかった。これは第一に我々社会の閉鎖性の結果である、その時期は長い間継続した。怠慢の他の原因は間違いなくあった、彼は犠牲と苦痛の背景のもとで失われた、大祖国戦争時、我が国民にもたらされた。しかし、もちろん、彼を忘れたのは偶然ではなかった、彼は派閥的な決まりを犯しただけではなく、自分の官庁も、秘密結社の決まりも、共産党はスターリンのもとで変わった。

極秘

共産主義インターナショナル執行委員会 (ИККИ)

ドミトロフ同志へ

1942年1月7日付けの第1/4/33の補足で伝えられた、東京にいる逮捕されたドイツ人のうちの一人はゾルゲという者である。彼は1919年からの共産党員である、ハンブルグで入党した。

1925年に、モスクワでのコミンテルン大会の代議員であった。大会の終了後、ИККИの情報局で働いた。1930年に、中国に出張した。

中国からドイツへ出発した。コミンテルン関係の自分の仕事を隠すために、ナチス党に入党した。

ナチス党へ入党した後、アメリカを経由して日本へ出発した。日本で新聞「フランクフルト・ツァイツング」の特派員となり、共産党員としての仕事を行った。

東京で、ソビエトの同僚、ザイチェフ (?\*) とブツケビッチ (?\*) との連絡を維持した。

出来るだけ真実の証拠資料を伝えてくれるようお願いする。

(ФИТИН) 1942年1月14日

すなわち、我々の見解によれば、ここに理解の鍵がある、なぜ彼を見放し、東京の刑務所から彼を連れ出さなかったかの。当時、国は大勝利に向かっていたように思われ、極東への日本の進撃の恐れは完全に過ぎ去った。ストプラトフ（ラモンの上司 \*）がこれを良く理解していた。彼は確実に、この時期の祖国の特別局の仕事の内容に特に通じていただけではなく、この時代の本質を簡単に感じていた。彼は自分の回想録で言葉を引用している、スターリンがぞんざいに投げかけた、三国同盟の撲滅に関する作戦「ウトカ（かも）」の成功裏での実現後に：「我々はこの仕事の全ての参加者に勲章をあげよう、帰国後に。刑を執行された同志には、解放後に高位の勲章を。彼は活動において、専門の革命家であったとみなそう、彼にとって大変な時期に真価を發揮した」。いわゆるこれがスターリンのやり方であった。そして、フルシチョフのやり方でもあった。1954年に、ラモン・メルカデルの解放作戦が始まることになったとき、当時のКГБ長が、この計画について聞くことさえなかったという担保のもとで、語っていた、「古いスターリンの仕事に彼につきまとわせないために」と。これが全て。リヒャルト・ゾルゲの仕事はもちろん、この「古いスターリンの仕事」に関係していた。

なぜスターリンがゾルゲを捨てたのか、謎解きをすることが出来る。日本人の研究者である笠間啓治（ロシア文学研究者、1929年生まれ、早大教授 \*）は思っている：「ソビエト連邦へのドイツの進撃についてのゾルゲの情報を無視したことは、スターリンの個人的な手抜きであった。これ故、ゾルゲが生きていることはスターリンにとって遅延性の地雷となった」。

これに賛同することが出来るであろうか？ 6月22日の惨劇（ドイツのソ連への奇襲 \*）について、スターリンは身分に罪があると思っていなかったし、自分を偉大で天才と誤って思っていた。しかし、これ以外に、「小さい」ニュアンスがある。諜報情報の客観的な書類の分析から、スターリンに提示された、結論が。軍事的政治的諜報の指導者達が彼に報告した。明白に出てくる、スターリンはヒトラーの進撃の期日、方向、軍力についての正確な予想が出来ていなかったことが。これ故、次のような質問をしてはいけない：「スターリンがもしゾルゲに耳を傾けていたならば・・・」 残念ながら、スターリンはゾルゲに耳を向けなかった。なぜならば、最も重要で、ラムザイの最後の情報、侵入の期日、方向、軍力に触れると、様々な報告が様々な方面から届いており、スターリンに簡単に報告しなかった。これ故、どんな危険もゾルゲはどんな暴露の場面で個人的にスターリンのために提示しなかった。

もちろん、ゾルゲが日本の検事に証言をし始めたことは、ゾルゲの悲劇的な運命で決定的な役割を果たした。この際、何の価値も持っていなかった、プロの評価の実際には、「もし捕らわれたならば、君には明日はない、明日は全てが全てをたたき落とす」。ストプラトフは非常に良く本質的な原因をまとめた、なぜラムザイを捨てたのかの：「私はゾルゲの尋問書の少しを読んだ、そして驚いた、彼がどうしてそのような信頼できる自白をしたのか？ 正に諜報員にとって監獄は何なのか。戦いの場である。多分、彼は見捨てられたと感じた。しかし、これは意外な出来事であってはならない・・・ ゾルゲ、もちろんソ

ビエト連邦の英雄、勇気のある人物、勲章に値する。彼は非業の死を遂げた、彼の引き渡しや交換についての交渉を我々がしなかった故に。そのような現実は良くあった・・・

しかし、ゾルゲは法律を犯した、彼は証拠を与え始めた、ソ連邦へ自分の仕事について話し始めた」。最近、秘密解除された書類が証明しているように、ラムザイは法律を犯したことは直ぐに明らかとなった、ソビエトの諜報機関のスパイは正常に至る所で働いていた。

我々には次のように思われる。この点に、なぜゾルゲは牢獄から助け出されずに、長い間ソ連邦で忘れられていたのか、ということを理解できる鍵があると。

リヒャルト・ゾルゲの名前が忘却から蘇ってきたとき、英雄に対する我々の伝統的な方法の他の面が現れた、偽造の一步手前の法外な賛美。我々は完全にソビエトのスパイの評価に同意した、アメリカの歴史家であるデキンとストリが与えた、歴史書「リヒャルト・ゾルゲの仕事」で。これは1966年にロンドンで出版された：「ゾルゲの新しい特徴は愛国的崇拜の若干の属性を獲得した。彼の個性は厳しく賞賛の枠に収められた。彼の個性は厳しく記録された、伝説の選ばれた期間によって・・・」

リヒャルト・ゾルゲは20世紀の偉大なスパイであった。この主張は我々のジャーナリストや歴史家によってなされた、彼について初めての新聞が公表された後直ぐに。すなわち、ソビエトの軍事諜報機関の指導部によって、60年代と70年代にゾルゲについて書いた作家の一人として。ラムザイグループによって得られた資料全部に触れることが出来なかった故に、ゾルゲの諜報活動について完全に重要で正しい描写をすることが出来ていなかった。これ故、形容語「偉大な」と「秀でた」の確定のための事実と理由を手に入れないとき、あからさまな偽造が利用された。

特に、ソビエトの作家の空想が羽ばたき始めた、ソビエトへのドイツの侵入の正確な時期についてのゾルゲの情報に触れたときに。本物の電報がここでは明白な捏造に入れ代わった。6月15日付けの「有名になった」電報で。そこでゾルゲは侵入の1週間前に、戦争開始の正確な日と時間－6月22日早朝－をスターリンに知らせた。実際において、6月15日、ゾルゲはモスクワに2通の無線電報を送った。それらの正しい文章は現在公表されている。しかし、これらの電報中には6月22日の日付はない。

現在では、専門家達は結論づけている：「ソビエト連邦とドイツの間の関係について保存されている資料中に、書類はない、侵入の正確な日にちを伝えている。そのような電報はない」。

他の動きが存在する。日本の弁護士会によって作成された報告書からすると、「ゾルゲは全くスパイではなかった」。無事に残った書類（古文書の一部は1945年に燃えてしまった）の研究からすると、被告の罪は証拠不十分であった。ゾルゲは1941年10月に警察に逮捕された、スパイ活動の容疑で。ジャーナリストとしての「目につく」接触が疑いのモトとなった。しかし、全ての書類の調査の後、弁護士は罪は問えないと認識した：ゾルゲは僅かに個人的な結論を出していたようである、他の人との話し合いを基礎として、政治に興味のある他の分析家と場所を同じくして。彼の予想は間違いがなかった、というのは全くのツキであった。全く彼は間違った結論も出してもいた。なんとなれば、政府の金庫から得られる十分な資料を手を持っていなかったのだ。

そのような問題の設定に納得できるであろうか？ これに関しては、ラリフ・デ・トレダノ（？ ＊）の本「スパイ、間抜けと外交官」を紐解く必要がある：「アメリカ人の大

半にとって、スパイ行為は軍事的政治的秘蔵の盗みである。マタ・ハリとベネデクト・アルノリド（？ ＊）は全てのスパイの原型である。將軍達を魅惑した素晴らしい女性；ぼんやりとした容姿、暗くて悪臭を放つ根城で出会う；夜の銃撃と屋根の上での追跡。これら全てはスリラーの読者にとってのスパイ行為の要素である、ヒッチコックの傾倒者達の。しかしスパイ行為の歩みはゆっくりとして重い。有効なスパイは我慢強い労働者である。有効な装置は人である、熱心に小さい情報を集めてくれる、大事な者とそれほどではないものを、分析者によって詳細にフルイにかけられる、その後、それらを一つにして、価値のあるものを得る。素晴らしい政治の仕事、素晴らしいスパイ行為は基本的に、組織的で、旧式で、難しい仕事である」。

即ち、ゾルゲと彼のグループは、この旧式の仕事に従事した。これ故、モスクワに通報した、ラムザイの結論は、単なるツキではなく、情報と事実の収集に基づいた組織的で細心な仕事で作成されていた。即ち、1941年に於けるソ連邦への進撃計画の日本の内閣の拒否の証拠は、ゾルゲは1941年の9月から10月に於ける自分の有名な通報で行った。諜報局の指導部とスターリンに信用を引き起こした。ストプラトフは全く正しくなかった、彼はゾルゲの情報の役割を否定している、極東とシベリアからソビエト軍の移動についての決定を採択することにおいて。ストプラトフが考えたように、もしそうであったならば、「敵の知られた意向についての詳細」、この際にはラムザイの証拠は価値を持っていた、日本政府の計画についての情報の大きな流れの中に小川として流れ込んで。書類が示している通り、ストプラトフ自身が書いている通り、この情報はその時期には極めて矛盾していた。即ち、ラムザイから得られた情報は、ソビエト指導部に確信を与えた、日本はドイツと違って、アメリカ、イギリス、中国との衝突に独自の興味を持っているとの。これ故、10月に彼の最後の無電電報への返信で、褒め言葉に乏しい諜報局の指導部からのラムザイへ伝えられた感謝はより貴重である。

又、意見が存在する、ゾルゲの情報は注意されなかったという。それ故、諜報局の11月特別通報と12月特別通報が、国家防衛委員会（ГКО）の各委員に送られていた。それでは明白に結論を出していた、日本との戦争の恐れは現実的であり、日本はソビエト連邦との戦争の準備をしていると。

しかし、これは以下の事にはならない。諜報局指導部はゾルゲを信用していなかったとの。ゾルゲの報告に反して、国の最高指導部を納得させ続けた、日本の進撃の可能性と沿海州とウラジオストクの占領を。ストプラトフが書いている：「極東へ日本側から背後の侵入の可能性を我々は完全には排除することが出来なかった。明かであったにもかかわらず、日本軍は10月と11月に、攻撃軍の創設の手段をとらなかったことが、沿海州にいるソビエト軍に対する進撃作戦のために。この計画で示されなかったことが、ソビエト国境近傍の要塞地帯に、日本の陸軍と空軍の主力が展開されなかったことの。しかし、国境付近の状況は全体として緊張のままであった。日本軍の挑発的諜報探査は、満州との我が国境線にわたって、強くじりじりさせた、極東のソビエト軍司令部と同じように、スタッフカ（最高総司令部）を」。

これ故、全体的に説明できた、太平洋戦争後、帝国の立場が明らかになったとき、諜報報告書に主張があった、日本がシンガポールとフィリピンを占領し、南方に留まり、ソ連邦に対する軍事行動を始めるとの。それにもかかわらず、ソビエト指導部は沿海州とザ

バイカルから最も武装が整い訓練の行き届いた軍団を西に移動させ続けた、諜報の危険な予想と極東前線の指導的軍団の断固とした抗議にもかかわらず。ここで、明らかにスパイの情報がその役割を演じた。ストプラトフが指摘しているように、最も重要な情報が外交ルートで届いた：3度—11月22日、28日と12月1日—スメタニン大使は日本の外務大臣東郷と会談をした、8月13日付けのソビエト政府の約束を彼の要求により確認した、政府は中立条約を守り、第3国と協定を結ぶことはない、日本と対抗している。モロトフは直ぐにスターリンに報告した、「外交ルートで日本と中立の保持について合意することが出来ました」。しかし、既に、最も危機的時にモスクワに投入されたシベリア師団と極東師団が自分の役割を果たし、ドイツの侵入を阻止していたときであった

もちろん、ラムザイグループ以外に、軍事諜報機関は日本、朝鮮、満州に他の諜報の情報源を持っていた。中国における相談員、東京にいる武官の同僚は確りと働いていた。満州全域はエージェントの監察の元にあった。そこで起こったことは、部隊の移動やその武力について、適宜モスクワに報告された。東京での出来事についても同じことであった。明らかに、ラムザイグループだけが東京で仕事をしていなかった。これについては、最近秘密解除された書類が証明している。終戦間際に、軍事諜報機関は日本に広範な諜報網を構築していた。それらは非常に高度な質の情報を与えた。

警察は諜報員を逮捕した、既に確信していた、彼はソビエトのエージェントであると。同じように知られている、彼に物的証拠を突きつけたことが、クラウゼンの無線機、未送信の電報の書面、それは戦略的に重要な情報を含んでいた。戦略的に重要な情報はラムザイの多くの通報にも含まれていた、ラムザイによって、東京の諜報機関の存在の8年間にわたって送信された。他の問題、判決はどれだけ合法的であったかという、政府の秘密を守ることについての帝国日本の法律の第4条を基礎に持ち出された。

「リヒャルト・ゾルゲの仕事」については未だ全てが明らかではない。多くの問題が説明されておらず、それに関する解答はロシアの古文書館だけではなく明らかにすることが出来よう。特に、専門家が見なしているように、アメリカには、ゾルゲの仕事と尋問の本物の資料が保管されているはず、ゾルゲの愛人の石井花子、尾崎、クラウゼン、その他の。

それにもかかわらず完全に明らかである、リヒャルト・ゾルゲは20世紀の偉大な諜報員の一人であることは。崩壊したスパイは有名になるという意見があるからではない。あり得る、完全に崩壊したスパイは有名になる。が、著名になるのはごく僅かである。

この極少数に、ソ連邦英雄のリヒャルト・ゾルゲがいる。

# 追伸

## ラムザイの大きな愛情

これが私の真心です、  
私は出ることに決めました、  
本当に壊れやすい船で；  
毎日船を無慈悲な波が洗います・・・

小野小町 古代日本の歌人

カラスー放浪者（？ ＊）、ちょっと見よ！  
お前の古巣は何処だ？  
至る所、桃の花だ・・・  
（誰の？ ＊）

モスクワ。1927年。ニジニイ・キスロフスキイ通りの半地下の市営共同住宅に3人の若者が入ってくる。汚くて暗い廊下を通り過ぎると、綺麗で居心地の良い部屋がある。彼らのうちの一人が主人に呼びかける「カチューシャ、我々は君の所に新しい生徒を連れてきた。彼はロシア語での会話を学びたがっている。彼はリヒャルトという、簡単にはイカ」。主人は背が高く、スラリとして、ブルネットの髪をしていた。初対面の人に手を差しだした。主人は若くて綺麗であった。

彼らはその時には未だ自分の運命を知らなかった。ゾルゲはコミンテルンの組織部で働いていた。その後、国際関係局（ОМС）—ИККИの極秘の支部—で組織指導者の職務に移った。支部には定員があった。これ故、1927年12月9日、ゾルゲはОМСの仕事に採用されたとき、ゾルゲはコミンテルンから公的に退職することになった。

エカテリーナ（愛称カチューシャ）は「トチズメリテリ」工場で組み立て工として働いていた。彼女には普通とは違った運命があった。彼女はペテロザボートスクで生まれた、女優になることを夢見ていた。劇場での仕事に就いた。学校修了後、レニングラード舞台芸術学校へ入学した。が、その後そこを退学した、イタリアへ芸術劇場の自分の元指導者ユーリ・ニコラエビッチ・ユリイン（結核を病んでいた）に随伴することにして。その時ユーリは幼い娘を伴って療養へ去って行った。半年後彼を吊った、モスクワの親戚の所に娘を連れて行った。この後、工場での仕事に戻った。

彼らが知り合ったときには、ゾルゲは妻のクリスチーナと別れていた。彼女はモスクワでの生活が気に入らなかった。彼女はドイツに戻った。その後、クリスチーナはアメリカに移り、マサチューセッツ州のある学校で、ドイツ語とフランス語を教えた。

カーチャは厳しい先生であった、イカは熱心な生徒。彼は格変化と活用を杓子定規に理解した。疲れた頭に難しいロシア語の語尾が目まぐるしい変化をする時、カチューシャに詩を朗読してくれるようお願いした。小さい部屋の壁際に石油ストーブがシューという音



を出している、隣人同士が口論していた、ロシアの詩の一節の響きが部屋を満たした。

彼らは一緒にモスクワを散策した、古本屋で本を掘り返した、音楽を聴いた。文学、芸術、その環境に彼らは二人で溶け込んだ、お互いに理解し合っていた。彼ら二人は人生のロマンチックなことに熱中した。彼らは人生の急転回を恐れなかった。政治について話し合った。ここで、リヒャルトは先生となった、社会学者、社会評論家、東アジアの専門家として。彼はカチューシャに日本と中国の文化について話をした、日本の短歌を詠んだ。

しかし、カーチャがゾルゲにうっとりするのは何時もとは限らなかった。彼らは屡々いろいろな問題で口論した。沢山の出来事を理解し、いろいろな形で解釈をした。終わることなく口論をした。なぜなら、二人とも自立していることを評価していたから。

最初の出会いから直ぐに別れることになった。1927年12月から1929年9月まで、ゾルゲは短い中断を持って何度かスイス、スウェーデン、ノルウェー、イギリス、アイルランドへ国外出張をした。

帰国毎に、リヒャルトはカーチャ・マクシモバと会っていた。出会いは希となった、しかし彼らは段々と理解し合うようになった、別れて生きることは出来ない。カーチャはリヒャルトに一度話した、「私はずっと貴方を待ち続ける。貴方が何をしているのか私は知らない、出かけていった先で。しかし、その代わりに他のことを知っている：自分の仕事無しで貴方は生きていけない。即ち、貴方の仕事はとても大事なことを」。

1929年10月31日、ゾルゲはコミンテルンを去り、軍事諜報の仕事に移った。少しして、中国へ去って行った、諜報局の線で。

1932年、ゾルゲは上海から戻り、クリスチーナと正式に離婚した。1933年初めに、エカテリーナ・マクシモバとの婚姻届を出した。

## カーチャ（エカテリーナの愛称 ＊）の妹 マリヤ・アレクサンドロブナ・マクシモバの追想記から （ゾルゲの1番目の妻はクリスチーナ、2番目の妻がエカテリーナ、 石井花子は日本での愛人 ＊）

あるとき、姉は何か非常に変わってやって来た。一般に、彼女は極めて控えめな人であった、本当にうれしそうであった、何かを口ずさんでいた。その後話す：「いい、私は素晴らしい人に会った。彼はドイツ人でコミュニスト」。イカ（身内でのゾルゲの愛称 ＊）について話し続けた。彼について話した、何から何まで。

結婚式は非常に地味であった。二人ともプチブル的な、この儀式をさげすんでいた。ニジニイ・キスロフスクーそこヘイカは自分のトランクをホテルから持ってきていた。結婚の登録後、友人達とささやかなパーティー。ワインの瓶、音楽、演劇についての会話、当然「現時点」についても。ドイツではファシストが権力に到達していた。

彼らの家族としての幸せは3ヶ月続いた。そして、その日がやって来た。彼女は初めて夫の旅行の荷造りをした。彼は日本へ出立していった。去るときに、優しく妻のほほを手で包み、長い間見つめていた、特徴を記憶に留めようとして：写真を持参することは許さ

れなかった。

彼は直ぐに戻ることを約束した。が、2年後に戻ってきた。2週間だけ。再び出張、希な幸便として、手紙。手紙は多くの人の手を経由して届いた、それ故控えめであった。

エカテリーナ・マクシモバへのリヒャルト・ゾルゲの手紙より

かわいいカチューシャ！ ようやく、私のことを知らせることができるようになった。私の方は全て順調、仕事ははかどっている。私の写真を送る。良い写真だと思っている。写真を君が気に入ることを期待している。写真では、私はそれほど老けておらず、疲れているようには見えない、むしろ物思いにふけているよう。君がどんな生活をしているか、私は長く知っていないことが、気にかかっている。君に若干の品物を送るよう試みている。本当に、私は君のために購入した、非常に綺麗な物を。もし君がそれを手にしたならば、幸せである。残念ながら、私は他の楽しみを達成することが出来ないのです。せいぜい、心配と物思い。

エカテリーナは知らなかった、彼女がスパイの妻であることを。が、愛情深い妻の心情から、夫には非常に複雑で責任のある仕事がある、と気づいた。不平を言わなかった、待っていた、冷静に忍耐強く。夫への手紙を元気に書いた。それらの内の一つに子供を期待していると伝えていた。

エカテリーナ・マクシモバへのリヒャルト・ゾルゲの手紙より

君が全てを頑張り通すのか、私は非常に心配である……。気を配って下さい、滞りなく私が消息を得られるように。もし女の子ならば、君の名前を付けるか、或いは文字K……の名前を付けなさい。君の両親は健在なのですか？彼らに私のことをよろしく伝えてください。私が君を一人にしていることを、彼らが怒っていないことを願います。それから、私は全てを直すことに努めます、君に対する私の大きな愛情と優しさで。

大分後になって、リヒャルトは知ることとなった、彼らの間に子供が出来なかったことを。多数の国境を経由して、モスクワに短い手紙が届いた；「私は君を本当に愛している、君のことだけを考えている、特に大変なときでも、君は何時でも僕と一緒にいる……」。

カーチャは働いていた。組長となり、熟練工となり、工場長となった。職場委員会議長となった。諜報局の要請により、彼女にソフィア河岸にある新しい部屋が提供された、政治移民者用の宿舎「赤い星」の。当時、個室は、ニジニイ・キスロフスキイ通りの半地下室と比較すると非常に贅沢であった。カーチャは読書に夢中になった、それは生きる楽しみであった。身近な友人であるベラ・イズビツカと憂鬱さを発散していた、彼女が結婚しているのかどうかは知らないで：出合いを指折り数えて。別居生活は1年にも渡る、彼の手紙は愛する人の代わりとなる一テキパキとした管理の、冗談の、気の重い。

エカテリーナ・マクシモバへのリヒャルト・ゾルゲの手紙

1936年

愛するカーチャへ！

ようやく、私は君から2通の手紙を受け取った。1通は非常に悲しい、明らかに冬のように、もう1通は非常に楽し

い、春のよう。君に感謝する、カーチャ、2通とも、手紙の中の言葉にも。わかってよ、これは長い期間後の君に対する最初の兆候だ。私はこれを熱望していた。今日私は知った、君が休暇で出かけるということ。君と休暇で出かけることは素晴らしいことですね。私たちはいつかこれを実現することが出来るだろうか？ 私はそうしたい！ もしかしたら、君はそれほどでもないか？ 否、もちろん君にはわかる、私は言葉を必要としていない。君が新しい部屋を持ったということはおうれしい、君とそこに一緒に住めたらな・・・いつかその時はやってこよう。

ここは今非常に暑い、殆ど耐えがたい。時折、私は海に出かけ、泳ぐ。が、特別な休みはここにはない。とにかく、私の意見では都合の良い仕事である、もし君が私に質問があれば、君に答える、十分に\*\*\*\*\*。さもないと、これは君にとっても我々にとっても家の意味を持っていない。ここでは緊張した時があった、私は確信している、君がこれについて新聞で読んだと。が、我々はこの時を上手く通り過ぎた、私の羽毛が少し傷ついたにもかかわらず。しかし、年老いたカラスから何を要求することが出来るだろうか、カラスは段々とその姿を失っている。

私は君に大きな頼みがある、カーチャ。私に君のことを沢山書いて送ってくれ、細かいこと、君の願望を全て、出来るだけ多く。去年の私の手紙を手にしたのか書いてくれ。同じく、私の小包を受け取ったのか書いてくれ。各手紙と共に、私は小包を送った。君が品物を使ったのかも書いてくれ。特に君が欲しいもの、靴の大きさ、何を買ったら良いのか？ 友達が必要としている物は何か、特にBと子供のΦ・・・君の家族・・・女友達・・・結婚したくない、とにかく、彼女に男達は興味がない。多分、彼女は正しい、が、彼女は忘れていて、カーチャは未だ私に興味を持っていることを・・・

しかし、今のところ、全て順調！ 時期に君はもう1通の手紙を受け取る、私についての報告も。体を大切に、そして私を忘れることなく。上司に私からよろしく伝えてください、上司は時折私に良いことを書いている・・・ 熱烈な挨拶を送る、敬具

И(イカ \*)

イワノフの回想記によれば、ゾルゲの例外的な貢献故に、全ての指示や命令違反において、カーチャは夫に手紙を書くことを許されていた、翻訳と検閲機関の加工無しに。出発前にゾルゲが話していた、「校正無しに、彼女の匂いがする」。エカテリーナはフランス語で書いた。リヒャルトは彼女の手紙を読みこなすことが出来た。リヒャルトはドイツ語で書いた。

諜報局の将校がこれらの手紙を翻訳してカーチャに読み上げた、諜報員の家族と会うために特別に指名された、外国で働いていた。イワノフが書いている、「私も彼女も居心地が悪かった。私が生気のない声で優しい言葉を音入れする時、テーブルクロスに掛けられた机に座りながら、そこには茶入りのコップと地味なごちそうがあった。「私に優しい言葉を、考えてください・・・」、カーチャははにかんで話した。私はでくの坊のように座って待った、彼女が少し考え込んだ時に、私に頷いた、翻訳を続けるようにと」。

エカテリーナ・マクシモバへのリヒャルト・ゾルゲの手紙

1936年10月

愛しいカーチャへ

君に一筆をしたための機会を得ました。同時に、君にプレゼントの小包を送ります。品物の中に、大きな獣毛のジャケットがあります、それを君がピリヤにあけても結構です、もし彼女がそれを希望するならば。或いは、誰か他の友達に；彼女が自分の兄弟に必要としていても結構です。ピリヤと友人達に私からの親愛なる挨拶を伝えてください。君の靴のサイズを教えてください、もちろん直ぐに靴を送ることが出来る。靴はここでは比較的安いのです。私は元

気に生きています、私の仕事は順調です。もし独り身でなかったならば、全ては結構なことでしょうに。しかし、全ては少し変わってきています、上司は約束を実行することを、私に保証しました。今はそちらでは冬が始まっていることでしょう、君は冬が嫌いであることを私は知っています。多分君は気分が落ち込んでいることでしょう。しかし、君の所では冬は極めて綺麗だ。が、ここでは冬は雨が多く、湿気の多い寒さである。それに対しての部屋の造りは悪い。ここでは殆ど空の下で住んでいるようなものだ：もし、私がタイプライターを打つと、その音はとなりの部屋で聞こえてしまう。これを夜にすると、犬は吠え始め、子供は泣き始める。このため、私は音のしないタイプライターを手に入れた、子供達をこわらせがないようにするために。君がわかるように、状況は結構独特です。私の独特さを、君に喜んで話をしました、一緒に笑うために。2人でこれを見ると、品物は全く他に見える、特に思い出した時に。

期待しています、直に君は僕のことです少し喜ぶことがあるでしょう、少し自慢でき、納得することが、君が全く素晴らしい伴侶であることに。もし君が私に沢山手紙を書いてくれるならば、私は想像することが出来ます私は君を愛する連れ合いであると。以上です、カーチャ、手紙を書いてください、それが私を喜ばせてくれます。

全て順調です、愛しています、心からの挨拶を送ります。

君のイカ。

時折、カーチャはゾルゲの手紙を読んだ将校に、気をつけて質問をした：「リヒャルトはそれなりの個性の人物なのでしょうか？ モスクワでは外国にいる彼の貢献無しでは上手く行かないような？ 彼は長い間休暇をもらっていない・・・」 急に思い出したかのように、彼女は話の腰を折った。時折、話をし始めた、リヒャルトが彼女にドイツ語か他のヨーロッパの言語を勉強するように勧めたということを引き合いに出した。多分、彼女は彼の危険な仕事の助っ人となれる？ これに対する返事は長い沈黙があった。カーチャはわかっていた、このテーマにはもう触れることが出来ない。

1937年1月、カーチャはリヒャルトから手紙をもらった：

「愛していますカーチャ！ 新年となりました。君に今年も良いことがあることを願っています、今年が私たちの別居生活の最後になることを期待しています」。

カーチャに小さい小包が渡された、それにメモが入っていた：

「カーチャ同志！・・・ 夫のシャープペンシルを保管しておいてください」。

夫の・・・ 即ち、夫は直ぐに戻ってくる？！

カーチャは直ぐに返信を書いた：

「ありがとう、大好きなイカ。今日、私宛の手紙をいただきました。新年の挨拶に感謝します。私は期待しています、今年が別居生活の最後の年になることを。ほんとに長かったことか！ 私の仕事は順調です。私は気分は良好で健康です。仕事は全て順調にしています。ただ残念なのは、貴方がいないことです。私のことは心配しないでください、元気に生活してください。が、私のことは忘れないでください。貴方が全て順調であることを欲しています。熱い接吻を。カーチャ」。

彼らは知らなかった、これ以上相まみえることがないことを。

エカテリーナ・マクシモバへのリヒャルト・ゾルゲの手紙

1938年

マクシモバに出来るだけ早く渡すことを願います。

愛するカーチャ！

私が今年の初めに君に最後の手紙を書いた時、私は確信しました、夏には一緒に休暇が取れることを。それで、何処で休暇を過ごすかの計画を作り始めました。しかし、私は今までここにいます。とにかく、私は確信しています、数ヶ月について話をしています。悪くても、2月には帰宅するでしょう。しかし私は屢々君を私の期限で引きずり回した、驚いてはいません、君がこの酷い生活と長い待機を拒否するとしても、そこから自分なりの結論を出すとしても。私は貴方に腹を立てることは出来ません。私には何も残っていない、文句も言わず期待するだけ。君は全く私を忘れてはいない。とにかく展望がある、5年間の私達の夢を実現することの、家で一緒に生活できる可能性を得ることの。この期待を私は失っていません、もしその可能性がなくなることが全く私の罪であるとしたら、或いはよりあり得る状況の罪であるとしたら、それらの中で私たちは生きている、それらが我々の前に一定の課題となっている。

そうこうしているうちに、短い春が過ぎ去り、身に堪える暑い夏が。夏はこの国では非常に耐えがたい。特に、常に緊張を要する仕事では。私が失敗した時には特に酷い。私は病気がちであり、数ヶ月の間入院していた。今は全て順調であることは本当です、私は以前の通り仕事をしています。やっぱり、私はかっこよくならなかった。傷跡が幾つか増え、歯の数が大分少なくなった。替わりに入れ歯を入れている。これは全てオートバイでの転倒の結果です。私ที่บ้านに戻った時、君はハンサムな容姿を見れない。私は今やぼろぼろの騎士か山賊に似ている。戦争での5つの銃傷の他に、私には幾つかの骨折と傷跡がある。かわいそうなカーチャ、これら全てを少しは良く考えて。よろしい、私は再びこれを茶化すことが出来る、数ヶ月前には私はこれが出来なかった；私は本当に多くの事に耐えなければならなかった。全てで仕事をしなければならなかった。しかし、私は思う、私が仕事を完遂し、これを冷静に自慢することが出来る。君は一度ならず書いていた、君が綺麗なプレゼントを得たのか、私が君に送った。私が君のことを聞かないで、もう1年経つ。私の会社を経由して企画しなければならぬのであろうか？これについて、上司と相談してください！ 残念ながら、何かを君に送ることは次第に困難になってきています。私が行くまで、君は待ち続けなければならない。少しずつ、私は君のために品物を集めています。どう思います？ 今どこで働いているのですか？

多分、君は今では確りした支配人、私を自分の会社で採用できる、極めつきは小間使いの子供として？ よろしい、そこで見てみよう。今は帰宅することが最大事です、なんとになれば、ここでは、この単語の意味にある文字通り、犬の生活です。これが他の国であろうと！ 畜生。

元気で、愛するカーチャ、なにとぞよろしく。私を忘れないでください、なんとになれば、私はもう寂しい限りです。確りとキスをする。敬具。君の・・・

ゾルゲは大酒を飲み始めた。その上、研究者達の証言によれば、これは彼の外見の様相に極めて良く効いた、遊び人のプレイボーイや生活の浪費者のイメージを彼に作り出した。多分、これはリヒャルト自身が考え抜いた手段であった。しかし、他面では、アルコールへの執着は疑いなく、深い孤独感と自分の将来の運命に対する全く自信がないことの現れであった。

1939年6月4日、ラムザイから中央へ、交替要請の手紙が届いた。

しかし、ラムザイを残すことを再び要請した。彼はそれに同意した。1940年1月、ゾルゲは「上司」（諜報局長）に伝えた、1年ほど日本に残るよう指示を受け取ったとの。リヒャルトが書いていた、「我々は帰国することを強く思っていた。もちろん、我々はそちらの指示を遂行し、ここでの仕事を継続する。休息と休暇のために、そちらから支払われた特別金に我々は感謝している。唯一の困難は休暇を取ることは簡単ではないことである。もし我々が休暇を取るならば、これは今は我々の情報の低下に繋がってしまうからである」。

リヒャルト・ゾルゲへのエカテリーナの手紙から

愛するイカ！ 私は長い間、貴方について何の知らせも得ていません。何を考えて良いのか私は知りません。私は希望を失いました、貴方がそもそも生きていますのかという。

私はズッと本当に気が重く、苦労続きの時です。本当に苦しく、陰鬱です、なぜか繰り返します、私は知りません、貴方には何があって、どのようにしているのかを。私は考えに至りました、私たちは再び会うことが出来るのであろうかと。私はこれ以上信じていません、私は疲れました、孤独に疲れました。私は徐々に老けています。沢山働き、いつか貴方に会える希望を失っています。貴方を確り抱擁します。

貴方のカーチャ

1940年7月、ラムザイは中央の知っている閲覧者に通報した。その中で、クラウゼンの健康がすぐれないことを書いていた。日本に於ける自分の滞在の見通しの定義の必要性について意見を語っていた。

イワノフの追想記に同意する、ゴリコフの署名のために、同意を乞う書類が送られた、防衛人民委員チモシェンコへ、参謀本部長メレツコフへ、同じく、B K П (6) 中央委員会へ通知状と H K B Д 人民委員メルクロフへ。諜報局指導部は、ゾルゲの要請を受け入れ、彼に6ヶ月間の休暇を与えることに傾いた。

しかし、H K B Д の意見を考慮することになった。外国局長フィチンが返信で伝えた：「我々の資料によると、ドイツのジャーナリストであるリヒャルト・ゾルゲはドイツと日本のスパイである。これ故、ソ連邦の国境を越えた後直ぐに、ソビエトの機関によって逮捕されるであろう・・・」 複雑な事情故に、ゾルゲはソ連邦への帰還を自制するよう勧められた。

1941年6月22日、ドイツはソ連邦に進撃した。ゾルゲの警告通りの現実となった。彼の警告はいろいろな理由で無視されていた。ソビエトの諜報員の多くの通報のように。リヒャルトはこの出来事に堪え忍んだ、鬱病となり、大酒を飲んだ。が、何ものも自分の寂しさと陰鬱さを消すことは出来なかった。

石井花子とゾルゲは自分の40歳の誕生日、1940年10月4日に、知り合いとなった。花子はドイツ人の叔父さんケテルのレストラン「ラインゴールド」でホステスとして働いていた。客好きで、社交的な彼らはテーブルを用意し、料理を並べ、並んで座って、話に打ち解けた。ゾルゲは一人で窓際に座った。ケテルが気がついた、彼の馴染みのドクトルがなぜか沈んでいた。丁寧に尋ねた。「そう、40歳を祝っている、リヒャルトは皮肉の笑みを浮かべた。寂しい祝日を」。

ケテルは石井を自分の方に呼び寄せた。ゾルゲの方を指し示し、彼の誕生日を楽しませるようにお願いした。石井は誕生日に当たる人の側に座った。彼らは二人で夕方をズッと座って過ごした。

他の日に、彼らは再会し、日比谷公園を散歩した、その後、ゾルゲはレストラン「ラマイエラ」に立ち寄り、食事することを提案した。そのレストランは貴族級として名が知れており、多分、ホテル「インペリアル (=帝国)」にだけは劣っていた。

少し経ってから、ゾルゲは石井に提案した、彼の所に秘書としての仕事に来るようにと。レストランと同じ位お金をもらうことが出来る。が、自由な時間は極めて沢山とれる。石

井は同意した、ケテルの不満にもかかわらず。しかし、ゾルゲはケテルを直ぐに説得した。

その後、石井はゾルゲの愛人となった。しかし、逮捕まで、ゾルゲは自分の仕事を彼女に打ち明けることはなかった。

若干の研究者達は主張している、ゾルゲの東京滞在は愛人の行列で特徴づけられると。その具体的な数は約40人。ウایتンが主張しているように、「女性はゾルゲに引きつけられた、蛾が火に引きつけられるように。アメリカの外交官の妻は、白状している。彼はドイツ人に似ず、控えめであった」。恋をした女性は感じた、彼と一緒にいると自分の純血を犯すことに平気となると。ゾルゲは日本のヨーロッパ人社会で「ドンファン」の悪魔」呼称を獲得させている。見境なく、多かれ少なかれ好感の持てる女性を魅惑させながら、オットー大使の妻も入れて。ゾルゲに親しい女性の一人の、ドイツ人のピアニスト、ベルリン音楽大学教授、エタ・ハリフーシハイデルは、リヒャルトの要請に応じて、人生をかけて、ゾルゲに部屋の鍵を渡した、東京のドイツ大使館の付けのゲシュタポの長マイジゲルの。

他面では、年配の祖国の諜報員グジ（彼はもう100歳となる）の意見によれば、ゾルゲにはどんな特別な女性もいなかった。日本人の石井花子とは同棲していた。彼女はゾルゲの記念碑を建立した。2000年に亡くなるまで彼を吊り続けた。ゾルゲは本物の男であった。伝説では、独身者。日本に長年住んでいる。健康で普通の人間。明かである、自分を何か抜け目のない人間に逸脱させていること。多分彼には日本人女性の他に何らかの出会いがあった。多分、ドイツ人夫人とは、彼は私たちにこれについての情報をくれなかった。我々は問い質さなかった：君は誰と寝ているのか？ そのような質問は意味がない、質問は必要がない」。

証拠によれば、逮捕前の1年間、ゾルゲは陰気となり、大酒を飲んだ、病的に神経をいらだたせた、屢々陰気な攻撃性の状態となった。石井は彼の部屋からウイスキーとジンの大量の空き瓶を何時も取り片付けることになった。

1941年10月、ゾルゲは逮捕された。カーチャは夫の逮捕について知ることはなかった。戦争となった。彼女は待ち続けた。働いた。沢山、沢山働いた。工場に泊まることさえした。彼女は妹に書いた、「かわいいムシエンカ！ 私は夕方に仕事から帰ってくる、玄関番が私に手紙と包みを渡した、乾パンは非常に美味しかった、あんな白いパンは私の所にはない。私は夏中一度も郊外に出かけていません、本当をいうと、全く夏を感じません。一度休日の土曜労働日にフィルムキンスク河岸工場へ薪を集めに出かけました。一日中、平船から薪を下ろしました、自然を楽しむことはありませんでした。家への出発前に、花の代わりに一束のヨモギを集めました、私はその匂いが好きです、刺激的な・・・」

エカテリーナ・マクシモバの労働カードより

1942年6月（日にち無し）。油断と作業予定表の中断で、警告付き譴責処分を受ける・・・

1942年11月2日。解雇される\*\*\*\*\*（罪の遂行、逮捕）

彼女の所にやって来た、いつも通りに、夜に。命令書は捜査と逮捕を指示していた。コンプロマトの家宅捜査でモスクワの地図と肌につける十字架だけが見つかった。カーチャを連行した時、暖かい服さえ持つことを提案しなかった、わかった：長期になる。これは

1942年9月4日のことであった。ゾルゲの逮捕からほぼ1年後。

エカテリーナは逮捕された、明瞭な罪のない中で、ビリイ・シタリとのスパイ関係で。1938年に逮捕され銃殺されたビリイ・シタリは、ドイツ人の反ファシストで、ゾルゲの友人であった。彼はリヒャルトを通じてカーチャと知り合った。

ルビャンカの独房で9ヶ月間の服役を終えて、カーチャはクラスノヤルスク地方へ送り出された。カーチャの2通の手紙が残された。1通は1943年5月21日付け、妹宛の。「かわいい妹さん！ ほら再び空と空気と自由を満喫しています。つい数日前にありました、私の復活が。本当に、草の茎のように、弱さで私を大地に傾けています。クラスノヤルスクから120kmの地区で生活し、働くことになります。イキからは以前通りに私は手紙を得ることでしょう、彼は順調であることなので」。クラスノヤルスクの親類にカーチャは話をした、ベリアの機関で、追放による自由の前の面接を受けた時、彼女に語った、夫は順調であると。

2通目の手紙は、母アレクサンドラ・ステパノブナ宛て、伝書鳩の世話に関する本の中に書かれていた。「愛するお母さんへ！ やれやれ、今私は哀れで裸で汚い！ お母さん、たまには私に手紙を書いてください。お願いだから、私が気が滅入ることを欲しなければ。私は誰からも長い間何の手紙を受け取っていません。私の所に会いに来てください、本当にうれしいでしょう。私は信じています、再び勝ち誇り、良い生活が送れることを。今はどうかくたばらないで、持ちこたえています。少しだけ栄養をとって元気にしています、これが大事」。

5月24日、25日、カーチャをボリショイ・ムルタへ送った。この時期、リヒャルトの裁判が始まった。自分の罪を認めるかという質問に、ゾルゲは答えた：「否、認めない。日本の法律の一つも私は犯してはいない」。

彼は裁判では確りと振る舞った、それにより彼の援助者達の運命を軽減した。

1943年、カーチャの母は悲しい手紙を受け取った：「こんにちわ！ シベリアからです。貴方に知らせます、ムルチンスク病院に入院していた貴方のカーチャは1943年7月3日、亡くなりました。そんなに気落ちしないでください、これが彼女の運命です。今は国は何千人という英雄達を失っています。もし詳細を知りたいならば、手紙を書いてください。ではまた。エレナ・ワシリエブナ・マケーバ（？ \*）」。その後、アレクサンドラ・ステパノブナはさらに1通の手紙をもらった。「貴方の娘は5月29日、私たちの病院に入院した、化学薬品の火傷で。治療は開放方法で行われた、即ち、シーツで覆われた骨組みを作って・・・。時折、涙を流して彼女は：何について？ 時折彼女が話した、母に会いたいと・・・ 彼女は450ルーブルを残していた。葬儀に使用した。十字架のもとで葬った。残された物：絹製の灰色のスカート、暖かい袖無しのブラウス、古いオーバーシューズ。品物は病院のリネン管理人の倉庫に保管されている。私自身以前にそのような状態にあった、彼女と同じような、今では自由です。看護婦として働いている、私の専門外ですが。ジューコバ（？ \*）」。

そのような悲劇的な最後はモスクワでもあった。カーチャが温度計製造工場で働いていた時に。彼女の体は文字通り水銀で染み込まれた。ついでながら、当時、これは女性の妊娠に影響していた。ボリショイ・ムルタで、中毒になり監獄で衰弱した体は、カーチャが軍事企業の一つで得た化学薬品による火傷には勝てなかった、近親者に伝えられた、彼女



を葬った。しかし、墓を見つけなかった・・・

エカテリーナ・アレクサンドロブナ・マクシモバの仕事は、死後にリヒャルト・ゾルゲにソ連邦英雄の称号を授与するという命令の公表後、20日して再評価されることとなった。

モスクワ軍管区の軍法会議

1964年11月26日

証明書

マクシモバ・エカテリーナ・アレクサンドロブナの告訴の件。1904年生まれ、1942年9月4日まで第382工場の職長、モスクワ市の航空機産業人民委員部の。モスクワ軍管区軍法会議は1964年11月23日、見直しをした。マクシモバに関する1943年3月18日の決裁は取り消された。彼女に関する件は中止される罪事態が存在しないものとして。

マクシモバ・エカテリーナ・アレクサンドロブナは当件に関して死後に名誉回復をした。  
モスクワ軍管区軍事裁判所長法務大佐ソコロフ

リヒャルト・ゾルゲとエカテリーナ・マクシモバは11年間結婚していた。その内、一緒にいたのは半年にも満たない。残りの時は「郵便での恋愛」であった。大変な運命の急変と愛情の関係があつたにもかかわらず、リヒャルトはただ一人の女性、カーチャ、カーチェンカ、カチューシュカを愛していた。その良い証拠である、彼らのお互いの手紙は永遠の愛に貫かれていた。逮捕後、ある尋問でゾルゲが伝えた：「私がモスクワにいた時、私には好きな人がいた。マクシモバであり、ソビエト市民・・・ 私は思っている、もし私が今モスクワにいたならば、私たちは多分公式に結婚をし、一緒に住んでいただろう」。

ユーラシア大陸の片方の端で、日本で、リヒャルト・ゾルゲの死後に、愛のドラマがわき上がり続けた。1949年に、石井花子は自分の愛人の遺体の葬られた墓を暴き、それを火葬に付した。ついでながら、日本の防諜機関は彼女に手を付けなかった。彼女は東京の多磨墓地に彼の墓を改葬した。2000年に亡くなる前に。彼女は決して指からリングを取り外さなかった、亡くなった人の金冠で特徴的な。彼女は信じていた、リヒャルトはこれを欲していなかった・・・

(2023年7月16日 入力完了)

(2024年3月31日 再校正完了)

(2024年5月23日 再々校正完了)

## 写真



写真1 ゾルゲ自身のお気に入りの写真。東京、1936年

写真2 日本の首相、近衛文麿公爵は  
尾崎秀実の良い情報源であった

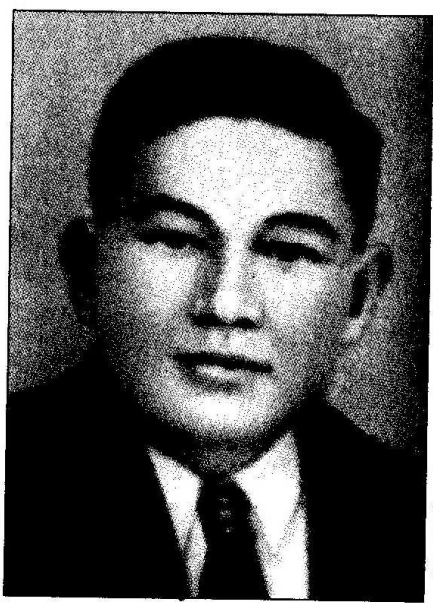


写真3 尾崎秀実、ゾルゲの最初の協力者、  
同時に首相の顧問

写真4 東京に於けるラムザイグループ  
の無線士マックス・クラウゼン  
1930年代初めに中国でゾルゲ  
と協働した



写真5 ブランコ・ブーケリッジ。  
ラムザイグループの一員。  
ジャーナリスト、優秀な写真家、  
有名なフランスの通信社「ガラチ」  
の特派員



写真6 日本駐在ドイツ大使、  
エイゲン・オットー、少将、  
ゾルゲの友人。将軍職と大使の職務は  
ソビエトのスパイの援助無しには  
得られなかった。

写真7 日本での任務前のゾルゲ



写真8 1941年のゾルゲ。  
逮捕の数週間前。



写真9 1920年～1930年代のソビエトの軍事諜報の有名な指導者。ヤン・カルロビッチ・ベルジン。彼により、コミンテルンの国際局からゾルゲは1929年に移籍した



写真10 兵団長セメン・ペトロビッチ・ウリツキイ。1935年3月にベルジンの代わりとなる。彼とゾルゲは1935年夏に出会った、モスクワへの旅行時に。



写真11 アンナ・クラウゼンー妻、親友マックス・クラウゼンの援助者。



写真12 尾崎、1932年上海にて。  
アグネス・スメドレーが彼を  
ゾルゲに紹介した。



写真13 マックス・クラウゼン—  
中国におけるゾルゲの無線士



写真14 マックスとアンナのクラウゼン夫妻。1967年ベルリンで。

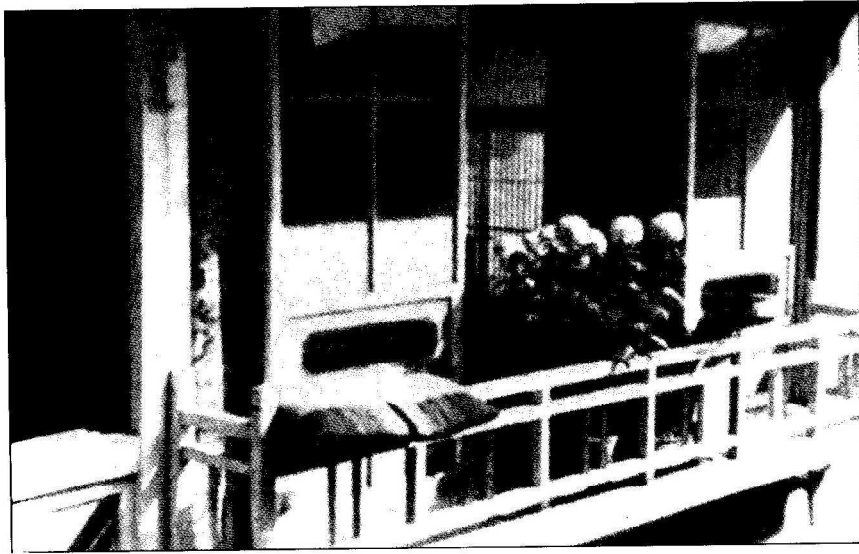


写真15 東京のゾルゲの住居。家のテラス。

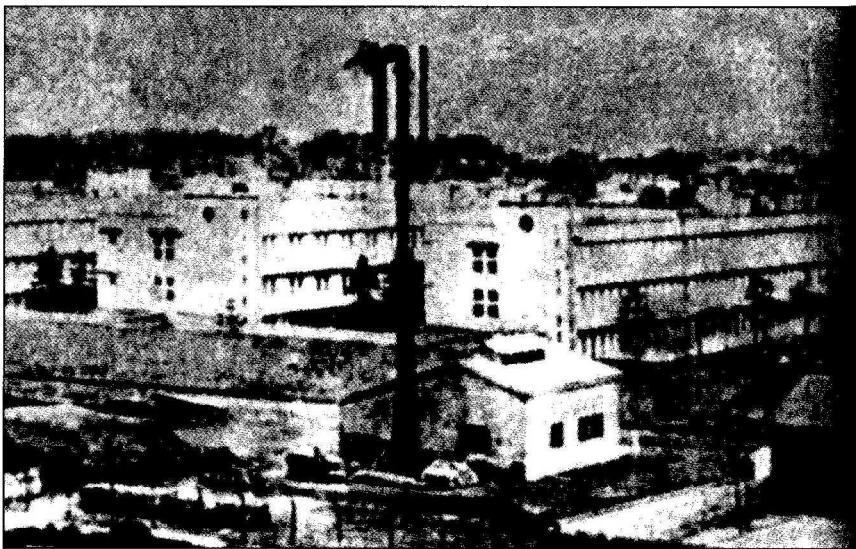


写真16 東京の巣鴨刑務所。1944年11月7日、リヒャルト・ゾルゲはここで処刑された。





写真17 東京の多磨霊園にあるリヒャルト・ゾルゲの墓。  
ソ連邦でゾルゲが認識されるまでの様子

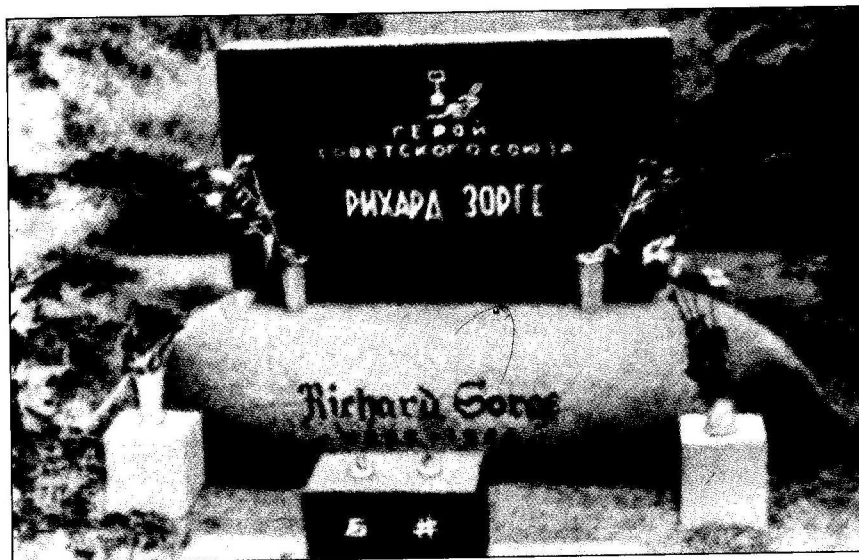


写真18 1964年以降の墓の様子



写真19 東京に於けるゾルゲの  
最初の無線士ブルノ・ビント。  
彼はスペイン共和国にいた  
駐在武官の無線士であった



写真20 ルト・ベルネー中国に  
おけるゾルゲのスパイグループの  
協力者



写真21 リヒャルト・ゾルゲの  
最後の写真。  
1944年11月7日に処刑される。



写真22 ゴルゲの妻、  
エカテリーナ・マクシモブナ、  
彼らは1933年に結婚した。

写真23 エカテリーナ・マクシモバ  
(立っている)と彼女の姉妹  
タチヤナとマリヤ。1933年



写真24 石井花子、  
東京でのリヒャルト・ゴルゲの愛人、  
1935年。

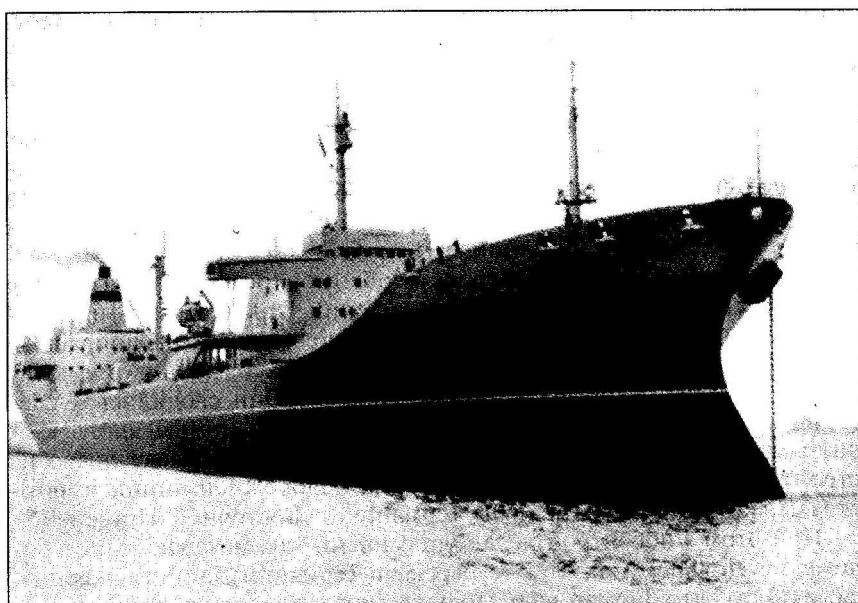


写真25 ディーゼル船「リヒャルト・ゾルゲ号」

## 翻訳者からの添付

### (1) 名称の謎解き

アレクス ゴルゲを指導したスパイの先輩、レフ・アレクサンドロビッチ・ボロビッチ

もう一人のアレクス ゴルゲを指導したスパイの先輩、ハシケレビッチ・イズライリ、改名して、ウラノフスク・アレクサンドル・ペトロビッチ

インソン 赤軍の諜報局内に於けるゾルゲの匿名

カリン 赤軍の諜報局内に於けるベルジンの匿名

デキンとストリ アメリカの歴史家達。彼らの本「リヒャルト・ゾルゲの仕事」は1966年にロンドンで出版された

インベスト

ゴリコフ 情報局長

デルクセン 東京駐在のドイツ大使。その後釜がオットー

不明

к о о р д и н а ц и о н н ы й к о м и т е т 調整委員会 (? \*)

原本中の短縮語

**БССР** 白ロシアソビエト社会主義共和国

**ВАТ** 武官

**ВГК** 最高統帥部

**ВКП(б)** 全ソ連邦共産党 (ボリシェビキ) КПССの旧称

**ВЧК** チェーカー

**ГКО** Государственный комитет обороны (国家防衛委員会)

**ГПУ** 国家政治保安部 (ОГПУ→НКВД→ГПУ)、государственное политическое управление

**Запово** Западный особый военный округ  
西特別軍管区

**ИККИ** 共産主義インターナショナル執行委員会

**ИНО** Иностранный отдел

**КВЖД** 東支鉄道

**ЛВО**

**МИД** Министерство иностранных дел (МИД) (外務省).

**НКВД** Народный комиссариат внутренних дел  
(内務人民委員部)

**НКГБ** (Народный комиссариат государственной безопасности) (国家保安人民委員部)。KGBの前身

**НО-4**

**ОГПУ** 合同国家政治保安部 (ОГПУ→НКВД→ГПУ)」

**ОКХ** 陸軍総司令部 (ドイツの)

**ОКВ** ドイツ国防軍最高司令部

**ОКДВА** 独立赤旗極東軍 Особая Краснознаменная  
Дальневосточная армия

**ОМС** 国際関係局

**ПД** - Пехотная дивизия

**РККА** 労農赤軍.

**РСХА** Главное управление имперской безопасности (нем. Reichssicherheitshauptamt, сокр. RSHA, РСХА) (国家保安本部)

**РУ** 諜報局 разведуправление

**СС** (SS, аббр. от Schutzstaffel «отряды охраны») (親衛隊)

**ФСБ**

**ЮМВЖД** 南満州鉄道

В. Гаврилов  
Е. Горбунов

# ОПЕРАЦИЯ «РАМЗАЙ»



ИЗДАТЕЛЬСТВО  
**ОЛМА  
ПРЕСС**

ISBN 5-224-04436-7



9 785224 044368

Пользование шпионами — самое существенное на войне; это та опора, полагаясь на которую действует армия.

*Сунь-цзы. Трактат о военном искусстве*

Эта книга — не очередная биография Рихарда Зорге, «полунемца-полурусского, который будучи тайным русским агентом, писал официальные донесения за германского посла, одновременно проникая в самые сокровенные секреты японского кабинета министров».

Это историческое исследование, где объединены история операции и новые факты биографии Зорге, не публиковавшиеся ранее. Авторы дали более полную информацию о Разведывательном управлении, о людях, которые разрабатывали и руководили операцией «Рамзай». На основе документальных свидетельств показана обстановка в Разведупре, взаимоотношения руководителей военной разведки в связи с приходом «варягов» из ИНО (политическая разведка), деградация руководства разведки во время репрессий 1937—1938 годов.

В книге военных историков В. Гаврилова и Е. Горбунова читатель получит наконец ответы на вопросы: Кто был Рихард Зорге — агент Коминтерна или советской военной разведки; работал ли он одновременно на германскую разведку; насколько разведывательная деятельность резидентуры Зорге влияла на принятие политических решений руководством СССР и лидерами ведущих государств; в чем причины провала резидентуры «Рамзай»; почему Рихарда Зорге не стали спасать из тюрьмы после его ареста?

裏表紙写真